

ゼータと上総

空也真朋

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある二人の青年は、神様にBETAと戦う使命をうけて、Muv-Luv世界の崩壊する帝都に転生する。戦う武器として選んだのはZガンダムと超A級ニュータイプ能力。

燃ゆる帝都にZガンダム立つ！

BETAに挑まんとする二人だったが、転生した姿は思いもよらないもので……………？

最初は短期連載のつもりだったのですが、続きが読みたい読者の方が多かったので、トータルイクリプスまでやることにしました。

目次

第1章 帝都燃ゆ

01話	二人のガンオタの転生	1
02話	少女が聴いたゼータの鼓動	4
03話	オレが上総でアイツがZガンダムで	10
04話	ゼータ対BETA	15
05話	基地(ベース)もないのに補給はどうしよう?	20
06話	流星の少女	26
07話	復讐のハイパー・メガ・ランチャー	33
08話	各々の思惑	38
09話	廃墟の帝都に愛をこめて	46
10話	上総	50
11話	修羅場ラバ	56
12話	空と君との間で	62

第2章 明星作戦

13話	閑話・白銀武	68
14話	大東亜にて	73
15話	エウーゴのお姫さま衛士	79
16話	タリサ・マナンドル	84
17話	上総の帰還	88
18話	明星の空にG弾は降り落ちる	95
19話	重力の爆弾	103
20話	超重力の箱の中で	109
21話	第五計画推進派の昏い影	115
22話	これからどうしよう?	121

23話	香月夕呼の憂鬱	125
24話	原子核の少年	130
25話	白銀武は途方にくれる	136
26話	二人の面接	143
27話	佐渡島の逆落とし	151
28話	ユークンへの道	159
29話	トータルイクリップスに出発	166
30話	第2章エピローグ	174
第3章 白のトータルイクリップス		
31話	閑話・篁唯依	180
32話	とおい異国にてめぐり逢う	185
33話	姫と野生児のガールミーツガール	191
34話	狂犬ブリτζス	197
35話	ソ連とフレンドリー撮影会	203
36話	翔んで紅の姉妹	208
37話	あの日見たZガンダム	213
38話	対決！ 上総 VS 紅の姉妹	218
39話	ユウヤ到着	223
40話	演習前日アレコレ	229
41話	ソ連さんは驚きました	234
42話	運命の演習開始	238
43話	原作主人公二人	243
44話	篁さんのガール・ミーツ・ボーイ	248
45話	三頭会議	253
46話	ユウヤ・ハーレムへようこそ！	257

47話 篁さんと山城さん

264

48話 彼女が軍服を脱いだら

269

49話 ソビエト衛士クリスカの煩悶

275

第4章 赤のトータルイクリップス

50話 閑話・第五計画推進派

280

51話 カムチャツカへ来たる

283

52話 ソ連早期脱出計画

288

53話 ジャールの狼達

293

54話 魔の陰謀オルタネイティヴ5

298

55話 その前夜

305

56話 ソビエト大戦線の序曲（プレリユード）

310

57話 ガンダムよ戦線に立て

316

58話 ビームライフルの青春、背中合わせのガンダム

322

59話 45分の人生

328

60話 サイコミュは目覚める

334

61話 BETA超決戦兵器

341

62話 オルタネイティヴ5・ジ・エンド

348

63話 ジャール大隊壊滅？

354

64話 ファインファンネル舞う

362

65話 ああウエイブライダー特攻機

369

66話 終わりの文字のガンダム

373

67話 グリップスの夢

378

68話 宇宙世紀から来た男

382

69話 パプティマス・シロツコ

387

70話 宇宙世紀の天才、最大の失敗

392

71話	神様の失敗、白銀の失敗	397
72話	夜間飛行	403

第5章 青のトータルイクリップス

73話	香月夕呼の憂鬱ふたたび	410
74話	ブレックスの遺産	414
75話	傭兵団エウーゴの未来	418
76話	刀を振る少女	422
77話	落ちこぼれ分隊	428
78話	ブルーフラッグへの招待	432
79話	霧の開発機関	437

80話	白銀武は語りたい	441
81話	煌武院悠陽の決断	446
82話	天才と怪人の邂逅	450
83話	ソ連さんとアメリカさん	455
84話	山城さんふたたび	461
85話	ジェリドの奇跡	468

86話	シロッコ、ジェリドと出会う	473
87話	鎧衣ちゃん、鎧衣さんと出会う	478
88話	シロッコ対ジェリド	485
89話	ギミック満載戦術機	491
90話	嵐の前の小さな波	496

第6章 黒のトータルイクリップス

91話	キリスト教恭順派の蠢動	500
92話	ソ連対大東亜連合戦の始まり	504
93話	頂上決戦二つの陣営	509

94話	激突	515
95話	決着。演習場に勝者は無く	520
96話	牙をむく潜みし者	526
97話	危機せまる第207訓練B分隊	532
98話	敵中孤立	539
99話	別れのハンカチ	547
100話	天才と鎧衣親子の冒険 その1	554
101話	天才と鎧衣親子の冒険 その2	559
102話	天才と鎧衣親子の冒険 その3	565
103話	天才と鎧衣親子の冒険 その4	571
104話	天才と鎧衣親子の冒険 その5	576
105話	逆襲に転ズ	581
106話	フェアバンクス方面の罠	586
107話	恭順派の敗北と新たなる危機	591
108話	BETAも恭順派も核でフツ飛ばせ!	597
109話	せまるレッドシフト	603
110話	マスターをさがせ	609
111話	キリスト教恭順派落日	615

第1章 帝都燃ゆ

01話 二人のガンオタの転生

その白く広大な光のような神の前にオレ達二人はいた。

『では、かの世界に行き、宇宙からの破壊者と戦ってくれるのかな？』

「ああ行つてやる。報酬に『好きな世界に転生させ、好きな場所、好きな能力をもらえる』つてのに目がくらんだからな」

「うんうん。お金持ちに転生してガンダム関連の商品一つ残らず超爆買いしちやおう！」

オレの名は和也。隣にるのは親友の晴郎。

ともに二十歳はたちこえても趣味のガンダムグッズ集めに嵌まって大人になりきれない者同士であった。

が、ある日とある事故にあつて仲良く死亡。

仲良く昇天する前に、魂だけの状態でこの神様とやらに引き留められた。

とある滅亡しかかっている異世界地球へ行つて、侵略しているBE TAという宇宙人だか宇宙怪獣だかと戦つてほしいとのことだ。その報酬も上記の通りかなりの好待遇。

これはオレ達だけでなく、他の魂にも声をかけているようだが、引き受ける奴は中々いないそうさ。

これは後に知つたが、このBETAという宇宙人と戦うのは絶望的にハードで、肉体精神はもちろん魂すら崩壊しかねないシロモノなのだ。

が、そんなことは知らないオレ達。報酬に目がくらみ、引き受けてしまった。

まあ、一応こんな質問はしたが。

「その破壊者つてのは、神様のアんたが恐れるほど、そんなに強大なのか？」

『“BETA”』。そう呼ばれておる。無限にも近いエネルギーを持ち、無限ともいえる軍勢を生み出し宇宙中の星々を破壊し消滅させている者達。別次元の地球はそれに襲われている。奴らを滅ぼせとは言わん。ただ、侵攻を遅らせて欲しい』

こう答えられても、まだオレは楽観していた。世間知らずはこわいね。

「なるほど。それでその世界に行くにあたって、武器なり能力なり何かもらえるのかい？」

『我が使命を受け異世界に赴く者は、一つだけ奇跡を授かることができる。奴らと戦う武器なり能力なり望むがよい』

「二つだけかよ。その“BETA”ってのは話に聞くかぎり相当厄介だし三つつくらいあってもいいんじゃないの？」

『一つで絶対の願いを決められねば、いくつあっても同じだ。貴様らも世界終焉をくいとめる戦いに赴かんとするなら、一つで全てをくつがえす絶対の願いを選びとってみせよ』

ネット小説ではごねれば幾つでも願いを叶える神様もいるが、コイツは違うみたいだ。仕方ない。最高の一つを考えよう。

「なら、ボクはZガンダム！」

『モビルスーツか。よかろう』

晴郎はあつという間に決めた。なんで一つしかない願いがそれだよ！

「おい、なんでゼータなんだ？ もっと威力のある奴とかあるだろ？」

「あんまり機動がヤバそうなのは除外した。あと、威力の高すぎるのも使いにくそうなのでやめた。で、ボクのプラモ最高傑作がゼータなんでそれにした。いやあ、アレに乗れるなんて夢のようだなあ♪」
夢見ながら現実の人生の選択選んだら大抵でつかい落とし穴にはまるものだぞ。オレが言うことじゃないが。

それにしても『ゼータ』か。まあ、いい機体だが。

しかしあれはニュータイプじゃなきゃフルに能力を發揮できない

はずだぞ。仕方ない。晴郎が機体なら、俺はパイロット能力をもらうか。

「俺はA級パイロットの操縦技術とアムロ並のニュータイプ能力だ」

「二つだな。奇跡は一人一つ。どちらかにせよ」

いけるかとも思ったんだが、やっぱりダメか。

『ちなみに、願いととは別にその貧弱な肉体を戦うに適したものとし、それなりの操縦技術と知識は与えてやる。その肉体で過酷な戦地に行けとはあまりに酷だからな』

「ならパイロット能力の方はどうにかなるか。超A級ニュータイプ能力で決まりだな」

『よかろう。超A級ニュータイプ能力。確かに聞き届けた』

「ねえ和也？　もしかしてボクのゼータ取る気まんまんかな？　絶対渡さないよ」

「あれは高ニュータイプ能力のパイロットが必須だろう。オレが上手く使ってやるから安心しろ」

「ぐぬぬううう」とにらみ合う晴郎とオレ。

しかし神はまったく気にしないで話を続ける。

『汝らの願い、確かに聞き届けた。Zガンダムと超A級ニュータイプ能力。それらをもって宇宙の邪悪“BETA”に挑むがよい』

その瞬間、オレと晴郎の意識は暗くなり、別世界へと飛ばされた。

02話 少女が聴いたゼータの鼓動

唯依 side

京都東端戦域嵐山

私は篁 唯依。譜代武家篁家の娘。

山百合衛士訓練学校の訓練兵だったけど、さきほど任官。臨時任官だけど正式な斯衛軍衛士少尉になった。これはBETAの日本襲撃のためだ。

台風4号と共に上陸したBETAは、上陸後数時間で九州、四国、中国三カ所の絶対防衛線を破り、瞬く間に京都西ヶ嶽まで侵攻してきた。

帝都防衛が決定的となったとき、訓練兵であった私達山百合衛士訓練学校の学徒は臨時に衛士に任官。戦術機・瑞鶴を拝領。

中隊長の如月中尉の指揮下、斯衛軍332独立警護中隊として、兵站の要衝、嵐山基地仮説補給所の守備を命じられた。いわば後方警備にも関わらず、私達は浸透してくるBETA群との戦闘にはいった。後に知った情報だが、私達が戦闘にはいった時点で舞鶴——帝都——大阪を結ぶ第一、第二防衛線は破られ、最終防衛線での戦闘に移行していたそうだ。どうりで後方の補給基地の守備をしていた私達まで戦闘したはずだ。

嵐山戦域の支配が困難となった頃、CPは中隊に嵐山基地直援を指示。中隊は愛宕、鳥が岳間に防衛線を構築すべく移動。如月隊長は、消耗と損傷の激しい私と山城さんと和泉の三機に京都駅本陣への後退を指示した。

そして現在。京都駅本陣に向かうべく東海道本線を上り、唐橋平垣町近傍に来た。

だが、信じられないことに、BETAはこの本陣ですらすでに制圧してしまっていたのだ。

「ぎゃあっ!」

「あうっ!」

「和泉！ 山城さん！」

ふいに現れた巨大BETA要塞級に襲われ、和泉は操縦をあやまり山城さん機に接触、墜落。

二機は京都地下鉄の天井を突き破り、そこへ落ちてしまった。

「待ってて二人とも。無事でいて」

私は二人を探すため着陸し地下鉄へ続く階段へ。

周囲を調べるためライトで軽く照らしながらそこを下りていく。最初に発見したのは和泉。

でも、それは恐怖と悲しみと吐き気のいり交じったものだった。

「うっ……ぐえ……っ！」

私はこみ上げる嘔吐を必死でおさえ、体を硬くして気配をこらす。親友の和泉がBETAにまわりつかれ、食い殺されている光景を見たのだ。

彼女はすでに事切れ、ただ虚空を見上げながら喰われているだけだった。

シヨックを無理矢理おさえ、もう一人の仲間を探しにさらに奥へと行く。

山城さん！ あなただけは無事でいて……っ！

今日一日で大切な友達を何人も失った。

同じ斯衛軍付属・山百合衛士訓練学校の仲間達。

志摩子。防衛戦闘の最中、高度を取り過ぎて光線級の餌食になった。

安芸。同じく戦闘中、死の八分を越えた瞬間に不意打ちにあい死んだ。

和泉。さつきそこでBETAに食べられていた。

「……たか……むらさん……」

インカムで呼びかけていた私の声に、ふいに応答がはいった。

山城さんだ！

山城さんが生きていたことを喜んだのもつかの間。その姿を確認した瞬間、私は絶望した。

「山城さん………せつかく生きていたのに………っ！」

彼女の瑞鶴は行動不能の状態のまま、多数の戦車級BETAにまわりつかれてしまっていたのだ。

やがてBETAは瑞鶴の装甲を食い破り、山城さんはユニットから引きずり出された。

負傷している彼女はいまにも喰われそう。

その時、再びインカムから彼女の声がきた。

「撃つて………篁さん。わたくしを殺して………わたくしがこいつらにくわれる前に」

………そうだ。BETAに生きながら喰われるなんてひどすぎる！

悲劇的な最後をむかえる前に、私が彼女を解放してあげなくては。

………それが………僚友のつとめ………っ！

私は携帯している拳銃を取った。

そして山城さんに狙いをさだめる。

でも動けない。人を、学友を。

そして何より、本当はいつも憧れていた彼女をこの手で殺めるのはあまりに重い。

「早く撃つて！ こいつらに喰われる前に！ 篁さん、お願い！」

山城さんが恐怖で叫んでいる。早く撃たなきゃ！ でも………

BETAが彼女に這い寄る。

なのにまだ動けない。自分の指がやけに重い。

「撃つてよおおお！ 唯依！ こいつらに食べられる前にいいいい！」

目をつむった。

彼女が名前で呼んでくれたことが少しだけ嬉しかった。

好きでした。憧れていました。あなたと友達になりたかった。

ずっと願っていました。あなたと名前で呼び合えるようになりた
いと。

だから最後に彼女の名前を呼ぶ。

この一瞬を永遠にするために――

「かずさああああ！」

――パーン！

引き金を引いた瞬間、山城さんはガクツとうなだれた。

ああ。私はいま山城さんを殺したのだ。

「苦し……まなかったよね。山城さん……かずさ」

彼女の人生はここで終わり。でも私は……全てを無にしないた
めに生きなくては……

そんなことはわかっている。

でも動けない。足が震える。

彼女を殺したこの手はまるで鉛のよう。

ああ……悲しいんだ。

眼から頬へ。

そこから落ちる水滴がいくつも……

ガガーン!!!

突如、山城さんの瑞鶴の天井が爆発した?!!

突き破られた天井。

その外界へ広がる空の中に、人型機械のそれは出現した。

「戦術機!? 助けがきたの!? でもあれは……どこの最新機?」

それはまったく見たこともない、見知らぬタイプの戦術機。

その戦術機は日本、海外で私の知っている戦術機の形状のどれとも大きくかけ離れ、にも関わらずより洗練されているように見えた。

赤青白三色のトリコロールカラーで彩られたそれ。

頭部の形状は武者の兜を思わせる。

ふいにその兜から無数の銃弾が発射され、山城さんの周囲にいる戦車級BETAをひき肉にした。

周囲にBETAがいなくなっても、山城さんは動かないまま。

当然だ。悲しいけど、銃弾は見事に山城さんの咽を貫いた。ほとんど眼をつむって撃つたのに。

「なんで……もつと早く来てくれなかったの……っ!」

そんな理不尽な思いで心は満たされた。

そしたら、私は山城さんを殺さなくてすんだのに!

A。
さらに次々奥からにわきだしてくる赤グモのような戦車級BETA

それに対し、謎の戦術機は腰より光りのような長刀を取り出した。

そのあり得ない刀身に私は驚愕した。

「何なの、あの長刀? 刀身が見えない! まるで光が刀身そのものみたいだわ!」

それはBETAの群れに突入し、光の長刀をなぎ払うと、一瞬にしてまとめてBETAは蒸発した。いったいどれだけの高温なの!?

そうしてこの地下鉄の場に、脅威であったBETAは全ていなくなつた。

私はただ呆けて見ているだけ。
だが、その次の行動を見て驚愕した。

「あつ！ 山城さん！」

その不明機は戦術機とは思えないほどに器用に腕部を動かし、山城さんの遺体をそつと持ち上げた。そのまま山城さんを持ち去ろうと元の天井の穴へと向かった。

「待って！ 山城さんを連れて行かないで……………っ！」

そんな私の言葉は虚しくとどかず、謎の戦術機はそのまま穴の向こうへと去って行ってしまった。

03話 オレが上総でアイツがZガンダムで

「う……………」

オレは深いまどろみから目を覚ました。

確か、神のいる神界から、宇宙怪獣BETAのいる世界へと送られたはずだ。

そしてもう一人。オレと同じようにこの世界に来ているはずの奴を思い出した。

「晴郎。あなたもいますの?」

何気なく言ったセリフだが、オレは自分の声に違和感を感じた。

——何だ、この高貴なお嬢様みたいな声は。それに、言葉遣いまでもお嬢様っぽく変えられている?

それはまるで鈴を転がすような綺麗な少女の声。自分の声なのに思わず聞き惚れてしまった。

それに自分の髪がやけに長く艶やかだ。そして胸のふくらみ。もう決定的だ。

「女…………?ワタクシ女になっている!」

一人称まで変わっている!もしかしてあの神、頼んでもいないのにTS転生なんてサービスしてくれちゃったの!?

「和也。目を覚ましたね。やった! 成功だ!」

ピヨコピヨコ。

妙な機械音でオレに話しかける奴がいる。そこには球形のロボツトが飛びはねながらそこにいた。

ガンダムのマスコットでおなじみの球形ロボ、ハロだ!

そして声は機械音でも、親しげに話しかけるしやそのべり方には覚えがある。

「…………晴郎? あなた、ハロに転生しちゃいましたの?」

「ううん、これはボクの端末。本体は後ろだよ」

後ろには巨大な人型機動兵器。赤青白の三色の彩りで有名なタイプのガンダムがあった。巨大な鋭角の赤と青の盾。特徴的な脚部のスラスター。背中の大口径の砲身ハイ・メガ・ランチャー。背中の

羽のようなバーニア。シャープなデザインで、ガンダム好きなら一発で見覚えのあるそれ。

「Zガンダム………つてまさか!？」

「そうなんだよおう! 望んだのは愛機としてのゼータだったのに、Zガンダムに転生させられちゃったんだよおう!」

ムチャクチャだ、あの邪神め。オレも機体を望んだらロボにされてしまったのか？

いや、今現在頼んでもいないTS転生をさせられているが。

「うえええん。こんなことならイケメンニュータイプにしてもらったあああああ!」

ピヨコピヨコ飛び跳ねながらハ口になった晴郎は機械音で泣く。

実にシユールな光景だ。

「安心なさい。少なくとも元のあなたより数十倍愛らしいですわ。女性のペット好きな心をガツチリ握って離さない見事な丸いフォルム。こんなにも素敵に転生したからには、名前も『晴郎』から『ハ口』に変えるべきですわ」

「えーと。言っておくけど、本体は後ろのZガンダムの方だからね？ 和也と話してるハ口は、あくまで会話するための端末だからね？」

「ああ、こつちが本体。ならば元のあなたとは比べものにならない、見事なイケメンになりましたわね」

そのシャープなフォルムと存在感。やはりZガンダムはロボ世界屈指のイケメンロボだと思う。

「ううっ悲しいけどしょうがない。せめて美少女になった和也を乗せられるのがなくさめと思おう」

「そうですわ! 何でワタクシ………オレは女になっているのかしら………るんだ!?! こんな余計な奇跡は頼んでいませんわ………ないぞ!」

どうしてもセリフがお嬢様言葉になってしまう。中身が男のオレとしては違和感ありまくりだ。

「ああ、それなんだけどね。実はそれをやったのはボクなんだ」

「なんですって?!」

ハロの話はこうだ。

この世界に転移したとき、オレは眠っていたがハロは目覚めていた。そしてZガンダムになった自分を色々いじっていたのだが、そこでミスしてコクピット内にいたオレを原子分解してしまったのだ。うだ。何てことしやがる！

あわててゼータのメインコンピュータにあるデータから蘇生の方法を検索した結果、その方法を見つけた。神の加護を受けたオレの魂は、魂の完全に抜けた損傷の少ない肉体（つまり死体）に移し替えることができるというものだ。

ただし、これには厳しい制限がある。

まずオレが死亡して30時間を経過すると、オレの魂は神の元へ送り返されてしまう。だからその範囲内。

さらに移し替える肉体も、死後硬直があまりにすすみすぎたモノはダメ。だいたい6時間くらいがリミット。

さらにさらに肉体の生命維持に必要な器官が破損しすぎてもダメ。ゼータの医療システムで手に負えないものは不可なのだそう。

そう。つまり生き返るなどほぼ不可能。ハロ（晴郎）のせいで、オレは来た早々フェードアウトの運命だった。だが、ハロはあちこちスキャンしてサーチした結果、奇跡的に条件のあう遺体を見つけた。

それが今のオレになっているお嬢様っぽいこの少女。ずいぶん若いのに、衛士という兵士をやっていたらしい。

「いやあ、彼女の遺体は咽を撃ち抜かれてショック死しただけ。BETAに喰われる寸前、回収するのも間に合っただけいなまま。本当にこんな絶好の肉体ボディがあつたなんて、和也は運がいいなあ」

運がいいなら寝ている間に自分の肉体が分解されて女になっている、なんてことにはならないと思うんだが。

「もういいですわ。とにかくこういう転生だったと思ってあきらめますわ。この少女もそれなりの軍事訓練を受けていて、パイロットとしては何の問題もないようですし。ハロ、これからのことを考えましょう」

恨む対象が愛機になるZガンダムでは、復讐にぶつ壊すワケにもい
かない。晴郎もロボになってしまった運命を背負ってしまったし、オ
レの蘇生に苦勞してくれたようだし。

しかし「くですわ」とかいうお嬢様か。ヒロインとしてはそういう
キャラも嫌いじゃないが、自分になるのは最悪だ。さつきから自分の
名前のはずの“和也”がどうにもむず痒いし。

「それじゃ和也。これからどうする？」

「まずは『和也』という呼び方をやめてほしいですわね」

「はい？」

「この少女の名前は“上総”^{かずさ}というんですの。だから、どうも“
和也”^{かずや}と一文字違いで呼ばれると、すごく気持ちが悪いですわ。この
体で男の名前はおかしいし、これからは『上総』^{かずさ}と呼びなさい。それ
から面倒だからお嬢様言葉もそのままにしましょう。これはこの体
にしみついた“性”^{さが}のようなものようですし」

「“上総”^{かずさ}。それがその娘の名前か。お互い新しい名前になった
ね。じゃ、とりあえず激戦の京都から離れようか。それからこれから
のことを考えよう。ボクに乗って」

促されるまま、オレはゼータに乗った。

強化装備といわれる身に纏った装備を外し、そこにあったパイロツ
トスーツに着替える。

メインモニターをうつし、周囲の状況を確認。帝都の惨状は想像以
上だった。

「……………まだ……………戦っていますの……………」

京都のあちこちは朽ちて崩壊し、浸透するBETAに破壊されてい
る。

戦線は崩壊し、絶望的な終焉の光景が広がる。

だがそのなかで、まだいくつもの部隊が踏みとどまって抵抗してい
る姿を見た。

ふいに『この地を守りたい』という抑えがたい衝動がこみ上げてき
た。

この娘の記憶から、この地を守る重要性のようなもの。この先にBETAを通してはいけないという使命のようなものが浮かびあがったのだ。

「ハロ。機体にはテストが必要ですね？ ちようどここには的もたぐさんあるし、斯衛も帝国軍も指揮系統が混乱していますわ。ここで少し暴れてZガンダムあの性能をみてみましょう」

「ええ!! やるの？ テストならもつと安全が確保できる場所をやったら？」

「ゴチャゴチャ言わない！ あなたはわたくしに借りがあるのでしよう？ 今すぐ戦いで返してもらいますわ！ 操縦を渡しなさい。アイハヴコントロール！」

「ユーハヴコントロール……ってそれ、ユーハヴの方が先！ はううう和也がヴァルキュリアになったああああ！」

「いきますわよ！ ハロ、そしてゼータ。ガラクタでないことを、虫ケラのような地球外起源種に証明してみせなさい！」

Zガンダムを機動させた瞬間だ。

オレはその機体に秘められた宇宙世紀の昂ぶりのようなものを感じた。

04話 ゼータ対BETA

この体にかすかに残る記憶。“嵐山基地”というワードをもとに、その辺りで通信が飛び交っている場所を重点的に調べた。

やがて、現時点でBETAの東進を阻んでいる戦線をつきとめた。その部隊は愛宕、鳥ヶ岳間に防衛線を構築。その山稜線で斜面を活かした陣地を作って防衛をしているらしい。

さっそくそこへゼータを向かわせた。

到着してみると、だがその陣地はすでに崩壊。戦術機はほぼ残骸となっており、不気味に蠢く戦車級BETAの餌場となっていた。

その隊長機らしき機体から微かに全方位通信が流れていた。

『……………我ら……………斯衛軍332独立警護中隊……………奮戦……………虚しく……………ここに終わる。どうか……………我らの挺身を無駄にせず……………後に続く者があらんことを……………中隊指揮官如月……………切に……………祈る……………』

この通信を聞いた瞬間、オレの中で何かがはじけた。

オレの体は勝手に動き、ゼータの俊足で瞬時に隊長機に到着。

ビームライフルを撃ちまくり、その隊長機にまわりつくBETAを即時に排除。

そして勝手に口がその隊長機に通信で呼びかけてしまった。

「如月中尉！ ……無事ですか!？」

『な、なんだその機体は!? ……いったい、どこの……………』プツ。

通信をハロに強制的に切られた。

「上総、何やっちゃってんの!? ……現地の組織なり部隊なりの接触は、ちゃんと計画たててやらないと危ないでしょ!」

「え、ええ。迂闊でしたわ。……………ですがハロ。かの隊長機に一言だけお願いいたします」

オレの頼みで、ハロはしぶしぶつないだ。

オレ自身、何故この隊長殿が気にかかるのかわからない。

もしかしてこの上総に縁ある者か？

「この陣地はわたくしが引き継ぎます。貴官は撤退を。どうかご無

事で」

それだけ言って切断。

向こうから通信が返ってきたようだが、無視。

「ハロ、移動しますわ。向かってくるBETAは迎撃」

次の行動としてゼータをその場から移動させた。

理由はゼータが来た途端、何故かBETAが一斉にゼータに向かってきたからだ。戦術機を咀嚼していたBETAすら食事をやめてゼータに向かってくる。

つまり、奴らをここから引き離すことに最適。生きている者がいたら逃げられるだろう。

さて、Zガンダム単独の防衛戦開始。

オレはこの防衛線の射撃陣地の一つ、見晴らしの良い場所にゼータを据えた。

BETAはやはり吸い込まれるように次々とゼータに向かってくる。

この子の記憶、座学で『BETAはより高性能な演算機能が搭載されている機体を優先して襲う』の教本通り、Zガンダムを狙ってきたのだ。

もちろん、オレはそれを迎え撃つ。

「貴様のような虫ケラがいるからいつまでも掃除が終わらないのですわ！」

「そんなに我らが秋津洲あきつしまを穢たしたいんですの？ 消えなさい！」

「お遊戯あそびでやっているではなくてよおおお!!」

この娘自身の言葉なんじゃないかと思えるセリフを吐きながら、オレはビームライフルで次々と迫り来るBETAを狩っていく。

ビームライフルの威力はやはり素晴らしく、戦術機の重火器ではフルオートで5秒は撃ち込まねば倒せない大型の要撃級BETAも一発でダウン。小型の戦車級BETAなら一発で10匹近く倒せてしまう。

この高火力、連射速射の高回転により、街道を次々上ってくるBE

TAも、Zガンダム一体で完全に阻んでしまっている。

されどいくら撃墜してもまるで数が減らない。一時間近くビームライフルを撃ち続けてているのに、倒した先からBETAは次々と沸きだし、終わる気配は微塵もない。

「いやあノリノリだね上総。CPにハッキングしたデータリンクから計算してみると、あと十時間は続くから楽しんで♡」

「楽しめせんわ！ 面倒ですわ。ハイパー・メガ・ランチャーを使わせなさい！」

ハイパー・メガ・ランチャー。

Zガンダムの大口徑ビーム兵器。あれならこの無限作業とも思えるBETA殲滅も短時間で終わらせられるはず。しかし……………

「ゴメン。あれを使えるほどエネルギー供給が間に合っていない。根性のビームライフル無双でがんばって」

根性のビームライフル無双？ 何その嫌なネーミング。ますますやめたくなつたよ！

「だったら交代なさい！ 指が疲れましたわ！ ゼータはあなた自身の体なんだから自分で撃てるでしょう！ ユーハヴコントロール！」

「ノーコントロール。いやあ、戦闘してないノーマル時なら問題ないんだけどね。戦闘中は熱核反応炉の管理がシビアになるし、機体と砲身の冷却、エネルギー効率化、ダメージコントロール、周囲レーダー警戒とやるのが山のようにあって、とても戦闘機動にまで手がまわらないんだよ。だからニュータイプ様におまかせします」

「ああもう！ 怒るに怒れない論理的な理由を！ 元は晴郎だったくせになまいきですわ！」

ああ、まったく終わらないこの作業。まったく催眠誘導でも欲しい……………

ピキーン

!?

何だ？　いま、もの凄く禍々しい気配がした。

ニュータイプの能力を初めて感じたが、何かしらの脅威が迫っていることを感じている！

されどモニターを全周にめぐらせてみても何も無い。

ただ、BETAが変わらず向かってくるだけ……………

いや、来ない!?

BETAがいつの間にかゼータを避けるような動きをしている!?

これはいったい……………？

ピーガーピーガー

いきなりコクピット内に警報が鳴り始めた。コクピット内に反響して拷問みたいだ。

「うるさいですわ！　警報はもつと音量を下げた設定にしてください！」

「それどころじゃないよ上総。レーザー警報だ！　ロックオンされた！」

「どこから!?!　モニターにはどこにも脅威らしき者の姿など見当たりませんわ！」

「位置を特定……………え？　正面山岳地帯のふもと？　距離にして150キロ？」

「なんですすつて!?!　ありえませんか！　そんな超遠距離から狙撃なんて……………っ！」

だが、オレ達はBETAという怪物をまだ甘く見ていた。

無限の物量攻撃を仕掛けるのもBETAなら、望遠観測のはるか向こうから超精密狙撃をするのもBETA。

——シユカアアアアアア!!!

一筋の流星がせまるのを見た。

瞬間、光に灼かれた。

光線級。

その超長距離のレーザー光芒がゼータに直撃したのだ。

05話 基地（ベース）もないのに補給はどうしよう？

閃光 白光 照射 直撃 焦熱 灼熱

思わぬ不覚をとり、光線級レーザーの集中砲火を受けてしまった。

一瞬、彼女^{上総}の生前の部隊仲間の機がレーザー照射で爆山した光景が浮かんだ。

そして自分もその運命を辿ったと思った。

だが、そうはならなかった。

レーザーが当たる瞬間、Zガンダムの機体は眩く輝いたのだ。

そして気がついてみると、Zガンダムは健在だった。

「……………まさか無事？ ノーダメージ？ いえ、今は！」

一瞬とまどったものの、すぐ脚部スラスターを全開。超加速な逃げ足で、第二射を撃たれる前にレーザーの死角となる安全圏へ移動。

ここにも相変わらず赤グモ^{戦車級}は追ってわいてくるが、迎撃しながら会話できるほどには余裕がもてる。安全を確保すると、さっきの現象に疑問がわいた。

「さっきはどうなったんですの？ レーザーを撃たれて、どうしてわたくし達は無事に？」

「ビームコンフューズの応用だよ。ビームエネルギーを放出してレーザーを拡散させたんだ。ゼータの装甲は耐熱に優れているんで、何とかこれで耐えることができた。さすがに直撃されたらタダじゃすまないけど」

ゼータの装甲は対衝撃に優れたガンダリウムγ。さらに大気圏突入を想定して入念な耐熱処理を施されているということを、専門的に説明された。

要するにZガンダムの性能で助かったということか。ハロのやたら長い説明でわかったのはそれだけだ。

「とはいえ、やっぱりアレを受けるのはやめて欲しいな。ゼータの

防衛システムでもノーダメージとはいかないし」

「反省しますわ。今後はレーザーには気をつけて戦います。これが戦場の洗礼というやつですわね」

「そうしてね。じゃ、そろそろ撤退しようか。もうテストも十分だよね?」

「何を言っているんですの?! まだ………ツ!」

ビームライフルで相当に数を減らしたとはいえ、まだいくらでもBETAはわいてくる。オレ達が撤退したら、たちまちBETAは東日本に押し寄せるだろう。

「エネルギーがヤバイんだ。さっきのビームコンフューズで相当消耗したし、ビームライフルも撃ちすぎて消費が激しい。まったく、光線級なんているんならIフィールド付きの機体を選ぶべきだったよ。それならもつと低燃費でレーザーをはじき返せたんだけどね」

くつ、そうかエネルギーか。確かにゼータは火力が高い分、あまり燃費がいいとはいえない。もっと効率の良い戦い方を考えねば………って待て。いま根本的な問題を発見したぞ。

「………ねえハ口。根本的な問題なんですけど、機体のエネルギー補給ってどうなさるんですの? まさか『機体内のエネルギーを使ったらガラクタです。でっかいフィギュアです』ってわけじゃありませんわよね?」

「うん、そう。いやあ盲点だったねえ。補給とか考えないで機体なんかを神様に願っちゃったよ!」

「いやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!」

どうすんだよ! このZガンダムだけが頼りだったのに!

これじゃ、この無限質量の宇宙怪獣軍団に対抗する方法なんてまるで無いじゃないか!

「なーんちやつて。驚いた? 大丈夫。ちゃんとエネルギー補給の方法もあるよ」

ゲシゲシゲシ! ガンガンガンガン!

「ああやめてよ。蹴らないで。外装工と違って内部はデリケートなんだから」

「うるさいですわ！ このガラクタはタチが悪すぎます！ それでエネルギー補給の方法は？」

「まずバルカンやグレネード・ランチャーなんかの実弾兵器から説明しようか。それはどこかの部隊が使っているものを取ってきてボクに装填してね。多少規格が合わなくても調整して撃てるようになるから」

「現地調達？ いわばチョロマカシですか？ 大樹日本帝国の枝たる武家の門が一つ、山城家の娘にして斯衛軍衛士のわたくしにすることを！……いえ、わたくしは違いましたわね。で、ビーム兵器のほうは？」

オレは武家娘でもなければ斯衛軍衛士でもない。いかげん、この体の記憶に振り回されるのはやめよう。

「山城か。それがその子の名字なんだね。で、ビーム兵器のエネルギーの調達方法はね。ボクの体は近くにあるBETAの死骸からG元素を吸収できるようになっているんだ。それをエネルギーに変換する」

「G元素？ なんですの、それ」

「BETAの活動エネルギーってところかな。BETAは人間建物戦術機何でも食べるけど、それがエネルギーになることはないんだ。体内にあるG元素を消費しながら活動する」

「え？ じゃあ何でBETAどもはあんな食欲にあらゆる物を食べてますの？ イナゴ被害が可愛く見えるあの食欲はどこから？」

「知らないし、話が脱線してイスカンダルにでも行っちゃうから聞かないで。とにかく、モビルスーツの小型熱核反応炉の本来の燃料は木星産ヘリウム3だけど、ボクのはそのG元素を燃料にする。ビーム兵器のエネルギーにも変換されるから、BETAとならいつまでも戦えるってワケさ」

「まあ。それじゃ普通にBETAを倒していればエネルギー問題は解決するんですね？ 焦って損しましたわ」

「うーん、そうなんだけどね。普通に動いて戦うだけならそれでもいいんだけど、大規模殲滅用のハイ・メガ・ランチャーを使うにはそ

れなりに高エネルギーがいる。だから使いたいなら、さつき攻撃してきた光線級を倒して欲しいんだ」

「光線級光線級。……ああ、座学での記憶にありましたわ。チビで目玉ギョロリのBETAですわね」

「そう。あれには一般のBETAとは比べものにならないくらい高密度のG元素がある。強力なレーザーを放つんだから当然だよ。あれを近づいて倒してほしい。そうすればエネルギーウハウハ。ハイパーメガランチャーも撃ち放題。BETA殲滅も簡単だね♡」

「……………あのレーザーを掻い潜り寄って倒せと言いますの？
一機光線級呐喊？
出来るとお思い？」

「やっぱ無理？」

「ですわね。それにしても随分いろんなことを知ってますのね。どこからその知識を仕入れましたの？」

「え？ 転生するとき、神様からBETAやこの世界や機体に間する情報を貰っているはずだけど。上総にもいろんな知識があるはずだよ。ニュータイプ能力のこととかモビルスーツの動かし方や戦い方とか」

ハ口にそう言われて俺の頭の中の記憶を掘り起こしてみる。

しかしいくら考えてみても、そんな知識などまるで浮かんでこない。

「……………ありませんわ。いくら思い返してみても、嵐山の衛士訓練校や山城の家のことしか思い出せません。自分が上総になる前、どんな人間だったかさえわからなくなっていますわ」

「ああ、そうか！ その記憶は前の和也の肉体にあったんだ。山城上総になったから、その記憶は全部失われてしまった。どうりで戦い方もぎこちないし、何も知らないと思っただけ！」

「最悪ですわね。こんな状態で、わたくしはどうすればよろしいのかしら？」

元はといえば、こ奴がオレの体を原子分解なぞしたからこうなった。

いったいどんなウツカリミスすれば、そんな致命的なことが起こる

んだ!

「ま、まあ、ボクが一応の必要な知識はあるから大丈夫だよ! 戦い方とかニュータイプ能力は実戦で覚えていけばいいし。とにかく今は京都から離れてこれからのことを考えよう」

確かにハロの意見は正しい。しかし、どうしてもオレは、オレの中の何かはここを離れることを良しとしない。後の日本の運命を憂えてしまう。

「わたくしたちがここを撤退したら………」

「光線級をどうにかできなきや、どうしようもないよ。ボク達ずいぶんBETAを倒したし、帝国も時間を稼げたはずだよ。あとはその時間で準備した関東の戦力にまかせようよ」

『ボク達ずいぶんBETAを倒したし』………か。

ハロの台詞セリフのその部分だけが、やけに引っかかる。

オレはこの世界に来て、一匹すらBETAを倒していない気がする。

オレの中のオレのものじゃない使命感。

ここの戦線に立つ者達への敬意。

この国を愛する気持ち。

それらオレのものじゃない想いに引っ張られ、動いてただけな気がする。

おそらくはオレのニュータイプ能力。

それがこの娘この体に残るその気持ちを読み取り、動かされていたんだらう。

だったらいいかげん、オレもオレの意思でBETAと戦うか。

死してなおBETAに立ち向かう勇敢な女の子の尻尾として。

「ハロ。やりますわよ」

「はい? 何を?」

「オンリーワン・レーザーザークト機光線級呐喊かくてですわ。目玉連中を潰し、喰いまくり、ハイ・メ
ガ・ランチャーの糧かくてにしておしまい！」

06話 流星の少女

「ええええええ!! なんでもえええええ!! 『無理ですわ!』じゃないのおお?」

「グリプス戦役随一の紫電撃墜王が、あの程度のレーザーに背を向けるなど恥ですわ。目玉のお化けがハマーンのキュベレイやシロツコのジ・O^{オー}ほどの脅威とお思い? かの者達のファンネル、ビームライフルを掻い潜ったことを思えば、光線級呐喊など時雨^{しぐれ}を払い夕^{ゆう}の小路を駆け抜けるようなものですわ」

「何? その雅^{みやび}なたとえ。いや、機体はZガンダム^グでも、上総はカミーユじゃないわけで…」

「あなたの最高傑作プラモも、モデルが地に墜ちれば泥にまみれますわね。あのますらおの勇姿が虚しいこと」

「バイオセンサー起動! 上総、君のニュータイプ能力を力に変える。出るよ。今度はレーザー照射の気配は見逃すな!」

「よろしくつてよ!」

人機一体。ここに上総^{オレ}とZガンダム^ハは一つとなった。

シユカアアアアアア!!!

ガガンン! ガガンン!

光線級の狙撃を右に左に避けながら、ゼータは光線級を目指し走る走る走る。

Zガンダムの推力112600kg。脚部のスラストと背中のロングテール・バーニアスタピライザーで抜群の加速性能を發揮しながら進んでいる。

されどその超加速で進むゼータに、寸分狂わず二百キロ以上の超長距離から正確にレーザーを照射してくる光線級はまさにバケモノだ。されどされどオレはニュータイプ。

その能力でレーザーの先読みをし、レーザーを巧みに避けて進む進む。

しかし頭ん中がピキーンピキーン鳴り続けてうるさい。

「光の速さのレーザーとはいえ、この距離ならもう余裕だね。けどだんだん厳しくなるし、さすがに手前20キロになると避けきれなくなるよ。どうするの?」

「光線級のいる場所はちょうど山岳地帯のふもと。だから光線級の死角になる山の稜線を大きく迂回しながら近づきます」

「その後は? 稜線がとぎれたら一齐に照射してくるよ」

「わたくしのニュータイプ試験のお時間ですわね。先ほどは辛い点をいただきましたので、せいぜい励みましようか」

レーザーを掻い潜りながら疾走し、ようやく光線級BETAの死角となる山岳のふもとに到達。光線級を挟んだ山岳の反対側を大きく迂回して進む。

「ここまでではこれだね。でも山稜線の陰から出ても、光線級まではまだかなり距離がある。ニュータイプ試験って何するの?」

「変形します。ゼータからウェイブライダー形態へ」

ゼータを飛行形態のウェイブライダーへと変形。

山に隠れながらの飛行なのでとんでもない低空飛行だ。

パワーまかせにスピードを稼ぎつつ無理矢理に飛ぶ。

「何でコレ!? 戦闘能力のある飛行物体は真っ先に光線級に狙われるって、光線級の注意事項にあったよ!」

「状況は変わらないわ。BETAは高性能な演算装置を搭載している機体を優先的に狙うのです。どの戦術機より高性能なコンピュータを搭載しているゼータは、真っ先に狙われる機体ですわ」

ああ。だんだんこの娘が座学で学んだことがオレの知識になってきた。

「ああ、なら納得……ってウェイブライダーになった理由は? 説明になってないよ!」

「スピードですわ。山岳部の稜線を越えるまでレーザーは撃ってこない。この死角にいる間、できるだけスピードを上げるのです。ウェイブライダーのスピードで近づけば、照射できるのは一度ないし二度

だけ」

「ま、まさか計算上避けきれないレーザーを避けるつもり!?」

「他に近づく方法などないでしょう? 狙いが正確なのはかえって僥倖ですわ。撃った瞬間に動けば必ず避けられますもの」

「いや、上総が照射を感知して回避機動をとつても、相手は光の速さ。上総のレバーを動かす手より確実に速い。とても回避に間に合わないよ!」

「ならば照射の先を読むまで! 照射ではなく気配を読んで避けます」

「いくら超A級ニュータイプとはいえ、まだそこまでの能力を發揮できるかもわからないのに!」

「だから〃ニュータイプ試験〃ですわ。落第は文字通り命に関わるから、必死に挑みましょう」

「和也はそんなこと言って一夜漬けしても、大抵失敗するのにいいい!」

「お黙りなさいハロ。神様からもらった能力も使いこなして自分のものにしてこそ。ここには最高のニュータイプと、大気圏突破すら可能なウェイブライダー。ニュータイプ能力を機体の力に変えるバイオセンサーがあるのです。レーザーを乗り越えるための全てが揃っているのですよ。何を恐れることはありませんよ。それに……………」

「それに? あと何かあったっけ?」

「ワタクシ、なんだか凄く楽しくなってきましたわ! イヒヒヒヒヒ!」

「キヤーーー! クライシスジャンキー! リスクテイカー
だあああ!」

ピキーン

瞬間、自分の脳裏に危機を示す電流が走った。

山向こうの光線級がウェイブライダーの存在を感じ、照射体勢に入ったことを感じる。

「上総、間もなく稜線を越える。レーザーの照射がくる! あと6……………5……………」

「いりませんわ。それくらいわかります！」

——カッ！ シャアアアアアアアア!!!

稜線を越えた瞬間に来る灼熱の光条！

その一秒前に引くフラットレバー！

ウェイブライダーは見事レーザーの集中砲火を躲し上空へ。

「やった！ 凄いよ上総！」

「いいえ、まだ！ ビームの射程前に第二射がくる！」

第一射は、まだ心の準備もタイミングをはかる時間もあつた。

だが次の第二射は、完全に姿をさらした裸で挑まなければならぬ。
い。

つまりより厳しいということだ。泣けるね。

ピキーン

レーザーが再び来る！ 躲しきれないであろうこの距離に。その
気配を感じる！

カッ！ シャアアアアアアアア

「はあああああああつー！」

されどレーザー気配。その撃ち気。

それを読んですでにレバーを引いていたオレは、機体制御の限界に
挑むように機体を反らせ、ギリギリでレーザー回避！

結果、ウェイブライダーはバレル・ロール。

機体制御が間に合わず、ぐるんぐるん回転しながら光線級群へ向か
う。

鍛えてあるとはいえ、高Gのかかるコクピットは女子の肉体にはつ
らい空間。

回転する空間に体がバラバラになりそう！

バンクとりすぎだ！

「ダツ……………ダメですわああっつ！」

「上総！　しっかり意識を持って！　失^{ブラック・アウト}神だけはするな！」

「笑いがとまりませんわああっつ！」

「……………え？」

「あははっ。まるで誰かと競い合っていたあの日のよう。山百合のあの頃にいるみたい！」

「上総あああ！　気をしっかりいいつつ！」

おっと、ヤバイオレの状態にハロが心配している。

無理もない。オレ自身正気かどうかからん。

さつきからワケわからん記憶なんかが浮かんでくるし。

「慌てないでハロ。やることはわかっていますわ……………つてえええええ！」

やっとたどり着いた光線級群。

機体の回転もおさまり、目標ヘビームガンを発射しようとしたが。

光線級群の前面に巨大な多足のムカデのようなBETAが鎮座していた。

全高はこのゼータの三倍以上の70メートル。

全長はなんと180メートル！

それが三匹も蠢きながらそこにいて、突入するゼータを迎撃せんと狙っている！

さらにその向こうにも十匹以上の同型BETAがいて、こっちに向かっている！

「要塞級^{フォート}だよ上総。まずいね。あれはゼータの攻撃でも倒すのに時間がかかる。その間、光線級に姿をさらしたままだ」

まずい！　とりあえずその要塞級の巨体を盾に光線級の照射は封じたが、近づけない。

もう少し近づけば要塞級の脅威の武器、衝角付き鞭^{ウィップ}が来る！
それを三本もかわし、さらにレーザーをかい潜るなど……………

……………？

ふと、幻をみた。

要塞級と光線級が蠢くその光景の中。

そこに模造刀をふりかぶり、凛々しくオレに挑んでくる少女の幻を見たのだ。

それは妙にくすぐったく、それでいて懐かしい――

口元がほころんだ。

「バイオセンサーも粋なものを見せていただけのわね」

いや何が？ ああ、また口が勝手に……

しかしこの少女の幻を見ていると、なぜか元気な清々しい気持ちになる。

「上総？」

「要塞級フォートに隠れながらゼータに変形。ビームサーベルで切り込みます」

手早く巡航形態WRからゼータに変形。ビームライフルをビームサーベルへと仕様変更。

落下しながらバイオセンサーに全力でニュータイプ思念を送る。

「はあああああああ！」

ほとばしるほどの出力！ ビームサーベルは巨大なロングビームサーベルへ。

バーニアをふかし、果敢にいちばん手前の要塞級へと切り込む！

要塞級フォート三体は衝角付き鞭ウィップを鋭く発射！

されど構わず、その少女の幻へ吸い込まれるようにオレは、ゼータは突入した。

「篁さん、わたくしの全てを受け止めてごらんなさい！ 山城の薙ぎを！」

いや、箕さんってだれ？

07話 復讐のハイパー・メガ・ランチャー

『人斬りは刃を合わせない』
やいば

何故かそんな言葉が浮かんだオレは、向かってくる鞭を断ち切らず、三本すべてを機動だけで回避。

正面の要塞級を間近にとらえると、ロングビームサーベルをかかげる。

「あああああああ!!!」

寸分違わず要塞級胴体最初の結節部に振り下ろす!

光の大剣が胴体を走り抜けた瞬間。

この個体の鞭はポトリ地に落ち、巨体はピタリ動きが止まる。

……………バカッ

着地後。そんな気の抜けたような音がしたかと思うと……………

ズズウーーン

要塞級は前胴体部、後ろ胴体部へ真つ二つにきれいに断ち切られ、オレの目の前で割れて崩れた。

割れた要塞級の先。その眼前には、光線級の集団が一面に広がっていた。

ギョロギョロ二つの目玉を不気味に動かしたお化け達。ゼータを焦点にとらえると、一斉に眼にレーザーの光を宿して照射体勢に移行する。

その様はまるで幻想の光の海。迷い舟を誘う積戸気への入り口か。

そんな光線級群を見ながら口元は勝手にほころび笑みとなり、勝手に言葉を紡ぐ。

「輝く瞳はひたむきな少年少女にこそ似合うもの。山百合魂宿したわたくしの瞳の輝きにかなうと思つて?」

いやオレそんな魂宿してないから! 邪神に色々いじくられたガンオタ魂だから!

勝手に口動くのやめて!

薙刀の脇構え、歩み足より移る横振りの溜め。

「……………一度くらいはあなたとかけ声をあげてみたかったですわ

ね。死んでやつと素直になれるなど、とんだお笑い道化の幽霊です」と

——どこかの校庭で、少女達が元気にかけ声をかけている光景が見えた。

それを眩しく見ている上総の姿も——

「おかつちませええええ！」

そんな幻には構わず、ロングビームサーベルの水平薙！ 光線級群をまとめて一閃！

ジュアアアアアアアアアアアッ

BETA 侵攻最大最凶脅威もその一振りで全滅。

死の光も霧散し、幻想的な光の海も小汚いゴミ肉の平原へ早変わり。

やがてその残骸からキラキラした光の粒が舞い上がり、ゼータの機体に吸収されていく。

「ハロ。これがG元素？ エネルギーはどう？」

「ああ凄いいよ。どんどんエネルギーがたまっていく！ これならハイパー・メガ・ランチャーも、いくらでも撃てるよ！」

「……そう。ならわたくしの仲間と故郷を……そして日本の誇り、帝都を穢し踏みにじった地球外起源種にたっぷりお返しをいたしましょう」

いや、ワタクシの仲間って何？ その仲間とやらにオレは会ったこともないのに、どうしてこんなセリフが出るの？

光線級の照射を避けて左右にわかれていた二体の要塞級が再びゼータめがけて迫り寄ってくる。

さらに向こうからは、十数体もの要塞級群もまたこちらに迫ってくる。

オレは脚部スラスターで近くの二体から距離をとる。

要塞級の攻撃力は光線種に次ぐものではあるが、反比例して足は遅い。要塞級だけなら俊足のゼータにはなんら脅威ではない。

だが、逃げるつもりはない。BETA最大の防御力を誇る要塞級が十数体。ハイパー・メガ・ランチャーの威力を測るには絶好の的だ。直線上に要塞級が並んだのを確認。

エネルギーを砲身いっぱいに充填させる。

ふと、復讐の昂揚が身を包んだ。

「喰らいなさい！　これが日本の怒りよ！　ハイパー・メガ・ランチャー！　いけえええ！」

引き金をひく。

砲身から白い光芒が生まれ、放たれ、走り、直進した。

一丈の白色彗星の通り過ぎたあと――

そこには三分の一ほどに体積を減らした要塞級――

その黒い焼け残り十数体全てのもものが、くすぶりながらそこに残されていた。

「……………『凄い』の一言ですわね。あの体積を誇る要塞級を全てを葬り去るなんて」

「ボクもおどろいた。光線級のG元素が元だから、実際のものより威力は凄いじゃったのかな？」

「ええ。でも……………」
モニターでハイパー・メガ・ランチャーの砲身を見つめニヤリと笑う。

「復讐者の手にこれほど似合う武器はありませんわ」

愛しい大口徑に投げキスを送ると、ゼータをめぐるせBETA侵攻の大動脈へと進路をとった。

……………愛しい？

元の愛宕——鳥ヶ岳山間陣地にもどってみると、やはりBETAは奔流となつてそこを大行進していた。

オレはゼータを小高い丘のBETAを見下ろせる、BETAからは注目される場所へと陣取つた。

雲霞の如きBETA大行進は、そこにゼータがいることを確認すると一斉に進路を変えて向かつてくる。

愚かな虫ケラを憐れむハイパー・メガ・ランチャーを向ける。

「座学では厄介とされるBETAの習性も、こうなると便利ですね。わざわざ消し炭になり集まって来ていただけなんですもの」

「いや、要塞級のダメージから見ると、消し炭さえ残らないと思うよ。ハイパー・メガ・ランチャーの直線十キロにあるものは全て蒸発するだろうし、消し炭はそこからさらに十キロかな」

「まあ素敵！ 死骸掃除の手間が大幅になくなりますわね。まかない夫のセツコさんに、我が家の掃除機をハイパー・メガ・ランチャーに買い換えさせようかしら」

再びハイパー・メガ・ランチャーのエネルギーを砲身いっぱい充填させる。

また再び復讐の昂揚が湧き上がる。

「いくらでもいらっしやい。山城の邸宅の門は、地球外起源種のみなさんを厚く歓迎いたしますわ」

白い光芒がハイパー・メガ・ランチャーの砲身からほとばしる！

一発一射の直進は、その路上の数十数百数千のBETAを焼き尽くす。

きれいな道筋をつくり、ハイパー・メガ・ランチャーの洗礼を受けたBETAは消滅した。

「^{あつ}厚く^{あつ}ではなく、^{あつ}熱く^{あつ}でしたわね。我が家の熱烈な歓迎、お気に召したかしら？」

なんか悪の女幹部みたいなセリフだ。

オレってこんなキャラだったか？

方向を転換。さらに撃つ！

場所を移動。さらにさらに撃つ！

BETAあるところ駆けつけ、さらにさらにさらに撃つ！

撃つ撃つ撃つ撃つ！

轟音轟音轟音爆炎爆炎爆炎!!!

そして夜明け。

日本の意地と誇りを賭けた帝都防衛は虚しく終わる。

千年の都はBETAの足に踏みにじられ、その歴史を閉じた。

だがその帝都崩壊後の朝。

BETAもまた、崩壊した帝都にて大きくその数を減少。

滋賀——三重に敷いた新絶対防衛線に集結した関東、中部、北陸の

部隊に東進を阻まれ、全滅した。

08話 各々の思惑

日本国官房長官Side

第二帝都東京

首相官邸地下危機管理センター

諸外国への交渉に赴いている首相に代わり、首相代理として国防の指揮を執っていた官房長官に驚愕の吉報がもたらされたのは帝都崩壊の翌朝であった。

「なに！ 新絶対防衛線はBETAに抜かれなかった!? 本当なのか？」

台風4号と共に侵攻してきたBETA。瞬く間に九州、中国を蹂躪し、帝都京都までも抜かれた。

その戦闘報告は昨夜、滋賀大津——三重名張を結ぶ新たな絶対防衛線との戦闘にはいった時点でとまっていた。

日本の総力を結集した帝都絶対防衛線。それが抜かれた以上、寄せ集めの戦力で作られた防衛線では防ぐことは不可能とみられ、東日本侵入は確実と思われた。それに反するこの報告は、望外の喜びであった。

その吉報をもたらした国防長官は、喜びを抑えて報告する。

「はい。絶対防衛線を破った大規模BETA群は、帝都で望外の大量減少が起こり、ほぼ残敵掃討となった我が軍は殲滅に成功。長期の時間を得ることができた我々は、これにより軍の再編、他国の援助を要請することが可能になりました。我々は……日本は救われたのです」

「そうか……あのプランを使わずにすんだのか。日本は救われた。日本人として歴史深き帝都を失ったのは悲しいがな……」

しばし官房長官はその僥倖をかみしめ、深く黙祷した。

八幡までBETAの侵攻を止められねば、東海、関東まで浸透をゆるしてしまう可能性があり、日米同盟の盟約によって国内で戦術核の使用を許可せねばならない事態だったのだ。八幡は抜かれたものの、

BETAの殲滅に成功したためにそのプランは休眠となった。再び眼を開けた彼は、次の行動を探るべく情報を求める。

「それで？ BETAに大規模減少がおこった理由は？ 滋賀にはアメリカの第七艦隊がいたな。彼らが何かしたのか？」

「それが……まずはこの映像をご覧下さい」

国防長官は用意してあったスライドを部下にセットさせ、その映像を官房長官に見せた。

それには赤青白で彩られた見慣れぬ戦術機が、ほぼ廃墟となった帝都を滑走していた。

「何だこの戦術機は。まるで見覚えのないデザインだ。それにスピードがおかしい。400キロ近くは出ているのではないかね？ こんなスピードではまともな戦術機機動など……できていないな。制止、発進、射撃。すべて正確だ。この衛士は人間か？ いや、機体の機動も、諸外国の戦術機でも見たことがないほど洗練されている。この映像はとても信じられん。合成か？」

官房長官の戦術機知識など一般常識レベルに毛が生えたようなものだったが、それでもこの映像は信じられなかった。

「映像にはまったく手を加えておりません。専門家にも見せましたが、従来の戦術機とはまったく設計思想の異なる、未知の技術で作られたシロモノだと説明されました。この操縦者も何かしらの強化をうけ、反射速度を飛躍的にあげているそうです」

「フム？ いや確かに興味深いが、その未知の戦術機の話はあとで聞こう。まずはBETAの大量減少の方を聞きたい。詳細を教えてくださいませんか」

「ああ失礼。不可解な事態に説明が前後したことをお詫びします。帝都を抜き東へ押し寄せんとするBETA。ですがそれは、この未確認戦術機がたった一機で大きく間引いてしまったのです。専門家の計算でおそらくは6万体を撃破。新絶対防衛線に光線級が現れなかったことから、それすら倒したと思われれます」

「……………なっ?! バカな?!」

国防長官は次の映像を映した。それは巨大戦術機が巨大な砲身か

ら発する光条で次々BETAを焼き尽くしている映像だった。それはまるで光線級のレーザーを砲身から発しているようでもあった。

「レーザーだと!? これほどまでに光線級のレーザーを再現できた話など聞いていない! この機体の国籍、所属は? 日本に持ち込まれた経緯は?」どのようなプロジェクトに基づいて設計された?」

「すべて不明です。現在旧帝都跡へ捜索隊をいくつか派遣しておりますが、この機体の報告はありません。こうなると近くに米軍が怪しいということになります。が、彼の国もこの機体の情報をこちらに要請している始末でして、候補としては弱いと言わざるを得ません」

「何もわからない……か。それでその不明機の件、どう処理すべきだと思うかね?」

「これを所有する機関を探しだし、協力ないし帝国軍に組み入れ、戦力とすべきでしょう。実は制圧された西日本。米国よりの衛星写真を分析すると、大陸から九州にBETAが次々と渡ってきているのです。飽和すれば次の侵攻に動くことは確実です。東日本を守るためにも是非!」

「わかった。総理に進言しよう。君はこれの調査にしかるべき行動をとってくれ。私はすぐ総理その他に連絡をとり、未来の道筋をつけるべく協議する。あとはまかせたぞ」

「はっ」

◆ ◆ ◆

滋賀県斑鳩家別邸

その邸宅の主、斑鳩崇継は若く柔和な容姿ではあるが、斯衛武家の名門にして中枢、五摂家の一つである斑鳩家の当主であった。帝都の本邸が消失した現在、ここで帝都崩壊後の斯衛軍の指揮と政務を執っているのだ。

その彼のもとに全身包帯だらけ、杖を使いぎこちなく歩く、一人の女性の負傷衛士が訪れた。

彼はかの衛士を快く邸宅に迎え入れた。

「ようこそ。無事とはいいがたいが、お互い生きて会うことができ

て嬉しいよ。如月中尉」

彼女は嵐山基地仮説補給所を守備していた斯衛軍332独立警護中隊の指揮を執っていた如月中尉。つまり防衛戦における上総、唯依の上官だった者だ。

「はっ、ありがとうございます斑鳩少佐。ですが奮戦むなしく、多くの部下、そして学徒兵だった少女達を死なせてしまいました。その指揮官である自分が生き残ってしまったこと、まことに慚愧にたえません」

「だがBETAをくいとめてくれた。帝都崩壊で日本人の心に癒やせない傷を残したとしても、それでも日本は救われた。君達の奮戦のおかげだ。ありがとう」

「いいえ。確かに我々は精一杯の奮戦をいたしました。それでもBETAの侵攻を止めるにはまるで足りませんでした。陣地でBETA侵攻を押しとどめたのは、あのたった一機の未確認戦術機であります」

「聞いている。実のところ君をわざわざ呼んだのは、君がああの未確認戦術機へ接触したと聞いたので、詳細を聞くためなんだ。部下が次々消えていくあの戦場を思い出すのは辛いかもしれないが、どうか話してくれないか」

「はい。お話できることなどほんのわずかですが。あのととき、我が斯衛軍332独立警護中隊はほぼ全滅。私も機体を大きく損傷し、行動不能の事態へと陥りました」

倒れゆく年端もいかなない少女衛士の部下達をまた思い出し、如月中尉はわずかに顔をしかめた。

「S-11の自爆装置も故障し、機体にBETAがまとわりつき、もはやこれまでと覚悟いたしました。装備していた拳銃で自害しようとしたときでした。かの機体が現れ、光を放つ射撃兵器でBETAをなぎ払っていただいたのです」

「ほう。君の恩人というわけか。それは是非とも会って礼をせねばならないね。しかし『光を放つ』とは？ 『マズルフラッシュが眩しかった』という意味かな？」

「いいえ。私の撮影した映像では確認は難しいでしょうが、かの機体の銃器は光を弾にしているのです。それは恐るべき高威力で、一発で要撃級を倒し、戦車級にいたっては5、6体を軽く貫通させ、一発で10体近くもまとめて殺傷するほどでした」

「ふむ。戦術機を駆る一衛士としてもその武装には興味は尽きないね。ほかに？」

「……………通信が入りました。『如月中尉、ご無事ですか？』と私の名前と階級を言っけ呼びかけられました」

「かの搭乗している衛士は君のことを知っていたわけか！ これは大きな手がかりだ。その人物に心当たりはないのかね？」

「その声の主は少女でした。断言できませんが……………私の指揮下だった衛士ないし学徒兵の誰かだったような気がいたします」

「ほう。それは……………いや、わざわざ来てもらってよかった。早速、君の部下とした山百合衛士訓練学校からあたってみよう。負傷をおしてもらって悪いが、君にも手伝ってもらおうよ」

『本当にこの御仁は人を使うのが上手いな』と思いつつ如月中尉は返事を返した。

「はっ。存分にお使いください」

◆◇♣♥◆♣◆

煌武院家滋賀具住まい邸宅。

この邸宅の主にして武家五摂家の一つ煌武院家当主。煌武院悠陽。それはまだ若く、上総や唯依と同じほどの年頃の少女であった。現在は帝都京都壊滅をうけ、第二帝都東京への疎開の途上である。この日、この悠陽に訪問客があった。

帝国情報部 鎧依左近特務課長である。

この者、武家の内々のライバルである帝国の官僚の一人でありながら、この悠陽へも様々な便宜をはかり両者のバランスをとっている。いわゆる“鶴”である。

鎧依は上座に座る悠陽に対し平服して礼。声をかけられ、顔を上

げ、挨拶をすますと、ざつくばらんに話しはじめた。身分高き悠陽であるが、鎧依はかなりくだけて話をする。

「しかし五摂家はじめ武家神社神官ごとくが京を捨て、落ちねばならぬ日が来るとは。この時代には生まれてきたくはなかったものですか」

悠陽は帝都壊滅、東京への疎開、信頼していた多くの衛士の死亡などの心労で憔悴しているが、それでも姿勢を崩さず鎧依の言葉を受ける。

「どのような時代に生まれようと、わたくしはわたくしの責務を誠心もっておこなうのみ、と心得ております」

「これはしたり。怯弱な我が身の心内をさらしてしまいましたな。ですが帝都を守らんと出征した者達の、結局はその願いかなわじの無念を思えば、心痛むこと万丈の思いです」

悠陽は「はい……………」と声のトーンを落として答える。

「絶対防衛線に赴いた者は、みな忠あり勇なる者たちでした。彼らに率いられた斯衛軍帝国軍は巖の山。いかなBETAといえど抜くことはできぬ、と信じておりました。ですが……………」

悠陽は辛そうにキュツと唇を噛んだ。

「BETA東進は阻めたものの、帝都は踏みにじられ泥にまみれてしまいました。BETAとは私の理解を超えた恐るべき禍。祖先の地を去らねばならないこの途上で、それを今噛みしめています」

「お館様のご心痛、まことに痛ましく慚愧にたえません。ですがご存知ですか。そのBETAをもたつた一機で悉く殲滅した武神が如き戦術機が存在したことを。夢の戦術機。いわばロマン戦術機ですか」

「……………」あれは過酷な戦場が生んだ夢物語ではないのですか？ そのような戦術機があること。その徴候はまったく耳に入れたことではありません」

フム。悠陽様のお耳に入っているのはこの程度か、と鎧依は思った。

「どうやら事実のようです。実は当時、絶対防衛線十数万の衛士兵士を薪として燃やし尽くしても、東日本へのBETA流入を防ぐことは不可能だとみなされていたのですよ。それを阻んだのが、かのロマン戦術機ただ一機。すでに調査にはいった帝国陸軍、米軍。斯衛でも耳聡い者は動いているようです」

「それは……興味深いですね。ですが、わたくしの手の者は皆忙しく、それに手を入れることは出来そうもありませんね。鎧依。そなたは動くのですか？」

「いえいえ、私は米国がおイタをしないか見ていないといけないのですよ。あのヤンチャ坊主、この混乱に乗じて何をするやらカニをするやらひっくり返すやら。ああ、不安で目眩めまいがクラクラ」

「そなたの忠勤、まことに喜ばしくあります。それで？」

「そこで思い立ったが、先日お会いになられた巖谷中佐。開発局副部長。覚えておいでですか？」

「もちろん。わたくしはいわば彼の舟にのった身ですから」

悠陽は先日、帝国陸軍開発局副部長である巖谷榮二中佐と会い、極秘裏にとあるプロジェクトに協力する約束をした。この帝都崩壊を受け、しばらくは休眠しなければいけないかもしれないが。

ちなみに悠陽のはからいで鎧依もその場において、彼とは顔見知りになった。

「その縁にておすがりしたい儀がございます。実は彼、帝国陸軍のかのロマン戦術機調査チームの責任者を拝命しているのですよ。いや、羨ましい。私もロマンを探す冒険に出たかった」

クスリ

相変わらずの飄々とした彼の様子に、悠陽は笑みがこぼれた。

いつの間にか、多くの失いがたき人達を失った痛みがやわらいだ。

“帝国の怪人”と称される情報部の人間をこうも側近くに置いているのは、この愉快的性格のためかもしれない。

「ご愁傷さまですね、鎧依」

「して本題。不詳この私。彼と縁をつなぎ、その調査結果を融通していただくことを考えましてね。すでに縁をつないだお館様に便宜

をはかっていたいただきたいのですよ」

「わかりました。さっそく文などをしたためましょう」

「さすがお館様。即断は目を見張るものですね。まだ何の見返りもしめしてませんのに」

「鎧依のことは信用してますから。必ずや帝国、臣民のためになることを為すと疑いません。期日はいつまで？」

「明日、巖谷中佐にあって詳細をつめるつもりなので、今ここでお願います」

「明日？ 性急ですね。アポはとつてあるのですか？」

「必要ありません。彼と私はもう友達。お館様と共に彼の舟に乗った仲。お館様の手紙を持った私を、両手を広げて快く迎えてくれることでしょう。はっはっは」

帝国の怪人と呼ばれた諜報員 鎧依左近。彼もまた動く。

09話 廃墟の帝都に愛をこめて

元京都駅指揮所付近。

千年の古き都にして帝都。その絢爛たる歴史を刻んだ寺院、仏閣、武家屋敷等が数多く見られたその都市も、一面瓦礫と焼け跡とBET Aの屍肉と朽ちた戦車、戦術機、高射砲の残骸が所狭しとあふれる壮大な墓場となつてしまった。

生きた人間の姿はほとんどまったく見られない、もの悲しい廃墟となつた帝都。

その片隅にオレとハロはいた。ここは駅駐留部隊指揮所が合った場所なので、その残骸をあさつてバルカン等の補給、及び情報収集をしているところだ。

「♪今来古来 事 茫茫 石馬声無く 坏土荒る 春は桜花に入つて、満山白く 南朝の天子 御魂香し」

「……………上総、なにそれ？ 魔法少女の呪文？」

「梁川星巖の漢詩ですわ。かつてのこの古都に在りし巨匠の詩を、廃墟となつた帝都の手向けとさせていただきました。細君の梁川紅蘭の詩も素敵でしてよ」

ピポーピポー ピポー ピポー

「カズサ、カズサ。ハロ、メカダカラ、ワカンナイ。ワカンナイ」

「なんですの、このポンコツ。いきなり本物の真似なんかして。それとも、そのまん丸ボディに魂が完全に喰われておしまい？」

「それはこつちのセリフだよ！ なにそのモノホンのお嬢様みたいな高尚なご趣味？ 君、ほんとうに中身は和也!？」

「あら……………」

本当だ！ 知らんうちにお嬢様の才能なんかひけらかしてしまつたよ！

山城上総。魂はないはずなのに、どこまでオレをお嬢様にする!？」

「まあ、とにかくあちこち通信を傍受した結果だけだね。やつぱりハデにやりすぎたみたいだね。あらゆる機関が、みんなZガンダムを

探しているよ。もう日本にいるのは危ういね。一時日本を離れよう」
「どれかの機関に接触してその保護下にはいる、という選択肢もありますわよ。お金やら情報やらの問題は解決できるのではなくて？」
「そしたらZガンダム^ポの体調べられるだろう！ 知らない技術者とか科学者とか機関に体いじられるの嫌ああああ！」

ピオンピオンピオンピオン

ハロのボールのような丸い体がピョコピョコ跳ね回る。

このさまは、女の感性でどうしようもなく『可愛い』と感じてしまう。ラブリー。

「わかりましたわ。この案は却下といたしましょう。わたくし自身、日本にいることは危ういかもかもしれませんね。この『山城上総』という少女自体が厄介なようです」

「そういや、ボクはその娘^こについて何も知らないや。どういった子なの？」

「この体に残ったつたない記憶によると、帝国斯衛軍という武家の身分やらしきたりやらがついて回る、それはそれは厄介な軍部付属の学徒だったらしいですわ。悪いことにもう任官もしてしまっただろう。わたくしを知る者に見られたら、脱走という不名誉極まりない烙印を押され、どなたかの監視の下自由は完全になくなるでしょうね」

「そりゃ大変だ！ すぐ日本を出よう！ しばらく待ってて。Zガンダムを再構成するから」

ハロが片隅で何やら謎システムを機動させていると、何もない空間からZガンダムの影のようなものが現れた。ぼやけた影のようなそれは、だんだんと存在が鮮明になっていく。

これは『亜空間に格納してあるZガンダムを再構成している』という作業らしい。一応説明してもらったが、何が何やらさっぱりだが。

「ハロ。今すぐ日本を出ることには異論ありません。ただ、その『亜空間へ格納』とか『再構成』とかがイマイチよく分かりませんの。もう一度説明してくださいさる？」

「だからね。機体の原子を隣の次元の亜空間に透過させ移動してしまっておくんだ。これは上総を搭乗させている時はできない。うつ

かり前の君の和也を乗せた状態でやったら、分解させちゃったよ」

「まったく余計な機能を。それがなければ、こんなお嬢様にならないくてすんだのに！」

「いやいや、すごく便利だよ。Zガンダムの隠し場所に苦労しないでいいし、亜空間にはデータにあるゼータを構成している物質しか入ることは出来ず、その他は分解される。つまり、機体についてBET Aの肉片や泥や煤の掃除もしなくていいんだ」

そういうのって、機械の故障の原因になるからこまめに取り除かなきゃなんないんだけど、それをやらないでいいのは確かに大きいな。やはり悪いのはハロのポカだということにしておこう。

「それにしてもエネルギー吸収といい、その亜空間への格納といい、本来モビルスーツにはない機能もかなりありますわね。これってあの邪神のサービスですかしら？」

「モビルスーツをバックアップなしで整備するためのついた機能みたいだよ。亜空間から再構成する時に修復も行えるんだ。ボクがゼータのシステムになったのもそうみたい。常時機体の状態をチェックして、自力で整備できるからね」

確かに便利だが、『人間を乗せて亜空間格納をやってはいけない』という注意事項がハロの知識から抜けていたというから泣けてくる。神とはいえ、やることは完璧ではないということか。

「やっぱりよくわかりませんが、『そういうことができる』ということと、『わたくしが乗った状態でやってはいけない』ということがわかっていれば十分ですわね。それで、それはどのくらいかかりますの？」

「二時間くらいかな。けっこう計算が面倒だから集中させて」

「では、そのまま続けてください。終わったらすぐ出発しましょう。その間にわたくしはこの体の本来の持ち主、山城 上総の魂へお別れでもしてきますわ」

そう言い残し、オレは山城 上総の死んだという京都駅地下鉄跡へと向かった。

気まぐれに思いついた他愛ない感傷だった。

若くして死なねばならなかった少女へ、この体を使いBETA打倒の誓いでもするつもりだった。

だが、オレはそこで運命と出会ってしまう。

山城 上総へ死の引き金をひいた少女。

篁 唯依と出会ってしまったのだ。

10話 上総

唯依Side

大きく破損した京都地下鉄跡――

そこに私、篁唯依とその叔父の巖谷榮二中佐はいます。

他に叔父様の部下が数人。叔父様の部下で開発局の人達。

そしてあと一人。この人はよくわかりません。

『鎧依さん』という目深にかぶった帽子とスーツ姿の男の人。

一般の貿易商とのこのことですが、軍の任務に何故一般人がいるのでしょうか？

彼は叔父様に親しく話しかけていますが、叔父様は露骨に顔をしかめています。

苦手なのかな……？

さて、私達の主目的である、帝都でBETA大規模殲滅を為した謎の戦術機。これは便宜上“Z”と仮称することが決まりました。アルファベットの最後の文字が使われているのは、“究極の戦術機”を意味するためだそうです。

叔父様こと巖谷榮二中佐は、この“Z”調査チームの責任者になりました。私達がこの場所に来た理由はその調査のため。ここ京都地下鉄跡は比較的破損が少なく、私が“Z”と遭遇した痕跡がそのまま残っていますので、重要捜査現場に指定されたのです。

開発局の者がその任を担っているのは、調査の過程で“Z”の強力すぎる武装の秘密や、機体構造の推論をたてるためだそうです。なにしろ現時点で専門家が、あの機体がどのように作られているのかが何も分からないというのですから。

私は現在叔父様を待つて、“Z”が開けた穴の前にぼんやり立っています。その下にある地下鉄跡には叔父様の部下が調査に入っており、“Z”の残した痕跡を熱心に調べています。

この場所。京都駅地下鉄跡。

ここは私にとってつらく悲しい思い出の場所です。

親友の能登和美。そして山城上総さんの二人の死を看取った場所

なのですから。

それはともかく、叔父様は“ 鎧依さん ”という貿易商の方とずいぶん話しこんでいます。わずかに話が聞こえますが、相当に熱心です。

「困った奴だな鎧依。 “ あの方 ” の口添えとあらば会わざるを得ないがな。あんたと会っているとなれば、俺も痛くもない腹を探られる」

「いえいえ。まったく後ろ暗い話などではありません。ですから堂々と会っている。おたくの上司に話を通してもらってもまったくかまわない。相互利益に関する重要な話なのですよ。あの国の押さえをこちらが引き受けようという話でね」

「……………こちらの内情は知っている、というわけか。そして絵はできているようだな。わかった。とにかく話を聞こう。ただ、姪は早く帰らせたい。彼女の用を先にすませてからになるが、かまわんな?」

「ええ、もちろん。よろしければ姪御さんにお土産などを渡してよろしいですか。イースター島^{みやげ}土産東京産モアイのトーテムポールキーホルダーですが」

「却下だ。姪に妙なものを渡さんでもらおう」

叔父様は鎧依さんとの話を打ち切ると、私のもとへと来ました。

「すまない、唯依ちゃん。少し急ぐぞ。まずは君が僚友機二機と瑞鶴でここに来た所から聞かせてもらおう」

「ええ。でも巖谷中佐。任務中です。『唯依ちゃん』はやめてください」

「はっはっは。そうなんだがな。唯依ちゃんにはつらい思いもした場所だと聞いているからね。だから俺と話すときだけは特別に叔父、姪でいききたいんだ」

「いいえ。小官はなんともありません! 任務である以上、私情を交えることはいたしません。どうか巖谷中佐も上官としてふるまってください」

「……………そうか。よし、そうしよう」

一瞬、叔父様はさみしそうな顔をした。でも次の瞬間、厳格な軍人の顔へと変わりました。

「筧少尉。Ｚ”について貴官の目撃したことを詳細に話せ」

これに応え、私も軍人作法で如月中尉からこの京都駅本陣へ後退を指示され、来てみればBETAに制圧されていたこと、二人がBETAに落とされ地下鉄に落下したことを話しました。

「小官は墜落した僚機の搭乗員。山城、能登の両少尉を探すべくこの地下鉄をおりました。途中、能登少尉がBETAにやられたことを確認」

話をしていると、全身をBETAに喰われたうつろな眼の和泉を思い出す。

知らず知らず自分を抱きかかえ体の震えを抑える。

耐えなさい！ あれは終わったこと。

「……………筧少尉、大丈夫か？ もうやめてもいい」

「いいえ……………最後まで喋らせてください。その後、さらに地下におりると、山城少尉の機体を発見。ユニット内に山城少尉自身も確認しました。ですが……………すでにBETAにまわりつかれ、どうしようもない状態でした。だから……………だから……………」

叔父様は何も言わない。

続きを促すことも止めることも。

そんな叔父様のやさしさに守られながら、私は話す。話し続ける。

「山城上総少尉を……………射殺しました。引導を渡しました。そして……………」

ああ、ダメだ。全然のりこえてなんかいない。

叔父様もひどく顔が歪んでいる。きつと今、私はひどい顔なんだろう。

山城さん。私、全然あなたにおよばない。

「その時、突然Ｚ”は地下鉄の天井を突き破って出現。BETAを頭部のバルカンで掃討。奥より出現した戦車級群を構造不明な熱線武器でこれも掃討。その後……………」

それでも――

「…………山城少尉の遺体を腕部マニピュレーターで持ち去り逃亡。以上です……………」

——貴女に憧れていたプライドだけはあるの。

だから最後までまっとうした。任務を最後までやり遂げた。

膝から崩れる私を叔父様はやさしく抱きとめてくれた。

「よくやった。立派だったぞ、篁少尉」

「はい……………ありがとうございます」

結局甘えさせてくれているんですね、叔父様。

「しかし戦術機のマニピュレーターは武器を持ったためのもの。遺体を拾い上げるような器用な動きなどできないはずだ。それを可能にできるような技術のある場所となると……………」

「いやいや、そこじゃないでしょう」

——?!

そこにはいつの間にか貿易商・鎧依さんがいた。

叔父様にすら気配を感じさせなかったようで、叔父様は私をかばい警戒している。

「鎧依さん。こちらの話を立ち聞きですか。どういふつもりですか？」

「失礼。ただ待たせてもらうのも退屈なので、つい唯依ちゃんの話聞かせてもらいました。なかなか大変な経験をなされたようですね」

この人は退屈なら軍の話立ち聞きするんですか？

『虎の尾を踏む』なんてレベルじゃない危険な行為なんですが。

それに叔父様じゃあるまいし、私を『ちゃん』呼ばわりって。

一応、任官した斯衛衛士なんですけど！

「いやしかしマニピュレーターに注目するのは技術屋さんらしいとはいええます。が、一番に注目しなければならないのは、唯依ちゃんの僚友の遺体をＺＺが持ち去ったことでしょう。お話を聞いた限り、ＺＺがそこに来た理由はBETA退治でも唯依ちゃんの救出でもなく、その死んだ少尉ということになる」

「……………そちらもＺＺに興味有りか。追うつもりか？」

ええ!? 貿易商さんがあちこちの国家機関が探している“Z”を追う?

それはちよつと無謀なんじゃないでしょうか。

「いえいえ、私はしがない貿易商。本当に私は“Z”の件にはつまらないつもりです。ですが私、顧客サービスに素人探偵などもやっておりますね。このご時世、こんなことでもしなけりやお得意さまをつかまえておけないんですよ」

貿易商さんも大変なんですね。

「よろしければサービスに素人なりの調査の仕方をご教授しましょうかな。わずかでも巖谷中佐のお役にたてれば幸いです」

「……………まあ、ともかく篁少尉の方は終わった。彼女を車に送ったらあなたの話を聞こう。行くよ唯依ちゃん。運転手に君を送ってもらう」

「はい……………ご迷惑をおかけします」

「お大事に。唯依ちゃん」

叔父様は私をやさしく支えながら、車に向かいらゆつくり歩きます。

結局、あの激戦を生き延びても私はまだ半人前のままだ。

山城さん。あなたに一步たりとも近づけてなんかいない。

でも、いつか。

本物の衛士になってこう呼べるように。

「上総……………」

——「なにかしら、篁さん」

——
!?!?!?!?!?

心臓が高鳴った。

もう聞くことがないはずの、その声。

いつの間にか私達の近くにいた同じ年頃の少女。

長くつややかな髪。

冷たく透徹するようなまなざし。

白哲の人形のように整ったその美貌。
いつも憧れてやまないのに、競い合い何度もぶつかり合ったのに、
まるで近づけなかった彼女。

——それが生きてそこにいる！

山城さんは途方にくれたように、そこに佇んでいた。
いくつもの「どうして？」が私の中で渦を巻くように響いている。
いつの間にか叔父さまに強くしがみつき、その腕だけで体を支えて
いた。

膝が震えて立てなくなっている。

それでもやつと……やつと絞り出した声で彼女に問いかける。

「山城さん……あなた、生きて……いたの？」

「え？　え？　……あの……わたくし、今なんて？」

山城さんは口をおさえてオロオロしている。

どうして？　あなたは死んだんじゃないの？

どうしてそんなにとまどっているの？

どうして初対面の人を見るような目で私を見るの？

！
いったいどうしたの？　なにがあったの？　答えて山城上総さん

11話 修羅場ラバ

「山城……さん……あなた、生きて……いたの？」

そう言つて、うるんだ瞳で感極まつて泣く美少女。

誰だ？ オレはまるで彼女を知らない……あつ！ 要塞級と戦ったときにバイオセンサーが見せた幻の娘じゃねえか！

ブラツと山城上総が死んだ場所にきてみたら、何やら軍関係者のような連中が集っていた。

連中の前に出るのはヤバイと、そのまま踵を返して去ろうとしたら、通りすがりの娘が呼ぶ名前に反応して返事をしてしまった！

今度ばかりはこの勝手に動く口も、とてつもない災いをよんでしまったようだ。

「……篁……さん……」

彼女の名前が自然に口から出た。そしてオレも、震える彼女の姿にくぎ付けになった。

このままじゃヤバイ！ なのに動けない！

そんな二人の沈黙を破ったのは、彼女を支えていた壮年の軍人男性だった。顔に大きくついている傷が圧倒的存在感をさらに押し上げる。

「失礼。山城上総少尉だね。報告では死亡したと聞いていたが。私は帝国陸軍所属の巖谷榮二。階級は中佐。現在、帝都防衛における戦地調査を命じられている。君は現場でおこった不可解な事態を知る重要参考人物と思われる。どうか私と一緒にきてほしい」

マズイ！ 行けねえよ！

「貴官は生きていながら作戦終了後も軍に帰投しなかった。これは脱走という不名誉な認定をされるだろう。だが我々に協力してくれるなら、俺は君の立場を守るあらゆる労を惜しまないつもりだ。斯衛軍、山城家。双方に働きかけ、君を守ろう」

冗談じゃねえ！ これはもう逃げるしかない！

なんとか隙を突いて逃げようとタイミングを伺った。だが……「フム。調査などまるでしてないのに、こんな重要案件のふとい

シツポが転がり込んでくるとは。こんなこともあるもんですなあ」

「な、なんですよ、あなた!?!」

いつの間にか後ろに、目深に帽子を被ったスーツ姿の怪しいオヤジが居た!

なんだこのオヤジ!? 全然気配がしなかったぞ!

「鎧依左近と申します。まさかと思いますが、逃げるような素振りが見えましたものでね。背中にお邪魔させていただいています」

ヤバイ! 挟まれた!?

ダイナマイトな修羅場に突然迷い込んだオレ。

三人六つつの目に囲まれ、絶体絶命!

女の子の方はともかく、オヤジ二人は相当デキる! 身のこなしにスキがない!

誰か助けを! 誰か来てえー!?!

もちろん、そんなもの来るはずがない。

——と、思っていたのだが。

その時、近くに軍用車が「キーツ」と止まった。

そこから全身包帯だらけ。見るからに負傷兵の女性があらわれた。見事に鍛えあげられたその体から、彼女も軍関係者だとわかる。

いや、山城上総の記憶から、どこか知っているような?

「篁少尉。聞きたいことがあつて貴官に会いにきた。貴官の僚友、山城少尉のことだ。記録では死亡となっていたが、彼女のことを詳しく………つて、山城少尉!?!」

ええ!?! この人もオレのことを知っている!?!

………いやこの声。思い出した。嵐山の山間陣地で救出した指揮官の女性衛士だ!

それと共に、彼女が誰かも上総の記憶がひらめいた。

上総の上官の如月中尉だ！

「陣地で私に呼びかけた声。あれは貴官だったような気がしたのだ。だが行方を捜すと、貴官は死亡したことになっている。どういうつもりだ!? 何故そんな工作などをした! それに貴官が乗っていたあの未知の技術の塊の戦術機はなんだ!?!」

山城上総の上官の斯衛軍衛士如月中尉。

彼女の登場でさらにヤバイ状況になっていくオレ。

だがヤバイ状況はオレだけでなく、後ろオヤジ二人もそのようだった。こんなヒソヒソ話が聞こえた。

「まずいな。彼女は斯衛に所属している。しかも如月中尉は彼女直属の上官だ。筋からいえば彼女に引き渡さなければならぬ。斯衛にかっさらわれたか」

「運がよかったのは我々だけではないようですな。このままでは斯衛の総取り。ですが、今この瞬間だけはまだ確定しておりません。だったら……うわああああ!」

いきなりスーツのオヤジが派手にすっころんだ? 何にもしてねえぞオレ。

いや、しかしチャンスだ!

オレはスーツオヤジを飛び越え、そのまま脱兎のごとく逃げ出した。

「山城さーん!」

箕さんの呼びかけに、彼女がオレを見たまなざしを思い出した。

その眼は涙で潤うるんでいた。

それは本当に本物の喜びに満ちたときに流す涙。

それだけ彼女にとって山城上総は大切な、大事な人間なのだろう。でも違うんだ。オレは山城上総じゃない!

君の大切な彼女は見かけだけ。中身はまるで別人なんだ。

だから、だからオレにそんなまなざしを受ける資格なんてない!

◆◇♣♥♠◆◇♣♥
唯依Side

「待て山城少尉！ 何故逃げる！………うぐっ」

如月中尉は山城さんを追いかけてようやくしましたが、ケガで走ることはできませんでした。そんな如月中尉を叔父様はいたわるよう抱きとめました。

「如月中尉、無理はいけない。その体で追いかけるのは無理だ」

「くっ、その男！ 本当に突き飛ばされたのか!? 山城少尉に何かしたような動きは見えなかつたぞ！」

「いやはや小娘とあなどって不覚をとってしまいました。さすがは斯衛の衛士。気配さえ見せない実に見事な体術！ では、失点を取り返すために追うとしますかな」

そう言つて鎧依さんは如月中尉から逃げるように山城さんを追いかけていきました。

………足、速いですね。

衛士訓練と食事制限で屈強な衛士になった私ですら、そう思えてしまうほどの俊足です。

貿易商さんつて衛士に匹敵するほど体を鍛えるものなのではないか？

「くっ。あの男、どこかの犬か？ 篁少尉、山城を追え！ あの男に奪われるな！」

「り、了解しました！ 篁少尉、追跡します！」

私は鎧依さんのあとを追って駆け出しました。

私自身、彼女を求めてつかまえない気持ちにはやりながら。

◆◇♣♥
巖谷Side

俺は唯依ちゃんの上官の如月中尉をささえ、しつかりと立たせた。あつたためて彼女の容態を見ると相当の重傷だ。

こんなケガでよく外に出られたものだ。

「大丈夫ですか、如月中尉」

「ああ、すまない。もう大丈夫だ。貴官は？」

「帝国陸軍技術廠第壹開発局副部長、巖谷榮二中佐です。現在、戦地調査として帝都防衛戦に現れた識別不明戦術機、通称“Z”の調査責任の任を負っております」

「そうか。帝国陸軍の……。中々に優秀だな。もうすでに彼女にたどり着き、確保にまできたとは。斯衛はやつと山城少尉の生きている可能性に思い当たったばかりだ」

いや、こちらも京都駅跡の調査にはいったばかり。彼女の確保にまでこられたのは偶然にすぎない。まあ、正直に言う必要もないが。

「とにかく各所に連絡を出して山城少尉をとらえる人手を出してもらいます。彼女の確保は自分があずかります。よろしいですね？」

俺は携帯通信機を取り出しながら言った。

「やむを得んな。ここらに斯衛はいない以上、そちらにまかせるしかない。しかし彼女を確保したなら、すぐにこちらに引き渡してもらうぞ。山城少尉は斯衛の衛士である以上、処分もこちらでおこなう」

『処分』か。やはり山城少尉の先行きは厳しそうだ。

通信機で各所の応援を要請しながら思った。

だが、山城上総少尉はアンノウンに連れ去られたとき、なにか関係を持った。それは我々に知られたくない秘密がある。俺は立場としてそれをつきとめなければならぬ。

斯衛に引き渡すのを引き延ばし、それを聞き出すとしよう。

ふと、俺は彼女が唯依ちゃんの友達だったことを思い出した。

彼女を殺したと思っていた唯依ちゃんは、可哀想になるくらい気に病んでいた。

「……………せつかく生きててくれたのにな。ゴメンな唯依ちゃん。せめて俺の権限でできるだけの善処はしよう」

廃墟の空を見上げながらため息をついた。
そして唯依ちゃんと山城少尉のために小さく祈った。

ゴオオオオオオ……………

「……………なんだ？」

廃墟の静寂を破る疾走音。聞こえるだんだんに迫る轟音。
それに振り向いたとき、そこにあり得ないものを見た。

赤青白のトリコロールカラーに兜のような頭。

映像で何度も見た、規格外の性能と未知の武装を搭載した謎の戦術機。

未確認所属不明戦術機 通称“Z”。

それが疾走しながら俺と如月中尉の目の前を走る。走っている！
近隣には調査のための部隊がいくつも派遣されているのに、何故ここに!?

「“Z”だと!? くっ、ただの聞き取り調査だと、ひとりで来たことが悔やまれる！」

如月中尉は悔しそうにそれに目を見張る。

それはまるで滑るように滑走し、俺と如月中尉の目の前を通り過ぎた。

ふと、俺はあることに気がついた。

「“Z”が来たのは山城少尉が走り去った方向。となると、あれに乗っているのは……………？」

12話 空と君との間で

オレは全力で逃げて、元のハ口のいる場所へとたどり着いた。そこには『亜空間からの再構成』とやらを完了させたゼータがあった。

だが、そこに帽子とスーツの男が追いついてきてしまった。そしてオレの前に立ち、ちよつとした剣呑なにらみ合い。

「いやはや。やはりあなたが”Z”の搭乗者だったのですな。いつたいどこの機関がこれを作り上げたのです?」

「アナハイム・エレクトロニクス社……ですかしら? 多分」
多分、どこかの世界にあるA・E社が開発したゼータをこの世界に持ってきたんだと思う。

「アナハイム・エレクトロニクス社……聞いたことがありませんな。どこの企業です? それに多分とは?」

「……………いえ、戯言たわごとですわ。本気になさらないでくださいまし。これについて説明する気はありません」

結局のところ何を言っても確証のない推論ではあるし、それ以前にこの男に説明する義理もない。

「……………そうですか。では……………」
男は懐に手を入れた。

すわ、拳銃か!? と身構えたオレに反し、男が取り出したのは手帳だった?

男は手帳を開いてスラスラ何かを書く、そのページを丸めてオレに投げてきた。

「とっておきなさい。あなたの選択肢の一つです」
そこにはとある電話番号が書かれていた。

数字だけで他には何も書かれていないが、電話番号でいいんだよな?

「もし、この日本で助けなり便宜をはかってもらいたいことがあるば、そこに電話して『オオタガミさんのご紹介にあがりました。小豆

の小売りの仕事を探しています』と言いなさい。力になりましょう」
暗号つきの連絡先か。どこにつながっているやら。

「ずいぶん回りくどいんですね。ここでわたくしを捕らえた方が早いのではないかと?」

「ここであなたを捕らえても、うま味は少ないのですよ。それよりは協力関係になりたいのです。もう一度自己紹介しましょう。私の名前は鎧依左近。覚えておいてください。では……………」

そう言つて男は背を向ける。そんな彼に、見逃してくれたお礼に一つだけ情報をあげることにした。

「鎧依さん。この機体の名はZガンダムと申します。仮称が“Z”とは奇妙な偶然でしたわね」

「Zガンダム……………これはどうも。おっと、そうこうしているうちに彼女に追いつかれてしまいました。私はここで消えるので、彼女のお相手はまかせます」

男はそう言つと、オレに追いついてきた時と同じように疾風のごとく走り去つた。

「ハアツ…………ハアツ…………山城……………さん、どうして逃げたんです?」
追つてきた彼女は、やはり篁さんだった。

無視して出発してしまえばよかつたものを、つい話しをしてしまった。

そして不覚をとつて手首をつかまれてしまった。

「でも生きててくれて嬉しいです。山城さん」

それでも彼女のまなざしは優しく、オレを慈しむようだった。

その潤んだ瞳に吸い込まれ、しばし見つめ合うオレと篁さん。

その慈愛にみちた幼くも美しい顔に見惚れた。されど彼女は向こう側の人間。

「如月中尉とおじさ…………巖谷中佐のところへ戻つて説明しましょう。逃げちゃつて立場が悪くなつたかもだけど、一緒に謝ります」

篁さんはそう言うが、オレは行けない。斯衛軍に行くということ

は、ハ口をそこに引き渡さなきゃいけないことだ。それはハ口を……晴郎を売るということに等しい。

だけど篁さんのオレの手首をつかむ手は強く、簡単にはふりほどけそうもない。

仕方なくオレはこう言った。

「そうね。ありがとう篁さん。こんなわたくしの力になってくれて」

「いいえ、いいんです！ 私達以外の同期の子はみんな死んじゃったけど、あの子達の分まで二人で一緒にがんばりましょう」

オレの知らない少女達の顔がうかんだ。この子達、みんな死んだのか。むごい戦争だ。

「それにしてもこの機体、どうしたんです？ あの時、山城さんをさらった人はどこに？」

不思議そうにゼータを見上げる篁さんの、凜々しくも可愛い顔を見ながら覚悟を決めた。

オレは女ジゴロになると。

「ねえ、篁さん」

振り向く近すぎる彼女の顔——

「え？ 山城さ………ングッ!？」

——その柔らかそうな唇にキスをした。

実際柔らかかった。

深く深く、この体にある彼女への想いを形にするように抱き寄せてキスをした。

篁さんの驚いたような、とまどったような、そんな顔に罪悪感チクリ。

やがてゆつくり唇を離し、彼女の手を振りほどき、彼女をつきとばした。

「あっ!？」

よろけ、尻餅をつく彼女。

オレはその隙にゼータの手に乗り、胸部のコクピットハッチまで上げてもらう。

「でもね。わたくし、友達を売ってまで偉い人に頭をなでられたくないの」

キスを逃げる道具にするなんてオレは悪い奴だ。

その下から篁さんの叫びが耳をかすめる。

「え？ え？ 山城さん？ 逃げちやうんですか？ どうして！」

「篁さんには関係ありません」

「本当に……………本当に家とか軍のこととか捨てて行っちゃうんですか!?!」

「ごめんなさい」

「私、山城さんとずっと一緒にいたかったのに！ また一緒に訓練やりたかったのに！ 私も置いていっちゃうんですか!?!」

「ごめんなさい」

「ばかっ！ 山城さんのばか！ 上総かずさのばかあああつ!!」

——ふと、模造刀のうち合う音が聞こえた。

この体に残る記憶。篁さんと訓練で競い合った大切な思い出が浮かぶ。

そして思い出すように知った。君の名は——

「唯依ゆい！ 元気でいてください。さようなら！」

膝をついて泣き出す彼女に背を向けコクピットに入る。

競い合ったあとの握手も二度とできない——

……………何を言っている。そんなこと、オレ自身したこともないだろう。

山城上総の記憶が呼ぶせつなさを感じながら、コクピットハッチを閉めた。

「ばかです。ハロ、出してください」

「了解。ずいぶんおみやげを引き連れてきたね」

ゼータは勢いよく走り出した。

モニターに小さくなる、泣いている少女をいつまでも眼で追った。

ハロは十分にゼータのスピードを上げた状態でバーニアをふかし空へ。

そこからウェイブライダーに変形してより高度をとる。

「ユーハヴコントロール。レーザーが来るからお願い」

BETA支配地域から200キロは離れているだろうに、相変わらずとんでもない狙撃能力だ。

しかしニュータイプ相手にもう長距離射撃は通用しない。

「アイハヴコントロール。おまかせなさい。光の速さのレーザーも、百キロもはなれているなら余裕ですわ」

ピキーン

さつそくレーザーの気配を感じたオレは、軽く機体をひねり第一射をかわす。

すると通信を示すランプが点灯した。

「上総。もの凄い量であちこちから通信がきちやったよ。斯衛軍、帝国陸軍、帝国海軍沿岸警備隊、国連軍日本支部、米軍第7艦隊、情報省、城内省軍監……」

「すべて切りなさい。無視してかまいません」

「そうだね。日本を出て行くんだし、挨拶なんて誰にもする必要はないよね」

「その通りです……いえ、一人いましたわ。挨拶を送るべき相手が」

オレは大きく舵を切った。

「あれ？ 方向が違うよ。これじゃ内陸側だ」

「だからご挨拶ですわ。つまらない感傷にお付き合いくださいな」
少しだけ戻ったその場所に、やはりまだ彼女はそこにいた。

泣くのをやめ、レーザーを華麗にさけるウェイブライダーを不思議そうな顔で見上げている。

——『山城さん。あなた、生きていたの?』

そんな言葉の噛み跡をオレの耳に残した少女。

篁 唯依

彼女を見ると、やはりオレの中の山城上総がざわめく。

だから届かなくても、聞こえなくても、それでもオレの本心を眼下の彼女へ送る。

「篁さん。あなたの記憶はあるのに、わたくし自身はあなたのことを何も知らない。だからいつかあらためて本当に知り合いたしましょう。その日まで今はさよならですわ」

眼下の彼女のはなむけに一度だけ大きく旋回すると、海岸へと進路をとった。

スポットライトの歓迎のようなレーザーをかわしながら花道をゆく。

そのままウエイブライダーに海岸を越えさせ、はるか彼方へと飛行させた。

第2章 明星作戦

13話 閑話・白銀武

白銀 武Side

『目覚めよ因果導体』

「う……………だ、誰だ？」

深い眠りより覚めたそこは、何もなただけの白い空間が続くだけの世界だった。

声は果てしなく続く白の空間から響いてくる。

「なんだこりゃ。夕呼先生がなんかした……………んじゃないよな」

『香月夕呼か。彼女は面白い花だ。どこの世界に咲こうとも、世界を楽しく動かす』

またあの声が出た。

オレは辺りを見回し、その声の主を探した。だが、だだっ広い空間のどこにも人影は見えない。

「いったい何なんだアンタは。神様かなんかか？」

『そのなりそこないよ。有象無象の小物には面倒くさいのでそう名乗ることも多いが、貴様には敬意を表し我が矮小な身の丈をさらそう。我は平行世界の観測の力を持つジジイだ。無数の平行世界に広がる地球とその周辺宇宙を庭の如く愛でる隠居よ』

「……………そうか。とにかく姿を見せたらどうなんだ。なりそこないのじいさんよ」

『肉体はどうに捨てた。もつとも貴様が話しにくいというなら、適当に見繕ってもよいが』

「いや、いい。人間が相手じゃなきゃ話ができないほど繊細でもない。とにかくここがどこかで、オレに何の用なのか言ってくれ」

「ここは我が領域。本来は、肉体を失い死の世界へと向かう魂のみが来られる場所であるのだがな。貴様は特別に我が干渉して招待した。まずはこれを見てもらおう」

その神モドキのじいさんとやらがそう言うと、その場はいきなり宇

宙になった。

そこにはいくつかの宇宙艦船、そして無数の戦術機のような人型機械がライフルを撃ち合い戦争をしていた。そして機械人形の持っている銃からは光の弾が発射され、それが当たると激しく爆発した。

「宇宙戦争？ いや、あの戦術機、見たことがある！ あれはゲルググ？ それにジムだと？ まさかここはガンダムの世界か？ そんなバカな！」

それはまだBETAのいる世界へ来る前。平和で戦争など無縁の世界のただの高校生だった頃。

人気だったアニメ『機動戦士ガンダム』シリーズというものがあつた。

今見ている光景は、そこに出ている機動兵器モビルスーツが現実のものとなつて、実際に戦争をしているのだ。

『こことは別の世界線、宇宙世紀と呼ばれる世界の戦争だ。こういったとある世界の光景は、異なる世界へと流出し、感性の高い人間の脳が受信して創作物として綴られることがある。ちなみに貴様の経験したBETA大戦もまた、別の世界では創作物となっておるぞ』

「そうか。あれが現実のものだったとはな。で、それがオレへの用と何の関係があるんだ？」

『BETA。あれは異星より愛しき庭を食い荒らし滅ぼす害虫だ。滅びもまた一つの景色とはいえ、この害虫に滅ぼされるのは我慢ならん。故に手をうった』

BETAに対抗するという話か。なら歓迎すべき話かな。

『実はとある小物達に、BETAの侵攻を遅らせるべくとある奇跡をさずけてBETA世界へ送り出した。そ奴らが願った奇跡というのが、この宇宙世紀の兵器『モビルスーツ』というものだった』

「それは……大丈夫なのか？ 宇宙世紀の燃料やらがこつちの世界で手に入るとは思えんが」

『そうだ。こんなものをそのまま送っても、燃料、エネルギー、整備のための資材などが調達できるはずもない。故にどうにかその世界でも使えるよう、我が手を加えて与えてやった。が、存外そのモビル

スーツ。BETAとの戦いに有効だとみた」

「そうだな。宇宙で戦争できるモビルスーツってな凄いものだと、今なら実感をもって感じる」

『故に我は決断した。我が庭を荒らす宇宙からの厄災【BETA】を滅ぼす雷としてこのモビルスーツ。その最強の個体を使うことを。出でよ』

その言葉と共に宇宙戦争の景色は消え、代わりに実物大の宇宙世紀の機動兵器が現れた。

オレは衛士としていくつもの武器、兵器、機体を見てきたが、これほどに存在感のある、そして禍々しくも力を感じる兵器は見たことがなかった。これに比べたら、今まで使ってきた戦術機などオモチャだ。

「これは……………まさか本物か!？」

『宇宙世紀より我が選んだ最高最上のモビルスーツ。これをBETA駆逐の雫として垂らすことに決めた。そして白銀武よ。使い手として貴様を選んだ』

「なぜオレを……………」

『因果導体となった貴様は、人間ではありえない程に長くBETAと戦ってきた。その経験、戦闘技術。そしてなによりBETAの脅威を誰より知る者。貴様ならば過たずこれを使い、BETAを滅ぼすであろう。故に貴様しかないを選んだ』

「……………」

つまりオレをBETAとの戦いの駒にしようってか。

こんな身勝手なジジイにいいようにされるか!……………なんて青臭さはとうになくなった。

駒には駒の生き方やり方がある。

力があって利用できそうなら利用するまでだ。そいつの思惑など知ったこっちゃやない。

腹に一物かかえた者同士利用しあってこそ世界は動かせる、変えられる。

夕呼先生につき合っているうち、そんな生き方を身につけた。

『さて、決めてもらおう。奇跡は望まねば与えてやれんのでな。汝白銀武よ。我が申し出を受け、これを手にするか否か？ BETAを滅ぼす絶対の剣を掲げ振るい、熾烈なる試練への渦へ入るや否や？』
「受けよう」

『ほう、即答か。さすがだな』

正直言えば怖い。

この機体の禍々しさ。人の作ったものとは思えない畏れすら感じる。

だが、同時にこれこそあのBETAを滅ぼすにふさわしい得物だと確信することができる。

ならば迷わない。

これを与えるこいつが悪魔であろうとも力を手にし、あの破滅の虫ケラを滅ぼすまでだ。

「で、本当にコレを俺が動かせるのか？」

『さあな』

!??

『さすがにコレを動かすにはそれなりに時間がかかるだろう。いや、起動にすらたどり着けんかもしれない。何のバックアップもできんその世界では、我が手を加えようとも動かすだけでも相当の試練となる』

なるほど。さすがは神様が選んだ最強兵器だ。

「だが、動かし使いこなせれば確実にBETAは滅ぼせるんだろう？ ならやつてやるさ」

『本当に迷いはないな貴様は。よかろう、ますます気に入った。一つ明かそう。貴様を送る世界は全ての世界の重要な結節点。滅ぼされること相成らん。BETAにも人間にも。絶望の世界を見た貴様だからこそ明かした』

「言われるまでもない。オレはもう世界を滅ぼそうとする奴らの誰にも負ける気はない。神様のなりそこないのジイさん、アンタの力を借りるぜ」

『では我が与える奇跡と試練、見事乗り越えBETAにうち勝つが

よい。行け!』

その言葉と同時に、その機体と共に俺はどこかの世界へと飛ばされた。

(そういえば純夏以外に平行世界へ送られるのは初めてだったな)
最後にそれだけを思った――

14話 大東亜にて

『エウーゴ総員兵装自由。目標前面BETA群。撃てエ!』

総長ブレックスの合図のもと、オレら独立武装連隊エウーゴは、一斉に構えた武器を眼前より向かってくるBETA群相手に斉射した。もちろんオレもZガンダムでビームライフルを撃ちまくり、倒しにくい大型種を一手に引き受けている。

なにしろこのエウーゴ。戦術機（ではなく実はモビルスーツ）に乗っているのはオレ一人で、他は装甲車両やらバズーカやらライフルやら。正規の軍隊ならこんな作戦行動が取りにくい編成には絶対しない。

つまり今オレが属しているエウーゴは正規の軍隊ではなく、民兵が集まった傭兵団なのだ。

オレとハロが日本を出てから約一年。オレ達は東南アジアの対BETA最前線マレーシアにいる。

タイランド湾の天然の要害を利用したソクラーとサトウーンを結ぶ大東亜連合の絶対防衛線が仕事場だ。

エウーゴは民兵の寄り集まった傭兵団にも関わらず、最近是最前線の一角を任される。まあ、このZガンダムの戦闘力あつてのものが。

日本を出てからオレ達は東南アジアにきて東南アジア諸国の多国籍軍・大東亜連合に参加した。

ここは国籍も宗教も雑多な人間が寄り集まり、国を無くしながらも名分だけはある国軍や、非正規の武装集団や、地元の正規軍やらがごちゃ混ぜで、上の人間が苦勞してやっと部隊を編成しているという始末だ。

またそういった背景はなくとも、BETAと戦う意思のある人間には武器を貸し与えロクな身分確認もせずに民兵として雇い入れる。

そうして食い詰めた文無しに、死ぬまでメシの面倒を見てくれる人道あふれるシステムというものもあって、オレはそれに参加した。

そしてこの人道システム。当然武器の持ち込みも歓迎される。まあ、ライフルやら機関銃やらを想定したものなのだが、オレはZガンダムを持ち込んだ。

さすがに戦術機（ではなくモビルスーツだが）を持ち込む奴はおらず、だが民兵を対象にしたシステムのために、生身で戦っている民兵の中に戦術機が戦っている、などという奇妙なことになっているわけだ。

さてオレ以外のメンバー。戦車級と小型種のみが相手のはずだが、しばらくするとほころびが出はじめる。するとオレは悲鳴まじりの応援を求められ、言われるままビームライフルを二三発撃ち込んで火消しをしてやる。

そんなこんなで防衛線は堅く守られ、BETAの侵攻が終わるまでは射撃のお時間………だったらしいのだが。オレの仕事はこれだけではない。

『カズサ、光線級の出現をCPが報告した。光線級呐喊の要請が来ると思うから、この地点で控えててくれ』

ブレックス総長から光点マーカーと共に連絡がきた。

このブレックスという男、もちろんかの「機動戦士Zガンダム」のあの人ではない。見てくれはもつと若いし、パツキンのそこそこな男前。偶然そういう名前のアメリカ人だ。共通点があるとすれば、そこそこ政治的才能があるという点か。

このブレックス。本国アメリカではそれなりのエリートだったのだが、人道主義がすぎるといふ欠点があった。そのエリート的立場と政治的手腕で、政府の難民の扱いに対する批判的政治団体なんて作っちゃったから、さあたいへん。

上に睨まれ、東南アジアへの広報という名目で、ここに部下ひとりつけられずに飛ばされてきたのだ。そのブレックスとオレは互いに本国へ戻れない者同士。ある日知り合い、組んで傭兵団を立ち上げる

ことになった。

オレは「Zガンダム」と「ブレックス」の運命的な出会いに感謝し、傭兵団の名を「エウーゴ」と名付けた。

何を感謝をしたかというところ、ブレックスに出会う前もここで傭兵活動をしていたのだが、扱いが実に酷かった。

正規部隊にすら追従を許さない戦果をあげていたにも関わらず、だ。

弱い立場につけこまれ愛人になるよう迫られたり、Zガンダムを取り上げられようとしたり。

だがブレックスの世界最強国「アメリカ」という国籍。そして何の権限はなくとも「エリート的立場」な肩書きはやはり強力だった。

たちまちに木っ端軍人だの地元実力者だのに口をはさまれない立場に祭られ、さらにオレのゼータでの戦果を政治的成果へと化学変化させ、今や独立武装連隊「エウーゴ」は大東亜連合の実力者の一角となった。

「了解ですわ、ブレックス総長。では皆さま。上総は目玉のお化けと踊ってきますのであとをよろしく」

途端に嘆きの声が満ち、引き留める声があとをたたない。

これはオレがモテることとは関係なく、ゼータが戦線を離れると戦死者が相当数出るからだ。

それを無視してゼータを指定場所へと動かす。

光線級呐喊など本来は正規兵の役割だろうが、それをすると重金属雲を厚く巻いて数十数百もの部隊の犠牲を積み重ね、やつとなし得なければならぬ。

それがゼータなら、ただ一機で出来てしまうのだから仕方ない。

さて、さつきからオレオレと言っているが、自分は山城上総という女の子の衛士。男だったのは前世の話だ。ただ、実際にしゃべる場合はさつきのようにお嬢さま言葉になる。これは作っているわけではなく、「山城上総」の肉体に染みついた性らしいのだ。

「上総。光線級群の位置を確認した。もう行っちゃおう?」

「ダメですわ。ブレックス総長を立てないと。エウーゴの代表的立場のわたくしが命令に従う姿勢を崩せば、民兵が集まった傭兵団なんて簡単に崩壊してしまいますわ」

今オレに話しかけたのは座席斜め前にいるハロ。しゃべっているのはガンダムでおなじみの球形ロボットだが、本体はなんとこのZガンダム自身。

前世はオレの親友の晴郎という奴だったのだが、転生特典でZガンダムを願ったらZガンダム自身になってしまったのだ。

やがてブレックスから指示がきた。

瞬間、オレはゼータを発進。

『カズサ、非常に厳しいが頼む。司令部からの情報で位置はここ、この辺り。作戦を検討した結果、もつとも成功確率の高いルートは………』

ハイハイと適当に相づちをうちながら何も聞いていない。

ここのガバガバ位置情報と穴だらけ最適ルートなど聞いても無駄だ。

とつくにハロが位置も最適ルートも分析済みだ。

「エンゲージ! フォックスワン!」

「左前方にもBETA群確認! けど遠いから無視して!」

途中にいるBETAを吹き飛ばしたりやりすぎしたり。

目標位置の中ごろまで近づくと、早速光線級がレーザーの歓迎をしてきた。

照射の瞬間をニュータイプの直感で感じて、機体を大きくそらして回避!

右に左に回避していくと、やがて突撃級の集団がこちらに向かってきた。

足の速い突撃級がこんな所にいるのは、おそらく光線級の護衛だろう。

「そこな細道を開けてくださいな。天神様へのご用向きにあげりましたわ」

ビームライフルを取り出し、前二体の突撃級の足を綺麗に吹き飛ばした。

突撃級二体は派手に転倒し、隣の個体をも巻き込み、きれいに道が空いた。

そこをスピードを緩めず突破。ついでに突撃級を背にして照射を防ぐ。

さて、そろそろレーザーを躲すのも難しくなる所まで近づいた。

ニュータイプ能力で照射の瞬間を読んで回避行動をとっても、レーザーを動かす時間と機体が反応する時間のコンマ数秒で遅れてしまうのだ。Zガンダムがサイコミュ搭載機体なら、思考したら即回避なのだが。

なのでさらに上位のニュータイプ能力【先読み】

高レベルのニュータイプ同士の戦いは、相手の一手先を読むべくこれを駆使しながら戦う。

やたらピキーンピキーン鳴って戦っているのがそれだ。

オレはこれを発動すべく、機体は猛スピードでも心は静かに光線級に意識を向ける。

BETAのなまこの感触のような意識は実に気持ち悪いがガマンだ。

ピキーン

来た！ 瞬間ゼータを大ジャンプ！

さらにバーニアをふかし距離をつめる。

下にレーザー照射の奔流が通り過ぎるなか、バイオセンサーを起動。

バイオセンサーというのは、サイコミュ開発当初は巨大だったそれを小型にした簡易サイコミュだ。本来は姿勢制御のためのものなのだが、ニュータイプが起動させると魔法のようなことが起こったのだ。ビームサーベルが巨大になってロングビームサーベルになったり、サイコフィールドというバリアが発生したり、意識が裸になって

敵と心が通じ合ったり。

要はパイロットができて欲しいことが起こる魔法のようなものだ。で、オレはその魔法をビームライフルにかける。

「墜ちなさいー！このおー！」

バイオセンサーの魔法で長距離モードになったビームライフルを光線級群へと斉射する。

威力も高まったビームライフルは、50匹以上もいた光線級群をわずかに十数発で殲滅してしまった。

撃ちもらしの確認をしながら周囲を警戒。

「終わりましたわね。さっきの突撃級のイノシシ達がお戻りになるでしょうし、それも片付けて……………あら？」

モニターにはさつきやりすぎした突撃級が、オレの乗るゼータから背を向けマンダレーハイブの方角へと去って行く姿が映っていた。

「BETAにも『恐れをなす』なんてこともありますのね。ま、急いで戻らなきゃけっこうな数の隊員が死んでしまうでしょうし、見逃しましょうか」

「アイハヴコントロール。BETAがまた出るまで操縦代わるから、休んでて」

少し不用心だが、戻ったらまたBETAが尽きるまで撃ち続けなければならぬのだ。

操縦をオレから代わったハロは、ゼータを元のエウーゴの陣地へと向けて走らせた。

実にいつものBETA退治の光景だった。

だがこの時、オレ達は知らなかった。

逃げたBETAは戦った相手の情報を持ち帰るということを。

もつとも、これが脅威になるのはZガンダムが強さもあってかなり後のことだ。

15話 エウーゴのお姫さま衛士

「以上。共に我らが祖国を守らんと戦い果てたエウーゴの兄弟達に深く感謝し哀悼の意を捧げます。わたくしは彼らの死を越えてなお、人類の盾となり矛とならんことを誓います」

オレがカンニングペーパーに書かれた文章を読み終わると、嵐のような拍手がわいた。

オレは一礼をして、しつらえた舞台の壇上からはなれ、マレー伝統衣装バジユ・クバヤのセレダン（スカーフのようなもの）を踏まないよう気をつけながら静かに階段をおりる。

エウーゴが結成されて九ヶ月。

本日はエウーゴの戦死者追悼式典。いやはや、たかが傭兵団がこんな大層な式典を開けるまでに発展したのだから、本当にブレックスの政治力はすごい。

もう【エウーゴ】は一介の傭兵団などとはいえない。政治活動までするのだから。

ちらほら政治家や軍や財閥の有力者の顔も見える。この式典自体、彼らと縁をつなぐための壮大な舞台装置なのだろう。

オレが控え室になっている小屋へ戻ると、そこにブレックスが待っていた。

上等で貫禄アップで背中に落書きしたくなるようなスーツを着て、現地の少女メイドを控えさせながら、主人然としてそこにいる。

式典の主催者なのにこんなところにいるのは、どうやらオレを待っていたらしい。

スピーチが終わったらどこかへ隠れようと思っていたのを見抜かれたか。

「カズサ。また名前を間違えたよ。『ジャスワント』じゃなく『ジャヌワント』だ。政治家にとって人の名前というのは重要だ。気をつけてほしいね」

「わたくしは政治家じゃありません。たしかに戦没者には哀悼の意を表しますが、エウーゴはメンバーが把握できないほど増えたし、新

規に入ってくる人間もほぼ毎日。とても覚えきれるものではありません！」

「なって欲しいんだけどね、僕としては。まあ衛士としての君の腕も重要だし、君の負担にならないようこつちでまた対策を考えよう。さて、次は支援者のみなさんに順にまわって挨拶だ。インカムにサポーターが指示を入れるから今度は間違えないようにね」

「そ、それはやらなければなりませんの？ 光線級呐喊の後遺症とか、戦闘でたまった疲労で体調が思わしくないとかで……………」

無駄な抵抗というのはどうしてしてしまうのだろうか？ 小娘の引きこもり要求などきいてくれるなら、こんなところにはいない。

「ダメダメ。みんな『BETA戦役の華麗なる姫衛士』との数少ない会話の機会を楽しみにしてるんだから。なにしろ君ったら、いつも部屋に閉じこもっているかZガンダムに閉じこもっているかだからね。もう少し会合にも出てメンバーと話をしたらどうだい？」

仕方ないだろう。なにしろみんなオレを女神様みたいに崇めまくって讃えるし、こつちもそれに応じて『そなたらの献身、まことに大義である』なんて、武将のお姫様みたいなことを言わなきゃならない。まあ、武家の娘だったが。

ストレスが溜まるだけなので、すっかり引きこもりだ。

そもそも『誇り高き良家のお姫さま衛士』なんてイメージを広めたのはブレックス本人だ。アイドルみたいなオレの人気も、政治活動には存外バカにならないらしい。

「次の大きな作戦が終わったら、僕は一時祖国アメリカへ帰るよ。そしたらその間のエウーゴのリーダーは君だから、しっかりと後援者のみなさんには頼んでおかないとね」

「なんでですって!?! 無理ですわ、そんなもの！」

それなりの立場になってわかったが、オレにはコイツのような政治をやる器がない。そんなもの押しつけられても、上手くやっていく自信などない。

「大丈夫。優秀な参謀をつけるから。次の作戦が成功すれば、僕は………… エウーゴは大きな後ろ盾を得てさらに発展する。それを背景

にアメリカ変革の一石となるつもりだ」

「祖国への復讐？ 消されない程度にほどほどにしておきなさい」
コイツのアメリカ批判を聞いていると、諸外国のアメリカに対する感情にそっくりなのだ。当然、便乗する国も亡国政府も出てくるだろうし、大元のアメリカも脅威に思わないはずがない。

何となくだが『機動戦士Zガンダム』の方のブレックスと同じ運命をたどる気がしてならない。

あっ！ だったらオレの立場は「クワトロ・バジーナ」にそっくりじゃねえか！

「いやいや、僕はけっこうな愛国者でね。でもアメリカは諸外国との協調を拒む強硬派が主流派になってしまった。だから僕が内にはいつて少しでも彼らの言葉を届けようと思う。祖国に厳しいことを言うのも愛国心ゆえさ。カズサ、そのためのミョージョウ作戦。しっかりと頼むよ」

ミョージョウ………明星作戦？ 作戦名が日本語？

ブレックスは部屋の隅に控えているメイドの少女達に向けて言った。

「それじゃみんな。カズサを支援者の方々に紹介できるよう綺麗にしてくれ。待たせたくないから急いでくれよ」

オレの美貌も奴の道具か。ブレックスには感謝しているが、この才覚やら手際の上さやらがときどき憎らしい。

「おまかせくださいブレックス様」とかしづく少女達の礼をうけ、悠々旦那様の貫禄で奴は出て行った。

すつかりサマになったな。もう政治家くずれには見えない。

——愛国心か。

少女達のお色直しを受ける間、なんとはなしに考えた。それにしても『お色直し』なんて適当でいいのに、『我らが女神さま』を飾り立てる情熱のまなざしでやるのはやめて欲しい。

戦災で身寄りのなくなっただ子供達にこうやって仕事を与えているから、ブレックスも善人ではあるんだよな。

それはともかく、ブレックスの『愛国心』というワードに、祖国日本帝国のことを思った。

いや正確には『オレの』ではなく、この体『山城上総の』だが。オレが日本を離れたあと、日本はすぐにまたBETA大侵攻を受けた。

一年前のBETA大侵攻のとき、すでにBETAは占領していた佐渡島にハイヴの建設を開始していたのだそうだ。そこから湧き出るBETAの圧力に耐えきれず、滋賀——三重を結ぶ絶対防衛線は破られ、東海地方まで奪われた。

侵攻をそこで停止したBETAは、横浜に新ハイヴの建設をしていることが確認された。

もしこのハイヴが本格稼働した場合、日本は本州を完全に奪われるであろうとのことだ。

それを知ったときオレはすでにこのマレーシアで傭兵家業をはじめていたが、無性に日本を離れたことを後悔した。山城上総の記憶がオレ自身を苛むのだ。

元のこの娘はそうとう日本を愛していたらしく、あれからどうにも望郷の念がおさまらない。日本に帰って、国土をとりもどす戦いをしてたくてたまらない。

とはいえ、いろいろあつて日本には帰れない。

悲しいが、ここでアイドル姫衛士をやっていくしかない。

「カズサさま。それでは行つてらっしゃいませ」

嬉しそうにかしずき見送る少女達に見送られながら、シズシズとブレックスの元へ行く。

いやこれもやめて欲しいのだが、彼女らの流儀とやらでやめないので、オレもつき合つてこんな楚々としたお姫様を演じなければならぬ。いったい何になったんだオレは？

そんなやるせないオレの内心にも構わず、ブレックスは重要な相手とやらにオレを引き合わす。

「紹介しよう。僕らエウーゴの最大スポンサー。ウオン・リーさん

だ

「ギャフン!

「エウーゴの活動を広めてくれるジャーナリストのカイ・シデンさんだ」

「がフウツ!!

「海峡支援艦隊指揮官のヘンケン・ヘツケナー提督だ」

「ドツギヤーーン!!!

「なんでどっかで聞いたような名前ばかり!?

まさかあつちの『ブレックス』の未来を暗示してんじゃないだろうな?」

「本当に大丈夫か? 何も起こらないだろうな。次の大作戦とやら!

16話 　　タリサ・マナンドル

式典は続く。お姫様衛士営業活動も続く。オレのストレスも続く。ブレックスに連れられ、式典に来ているあつちの偉い人こつちの偉い人に挨拶をしてまわり、作り笑いも清楚な物腰も限界になった頃だ。

片隅の物陰で休ませてもらい、ブレックスは「飲み物をもらってくるよ」とオレから離れた。

ぼんやりそこら式典にいる人たちを眺めながら待った。どうやらここは軍の人間が集っている場所のようだ。

ふと、色の浅黒い活発そうな少年軍人と目があつた。するとそいつは妙にうれしそうな顔でオレに近寄ってきた。顔つきはやけに可愛く現地の子供のようではあるが、正規軍の制服を着ているのでれっきとした軍人か。

『オレのファンだったらめんどくさいな』とか思ったが、そいつはそれより遙かにめんどくさい奴だった。

「フフン、いいところで会ったぜ」

いや、女の子？　声は女の子のもの？　セリフはともかく、やけに可愛い声だ。

その子は着飾ったオレに臆する様子も見せず、ブラリ真正面に立って言った。

「よお。アンタがアタシら正規軍も差し置いて、東南アジア最大の戦果をうちたてたってお姫さまかい？」

「人違いですわ。わたくし、そんなものうちたてた覚えも、お姫さまでもありません」

「へへっ。間違いねえようだな。よしっ。あたしと勝負しろ！　あたしのF-15とお前のゼータで模擬戦だ！」

違うと言っているのに、どうして話が進むのだ。そもそも一機で光線級呐喊が出来るゼータと、ここらの戦術機で勝負になるか！

「お断りします。ほかの軍との模擬戦は原則として上層部が決めた場合にのみでしかやってはいけないのがきまりです。ましてや万一

傭兵の戦術機に正規軍のものが不覚をとった場合、面子が立たないでしょう?」

「大丈夫だ。アタシは絶対勝つ! スコアじゃ部隊の規則のせいで負けても、一対一^{サシ}でやったらアタシの方が絶対強い」

なんなんだろうね、この自信。ゼータと他戦術機の圧倒的な性能差を見てどうしてそう言い切れる?

とにかくこんなアホの提案なんかに乗って、貧乏くじを引くわけにはいかない。

「BETAとの戦闘はスコアを競うハンティングゲームではありませんし、模擬戦はどちらが強いかの勝負事ではありません。お断りいたします」

「だああああ勝負しろー! しなきやスカートめくるぞ! パンツ見るぞー!」

「きゃあああ! やめなさい。正規軍衛士が堂々と不祥事おこして!」

コイツ、見かけだけじゃなく中身まで悪ガキ坊主だよ!

セレンダンを引つ張る悪ガキ衛士を、彼女の上官らしき兵士とその部下が駆けつけて取り押さえると、謝罪をして向こうへ引つ張って行った。

オレはブレックスに連れられ、崩れた衣装を直しに控え小屋へいった。

「あの娘はタリサ・マナンドル少尉。ネパール軍の衛士だね。大東亜連合の中でも腕を認められる俊英だよ」

オレはメイドの少女達に衣装を直されながら、ブレックスからタリサとかいう悪ガキネパール軍女衛士のことを聞いた。

しかし俊英? 現地語じゃだいたい意味が違うのか?

「それにしても思い上がりすぎますわ。大東亜連合の精鋭のだから、あの高すぎる天狗鼻をへし折っていただけなものかしら」

「そりゃ無理だ。衛士としての腕はこころじゃ最強で、大東亜連合の誰もが戦術機の腕である子にはかなわないってほどのものらしいよ。ああ、君を除いてだけ」

いや、オレ個人の腕はそれほどでもない。神がかった戦術機機動も、ゼータの性能とハ口の補正のお陰で出来ているだけで。

おかげでゼータに乗った初めての戦闘で、光線級呐喊なんて出来てしまった。

「まあ、あの娘も最後に噂の君と競ってみたかったんだと思うよ。なんでも最近、ここを離れるらしくてね。アラスカで調整が行われる最新鋭機のテストパイロットに選ばれて、国連に派遣されるらしいんだ」

なんと！ 本当にエリート衛士だったとは！ イキつて飛び出して無駄死にする雑魚にしか見えなかったよ！

このとき、もう二度と会うことはないと思つたあの娘だったが、なんと数ヶ月後には再び出会うことになってしまう。しかも本当に模擬戦なんかをやらされるとは思いもなかった。

衣装を整え再び式典に出ようとするオレに、ブレックスは思い出したように言った。

「ああ、そうだ。式典のあと詳しい話はするが、次の大きな作戦のさわりだけ教えておこう。場所はなんと君の祖国の日本帝国だよ。大東亜連合は日本で行われる横浜ハイヴ攻略戦に参加する。これは他に在日米軍と国連軍日本支部も参加する大規模なものだ。エウーゴも大東亜連合の戦力のひとつとして参加することが決めた」

!??

「日本……ですか？ しかしわたくしは脱走兵で……」

「大丈夫。その辺りの話もついている。脱走以外の悪いことをしたわけでもないし、今回の作戦への貢献と謝罪で許されるよう話をつけたんだ。僕も祖国に帰れないつらさはわかるつもりだからね」

ウィンクして答えるブレックス。

ヤバイ！ ブレックスが一瞬いい男に見えた！

「ありがとうブレックス！」

思わず恋人同士のようにブレックスに抱きついてしまった。

アイドルお姫様衛士やらされている恨みも吹き飛んだよ！

——パチパチパチパチ

………え？　なんでオレら、拍手されてるの？

見るとメイドの女の子達が、結婚式を見るみたいな目で抱き合っているオレらを見ていた。

いや違うから！

『恋人同士のように』ではあっても、『恋人同士』じゃないから！
キスシーンとか待っている目をやめるんだ君たち！

やたらキリツとした顔のブレックス！　お前も何を待っている!?

——そして一月後。

オレは大東亜連合の一員として一年数ヶ月ぶりに日本帝国の地に戻った。

作戦目的は、本州よりBETA排除のための横浜ハイヴ攻略作戦。
作戦名は明星作戦。

ここでオレは運命とも言えるような奴らとの出会いをする。

国連軍日本支部所属の衛士・鳴海孝之と平慎二だ。

17話 上総の帰還

オレは一年数ヶ月ぶりに日本へと戻ってきた。

『落人帰り来たり。薩摩守忠度はいづくより帰られたりけん』

平家物語の一節、『忠度の都落ち』の一節が思い浮かんだ。

『いづくより』とオレに問うならマレーシアからだ。

さて、大東亜連合の代表は一足先について、もう作戦も戦力配置も決まったのだという。

用意された宿舎につくと、さっそくブリーフィングルームで「明星作戦」の説明をうけた。

本来なら指揮官クラスのためのものだが、ゼータは大東亜連合の中心戦力であるためにオレとブレックスもそこに呼ばれたのだ。

「意外とハイヴに近い場所をわりあてられましたわね。外様で立場が一番軽い大東亜連合。すみっこで警戒警備でもやらされるのかと思いましたわ」

「君のゼータの戦闘力を当てにしているのだろうね。京都陥落のさいの活躍がかなり有名になっているよ。責任重大だね」

エウーゴはこの作戦のために日本帝国から4機の戦術機・撃震を購入したからすごい。個人の財団が戦闘機やら戦車やらを購入するよなもんだ。

もつとも戦力としてはアテにはならない。操縦者は衛士の資格をとっていないつけ焼き刃のブレックスと、衛士くずれのエウーゴのメンバー。まかされている場所はほぼオレのゼータ一機で守るつもりだ。

「でもブレックス。だったらあなたは出撃は見合わせたら？ 激戦区になるだろうし、あなたに万一のことがあるわけにはいかないでしょう？」

「ああ、確かに僕はまだ死ねないね。でも、明星作戦に参加したという実績も必要なのさ。だからカズサ。あてにさせてもらおうよ」

まあ、オレもだいたいBETAとは戦いなれてきた。ブレックスを守

りながら担当区のBETAを排除することはできるだろう。それくらい宇宙世紀のビームライフルは圧倒的火力なのだ。

「せいぜい防衛任務を果たして実績をつけてあなたの名を上げてさしあげますわ。あなたはBETAを打ち倒す救世主。わたくしは害虫駆除の専門家」

「いやいや、BETAを打ち倒す救世主は君さ。僕は戦災で苦しむ人間を減らす方の仕事がしたいんだ。戦場に身を置いているのは祖国で発言力を高めるためさ」

確かアメリカじゃ、従軍経験がなければ大統領ほか重要な役職につけないくらい、軍事が重要視されているってきいたことがある。

それならこの大きな作戦で、BETAと戦ったというのは大きなアピールポイントになるだろう。ブレックスの戦闘能力、指揮能力は皆無だが。

要は石田三成みたいなものか。あの武将は官僚としては極めて優秀で、主家の豊臣家を世界一の金持ちにするほどだったが、戦での実績がないせいで不当に軽く見られていた。だから本人も主君の豊臣秀吉も、彼に戦の実績をつけようとかんばった。

だが作戦をたてれば極めて優秀なのに、本人が戦場で指揮をとったら必ず失敗するという、参謀能力に極振りしたスキルのせいで悲惨な末路をたどった。

さしずめオレは島左近。石田三成に高給でやとわれた軍事アドバイザーか。

「ところで日本やら国連やらの代表の方々はまだ来ませんか？ 挨拶をしていただきませんか、ブリーフィングが終わらないじゃありませんか」

説明はもう済んだはずなのにまだ終わらない。なぜか各軍の偉い人の会議が終わらず、最後の挨拶やら紹介やら演説やらにこないのだ。

「ああ、だいぶ遅いね。多分、各国の意見が割れているんだろうね」

「……………？ 作戦も各国の軍の配置も決まって、下におりた後で

しょう？ 他に何をめめることがあるんです」

「お宝さ。G元素。その割当量をめぐってもめているって耳にはさ
んだよ。要するに勝った後のお宝のぶん獲りあい醜く争っている
のさ。とくに国連代表のユウコ・コオヅキってのは、アメリカの代替
案にも耳をかさず強硬に相当量を求めているらしいよ」

だったらお開きをしてから仲良く争ってくれ。

せっかく四軍の戦力が集結して異星起源種に立ち向かわんとして
いるのに、醜いお宝争いなんかして、そのとばっちりを下のものに喰
らわせたなら士気が下がるだろう。

◇ ◇ ◇

結局、ブリーフィングは代表の挨拶もない、しまらないものに終
わった。

さんざん待たされたこっちは怒りでストレスたまりまくりだ。

憂さをはらしにラウンジに行くと、見覚えのある国連軍日本支部の
若い青年士官二人がカウンターで飲んでいた。

何度もブリーフィングルームへ来ては「代表は間もなく来られま
す。もうしばらくお待ちください」とかぬかし腐った奴らだ。

つい嘘つき野郎二人に文句を言いたくなって、そいつらのもとへ
行った。

だがしかし、何故か数分後にはそいつらと楽しく飲んでいた。

もつとも、全員まだ未成年なのでノンアルコールだが。

「いや実に申し訳ない！ お詫びにここの払いは俺達がもちます
よ」

「だったら、わたくしだけじゃなく大東亜連合の全員におごらなけ
ればなりませんわね」

「いやそれは！ 美しいお嬢さんだけに特別ということぞ！」

それにしても、いつの間にか座席の配置が変わっていた。

たしか二人に声をかけたときは二人とも右にいたはずなのに、今は
何故か両隣にいてオレは挟まれている。

なんだこのナンパされているみたいないな感覚。

「まあ、あなた方が悪いわけじゃないのはわかりますわ。二人も上に振り回されただけ。でも、散々わたくし達を待たせたその責任者は何をしてらしたの？ G元素とかを争っていると聞きましたけど」

「ええ、それが上層部の会議が紛糾した理由です。詳しくはいえませんが。というか俺達もよく知らないんですが、ウチのトップが何かの研究に使うので相当量要求したそうです。ハイヴ内の『アトリエ』というG元素集積地の管轄でも大いにもめていましたよ」

「まったく。こっちは偉い人にG元素のプレゼントをするために戦うんじゃありませんわ。日本をBETAから取り戻すための戦いにきたのです！」

「ええ？ 大東亜連合の方ですよね？」

「所属は大東亜連合ですが、実は国籍は日本です。昔の不始末で日本に砂をかけて出てきてしまいました。日本を守りBETAから取り戻したいという気持ちは今も確かにありますわ」

「そうですか！ いや初めて見たときから、見た目じつに日本人らしい……というか、斯衛みたいな武家の方ような人だと思いました。実は俺達の故郷はハイヴのある横浜。俺達にとっては国のためだけではなく、俺達の街を取り戻すための戦いでもあるんです」

「それはたいした意気込みですわね。戦い終わったら、またここで祝杯をあげて飲めていたらよろしいですわね」

「その時はお嬢さんも是非！ 俺の名前は鳴海孝之。こっちは平慎二つていいいます。国連軍デリング中隊に所属してます！」

「まあ。名前などおっしゃられても、明日には忘れてしまいますわ。わたくし、人の名前を覚えるのは苦手ですもの」

「そう言わずに覚えておいてください。祝杯で飲むときは水月と遙つて女の子二人も呼ぶから、一緒にみんなで飲みましょう！」

「孝之。あの二人とこのお嬢さんを引き合わせる気かあ？ ……：まあいいか。俺も二人に内緒で別の女の子と会うのは気が引けるしな」

確かにその彼女だか女友達だかを呼んで、オレと引き合わせると

か。修羅場になりそうな信じられないことを提案するな。まあ、ナンパ目的とかじゃないならつき合ってもいいか。この鳴海って奴、妙に話しやすくて会話が楽しいし。

「これが水月と遙です。俺達二人の幼い頃からのくされ縁なんです。彼女らも軍人なんですが、まだ新人なんで別方面への警戒任務についています」

そう言って写真を見せてくれた。そこには今より若い二人と一緒に、髪が短くて大人しそうな女の子と、床につくほどバカ長い髪の毛の活発そうな女の子がいた。二人ともかなり可愛い。女になってしまったとはいえ、この二人と話せるのはいいかもしれない。

「わかりましたわ。わたくしは山城上総。大東亜連合のエウーゴ小隊所属ですわ。そのときは是非ご一緒させていただきます」

「おお、そりや楽しみだ！ 明星作戦の成功に乾杯！」

「生きて帰る楽しみができたな！ こりや死んでなんていらねえぞ！」

オレは陽気な国連軍衛士二人と楽しく飲んだ。

だが帰る時つい、その写真を持ってきてしまった。今度会ったとき返さなきゃな。

◇ ◇ ◇

国連軍の二人と飲んだあと、オレは割り当てられた部屋でくつろいだ。

なんとブレックスのお陰で個室だ。

そしてハロに会議の様子と国連軍の二人と飲んだことを話すと、何かG元素の話に興味津々だった。

「アトリエにあるG元素か………。それ、少しもらえないかな？」

「G元素ならいつもお食べになっているでしょう。マレーシアの東亜戦線ではしょっちゅうBETAと戦っているんですもの」

「いや、そんなBETAの食い残しのブツなんかじゃなくってさ。ボクなりにゼータの体に吸収されていくG元素を調べてみたんだけどね。もし純度の高い高エネルギーのG元素があるなら、ゼータを強

化できるかもしれない可能性を見いだしたんだ」

「あら、具体的にはどのようによ？」

「まず、サイコフレームが生成できる」

「えええ!？」

「さらにバイオセンサーを強化してサイコミュ並に進化させることができる」

「まあー!」

「さらにさらに、ボクのメインコンピュータをバイオコンピュータに進化! フォーミュラ計画並の機体となれるんだよ!」

「な、なんですってえええええ!」

ガンオタには垂涎のワードがずらり! これはもう日帝だろうがその他諸々の国家機関だろうが出し抜き、ガンダム試作2号機を………じゃなくてG元素を強奪をするつきやない!

——と、ハロの話聞いてしばらくは本気で『G元素強奪計画』なんかをたてた。
ハッキングやら何やらを駆使してハイヴの情報を集めたり。

「ヴォールクデータを入手した! 地下口径の構造は完璧にはわか
らなくとも、フェイズ2ハイヴの構造は単純だ。よりG元素の多くあ
る場所がアトリエだ!」

サイコフレームの幻を追いかけ、昼夜問わず計画の精度をより上げ
続けたり。

「わたくしもニュータイプ感知能力でG元素感知を高めます。
ゼータの探査能力を合わせれば、100キロ先のG元素の位置もわか
りますわ!」

正気に戻ったのは、計画がほぼ完成して本当にアトリエからG元素
を盗めると確信ができてしまったときだった。

「……………ねえハロ。各国で紛糾するほど激しく取り合うG元素
を、わたくし達が奪ってしまったら、わたくし達どうなるのかしら?」
「……………二度と表の世界には出られないだろうね。エウーゴの
名声は地に墜ちるだろうし、ブレックスも君を切らざるを得なくなる

だろうし」

「ダメじゃありませんか。どうするのです？ この作ってしまった完璧な強奪プラン」

「……………なかつたことにしようか。ま、いずれハイヴ攻略をするときに役立つかもしれないし、ファイルの片隅にでも置いておくよ」

欲に踊らされた人間はいつも悲しい。

その日からエウーゴの姫衛士・山城上総は部屋に引きこもり、明星作戦開始まで姿を見せることはなかつたという――

無駄骨で疲れたんだよ！

――そして2000年未明。

明星作戦は開始された。

18話 明星の空にG弾は降り落ちる

鳴海 孝之Side

彼女はその信じられない事実を通達した。

—— 『米国は五次元効果爆弾、通称【G弾】の使用を決定した』

◇ ◇ ◇

九月未明、横浜ハイヴ攻略作戦こと明星作戦は始まった。序盤の作戦進行は順調だった。

BETAの誘因は上手くいき、ハイヴ周辺のBETAは南北へ大きく引き寄せられた。

ハイヴ入り口。通称『門』の近くのBETAは排除され、地下口径への突入もかなりの戦力を投入させることができ、理想的な形で開始することができたという。

その報告を聞いたとき、俺は半ば作戦の成功を確信した。だが、数時間後。

CPからの報告は雲行きの怪しいものばかりになってしまった。突入部隊の連絡途絶。先行部隊の壊滅。奇襲による損害の穴埋め。支配地域の放棄。現状維持。

現在俺と慎二は海老名近郊にて不知火搭乗での二機のみ効果観測任務についているが、任務をこなしながらも、つい作戦の先行きに気がいってしまう。

数時間ぶりにCPへの通信に成功した慎二が、それで得た情報を教えてくれた。

「孝之。ハイヴへ入った連中の連絡、完全に途絶えたらしいぜ。どうやら失敗したらしい。おそらく全滅だ」

「マジか？ 連中、国連と帝国の精鋭だろ。第二陣とかあるのか？」
「あるにはあった。だが、第一陣がヤバくなった時点で救助に向かって、そのままどちらからも連絡がなくなった。その後、使える部

隊をかき集めてまた送ったがそれもダメ。最後に救助専任の部隊を送ったらしいが、それもどうなることやら」

「じゃあ……………作戦は失敗？ お開きになんのか？」

「大東亜連合が戦線維持にがんばってくれているらしい。撤退するなら、かなりの戦力を引き上げることができるともな」

俺は暗澹たる気持ちになった。慎二も撤退命令が来ることを確信している。

ともかく隊長機に連絡をいれて報告。それとこれからの行動について聞かねばならない。

俺は隊長の大和田大尉に通信をつないだ。

「こちらデリング08及び09。デリング01へ報告。海老名方面、BETAの敵影なし。大気及び地質の調査完了。これからの指示を仰ぎたい」

『ザザッ……………ここ……………リング……………現……………告があつ……………へ……………ビー……………が……………』

くそっ、また通信障害か！ さっきはCPにつなぐことはできたが、指示を仰ぐにはやはり隊長の大和田大尉に繋がねばならない。だが、光線種対策のための厚く張った重金属雲が通信の妨害をする。

「仕方ない。大磯へ向かって後退だ。大和田大尉に繋がるまでさがるう」

「ああ。そうだな……………うっ！ おい孝之、あれ！」

慎二はいきなり驚いた声をあげた。指し示す方向を見ると、そこには二機の不知火がこちらに近づいてきていた。肩のマークをみてみると、それは別部隊ではあるが俺達同様のA-01連隊に属する、ヴァルキリーズのものであった。

「デリング08及び09。こちらヴァルキリー01だ。大和田大尉から聞いているか？ 米軍の動きを」

ヴァルキリー01！ 伊隅大尉か？

ヴァルキリーズ隊長で『鉄の女』とも言われる俊英だ。何故ここに？

「いいえ。大和田大尉へ繋ごうとしたのですが、通信障害が酷くて

聞き取れませんでした。米軍がどうかしたのですか？」

「そうか。『補給のついで』というには大回りだったが、わざわざここまで足を運んだ甲斐はあったな。実は帝国と米国がはげしくやりあっている。ハイヴ突入隊の全滅をうけ、米国はG弾の使用許可を帝国に迫っているのだ」

「ええ!? あれは作戦計画から外されたんじゃないや?」

五次元効果爆弾。通称「G弾」。どのようなものかは知らないが、とにかく強力で、ハンパない被害をもたらすものだと言われている。あの曲者の香月副司令が、断固として使用を反対したものだから相当ヤバイものだろう。

『復活したのだ。G弾使用はハイヴ攻略作戦失敗時の予備作戦として残してあったらしい。このままでは本当にG弾が使われる可能性が高い……いや、あえて言おう。米軍は確実に使用する。いまG弾の最新の情報を送る。被害予想範囲の項をみてみる』

伊隅大尉から送られてきたデータリンクを見て、俺達は驚愕した。横浜のほとんどがその被害地域にはいつているのだ。これでは横浜はお終いだ。もちろん俺達の街の白陵も消えてなくなる。

「もう一度言う。米国は五次元効果爆弾、通称「G弾」の使用を決定した。貴様らはいつでも撤収できるようにしておけ。撤退の命令が来たなら全力で効果予想範囲から逃げろ。以上だ」

伊隅大尉とその随伴機は、そのまま去って行った。

「孝之、撤退の準備をしよう。大和田大尉と合流だ。集めた情報に漏れはないな?」

「……………」

慎二の言葉も耳にはいつてこなかった。ただ、激しい怒りと無念が胸を渦巻いている。

「おい孝之! 聞いているのか!」

「……………慎二。今の話、帝国や大東亜連合の連中は知っているとと思うか?」

「知らないだろうな。A-01は第四計画直属部隊だ。他所の連中とは情報のレベルが違う」

「帝国も大東亜連合も見捨てられて見殺しか。みんな命をかけて戦っているのに」

「孝之、撤退だ。俺達は情報観測班。集めた情報を持ち帰るのが任務だ」

ああ、慎二は正しい。だが、俺はその正しさに逆らわずにはいられなかった。

ここで何も知らされないまま、人間の手によって殺される人達を思わずにはいられなかった。

「慎二。俺はこのまま前進して帝国と大東亜連合に撤退を呼びかける。それで何人かでも助けてみせる！」

ただの意地かもしれない。でも許せなかった。

俺達の故郷を、街も駅も学校も、外国の上の人間に勝手にぶっ壊破されることを。

しかも、ここにはそれを知らずにまだ戦っている部隊の人達がいる。

彼らに何も知らせずに俺達だけで逃げられるか！

「お前、正気か!! 死ぬぞ！ 行かせねえからな！」

「慎二！ あの娘を……………山城さんまで見捨てていいのかよ！ 日本を取り戻すために帰ってきてくれたあの娘を！」

「……………っ！」

「悪い慎二。先に行つてくれ。俺は帝国と大東亜連合の部隊に撤退を勧告してから行く。大丈夫。死ぬ気はない。俺も勧告をした後、即撤退だ」

「いや、俺もつき合う。たしかに山城さんに何も知らせないのは不義理だよな。だがお前は必ず生きて帰れよ！絶対、速瀬と涼宮を泣かせるなよ！」

◇ ◇ ◇

「——よかろう。誠に遺憾ながら我々は弾薬が心もとない。一時この場を離れ、補給を受けた上で再度出撃をする。ではな。国連軍

のもの」

やつとこちらの説得が届いたのか、その帝国部隊の指揮官は部隊全員を連れて後退してくれた。

これで二個中隊を撤退させることができた。俺達にしちや上出来だろう。

ここらが潮時。ここで見切りをつけて撤退すべきだ。

それが正しい。だが――

「これ以上は俺達も危ない。大東亜連合は……彼女のいる場所は爆心地になる近くだ。それでも行くのか？」

――一番伝えたい人には伝えていない。まだ退さがれない。

「慎二、もうお前は行ってくれ。さすがにこれ以上はつき合わせられねえ」

やはり彼女を残してはいけない。

『日本を守るために帰ってきた』と言った彼女の瞳が忘れられない。

「……………いいさ。俺も山城さんにだけは勧告したい。祖国を守りたい気持ちで帰ってきて、今戦っている彼女だけにはな。何度も言うが孝之。お前は絶対生きて戻れよ。速瀬と涼宮さんにもう一度会って、どちらかを選んでやれ！」

水月と遙。ここから遠く離れた場所で別の任務についている二人に、俺は告白されている。

二人は親友同士で『どちらを選んでも俺も相手も恨まない』なんて約束をしているそうだ。

厄介なモチかたをしたもんだ。結局俺はまだ選べずにいる。

――けど、この瞬間。

二人には悪いが、俺は山城さんを選んでしまった。

命を捨てても、二度と二人に会うことができなくても。

山城さんに危機を告げずに退避なんてできなかつた。

♠ ◆ ♣ ♥ ♠ ◆ ♣ ♥

山城 上総 Side

作戦開始からすでに十二時間。

現在オレ達大東亜連合は、ハイヴの地表構造物周辺の支配地域で戦っている。

その前に担当していた帝国部隊は、ハイヴより湧き出るBETAの圧力の前に壊滅したので、その維持を帝国から引き継いだのだ。

ハイヴ突入部隊は四度送られたが、どれも通信は途絶。オレ達は現状維持を言い渡されたまま、新たな命令は届かないままに戦っている。

時間とともに不安は大きくなれど、ゼータの強さは相変わらずで、帝国部隊を壊滅させたBETA群をも次々駆逐していく。

そしてその報告が来たのは、ちょうどBETAの圧力が弱まり、多量なりともオレの手が空いたときだった。

「国連軍の不知火が来ているですって？ 何の用で？」

「わからん。かなり慌てていて要領がつかめない。ただ、何か状況に変化があったようなんだ。彼らは日本人のようだからカズサ。日本語で用を聞いてくれないか」

ブレックスは通信を担当しているが、重金属雲の電波障害でCPの指示を受けることができず、オレ達は状況を知ることができない。この国連軍の使いは靄の中の状況を知る絶好の機会だろう。

オレは戦列をはなれ、その国連軍戦術機・不知火の前に来た。

「わたくしが用を承りますわ。何の御用です？ 国連軍の方」

「山城さんか!? 良かった！ ……え？ 何です、その見たことのない戦術機？」

「え、鳴海くんですか？ どうしてここに？ わたくしのゼータのことはどうでもいいです。何の御用向きがおっしゃって下さい」

「あ？ ああそうだ！ 山城さん、大東亜連合のみんなにすぐさまこの場から撤退するよう言ってくれ！ もうすぐG弾が落ちてくるんだ！」

「G弾？ アメリカが開発したBETAに効果絶大だとかいう新型爆弾の？」

「そうだ！ 米軍はその使用を決定した！ 直ちに撤退しなきゃ直撃をくらうぞ！」

予想以上に大事の事態だ。もし本当なら、全軍をここから引き上げさせねばならない。

とにかくハロの意見を聞いてみよう。

「ハロ、米軍の動きは分かれますか？ 鳴海くんの言葉は真実なのですか？」

「長距離観測モードで調べた。本当だ！ 米国の宇宙艦隊はすでにこの上空の宙域にきている！ おそらくもうG弾の発射手続きにはいつているはずだ。弾倉交換！ 虎の子のジャマー弾を使う。ライフルを超長距離モード。上総、指定されたポイントに撃つてくれ！」

ポンッ

ハロの言われるままに、ジャマー弾を空中へと撃った。

その大きめの弾は、はるか空の彼方へと飛んでいった。

「弾自体に推進力があるから衛星軌道にまで自力で飛んでいく。そこで妨害電波を発生させ、衛星軌道艦隊の通信を妨害するんだ。これで少しは時間が稼げるはずだ」

良かった。これですぐにG弾が落ちてくることはなくなったのか。

「カズサ、いったい空に何を撃つたんだ？ それに彼らは何を報告しに来たんだ？ みんなが不安がっている。どうか説明してくれ」

おっとブレックスが聞いてきた。

ジャマー弾が時間を稼いでくれるとはいえ、ここに長居は無用だ。

「ハロ、この場全員へオーブンチャンネルを開いてください。みんなに急いで撤退を………」

「ダメなんだよ、上総！」

ハロが聞いたことも無いくらいにヒステリックに叫んだ。

機械音なのに。

「ジャマー弾で稼げる猶予は多分30分くらいだ。それまでにG弾の効果範囲から、連合のみんなを逃がすのは不可能だ！ ボクらだけで逃げるしかないんだ！」

な、なんだってえー！ー！ー！！

19話 重力の爆弾

ハロがそう言うのならそうなのだろう。しかし、オレはやはり決断できずにいた。

ブレックス他、エウーゴの仲間。それにそれを知らせに来てくれた鳴海と平。

それらみんなを見捨てて、俺達だけで逃げていいのか？

そんなこと、とても……とてもできやしない！

「……………決断できないか。実はボクもなんだ。だったら、命を賭けてみんなを助ける万一の可能性に挑戦してみる？」

「そんな方法があるのですか!? もちろんやります！」

「そうか。だったら作戦はこうだ。この先の行動はこれこれこう……………」

ハロから授けられた作戦はやはりキツイものだった。

しかしオレ達ががんばってみんなを助けられるなら、やるほかあるまい。

もうオレはガンオタじゃなく、本物のガンダム乗り。晴郎にいたつてはガンダムそのものなのだから。

そう。オレ達がガンダムだ！

「わかりました。それでいきましょう。みんなに通達します。通信をオープンに」

さて、ここからは階級も序列も関係ない。オレが最高指揮官だ。

有無を言わさず全員、これからの命令に従わせる。

「全員傾注！ 間もなくここにアメリカがG弾という恐るべき爆弾をおとします。すでに上空の衛星軌道艦隊は発射態勢にあり、今から効果範囲外へ退避するにしても、とても間に合いません」

——ザワリ

何やら騒がしく通信が一斉にきた。が、無視して続きを言う。

「ですから避難します。核の直撃を受けようと、ビクともしない施

設がここにはあるのです」

「な、なんだって？」

「カズサ？ そんなもの、一体どこに？」

「山城さん？ あの、まさかと思えますが……………」

「あれです」

ピタリ。ゼータの腕を上げその一点を指し示す。

それは多くの突入部隊を飲み込んだ地表構造物。

BETAが無限に湧き出してくるハイヴ。その門。

「総員、ただ今より横浜ハイヴへ突入をかけます！ 地下茎内深々度の奥へと潜り、もつとも防御の高い施設の一つ、『アトリエ』と呼ばれるG元素貯蔵庫まで一気に駆け抜けます。G弾の直撃を避けるにはそこより他ありません」

最大に通信がやかましく鳴った。

あそこに突入した精鋭部隊は全滅し、一機たりとも帰ってこなかったのだから無理もない。

しかしまたしてもそれを無視して続ける。

「わたくしが先導し、なるべく全てのBETAを倒します。ですが撃ちもらしがあった場合、それぞれの部隊で対処をお願いいたします。鳴海少尉、平少尉。あなた達も頼りにさせていただきます」

「や、山城さん!?! 正気……………」

—————
プチッ

さて、言うべきことは言った。当面通信は遮断して行動に移ろう。説得や説明の時間なんてないし、ついてこない奴は見捨てるしかない。

クスリ。

つい笑みがこぼれた。

「まさか欲に駆られて作ったアレが役に立ちますとはね。ガンオタの迷走もたまには役に立ちますのね」

オレはゼータをハイヴの門へと向けて突撃した。

ゼータがハイヴの門へ迫ると、やはりBETAがウジャウジャわいて出た。

だがビームライフルでは遅い。足がとまる。ならば！

「出し惜しみはしません！ バイオセンサー起動！」

ビームサーベルを高出力のロングビームサーベルへと変化させ脇に構える。

「大薙刀合戦作法が草薙の崩し、野原薙！」

ロングビームサーベルを低く大きく半円を描くように薙いだ。

一瞬にして前方全てのBETAが屍となる。

そのままいきおいを緩めずハイヴ内へと突入した。

◇ ◇ ◇

「燕飛！ 左太刀！ 蛙はがし！ 一文字のみだれ！ 五月雨の連撃！」

ロングビームサーベルを振るい、向かい来るBETAを次々撃破しながらゼータはハイヴの深々度奥、中層を突破し下層へと突入する。

ピタリ。

通路のとある一点に、何やら不穏な気配を感じて止まる。

横坑からの奇襲。数多の部隊を葬ったBETA得意の戦術か。

「ですがニュータイプの直感の前にはそれも塵芥ですわ」

ハイパー・メガ・ランチャーをそこに向け構える。

出力を低く抑えることで、いつでも撃てるようになったのだ。

——ボコリッ！

その音とともにその壁が崩れ、突撃級の装甲殻が現れた。

「お待ちしておりましたわ！」

瞬間、ハイパー・メガ・ランチャーの引き金を引く。

シユカッ！

白光の熱閃はその突撃級を蒸発させ、さらに横坑に潜むBETAをまとめて焼き尽くした。

その跡を見るとかなり広い空洞になっており、BETAが相当数潜んでいたことが見て取れる。

「これが最後の防衛施設だったみたいですね。G元素の気配も相当なくなっています」

「うん。もうこの先がG元素貯蔵庫「アトリエ」だ。どうやら間に合ったみたいだ」

ハロの言葉にやっと一息つくつと、鳴海から通信がきた。

「山城さん。遅れた機体はかなりある。君の隊長もついてこれられない。一旦止まってくれ」

そう言われて後ろを見ると、全天周囲モニターの後ろはかなり機体の数が減っている。

ゼータはわらわら来るBETAを排除しながら進んでいるのに、そのゼータについてこれられない奴がこんなにいるのか。

付け焼き刃で戦術機なんて乗っているブレックスもやはりだ。

「しかたありませんね。ハロ、戻ってみんなを連れてきましょう」

「ダメだ！ ボクらは一刻も早くアトリエに着かないと！ でないと間に合わなくなる！」

ダメか。アトリエに着いた後のことは聞いていないが、そこで終わりではなく、まだやることがあるらしい。仕方なくオレは鳴海に断りの通信を送った。

「ごめんなさい。どうしてもアトリエへの突破の時間を遅らせるわけにはいかないの。すみませんが、だれかブレックスを連れてきてあげてください。アトリエはすぐそこです」

「そうか。だったら仕方がない。俺達もどって後続の護衛につこう。慎二、いくぞ」

「わかった。生き延びる可能性も山城さんあつてのものだしな。山城さん。あとで会おう」

二人の二機は坑道を引き返し、それを見送りながらオレ達は前に進む。

『あとで』か。あの二人、本当にブレックスを連れてアトリエまでたどり着けるかな」

ハロがポツリと言った。

「これなくても大丈夫でしょう。かなりの深さですし、G弾の衝撃からは身を守れるはずですよ」

「上総。G弾で死ぬのは熱や衝撃のためじゃない。自分の体重に殺されるんだよ」

「ハア？」

ハロはその言葉の意味は教えてくれず、とにかくオレ達はアトリエへと道を急ぐのだった。

◆◇♣♥♥♠◆◇♣♥

鳴海孝之Side

俺達は道をもどりながらも、足下の無数のBETA共の死骸でできた絨毯を見て、山城さんの戦術機のすごさを改めて思い知る。

「まったく凄まじい力だったな。このBETA、全部山城さんただ一機でやったんだよな？」

「俺達も多少の漏れてきたBETAはやったが、9割はそうだな。ハイヴ攻略部隊の精鋭は全滅したはずなのに、俺たちは楽々ハイヴ下層まで来ちゃった」

「こんなことなら山城さんにハイヴ攻略部隊にはいつてもらった方が早かったんじゃないか？　ここまでの性能の戦術機が開発されたなんて聞いたことがないぞ」

「そうか！　山城さんはあの……………っ！」

「どうした慎二？」

「孝之、聞いたことはないか？　一年前の京都陥落のさい、たった一機の戦術機がBETA共の数を大いに減らして、それ以上の侵攻を防いだって話を。その機体の搭乗者は斯衛の新任衛士だったって噂だ」

「あれか！　じゃあ山城さんがその斯衛の？　もういつそ、このま

まハイヴを攻略しちゃうか？ その方が………あぐっ!？」

——ズンツ

な、なんだ？ いきなり機体が重くなった!？」

いや、機体だけじゃない。俺自身も重い!

「ぐうううっ!? どう………したんだ………っ! いったい………何がっ!」

その場に縫い付けられたように機体が動かない!

それは俺だけじゃなく、慎二も同様の状態だ。

まさかこの場の重力がいきなり高まったのか？ そんなバカな!

「孝………之………俺………達は………勘違い………してた。G弾は………核のよう………な………爆発じゃない。重力を………」

慎二同様、俺もG弾の正体を知った。

それは局地的に超重力を起こす重力爆弾だったのだ。

その効果範囲内にいる物全ては、自重を数百倍に高められ圧壊してしまう。

(なるほど。頑強なハイヴ深奥にいるBETAも排除できるわけだ。だったら、このハイヴ内にいる者はもう一人も生き残れない………!)

水月、遙、ゴメン。それに慎二、つき合わせて悪かった。山城さんも——

——グシヤアツ

20話 超重力の箱の中で

門番みたいな強力そうなBETA達及びやたら硬い扉を、ロングビームサーベルで叩き切る。

高密度なG元素の気配のあるその部屋に入ると、そこには何やら不思議な結晶が数多くそこら中にあった。

「ここがアトリエか、カズサ」

「まさかこんなに早くハイヴ下層までこれるとはな」

「カズサ様、さすがです！」

「すごいな。これが各国が取り合うG元素か。こりゃ、とんでもないひと財産かもな」

ゼータに続き、ついてきた大東亜連合のみんなも入ってきた。

たしか当初は60機あまりいたはずだが、その数は十数機しかいなかった。まさかこれだけしかついてこられなかったとは。

「これがG元素。各国が取りあうBETAの黄金。そしてここがアトリエですね」

本当に何が役に立つかわからない。

作戦の前、つい欲にかられて作ってしまったG元素強奪計画のお陰で最速でアトリエに到着することができた。ここのハイヴはまだ小規模のフェイズ2だったことも幸いした。

「G元素強力吸収モード！」

ハロはそこに着くなり、ZガンダムにそこにあるG元素を取り込ませる。

ものすごい勢いで、G元素の結晶はゼータに吸い取られていく。

「それじゃ上総、これからやることを話す。上総はバイオセンサーに思念を送ってアトリエ全体にサイコフィールドを張るんだ」

「サイコフィールド？ それって二人のニュータイプ同士がサイコフレームを共振させてできるものではなくって？」

アムロがレガンダムでシャアと共振してアクシズの落下をくいじめた奴だよな？

いくら何でもゼータであれば無理なんじゃ……………

「いま核融合炉全開で、G元素をサイココミュの基礎機能をもつチップ。即ちサイコフレームに変えて、バイオセンサーに組み入れている。上総が思念を送ったなら、それを体内で反響させて共振をおこす。早く！」

とにかく言われるままにバイオセンサーにニュータイプ思念を送る。すると本当に不可視のフィールドが形成された。そしてそれは、アトリエ全体を覆うまでに広がっていく。

すごい！ バイオセンサーが今までと比較にならないくらい強力になっていく！ これならアトリエ内の機体を全て守ることが可能だ！

「すごいですわ。これならどんな衝撃がきても大丈夫ですわね」

「いや、重力だ。ボクらが身を守らなきゃならないのは超重力からなんだ」

「はい？ 重力ですか？」

「ああ、そうだ。G弾とは重力爆弾。効果範囲の重力を数十倍に高めて圧壊させるという恐るべきものなんだよ！ その効果から免れるにはサイコフィールドしかない」

「待って！ それじゃ、いくらハイヴの奥にいてもその効果から逃げられないじゃありませんか。つまり、ここに来れない者は……………っ！」

「あきらめるしかない。それよりBETAが入ってきたら排除を頼む。ボクは補正できないから、がんばって！」

そう言ってハ口は作業に集中するために黙った。オレは超重力にそなえてサイコフィールドを発生させながら祈った。

(まだブレックスも鳴海も平も来ていない。いや、大東亜連合の大半が来ていない。早く……………早く来てくれ！)

「上総、来た！」

「間に合いましたか！」

「いや、BETAだ。さっき言ったようにボクは何もできないから頼む！」

「キーンツ!! お前らじゃありませんわ!!!」

けつこうな大殺戮をしてここまで来たのに、またワラワラとお馴染みの虫どもがアトリエ入り口に群がってきた。こいつらが入り口をふさいでいたんじゃブレックス達が入れない。

「害虫立ち入り禁止! これで潰れておしまいなさい!」

入り口に群がり侵入しようとするBETA。それを排除すべくビームライフルを向けた瞬間。

——グシャツ!

「あら?」

何もしていないのに、そいつらは勝手にその場で潰れた。と同時に、このアトリエ内の洞が激しく揺れはじめた。

…………ズツ…………ズズズズツ………………

「来た! 上総、サイコフィールドに集中だ!」

「ええ! でもハロ。他のみんなはやはり……………」

「G弾について詳しい説明をしなかったから、深々度まで下りて安心しちやっただらうね。残念だけどここに来られない以上、サイコフィールドの恩恵は受けられない」

「………………そう」

共にやってきたブレックス。

撤退すべきなのに、自分の命をさらしてオレ達の撤退を促した鳴海孝之と平慎二。

——ゴメン。

君達を置いて生きてしまうけど。

それでもこのBETA大戦、逃げないで戦うことを誓う。

「カズサ、いったい何が？ この揺れはいったい？」

「G弾が落ちたのか!? このアトリエは崩れないのか!?」

「他のみんなは!? まだ来ていない者が相当数いるのに！」

「カズサ様！ ブレックス様がまだ来ていません。探しにいかないでいいのですか!?!」

ここにたどり着いたみんなが騒ぎはじめた。だが無事のようにだ。

本当にサイコフィールドは、このアトリエ内の機体と搭乗者は守れている。

ともかく、ここにいる者達だけでも安心させて守らないと。

「みなさん落ち着いてください。G弾は投下され、その影響が現れたようです。ですがここは安全です。G弾の効果が終わるまでこのままアトリエ内で待機しててください」

オレはより強くニュータイプ思念を放ち、サイコフィールドを強化する。

振動は間弾なく続くものの、モニターでみる周囲の機体は全機異常なく無事だ。

ゼータはどんどんG元素を取り込んでサイコフィールドもより強力になっていく。

「とりあえず切り抜けられそうですわね。本当にハ口には感謝しかありませんわ」

となると、考えるのはここから出た後のことだ。

オレ達がBETAと戦っているにも関わらず、こんなものを投下したアメリカ。

これによって多くの将兵が死んだ。ハイヴを制圧するためとはいえ、あまりに乱暴な行為だ。

考えてみれば、在日米軍の役割は作戦初期のBETAの誘引。

G元素が欲しいならばハイヴ周辺の制圧を担当してもいいはずなのに、米軍は付近にはいなかった。

そして大東亜連合にはアメリカの強硬派がけむたく思っているブレックスがいる。

まさか、これは仕組まれていたものなのか……………?

——ギツ……ギギイ……………

「ぐわああああ！」

「カ、カズサさま！ 苦しいい！」

「つ……潰れるウ!!」

——え？

悲鳴まじりの通信に我に振り返近を見ると、周囲の戦術機がみな潰れかけていた。

足はひしゃげ、フレームはゆっくり曲がっていき、次々地面に倒れ崩れていく。

「み、みんな!? いったいどうして? さっきまで完璧にサイコフィールドで守っていたのに!」

「……………くっ! 地面に伏して破損を抑える! 上総、もうみんなはあきらめるしかない。サイコフィールドをゼータ周囲限定にして!」

「ハロ!? お前まで!」

ゼータはゆっくり地面に倒れ、うつ伏せに寝転がった。

「いったいこれは!? まさか重力がさらに高まったの!? ……あうっ!」

——ズンツ

「あつ……あぐううう!」

さらに重力は強くに高まった。オレまで潰れそうになるくらいに。ゼータのkokopittoもオレの着ているノーマルスーツも、宇宙世紀の耐G機能が備わっている。にも関わらずここまで影響があるので、もうみんなはとくに圧死しているだろう。

サイコフィールドをゼータの周囲限定にまで狭め、ようやくしゃべれる程度まで余裕が出来た。

オレはさらに強くサイコフィールドを発生させるが、息苦しさは抑えられない!

「は……………ハロ？ どうなってますの？ どうして重力が……………こんなにな……………抑えきれなくなつて……………っ！」

「二発目だ！ 米軍はハイヴ内を確実に潰すために二発目のG弾を投下したんだ。くつ、バイオセンサーの強化もここらが限界だ！」

「なん……………ですつて……………え！」

「ゼータ全防衛システムをコクピット及びメイン機能に集中！ 残りのサイコフレームはコクピットまわりの強化にあてる！」

「……………絶つ対……………負けませんわ！ ここで……………わたくし達が……………死んだなら……………っ！」

ここでだまし討ちにあったみんなの思いを背負うと勝手に決めた！

ブレックスやその他大東亜連合のみんなが頑張ってきたこと。

何もできないかもしれないけど、それでも覚えていることだけはでききる！

それに鳴海や平の代わりに戦うことだってできる！

戦闘力だけは無駄にあるんだから！

「ああああああああ！ わた……………くしは……………生きて……………日本を守る……………っ！」

「上総あ。このまま高重力が続くと、君が呼吸ができない……………っ！」

重力の高まる穴蔵のなかの一人と一機。

その命その能力すべてを駆使し、アメリカの陰謀に抗い続けた。

21話 第五計画推進派の昏い影

「くうくうくう……っー!」

シートに押しつけられ、潰されるような感覚はいつまでも続くかに思えた。

だが、失神しかけたその時――

「……………え?」

いきなり息が楽になった。

潰れそうなくらい重かった自分の体重も、今は少しだるいくらいにまで回復した。

「ハロ? G弾の超重力は収まったの?」

「……………いや。相変わらずゼータの周囲は致死の超重力だ。けど、君のいるコクピットを中心に何らかのパワーが引き寄せられている。それがボクらを守っているんだ」

ゼータのまわりにはキラキラ光る発光体がまわりついている。

オレは何故かそれが超重力から自分とゼータを守っていると確信できた。

「これは……………まさか死んだ人の思念!? サイコフレームがここで死んだ人達の意識を集めたの!? そうでした。サイコフレームは機体の搭乗者以外の意思も力に変えるんでしたね」

その発光体には意思がある。

自分にはその思念が聞こえる。

それはこの横浜で死んだ人達の思い。

「……………そうですか。わたくしが言った『生きて日本を守る』という言葉で、わたくしを助けようと……………」

それは無数の日本の衛士兵士の英霊の声。

もはや日本を守るために戦えなくなった死者の無念。

それがオレの……………いや、本当の上総の切なる言葉に応え、ゼータと自分を守ってくれているのだ。

「鳴海くん、平くん……………!」

発光体のなかの二つの仲の良い蛍。それはわざわざ自分らに危機を知らせにきてくれた国連軍士官の二人だった。何故かそれがわかった。

「ごめんなさい。わたくしにはみんなを助ける力なんてありませんでした」

二つは「気にするな」と言っているように、自分らをけなげにささえてくれる。

「ブレックス………！ あなたもいたの？」

発光体の一つに彼の意思を感じられた。彼は日本のことは関係ないだろうに。

意識を集中すると彼の意思が聞こえた。それなりにつき合いが長かったせいか。

『ああ、僕はここにいます。ありがとう。君がいてくれたから僕はここまでやれた。君には生きていてほしいから力を貸す』

思えばいい奴だった。オレはやたらこき使われたが、政治家としての自分を力を本当に弱い者のために使おうとしていた。

「ごめんなさい。あなたを守るという約束は守れませんでした」

『気にしないでくれ。G弾なんてものが相手じゃ、さすがの君でも相手が悪い。ただ、一つだけ君に頼みたい』

「ええ、何でもするわ。遠慮せずに言ってください」

家族の誰かに伝言でも頼むんだろうと思っていた。だが、ブレックスは死んでもブレックスだった。

『アメリカを助けてくれ。強硬派を止めてくれ。あれは国益のために人類として大きな罪を犯そうとしている。政府として国益のために行動するのは正しい。でもそれが、人の命を奪うものだったり地球を破壊するものだったら、国家の理性として止まらなければならぬ。今のアメリカはそれができなくなっているんだ』

遠慮なさすぎだ、このブラック政治家！

なに壮大な使命なんてオレに託しちゃってんの!?

「いくら何でも大きすぎますわ。わたくしにアメリカの国家機関をどうこうする力などあると思いませんか？」

『僕とエウーゴを立ち上げた時といっしょよ。だれか強硬派に対抗できる者を見つけて、君の力を貸すんだ。すまないが君にしか頼めない』

ブレックスの言うことを考えてみる。

『アメリカのため』というのはひつかかる。そのために戦うというのは、どうにも出来そうもない。

しかしこれだけのことをして、ブレックスはじめ多くのオレの近しい人間を殺した強硬派とやらには、報復を考えずにはいられない。

ならばやるか。この一件のけじめとして。

「わかりましたわ。G弾投下などをした強硬派を叩き潰せばよろしいのね？ やりましょう」

「強硬派の中心人物は「ジャミトフ・ハイマン」という男だ。どうも危険なテログループが彼に力を貸しているらしい。気をつけるんだよ」

思いつきりずっこけた。

いるのか【ジャミトフ・ハイマン】！

まさかそのテログループの名は「ティターンズ」とかいうんじゃないだろうな！

◆ ◆ ♣ ♣ ♠ ◆ ♣ ♣ ♠

米軍Side

東京湾洋上

米軍極東方面第七艦隊 旗艦空母ロバート・F・ケネディ

その作戦室に初老の軍高官と壮年の参謀のただ二人だけがあった。

米軍の国連軍派遣部隊総司令官、ジャミトフ・ハイマン中将与作戦参謀のバスク・オム大佐である。

彼らこそがアメリカにおける主流派となった強硬派ことオルタネイティブ5計画推進派の中心的人物である。G弾は強力な反面、重力

異常を起こして地球環境を大きく損なうものではあるが、これを大量に使い全てのハイヴを制圧しようと目論む者達である。

「結局、事前通告もなしの使用となってしまうたな。国際的な非難は免れん」

ジャミトフは疲れたように言った。

「やむを得ないかと。あのままでは日本帝国と女狐の時間稼ぎにつき合わされ、機会を失っていたでしょう。G弾の優秀性を示すこの絶好の機会、逃すわけにはまいりませんでした」

バスクはその大柄な体格を直立不動のまま微塵も動かさず返事を返した。

「だが、巻き込んだ部隊の数は相当なものだ。大東亜連合に所属している国々も今後は我々の敵にまわるだろう」

「フツ。【あの男】がいなければ外縁部にでも配置できましたな」
バスクの皮肉にジャミトフは顔を歪ませた。

将来的に障害になるであろう彼をたしかに嵌めたのだ。

「……………ブレックス・フォーラか。不幸な事故だ。彼は良きアメリカ市民であり、理想に邁進した将来有望な政治家であった。せいぜい豪華な葬式で送ってやろう」

「彼は理想を夢見すぎました。この人類が存亡の危機にたつ世界。数十万の難民を切り捨てようとBETAを倒す牙を研がねばなりません。そのためにも我々は冷徹に計画を進める悪魔仕事を恐れてはならないのです」

たしかに罪悪感など今さらだな。冷酷すぎるこの男でも見習うか。ジャミトフはそう思い直し、しつかり声を張って言う。

「そうだ。我々の放ったG弾投下で死んだ者のためにも、私はせいぜい傲慢で冷酷な悪魔になるとしよう。たしかにG弾にはその価値がある。観測班の報告では効果範囲にいるBETAだけではなく、その周辺にいるBETAまでも機能を停止したそうだ。この件を発表すれば誰もがG弾の有効性を認めざるをえんだらう。私は確信した。G弾こそBETA大戦を終わらせる唯一絶対のものだ」と

「はっ。私もです。その邪魔をする者こそ人類の敵。ハイヴ制圧の

成果を示した以上、最速でG弾によるBETA大戦終結を早めるべきです。一日早まればその分10万人の命を救うことになるのですから。邪魔する者はいかなる手段をもってしても排除すべきです」

『『いかなる手段をもってしても排除』か。まるで【連中】の言葉だな。思えば【連中】に動かされ、ここまで最短できてしまったような気がする。今さらだが、強引すぎるやり方で敵も多く作ってしまったがな』

ジャミトフは、赤毛の危険な男が率いる手を組んだテログループに思いをはせる。

数々のテロと謀略を成功させ、いまだ脅威論の高いG弾使用論を主流へと押し上げたあの実力。手綱は握れているとはいえ、奴らは、特に首領の【指導者】と呼ばれるあの男は危険な予感がする。

「それで？ 【連中】はどうしている」

「はっ。次のターゲットに取りかかるそうです。『【女狐】と【ユーコン基地】の両方を葬ってみせる』とのことですよ」

「フ……………フハハハ！ 【第四計画】と【プロミネンス計画】の両方をか。それができたなら確かに我々の提唱する【オルタネイティブ5】を邪魔するものはなくなるな。実に大した奴らよ」

「閣下。ですが【連中】はテロリストです。それも全世界的に悪名高い。もし我々との関係が知られば、我々は終わりですよ」

「わかっておる。使える奴らではあるが、女狐とユーコンの始末がついたなら【連中】にもご退場願うとしよう。できるな？ バスクよ」

「おまかせください。【連中】の動きは把握できております。どこにしようと“専門家”を送り込み、24時間以内に終わらせてみせます」

「よし。では次は日本帝国についてだ。来たるべき日のためにも、我々が完全に日本帝国を掌握しておかねばならん。バスクよ。帝国陸軍に蒔いた“種”は発芽できるか？」

「はい。帝国情報省に何かつかまされたのかと思いましたが、邪魔されるような動きはありません。すぐに仕掛けますか？」

「いや。明星作戦で帝国軍にも少なくない損害を出してしまった。

いま動かしても、日本の中枢まで揺るがず動きは期待できそうもない。少なくとも一、二年は再建を待たねばならん」

「では、その時まで仕込みを完璧にしておきましょう。それまでに【連中】が本当に女狐を始末出来ていれば良いですな」

——日本帝国に若手将校によるクーデターが起こるのはこの一年後のことである。

22話 これからどうしよう？

「……………あ？」

気がつくのと、そこは変わらざるゼータのシートの上だった。どうやらいつの間にか眠っていたらしい。

せっかく話せたのに、ブレックスとはサヨナラも言えずお別れになってしまった。

全天周囲モニターで見える外の景色は、ハイヴ内の穴蔵ではなくそこを出た廃墟のただ中。周囲の建築物は、G弾のためか一つ残らず潰れて倒壊している。

どうやら無事に脱出できたらしい。周囲には人一人いない廃墟の中をゼータは疾走している。

「上総、起きたね。すでに超重力圏からは脱出している。とりあえず品川を目指しているから、そこで休もう」

「生きて出られましたの。あの超重力の中から生還できたなんて。本当にサイコフレイムはすごいですわ。死んだ人と会話までできましたし」

「ああ、やっぱりできちゃったんだ。ボクにはわからなかったけど。でも、ここまでサイコフレイムで強化されたバイオセンサーは危険かもしれない。リミッターをかけてフルには使えないようにしておくよ」

クインマンサに乗ったプルツームみたいになるか。クインマンサの強力すぎるサイコミュは、プルツームが戦場で殺した人達の声を集めて、彼女は精神をやられた。死人の声をきくのは危うい行為かもしれない。

「そういえば、どうしてハロはG弾が重力兵器だと知ってましたの？ あれは『対BETAに画期的な兵器』なんて宣伝文句しか出ていなかったはずですわ」

「神様からもらった知識の中にあっただ。実はBETAの他に、この“G弾”からも地球を守るよう神様から言われている」

「守る？ あれって地球を破壊するようなものですか？ 人間が

作ったものなの？」

「うん。アメリカの強硬派はあれでBETAのハイヴを全て潰そうとしているみたい。だけど、そうすると地球の重力が大きく狂ってしまい、結果、地球は人間の住めない星になる可能性が高いらしいよ」
ブレックスの言う通りか。あいつも自国の強硬派がヤバイことは肌で感じていたみたいだ。

あのG弾はたしかに横浜ハイヴのBETAを全滅させた。つまりもう完成してしまっていて、政治的な課題さえクリアしてしまえばいつでも使えるということだ。

となると、もうオレ達も急いで行動しなけりゃならない。

「ねえ。ウェイブライダーで一氣にいきませんか？ もうわたくしも操縦はできますわ」

「頭とか腕とかずいぶんひしゃげたんだ。重要度の低い場所は維持するのをやめたからね。だから今は変形できない」

「ええ!? 大丈夫なんですか？ 直らなかつたら、もう戦闘はできないんじゃないやありませんこと？」

「大丈夫。メインシステムが無事ならどれだけの破損も修復できるから。人里にいたら一度亜空間にしまうよ」

◇ ◇ ◇

建物は残っているものの、住人は避難して誰もいない品川近郊。とりあえず状態の良い家の一つを仮の宿とした。

ゼータは亜空間に格納して修復にはいり、それが終わるまでここに留まる。

家を整え食事もすまして、やっと落ち着いた。

オレはくつろぎながら、ぼんやりとあの写真を眺めた。

鳴海・平と二人の女の子達の写真だ。結局、これは鳴海にかえすことができなかった。

「上総、それは？」

「わたくし達の恩人の鳴海くん・平くんの写真ですわ。いつかこれを、この娘達のどちらかにでも返す日はくるのかしら」

写真を裏返してそれを見るのをやめた。

さて、これからのことをまん丸ロボなハロと話し合おう。

「で、上総。これからどうする？ マレーシアのエウーゴに帰る？」

「いいえ。わたくしにはとてもブレックスの代わりは務まらないし

、この日本でやる事が出来ました」

「え？ 何だっけ？」

『『日本を守るために戦う』って言葉です。あれはもう英霊達との約束になってしまいました。あれは嘘にしてはいけない気がするんです」

「確かにそうだね。ボクらがここにいるのも彼らのお陰みたいだし」

「それからブレックスにも頼まれました。『アメリカの強硬派を止めてくれ』と。それがG弾などを落としたりした奴ら。そしてブレックスや鳴海くん平くんその他の仇のようです」

「仇って……まさか復讐?! オペレーションメテオとかソレスタルビーイングとかやつちゃうの!? ハッ！ まさか【星の屑作戦】?! アメリカの衛星軌道艦隊に核をぶっ放すとか!?!」

「ああっ！ なんて魅惑なワード！ でもダメです。こんなBET Aに滅ぼされかけている世界で、Zガンダムでそれをやったら本当に人類は滅びてしまいます」

本当はやりたいたいんだけどね。G弾作っている秘密工場を突き止めて破壊して『任務完了』とか言って。『世界を壊すものは根絶する！ゼータがそれを為す！』なんてキメ台詞も言っちゃって。

「でも、言ったからには何かするんだよね。どうするの？」

「こんなことをするような連中には、そのやり方に反対する対抗組織があるはずですよ。そこに力を貸して強硬派と戦うのです。英霊との約束もあるので、できるなら日本のものがよろしいですわね」

「すごい！ 上総が軍師みたいなことを言っている！」

オレの考えじゃなく、ブレックスから教えてもらったことだけど

ね。

「それで？ その組織とかをどうやって探して接触するの？ 情報の方はゼータのシステムを使えば、まあ、さわりくらいは分かると思うけど、それと話をつける方法は？」

「ええ。何一つ頼れるツテなんてありませんわね。ですから、今こそあれに電話をかけてみようと思います。確か“鎧依さん”でしたわね。『日本で助けがほしいときは力になると』おっしやっています」

「な、なんだってー!? あの怪しい電話番号をとうとうかけちゃったの!?!」

「ハロ。ゼータを急いで修復なさい。一応の用心として電話番号はたどれないよう、ゼータのシステムを使つてかけます。あと、万一の場合の準備も」

オレはもう一度写真を表に返し、鳴海と平の絵に願をかけた。

「鳴海くん、平くん。わたくし達を、あなた達のいた国連軍へと導いてください。あの日語った国の未来に、歩んで進めるように」

写真の中の二人の笑顔がオレに向けられたように感じた。

23話 香月夕呼の憂鬱

国連軍品川仮設基地

ここにオルタネイティブ4計画の提案者にして最高責任者。後の横浜基地副司令となる香月夕呼はいた。

現在、彼女はここの一室を執務室にし、横浜ハイヴ調査の指揮をとりつつ明星作戦の後始末に奔走している。

◆◆♣♣♥♥◆◆♣♣

香月夕呼Side

「そう。A-01の再編は順調なようね。感謝してるわ、伊隅」

『ありがとうございますごいます博士。ですが、これが残った自分の役目だと心得ております。亡くなった先輩方に侮られぬよう、精強な部隊を作ることをお約束します』

「あんたが生き残ってくれて本当良かったわ。これからはあんたのヴァルキリーズがA-01そのもの。主任務にもついてもらうわよ。そのつもりで部隊を作りなさい」

『望むところです。ところで新任に【速瀬水月】というなかなかの逸材がおりました。早いかもしれませんが、彼女を副隊長に任命して指揮官として早めに育てたいのですが』

「その辺はあんたにまかせるわ。まりにも相談して上手くやんなさい。それじゃね」

そう締めくくって、あたしはA-01連隊の新指揮官・伊隅みちるとの電話を終えた。

そして待たせてある、部屋の中にも関わらずパナマ帽を目深に被った、やたら怪しい腐れ縁の男に話しかけた。

「待たせたわね鎧依。明星作戦の後始末は本当にキリがないわ。これもアメリカの本気を見誤ったあたしのミスね。あそこまでなりふり構わずG弾を使うとは思ってもみなかったわ」

「いえいえ。作戦以前よりさらにご多忙になった博士には大きく敬意を払っております。仕事に忙殺される博士の凛々しく美しい顔が

見られるなら、待たされるくらい何でもありませんよ」

「……………前半でセリフを切って会話してくれない？ 後ろはいつも余計だから」

明星作戦より数日後。アメリカがやらかしてくれたあの新型爆弾のお陰で、こっちはおおわらわだ。さつき伊隅と話したA―01の再編もその一つ。

なにしろ、あたしの直属部隊のA―01連隊がヴァルキリーズを残して全滅してしまったのだ。

ハイヴに突入した攻略部隊は仕方ないにしても、情報観測を任務にしていたデリング、連絡を担当していたヴァルキリーズの半数までもが壊滅した。

それらはG弾の効果予想範囲より外側にいたのだが、二発目のG弾が投下されたことにより効果範囲が拡大。観測を頼んだことが裏目に出てしまった。

「これも奴らの計画のウチかしらね。あたしを直接狙うんじゃない、手足になるA―01連隊を潰すてやつ。たしかに効果的だわ。使える手駒が伊隅だけじゃ相当動きが鈍くなるし」

「それはどうか分かりかねますが、このG弾投下に様々な効果を狙っていたのは確実でしょう。国際的な信用を落としても、相当な果実を手に入れています」

「やっぱりこれって最初からの計画？ 今さらこんなことを聞くのもマヌケだけど」

「ええ。やはりアメリカ……………第五計画推進派は最初からG弾を使うつもりだったようです。大東亜連合を、外様にも関わらずハイヴ近郊に配置したのもアメリカの後押しでしたし」

「ああ、目的は僻地東南アジアで頭角をあらわしてきたあの男」

「ブレックス・フォーラ。国土を失った諸国や難民に同情的な考えをもつ男でした。彼が東方アジアで築いた人脈と未知の戦力『Zガンダム』を擁して祖国アメリカに戻れば、確実に奴らは停滞したでしょう」

「そっちの話はもうすんでしまったこと。彼のことは悼むけど、と

りあえずいいわ。けど、問題はG元素よ！ 第五の奴ら、なんて手が早い！」

ハイヴ内のG元素の集積地アトリエと思われる場所には、まったくG元素はなかったのだ。さらに、何故かハイヴ内に大東亜連合の戦術機の残骸が数多く見つかったが、その中にZガンダムと呼ばれる未知の戦術機のもは発見されなかった。

「本当にまいったわ。まさかG元素が集積地アトリエにひとかけらもないだなんて。Zガンダムとやらは仕方ないにしても、こっちはなければ計画そのものが始まらない！」

「その件は少し気になりますな。本当にアメリカが“Z”の機体も、G元素も全て持って行ってしまったのでしょうか？ あまりに手際がよすぎる気がします」

「何なの？ あの状況でウチらを出し抜けるヤツなんて、アメリカしかないでしょう！ 他なんてあるって言うの？！」

「それです。博士も重力異常の収まった後に、すぐ部隊を出してG元素の回収をはかりました。超重力の中での作業など不可能なことを考えると、スピードにそこまでの差があるはずがありません」

「……………そうね。じゃ、G元素と“Z”の機体をとっていったのは誰？ G弾の超重力の中で動いたヤツってことになるけど」

たしかにあたしも、誰が“Z”の残骸とアトリエからのG元素を持ち去ったにしても、動きが早すぎるとは思っていた。鎧依は何かつかんでいるのかしら？

「幽霊でしょうか？ それなら重力なんて関係ありません」

「プツ」とあたしは思わず吹き出した。

「オカルトに逃げるとはね。やっぱりアンタも何もわからないんじゃない。とにかく次の手をうつわ。その件でアンタを呼んだの」

いつか、この謎が解き明かされる日がくるのかしらね。

「つまらないジョークを言ってしまったな。我ながら落第の出来でした。では、雑談はこのくらいにして、本日の御用向きをお伺いいたしますかな。博士の頼みとあらば、何なりと叶えてさしあげたいとは思っておりますが」

「アンタが最近仲良くしている開発の中佐。アレと渡りをとつてもらいたいのよ」

「ふむ。巖谷榮二中佐ですか。彼をどのように使って第五に対抗なさるおつもりで？」

「彼が進めているプロミネンスとの戦術機共同改修計画。それにあたしもかませてもらって、プロミネンスと手を組むの。第四、帝国、プロミネンスの三者連携で第五に対抗するわ」

「それは……………大胆なことを考えますなあ。外来宇宙の技術研究が目的のオルタネイティブ計画。プロミネンス計画はそれに対抗するために生まれた、地球産の技術のみでのBETA打倒を目指す計画。それと手を組めるとお思いで？」

「そんなこと言ってられないのよ！ こつちが何も実績を出してないのに、向こうは問題アリとはいえ大きな成果を出してしまった。何も手をうたなければ、明日にでも主導を向こうに変えられてしまうわ！」

「しかし第四計画に関してのことは何も出せないのでしょうか？ どうのように相手の関心を向けさせると？」

「こつちも、いざという時のために技術のいくつかはあたためてあるわ。あとは話術でどうか。Zガンダムとやらの残骸でも見つけてりや、一発だったんだけどね」

そう言ったとき、鎧依にしてはめずらしく神妙な顔をした。

「アレとその搭乗者の彼女のことは私も残念でした。まあ、こういったことはこの稼業にはよくあることで。彼女を悼みつつ、私は仕事にはげみますか。巖谷中佐の件、まかされました」

鎧依はパナマ帽を顔が隠れるほど深く下げると、部屋を出るべくあたしに背を向けた。

R I R I R I R I ……………

その時、あたしの机の上の電話が鳴った。

やれやれ。次は何の面倒ごとかしら。本当に明星作戦の後始末はキリがない。

しかし受話器をとってその内容を聞くと、あたしは怒りで思わず声を荒げた。

「ハア？　なんでアイツのつなぎをここでやるのよ！　止まりなきい鎧依！　アンタに電話よ！」

あたしは受話器を投げつけるように鎧依に渡すと、ヤツはそれを丁寧に受け取った。

「これはこれは。どうも申し訳ありませんな。はい……………やはり『彼女』ですか。とりあえずプランAで問題ないでしょう。ではそのように」

鎧依は一言二言会話をすると、電話を切った。

この辺りは重力異常や戦場の爪痕の関係でいまだ携帯が使えない。連絡は有線でなければままならないため、ここにかけたのだろう。

「なんなのよ、こんな所にまでつないでくるなんて。そんなに重要な用件なの？」

「ええ。彼女から連絡があったなら、どこであれ間をおかず私に連絡するよう言っておりましてね。もつとも任務によつてはそこまで出来ない場合もありますが。秘匿性の低い今でよかった」

「そこまでの相手？　いったい誰なの？」

「さっき言った幽霊ですよ。一年前まいた種がうまく芽吹いてくれました。さっきのつまらないジョークは、どうやら予感だったようです」

「……………まさか!？」

思わず背中がヒヤリとした。

まさか、百物語みたいにコイツと怪談なんてすると現実になっちゃうの？..

「いやはやG弾爆心地のド真ん中にいて、まさか生き延びるとは！　まさしく幽霊ですな！」

24話 原子核の少年

鎧依さんと連絡をとった結果、直接あつて話すこととなった。

会う前にハコにはある程度の下調べをしてもらった。

だいたい人類の対BETA戦略の大きな所は国連主導でやっており、以下の通り。

一つ目はオルタネイティブ計画。BETAの調査からもたらされた宇宙由来の技術研究をしてBETAと戦うというもの。これが主流らしい。

二つ目がプロミネンス計画。地球のみの技術、主に戦術機の能力を高めてBETAのハイヴを攻略しようというもの。アラスカのユーコン基地に世界各地の戦術機技術が集められて行われており、実績も大きい。いまだハイヴ攻略は望めないために主流にはなれない。

さて。主流のオルタネイティブ計画だが、それにも戦略により派閥がわかれている。

一つがアメリカ主導の「オルタネイティブ5」。G弾という新型爆弾を使用したハイヴ攻略作戦で、これがオレ達の仇になる派閥だ。

その対抗が日本主導の「オルタネイティブ4」。これが現在オルタ5をおさえての国連のメインの計画らしい。1から3までは廃案になっているので、これがオレ達が乗っかろうと思っている本命だ。主導が日本というのも理想的だし。

「鳴海くん平くんの話から、国連軍日本支部が何やら大きな対BETA作戦を計画しているということは予想していました。なんとなくここが本命になるような気がしていましたが、案の定でしたわね」

「でも結局「オルタネイティブ4」というのがどんな計画かはわからなかったよ。プロミネンスの方はけっこう一般に近いレベルまで知られていたし、オルタ5にいたっては横浜ハイヴを吹き飛ばしたりなんかして、もう隠す気なんてないみたいだし。でも、オルタ4の方はとてつもなく嚴重に秘密にされているんだ」

ハコは申し訳なさそうに言った。

オルタ5は別としても、「オルタネイティブ計画」というのはどういう研究をしてどういう実績があるのか、本当に何もわからない。

「まあ仕方ありません。問題は鎧依さんが「オルタネイティブ4」を計画している国連軍日本支部につなぎをとれるかどうかですわね。さて、少し早いですが参りしましょうか。余裕をもって行きましょう」

ゼータの修復は完全に終わって万全だ。
オレはゼータを発進させ、待ち合わせ場所へと向かった。

◇ ◇ ◇

鎧依さんとの待ち合わせ場所は爆心地横浜ハイヴの近く。旧終町あたりという、奇しくも鳴海と平の故郷だ。

横浜ハイヴの調査隊もその町までは展開していないので、そこは完全な無人だ。

鎧依さんがZガンダムを見たいというので、人気の無くなったその場所で待ち合わせということになったのだ。

目的地に進むにつれ、だんだんと建物の倒壊度合いがひどくなっていく。

旧終町に着くと、そこは住宅街だったらしく一般の家だったものが多い。

だが、その建築物はどれもこれもほぼペツチャンコだ。元は良い町だったろうに、今は一面の廃墟が果てしなく続く悲しい景色だ。

少しだけ二人の気持ちが変わったような感傷を感じる。

「ハロ。終町へ着きました。待ち合わせの正確なポイントは？」

「ここより南東へ少しばかり……あれ？　上総、右手200メートルばかり先の家を見てみて。変だよ」

「変？　……ああ、あれですか。たしかに妙ですわね」

全天周囲モニターに映る建物はどれもこれも潰れているのに、その家だけは原型をたもっていたのだ。

その隣には壊れて放棄された戦術機があり、その家の周囲だけがG弾が落ちる前の戦闘時の光景そのままだった。

気になったので、ゼータをその家の近くにまで進めてみた。

「おとなりの戦術機の方も原型はたもっていますわね。これは調査隊のものではなく戦闘時の機体。ということは、ここらは何らかの事情で超重力から免れたということですか?」

「軽くスキャンしてみたけど建物はしつかりしている。理由はわからないけど、本当にここだけは超重力の影響はなかったみたいだね」
『不思議なこともあるもんだ』とその家を見ているうちに、妙にその中身の方も気になった。

「ハロ。鎧依さんとの時間はまだよろしいですわね?」

「え? まあ早く出てきたから余裕はあるけど、どうして?」

「あの家の中を見てみましょう。何もないでしょうが、探検ごころが疼きました」

「ええ? 仕方ないなあ。ちよつとだけだよ」

機体を下りて生身でその家を見上げてみる。所々くずれている部分はあるものの、やはり超重力などなかったかのようにしつかりとした普通の家だった。

扉の前に立ち、少しばかりときめいてドアノブに手をかける。

——そのとき、異変は起きた。

「待って上総! 空間が妙だ!? そうか、ここは特異点。無事だったのはそのためか!」

一瞬、空がひどく歪んだように見えた。

と思ったら、信じられないことがおこった。

その家の背後。オレ達の目の前の何もなかった場所に、いきなり戦術機が現れたのだ!

いや、戦術機じゃない。

あの特徴的な兜のようなフェイス。ガンダムだ!

「え、ええええええ!!? あのガンダムは!!!」

フェイスカバー部にある3本の「へ」の字スリット。

メジャーな赤青白のトリコロールカラーでなく、白黒のシンプルな

デザイン。

背中に背負ったマントのようなフィンファンネル版。

あれこそもつとも有名なガンダムのひとつ、『レガンダム』だ!!!

「レガンダム!? どうしてこれが………ハッ! まさかわたくし達と同じ!?!」

一瞬、理由などを考えたものの、そこは生粋のガノタ。

たちまちアニメ、プラモ、フィギュアで幾度もみたその造形、目の前にある夢の具現化。

リアル『レガンダム』に目も心も奪われ、そのそびえ立つ勇姿にくぎ付けになってしまった。

しばし呆然とそれを見上げて固まっていたが。

——ガチャリ

突然にオレの目の前の扉が開いた。

こんな廃墟の中にある家に人がいるだと!?

「きゃあー!」

ノブを持ったまま固まっていたオレは、その扉に突き飛ばされてしまった。

——「人!? あぶない!」

家の中から出てきたその男は、倒れそうになるオレを反射的に掴んで支えた。

すごい反射神経と力だ。

しかし支えられているのが腰だったため、顔が近くなるほど急接近。

彼の強いまなざしがモロ目に入る。

そいつは思ったより若く、山城上総と同じくらいの年頃の少年だった。

年に似合わないがっしりとした戦士の肉体をもち、強い目をしている。

だが恰好は白い学生服。まさかこの家に住んでいるツワモノなのか?

ヤバイな。なんかコイツ、妙に女をひきつける何かがある。

中身が男のオレじやなかったら愛が生まれちゃうね♡

「あ、ありがとうございます。……あの、はなしていただけます?」
そう言っただけでオレは顔を背けたが、その視線の先にリアルガンダムが!

「ああ、そうだな。悪かった……って、おい君!」

相手の手ははなれない内に、つい、ガンダムを間近で見ようと駆けだしたのが悪かった。

オレ達もつれ合っただけで「ズザアッ!」と二人仲良く地面に倒れ込んでしまった。

「痛たた、ごめんなさい。ガノタの呪われた本能が……って、えええ!?!」

なんと、男の手がしつかりオレの敏感なふくらみをつかんでいた。胸の部分に! ヤバイ! なんか、ここって敏感すぎる!

「あ、あの、そこはやめて……ひやうっ!」

なんか揉んできた! ヤバイ! ちよつと気持ちいい!

「え? 柔らかい……って、えええ!?! ゴ、ゴメン!」

「は、はなしなさいっ……きやあつ!」

急いで立ち上がろうとしたオレは、またしてもすべって彼に被さるように倒れた。

「いったい、いつになったらこのループは終わる!?!」

気がついてみると、いったいどういう偶然か。

オレと彼は抱き合い倒れながらキスをしていた。

深く深く映画のようなキスをしている。

そんなロマンスが生まれたかのような状態だった。

——ああ、いけないな。君の可愛い唇を奪ってしまったよ。本当にどんな偶然だろうね?

「いかん! 妙な幻聴まで!?!」

「バカな! いったいどんな力学が作用しているというのだ!?!」

まるでこの男に吸い寄せられるように、次々と恋愛^{ラブ}ハプニングが起きてしまう！

原子核に吸い寄せられる電子のように!!
いったい何者なんだ、この男は!!?

25話 白銀武は途方にくれる

白銀転移前 神モドキの不思議領域

13話で語られなかった神モドキとの会話

◆◇♣♥◆♣♥

白銀武Side

俺は不思議空間にそびえ立つ、白と黒のミッドナイトカラーの機体を見上げて聞いた。

「レガンダムか。宇宙用の機体だと思ったが、大気圏内でも使えるんだらうな？」

姿の見えない神様モドキのじいさんとやはらは、不思議空間に声だけを響かせて答えた。

「無論だ。地上でも使えるよう手を入れてある。ファンネルも短時間だが、とりあえず使えるようにはした。もつとも貴様に使えるかは疑問だな」

「俺がニュータイプじゃないからか？」

「そうだ。私の与える奇跡は一人にひとつ。これは違えることのできない絶対のきまり。故に貴様に機体を授ける以上、貴様をニュータイプにはできない」

「だったら何故これを選んだ？ これには『フルサイコフレーム』による強力なサイココミュが搭載されている。つまりニュータイプが乗ってこそ真価を発揮できる機体だ。さつき、アンタが選んだ最高の機体だと言ったが、他にも強力な機体はいくらでもあるだろう。それこそオールドタイプの俺が乗っても性能を遺憾なく発揮できるものが！ ドーベンウルフとか」

「これはな。かつて奇跡をおこした機体」

「なに？」

それにしても静かでおごそかな声だな。

このじいさん、自分自身が気がついてないだけで本物の神様になっ

ているんじゃないか？

「この機体のサイコフレームが搭乗者を依り代とし、地球に暮らす無数の人々の祈りを、また一人のニュータイプとの共振で増幅・具現化した。その結果、巨大なサイコフィールドを生み出し、ミノフスキークラフト現象により巨大隕石を押し返した。かの現象は「アクシズ・シヨック」と呼ばれている」

——まさか!?

「かの大いなる奇跡をおこし、また無数の人々の祈りを取り込んだこの「レガンダム」。我はこれこそを最高と見た。白銀武。貴様が正しき心で乗るなら、スペック以上の働きでこの機体は応えてくれるだろう」

「待て。これはその同型機とかじゃなく、そのものだったのか？

あのアムロ・レイ大尉が第二次ジオン抗争で使った？」

「さよう。武装は別に作られたものを取り付けたが、本体は我が回収し、対BETA戦用に手を入れた「そのもの」だ。感じぬか？ かの戦いの記憶を。サイコフレームがとりこんだ無数の人々の祈りとその願いを」

……なるほど。初めてコイツを見たとき、まるで生きているかのような禍々しきを感じた。

それはこの機体に秘められた無数の祈りとやらのせいかな。

扱えるのか？ ニュータイプでもない俺に。

「さつき言ったように、我は貴様をニュータイプにはできん。だが機体には貴様の【声】と【想い】を届きやすいようにしておいた。もし、このレガンダムが貴様の想いに応えたなら、あるいは貴様をニュータイプの高みへと引き上げてくれるやもしれん」

「良いことを言っているようだが、不確定極まりないな。それがアంతアのやり方かな？」

「我は駒を配置するだけ。駒に意思がある以上、その結果はどう転がるかは誰にもわからん。故に強き意志ある貴様は、よりよき結果を引き寄せることこそを使命と心得よ」

俺はあらためてその機体を見上げた。そう思ってみれば、神々しく

見えるから不思議だ。

「ああ、わかったよ。名のある名機に乗るのも悪くはない。それも有名な英雄の愛機なら、なおさらだ。よろしくな。前の相棒にはおよばないが、もう一度この地球のために戦ってくれ」

気高き神馬にも似たその機体は、まだ俺を見てはくれない。

その高殿のような白い顔を虚空へと向けるだけだった――

◇ ◇ ◇

再び現在 白銀の自宅前

バツチーーン！ ベチバチベチバチ！ ベチバチバツチーーン

!!!

俺はここで出会ったその娘こにメチャクチャ頬を張られている。

黙って叩かれてやっているが、どう考えても、この子が妙な暴れ方をしたためのハプニング。

理不尽だと思うのだが仕方がない。

男には女の理不尽さを黙って受け入れなければならない時があるのだ。

しかし痛いな。この子、冥夜みたいに相当に剣術をやっているらしく、ビンタがかなり効く。

おかげでさつき、意識があのお不思議領域へトリップしてしまった。

「ハアハアこのくらいにしておいてやりますですわ。手が痺れてきましたし」

彼女は痛そうに自分の両手を「フーフー」しながら叩くのをやめた。無論、俺の頬は何倍も痛い。頭の芯まで響くビンタでクラクラだ。ほっぺが膨らみすぎてしゃべりにくいし。

「それであなただのことですが。わたくし同様、神様からモビルスーツを授けられ、BETAと戦うためにこの世界に送られてきた転生

者。それで間違いありませんわね？ おたふくさん」

「ああ。そういや、俺より先にアイツに機体をもらって来てるヤツがいるって言ってたな。君の機体はあのZガンダムか。よろしくな。俺の名は【白銀武】だ」

俺は痛む頬をさすりながら答えた。

「わたくしは山城上総。BETAとの戦闘は一通り経験して、この世界のことでもそれなりに知っておりますわ。何でもお聞きになってくださいな。それにしても、あなたのはっぺがリングみたいでおいしそうですわ♡」

なに可愛いことを言っている。人の頬をこんな悲惨なものにしておいて。

しかし彼女の足下には、ガンダムシリーズでお馴染みの丸型ロボのハロがいる。彼女のゼータにはこんなものまでついているのか？

「それには及ばない。俺はBETAとの戦いも、この世界のことも、それなりに知っている。しかし【山城上総】か。知らない名だ」

幾度かループして来ているBETA世界。序盤で知らない人間はいないはずだが、この子とは初対面だ。いや、この子は神モドキにこの世界に送られてきたんだから当然か。

「あたりまえでしょう。初対面なのですから。それとも【ニュータイプは誰のことも見れば理解できる】なんて、勘違いをしておいでかしら？」

「フフン」と高嶺の百合が見下ろすように笑う山城上総。一見とっつきにくそうな美人だが、中身は年相応の普通な女の子なのかもしれない。

「俺はニュータイプじゃない。その能力は授けられないそうだ」

「はい？　なのにサイコミュ搭載の機体に乗る？　フィンファンネルも使えないんじゃないやありませんこと？」

「使わねえよ。そもそもファンネルは、反応速度が異常で攻撃が当たらないニュータイプや強化人間と戦うための武装だ。『攻撃を避ける』なんてしたことのないBETA相手には無用だ。フィンファンネル版は外して機体を軽くしよう」

「そ………そうなんですの………そうなのですね………」
その子を見るからに落ち込んだ顔をした。美人のこの顔はきくな。
なんだか俺が悪いような気さえしてくる。なんか謝りたくなってきた。

『「ニュータイプじゃなくてごめんなさい」』

そのとき、彼女の足下にいる丸型ロボのハロが動いてしゃべった。
「上総、そろそろ時間だ。話は切り上げて待ち合わせ場所に行かないと」

なんだこのハロ？ ずいぶん流ちょうにしゃべるな。まるで意思があるみたいだ。

「あつー！ そうですわ。そろそろ行かなければなりませんわ！ 白銀、せつかくだからあなたも来なさい」

「いや、俺は横浜基地に行かなきゃならないんだ。まずは夕呼先生に会って、俺のことを知ってもらわないと」

「何を言ってますの？ 横浜に基地なんてあるわけないでしょう。横浜はつい先日までBETAの支配領域。ハイヴまであった場所ではありませんか。調査隊の設営テントにでも行きますの？」

「何!?! ちょっと待て！ 今は西暦何年だ!?!」

「ちょうど2000年の10月ですわ。一月前に【明星作戦】という大きな作戦があつて、この横浜はBETAから解放されましたの」

「いつもより一年前!?! 明星作戦の時期もおかしい。あれはたしか1999年だったはず!?!」

まずいな。俺の知識が役にたたないかもしれん。横浜基地がないんじや、これからのプランが始められない。まずは夕呼先生がどこにいるか探す所から始めないといけないのか？

「なにかいろいろ悩んでいますわね。まあ、そちらも行く場所があるのなら無理にとはいいません。ここで別れましょう。さよなら愛しきレガンダム。必ずまた会いましょう」

俺じゃなくレガンダムに挨拶しやがった。なんだその恋人を見送るような目は。

いや、それより俺はこれからどうする?..

今はとりあえず、この世界での居場所のきつかけが欲しい。
となると、先輩のこの子について行くのも手か。

「待ってくれ。やはり俺も君につき合う。誰と待ち合わせているんだ？」

「【鎧依さん】という日本の事情通の方ですわ。以前に日本での世話をしてくれると言っていたので、お言葉にあまえようと思いついて。もつとも、彼のことはよく知らないので信用しすぎるのは危険ですが」

「鎧依？ 課長か！ ついでいる。是非に会いに行こう！」

「え？ ええ、よろしいですわ。………あら？ 車が」

ずいぶん大きくてゴツイつくりの車がこちらに来た。

あれは装甲仕様だ。VIPなんかを乗せるための。

やがて車は俺達の近くでとまり、中から二人の人間が出てきた。

あの二人は——！！！！

「山城上総さん。こちらに例の機体が見えたので、来てしまいましたよ。まさかもう一体あるとは。そちらの彼はお仲間ですか？」

見覚えのあるパナマ帽。そして長身の、のそつとしたスーツ姿の男。

——鎧依課長?! こんなに早く会えるとは！

「まったく、どこで作られているのかしらね。おまけにもう一体、日本国内にもちこまれていたなんて。日本の警戒ってガバガバなのかしら？ G弾の爆心地にいながら、生きてピンピンしていることとい、不思議には事欠かない子ねえ」

続いて現れた国連軍の制服に白衣をまとった、パープルの長い髪の毛の女性。相変わらずのけだるそうな物言いとは裏腹に、だけど顔は二体のガンダムに釘付けた。

——夕呼先生まで！ ついでいる。ここでいきなり出会えるとは！

しかし先生は敵も多くて、けっこう命を狙われたりもする。不用心に出歩いてもいいのか？

おおかたガンダムに興味をひかれて、自ら見に来てしまったという所か。相変わらず自分の知的好奇心の欲求には素直なお方だ。

そんな夕呼先生を見て、山城上総はとまどっている。

「あの女性は誰でしょう？ 鎧依さんはなぜ連れてきたのでしょうか？」

「ああ、君とは初対面だったな。彼女は——」

だが山城上総は目をつむり、「スツ」と俺の口元に手をかざして言葉を遮った。

「いえ、彼女が誰かはわかりましたわ。なるほど、そういうことですの」

「はっ？ なんで？ いまの一瞬で何があったの？」

彼女は「フフツ」と薄く笑い、チョンチョンと自分のおでこを指して言った。

「ニュータイプの直感かはたらきましたわ。あの白衣の女性が誰なのか、なぜここに来ているのか。かなり詳細に脳裏に閃きましたの」「なんだって?! 君はニュータイプなのか？」

「ええ。ですから、人を見れば直感である程度のこととはわかりますわ。光線級の照射すら完璧に見切りますので、信用してよろしくですよ」

なに!! 光線級のレーザーをだと?!

そうか! ニュータイプに乗ったモビルスーツは戦場を一変させるほどの力がある。

俺には与えられなかったあの能力を、この子は持っているのか!

この子のおかげで、いきなり夕呼先生と鎧依課長にも会えたし。

こりゃ、序盤から頼もしい仲間ができたもんだぜ!

「彼女は鎧依さんの助手。そして恋人ですわね。二人はとても深く愛し合っていますわ」

.....この子の言葉。どれだけ信用していいんだ?

26話 二人の面接

白銀に、白衣の女性が国連軍日本支部の「オルタネイティブ4」の最高責任者だという身元を聞いた。そしてオレが見た映像ビジョンの、鎧依さんとの関係はありえないことも。

「ええ!?」では、あの白衣の女性は鎧依さんの恋人ではなかったのですか!? そんなバカな! あんなにハッキリと映像ビジョンが見えたというのに! 嗚呼、わたくしのニュータイプ能力はどうしてしまったのでしょうか?」

「恐ろしいほどあり得ない映像ビジョンが見えたらしいな。本物のニュータイプってのは、ここまでピントがずれることもあるのか?」

「はっはっは。私とうるわしき香月博士が恋人同士とは、実に光栄な勘違いですな。意外と私と博士がならんだなら、そう見えるのでしょうか? 博士」

などと陽気に笑う鎧依さん。

だが、話題にしている香月博士は逆に修羅のような顔。

ヒヤリとした冷気のような怒りの波動を感じる。

「ずいぶん面白い妄想を見たいね、お二人さん。ふざけたこと言っている鎧依とまとめて、その壊れた頭を切開して調べてあげましょうか?」

ヒイヒイ! なんか怖い? この人!

「夕呼先生、許してください。本当にちよつとした勘違いなんです」

「なに? 【先生】って。あたしはあんたの先生なんかじゃないわよ。誰かと勘違いしてんじゃない?」

「ええ、それについてはお話があります。人のいる所では話せないことです。是非ふたりだけの時間を作ってくれることを望みます。たとえば『半導体百億個分の並列処理機能を手のひらサイズにする方法』とか」

香月博士と鎧依さんはいきなり表情を変え、警戒するように白銀を見た。

「いったい、いきなり白銀は何言っているのだ?」

ヤツはこの世界に来たばかりだったのに、この香月博士のことも、鎧依さんのことも知っているような話し方だ。

それに半導体百億個分の並列処理機能を手のひらサイズ？ それでたしか……………

「香月博士。人工知能の研究でもしていらっしゃいます？ そんなものが出来たなら、完全な自立思考をするロボットなんかができますわね。」

たしか、ゼータのメインコンピュータ内にあるハロの人格部分が、そういった構造機能になっていると聞いたことがある。

ほんの好奇心と軽い話題のつもりだった。

だが、すぐにマズイことを言ったと悟った。

今度は三人とも、オレに殺気に近い視線を向けてきたのだから。

そのあとは三人と会話をすることはなく、黙って品川にある国連軍の仮設基地に来るよう言われた。

ゼータに乗ってそこに向かう途中も、さっきの剣呑な雰囲気はどうにもひっかかる。

「ハロ。わたくし、また何かやってしまいました？ 何がどうマズイかわかりませんが、ヤバイということだけはわかります。あの白銀という男もいろいろ知っていて何か秘密があるようですし」

「ボクもそう思う。とにかく行く先では通信の類いは持ち込めないだろうから、何かあったらニュータイプの精神感応で呼んで。基地を壊して助けに行くから」

目標だった国連軍日本支部には最短で行けることになったものの、それは消される危険と隣り合わせのものであった。

◆◇♣♥◆◇♣♥

白銀武Side

俺達は品川にある国連軍の仮設基地へと案内された。どうやらと呼先生はそこを拠点とし、横浜ハイヴ調査の指揮を執っているよう

だ。

しかしマズツた。まさか俺の言葉で、『オルタネイティブ4』の目的の一端が人工知能だということをも山城上総に知られるとは。

普通ありえないだろう。『半導体百億個分の並列処理を手のひらサイズ』とか聞いて『人工知能』を連想するとか！

俺が最初にそれを聞いたときは何がなにやらサツパリだったってのに。

ともかく俺は注意して知っている機密事項をほのめかしながら夕呼先生の興味をひいた結果。

三時間もの入念な身体検査の後、拘束具をつけられた状態ではあるが、基地の奥で念願の夕呼先生と二人だけでの話をする事ができるようになった。

「アンタの望み通り、二人つきりになってやったわ。それで？　いろいろ知っているようだけど、どこでそれを知ったの？」

「ええ。まず俺は【因果導体】という存在になっていて、三種類の別の世界の記憶があります。ざっくりそれを説明すると——」

「なるほど。オルタネイティブ計画の深い機密や、これからハイヴ跡に竣工される横浜基地の建設計画まで知っているなら与太じやなさそうね。でもアンタの話じゃこれから一年後の話らしいけど、一年じゃ横浜基地は完成しないわ」

「ええ。明星作戦も一年遅れています。ですから俺の話も別の平行世界でおこったこととして、参考程度に考えてください。でも役にたつ情報もありますよ。二回目の世界で先生が超えられなかった【大きな壁】をどうにかする鍵とか」

「あら。それを教えてくれるのかしら？　本物なら地位や金なんかの報酬を払ってもいいわ」

「では、山城上総とともに俺達の戦術機【ガンダム】を使って【オル

タネイタイプ4」に協力できる立場を。それと先生のもつ技術と設備を使って作ってもらいたい新型OSがあります」

「了解したわ。それで？ 鍵って何なのかしら？」

「三回目の世界で、俺の元の世界へ理論を取りに行ったときです。万一、新理論の資料を持って帰れなかった場合にそなえて、その夕呼先生からいくつか数式を覚えさせられました。これを応用すれば、半導体百億個分という大きさの壁をこえる答えは見つかるそうです。それは今でも覚えています」

「ふうん？ 面白いわね。じゃあ、それを一つ書いてみなさい」

俺は右手の拘束を外されて紙とマジックペンを渡された。

「武器にならないようマジックとは徹底してますね。ええっとたしか……………はい。まずは一番簡単なものですが」

夕呼先生は俺の書いた数式を見ると難しい顔をした。

「これは……………方冪定理ほうべきで有名なものね。でもどうしてこれか？」

「さあ。まあ考えるのは後にして、話の続きを……………」

「いいえ待って！ たしかに関係なさそうだけど、アタシの勘が告げているわ！ これが鍵になると！」

「え？ いえまあ、そう言われて覚えさせられたものですから。

……………夕呼先生？」

「まさか!? ひよっとしてこれは相乗効果を狙ったもの!? だいたいこの値がこれこれこうだから……………」

ヤバイ。なんか猛烈ないきおいで机で何かを書き始めた。研究に“ひらめき”が生まれると我を忘れてしまうのは、どこの世界の夕呼先生でも変わらない困った悪癖の一つだ。

「きたー！ きたわー！ 百億個を集めた『数字』として、これの効果を関数にすると……………そうか！ 数学的思考から攻めれば良かったのね！ ……………できたわ！ 式ができた！」

「良かったですね先生。30分待ちましたよ。では、面接の続きを……………」

「いいえ！ でも違う！ これだけじゃ足りない。まだ何かあると

考えないと式は成立しない！ 理論は成り立たない！ 白銀、残りの数式も書きなさい！」

「書きませんよ！ 先生、いい加減にしてください！」

「ハッ！ そうだったわね。それじゃ別室を用意させるわ。そこでその数式とか平行世界のこととかをレポートにして書きなさい。オリジナルハイヴのことや『あ号標的』に接触したこと。アンタが経験したその他全てのこと」

「わかりました。霞を借りていいですか？ 霞がいれば、忘れていることも再現できるはずなんで」

ここにいるであろう【社霞】は廃案になったオルタネイティブ3の落とし子で、リーディング能力を持っている。霞がいるなら、俺の記憶を読ませて忘れていることも再現できる。

「社のことも知っているのね。でも、うーん……」

「なにか？」

「いいえ。ただ、山城上総の面接に使おうと思っていたのよ。でも、今はアンタの情報の方が重要ね。社をそちらに向かわせるわ」

俺は拘束をとかれ、隣の部屋の警備兵に案内させる旨を伝えられた。ただ、あと一つだけ重要なことを先に伝えることにした。

「それから先に知っておいてもらいたいことが一つ。先ほど言ったように、前の世界で、先生は00ユニットを完成させ、BETAの情報を手にすることができました。ですが、00ユニットには大きなデメリットもあつたんです」

「デメリット？」

「00ユニットには数日ごとにハイヴの反応炉を使った透析が必要でした。しかしその際、00ユニットが持つ情報もBETA側に送られてしまったんです。そのために、その情報が致命的なことになる前に、俺達はオリジナルハイヴに無理な攻撃をかけなければなりませんでした」

「――！」

「それでもオルタネイティブ4である00ユニットの制作はやらなきやならない。これをあきらめることは、オルタネイティブ5の発動

を意味しますからね」

「早く行きなさい。とにかくアンタの情報を全部精査してから考えるわ」

「はい。この先大変ですが、がんばりましょう」

◆◇♣♥◆◇♣♥

山城上総Side

白銀がオルタネイティブ4の最高責任者の香月博士に別室での会話をもちかけ、それに見事成功して基地の奥に消えてから小一時間。

ようやく博士は戻ってきてオレの前に座った。その間、オレは警備兵二人と会話もなく待たされっぱなしだった。大東亜連合のガバガバ軍隊と違って、最高機密を扱う本物軍隊はしんどいね。

「待たせたわね。白銀からアンタの面倒もみるよう言われたからそうするけど、いちおう意思の確認をするわ。アンタはあのZガンダムって戦術機と共にこの国連軍日本支部に入るってことでいいのよね?」

「ええ。それがわたくしが鎧依さんに頼もうと思っていた望みですので、お願いいたしますが。『白銀に言われたから』って、アイツそんなに大物なんですか?」

「予想以上の爆弾だったわ。でも、いろいろと状況は変えられそうだわね」

なんと! アイツはこの世界に来たばかりなのに何で?

「アンタにはいろいろ不可解なことがあるけど、あえて聞かないわ。ただ、二つだけどうしても聞いておかなきゃならない事があるわ。まず、アンタの本心を聞かせなさい。アメリカに復讐を考えている?」

「……………正直言えば、何度かは考えたことがあります。でも、それはテロリストになる道です。故にブレックスには悪いですが、その道は選べませんでした。彼とは初めからお互いに利用しあう関係だと、割り切ったものでもありましたし」

「つまり、そのZガンダムでホワイトハウスに殴り込んで、大統領を脅したりはしないというわけね?」

「はい。BETAとの戦いがある中でそんなことはできません。ですが、わたくしはもうアメリカを信用いたしません。かの国に利することもないと思います」

「殊勝ね。いいわ。アンタの身柄とZガンダムは国連軍日本支部が預かるわ。アンタが日本でこじらせた問題も解決してあげる。ただし、アタシの指示には必ず従うこと。いいわね?」

「ありがとうございます香月博士。国連日本支部に草鞋わらじを置かせていただきますわ」

「もうひとつ聞きたいわ。明星作戦でG弾投下後のハイヴ内で、G元素集積地のはずのアトリエにひとかけらのG元素も見つからなかったわ。アンタが生きているってことは、アンタが原因?」

「ええ、その通りです。G弾が発生する超重力から身を守るのに使わせていただきましたわ」

「やっぱり! それってもう残ってないの?」

「はい。一つ残らず使わせていただいたお陰で、こうして壮健に生きておりますわ」

「あああうっ」

「香月博士!?!」

いきなり香月博士が頭をかかえてふらついた?

ワタクシまた何かやっちゃいました?

「博士。そんなにG元素が必要なのですか?」

「ええ。……………いえ、いいわ。とにかく、どうにかするわ。あんたは気にしないで」

「いえ。脛に傷持つ身をあずけていただく立場です。手土産としては何ですが、明日G元素をとってきましょう。アトリエにあるものは多少質が落ちるかもしれませんが」

「ハア? 何言ってるのよ、アンタ。いったいどこからG元素なんて調達してくるっての?」

「日本にはもう一つハイヴがありますでしょう。佐渡島からです」

27話 佐渡島の逆落とし

香月夕呼Side

山城にG元素の調達方法をきいてみると『佐渡島にいるBETAの体内にあるG元素を、抽出して手に入れますわ』だそうだ。

たしかにG元素をハイヴ以外で手に入れるには、BETAの死骸を解体するしかないわ。

でもそれは膨大な手間をかけて、ごくわずかしかとれない手間のかかるものよ。

たった一日で研究に必要な分を確保できるとは思えないのよね。

もつともそれ以前に、BETAの鬼ヶ島になっっている佐渡島に、たった一機で行くところが正気とは思えないんだけどね。

とにかく山城がZガンダムの戦闘を行うというなら、それを観察しないわけにはいかない。

帝国海軍に頼んで駆逐艦を出してもらい、そこで見せてもらうことにした。

あたし自身が出向く必要はないんだけど、正直興味はある。

噂段階で“究極の戦術機”とまで言われたZガンダム。

いろいろとんでもない話は聞いたが、やはり正確な情報は欲しい。

それと社に山城のリーディングをしてもらったが、意味不明の結果が出た。

社の答えはこうだった。

『なんか男の人でした。山城さんは』

『……………は？ いやいや、女でしょあれは。山城は女子ス

衛衛士訓練学校出身よ。身体検査は徹底的にやらされるし、性別を偽るのは不可能よ』

『いえ、心の中に山城さんでない男の人がいました。私のがぞいていることに気がつかれて、話しかけられました。そのせいで心の奥まで行けませんでした』

——と、よくわからない結果になっしまいました、山城の心の中を見るのは不可能だという結果だけが残った。

結局一番知りたかった、あのZガンダムを手に入れた経緯はわからないままか。

それにしても心は男だったのに「くですわ」とか言ってるの？
女でも「イラツ」とする話し方なのに、男とか最悪ね。

「夕呼先生。大丈夫でしょうか？ 山城が一人だけで佐渡島に挑むなんて」

ちゃっかりついてきた白銀が不安そうにそう聞いてきた。

「常識として大丈夫じゃないのは当然でしょ。問題は山城とZガンダムという戦術機にそれを為す力があるか、よ。白銀。あんたには無理だと思うの？ 山城がああZガンダムって戦術機を使っても」

「いや、山城とは先生に会う少し前に出会ったばかりだし、俺自身Zガンダムでまだ戦闘とかしたことないですよね」

「は？ 仲間なんじゃないの？ どう見ても同じ出所の機体をもつ者同士なのに？」

「いえ、機体を預けられたのは互いに知らない場所なんです。山城の戦闘力の噂は聞いても、本当にそれだけのことができるかは分かりません」

あたしとおんなじか。いったい誰にあんなものを預けられたんだか。

「ま、普通なら絶対許可しないんだけどね。でもG元素はどうしても欲しいし、できるってんだからやらせてみるわ。それで失敗して死んじゃったら、それまでの縁とあきらめることにするわ」

「そんな……………」

「シツ来たみたいよ。はじまるわ」

艦橋の外の景色が大きく変化した。

佐渡島の光線種がいきなり上空へレーザーを発射しはじめたのだ。上空に機体の姿は見えなくても、光線種の目標にしている位置から、Zガンダムの飛行形態ウェイブライダーはだんだん佐渡島に近づいてきていることがわかる。

「本当にレーザーは大丈夫みたいね。あれだけでも大したものだけ

ど、本当にあそこから佐渡島に降下できるのかしら?」

やがて光線種は佐渡島の真上へとレーザーを集中させる。それはいつまでも止めることなく、まるでから撃ちを繰り返しているようだ。

「降下ポイントに着いたみたいね。さて、お手並み拝見させてもらうわよ山城。そしてZガンダム」

♠♦♣♥♠♦♣♥

上総Side

ウェイブライダーで高度200km上空。勇躍征途、目標の佐渡島に到達。

ここまで上空にきたならさしもの重光線級のレーザーも冷やされて、耐熱処理を施されたガンダリウムγの装甲と、強化されたバイオセンサーによるサイコフィールドは貫けない。

悠々レーザーを浴びながら降下計画を確認する。

「レーザーは上手く流してね。間接部のフィールドモーターやマグネットコーティングは修理が大変だから」

「またハイヴ貯蔵のG元素を得る機会があれば、間接部もサイコフレームにしたいですね」

「二番の難所は、減速をバーニアの調整じゃなく、レーザーをビームサーベルで弾いた衝撃で行う所だ。秒速10キロの落下の中、本当にできるの?」

「上総に問わずただ駆け下りなさい。鶺鴒ひよどりの坂の下にこそ手柄はあり!」

気分はすっかり一ノ谷合戦前の九郎義経だ。

レバーは手綱。フットペダルは鐙。愛馬はZガンダム。たたきつけるレーザーは一ノ谷の寒風。

扇子をビームサーベルにかえ、義経千本桜の能をひとさし舞おうか。

「まあ鶺鴒と似たようなものか。『逆落とし』どころか垂平直下のダ

イビングだけどね。それじゃ行くよ。降下にはいった瞬間コントロールは渡す」

普段は封印してあるコクピットまわりのサイコフレームを解放。脳を超高速処理状態にし、さらにハ口の補正もはいるとレーザーをも見切る超感覚となる。

巡航形態ウェイブライダーからゼータに変形。

みなもとくろろう
「源 九郎もかく見はれ。ひよどりの武者にも負けぬ上総の逆落としを！」

降下開始。

ビームサーベルを抜き、バイオセンサーを発動してロングビームサーベルへ。

ZガンダムにIフィールドバリアは搭載されていないが、Iフィールドの技術自体はある。

それがビームサーベルだ。

ビームに反発するIフィールドを発生させているので、ビームサーベル同士でチャンバラをしたりできるのだ。

これで重光線級の重レーザーとチャンバラだ！

「はあああああー」

ロングビームサーベルを盾代わりに青眼にかまえて落下。

重光線級はさらに激しくレーザーで歓迎。

それを一撃、二撃とかわす。かわして落ちる。

されど天登る雨のごとく射たれるレーザー。やがてかわしきれなくなる。

かわしきれないと見切ったレーザーの光条。

それにロングビームサーベルの刀身を叩きつける！

「えあああああああ!!!」

レーザーとサーベルが反発しあい、ゼータの体は一瞬とまる。

薙ぎの型の要領でレーザーを流し、その反発を利用してゼータをレーザーの集中砲火の地帯から遠ざける。

そのままバーニアで落下地点への位置を調整。

目指すは大目玉のバケモノ、重光線級の一体！

「山城が唐竹割りの極意！ 垂直おとしの面！」
山城上総は幼い頃、真剣の小刀で竹の据え物を垂直に真っ二つに割るといふ修行をしていた。

その記憶と共にその重光線級をビームサーベルで目玉からたたき切った。

——轟ッ！

その勢いで地面に着地。

素早くビームサーベルの仕様を変更。ビームライフルへ。

居住まいを正している間に周囲の重光線級はこちらを向き、レーザーの照射体勢へとはいつている。

大目玉にエネルギーを充填するその様を見ながら、思わず笑みがこぼれた。

「あまりに遅い」と。

「距離さえなければお前達など雑魚ですわ！ 訓練兵時代のわたくしでも、もつとましな射撃ができましたよ！」

一番早くに充填がきそうな個体に喰らわせるビーム！

そのまま回転しながらビームライフルを乱射！

次々に重光線級を屠る。屠りながらまわる。

「ほらほらほらほら！ これが早撃ちというものですわ！ 狙撃以外の射撃も知りなさい！」

キツチリ一回転する間、60体ほどの重光線級はその場に死骸となっていた。

「成功ですわ。またまた光線級撃破のレコードを塗り替えますわね」

「勲章とかもらったことないけどね。とにかくBETA支配地域に長居は無用だ。すぐにこいつらのG元素を吸収する。G元素強力吸収モード！」

ハロが何やらレーザータのモードを変更。すると死骸からG元素が大きな蛍のような光になって出て、次々レーザータの体に吸収される。

「ハロ、必要分以外は核反応炉に取り込まないで。目的を忘れないでね」

「大丈夫。ちゃんと結晶にして貯めておくよ」
さすがにゼータ単機でハイヴの奥にまでG元素を獲りには行けない。

だから目標はこの重光線級。
より強力なレーザーを放つこれは、高濃度のG元素を体内に宿しているはずなのだ。

なのでそれを乱獲しG元素をいただこう、というのが計画。
目論見通り計画は大成功だった。

大量の蛍を出した重光線級の死骸も、やがて光が出なくなつた。
そのころにはワラワラと無数のBETAが這い寄ってきた。

実に圧倒的な数だ。モニターに一面果てがないほどのBETAの群れ。

レーダーで見ると、島中のBETAがここへ向かっているような動きなのだ。

「BETAはG元素の存在には優先して引き寄せられるようなんだ。G元素を使った兵器を使う場合、これに気をつけないとね」

「なら、このG元素を武器にも活動にも使っているゼータは真っ先に狙われますわね。ああ。たしかに今までもそうでしたわね」

あんな数の雑魚を相手にしてられないと、ウェイブライダーに変形してさっさと佐渡島をあとにした。

◇ ◇ ◇

景色がオレンジに染まる夕刻ごろ。

港湾の一面で博士の一団と合流した。

オレはゼータからとりだした袋一杯のG元素の結晶を見せてむかえた。

「香月博士。お約束のG元素を調達してまいりましたわ。ご検分ください。重光線級60体より抽出したのですが、思ったより量がなくて申し訳ありません」

「重光線級60をたった一機で………いえ十分よ。これだけあれば研究は進められるわ。それより、アンタに挨拶したいって海軍のお偉いさんがきているわ。会ってちょうだい」

そう博士がいうと、海軍の制服をキチツと着た姿勢の正しいおじいさんがオレの前に来た。

「帝国海軍の小沢だ。たった一機で光線級呐喊をなす貴官の噂は聞いていたが、本日の働きは噂以上のものであった。貴官のその力。祖国日の本と人類のために使いBETA殲滅を一日も早く実現させることを深く望む」

誰だ？ このいかにも古強者なおじいさんは。階級章は………：准将!？」

なんでたかが国連軍のお使い任務に帝国海軍のお偉いさんが出てくるんだ？

『何故』と問うのは愚かか。仕方ない。新任らしく姿勢正して挨拶しよう。

「はっ。提督閣下のお言葉、まことにありがとうございます。国連軍香月博士の下で粉骨碎身はたらき、一日も早い日の本の安寧の日を迎えることをのぞみます」

「うむ。今日はいいものを見せてもらった。どうやら生きているうちにBETAのいない祖国を見れそうだ」

なにやらおじいさんは満足して帰っていった。

オレはといえば何があの閣下のお気に召したのかさっぱりだ。

「博士。いったい何がどうなっているのです?」

「いや、それあたしが聞きたいんだけど。たしかに重光線級のレーザーが直撃したように見えたけど、何で生きてんの?」

「ああその説明なら映像をとってありますので、それを見せながら解説いたしますわ。多少おどろかれるかもしれませんが」

「もうおどろき果てたわよ。ピアティフ。G元素を基地に運んでおいてちょうだい」

博士の秘書だというピアティフという人が人を使ってG元素の結晶を梱包する作業をしている中、海岸際に白銀が見えた。

なんとなくあいつと話してみたくなくて寄ってみた。

「山城。お前、噂以上にすごい奴だったんだな。さすがにアレは真似できない」

「ええ。レガンダムは変形できませんもの。性能はそちらが上でも、高度をとった戦法ができるのはゼータの強みですわね」

「いや、そういうことじゃなくてだな、あまりに常識はずれで夕呼先生も海軍の連中も……まあいいや。見事な光線級呐喊だった。この先いろいろあるが、山城のその力。頼りにさせてもらうぞ」

「まるで未来に何がおこるか知っているような口ぶりですわね。何か知ってますの?」

「いまは聞くな。俺はただ、もう悲しい景色は見たくないだけだ」

そのまま白銀は海に目をそらして黙りこんだ。

もうそのことを話す気はないってことか。

しかし夕日映える海を見る、ちよいイケメンの憂い顔に、少しだけ「キュン」としてしまう。

自分が女になったことを、いま強く実感してしまった。

これ以上、白銀を見ていると本当に乙女になってしまいたいそうなので、先に基地に帰ることにした。

帰り際、奴のかすかな呟きが聞こえた。

「あいつらが死ぬ所も世界が滅ぶ所も、もう見たくない。今度こそ……今度こそ、それは叶いそうだ。なあ純夏」

28話 ユーコンへの道

香月夕呼Side

白銀、山城が来てから一ヶ月。

G元素が手に入った以上、いつまでもここに居るわけにはいかない。

そろそろ仙台の研究所へ戻らねばならないが、その前に白銀からもたらされた情報に基づいてあちこち手をうつっておかねばならない。

「博士。情報部からディスクが届きました。閲覧後は破棄処分をお願いします」

「わかったわ。ピアティフ、しばらく出てなさい」

「了解しました。扉の前に控えておりますので、何かあればお呼びください」

ピアティフが出た後、ディスクの嚴重な封印を多少苦勞しながら解いていく。

「情報部も慎重ね。まあこれを分析すれば情報部の手口がわかってしまうから、嚴重にもしたくなるか」

ウィルスチェックの後にPCでデータを閲覧。

ディスクには第5推進派の最新の動きがあった。アメリカ国内でかなり活発にロビー活動をしている。そしてそのいくつかは『G弾脅威論派』の切り崩しに効果をあげている。

「まだ無茶ができる段階じゃないけど、いずれそうなるわね。白銀の言う通り来年の12月24日にはこっちは追い落とされる、か。でも、その頃にはまだ00ユニットはモノになっていないのよねえ」

白銀から示された数式で00ユニット制作の最大の問題点は解決した。

山城からは必要なG元素をもらった。

00ユニット制作の道筋はもはや完全についており、あとは時間の問題だ。今から仙台の研究所に戻って00ユニットの制作にかかれば、横浜基地竣工前に完成できるだろう。

「ただ、その時間が本当に問題なのよねえ。本体が完成しても、稼働させられるのは横浜基地ができて反応炉を使えるようになった後だし」

調整なんかの時間を考えると、だいたい成果を示せるのは一年と数ヶ月後か？

それだけの時間があれば、第五計画推進派はじゅうぶん自分らの計画を主導にするための工作はできてしまっただろう。

「でも白銀と山城と二体のガンダム。これだけの強力な手札ワイルドカードがきて負けたんじゃ、とんだ無能ね。絶対に勝つわ。研究所に帰る前にヤツらの動きを遅らせる工作を考えないとね。となるとプロミネンスを使う？」

第五計画推進派の奴らはアメリカの主流になってしまったが、アメリカ国内にも奴らに対抗する勢力がないわけじゃない。

それが「プロミネンス計画」だ。世界中より戦術機技術を集め、高性能な戦術機の開発によってハイヴ攻略を目指そうという計画。

この計画には世界中に支持者も多く、これが上向けば間違いなく第五は強引なことは出来なくなる。つまり時間が稼げる。

あたしがこれと手を組もうとしているのも、それを狙ってのことだ。

ただ、やはりそれでハイヴを攻略できると期待できるほどのものじゃないのよね。H I E M A E R F 計画が頓挫してからは、アメリカ国民にも完全にあきらめられている雰囲気があるし。

「でも、やっぱり第五の動きを遅らせる可能性があるのはこれだけなのよねえ。なにか嘘でも、アメリカ世論にプロミネンス計画で希望を見せる方法はないのかしらね」

タネはある。白銀があたしに作らせている新型OSだ。あれは向こうの世界で、衛士の生還率を飛躍的に高めたシロモノだという。まだ開発途中だが、まりもや伊隅に感想をきいてもかなりの好感触。完成すれば相当なモノになるだろう。

「完成は間近だし、これを提供するのが手だろうけど。でも、この優秀性を示す場がないのがねえ。クーデターを待つわけにもいかな

いし」

あたしはこれを保留にし、次の情報欄へと移る。

次には日本国内の若手将校によるクーデターの可能性が示されていた。

「やっぱりどこからか不穏分子あてに相当な資金が流れているわね。これは鎧依の奴も掴んではいるだろうけど。あたしも備えとかないと」

もう一つ考えなきやならないのはこのクーデター計画のこと。これには第5推進派らしき影があり、白銀はこれを潰すようになってきたけど、事はそう簡単じゃないのよね。

第5の奴らがすでにG弾を完成させながら強引に主導を奪ってこないのは、諸外国の反発があるため。特にG弾を墜とされ、国土を重力量異常にされて国家の再生を困難にされる国々は猛烈に反発をしているわ。前大戦の盟友のヨーロッパ諸国でさえ、反対の立場をとっているし。

だからこそ、奴らはアジアで大きな発言権をもっている日本帝国を傀儡にしたい。日本が大陸への大規模G弾使用に賛成してくれるなら、とりあえずの体裁は保てるからね。

そのためのクーデター計画。これを若手将校に起こさせ、日本の手におえない事態にまで拡大させ、それをアメリカが鎮圧することで日本の主権を奪う。無論、日本主導の第4計画もだ。

たしかに胸糞悪い計画だけど、これってこちら側も利用できたりするのよね。この悪巧みを進めている間は、強引に第4から主導を奪ってきたりしないもの。つまり時間稼ぎに使えるのよ。

さらに鎧依もこのクーデター計画を察知しながら、それを阻止するようなことはしていない。

アイツはあえてこのクーデターを起こさせることで、前大戦敗北時に日本国内に大量に仕込まれたアメリカのスパイやらスリーパーやらを、一気にあぶり出す計画をたてている。

無論、それで日本がアメリカにのつとられてしまつては本末転倒だ

から、クーデターの首謀者は自分の息のかかった者をすえて。適当な所で収束させて。

それでも軍にも政治家にも相当の血が流れるでしょうけど、鎧依はやるつもりだし、あたしも止めるつもりはない。

「でも白銀は止めたがっているのよね。しかもアイツ【沙霧尚哉】つて奴が首謀者になることも知っちゃってるし。本当に止めることが可能なのが問題だわ」

かといって白銀を止めるために、こんな深い情報をあたえるのも悪手。

どうしたもんかしらね……………

ピコーン！

「——いきなり閃いたわ。二つの案件が一つのディスクに入っていたお陰で、両方を一気に解決する方法が出たわ」

あたしはディスクを破棄用の粉碎機に捨て、扉の前にいるピアティフに回線をつないだ。

「白銀と山城を呼んできてちょうだい。二人に任務をあたえるわ」

◆◇♣♥♥◆♣♥

山城上総Side

オレと白銀がこの国連軍品川仮設基地に来てから一月。

毎日ZガンダムとRガンダムの機動試験をやったり、ビームライフルの試射をしたり。要は二体のガンダムの構造を調べるテストパイロットをやっている。

だが今日いきなり大きな転換期がきた。

オレと白銀は香月博士に呼び出され、唐突に海外派遣を命じられたのだ。

まさか博士の私的な兵みたいなための立場のオレ達にそんなものがあるとは驚きだった。

「アラスカのユーコン基地に二体のガンダムと共に出向……………ですか。俺達が？」

白銀も驚いている。白銀は博士にかなり重用されているように見えたが、この件は初耳なのか。

「そ。アンタ達の【戦術機少尉】の階級はあたしが臨時で出しているもの。いわば正式なものじゃないの。だからこの任務を成功させれば、その功績で正式なものにできるわ」

「ですが、これから日本でいろいろあるのに、この時期に？」

何が？ オレは聞いてないが、なにかイベントでもあるのか？

ともかくオレも返事は返した。

「アメリカへ半年間の出向ですの……………いえ、任務ですからお受けしますわ」

が、オレもソ連の租借地になっているとはいえ、仇敵のアメリカへ行くのは気が進まない。それに日本を守るためにここに入ったのに。

「二人ともやる気が出ないみたいね。本来なら理由の説明なんてないんだけど、士気が落ちたまま向こうへ行かれても困るから説明してくわ。このままじゃ、第五のヤツらに先をこされちゃうのよ」

「それって、アレのできる前にオルタネイティブ5が発動するってことですか？」

「そ。こつちが実績を示す前に向こうがゴールを決めちゃうの。だからそれをさせないために、アンタ達に向こうへ行ってもらわ」

「もしかして任務とは妨害工作ですか？ 喜んでやらせていただきますわ！」

「素人にやらせるワケないでしょう。それにアメリカにだけはそれは仕掛けちゃダメなのよ。アレは世界唯一最強の覇権国家。万一にもこちらの仕業だとバレたら報復は苛烈。経済制裁でもされたら、完全に日本は詰んでしまうわ」

ああ、あの国お家芸の経済制裁ね。

たしかにこんな果てしなくBETAと戦わなきゃならない世界で、それをやられたら死活問題だ。

「そんな最強国アメリカにもつけない方法がないわけじゃないわ。

あの国、アメリカ以外の勢力には容赦ないけど、アメリカ国内の勢力ならわりと紳士的な対応なの。だからアメリカ内のヤツらの対抗勢力に力をつけてもらって、張り合ってもらおうわ。それで時間を稼ぐというわけ」

「そういうことなら仕方ありません。それで具体的に俺達はそこで何をするんです?」

「向こうにガンダムを持って行ってデモンストレーションをしてもらうわ。要するにいまやっていることをユーコン基地でやって欲しいのよ。戦術機開発に大きな発展があることを見せ、危険なG弾を使用せずともハイヴを攻略できる可能性を示してもらえば、有力者が向こうに流れるのを止めることができるわ。ついでに今作っている新型OSの宣伝にもなるわ」

「あれですか……。たしかにガンダムのOSデータも参照したために、俺が知るXM3より遙かに高性能なものになりましたが」

白銀は博士に提案して戦術機の新機OSの開発をさせているそう

だ。
オルタネイティブ4の最高責任者の香月博士に初対面から電光石火で信頼をとりつけたり、その博士と共同でそんなプロジェクトを立ち上げたり。

本当にいろいろすごい奴だ。

一年先にこの世界にきたオレより、よっぽどこの世界になじんでいるような気がする。

「ええ。あれだけのものが出来るんだし、高く売らないとね。そのためにも向こうの連中を圧倒してきなさい」

「了解しました。せいぜい良いセールスマンになってきます」

その後、軽く現地での予定を聞いた。

現在そのユーコン基地では、帝国陸軍技術廠が米国企業と共同で主力戦術機【不知火】の改修計画【XFJ計画】というプロジェクトをしている。その日本側開発責任者の中尉にオレ達の世話を頼むのだそうだ。

話が一段落したとき、香月博士はふいに思い出したように言った。

「そう言えば、聞いてみたかったわ。あなた達の機体についている【ガンダム】って名称。あれってどういう意味なの？ どういった意図がこめられているの？」

白銀は何か言おうとしたが、オレは軽く手で制した。

ガンダムを問われて、他人に答えをまかせるわけにはいかない。

オレは少し考えて、こう答えた。

「人類が描いた戦争の夢と悪夢。その物語の名称でしょうか。【BETA大戦】という大きな悲劇の異星起源種との戦争。その終わりをもたらす夢になれたらいいですね」

29話 トータルイクリスに出発

それからしばらくは慌ただしくアラスカ行きの準備の日々が続いた。

そして一月後の今日。出発の日を迎えることができた。

この海外行きは急遽決められたものだったが、向こうの技術者が早くガンダムを見たいとのことで、これだけ短い期間で行けることになったのだ。

そして現在 帝国軍木更津基地航空路

出発準備をしたオレと白銀は待機所にて、軍用航空輸送機に物々しくガンダムが搭載されるのをなんとなく見ていた。

さすが最高機密扱いのガンダム。機体全体を防護シートにくるまれ、厳重な警戒のなか輸送機に運ばれている。

「この時期にアラスカか。来年に備えてこっちで準備をしておきたかったんだがな」

「何の準備です？ いつも来年に何かあるようなことを言っていますが、何を知っているんですの？ いい加減わたくしにも教えてくださいいな」

「ま、悩んでもしょうがないな。夕呼先生なら上手くやってくれるだろう。俺達は戦術機開発の総本山に宇宙世紀のモビルスーツを見せつけてやろうぜ！」

「……………露骨に話をそらしましたわね。やっぱりそのことは教えてくださらないのですね。でもモビルスーツの力を見せつけるというのは良いですね。向こうには世界最高の戦術機技術者がいるらしいですが、ガンダムを見てどんな反応をするのか実に楽しみですね」

オレの質問をそらすのにこの話題をふったというのは分かっているが、つい乗っけてしまう。

世界最高が驚く瞬間をオレは見る！

◆◇♣♥♠◆♣♥

香月夕呼 Side

木更津基地航空路に到着し、あたしと伊隅、速瀬は車両から降りた。「やっと二人をアラスカへ送る方は今日片付くわね。研究も進めなきやならないのに、向こうとの折衝で寝るヒマもなかったわ」

あれから一月。苦勞の甲斐あってようやく二人をユーコン基地へ送る所までこぎつけた。向こうの技術者が噂のガンダムを見られることに乗り気で、短期間で受け入れ準備してくれたのだ。

見送りにあたって、二人が帰国したら編入させる予定のA-01連隊の指揮官伊隅と副指揮官の速瀬を連れてきた。二人が行く前に顔合わせをしておこうと思つてのことだ。

「苦勞さまです。それにしてもあの伝説ともいえるガンダムという戦術機を乗りこなす二人の衛士ですか。それが帰国したら私の部下になるというのは重責ですな」

と伊隅は言いながらも、少しも重責で不安になっているようには見えない。

「そんなに重く考える必要はないわよ。二人とも衛士として優秀だし、良い部下になると思うわ。もともと性格は普通でも、戦闘力は普通じゃないけどね」

「そんなのがいるのに、私が副指揮官で本当にいいんですか？ 男の方は香月博士に意見できるほど優秀だっていうし、女の方はものすごい量のBETAを倒して光線級呐喊すらたった一機で行つたっていうし」

速瀬の方は不安そうだ。もともと、実戦一回で伊隅に次ぐ立場になつたのだから無理もない。

「能力も性格も申し分ないんだけどね。軍に入れるには少々わからないことが多いのが難なのよねえ。だからしばらくは指揮官職にはつけないで様子見しなきゃなんないの」

「機体の出所のことですね。あんなすごい戦術機、どこで作られた

のかまるでわからないですよね?」

「それが最大の難所よね。最高機密を扱う場所に、これはネックだわ」

「聞き取りで何かわからなかったのですか? 核融合炉を戦術機に搭載する技術など、可能にする機関は限られると思うのですが」

「『神様からもらった』って答えだったわ。限られるどころかどこにも無いし、本当に神様からのプレゼントなのかしら?」

「えっ………神様? どちらの宗教団体が作ったとか?」

「戦術機は神様がくれるものではありません。人が作り出すものです。高度な設計技術と大がかりな設備を用いて、国家予算規模の大金を投じて作られるものです」

「わかってるわよ。要は鎧依と同類ってことでしょ。のらくら核心をさけて煙に巻く所が」

あの戦闘力はあっても人間的にはチョロそうな山城にも聞き出せなかった。

あの子、以外と厄介な女なのかもしれない。

綺麗で可愛くて無邪気で。そして荒唐無稽をまるで本当のように騙る。

東南アジアじゃ女神のように思われているって話を聞いたけど、そういうことなのかしらね。

「クセの多い人材ということですか。これは部下にしたら苦労しそうですね。帝国軍などの説得は大丈夫なのですか?」

「まあ曇りはあっても、力技でもなんとかいけると思うわ。国連軍も帝国も本音では一人一機で光線級呐喊をやったり、数万のBETAを殲滅できる戦術機の力を欲しがっているだろうし。ただ、それなりの体裁はとりつくるわらなきゃね」

「それも兼ねてのアラスカ出向ですか。二人を一時日本から離れさせ、その間に受け入れ体勢をととのえると」

「それに山城の身体検査もね。機体以上に不思議だから、向こうの衛士医学の専門家に徹底的にやらせるわよ」

山城の身体能力にも疑問はある。音速をこえる機体に乗ってどう

やって高Gに耐えられるのか？　これはG弾の爆心地にしながら高重力に耐えられたことにもつながる。

そしてその高速にありながらの正確な操縦技術。映像を分析した限りだとコンマ数秒の正確な操作を、ゼータにいる間ずっとやり続けているのだ。

「ユーコン基地の衛士ドクターですか。幾人もの最高レベルのテストパイロットを扱うドクターですから、さぞ優秀でしょう」

「ええ。山城は本当の意味で徹底的にやるわ。彼女の人間性も含めてね。そっちは昔の彼女をよく知る人間に任せることにしたわ」

「アラスカで？　そのような人間がいるのですか？」

「帝国第壹技術廠の巖谷中佐の姪に篁唯依中尉ってのがいるの。その子が山城の衛士訓練兵時代の同期だったらしいわ。おあつらえ向きに今、国連軍に出向してユーコン基地でX F J計画の責任者をやっているわ。開発エリートの家系なのね。帝国にも恩を売れるし、名案でしょ？」

「はい。さすがですね香月博士」

帝国技術廠もガンダムの情報は欲しいだろうし、その衛士である彼女とあれば徹底的に調べてくれるだろう。

◆◇◆
◆◆◆

山城上総Side

搭乗時間になる少し前になった頃だ。

香月博士が二人の国連軍の制服を着た女性を伴ってオレ達の見送りに来るのが見えた。

一人は短めの髪で凜々しい顔立ち。もう一人はポニーテイルで気の強そうな女性。

「あの二人は……………」

「あら、白銀の知り合い？　香月博士が連れてくる所から、わたくし達と似たような立場のようですね」

「……………いや、初対面だ。……今はな」

これから知り合いになるという意味か？　ときどき妙な言い回しをするな白銀は。

三人がオレ達の前にくると、オレ達は敬礼で挨拶をする。

「香月博士。お見送りありがとうございます。ただいまよりアラスカ、ユーコン基地へ行つてまいります」

「敬礼はいいっていったでしょ。ここには、あたしらしいないし」
香月博士は軍人の敬礼が嫌いらしく、いつもそう言うが、そうもい
かないんだよ。軍人だし。後ろの二人もやってるし。
むしろそつちが敬礼に慣れてほしい。

「出発前にとりあえず二人を紹介しておくわ。A―01連隊……………
いえ、もう部隊といった方がいいわね。明星作戦で『連隊』なんてい
えないほど数が減っちゃったし。指揮官の伊隅みちる大尉と副指揮
官の速瀬水月少尉よ。アラスカから帰ってきたら、あんた達の直属の
上官になるからよろしくやりなさい」

「白銀武少尉です。伊隅大尉。速瀬少尉。帰国したのちお世話にな
ります。どうかご指導よろしく願います」

よく初対面の軍人なんかにも臆せず話しかけられるな。この
大尉、『デキる女』って感じですよ。こし気後れするのにな。

「山城上総少尉です。海外任務ののち、わたくしもお世話になりま
す。どうかよろしく願いますわ」

「A―01部隊指揮官の伊隅みちる大尉だ。香月博士から話は聞いて
いる。白銀。あの新型OSは貴様が博士に提案したものだそうだ
な。そして山城は非公式ながら世界最高のBETA撃墜数を為した
という。主力の壊滅したA―01にとって、貴様らのような優秀な衛
士は歓迎だ。帰国したら便利に使ってやるから覚悟しておけ」

「副指揮官の速瀬水月少尉よ。あたしもこき使ってやるから覚悟し
なさい」

「光栄です伊隅大尉、速瀬少尉。帰国を楽しみに任務に励みます」
やっぱりこの大尉、『デキる女』そのものだ。

それに挨拶を返す白銀も貫禄負けしてない。やっぱり凄い奴だ。

それに比べ、こっちの副指揮官の彼女の方はまだ場慣れしてない感じだな。

年も近いし、なんか親近感がわく……いや、見覚えがあるぞ？
そうか。もしや彼女は……

「速瀬少尉。質問がありますわ。よろしいでしょうか？」

「あら、山城少尉。大尉をさしおいてあたし？ いいわよ、何でも聞いてごらんなさい」

「もしかして少尉は以前、ものすごく髪を伸ばされていましたでしょうか？ ポニーテイルなのに床につきそうなくらい」

「なんだそりゃ？ それは俺も知らないぞ」

「……………そっちの男の方。『俺も』ってなに？ 事前にあたしの情報でももらっているの？」

「あつ！ いえその……ゴニヨゴニヨ」

速瀬少尉は白銀をジト目で睨んだあと、オレに不振そうな目を向けてきいてきた。

「あく山城少尉？ たしかにあたし、昔はやたらと髪をのばしていたし昔もポニーテイルだったわ。でもなんで知っているの？ あんたもあたしの情報をもらったりしたの？」

「いえ、白銀少尉と違ってわたくしは写真を見ただけです。どうやらコレはあなたに渡しておいた方がよろしいですわね」

「いや、俺も情報なんてもらったわけじゃ……ゴニヨゴニヨゴニヨ」

オレは懐からパスケースに入っている写真を取り出した。鳴海に返しそびれた写真。

鳴海孝之と平慎二、そして二人の少女が仲良く写っているあの写真だ。

髪の長い活発そうな女の子が、速瀬少尉の若くなったような顔立ちなので思い出した。

「鳴海さんの忘れ物です。短いつき合いでしたが、彼のことが忘れられず、あの日からなんとなく持ったままなんですの」

あいつらとラウンジで話したあの夜は楽しかった。

そしてあいつらが命を捨ててG弾のことを知らせに来てくれたから、オレはここにいます。

とても忘れられない……いや、忘れちゃいけない!

「あ、アイツ! アタシと遙のいない所でアンタとよろしくやっていただけですってえー!!!」 “あの日” って何の日よ?!”

あれ? 間違ったかな? なんかオレの意図してたことと違って伝わってしまったような?

「いえ、明星作戦のときラウンジでわたくしと話しただけです。『作戦が終わったらまた会おう』という約束をいたしました。結局それは果たされませんでしたわ」

「なっ! また会う約束なんてしてたの!? くうくうっ! どういうつもりだったのよ孝之! 浮気!? それとも、あたしと遙を捨てるつもりだったの!?”

あ。『君達二人といっしょに』って言い忘れてた。どうしよう。なんか修羅場になってしまったような?

その時、伊隅大尉がパンパンと手を叩いて言った。

「二人ともそこまでだ。その件は二人が帰国したら、私から山城少尉に聞いておく。速瀬、いまは置いておけ。なるほど。山城の方はクセのある人間だとは聞いていたが”まさに””といったところだな」

「香月博士!? わたくしのどこにクセがありますの!?! クセ者の化身のような博士にそう思われる覚えなどありませんが!?”

「自覚がないのがそれよ」

香月博士はそう言って、面白そうな顔でオレ達を眺めていた。

ともかくオレと白銀は輸送機に搭乗し、三人に見送られて出発した。

高度が上がリ、離れていく航空路を見ながら思う。

大東亜連合の衛士として日本にきたときは、まさかこういう形で日本を出るとは思わなかったな。

白銀も何やら思うことがあるのか、窓の外を名残惜しそうに見ている。

ふとオレの方に向き、カゲリのある顔で言った。

「上総。一っだけ教えておくことにした。俺達の任務は帰ってきてからが本番。この先、相当キツイ戦いが待っている。いちおう覚悟しておけ」

なんなんだ。そのミステリアスな言い方。

それに、いきなり名前呼びとはどういうことだ？

『この先、どこへでもついて行きますわ』

——とか言いそうになっちまったろうが！

30話 第2章エピソード

現在、オレ達は航空戦術機輸送機でアラスカのユーコン基地へと向かっている。

数時間の空路でのせまい客室の中。白銀、ハロとつまらん会話でもするしかやることがない。

「ユーコン基地か。今回はアラスカに行かされたり、まったくの初対面の上総と組まされたり、知らないことばかりだな」

「『海外は初めて』という意味ですか？ それよりどうして呼び方が『上総』になっていますの？ 同僚にはなりましたが、それほど深い関係でもないでしょう」

「なんか『山城』って呼ぶたび、悲しそうな顔するからな。気になるんでこっちの呼び方に変えることにした」

「顔に出ていましたか。実はわたくしが日本を出た経緯で、山城の実家はかなり責められたようなのです。そのわたくしがいまだ『山城』の姓を名乗っていることに、うしろめたさを感じています」

「なら呼び方は『上総』でいいな。それで、そのハロのことも聞いておきたかったんだが、それも転生者だった？」

白銀がオレの足下にいるハロにきいてきた。そういや、白銀という時は人目がある場所が多いせいで、二人が話したことはなかったな。

「正確にはゼータがボクの本体だよ。まさか神様にゼータを願ったら、こうなるとは思わなかったよ」

「でも機体の整備とかを自分でやってくれるので助かりますわ。核反応炉の整備なんて、知識とかもらっても出来そうもありませんもの」

「俺のレガンダムのもやってくれて本当にすまない。ハロ、ありがとう。感謝している」

そう。表向き二体のガンダムの整備はオレと白銀がやっていることになっているが、実はハロがやっているのだ。

「どういたしまして。まあ今はもう、ゼータの人生をそれなりに楽しんでるよ。ゼータじゃなかったら、明星作戦のとき上総と死んで

いたし」

「そういや、明星作戦のときG弾の爆心地にしながら助かったんだって？ どうやって助かったんだ。その奇跡の生還トリックを教えてくださいかないか」

「それは香月博士や鎧依さんにも聞かれましたわね。ハロが、アトリエにあるG元素でサイコフレームを作って、サイコフィールドを生かして身を守りましたの」

「サイコフレームを作るとかできるのか。すごいな、お前」

「うん。メカになったらすごいよ。必要な拡張機能とか自分でつけられちゃうし」

戦闘中の機体制御とかもやってくれるから、ニュータイプのおれと併せてとんでもない機動とかもできちゃうんだよな。

ハッ！ これってスペリオルガンダムの人工知能システムALLI CEも超えているんじゃないか？

「上総。それで聞かれた二人には何と答えた？ サイコミュとか説明できたのか？」

「説明しきれないので『ゼータの特別なシステムで日の本の守護に果てた英霊のみなさまと交信して守ってくださいました』と説明しましたわ。これも本当のことですし」

「……………その説明で納得したの？ 夕呼先生も課長も」

「不思議ちゃんを見ているような目で見られましたわね。全て本当ですのに」

「それは……………なあ。そういや二人に、ガンダムを作ったり整備・補給の手配をしているバックアップ機関のこととかは聞かれたか？ 俺は『そのことはしばらく秘密にする契約です』ってことで、ごまかしたんだが」

「わたくしはそんな嘘をつけるほど器用じゃありませんもの。『神様から授けていただきました。バックアップする機関はありません。勝手に自分でエネルギーをたべて勝手に自分で修復します』と正直に答えましたわ」

「……………」

なんだその微妙な顔は。そういや、説明した二人もそんな顔をしていたな。

「どうしました？ わたくしの嘘偽り、曇りのない目を見れば、博士も鎧依さんも真実だとわかっていただけだと思いますが」

「……………いや、少し目眩が……………な。とにかく夕呼先生から、帰ってきたらガンダムの概略を説明するよう言われているんだがな。俺がモビルスーツの解説なんて『会社とかに着ていくスーツじゃなくてロボだよ』ぐらいしか言えん」

「昭和のガンプラ大好きキッズがお母さんに説明してるんじゃないですことよ。もうアニメを見る側じゃなく乗る立場になったのですから、少しはお勉強なさったら？」

「ああ。整備とか上総やハロにまかせっぱなしなのは悪いと思って。とにかく上総は相当なガノタらしいし、まかせられるか？ 俺がモビルスーツの勉強とかしても説明できるほどにはなれんと思うし」

うーん。モビルスーツの説明をするには、宇宙世紀の、人類同士の宇宙戦争のことから説明しないといけないんだよな。

モビルスーツの制作は、本命を作る前に実験機を作るところからはじまる。だがこの実験機、核反応炉のパワーがメチャクチャすごいため、普通の人間が制御できないようなピーキーなものになってしまっているのである。

その実験機を演習場でないモノホンの戦場に出してその可動データを採取したら、はじめて本命の量産型を作るというマッドな制作方法で作られるのがモビルスーツなのだ。

なのでそのテストパイロットは不思議能力で機体を制御するニュータイプ。しかしアナハイム・エレクトロニクス社などは新作機体をガンガン作るので、ニュータイプの数がとても足りない。

そこでテストパイロットまでも制作してしまった。人工ニュータイプの強化人間がそれだ。

マッドだ。実にマッドだ。

極めて非人道的でありながらそれらの戦場での戦果は著しいので、

実験機はそのまま専用機となつて、パイロットが壊れるまで戦場を駆け回る。それが宇宙世紀の戦争なのである！

……………ムチャクチャだな。こんなのどう説明すれば良いのだろうか？

♠♦♣♥♠♦♣♥

香月夕呼 Side

二人がアラスカユーコン基地に出発して数日後。

仙台の研究所へ帰還する見送りに鎧依が訪ねてきたので、雑談まじりに白銀と山城をアラスカへ行かせたことを話した。すると奴はめずらしく難色を示した。

「それは……………博士にしては少々早まったのかもしれないなあ」

「なによ。アメリカといっても、ユーコン基地は主流のG弾使用派にアンチの戦術機派。高性能戦術機で大陸奪回を目指すプロミネンス計画の本場よ。アンタだってあそこと手を組むことに力をかけたでしょ。それとも何かヤバイネタでも拾ってきたの？」

「ええ。此度の明星作戦におけるアメリカ、いえ第五計画推進派の無警告によるG弾投下。奴らにしてもあまりに強引すぎる気がして独自に調べたのですよ。するとやはり背後に連中を操る人形師がいたのです」

「……………！ 教えなさい。報酬は何でもあげるわ」

「ほう。博士もその存在くらいは感じていましたか。『一つ貸し』ということで話しましょう。人形師の名は『キリスト教恭順派』」

あたしは「プツ」と吹き出した。

「なあに？ 何の冗談よ。あれって『BETAは神の使いで、人類はBETAに滅ぼされるのが神のご意志』なんて頭のおかしいテロリスト集団でしょう？ 仮にも大国アメリカの政治派閥が、そんな人類滅亡を推進する教義にそそのかされて動く、なんてことがありえるのか

しら？」

「ええ。私も最初、それらしいネタを掴んだときは疑いました。ですが恭順派はそのありえないことを成し遂げてしまったのですよ」

鎧依の話は要するにアメリカの有力者にこのように言っていてそのかし、第5推進派へ傾かせたというものだった。

『もし、戦術機で大陸にあるハイヴを攻略できてしまえば、そこに貯めてあるG元素も異星由来技術も全てそこにある国のもの。とくに自国に13ものハイヴを持つソ連は、BETA大戦終結後の次代の覇者となるでしょう。もし、アメリカが世界の覇権を握る立場を失いたくなければ……………』

『G弾でハイヴのある場所を人の住めない場所にして、その国の再生を困難にする』……か。やるわね。確かにそれならアメリカ至上主義の連中なら釣れるわ」

「ええ。恭順派の目的は全人類の抹殺。それがBETAであれG弾であれ方法は問わないのでしよう。同じように世界各国の難民集団も唆してテロを行わせているようですよ」

「驚いたわね。あたしもけっこう人をそそのかすのは上手い方だと思うけど、そのテロ屋には負けるわ。アメリカそのものを人類滅亡の先兵にしてしまうだなんて」

【指導者^{マスター}】。その指導者はそう呼ばれているようです。高いカリスマと不可能なはずの陰謀をなし得る恐るべき者です。当時、小さな信仰集団だった「キリスト教恭順派」を世界最悪のテロ組織にまで育て上げた人類の敵です」

アメリカ最大の権力機構と世界最悪のテロ組織が手を組んだですってえ？

となると、どんな手をつかってくるかわかったもんじやないわね。

どうする？　すぐ二人のアラスカ行きをやめさせて戻す？

……………いえ、ダメね。これはすでに日本帝国技術廠もアメリカの戦術機派もまきこんで動き出してしまった計画。中止はできない。

「いいわ。こつちもそれなりの手をうっておくわ。絶対にそのテロ屋の好きにはさせない」

◆◇♣♥♠◆♣♥
山城上総Side

アラスカ ユーコン基地

輸送機は無事ユーコン基地の滑走路に着き、オレ達はその地に降り立った。

アラスカの広大ですばらしい大自然は、オレを圧倒した。

しかし、季節はもう冬のはじめ。景色は冬の寒々しいものになっており、空気も冴え渡り冷たい。思わず身震いするほどに寒い。

……………決して、目の前のこの子のせいじゃないと信じたい。

そんなオレの内心も知らず、白銀は、出迎えにわざわざ航空路にきた彼女に元氣よく挨拶をする。

「お出迎え、ありがとうございます。国連軍試作戦術機ガンダムタイプ二機のテストパイロットをつとめます白銀武少尉及び山城上総少尉。ただいまユーコン基地に現着いたしました。どうかアラスカ滞在中はよろしくお願いいたします。篁中尉」

世話をしてくれるという中尉さんの名前を聞かなかったことをひどく後悔した。

それはいまだ幼い顔立ちながら、凜々しく成長したよく知る彼女。

髪は誰かのように長くのぼし、冷ややかな強いまなざしでオレを睨んでいる。

「……………ああ、君達の滞在中は私が責任をもって面倒をみよう。よろしく白銀少尉。そして……………山城上総少尉。【XFJ計画】の現場責任の任務についている篁唯依中尉だ」

——— 篁さん!? なんでも君がここに!?

第3章 白のトータルイクリプス

31話 閑話・箎唯依

上総、白銀来訪の前日譚

◆◇♣♥◆◇♣♥

箎唯依Side

——いつの間にか、空を見上げることがクセになってしまった。

あの日、空に消えた彼女の面影を追うように。

——いまも彼女は、人類が失った空を自由にとんでいるのだろうか——

ポンツ

「よっ。相変わらず空を見てぼうつとするのが好きだな、唯依ちゃんは」

X F J計画の日本側の責任者としてこのアラスカ・ユーコン基地に赴任して数日。

仕事が終わわり、基地より出ていつものように夕映えの空を見上げていた時だ。

懐かしい声とともに背中をたたかれた。

「まさか!」と思いつつも振り返ると、やはりそこにはあの人があった。

「おじ………巖谷中佐?! どうしてユーコン基地に?!」

頬に大傷がある、いかつい顔ながらも優しい表情をした、大好きな叔父様。

帝国第壹技術廠の巖谷榮二中佐がそこにいた。

「仕事さ。どうしてもユーコン基地こに俺が赴いて調整しなければならぬ案件ができてね。そのおかげで唯依ちゃんの顔を見れたのは嬉しい役得だ」

「い、巖谷中佐！　ここで子供あつかいは困ります！」

「はっはっは。なに、俺もまわりに人がいたら、さすがに日本側の開発主任を『唯依ちゃん』なんて呼ばないさ。奇跡的に唯依ちゃんだけだったんで、久しぶりに呼んでみたくなったのさ」

この人の前では私はいつも子供にもどつてしまう。

もう日本戦術機開発技術の現場責任としてアラスカにまで来て、日本の国運を担うプロジェクトを任されている立場だというのに。

「さて、叔父姪の間柄はここまでだ。これから計画の上官として任務の話をする。帰宅前で悪いが、ブリーフィングルームへ来てくれ」
「了解いたしました。篁中尉、ただいまよりブリーフィングルームへ赴きます」

私は気を引きしめて敬礼をする。

どうやら計画に大きな転換があつたようだ。

叔父さまがわざわざユーコン基地に来たことから、その重大さがある。うかがえる。

ブリーフィングルームの広い部屋には私と叔父様の二人だけ。
しばらくここを借り切ったという。

そして叔父様は話を切り出した。

「国連軍日本支部より試作戦術機が二機、演習に来る。篁中尉にはその機体の演習の手配と警備。およびテストパイロット二名の世話と検査の主導をとってもらいたい」

「どういうことですか？　いえ任務に否はありませんが、このXFJ計画には日本の戦術機開発の未来がかかっているはずですよ。一刻も早く不知火の改修機の完成をのぞまねばならぬときに、他の戦術機の世話などをやいているヒマなどあるのですか？　ハイネマン氏も、ここで計画を遅らせる事案に文句を言ってくるのでは？」

「この話をうけたのは他ならぬハイネマン氏自身だ。話がきたとき

に即刻、受けてしまったそうさ。おかげで帝国もユーコンも、国連日本に相当の借りをつくってしまった。まあそれはこっちの仕事だが」

「ハイネマン氏が？ 彼はこのXFJ計画に相当の情熱をもって取り組んでいるように見えました。まさか他の戦術機に浮気をするような方とは。私の見込み違いでしたか？」

「はっはっは。『浮気』か。たしかに戦術機は女に似ているな。だが、こちらもハイネマン氏を責められんよ。佳人がかの『Z』であるならばな」

!!?

「そしてその開発衛士テストパイロットの一人。それは、かつての貴様の僚友だ。かつて私と貴様がとり逃がした因縁の彼女だ」

「まさか!？」

「山城上総少尉。彼女が来る」

!!!!!!

「で、でも、彼女も『Z』も明星作戦で失われたとの噂がありますが？ 『G弾に巻き込まれた』という話はガセだったのでしようか!？」

「……………貴様の精神的負担を鑑みて、未確認の噂レベルの話としておいた。だが実は、かの機体は爆心地の中心にあったのだ」

「ええっ!？」

「帝国としても、あれを生き延びて健在な機体と彼女には興味がない。計画を多少遅らせてでも、調べる機会を逃すわけにはいかないのだ。やってくれるか？」

「……………はい。いえですが、彼女は脱走兵となっているはずですよ。そのあたり、帝国斯衛としてどのように対処すればよろしいのでしょうか?」

「それは取引によって無かったことにされた。山城上総少尉は京都防衛任務の後、国連軍に出て日本支部へ所属。大東亜連合への協力任

務を経て、この任務についた………ということだ」

裏取引でそういうことになったのか。

罪を取引で消すなんて“汚い”と思わないでもないが。

でも山城さんが日本に帰れるようになったのは、素直にうれしい。

「了解いたしました。篁中尉、出向してくる二機の試作戦術機。お

よび二名のテストパイロットの手配を請け負います」

敬礼とともに声を張る。

「うむ。話すことはできないが、この機体“Z”こと「Zガンダム」には、様々な上の思惑がからんでいる。貴様が考える以上にこの任務は大きい。それだけは心にとどめておいてくれ」

「はっー」

決意を示すように直立不動の姿勢をとり、敬礼も再びした。

◇ ◇ ◇

叔父様から話を聞いてから数日間。

私は基地内の居住の手配や格納庫の準備などを完璧にやった。

彼女が使うことを考えると、自然と熱が入ってしまったのだ。

そして来訪の当日。ユーコン基地航空路。

私はいつもしているように、航空路で空を見上げていた。

今日は幻ではない、本物の彼女を待ちながら。

「タカムラ中尉、寒いでしょう。車の中で待ちませんか？」
私の助手についてきてくれたCPオフィサーのカナレス伍長が隣で言った。

自身もブルブルふるえて寒そうだ。

「ありがとう、でもいいんだ。このまま待たせてくれ。貴様は私にかまわず車内に居ていいんだぞ」

「そんなこと出来ませんよう。上官を外に出して自分だけ車内にいるなんて」

「すまん。どうしても、こうして待ちたいのだ」
つき合わせるカナレス伍長には悪いが仕方がない。

こうしていなければ、あの日からの見上げた日々が嘘になってしま
う気がするのだ。

私はまた空を見上げた。

——私の唇を奪い、空へ逃げた彼女。

戸惑い悲しみ怒り憂いて。

それでも、私は彼女のために祈っていた。

もどるはずのない飛行機を、空を見上げて待っていた。

もう一度、あの空から私の元へおりてくる時を——

「あっ！ 中尉、来ました！ あの輸送機がそうですよ！」
空にポツンとあらわれた輸送機を指刺して彼女は言った。

やっと寒さから解放されることで、子供みたいにはしゃいでいる。
私もそれを見て、少しばかり心躍った。

「空を見上げるのも、もう終わりかな」

「えっ？」

「……………いや、なんでもない。さて、世界中を騒がせた戦術機を運
んできていただいたテストパイロットだ。手厚く歓迎するでしょう
か」

輸送機はいつしか轟音が聞こえるほどに近づき、着陸態勢にはいっ
た。

私はいつの間にか笑みを浮かべていた。

32話 とおい異国にてめぐり逢う

とおい異国アラスカにてオレと彼女はめぐり逢った。
さほど時はたっていないのに、みちがえるほどに篁さんは大人になっ
ていた。

「着任、ご苦労さまです山城少尉。【XFJ計画】開発主任の篁唯依
中尉です」

「リダ・カナレス伍長です」

わざわざオレの前に立つて敬礼する篁さん。

ついでに彼女の部下みたいな国連軍の制服をまとった少女も。

何か言えっか。

やれやれ、意地が悪いな。

仕方なくオレは篁さんに敬礼を返す。

「お久しぶりです篁さん。もう開発の主任を任されるなんて、優秀
ですわね」

「ええ。山城さんも生きていてくれて嬉しいです」

それは皮肉ではなく、本当の彼女の気持ちのように見える。

あの日見た、ひたむきな少女だった頃のような顔をしている。

逃げ出したときの罪悪感の痛みがよみがえってきた。

「篁さん。あの、わたくし……………」

「ようやく返せます」

「返す？ わたくし、篁さんに何か貸していた……………」

—————
パアアアンツ

いきなり彼女は手をふりあげ、オレの頬を平手打ちした。

その音は大自然の空にたかく大きく響いた。

「え、ええええー!? 中尉!?!」

「篁中尉、いったい何を!?」

制服少女も白銀も驚いている。

そんなオレらの気持ちもかまわず、彼女はスッキリしたような顔で

笑った。

「あの時の私の思いです。ようやく返せました」

……………痛い。

すごく鋭い平手打ちだった。剣の腕は鈍ってないな。

されどオレは姿勢は崩さず頬もおさえず、直立不動。

篁さんから目もそらさない。

「……………気丈なのは相変わらずですね、山城さん」

「ええ。あなたの前で頬をおさえて怯えた目をするなんて、自分が許せませんから」

そんな強がりを言うと、なぜか篁さんはちよつと嬉しそうな顔をした。

それをあつけにとられて見ていた白銀と制服少女。

おずおずと白銀が代表で声をかけてきた。

「あく篁中尉。何やら上総……………山城少尉に遺恨があるようですが、これで『終い』ってことでいいんですか？ 任務に支障がでたりは……………」

「ああ、失礼。白銀少尉。無論、小官は任務に山城少尉への個人的感情を持ち込むようなことはいたしません。軍人としてはZガンダムの活躍のおかげで戦術機開発の関心が高まり、計画の賛同者が多数集まったことで進行が早まったことに喜んでおります。計画の発案者【巖谷中佐】もお礼を言うよう、言っておられました」

篁さんが白銀と話している間、CPオフィサーのカナレス伍長という娘は彼女に聞こえないよう小さな声でオレに聞いてきた。

「えっと、ヤマシロ少尉。タカムラ中尉といったい何が？（ヒソヒソ）」

嘘のつけないオレは正直に答えた。

「昔、別れ話が起これてしまいましたの」

「女同士なのに!？」

ああ、声大きい！

ほら、篁さんにジロツと睨まれた。

ともかく無事にアラスカ・ユーコン基地に到着したオレ達。

車で司令部ビルへ連れていかれ、まずは『プロミネンス計画』の責任者であるクラウス・ハルトウィック大佐に着任の挨拶へと向かった。

そこでうけた説明によると、Zガンダムの活躍は戦術機開発の業界を大きく刺激したようだ。

この【XFJ計画】も、通常なら1、2年は先になる見通しだったのに驚くほど早く進んで、現在はテストパイロットによる調整段階に移行しているのだという。

それに加え、香月博士からもたらされた技術によってさらに加熱するであろう、とのことだ。

どうやら『戦術機技術の発展でG弾不要論を高める』という博士の目論見は順調のようだ。

あと何も言われなかったが、ほっぺの紅葉はやけに注目された。

次に案内されたのは、テストパイロットの試験小隊隊長のところだった。

彼は中東系の壮健な士官で、『中尉』という階級も低すぎると思えるほどに戦士の貫禄のある男だった。

「私はトルコ軍から派遣されているイブラヒム・ドール。階級は中尉だ。試験部隊【アルゴス小隊】のまとめ役のようなものだと思っ
てほしい」

オレは彼の自己紹介した名前に、ふと聞き覚えがあることに気がついた。だが？

「中尉……ですか？」

「なんだヤマシロ少尉。私の中尉の階級がどうかしたのか？」

「いえ、大尉ではないのですか？ 以前に大東亜連合にいたときのことです。中東から流れてきた者に、『イブラヒム・ドール大尉』という高潔な部隊指揮官のお話を聞いたことがあります。その英雄的活躍に助けられた者は多く、たいへん尊敬していると仰っています

た。あなたはその『イブラヒム・ドーウル大尉』ではないのですか？」
「……………私は中尉だよ。ヤマシロ少尉、軍人にとつて階級は重大な意味をもつ。今後、私を『大尉』とは呼ばないように」
なんだ人違いか。つまらんことを言つてドーウル中尉の機嫌をそこねてしまったな。

おおかた、同姓同名のその『大尉』が大活躍していることに、コンプレックスでも抱いているのだろう。

気をつけよう。オレはこういうことに鈍感だからな。

「さて。今日のうちに、うちの小隊と君らを会わせようと思つたが、明日にした方がよさそうだな。今日の所は基地及び格納庫の案内をさせよう。ヤマシロ少尉。明日朝のブリーフィングまでにそれは何とかしておくように」

このほつぺ、そんなに目立つのか。

どれだけハデな紅葉を作つたんだ篁さんは。

まだヒリヒリ痛いし。

「どうも申し訳ありませんドーウル中尉。自分らのせいでスケジュールを遅れさせてしまいましたか？」

白銀がきくと、彼は『謝罪は無用だ』とばかり手をふつた。

「いや、どのみち君らの試作戦術機を披露するのはもうしばらく後のことになる。アメリカ側のスタッフがまだ到着していないのでな。こちらの立場的に、アメリカより先に見るわけにはいかんのだよ。ではカナレス伍長。あとは頼んだ」

ドーウル中尉がオレ達の後ろに控えていたカナレス伍長に言うと、彼女は元気よく応えた。

「了解しました中尉。では私、リダ・カナレス伍長がご案内いたします。お二人とも、ついて来てください」

だが基地内の案内のはずが、なぜかいきなりCPの休憩室みたいな所に案内された？

「カナレス伍長。これは？」

「その顔で基地内を歩けませんでしょ。はい、これでほつぺを冷や

してここで少し休んでください」

冷たく濡らしたハンカチを渡された。

「あ、ありがとうございます。ええっと、それで彼女らは伍長の仕事仲間ですかしら？」

案内された席の前にはカナレス伍長と同じ制服をきた二人の女性がいたのだ。

「はい。私の仲間を紹介します。私と同じCPオフィサーのニイラム・ラワヌナント軍曹とフェーベ・テオドラキス伍長です」

インド出身という肌の浅黒い眼鏡をかけた理知的そうな女性と、欧州系の背の小さい小動物みたいな娘が座っていた。

コーヒーなんか出されて、歓談する気まんまん。

なんだ、まさか着任していきなり合コンか？

違うよな。男は白銀一人だし。

「それでヤマシロ少尉。タカムラ中尉と別れたってことは、昔つきあっていたんですか？ 女同士ですけど（ワクワクツ）」

なにいつ!? いったい何を聞いてくるんだこの子は！

「私、じつは同性同士の恋愛に非常に興味があります。タカムラ中尉とどういったお付き合いをされていたのか、教えていただけませんか？（キラリッ）」

ラワヌナント軍曹!? そんなクールな顔できかれても困る！

「あの凜々しいタカムラ中尉の過去とか、すっごい興味があります！ まさか『そっち系』の人だったとか、衝撃の事実！（テンション高っ！）」

あわわわっテオドラキス伍長！ 篁さんをそっち方面にしないで！

あとで恐いから！

ヤバイ！ こいつら、篁さんのゴシップ狙うハイエナだ！

白銀、たすけてえー!!

「ああー女同士の会話に男がいるもんじゃやないな。ちよつと出ていくから、終わったら呼んでくれ。上総」

そうやって白銀は出ていってしまった。

逃げやがった

!!!!!!

33話 姫と野生児のガールミーツガール

まさか日本からはるか離れたアラスカで、篁さんと再会するとは思わなかった。

だが衝撃の再会は、篁さんだけではなかった。

格納庫を案内されている途中のことだ。

アルゴス試験小隊の三人に偶然出会った。

彼らはカリキュラムを終えた直後らしく、衛士強化装備で何やら話していた。

その北欧系美女の衛士がオレたちに気がつき、声をかけてきた。

「あら、カナレス伍長。その二人が今日、日本からいらした？」

「はいブレイメル少尉。あ、本当は明日会う予定でしたけど、今紹介しちやいますね」

紹介された三人は以下のとおり。

イタリア軍から派遣されているヴァレリオ・ジアコーザ少尉。通称VG。ラテン系の兄ちゃんだ。

スウェーデン軍からのステラ・ブレイメル少尉。北欧美人で巨乳。衛士強化装備だと目のやり場に困るね。

ネパール軍のタリサ・マナンダル少尉。アジア系の子供みtainな奴だ。いや女の子なのだが、ワルガキみたいな感じだ。大東亜連合にはよくこんな子供がいたな。

が、そいつはオレの前に歩み出て、顔をのぞきこんで言った。

「よお。また会ったな、お姫様衛士」

「え？ どこかで………ああつ！ ネパール軍の！」

昔、エウーゴの式典でオレにちよっかいかけてきたアイツか！

タリサ・マナンダル。衛士の腕を見込まれて国連軍テストパイロットに派遣されたという奴だったが、まさかここにいたとは！

なんなんだ、このユーコン基地は！ なぜにこうも心臓の悪い再会が続く!?

「なんだ、知り合いなのかタリサ」

「おおVG。コイツ、大東亜連合の傭兵団のお姫様だったんだぜ。」

なんで国連軍にはいったのか知らねーけど」

「唯依姫に続いて二人目のお姫様か。上総姫と呼ぼう」

なっ！ 上総姫ってなんなの!？」

「ふふっ。でもタカムラ中尉より話しやすそうね。日本のお姫様の衛士ってちよつと興味があるから、いろいろ聞いてみたいわ」

なななっ!？」

これはマズイ！
ワルガキ
タリサのせいで、本当に「お姫様」が固定してしまっ！

これは説明して訂正せねば！

「よろしいですか、みなさん。篁さんと比べては、わたくしなど“お姫様”などと呼ばれるようなものではありません。まったく的外れな認識です」

「はあ？ お姫様やってたじゃんかよ。大東亜連合の式典で綺麗キレイな衣装きて、でっかい舞台にあがって。タカムラ中尉をこえるお姫様だぜアంత」

「あ、あれは忘れてください！ 篁さんの篁家は武家最高峰の五摂家に連なる“譜代”と呼ばれる名門の家柄。それに比べ我が山城家は“外様”という、血筋では大きく劣る家格なのです。つまりですね……」

うんたらかんたらクドクドクド……

「……………」というわけなのです。わたくしは只一般の武家の娘。“姫”などという呼称は過分にすぎます。わかりましたか？ とくにマナンドル少尉」

ポカーン

みんな一様に呆けた顔をしている。

そして一番に認識をあらためさせたいワルガキ
タリサはというと……………」

「ムニヤムニヤ……………んん？ 終わったか、お姫様？」

「マナンドル少尉！ あなた眠ってらしたの!？ わたくしが説明している間ずつと!？」

「任務中でもねえのに、いちいち呼び方めんどくせえなあ。タリサ

でいいよ。ふわーああ」

アクビやめろ！ いかにもホトケの山城さんでも怒っちゃおうよ！

「いいえ、あなたなんて“サル”でじゅうぶんです！ これからおサルさん”と呼んでさしあげますわ！」

「ぬわんだとおう!? 上等だあ！」

オレに飛びかかろうとしたタリサ^{サル}だったが、瞬間、みごとなコンビネーションでVGとステラがおさえた。

迎撃体勢をとったオレには白銀がおさえていた。

タリサ^{サル}をおさえながらVGはヤレヤレといった感じで白銀に言った。

「あんたも、お互い苦労するな」

「いや、上総は普段は苦労をかけるような奴じゃないんだが………」

白銀はチラリとタリサ^{サル}を見た。

「そいつと壊滅的に相性が悪いらしい。昔の俺の仲間にもこんな感じの二人がいた」



そしてその夜。

オレ達はアルゴス小隊の連中に連れられ、リルフォートの街へと来た。

ここはユーコン基地に所属する軍人・軍属とその家族をささえる、基地内に造られた都市だ。

そしてそこにある【Pole Star】というバーで歓迎をうけた。

「それじゃ、お二人さんの着任を祝ってカンパーイ！」

「よろしくね。今日はいないけど、ここにはナタリーって友達の子が働いているから、あとで紹介するわね」

「ま、来たんならしようがねえ。せいぜい、がんばんな」
アルゴス小隊はそんな歓迎の言葉を述べる。

気のいい奴らみたいで、しばらく共にするのは申し分ない連中だ
(サル以外)。

「あなた方と行動を共にしますけど、ここのテストパイロットにな
ったわけじゃないんですよね」

「あーあ、そうなんだってな。お二人さんの任務つてのがイマイチ
わかんねえんだが、機密じゃなけりや説明していただけないかい？」

「ええ。俺たちの任務は【ガンダム】という新概念の試作戦術機の演
習をして……………」

つまりオレ達はガンダムの演習をしてその圧倒的な力を見せつけ
る。

そして別便できている政治家や技術者が、その派生技術をここに集
まっている各国の戦術機屋に売りつけるのだ。

もちろん目玉は白銀が香月博士に作らせた新型OS【X^{エクセム}M3】だ。

商売を通じて各国へのつながりをつくと同時に、各国の戦術機技術
の底上げ。

それによつて【G弾不要論】を高めるのが目的だ。

「つまり、お二人さんはセールスマンつてわけか。しかし世界中の
戦術機技術が集まっているこのユーコン基地で、売れるようなモンな
んて出せるのかねえ」

「あらVG。あなた聞いたことないの？ たった一機で六万ものB
ETAを殲滅したつて噂の戦術機のことを。その“Z”がきてるの
よ」

「あれか!? けどよ。そんなトンデモ戦術機がここ以外でできて
りや、プロミネンスもアメリカも何なんだつて話だぜ。なあタケル。
いくらなんでもそりやガセだろ?」

「え、ええつとですね。それは演習を見て判断していただけたらつ
てことで」

「六万はどうか知らねえけどよ。そこのお姫様はマレーシアであつ
た一機で光線級呐喊やっていたぜ。重金属雲もはらねえ正規軍の応
援もナシでな」

タリサルがそう言ったとたん、全員が黙り込んでシーンとなった。

そしてみんながオレに注目。

さつきまで気持ち良さそうに酔っ払いの顔をしていたVGもシラフの顔になってオレを見つめている。

「お、おい。なあ、その試作戦術機って……………」

「質問はおやめになってください。こちらの機密に関わることで。白銀の言う通り演習をお待ちになってください」

そう言うと、アルゴスの皆はハツとしたような顔をした。

「あ、ああ、そうだったな。酔いがまわって脇が甘くなってたぜ」

「テストパイロットとして失態ね。それじゃ話をかえて、コイバナでもしましょうか」

「あらステラさん。あなたの懸想している方でも聞かせていただけるのかしら？」

「私じゃなくて、あなた」

はっ？ オレ？ なんか話せることってあったっけ？

……………ないな。

我ながら見事な枯れ衛士だ。

「残念ですが、聞かせられるような睦事など経験したことありません。恥ずかしながら、そちらの方面は、とんと疎いものでして」

「タカムラ中尉とも？ カナレス伍長が面白い話をしてくれたわよ」

げふう！ あんのゴシップハイエナめ！ なに広めちやってんの!?

「おいおいステラ。唯依姫がどうしたって？ たしかに同じ日本人で境遇なんかも似てそうだけどよ。どんなコイバナ聞いたんだ？」

「タカムラ中尉、カズサに逢うなりいきなり頬をひっぱいたんですって。ほら、カズサの左の頬がうつすら赤くなっているでしょう？

昔ひどい別れ方をした、そのケジメですって」

「な、なにいいいいいい!!!!」

ニヨゴニヨゴニヨ!!」

それじゃ、上総姫は唯依姫と女同士でゴ

ゴニヨゴニヨゴニヨってなんだ！ 何を言おうとして口ごもっている!?

「それって高貴なお方の高尚コウシヨウなご趣味ってやつ!? さすが上流階級のお姫様世界は違うぜ!」

サルツ! 露骨に離れるな! 間違ってもお前なんかには手を出さねえよ!

とにかく落ち着けオレ! 落ち着いて誤解を解くんのだ!

こんなウワサが篁さんの耳に入ったら、オレは破滅だ!!

「女の友情はたまに恋愛関係に似ることがありますわ。別れ話がこじれて泣かせてしまうこともありますのよ」

「友達関係に別れ話とかあるなんて初耳だわ。私、友達はたくさんいるけど、別れ話なんてしたことないわよ。あと、泣かせたの? あのタカムラ中尉を」

エス・イレブン

S-11コード入力! 山城上総機、自爆! 戦死者に敬礼!

くはっ! もうみんな確信に満ちた目でオレを見ている!

だれか助けてええー!!!

34話 狂犬ブリッジス

※時間が少しだけ戻ります。

篁唯依 Side

ここ、ユーコン基地の実際的な司令官であるプロミネンス計画最高責任者のクラウス・ハルトウィック大佐は、着任の挨拶に来た山城さんと白銀少尉との話をしめくくった。

「着任、ご苦労。ユーコン基地はシロガネ、ヤマシロ両少尉を歓迎する。君らは、このタカムラ中尉が主任として指揮下にある「アルゴス試験小隊」と行動を共にしてもらおう。では、指揮官のドゥール中尉に挨拶をしてきたまえ」

それにしてもハルトウィック大佐は二人を妙に詮索していた。

二人を見る目も警戒するようになり強い。

やはり私のつけた山城さんの頬の紅葉がまずかったか。やりすぎた。

だが、大佐が小さな声でつぶやいた言葉が聞こえた。

(若いな。交渉事にも慣れていない。まさかあのコオツキが、本当にただの衛士パイロットを寄越すとはな)

……………？ 大佐はどんな人材が来ると思ったのだろう。

そう思いつつも、私も二人に続き部屋から出ようとしたのだが。

「ああ、すまんがタカムラ中尉。君はこのあと残ってくれ。少し話したいことがある」

「は？ はい。では二人の案内をカナレス伍長に頼みます。引き継ぎをいたしますので、少々お待ちください」

私はカナレス伍長を呼び戻して二人を頼んだあと、部屋に大佐と二人きりになった。

「中尉自ら彼らの案内をしようとしたのか？ 主任のやることではないと思うが」

「上からの意向も伝えたいと思いましたが。それで自分への話とは何なのでしょう？」

嘘だ。私が山城さんを案内しなかったのだが、仕方がない。

「うむ。君にいくつか聞きたいのだが……………」
私はいくつかの大佐の質問に、機密以外を答えた。
その内容は、やはり“Z”に関してのことだった。

「……………ふむ、そうか。到着したうちの一機はたしかに“Z”であるわけだね」

「はい。あの日、崩壊した京都で私が見たそれでまちがいありません。失礼ですがハルトウィック大佐。自分は“Z”の確認のために残されたのでしょうか？」

「今回の件。コオツキがやけに強気なのが気になってね。まさかこのユーコンで戦術機技術の売り込みをするとは」

「たしかに私も“Z”のことを知らねば無謀と思つたらう。」

しかしさつきから大佐が言っている『コオツキ』とは何者なのだろう？

大佐は微かに憂いをたたえた表情で続ける。

「明星作戦によるG弾投下。あれを境に国連の主導計画派と予備計画派。両派閥の動きが活発になった。それにこのユーコンも巻き込まれようとしている」

いきなり内部事情を話しはじめた。

この話は、たかが中尉の私が聞いて良い類いのものか？

「予備計画の概要は知らされています。横浜を壊滅したあのおそろべきG弾をユーラシア全土に撃ち、BETA殲滅をはかるものだから」

「それを知らされているなら話は早い。それに反対する主導計画派が、連携を持ちかけてきているのだ。この“Z”の演習もその一環だ」

私は叔父様がユーコン基地へ来訪したときのことを思い出した。

叔父様は『この演習には様々な上の思惑がからんでいる』と言っていた。

多分、このことを言っていたのだろう。

そして叔父様がこのユーコン基地に来たのも、その連携の交渉のため

めだろう。

「失礼ですが大佐は、BETAを駆逐する手段としてのG弾の使用を、どのようにお考えでしょうか？」

本来ならたかが私ごときが大佐ほどの人物にしている質問ではない。

だがなんとなくだが、この質問の答えこそが私が引きとめられた理由のように思えた。

「無論、反対だ。各国の意向としても、ユーラシアを重力異常にさらす手段はとれない」

「では……………」

連携に参加するのか、とおもったのだが。

大佐はいきなり強く叫ぶように言った。

「だが、国連の主導計画にも疑問をもっている。あえて言うなら、あれは人類最大の詐欺犯罪だ。おとぎ話に天文学的な予算を注ぎ込む愚行だとすら思う」

?!!

そこまで言うのか。怒気すら感じる。

大佐がここまで嫌う主導計画とはいったい？

「君の叔父のイワヤ中佐に伝えてほしい。こちらがそちらにのりしても、消極的協力となるだろう。そして国連日本支部の計画にのりつもりはない。この演習で何を見せられようと、私の意思が変わることとは、決してない」

◆◇♣♥◆♣♥

ユウヤ・ブリッジスSide

アメリカ陸軍グレイムレイク基地

俺の名はユウヤ・ブリッジス。階級は少尉。米国陸軍の開発衛士^{テストパイロット}だ。

現在はここグレイムレイク基地でF-22EMDラプターの実証

試験をしている。

だがある日、上官に呼び出され突然移動を告げられた。

「ユウヤ・ブリッジス。貴官を国連軍へ出向させる。アラスカ・ユーコン基地にて、そこで行われている日米共同戦術機改修計画【XFJ計画】の開発テストパイロット衛士をしてほしい」

こいつは上への追従だけでこの地位についている典型的なクソ上官。

だが、この命令はシャレにならない最悪のクソだった。

「なぜだ!? なぜ俺がアラスカくんだり、僻地にとばされなきゃならない!？」

「貴様は開発テストパイロット衛士としてはたしかに優秀だ。【アメリカ最高】という称号がついたのもうなずける」

俺は手がけた、あらゆるテスト機体の最高値をたたき出すことから、いつしかこう呼ばれるようになった。これは俺の自慢でもある。

「しかし、やりすぎなのだよ。このまま態度を改めなければ死人が出るという意見も多数だ」

「ふぎけるな! 前線じゃ多数の人間が死んでいるんだろ! 後方とはいえ、衛士パイロットが死ぬのにビビッってどうすんだよ!？」

「BETAに殺されるのと人間に殺されるのは大きく意味がちがう。“最高”の裏にある貴様のもう一つの名を教えてやろう。“狂犬”だ。いずれ貴様の暴走は手に負えなくなる。見えている破滅に何の対処もしないようでは、上官として無能なのだよ」

余計なマネをしなくても、とつくに無能だろう!

「てんめえーッ!!」
抑えきれない衝動に拳を握る。

このままヤツのニヤケ面ツラを消したくて仕方がなかった。

だから、俺は――

「フツ。その拳は上官を殴るか? まさに狂犬だな。だがその拳を使う前に私の話を聞け。これから言う私の課題に応えられたなら、この話を流してもいい」

「なに?」

まだ拳は握りしめたまま。
だが、体が止まる。

この先を聞きたいほどには、理性がはたらいた。

「それどころか達成できれば、貴様は名実ともに【アメリカ最高】の称号を手に行けるやもしれんぞ。貴様にピツタリの仕事だ」

「……………言ってみろ」

「ははは、やる気まんまんだな。さすが【アメリカ最高】
イラッ

「部下をなぶるのが有能な上官か？ 俺の理性が拳をおさえられている間に、さっさと課題とやらを言え！」

クソ上官はもったいぶって言った。

「知っているか？ “Z”の伝説を。お前の大嫌いな日本から生まれた、最高にゴキゲンな戦術機伝説だ」

「ああ、ホラだろ」

曰く、たった一晩で六万のBETAを殲滅した。

曰く、時速六百キロで地上を疾走した。

曰く、航空機に変形をした。

まったく物も言えない。

こんな荒唐無稽な話で自分を大きく見せようとする日本人の姑息さには呆れるばかりだ。

「それがただのホラではないらしい。近日それをユーコンに出し、演習を行うそうだ」

「なに？ あのムチャクチャな話を納得させられるだけの機体を出せるのか？」

ピタリ

ヤツは俺を指刺して言った。

「ユウヤ・ブリッジス。貴様、その“Z”の演習の相手をつとめてこい。そして墜とせ。機体は何を使っても良いそうだ」

「……………ほう。では、いま手がけているラプターでも？」

「許可はとれる。もっとも、負けたら貴様の帰る場所はないがな」
俺はやつと拳をひらくことが出来た。

「なるほど。上が何を考えているかわかったぜ。たしかに思った通りのクソ任務だ」

「詮索はよせ。それでは返事を聞かせて貰おう、狂犬」

クソ上官は相変わらずクソのようなニヤケ笑い。

だが、俺も同じように「ニヤリ」と嗤う。

「初めてアンタに感謝するぜクソ上官。たしかにこれは俺向きの仕事だ」

俺はクソ上官に心からの敬礼をした。

35話 ソ連とフレンドリー撮影会

ようやくアメリカ側のスタッフが今日到着するそうだし、やっとなれ達の任務であるガンダム演習を行なえる。

「演習は明日の予定だ。」

さて、演習前日である今朝のブリーフィング。

だが急遽本日、アルゴス小隊に広報のための撮影任務がはいったことをドーウル中尉が告げた。演習場の整備や撮影機材の関係だそうだし。

内容はソ連の戦術機とこちらのF-15・ACTVとの共同撮影。だがオレはこれに、大いなる破滅の危機があることを発見した。

この破滅をさけるべく、オレは果敢に諫言を行うことを決行する。

「東西両陣営の雄・アメリカとソビエトの実験機が、母なる地球の象徴であるアラスカの大自然を背景に、エレメントを組んで飛ぶ———ですか。素敵な絵ですわね。まさに国連の提唱する『人類の大同団結ここにあり！』の素晴らしいスチールとなるでしょう。もし………」

タリサをチラリ見る。大いなる破滅の元凶を。

「乗るのが、このおサルさんでなければッ、ですがッ！」

「ああー？ どういうことだテメー！ アタシの腕がこの程度もできないうへっポコでも言うのかあ!？」

そう。こちらのF-15・ACTVに乗る衛士が、よりもよってこのタリサ・マナンドル。

コイツが、共産主義思想で脳をやられているであろうソ連の衛士となかよく撮影などできるはずがない。

「マナンドル少尉！ 発言は許可をとってからにしろ。ヤマシロ少尉も仲間をサルと呼ぶのはやめろ」

どうでもいいがこのブリーフィングの光景。

『とある学園の授業風景』とかいっても通用しそうだね。

とにかく仕切り直し。

「衛士としての腕はけなしません。むしろ大きく秀でたものがある

ことを認めましょう。ですがこの任務に求められるのは品性。マナ
ンダル少尉にソ連衛士と仲良く撮影飛行ができるとは思えません」

全員の顔を見回したが、一人をのぞいて全員「もつともだ」と言う
顔。

一人はもちろん『強ければよからうなのだ！』なバーバリアン思想
のタリサ。

「この任務に限っては、ジアコーザ少尉もしくはブレーメル少尉。
どちらかが代わりにF-15・ACTVに乗ることを愚考いたしま
す。ドール中尉、いかがでしょう」

しかしオレの誠を尽くした諫言は届かない。

アルゴスは破滅の昏い道を歩み行く。

「まさに愚考だな。撮影の求める飛行はかなり難易度が高い。両名
ともしかるべき時間があればこなすだろうが、撮影は今日だ。
F-15・ACTVに乗り慣れ、操縦技術に優れるマナンダル少尉に
まかせる。マナンダル少尉、ヤマシロ少尉の心配は杞憂だな？」

「もちろんです！ ヤマシロの心配することなど何ひとつ、まった
く起こりません！」

盛大にフラグ立ててるし。

さて、演習前日の今日よりやっとZガンダムに乗れる。

オレと白銀の今日の予定は、互いのガンダムの機動チェック。アル
ゴスは撮影だ。

正式な衛士となったいま、さすがにオレ一人だけパイロットスーツ
はもう着れないので、あの恥ずかしい衛士強化装備を着なければなら
ない。ただし対G性能は普通のものより格段に向上させてある。

アルゴス小隊とともに衛士強化装備を着て格納庫に集合した。

互いのチームごとに今日の予定を確認する。

「上総。タリサより自分の方は大丈夫なのか？ 俺達の演習は明
日なんだぞ」

「ご心配にはおよびませんわ。わたくしは齢七つにして城内の式
典作法を完璧におさめ、模範をつとめたこともあるのです」

「いや、俺達の任務は品性より腕の方が重要なんだが？」

「山城上総に隙は微塵もありませんっ！ わたくしの心配は雫の一滴すら必要ありませんことよ！」

「俺には、そのセリフがフラグをたてているようにしか聞こえない」
白銀が何か言っているが無視だ。

隣のアルゴス小隊にも堂々と宣言する。

タリサは「こいつウゼエ〜！」とかほざいた。

「衆人観衆の中でハデに転んで泣いちまえ。お姫様」

「ソ連衛士と乱闘して営倉にブチ込まれなさい。おサルさん」

「ぐぬぬうう！」と、にらみ合うオレ達。

そこにアルゴス常識人二人がたしなめる。

「やめなさいタリサ。二人とも任務で争わないの。ミスが出ないよう、互いにフォローしあうのがチームよ」

「まっ、タリサのお守りはこちらの役目だ。互いに相手の仕事には口出しせず、自分の仕事を完璧にこなそうぜ」

しかし、これで互いに任務に出るのは少しおもしろくない。だったら……

「ではタリサさん。わたくしと賭けをいたしましょう」

「はあ？ 何をだよ」

「もし、あなたが撮影任務を滞りなくこなしたなら、わたくしは以後あなたをサル呼ばわりはいたしません。そちらも、わたくしが演習を完璧にこなしたなら“お姫様”と呼ぶのをやめなさい」

ステラ、VGは「なるほど」というようにうなづく。

「いいんじゃないかしら？ 仲直りのきっかけになりそうだし」
仲直り？ 的外れだなステラさんよ。

オレは確信している。以後もオレはアイツを『サル』と呼び続けることを。

そしてアイツのお姫様呼ばわりをやめさせる完璧なプランだ。

「整備の連中に面白いバクチを提供してやれそうだぜ。タケル。あんたもやろうぜ！」

まるで銀行のようなバクチだなVGさんよ。

【オレの成功・タリサタルの失敗】に預ければ、利子がついて返ってくる。
「仕方ないか。上総のお守りは俺の役目だしな」

お守りなど必要ない。オレは完璧だ！

「しかしよタリサ。真面目な話、さすがにここまで舐められっぱなしじゃ、同じアルゴスとして立つ瀬ないぜ」

「そうね。衛士は戦闘だけじゃなく、あらゆる状況に対応し、滞りなく任務をこなすことも重要な資質よ」

「ああ、わかっているよ。ガキじゃないことを証明すりゃいいんだろ？ ひとつソ連の冷血女どもと仲良く握手でもしてくるぜ」

撮影任務の機体搭乗前に、アルゴスの三人はソ連衛士の待機所へと向かった。

これは見のがせない。

「白銀、わたくしも行ってきますわ。あのおサルは確実にやらかします。なので決定的瞬間を見て、悪役令嬢のごとく笑ってさしあげねば」

「……………ほどほどにな。本当に仲が良いな、お前ら」

さて。ソビエトチームの待機所。

そのソ連女衛士に、今日の撮影フレンドリーよろしくをしに行ったタリサタルの結果はというと……………

—————
パアアアアン!!!

「……………なっ……………にすんだゴルアァー!! (怒)」

握手に差し出した手を見事に振り払われました。

予定通り悪役令嬢のごとく。気高く声を響かせて。

「おーっほほほほほ！ さすがは冷血ソビエト。おサルさんと握る手は持っていないということですか」

幼い雰囲気キョウキの少女衛士を側に連れているソビエトチームの女衛士は、そんなオレをジロリと見る。

「馬鹿笑いはやめろ享楽主義者。人前で声をたてて笑うなど、お前

は本当に衛士か？ 西側の衛士育成機関は欠陥だらけのようだな」ムカツ。

「山百合にケンカをお売りになる？ だいたい何ですの、その子は！ そんな子供を連れ回し侍らせ、くつつきながら待機なさるのがソビエト衛士の流儀でいらっしやいますの!?!」

少女に指刺して言うのと、女衛士は指先から少女を守るように前に立つ。

「……………イーニアはれつきとした我が国の衛士だ。復座仕様となつている私達の機体に、私とともに搭乗する大切なパートナーだ」

なにい!?! たしかに衛士強化装備をつけてはいるが、訓練兵かと思つたぞ。

「百合^{ゆり}百合^{ゆり}が趣味のこの女が、任務にかこつけて随伴させ、隠れてイチャコラしてるのかと思つたぞ!」

「我々はなれ合いを好まない。二度と近寄るな……………いや、貴様。さつきイーニアを侮辱したな。その罪、安くはない。覚悟しておくんだな!」

うわっ視線イタタツ痛い!

ヤバイ! もしかしてオレもやらかした!?!

36話 翔んで紅の姉妹

あのソ連の女衛士たちは、西側の間で「紅の姉妹」と呼ばれているそうだ。

姉のクリスカ・ビヤーチエノワ。

妹のイーニア・シエスチナ。

名字がちがうので血はつながっていないのかもしれないが、二人ともよく似ていることと、本当の姉妹のようにいつもいつしよにいることからそう呼ばれているようだ。

秘密主義のソ連らしく彼女らの詳しいことは何もわからないが、訓練などを垣間見た者の話では相当のスゴ腕らしい。

オレはその妹、イーニアがやけに気になっている。

「まさか………ねえ。あり得ないはずですが」

オレの眩きに、脇に置いてある丸型ロボが反応した。

「どうしたの？ さつきから集中ができていないけど」

「ハロ!?! いましゃべっちゃダメでしょう！ 篁さんに聞かれてしまいますわ」

現在オレと白銀は基地の端の演習場にて、篁さんの指揮のもと互いのガンダムの機動確認中。

実はこのアラスカの任務中はオレ達は篁さんの指揮下にはいつているのだ。

演習の段取りなんかも彼女がやってくれている。

つまり彼女は指揮官として常にこちらをモニターしているのだ。

「大丈夫。ゼータのコクピット内の声はボクが外に出すものを選択できるから。それより何か気になっているの？」

「ええ。実は〃紅の姉妹〃の妹の方なのですが。〃共感〃を感じたような気がしたのです」

「それってニュータイプ同士が近寄るとおきるアレ？」

ハマーンが屋敷に忍び込んだジュドーを感じたアレだったり、アムロが「シヤアかー」とか言ったりしたときのソレだ。

「つまりイーニアあの子もニュータイプかもしれません。ですが………」

「ですが?」

「ニュータイプは人類が宇宙に進出する過程で進化してなった存在。この世界の人間が進化する必然性はないはずです。であるなら、あの子はいつたいたいどのようにして?」

「謎だね。けどいまは演習に集中しよう。考えれば謎が解けるわけもなし。ボクたちに答えを知る術があるわけでもなし」

……………そうだな。何よりいまは篁さんが見ている。

昔、彼女に『虫唾が走りますわね。あなた達の関係。さんざんぶら下がって甘やかし放題。見るに堪えませんわ』なんてキツイセリフを言った手前……………

いやいやオレは言っていない。そんな冷酷なセリフ!

「たしかに今は任務中でしたわね。それに万一ですが、あのタリサおサルが撮影任務を問題なく遂行できた場合。こつちはそれ以上の成果をたたき出さないと気が済みませんわ!」

「すっかり女だねえ。ま、あれでもこのユーコン基地のテストパイロット。つまり衛士のエリートだ。撮影任務の半日くらい……………」

ピーーツ

そのとき緊急通信がはいった。νガンダムの白銀からだ。

『篁中尉、上総、上空十時の方向だ!』

白銀に言われるまでもなく、すでにその方位からの異変は感じ取れてはいた。

が、実際見てみると驚愕した。

—————「な、なんですかの!?!」

『バカな! マナシタル少尉!?!』

そこには二機の戦術機が猛スピードでこちらに飛行してきていたのだ。

それは撮影任務をしているはずのタリサおサルのF-15アク・ACTVティとソ連のチエルミナートル。

それらがもつれるように格闘機動ドッグファイトをしながらこちらへ向かってい

る。

追われるF―15・ACTVは高度なきりもみのような急速回避運動をとり続け、その動きは衛士の技量の高さをうかがわせる。本当に腕だけはいいな、あのサルは。

されどそれを追うチェルミナートル。

それほどの動きを見せるF―15・ACTVに対し、なんと常に背後をとり続けている。

まさに、それは通常ではあり得ないほどの技量。

……………ニユータイプ？ やはりか？

——ゴオオオウツ!!

それらは轟音とともにオレ達の上空を走り抜け、彼方へと飛び去っていく。

あまりに信じられない光景に呆然となって見送った。

「なにをやっていますの、あのおサルは。撮影が『友好のエレメント』から『友好のドッグファイト』にでもなりましたの？ 『傷つけあいなながら芽生える友情』とか」

私たちは殴り合わなきや相手のことを何もわからない。

戦術機でしか気持ち伝えられない。

国境を越えたテストパイロット達は友情ゆえにぶつかり合う。

私と君との間に、いま小さな花が生まれた。

この冬。

ユーコン基地がおくる、一番の心暖まる感動ストーリー。

『国境を越えたエレメント』

撮影快調！

「今日一日の撮影じゃエンディングまでいけないねえ」

やはり普通に考えるなら、あのおサルはやらかしたのだ。

生身の乱闘くらいは予想していたが、まさか戦術機で格闘機動とは

！

オレの予想すら越える、どこまでも恐るべきヤツよ。

「まったく。推進剤が切れるまでやらせておきなさい。実弾を装備しているはずもなし」

『いや、F-15・ACTVは被弾していた。このままでは墜とされる』

!!!?

白銀の言葉に戦慄がはしった。

それでは本物の戦闘行為ではないか！

「被弾!?　なんで実弾なんかつんでいますの！　撮影任務なのに!?」

篁さんが説明してくれた。

『撮影には銃撃シーンも予定されていた。突撃砲を斉射する派手な絵もほしいらしくてな。待っててくれ。とにかくCPに連絡をとって状況を聞いてみる』

だが状況を見たところ、あのソ連衛士・紅の姉妹とやらは相当ぶつとんだ奴だ。

何があつたにしろ、実弾で相手を撃つなど普通ではない。いますぐ動かなければ間に合わないかもしれない。

『篁中尉、具申します。見たところ事態は一刻をあらそいます。俺達に救援に行かせてください。ガンダムでなら追いつけます』

さすが白銀。オレより先に決断した。

『いいのか？　その機体は……』

『かまいません。どうせ明日には性能を見せますし』

『篁中尉。こちらにも問題ありませんわ。許可をお願いします』

『山城さん………わかった。CPに要請しよう。CP、こちらp-11で訓練中の篁だ。現在、撮影任務のはずの二機の暴走を見た。それについてだが、こちらで………』

通信の向こうで篁さんがしばらくのCPとの会話のあと。
やがて待望していた答えがきた。

『許可が出た。行け！』

「了解！」×2

瞬間、互いのガンダムは目標が飛んでいった方向へ向け推進する。

「白銀、先行しますわ！」
初期起動後すぐにゼータを変形させ、巡航形態のウェイブライダーへ。

——あの子がニュータイプか否か。答えをもらえるかもしれないな。

そしてドッグファイトをしている二機に向け、まっしぐらに飛行した。

37話 あの日見たZガンダム

タリサ・マナンドルSide

けたたましく鳴り響くロックオン警報。

ヘッドセットからは飛行計画にない行為をばげしく咎める管制官の怒声。

せまいユニット内にこれだけの騒音でおかしくなりそうだったが、そんなものに構っていられなかった。

「ちくしょうっ！ 何でだ!? 何で振り切れねえんだ!?」

背中にへばりつて離れず、ときどきの確に撃ってくるソ連機・チェルミナートル。

自身の技量の限りを尽くし、強度限界ギリギリの回避機動をとっているにもかかわらず、いつまでも引き剥がせない。

きっかけは、あのソ連の冷血女が、アタシの握手に出した手を思いつきりブツ叩いて拒否したことからだった。

機体に搭乗し任務にはいったあともムカつき、あの高圧的な冷血女の顔がまぶたにチラついた。

だからささやかな意趣返しにと、チェルミナートルにロックオンをしてビビらせてやろうとした。

だがその瞬間――

視界からヤツが消えた見え、と同時にそいつに後背に回られ、さらに相手の火器管制が実戦モードになったと警告ダイアログが立ち上がる。

――マジか!? ロックオンされたとはいえ、警告もナシに他国機に実弾向けるなんて!

無論、原因はどうあれ、こうなったからにはこちらも自衛のための回避機動にうつった。

失速起動、旋回、変則、コンビネーション。

技術の限界を駆使し、高Gに耐えながら、あらゆる回避起動でヤツを振り払おうと死力を尽くした。

スカーレット・ツイン
されど【紅の姉妹】の異名をとる相手は、聞いた以上のスゴ腕。いや、もはやバケモノ！

こちらの回避などものともせず後ろに張り付いてくる上、本当に撃ってきた！

結果、予定の空域を大きく逸脱し、演習場を横断し、とうとう航空路にまで来てしまった。

運悪く、目の前に大型輸送機が着陸寸前。

——衝突！…………寸前だったが、なんとかその上をこえて回避。

されど限界は近い。

後ろに注目し、どうにかヤツから逃れる術を探していたときだ。

ふと、ヤツの後ろから奇妙なものが接近してくるのが見えた。

「……………あれは？」

それは妙に未来的なデザインの航空機。

それがこちらのスピードをもともせず、迫ってきているのだ。

「——なあ!？」

驚いたことに、それはそのスピードのまま、いきなり変形して戦術機の人型形態となった。

「はは……………本気かよ。作ったやつ、なに考えてんだ」

その戦術機。かつての昔、見た覚えがあつた。

アタシが大東亜連合にいた頃。

【Zガンダム】と呼ばれる、伝説ともなった戦術機だ。

そしてそこから、やはりあの“お姫様”が通信でがなり立てた。

『マナンドル少尉。何故、わたくしの予言通りの展開になっているのですか！ あなたは本当にサルのですか!? 人間ならあそこま
で言われたなら、意地でもちゃんと成功させますわ!』

「うるさーい！ あのソ連のバカ姉妹が悪い！ こつちが友好的に握手しに来たのに、あの態度はないだろうっ！ だから…………っ」

『いいえ。あれは、あなたの笑顔があまりに怪しく気持ちわるく何か企んでいそうだったからです。わたくしにも妹がいたら、絶対近寄らせません』

「なんだとっ!? ゴラアア!.....うあっ!」
ドカンッ!

機体を揺さぶる激しい衝撃。

ダメージ警報が鳴り響き、またしても被弾したことを理解。今度は致命的だ。

機体の推力がおちて速度維持ができず、グングン高度が下がっていく。

『本当に撃った!? マナンダル少尉、そいつはこっちで引き受けます。あなたはそのまま着陸を!』

「気をつけろ……っ。そいつはスゴ腕な上にいかれてやがる。本気で撃ってくるぞ」

そんな負け惜しみを言うので精一杯だった。

損傷チェックを見たところ、右肺面の強化スラスタと右の跳躍ユニットがやられていた。

お姫様が紅の姉妹を引きつけてくれることを祈りつつ、姿勢制御に全力を尽くすしかない。

開発衛士の意地として、機体を捨てて脱出なんてできないんだから。

——悔しくて涙が出た。

紅の姉妹にはアタシの何もかもが通用しない。

十数分の近接格闘機動の中、それをイヤというほど思い知らされた。

渾身の回避機動も、F-15・ACTV限界までの加速も、まるでなかったかのようにチェルミナートルは、次の瞬間には背面にピツタリついている。

ここまでアタシがどうしようもなかった相手はいなかった。

「だけど」負けを認めることだけは出来ない。

アタシの中の何かがそれを拒絶する。

これはアタシの中に流れる勇猛なグルカ族の血と誇りか。
だから叫ぶ。

「おぼえていろよっ チクシヨオーツ!!!」

◇ ◇ ◇

滑走路脇のうずたかく盛り上がった土砂。

そこがあたしの不時着した場所だった。

無敵だったF-15・ACTV。^{アクティブ・イーグル}

それは情けなくもジ・エンド兵士のごとく仰向けに空を仰いでいる状態だ。

どうにか機体の損壊は免れたが、復活できるかは整備次第だろう。

「ああ、くそっ! あいつら……っ! そうだ、あのお姫様は無事か!? まさか、この上に落ちてきたりなんかしねえよな?」

あたしはチエルミナートルを引きつけているはずのあのお姫様が気になり、上空の様子を拡大望遠で確認した。

——その瞬間

機体の先行きより、これからのことより、そしてあたしをさんざん追いついて墜としてくれた、あの「^{スカレット・ツイン}紅の姉妹」の恨みより、なお

拡大望遠で見るその光景に、あたしは新たな悔しさが湧き上がった。

——「チツクシヨウ。やっぱあのお姫様、”本物”かよ」

その空中には、お姫様が駆るZガンダムとチエルミナートルが猛烈な格闘機動を繰り広げている光景があった。

そしてあたしの時とは逆に、チエルミナートルはZガンダムに常に背後をとられ続けていた。

それを引き剥がそうと猛烈なスピードと旋回で動き回るチエルミナートル。

されどその背後に影のようについて離れないZガンダム。

さながら二機は激しいダンスでも踊っているかのように華麗に空中を舞っていた。

「……ははっ、アイツに手も足もでなかつたあたしは何なんだ」
ふと大東亜連合にいた時代にきいた赤、青、白のトリコロールカ

ラーの戦術機の伝説をおもいだした。

それはBETAの大群をもとせすなぎ払い、レーザー照射の嵐をも突き抜け光線級呐喊を為すただ一機の戦術機の伝説を。

どこの国で作られたかもわからない、されど無敵の戦術機。

それはあの日きいた伝説そのままの姿だった。

「ちくしょう。あんなお姫様に負けているだなんて、信じたくなかつただけどな……………」

青い空の向こう。

いくつもの高難易度の回避機動を高速ピードでくりかえす二機。

それはまるで終わりがないうだった。

いつしかあたしは悔しさも忘れ、ただ、その華麗な動きに吸い込まれるように見入っていた。

「……………きれいだ。まるで舞踏会のダンスだな、お姫様」

38話 対決！ 上総 VS 紅の姉妹

——「くううつ！ なんてヤッツ！」

また何度目かになる、背後へまわつてのロックオン。

ゼータ相手にこの状態になったならば、この世界のいかなる戦術機も逃れる術などない。

——そのはずだった。

「うくつ、またっ！」

だがチエルミナートルは、またしても瞬間にロックを外した。

あろうことか、ヤツは逆にこっちの背後へまわろうとする！

その気配を瞬時に察知したオレは、機体を最小半径で旋回させ、またしても相手の背後を狙う！

だがさらにさらに、ヤツは複雑すぎる螺旋機動でまわりこむ！

——信じられない！ 本当にコレが戦術機の動きか!?

A級ニュータイプ能力を持ち、グリップス戦役随一のモビルスーツ「Zガンダム」を駆っているオレをして、そんな驚愕をおぼえる。

信じられないことに、このソ連機・チエルミナートルはゼータと互角の機動戦を為している。

その様は正に荒れる波濤か暴れる狂鳥。

最小半径で暴風のように飛び狂い、疾風の速さで旋回機動をとり続ける。正に神業！

「だったら、もう出し惜しみはしません！ バイオセンサー起動！ ニュータイプ能力も”先読”みまで深化。

光線級を相手にする高機動モードになると、常に背後をとり続けるようになった。

だが、このZガンダム。ロックオン照射はできるものの、じつは銃器を装備していないのだ。

いや、実弾装備なんてしてないこちらの方が普通なのだが。

実体の伴わないロックオンなんて無視されるので、ゼータとチエルミナートルはもつれ合うように互いに互いに背後をとりあう。

——くそっ！ 撃てないのが本当につらい！

だが、どれだけ難しかろうと、背後を完全にとってコイツを止めるしかない。

しかしこんな攻防は、まるで本家「Zガンダム」のモビルスーツ戦だぞ。

チラリ視界の先に見えた輸送機にあやまる。

航空路の真上でこんなことをしてて、着陸できないでごめんない。

———何故だ!? なぜ私達より上をいく?

わたしたちより優秀なやつなんていたら———

わたしたち、いらなくなっちゃう!

プラーフカを! プラーフカをもう一段階あげてください!

なんか、中の紅チャツの姉らの思念の声まで聞こえてきた。

オレのニュータイプ能力は戦闘以外はポンコツで、見える『色』があさつての方向にいつてしまうこともしばしば。

こんな風に相手の思念が言語化までして聞こえるなんてことは初めてだ。

それにしても奇妙なのは、中の二人の考えていることが完全に一致している。

本当に寸分違うことなく完全に同じ?

———「うつ!? うああつ!?」

チエルミナートルからの殺ブレスンヤー気が増した!

と同時に、ヤツはさらに荒れ狂い、動きは獣じみたものへと変化する。

“先読み”で見るヤツの攻撃が加速度的に増えていく。

雷の雨を捌いている気分だ。

躲す躲す躲す躲す躲す躲す躲す躲す躲す! 躲……………

タタツ タタタタタタタタタタタタツ

———「なっ!?!」

完全な死角から35mm弾が飛んできた。

反射的に避けはしたもののおどろいた。
コイツ、ニュータイプを超えてきた!?

くそっ! もう出し惜しみなんかしてられないっ!

「バイオセンサー、フル稼働! ハロ、ついてきてください。わたくしは止まりませんから!」

「ああ! 止まるんじやねえぞ上総!」

バイオセンサーをフルに稼働した後も――

驚いたことに、それでもチエルミナートルはこのドッグファイトについてきた。

鋭いプレッシャーと複雑すぎる機動は、ときにZガンダムを圧倒した。

だが、その恐るべき機体とはうらはらに。

きこえる姉妹の思念は悲鳴となり、意味不明なものとなっていた。

――そうか。彼女らも止まれないんだな。

この攻防を穩便にすませることは不可能だ。そう見切った。

だったら――抜く!

無限とも思えるドッグファイト。

躲し躲されの螺旋から、ようやく二機が止まる瞬間がきた。

オレはビームサーベルを抜き、切っ先はチエルミナートルの管制ユニットへ。

相手はゼータのコクピットに突撃砲をロックオン。

ピタリ互いの急所を狙ったまま、どちらも微塵も動けない。

緊張でヒリつくオレに、ハロは心配そうにたしなめた。

「上総。ぜったいに『ブスツ』とやらないで。相手が実弾であろうと、ゼータのコクピットブロックは貫けないから。殺っちゃうのはもちろん、機体に傷つけるのもダメだよ」

「……………ええ。わかってはいますが、抜かされましたわ。いったい何

なんですか？ A級ニュータイプのわたくしと互角の存在だなんて」「ソ連の機体だよ。だったら強化人間みたいなものじゃないかな。それよりこれからどうする？ 相手に撃たせて終わりにする？」「それもよくありませんわね。相手の立場を追い込んでしまうかもしれない」

とにかくもう一度呼びかけてみようか、と考えていたときだ。

いきなり近距離通信がはいった。

『双方、武器をおろせ。互いの基地^{ベース}へ帰投するんだ。互いにここで争う理由はないはずだ』

白銀の声!?

気がつくのと、いつの間にか近距離にレガンダムがきていた。

もつとも武装は何も持たずの丸腰だ。

レガンダムは互いの腕が交差するあたりにとまった。互いを牽制するように。

「白銀。来ましたか」

『アーガマ1だ。アーガマ2、まずはそちらから武装をおさめて帰投しろ』

「アーガマ」がオレ達のコールサインだ。

もちろん、Zガンダムの母艦からとった。

「……………アーガマ2了解。これより帰還いたしますわ」

オレはビームサーベルをおさめると、ゆつくりとチエルミナートルからはなれていく。

後方を確認したが、チエルミナートルはZガンダムとレガンダム^白の両方にしかける様子もなく、止まったまま。

やがて白銀もこちらに來ると、チエルミナートルもソ連側の基地へと進路をとって小さくなつていった。

微かな戦闘の余韻を残してこちらにも帰投する。

——「しかし乗ってたの、本当に人間かな？」

帰還の途中、ポツリとハ口が言った。

「ハロが言うとは奇妙な感じがしますね。そう感じるほどの腕前でしたが、ちゃんと人間でしてよ。ニュータイプ能力で二人の搭乗者の意思を感じましたもの」

「いや操縦技術もだけどき。じつは格闘機動ドッグファイトのとき、生じるGがゼータの”対Gシステム”でも吸収しきれない程になったんだよ。バイオセンサーが発動して自動的にサイコフィールドを張ったから感じなかっただろうけどき」

「……………え？」

つまり本来は、内臓が締め上げられ圧壊するほどのGが、衛士バイロットにかかったことになる。

それほどの超加速Gの中に居たのは相手も同じ。

……………だとしたら？

「ハロ。相手の”対Gシステム”がこちらより優れている可能性はあるのでしょうか？」

「宙間戦闘がメインのモビルスーツより優れているならすごいねえ。戦術機なのに」

神クラスの怪談聞いた時みたいに背筋がゾクリとした。

「……………化け物？」

39話 ユウヤ到着

ユウヤ・ブリッジスSide

「よお、ユウヤ。見てみるよ。雄大なアラスカの大自然ってやつだぜ」

またヴァインセントが声をあげた。

まったくガキじやあるまいし、何かを見つけてはいちいち声をあげるのはやめて欲しい。

ここは国連軍超大型輸送機An-225ムリーヤの客室。

間もなく目的地のユーコン陸軍基地へと到着するため、着陸態勢にはいつている。

さつきからうるさいのは俺の専任整備士のヴァインセント・ローウエル軍曹だ。

「いやー楽しみだぜ。なんせあの噂の“Z”があるってんだからな！」

「あんなの与太に決まっているだろう。たった一機で光線級呐喊やっつてのけただの、六万体のBETAを殲滅しただの、航空機に変形しただの」

「はははは、尾ひれつきまくってるねえ。けどよ、発表の演習するつてんならなら、それなりのモンが出てくるんじゃないやねえか？ せいぜい楽しもうじゃねえか」

「こっちはその伝説をブツ潰すのが任務だ。ヴァインセント。ステージは明日だが、大丈夫か？」

「まかせろ！ パーティーまでにラプターを最強に仕上げてるよ」

「よし。明日そいつをブツ倒したらすぐ帰るぞ。観光の時間はないからな」

「……………それだがよユウヤ。勝ったからって本当にクソ上官がお前を戻すと思うか？ アイツ、日頃から問題をおこすお前を相当嫌っていたからな。何のかの理由をつけて、戻さないつもりかもしれないぜ」

「……………なに？ 何かそんな臭いでもあるのか？」

その時、到着を示すアナウンスが鳴った。外を見ると、目的のユーコン基地。その滑走路が見える。

相棒は顔を和らげ、ゼスチャーをとった。

「いや、なんとなくそう思っただけだ。悪かったな。勝負前に不安を煽っちまって」

「おどかすな。この輸送機が墜落したみたいなきげに……………」

——ガクウツ!!!

いきなり機内が激しく揺れた！

「なツ!! どうしたツ!? 再アプローチか!？」

ヴェンセントが叫んだ。

だが違う。衛士の直感がそう告げる。

こいつは再アプローチなんて生やさしいもんじゃない！

状況を知るため、すぐさま操縦室へ向かった。

そこに入ると、パイロット達が管制と緊迫したやりとりをしていた。

その話の内容によると、訓練空域を外れた戦術機が二機、こちらの後方から急接近しているらしい。

「ちつ、どこのバカだ! ……………マズイ! おいつ、ここで上昇するな!」

噴射音から、後方から来る戦術機の動きは、輸送機こちらを飛び越えようと上昇することを予測。

パイロットが操縦桿を引いて上昇するのを手で押さえて止めた。俺の予想通り、二機はこちらを飛び越え衝突は回避された。

しかしその後、その二機は滑走路上空でメチャクチャに飛び回りながら格闘機動ドッグファイトをはじめやがった。

「これでは滑走路を使えません! 予測不能の動きに、衝突の可能性がつきまといまます」

……………つたく。この基地の衛士管理はどうなっているんだ。ともかく俺はこう提案した。

「とにかく距離をとって観察しよう。あれがどうなるか報告は必要だろう。撮影ができるなら撮っておいてくれ」

「ユウヤの言う通り！　ぜひ観察しましょう！」

いつの間にか来ていたヴァインセントが言った。

「ヴァインセント、お前も来たのか」

「おおよつ。俺達の歓迎にしちや、随分と手荒いじゃねえか。それよりあのドッグファイト、ちよつと凄えぞ」

ヴァインセントは嬉しそうだ。こんなわけの分からない危機に巻き込まれたつてのに。

もつとも、俺もあの戦術機どもの動きには目が離せない。

とくにソ連製らしき戦術機の技量には目をはるものがある。

そのとき、格闘機動している二機の後ろから、飛来するものが見えた。

「おつ？　なんだあの航空機は。見たことない形式……………なあ!?」

それは変形し、戦術機の形となった！

「バカな……………変形機構の戦術機ツ!?　そんなものがすでに実現しているなんて！」

「おいつ！　アレってよ。噂の……………まさかマジとは思わなかったぜツ」

「……………ああ、“Z”だ」

やがてF-15^{イーグル}改修機のほうはソ連機より被弾し地上へ。無事着陸できるだろうか。

それはともかく。あのイワン野郎、本気でイカレてやがる。

そいつは“Z”とまでドッグファイトにかかりやがったのだ。

『あんなふざけた機構をつけた戦術機がまともに戦えるわけがない』

そう思ったのだが……………

「なんだよ、ありやあ——」

ヴィンセントのつぶやきは俺の心も代弁していた。

空中で二機の戦術機は、信じられないほどの高速で格闘機動をしたのだ。

信じられないことに、“Z”の方は先ほどF-15イーグル改修機を圧倒したソ連機を相手に、銃器を使わずに挑んでいる。

さらに信じられないことに、それで完全に優勢に戦っている！

目まぐるしく前後を入れ替え、互いの死角にはいらんと旋回をくりかえす。

さながら狂走のワルツ。

「お、おいユウヤ。パイロットのお前としてききたいんだが、お前がアレに乗っていたらどうなっている？」

「無事なわけ……ないだろうッ！」

管制ユニット内のGの変化は縦横にめまぐるしくきているはずだ。強化装備のフィードバックでも打ち消せないだろう。

たとえ鍛え抜かれた衛士といえども、とつくにブラックアウトしていなければおかしい。

「まさか無人機？ 操作はどこか別の場所で……いや、遠隔操作では操作が反映されるのにラグがでる」

とすると、やはりアレを可能にする技量とGに耐えられる人間がいるのか？

俺はあの二体の戦術機の中にいる人間に、畏怖とも嫉妬ともいえるような感情をおぼえた。

引き込まれたように目が離せない。

やがて超常の戦術機のワルツにも終焉フィナーレの瞬間がきた。

互いの管制ユニットに向け、互いに武器を差し向け合い止まったのだ。

だが、またしても目を見張る出来事がおこる。

一方がもう一方のユニットに銃口を突きつけているのに対し、もう一方は発光する棒のようなものをもう一方のユニットに突きつけていたのだ。

「なんだあの武器は？ 光があんな風に一点にとどまっているなん

てあり得ない」

「ああ。普通なら拡散しちまうはずだ。多分、何らかの技術で光をとどめているんだろう。が、あれが武器だとすると、とどめているのは光だけじゃないはずだ。おそろく熱。【ライトセーバー】ってやつかもしれないねえ」

「はあ？ SFじゃねえか！」

「フィクションの技術を本当にしちまうなぎ、よくあることだろう？ 戦術機だってSFのロボットを本当にしたものだしよ」

「それは……………」

いや、あの機動もSFじみていないか？

思い返せばあの戦術機は、俺が知る戦術機の限界を超えている。

機体技術も衛士の技量も理解不能なあれは……………

あの未知の戦術機に見入っている俺達にクルーが言った。

「再アプローチします。今なら安全に滑走路が使えますので」

「あ、ああ、頼んだ。ヴァインセント、席に戻るぞ」

客席に向かいながらも、ヴァインセントは名残惜しそうにフロントガラスの向こうを見続ける。

「くううつ、もつと見ていたかったぜ！ あの未知の技術、機動。間違いないあれが……………ッ」

もはや疑う気持ちはなかった。

「ああ“Z”だ」

「多分だが、ありやあ地球の技術じゃないぜ。俺はそれなりに戦術機の技術に触れてきた整備屋だがよ。あんな技術体系は見たことがねえ。たぶんどつか別の世界のモンだ」

「はあ？ 別の世界ってどこのだよ」

「さあな。ま、そいつは機密だろうが、乗っている衛士にでも会いりや少しは由来がわかるかもな。それより大丈夫か？ 明日、あれとやるんだろ」

……………そうだった。

今夜は体調を整えるために休もうと思ったが、それどころじゃない。

一晩かけて対策を考えなきやな。

40話 演習前日アレコレ

ユウヤ・ブリッジスSide

俺とヴァインセントが無事着陸したムリーヤから出ると、迎いの軍用四駆が来ていた。

「到着(つ)苦勞(くらう)さまですブリッジス少尉、ローウエル軍曹。これからお二人を基地へご案内いたしますが、その前に寄り道をします。先ほど墜(つ)された衛士を回収して欲しいと要請(ようせい)がありました。お二人にも手伝(てつた)ってほしいのですが」

ああ、そういう墜(つ)とされたF-15改修機(かいしゆき)がいたな。

軍用四駆で航空路脇(わき)のF-15改修機(かいしゆき)の不時着(ふじちやく)した場所へと赴(むか)き、ヴァインセントと協力(きやうりき)して機体(きたい)のハッチを開(ひら)けた。

墜(つ)とされたとはいえ、あの機体(きたい)の衛士(ゑいし)も相当(さうたう)の技量(ぎりやう)を持(も)っていた。どんなヤツなのか興味(きょうみ)はあった。

だが、まさかあのハイレベル回避機動(かいびきんどう)をとっていた衛士(ゑいし)が……………「ちつくしよおお！ あのイワン女(むすめ)どもめえ!!」

まさかこんな子供(こども)……………いや悪ガキ(あくがき)みたいなヤツとは思(おも)わなかったぜ。

しかもなお悪い(わるい)ことに、そいつは女(むすめ)だった。

ともかくコイツを拾(ひろ)って基地(きち)に向(むか)ったのだが、車内(くるまうち)でヴァインセントとケンカ(けんか)をはじめ(はじめ)てじつにうるさ(うる)かった。

だが基地(きち)に到着(つ)し、コイツの上(う)官(くわん)らしき中東系(ちゆうとうけい)の士官(しやくわん)から怒鳴(どな)りつけられ青(あお)くな(な)ったサマ(さま)を見ると、実に爽快(すげき)だった。いい気味(きみ)だ。

「名譽(めいよ)ある国連軍(こくれんぐん)広報任務(くわんぱんにんむ)を任(まか)せられながらこの体(てい)たらく。結局(けつくり)ヤマシロ少尉(せうゐ)の言葉(ことば)通り(どおり)にな(な)ってしまったな。貴様(あなた)は自分(おれ)が何(なに)をやら(や)らしたのか理解(りかい)して(して)いるのか?」

「あ……………ひつ……………」

「まずは医務局(いぶくきょく)へ向(む)かい精密検査(せいみつけんさ)を受けろ。貴様(あなた)を締め上(し)げるのはその後(のち)だ(だ)ッ。駆(か)け足(あし)！」

悪ガキ(あくがき)は勢(いきり)よく敬礼(けいれい)。だが勢(いきり)つけすぎて、自分の顔(かほ)に手刀(てな)くらわ(わ)せて悶絶(もんてつ)。

痛そうに片眼をおさえたが、上官に睨まれ、涙目になりながら駆けていった。

本当に悪ガキみたいなヤツだ。

アイツを呆れた目で見送ったその男は、こちらへ向き直った。

「さて、君達が米国からのお客さんだな。日本の試作戦術機の相手をしてくれるという」

「はい。開発衛士テストパイロットのユウヤ・ブリッジス少尉及び整備のヴィンセント・ローウエル軍曹です。よろしくお願いいたします」

「イブラヒム・ドール中尉だ。試作戦術機のテストパイロットは現在ウチの試験小隊と行動を共にしている。おっと、丁度良く彼らが見てきた」

ドール中尉の促す方を見ると、国連軍の軍装を纏った女が、衛士強化装備を身につけた一組の男女を連れてこちらにやってくるのを見た。三人ともやけに若い。高校生あたりの年齢に見える。

だが問題なのは、三人ともおそらくは日本人。日系の俺に近い肌と黒髪と顔立ちをしている。俺にとっては因縁のある国の人間だろうということだ。

「ドール中尉。試作戦術機テストパイロット・開発衛士の白銀、山城両少尉二名もただ今戻りました」

「ご苦労だったタカムラ中尉。ウチの跳ねっ返りが迷惑をかけたな。このあとソ連への対応を協議したい。時間はとれるか？」

「はい。もちろんです」

—— なっ!? 中尉だど!? こんなガキが!?

そう驚いた俺だったが、ドール中尉はさらに驚くべきことを言った。彼は衛士強化装備の方の女。長い黒髪と透き通るような肌。良家の出のようなお嬢さま然とした彼女にこう言ったのだ。

「それとヤマシロ少尉。体に異常はないのか? あんな空中機動戦ドッグファイトをやっているなら、普通に立って歩いているが」

「はい、問題ありませんわ。よろしければ明日の演習の訓練に戻らせていただきたいのですが」

—— なんだとツ!? まさか、あの“Z”に乗っていたのが

そいつ!?

あれだけの空中機動テクを、こんなガキが!?

しかも、あんな死んでもおかしくない格闘機動をしてなお、訓練を続けるだと!?

コイツの体はいったいどうなっているんだ!!!?

「ダメだ。貴様はマナンドル少尉と精密検査だ。明日の演習も出場は見合わせてもらう。しばらくは経過観察が必要だろう」

「ええっ!?! それは……………ッ!」

「山城少尉。私もドーウル中尉と同意見だ。あんな無茶なドッグファイトをやったあとに演習など許可できん。明日は白銀少尉のみで演習に出てもらう」

「上総、まかせろ。演習は明日だけじゃないんだ」

もう一機の試作戦術機のテストパイロットがこの男か。そして明日の俺の相手。

やはり高ハイスクール校から徴兵されたばかりの新任にしか見えん。いや、衛士なら今だ訓練課程真つ最中の年齢じゃないのか?

本当にこここのテストパイロットはどうなっている? ガキばっかじゃねえか!

◆◇◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

山城上総Side

結局、有無を言わせずの上官命令でまたまた検査室に詰めることに。

夕暮れ時の現在、ガンダム整備の名目でこの格納庫に逃れてはい

るが、この後を考えると実に気が重い。
そんなわけでオレとハロと白銀は、格納庫にて明日に備えたレガンダム整備点検を行っている最中だ。主にやっているのはハロだが。

「あああああつ! 結局わたくしも任務失敗!? おサルとの賭けが

あああああ!!!」

「おサル
タリサの失敗はまあ予想通りだが、そのとぼつちりでオレまで演習にでられなくなってしまった。予想をはるかに越えたトラブルメーカーめ！」

「残念だったな。それで今日だけじゃなく、明日もまた一日中検査だつて？」

「ええ。元凶のおサルさえもう終わったというのに。着任してから検査ばかりで、やっと解放されてゼータに乗れると思ったら、また検査室に逆戻り。グスン」

「たしかに上総の検査は、ここに来てからやたら多いな。たぶん明星作戦で喰らったG弾の影響がないか調べているんだと思うが」

点検の終わったハロが話に加わった。

「とにかく、明日の演習のことを話そう。白銀がユウヤ・ブリッジスつて人とワンオンワン一対一で勝負するんだよね。どう、勝てる？」

本来の実戦で、戦術機が一機単独で戦いをする事など、まずありえない。

なので演習でもこんな状況で行う事などほとんどないのだが、今回はガンダムの機動性能を見せることが目的だ。

故にこんな特殊な演習が行われる事になったのだ。

「さてな。相手は米国の最新鋭機ラプターだ。しかも衛士は合衆国陸軍戦技研部隊の人間。レガンダムでも絶対はないな」

「負けたりまずいんじゃないんですの？ わたくし達の任務上」

「だな。まあ負けるつもりはない。ここに来てからも、上総が検査に詰めている間はシミュレーションで鍛えている。まかせてもらつていい」

オレが検査検査でうんざりしている間、そんなことをしてやがったのか。

くそつ。正規の軍人つてなままならない面倒ばかりだな。

「うーん、絶対に勝たなきゃなんないんだよね。よし、じゃあ明日はボクもレガンダムに乗ろう。それで手助けするよ。あ、本体の方じゃ

なくこっちの端末の方ね」

コロン、と転がりながらハロが言った。

「はあ？ ハロがいてどうなるってんだ？」

「いろいろ役に立つんだよ。索敵、通信の傍受、戦術データの処理」
「ええ。いつも一緒に乗っているわたくしが保証しますわ。ハロが
いるなら一対一で負けることなど絶対ありえませんが」

ハロのすばやいデータ処理のおかげで的確に周囲の状況を分析で
きるので、簡単に敵の位置を割り出したりできるのだ。

「……………そうか。助かる」

白銀はそう言ったが、何故か気がすすまなそうだった。

41話 ソ連さんは驚きました

ソ連Side

ユーコン基地ソ連機密エリア

π3研究専用棟会議室

完全な防音と防諜の施されたその会議室には、沈痛な面持ちの三人のπ3計画のトップがいた。

π3計画責任者のイゴール・サンダーク中尉。

その上官であり、ソ連軍中央開発軍団のブドミール・ロゴフスキー中佐。

π3計画研究主任のイーゴリ・ベリヤーエフ博士だ。

暗いこの会議室で、三人はチエルミナートルが映したZガンダムとの戦闘映像を食い入るように見つめていた。

やがて三人の中でもっとも立場が上のロゴフスキー中佐は口を開いた。

「憂慮すべき事態だな。事前に“Z”の性能をここまで見られたのは僥倖だが、まさか衛士パイロットの能力までも“イーダル”を完全に凌いでいるとは。これではπ3計画の存在理由自体が揺らぎかねん」

その言葉に、はじめられたようにベリヤーエフ博士は反論した。

「イーダルは負けておりません！ 互角ではありましたが、相手のコクピットに銃口を突きつけることには成功いたしました！」

「本気で言っているのかね？ “Z”の方は終始銃器を使わずこちらを制圧しようとしていた。その上でイーダルは常に背中をとられ続けた。“プラーフカ”を限界近くまで使いながらな。どちらがより優れているかは検証の必要もないと思うがね」

気の小さいベリヤーエフは、まだ何か言おうと口をモゴモゴさせたが、結局黙り込んだ。

そんな彼を冷やかな目で見ながらサンダーク中尉は口を開いた。

「それでイーダルの状態はどうなのです？ “Z”の能力を見るためとはいえ、相当深くプラーフカを使用させてしまいましたか」

「……………両名とも培養槽で集中調整中だ。だが寿命はかなり縮んだ

だろう。意識が戻らない場合、廃棄も考えなければならぬかもしれないかもしれない

「それはいけませんな。上層部になんと報告するのです？　こちらの提案でもない広報任務のトラブルで貴重な成功サンプル二体を廃棄。我々全員処刑……………いえ、そんな無駄は党は嫌いますな。カムチャツカでBETAへの肉の壁が妥当ですか」

「ううっー」

「ベリヤーエフ君、サンダーク中尉の言う通りだ。何としても蘇生させたまえ。サンダーク中尉、参考までに聞きたい。“Z”の搭乗者はどうなった？　死亡したのか、もしくは集中治療ですんだのか」

この問いに、終始冷静だったサンダーク中尉もわずかに怯んだように目を閉じた。

だが再び眼を開けた時、いつもの冷静な調子で報告をした。

「……………健在です。衛士の名はカズサ・ヤマシロ少尉。現在彼女は精密検査を受けてはいますが、事件後の食事、活動も常と変わらずだったそうです。基地内の人間と談笑する姿も確認されております」
この報告にベリヤーエフは思わず立ち上がった。口から泡まで吹いて発狂したようにも見える。

「そ、そんなバカな!!　イーダルが限界まで戦術機機動の相手をつとめたのだぞ！　それで何の障害も無くすむはずがない！」

「事実です。そういえば彼女は国連軍日本支部よりの出向でしたな。あそこの責任者ユウコ・コオツキ博士には第四への移行時に第三計画の成果をある程度渡してあります。それを元に、こちらを凌ぐ実験を成功させてしまったとしたら？」

瞬間、二人の脳裏に党上層部の怒りの落雷の幻がよぎった。

「ヒッ、ヒイイイ!!」

「ウ、ウム。もし研究の浅い部分を元に、こちらより遙かに優れた成功例を作られてしまったとしたら……………我々はとんだ無能の集団だな。π3計画に肅正の嵐が吹き荒れてもおかしくはない」

この報告をしたときに起こるであろう深刻な事態を想像し、彼らは青くなって黙りこんだ。

唯一、冷静なサンダーク中尉は話をつづける。

「カズサ・ヤマシロ少尉。一人でイーダルの二人を限界まで相手どり、あまつさえ余力すらある。我々の研究をすべて徒労にするような存在です。こうなれば彼女の……いえ、“Z”に関わるすべての対策は必須でしょう」

「どうするのだね？ サンダーク中尉」

ロゴフスキーの問いを受け、小さくブツブツ言っているベリヤーエフを冷やかな目で見ながら、サンダークは続ける。

「ベリヤーエフ博士、落ち着いて。私はあなたの研究を詳細に見ている。あなたの研究が生んだイーダルはたしかに最高だ。とにかく姉妹の維持をなんとかして。こんな広報任務で失ってはさすがに言い訳すらできません」

「わ、わかった！ 必ず復帰させる！」

ベリヤーエフは退室の許可をもらうと、すぐさま研究室に向かった。

そして会議室に残ったサンダークとロゴフスキーは次の行動について話し合う。

「さて。イーダルの方は博士に任せるしかありません。ですので私は“Z”の衛士カズサ・ヤマシロ少尉についての対策を考えましょう」

「うむ。なにか案はあるのかね？」

「彼女らのこのユーコンの滞在は約半年間の予定だそうです。ですがこのまま試作戦術機を見せていただいて『はいサヨナラ』とはいかなくなりません。まずは彼女の調査が必要でしょう」

「ふむ。彼女のデータの入手をするのかね？ アルゴスの方は特に注目もしていなかったので、今から諜報員を送るのは厄介だが」

「いえ、それだけでは足りないでしょう。ここアラスカについては検査は向こう頼み。こちらの必要なデータなど望むべくもありません。なのでこちらにご招待いたしましょう」

「こちら？ ……本土での実戦試験か。しかし段取りは簡単ではないぞ」

「絵は私が画きましよう。しかるべき予定を組み、相手が断れない状況を作ります。ただ、彼女の背後にはコオヅキがおります。しかるべき貢ぎ物が必要となります」

この言葉にロゴフスキー中佐は顔をしかめた。

「またあの女狐にエサをやるのか。デカくなれば、手に負えない怪物になることはわかっていっているというのに。今回のような悪夢は二度とごめんだぞ」

「申し訳ありません。彼女に何か与えるのはこれで最後にいたしますので」

ロゴフスキーとの話が終わり、彼が去ったあとサンダーク中尉は、もう一度Zガンダムの戦闘映像を見ながらつぶやいた。

「第五計画に張り合ってくれるのは有難いですが、こちらの領分はまだ手を出されるのは困ったものです。コオヅキ博士、貴女はいったい何を手に入れたのです?」

42話 運命の演習開始

篁唯依Side

ユーコン陸軍基地・総合司令部ビルVIP観覧用会場

巨大プロジェクト・スクリーンには改良された電磁投射砲をもつ「レガンダム」という試作戦術機が映っており、この場にいるVIPは全員それに注目している。

『C Pよりアーガマー。これより威力試験を開始する。カウントゼロよりスタート。敵性標的をすべて破壊せよ』

『アーガマー了解。カウントスタート。……………アーガマーよりC P。演習を開始する』

オペレーターのスタート合図とともに、白銀少尉の駆るレガンダムは疾走。

目標地点に着くと、電磁投射砲で突撃級ルイタウラを模した厚さ2メートルの鉄板を次々破壊していく。

わずか数秒で全目標を破壊した後、タメをつくらず次の目標地点へ。

「凄まじいな」

私は思わず呟いた。

改良したという電磁投射砲は、以前のものより貫通力が増した。即応性もあがっている。

だが私が感嘆したのは、その性能ではなく、それを扱う白銀少尉の技量に対してだ。

電磁投射砲の試射は私もアラスカに赴任する前に経験済みだが、私の経験ではあれはかなりのじゃじゃ馬。

威力に振り回され撃つのはかなり困難のはずだが、白銀少尉はそれに対するよどみがまったくない。

射撃のための制動も最小限で、目標を破壊した瞬間次のターゲットへ移動。

その見事な機体操作は衛士の教科書になれるほどだ。

「あれで私より年下だというのだからな。そういえば白銀少尉は、

あの山城さんを差し置いて、ナンバー1のコールをつけられている。あの若さで、どこでこれだけの技量を身につけたのか」

まさに『これ以上の完璧はない』という内容で、わずか数分の電磁投射砲試射テストは終了した。

観覧していた各国の技術開発部の方々はいつせいに私のもとへきた。

「素晴らしい性能だ。本当にアレを売ってくれるのかね？」

「はい。国連軍日本支部によれば、BETAに相對する前線国家の方々には、審査ののちに許可するそうです。ご希望ならば仲介いたしますが」

「もちろんするとも！ アレがあるなら、わが国の防衛線もだいぶ楽になるよ」

「ご健闘をお祈りいたします。次の新型OSの搭載機体による実証試験もお楽しみください。それも自信作だそうです」

まるでセールスマンだな。

今現在、私はこのように香月博士への仲介のようなことをやっている。

これは巖谷のおじ様に頼まれてのことだ。

これだけの兵器を他国へ流すことに疑問がないわけではないが、『人類への貢献』ということでもとりあえずは納得している。

ただ、これを頼んできたおじ様には、少しばかりの疑問がわいている。

国連軍日本支部からの開発衛士の面倒を見ることといい、どうもおじ様は国連の香月博士のために動いているように思えるのだ。

香月夕呼博士といえば国連で高い地位をもったやり手で、国連嫌いの日本の政治家・軍高官からはけむたがれる存在だときく。

その彼女のために、おじ様はどうして？

♠♦♣♥♠♦♣♥

ユウヤ・ブリッジスSide

ユーコン陸軍基地

米国専用野外格納庫^ハ 衛士詰め所^ガ

「凄えなあ。まったくんでもねえ威力だぜ」

相棒の整備屋・ヴィンセントはプロジェクター・スクリーンを見ながら感嘆の声をあげた。

「つまらんことにもやたらはしやく奴だが、今回ばかりは俺も同感だ。」

「ああ。まったく淀みない正確な射撃と制動。これは強敵だ」

「はあ？ この場合見るのは、レールガンの威力だろうが!? なん
で扱っている衛士^{パイロット}に目がいつてんだよ!」

「向こうが演習で使うのは87式突撃砲だ。レールガンの威力は関係ない」

「ハア。勝負前のパイロットだからしょうがねえかもしれないが、それにしたってなあ。レールガンなんざアメリカ^チでも開発してるって話だぜ。だが日本は先に完成させて、販売までするってんだから完全に敗北だ。開発担当のやつら、かわいそうに」

「そうだな。『アメリカ・アズ・ナンバー1』とか言っている連中は面白くないだろうな。今回の勝負を画策したのも、そいつらだろう」

「政治にうとい俺でも、これがこちらのお偉いさんに冷や水ぶっかけることだとわかるぜ。日本のやつら、本気でアメリカと張り合うつもりかよ」

話がどんどんヤバイ方向に向かっている。

この衛士詰め所には俺達意外にもスタッフはいるというのに。

「やめろヴィンセント。政治にうといなら余計なことを考えるな。お偉いさんの思惑、日本の企みも知ったことか。出てきた奴を仕留めて帰ってくる。それがすべてだ」

ヴィンセントはハツとした顔でゼスチャーをとり、苦笑い。

「お前ってやつは。だが正しい。それが良き合衆国衛士のあり方ってヤツだな」

「傾注ッ!!」^{アテンション}

叱声が詰め所に響くと、俺達も詰め所のスタッフも全員立ち上がり、直立不動の姿勢をとる。

部隊指揮官の中尉が入室してくる。

「これより機体の最終チェックにはいつてもらう。衛士ユウヤ・ブリッジス少尉は機体に搭乗。整備チームの指示に従え。整備チームは規定のチェックをはじめろ」

中尉は任務の開始を告げると訓令で閉めた。

「この遠征をたかがピクニックと侮るな！ 合衆国の必然として、我々は勝利しなければならぬ！ 戦域の支配者が誰かを“Z”に、そして世界に教導してやれ！ 以上」

俺達は一斉に合衆国国旗に敬礼した。

ラプターに機上し、チェック項目すべてを埋めると、出撃許可のランプが灯る。

ラプターはステルス機のため、機構の音も振動も極限までコントロールされている。それ故に起動後でもユニット内は静かなもんだ。それでも、猟犬に生まれたラプターコイツの昂ぶりは感じる。

『ラプターは最強に仕上げておいた。蹴散らしてこいッ！』

「了解だ！ いくぜラプター。最強アメリカの座を譲るな！」
メインゲートが開き、フラッグが振られる。

音のないステルス機の発進は静かに。ただ風だけを巻きおこした。

♠♦♣♥♠♦♣♥

白銀武Side

ユーコン陸軍基地・アルゴス小隊専用格納庫

ルガンダム・コクピット内

演習開始15分前。

俺はルガンダムを開始位置へと移動させ待機。

そこは崩落したダミービルを模した建造物が一面に広がる演習場。さて、このルガンダム。演習のために、普段とは大きく変更されている。

まずファンネル版ははずし、代わりに97式長刀を装備。

ただし仮付けのため、一度ははずしたら元へ戻せない。

さらに銃器もビームライフルではなく87式突撃砲。

機動試験のため、武装も標準装備にされているのだ。

「……………よしつと。白銀、演習場全体のマッピング及び敵の移動ルートの予想が終わったよ」

今しやべったのは、俺の脇にいる丸型ロボのハロ。

コイツがここにいと、なんとなくファーストのコクピットみたいだ。

上総の言葉では、最高の戦術ナビゲーターらしいのだが。

「ハロ、しばらく口は出さないでくれ。まずは俺一人でやってみる」

「ええ!?! 相手はアメリカの戦技開発部隊の人でしょ。しかも相手は最新鋭ラプター。実戦ならともかく、こういった模擬戦じゃレガンダムでも分が悪いよ」

「ああ、そうだな。だが、たった一機の戦術機相手に誰かに頼らなきやならないような俺じゃ、レガンダムに認められるなんて夢になっちまう」

こんな人間同士の演習に、勝つこと以外に意味なんてない。

俺たちは最短距離でBETA全滅の道を歩かなきゃならない。

だから本来なら、ハロの力を借りてでも楽に勝って、早く終わらせることが正解だ。

それでも『自分の力だけで勝ちたい』と思ってしまうこの衝動は何なのか。

——やがて開始の号令が演習場に鳴り響いた。

43話 原作主人公二人

白銀武Side

ルガンダム・コクピット内

「本当にボクは何もしなくてもいいの？ 狙撃されたら、いきなりゲームオーバーになっちゃうかもだけど」

「黙って見ている」

ハロによれば、自分がシステムをいじればステルス機でも探知することを可能にできるそうだ。

だが、あえて俺はそれをさせない。

どこから来るか、いつ襲われるかも知れないステルス機の緊張。それを、どうしようもなく楽しんでしまう自分がいるのだ。

「来たな」

「え？」

あらゆる方向から砲撃が飛んできた。

されど、それをすでに感じていた俺は機体を急発進。

ドンツ ドンツ

俺の居た場所には、ペイント弾の塗料がベトリ。

「はッ、いい腕だ。初弾を当ててくるとはな！」

一連のステルス破りにハロは驚いたらしい。

「ど、どうしてわかったの!？」

「戦術機の死角から撃つてくるであろうことは予測していた。だがこれは戦術機じゃなくモビルスーツ。戦術機の網膜投影システムじゃ死角になっても、全天周囲モニターにはバッチリまる見えだ！」
初撃をはずされた敵は、すぐさまフルオートの斉射に変えてきた。精密にして密度の高い良い斉射だ。

俺は水平跳躍で砲弾を掻い潜りながら移動。

あたり一面の爆発と轟音と黒煙が拡がる中を匍匐移動で進む。

ルガンダムの加速と旋回性は素晴らしく、この砲弾の嵐にもまるで当たらない。

「待つてなヤンキー。近接戦闘で愛し合おうぜ」

やがて戦術マップに突如敵性光点^{ブリッブ}が出現。

ステルスも接近すれば反応は出るようだ。

光点^{ブリッブ}目指して進むと、やがて砲撃がやんだ。

「……………うん？」

疑問がわいた。ブリッブマーカ―が動かないのだ。

そんなバカな。砲撃が止まったのに動かないなんてあり得ない。

「あッこれは！」

「俺もわかった。欺瞞^{ブリッブ}だな。マヌケな俺を釣り上げるポイントは

……………ここだ！」

俺は光点^{ブリッブ}を無視して想定される狙撃地点へ向かう。

するとまたまた突然に敵性光点^{ブリッブ}が出現。

「本当にボク、いらないね。白銀、戦闘勘^{すじ}凄^{すじ}すぎ！」

「もう『普通の高校生』ってのが、どういものかわかんなくなっち

まったからな。さて、終わらずゼヤンキー」

ラプターが目視でハッキリ見えた。

機体動作に驚愕が伝わってくる。

愛を込めて撃って撃って撃ちまくる！

だが……………

「逃げられた!? 普通なら、これで終わりなんだがな」

ラプターは被害を小破にとどめ、いち早くこちらの有効射程範囲か

ら離脱した。

さすがラプター……………いや、あれは機体性能だけじゃなく腕だ

な。

良い感じに振り回すもんだ。

「だが勝負は見えた。逃^{ブリッブ}がさん！」

俺はレガンダムを加速させ、兎狩りにはいった。

一度見つけてしまえば、あとは機体性能の差で距離をつめて、逃^{ブリッブ}が

さなければいい。

「白銀。前々から思っていたんだけど、白銀ってこの世界のBET

Aや戦術機と戦うのって素人じゃないよね。元はこの世界の間

だったの？」

「なんだ、今ごろ気がついたのか。上総といいハロといい、優秀なわりに鈍いところがあるな」

「面目ない。たしかに白銀のデータをみれば、いくつもヒントがあったね。戦術ナビゲーターなのに恥ずかしすぎだよ」

「まあ俺のことは後で話してやる。今は勝負を楽しもうぜ！」

ラプターは爆走音も考えず加速全開で距離をとろうとする。

されどこちらのレガンダムはあっさり併走。

そのまま突撃砲を撃ちまくる！

◆◇♣♥◆♣♥

ユウヤ・ブリッジス Side

「クソッ！ なんなんだコイツは！」

俺は思わず声をあげた。

完璧な位置とタイミングで行った狙撃はあっさり見抜かれ、追撃の砲弾をも潜られた。

仕切り直しと欺瞞を残して撤退しようとしたが、相手はそれすらあっさり無視し、こちらに猛追撃をかけてきた！

「まさかあの機体には、こっちのステルスを見破る機能でもあるのか!?!」

やむを得ず併走してきた敵に射撃戦を仕掛ける。

当然相手も応戦。射撃の応酬だ。

だが中距離の射撃戦でも、あちらは俺の上をいつていた。

互いに打ち合いながらも、次第次第にこちらは押し込まれていく。ついには攻撃をあきらめて逃げに徹するしかなくなった。

「なんなんだ、この熟練ベテランみたいな戦いは！ 本当にこれをあの高校生ハイスクールがやっているのか!?!」

あのシロガネと呼ばれていた高校生ハイスクールみたいな男の顔がうかんだ。

いくらなんでも、こんな修羅場をいくつもくぐり抜けたような戦い方が出来るには早すぎる！

「機体性能も上、衛士も熟練、ステルスも無力……か。勝負は見え
たな」

ダミービルの迷路での攻防。

綱渡りの上で、やっと撃墜判定を免れる一方的な攻防が続いた末。
こちらの小破の判定が続き、そんな弱音がこぼれる。

「……………まだ、いけるか。なあラプター」

されどラプターは、俺を突き動かすかのようにしぶとく逃げ回る。

「お前も負けるのは嫌いか。俺もだ」

俺はふたたび闘志を燃やす。戦意を滾らす。

「こうなればアレでいく。悪いなラプター、寿命を縮めるめるぜ！」

—— 高速機動戦

高速での戦いは衛士パイロットの腕が大きくモノをいう。

機体性能があらうと、自身の反射神経と瞬時の判断力。
それがなければ勝負はできない。

「ついて来れるか、シロガネ！」

主機をフルスロットルにあげ、グングン加速をあげていく。

——俺は、はじめて認められたい、と思った。

まわりで見ているお偉いさんにじやない。

俺にはじめて敗北を喰らわせるかもしれない目の前の強敵に。

ッガンダムとタケル・シロガネ。

俺は生涯この名前をけっして忘れない！

補助主機噴射《ロケットブースト》に次ぐ補助主機噴射ロケットブースト。

強化装備のフィードバックを超える加速が覆い被さり、衝突回避警
告がユニットに鳴り響く。

短距離噴射で機体をねじり、綱渡りのように障害物を回避してい
く。

ッガンダムはとみると、やはりこの高加速にもついてきている。

されど、さすがに相手も射撃はできない。
いいぞ、勝機が見えてきた！

——タラッ

いきなり鼻の下に生暖かい感触。拭ってみると赤かった。

(はは………鼻血まで出やがった。さすがに限界は越えている
か)

このまま続けたら死ぬかもしれない。

——それでも。

「もう命なんていらねえ。ラプター、お前と心中だ!!」
俺はさらに加速をあげた。

44話 篁さんのガール・ミーツ・ボーイ

今日は主任務のはずの演習日。

なのにオレは朝から今まで基地内医局で精密検査の一日だった。しかし、さすがトップクラスの衛士精密検査。女の尊厳、踏みに行きたくないいろいろしてくれるね。心は男のTS転生者であるオレでも泣いちやうよ。

医局の片隅でそんなふうに黄昏れていたが、夕方頃、やけに医局内が騒がしくなった。

騒ぎの元の場所に行ってみると、それは幾人もの白衣の医療従事者が誰かを担架で搬送している現場だった。

「訓練中に事故でもおこったんですの？ あれはいったい誰ですの？」

「俺の今日のワンオンワンの相手さ」

いつの間にかオレの後ろに、ハロを持った白銀が来ていた。

「白銀、それにハロ。演習は終わったのですね。それで結果はどうでした？ もちろん勝ったのでしょうが」

「まあ、な。時間切れの優勢勝ちだったが」

白銀は歯切れ悪く言った。

「優勢勝ち？ あなたがレガンダムを駆ってハロまでいながら、ずいぶんとしよっぱいですわね」

衛士も機体も並ぶものがないほど最強クラスの組み合わせなうえ、超ハイスペックな戦術ナビゲーターのハロまでいて、時間切れまで持った衛士がいることが信じられない。

昨日の【紅の姉妹】といい、この世界にはバケモノみたいな衛士パイロットがいるな。

「ボク、何もさせてもらえなかったよ。完全に置物でした」

「この結果は相手の衛士を褒めるべきだな。三十分、高速機動を続けて徹底的に俺に射撃のタイミングを許さなかった。その代償があれさ。ついでにラプターもスクラップだ」

白銀は緊急搬送で処置をうけているその衛士らしき男を親指で刺した。

ああ、なるほど。あの痛々しい姿は、現代の戦術機で宇宙世紀のモビルスーツに抗った証か。

そう聞くと、あれも勇者の姿に見える。

「でも、そこまで演習の勝負にこだわって入院なんてバカみたいじゃありませんか。しかも最新鋭のテスト機までもスクラップにして。負けても死ぬわけじゃあるまいし」

「向こうにも負けられない事情があったのかもな。それともバカみたいに負けず嫌いだっただか」

「うんうん。相手の人、白銀が救助でハッチを開けたとき泣いてたしね」

「ええ！ 勝負に負けて泣く人だったのですか。それはぜひ、わたくしも見たかったですわあ！」

そんな一昔前のマンガみたいな名シーンがあったとは！

見たい。見たいぞー！

「やめろ上総。あの涙は女が見ていいものじゃない」

ええ!? 白銀までマンガのライバルキャラみたいなこと言っている！

「衛士に男女の別はありませんわよ。みな等しく戦場に出て命をかける戦士なのですから」

「それでも、だ。男は女に無様な姿をみせたくないんだよ」

白銀とそんな話をしていると、そこに篁さんが来た。

彼女は、演習の進行が忙しくて医局（いこく）に来ることは出来ないと言っていたはずだが？

理由を聞いてみると、やはり仕事がらみのことらしい。

「じつは、ようやく我がXFJ計画の機体【不知火改修機】が組み上がりテスト機動をおこなえるようになったと、連絡があった。きさま達のガンダムも参考にしたので、そうとうなじゃじゃ馬になるらしい」

「メインテストパイロットは誰に？……………ハッ！ まさかタリサ!?

おサルさん

あれがじゃじゃ馬に乗ったら、世にもおそろしい暴走がおこってしまいますわ!」

「いや。メインテスタパイロットをつとめるのはユウヤ・ブリッジス少尉」

「……………誰です? アルゴスの者ではないんですの?」

「な、なにアイツが!? どういうことなんです篁中尉!」

白銀は知っている?

おかしいな。白銀とはいつも一緒に行動しているから、アイツの知っている人間はオレも承知のはずだが。

「ユウヤ・ブリッジス少尉はアメリカ陸軍戦技研の者であり、今日の白銀少尉の相手をつとめた衛士だ。どういう経緯か国連へ出向となり、我がアルゴス試験小隊に所属することとなった」

「ああ、なるほど。それでこれから上官として挨拶に行くわけですね?」

篁さんがこの基地内医局にきたのはそのためか。

「いや、この決定は本人であるブリッジス少尉抜きで決められたものらしい。私はその決定をブリッジス少尉に伝える役目を負わされた」

もしかしてそいつ、軍内で嫌われている?」

「そういうことなら、自分も連れて行ってください。今日の演習を務めてくれたことの礼と、これからしばらくやっていく仲間として挨拶をしようと思います」

白銀が興味を示したのでオレもつき合うことになり、みんなでユウヤ・ブリッジス少尉の病室へと向かった。

◇ ◇ ◇

ユウヤ・ブリッジスは、自分がアルゴス小隊に入ることになったことを篁さんに聞かされても、「そうか」と返しただけだった。

そして会話しようにも、まるで興味なさそうに「ああ」とか「好きにしろ」とか「くだらんことを聞くな」とか返すだけ。

唯一会話らしきことができたのは、部屋から出る前に白銀に話しか

けたことだけだった。

「タケル・シロガネ」

「なんだ」

「俺は負けていない」

「……………そうだな。だが、俺達が負けていけないのはBETAだ。俺との勝負なんて、高価なテスト機をぶっ壊してまでこだわることじゃない」

「こだわらずにいられないのさ。俺みたいな日本人の血が混じったアメリカ人にはな。いつか必ずアンタにもレガンダムにも勝ってみせる」

「……………そうか」

それだけの会話でオレ達は病室を出た。

検査に行く白銀と別れると、オレは院内ラウンジで篁さんとユウヤ・ブリッジスについて話した。

「どうです篁さん。彼を部下として使っていくことはできそうですかしら?」

「衛士としての技量はそうとう優秀ですが、扱いにくそうな男でした。苦労しそうです」

そうだな。自分が日系アメリカ人と、どうして白銀との勝負にこだわらなければならんのだ。まったく意味不明な奴だ。

「そうですわね……………あっ!」

「どうしたんです?」

「じつは彼を見たとき、どこかで見たような顔だと思いましたの。今、誰に似ていたか思いだしましたわ」

「山城さんもか! じつは私もなんですが、私は思い出せません。どこで見た顔だったんでしょう?」

篁さんの“うっかり”に、オレは思わず「クスリ」となった。

凜々しく成長した彼女にも、こんな可愛い所が残っていたんだな。「前に見せていただいた小さい頃の写真をご覧なさい」

「えっ?」

篁さんは懐からパスケースを出し、そこに付けている写真を見ると

目を見開いた。

そこには小さい頃の自分と一緒に、彼女の父親も写っているのだ。自分の小さい頃など、いつも見たいものとは思えないので、彼女の父親がメインだろう。

「あ、ああー！ そうか父さまに……………」

そしてユウヤ・ブリッジスという男は、どこかで篁家の遺伝子でもとんだのか、篁さんのお父さんにそっくりなのだ。

父親の写真をパスケースに入れるほどにファザコンの彼女に、いったいどういう運命のいたずらか。

「……………篁さん？」

篁さんは写真を見ながら彫像のように固まってしまった。

そのまま、顔がだんだん赤くなっていく？

そして動きはじめたら、モジモジしたり胸元をおさえたりして、急に女っぽくなった？

「どうしました篁さん。なにか雰囲気が変わりましたが？」

「山城さん!!」

彼女は「クワツ」と、オレに迫ってきた！

その顔は真っ赤になっている!!

こんな彼女は、はじめて見るぞ!!!

「ブリッジス少尉が父さまに似ているとわかったら、どうしようもなく胸が高鳴ってとまらないんです！、とても抑えられない!! 山城さん、私は変だろうか!? ハアハア」

とつても変だよ篁さん！

なんか女の顔になっているし!!

父親に似ているってわかっただけで、そこまでなる!?

ファザコンにも程があるよー!!!

45話 三頭会議

香月夕呼Side

とある基地の地下会議室。そこであたしは二人の男と会っていた。一人はすっかり腐れ縁の鎧依。

そしてもう一人は、今、ここで会っていることが知られると少しばかりマズイ相手。

帝国技術廠の巖谷中佐だ。彼とは密かな同盟を結んでいる。

「ご協力ありがとうございます。巖谷中佐。おかげで演習の実行と目的は大きく達成することができましたわ」

「そいつはどうも。だが結果は時間切れの優勢勝ちだったそうだな。この結果でも、博士の目的は叶ったのか？ いやアメリカ虎の子の「ラプター」に勝利したというのも、十分な成果といえるが」

「アメリカの戦技研衛士が、がんばったようですね。ですが、かえって機体の優劣差を証明できましたわ。相手のラプターがスクラップになるほどの酷使につき合いながら、こちらのガンダムは健在でしたもの。この結果でだいぶ第五に向きかけた流れを、こちらに引き寄せることが出来ましたわ」

「……………あれはいつたい何なんだ？ 山城少尉のゼータとい、とても地球が生み出した機体とは思えん。BETAとは別のエイリアンからでも購入したのか？」

「さあ。その質問には答えることはできませんわね」

巖谷中佐はしばらく探るようにあたしを睨んだが、やがて目をむった。

「まあいいだろう。『計画成功おめでとう』とでも言うておくか。そちらが提供してくれた技術で、こちらの【XFJ計画】も大きく進んだ。テストは始まったばかりだが好感触だ。篁中尉はよくやっている」

「姪御さんに立派な箔をつけられるようで何よりですな。彼女に自分の後を引き継がせる道筋をつけられた、といった所ですかな」

「鎧依。俺はそんな公私混同はしない。XFJ計画の順調な進捗

は、彼女の実力によるものだ」

そうは言いながら、巖谷中佐はまんざらでもない様子。

巖谷中佐の姪の【篁唯依】というのは、けっこう使えるわね。

巖谷中佐は「コホン」と咳をして無理矢理に姪の話の打ち切り、あたしに向き直った。

「ところで、だ。そちらの内部に踏み込んだことで恐縮だが、そのガンダム衛士の白銀少尉と山城少尉にはいまだ帰国の通達をしてないようだな」

「あら、調べましたの？ 油断はできませんわね」

「いいや。篁中尉がそちらの二人に、こちらの線で調べてもらうよう頼まれたそうさ。彼らはいつまでも帰国の通達が来ないことを不安がっている」

「おやおや。意外とナイーブでしたな。まあ考えてみれば、あの二人も優秀とはいえ十代の若者。ホームシックになってしまいましたかな」

「鎧依、茶化さないでもらおうか。香月博士、どういうことだ？ あの二人のことは、政府にも軍部にもいちおうの話がついているはずだ。なのに帰国させないというのは何故だ？」

「あら、巖谷中佐。あまりにこちらに踏み込みすぎではなくて？」

姪御さんの仲良しのお友達とはいえ、二人のことは国連軍内の問題ですわ」

「……………俺は任務に赴いている篁中尉を身内扱いなどしない。それにその二人は仲良しの友達などではなく、今現在、篁中尉の部下だ」
「あら、そうでしたわね。まああの二人は、こちらの体勢が整い次第帰国させますわ。どうかゆるりとお待ちになつてください。二人にはこちらから説得もおきましょう」

「いや。そちらの衛士二人だけなら、俺もここで問題になどしない。問題は二機のガンダムだ」

あ。

風向きが変わった。ちよつと面倒なことになりそうな予感。

「あれほどの機体をいつまでも外国に、それもアメリカ圏内に置い

ておくことは日本にとって重要な問題となる。いや、なりつつある。今回融通してもらった技術も、元はあれの派生技術なんだろう?」

「さあ、どうですかしら」

ああ、失敗した。これは帝国上層部からの声だったのか。

「政府、軍部からも同様の意見がチラホラだ。このままでは帝国が介入し、二人は強制帰国だ。そうなりや、そちらにとつちやあまり良いことにはならないだろうよ」

「こわいこわい。たしかに帝国に口出しされる口実を与えるのは良くありませんわね」

顔は笑顔を張りつかせて。だけど内心はあせりまくり。

でも今、二人を帰国させる訳にはいかないのよね。

「はっはっは。これは心ならずも、大事になってしまいそうですな博士」

などと、とぼけたセリフの鎧依も、やはり密かに『帰国NO』のサイン。

理由は、鎧依からの情報では間もなく日本にはクーデターが起きる。

そんな時、二人が日本にいては、あつという間に鎮圧してしまうだろう。

こちらのスケジュール通りに事を進めるには、やはり二人にはクーデターが終わるまで外国にいてもらう方が良いのよね。

………仕方ない。気は進まないが、ソ連から要請のあったアレを使うか。

こつちが得しかなしいような胡散臭いプラン。ついでに貢ぎ物たくさん。

サギに一度もあつたことのない素人ならば必ず飛びつくような、玄人なら他人に喰わせて様子をうかがうのがセオリーのような、あの話。

多少ヤバくても、あの二人なら何とかするわよね。

巖谷中佐。悪いけど、可愛い姪御さんも巻き込ませてもらうわよ。

「ええ。たしかに直ちに帰国させるべきかもしれませんがね。ですが、その前にもう一つ海外で任務をさせようと思っていますの」

「なに!? 初耳だ。いったいどういうことだ?」

「じつはソ連からこのような話がきています。これはそちらの【X FJ計画】にも有益なお話」

さて。ソ連のサギの片棒をかつぐとしますか。

巖谷中佐と話しながら、頭の中では高速で帝国へのメリットを、そして断れない理由を矢継ぎ早に紡いでいく。

そして話し終わる頃には、すっかりソ連遠征のプランが出来上がっていたのだった。

我ながら自分の頭が恐いわ。

46話 ユウヤ・ハーレムへようこそ!

いつまでも帰国の連絡がなくてヤキモキしているオレ。

だが、さらに精神に追い打ちをかけるような任務の話を篁さんがもってきた。

「広報任務のやり直し……………ですって? それにわたくしも参加するのですか!?’

「すまない山城さん。前回の失態で国連軍広報官オルソン大尉の面目をだいぶ潰してしまった。故にアルゴス小隊としては、彼の要請を断ることはできないのだ」

おサルタリサの汚ねえケツの尻拭いだと?’

「ちなみにこの任務にドーウル中尉は参加しない。あまりに専門外だというのでな。すべて私が指揮をとり、達成に導かねばならない」
ドーウル中尉にしては無責任な。

すぐく納得できないが、監督責任で痛い立場に立っている篁さんを見捨てるわけにもいかない。

撮影任務なんてサクツと片づけて終わらすとするか。

などと軽い気持ちで引き受けたのだが……………

「篁さん。これは軍の広報撮影でしょう? なぜ水着に、それもこんな破廉恥なものを身につけねばならないのです!!」

任務の指定場所に着くと、オレは水着に着替えさせられた。

篁さん、ステラにタリサもアルゴス女性陣全員が水着となり集合。

それも軍の競泳水着などではなく、露出度の高いビキニだ!!!

そして敷地の隅のフェンスの向こうでは、ものすごい数の男性ギヤラリーが、各々カメラやビデオを手に持ち、任務の開始を待ちわびていた。

いまはまだバスタオルを羽織っているが、任務開始と同時にバスタオルを外さなければならんだよ! 野郎どもの目の前で!!

そして、半裸のビキニ姿がああ無数のカメラの餌食にされてしまうのだ!!

「あ、ああ。この水着に関してはいちおう説明はもらったのだが、ま

るで理解できなかった。とにかくこの水着でなければいけないらしい。ほら、東側の彼女らもだ」

オレらとは少し離れた場所には途方にくれたように水着姿で佇むふたりのソ連衛士がいた。

【スカレット・ツイン紅の姉妹】ことクリスカとイーニアだ。

それは良いのだが、何故かふたりの水着は日本のスクール水着だった。

なぜかギャラリーからは『トゥルースクミーズ!!』と大声援が送られている。

広報官のオルソン大尉という方、妙な方向でセンスがあるらしい。

「とにかくこの姿で、我々が世界一致する友情団結の表現を示すのだそうだ。いつもとは勝手のちがう任務ではあるが、各々は各自役目をはたすように！」

「了解ですー!」

ビキニ水着のアホな恰好でも、上官に檄をとばされたら反射的に敬礼するオレ達。

さて。集合したアルゴスとソ連の【紅の姉妹】の前に、やがて問題の企画人【オルソン大尉】が重々しく登場した。

濃い眼鏡をかけたキレ者の顔をしており、威風堂々とした軍人の風格だ。

こんなアホなことを考えた奴なのに、有能そうな軍人に見えるからタチが悪い。

「諸君! 今回、この撮影のテーマは『肉体』だ!」

つまり『エロ』だと? 軍の広報素材なのに? ももちろん違った。

「君たち鍛え上げた衛士パイロットの肉体をどうしようとさらし! BETA に対する人類の不屈の闘志を表現する! さらに各民族が一体となった姿を表現し! 全世界一致の団結をみせるのだ!」

うーん。半裸の女だらけで、そんな映像になるかなあ。

タリサとステラさんも微妙な顔。

「しかし水着ってやつはよ。話には聞いてたが、着るのははじめて

なんだがよ。でも、これって下着じゃねえの？　こんなモンで野郎どもの前に出るなんざ、狂気の沙汰だぜ」

「私はプライベートビーチに行ったとき着るけど、ここまで際どいのは経験ないわねえ。これが任務って、軍の広報素材として本当に良いのかしら？」

さて。この任務だが、じつは女性だけの参加ではない。

青一点で参加している奴もいる。それが――

「オルソン大尉殿！　質問です！　どうして自分もこの撮影に参加するのです!?!」

ユウヤ・ブリッジス少尉だ。

少し離れた場所で男性水着を着用し、オレら半裸の女性陣を微妙な目で睨んでいる。

「適任なアメリカ軍衛士パイロットが君しかおらんのだ。それに、女性ばかりではこちらの意図とはずれたスチールになってしまいう可能性がある。故にブリッジス少尉。栄光あるアメリカ軍代表として、中心で大きくかまえてくれたまえ」

「いやいや！　明らかに男女比がおかしくあります！　自分が彼女らの中心になったスチールや映像など、それこそ目的と大きく外れたものになってしまうと、愚考いたします！」

男の立場として考えて、ユウヤの立場はオイシイのか？

少し羨ましい気もするが……………いやいや！

女の子の素肌に多少ふれられるとしても、その映像が出回るとしたら一生の恥だ！

【ハーレム王キング】なんて二つ名がついたら軍をやめたくなる!!!

あのギャラリー共のオカズにされているのは、ビキニ姿のオレ達だけじゃない。

男の身でオレ達と並んで撮られるユウヤも同様だ！

「がんばれユウヤあ！　アメリカ代表として、どうどうと世界の女どもを従えてみせろ！」

「アルゴス代表男の勇姿を見せつけてやれ！　お前もついでにバッチリ撮ってやるからよ！」

VGと、ユウヤと共にきた整備士のヴィンセントはあそこか。ついでに白銀もヤレヤレといった感じにいる。

VG、ヴィンセントは高そうな撮影機材をもって、ふたり仲良くハイテンション。

「ヴィンセント、VG！ てめえらっ!!」

ユウヤの絶叫が響くなか、撮影任務は始まった。

ユウヤをオレらビキニガールズが囲って、嬉しそうにニッコリ。

……………なんだか、まるで自分がユウヤの女にでもなった気分だ。

篁さんは心なしがちよつと嬉しそう。

「うむ。タカムラ中尉の表情はじつに良い。心からの歓喜があらわれているようだ。それに比べブリッジス少尉、ビャーチエノワ少尉。もつと表情を柔らかくしたまえ。これは国籍を越えた友情の撮影なのだぞ！」

国籍越えて女漁ってハーレムつくった変態野郎の勝利宣言撮影だと思う。

やっぱりこのオルソン大尉のセンス、変だ。

「でもこういう撮影なら、ユウヤだけじゃなくタケルもいてほしいわね。欲張りなのはわかっているけど」

……………ステラさん？

「そうだよなあ。オルソン大尉、こういう所が片手落ちって感じだよなあ。タケルがいりや完璧なのに」

おサルタリサさん、何が完璧なの？ ワタクシ、ぜんぜん分かんないですけど！

「……………む？ まあ撮影だけなら、白銀少尉の参加もアリか？」

篁さんまで!?

なんかアルゴス女性陣がみんなハーレム要員メンバー脳になっていらっしやいます!?

いやコレ、ユウヤのハーレム撮影じゃなくて、国際友情撮影なんですけど!!

「そ、そうだ、こういうのはタケルが似合う！ 今からでもアイツに

変わってもらおう！」

ユウヤの奴、錯乱してやがる。元男として気持ちはわかるが。篁さんのためにも、唯一冷静なオレが引き締めをはかろう。

「落ち着きなさいユウヤ。白銀じゃアメリカ軍代表にはなりませんわよ。みなさんも余計な雑念は抱かず、任務に集中なさってください！ 『我らは国境を越えた友。人類は団結し、結び握る手は固く』ですわよ」

「へーえ。んじゃ、カズサもアタシに友情ユージュウつてのを感じてんの？

マジで？」

おサル
タリサがオレの顔をのぞき込んでニヤリ。

「……………もちろんですわ」

オレはいま、嘘つきの顔をしているのだろうか？

「殺意こめて睨んでいるソ連の冷血女共も？ あの顔、どう見ても友情抱いてるようには見えないぜ」

そうなんだよな。【紅の姉妹】のふたり。オレのことを、姉のクリスカはだれかの仇みために殺気をとばして睨んでいるし、妹のイーニアは子猫みたいにおびえてるし。

そんな紅の姉妹にオルソン大尉の落雷がおちる。

「ビャーチエノワ少尉、シエスチナ少尉！ なんだその敵でも見るような顔はあ！ それで国境を越えた友好を示せると思ってるのかああああ!!！」

「……………クツ、ですがどうしても自分らは、ヤマシロにはツ！」
あの空中機動戦。オレは完全にとぼちりの被害者のはずだが？

まいったな。このふたりがいる限り、この撮影は終わらない気がする。

この状況に対し動いたのはハーレム王キング……………ではなくユウヤだった。

「ああもう！ ビャーチエノワ少尉、シエスチナ少尉。もつと俺にくつついて！ 俺だけを見て他に目をやるな！」

「な、なに？ どういうつもりだ！」

「アンタらはアルゴスに因縁があるようだ。俺はここに来たばかり

で、しがらみは何もないはずだ。だから俺だけに目をやって、我慢して撮影の間だけは表情を取り繕ってくれ。こんな任務、俺はさつさと終わらしたいんだ！」

「……………同感だ。アメリカ衛士。不本意だが、連中を見ないよう体を借りるぞ」

クリスカはイーニアと一緒にぐぐいつ、とユウヤに体を寄せる。

……………あれ？ 何やらイーニアから妙に乱れた波動を感じる？

「う……………うううあつ……………ブリッジス少尉……………ユウヤあ」

ああ！ 篁さんが泣きそうな顔になっている!!

なんだか山百合の頃の彼女に戻ったみたいだ。

まったく。しかたがないなあ篁さんは。

「篁さん。わたくしをビャーチエノワ少尉から見えないように、もつと寄せ合って隠してください。それと向こうは見ないで、わたくしだけを見て笑ってください」

「山城さん？……………わかった」

彼女はなぜか頬を赤く染めてオレに体を預ける。

素肌同士で強く寄せ合い、彼女の柔らかくてあたたかい温もりを感じると、やけに変な気分になってしまう。

ヤバイな、この表情。

妙に潤んだ瞳で見つめられている。

「いいぞタカムラ中尉！ その表情！ ひたむきに友を信じ、身を投げ出すことも厭わない良い表情だ！ 撮れ！ あの表情を余すことなく撮るのだああ!!!」

やっぱりこの大尉、変だ。

この大尉にとっての【友情】っていったい何なのか、いつか聞いてみたい。

ともかく篁さんのおかげで、広報任務はどうか達成したが。

後日、撮影素材であるオレ達のビキニ姿は、さまざまな角度でプリントした写真が写されてユーコン基地中に出回った。

とくにオレと篁さんの2ショット写真は、目の玉が飛び出るような
値段で取引されている。

やっぱり、篁さんのあの表情はヤバかったんだな。

47話 篁さんと山城さん

篁唯依Side

ユーコン陸軍基地統合司令部予備通信室。

私は現在、ここで巖谷のおじ様に現状報告を行っている。

衛星経由の通信状態はあまり良くないのかスクリーン上のおじ様の画像はノイズ混じりだったが、音声は問題なく会話ができた。

「そうか。ハルトウィック大佐の態度は変わらずか。……いや、問題ない。あちらがそういった姿勢であることは織り込み済みだ。プロミネンスの評判が上向いたならそれでいい。“消極的協力”を確約してくれたのなら上々さ」

「失礼ですが、叔父様はなぜ外交官のようなマネを？ それに叔父様は国連の“主導計画”とやらのために働いているようにみえますが」

「唯依ちゃん。上官として言うが、あまり上層部の詮索をするもんじゃないな」

「し、失礼いたしました！ 以後、このようなことがないよう、気をつけます！」

「では今度は、叔父としてある程度のことを話そう。こちらの状況が上向いたために、少しは話せるようになった。ただしあまりこちら側をのぞき込むな。俺に万一のことがあったら、情報を元に自分で活路を見つけるんだ」

「叔父様……？」

「以前から俺は、国連日本支部の進めている主導計画のために働いている。見返りは“Z”の派生技術を帝国技術廠が優先的にもらうことだ」

「主導計画……それは大丈夫なものなのでしょうか？ ハルトウィック大佐はそれを【詐欺犯罪】とまで言っていましたか」

「ははは。確かに計画の責任者の香月女史は詐欺師にしか見えんな。彼女に追い落とされたのは現在の予備計画派だけじゃない。大佐のプロミネンスもだ。その経緯で大佐は女史に悪感情を抱いてい

る」

香月女史。山城さんの上官だが、大丈夫なのだろうか？

「主導計画については、俺もどんなものか知らされていないから何とも言えない。だが彼女のもたらす技術は本物だ。だから俺は外交官のような真似もする。BETAへ反撃をのぞむ技術を、日本にもたらすためにな」

「わかりました。では次は、香月女史お預かりの彼らについてお伺いいたします。二機のガンダムと衛士二人の今後について、何かわかりませんか？ そろそろ帰国の予定の話があつてもよさそうですね」

「……………ああ香月女史によれば、まだ日本に戻せないそうだ。山城上総の脱走。白銀武の身元。ガンダムが日本に持ち込まれた経緯。製造した機関。そういつたことをまだ問題にする人間が多数いる。だからそちらで唯依ちゃんが預かるんだ」

……………叔父様の歯切れが悪くなったような？

「正直、私も問題だと思います。うやむやにしている問題だとは思えません」

「ははは。たしかに正論は向こうにあるな。だが、それをうやむやにする代わりに日本には多くの見返りがきた。前に『日米戦術機共同改修計画』は日本の大きな分岐点になる』と言ったと思うが、あのガンダムはそれ以上の分岐点だ。最良の展開にもっていけば、BETAとG弾。二つの脅威を日本から取り除ける」

「そのために……………あえて叔父様は泥をかぶる気なのですか？」
「そんないいものじゃないさ。とにかく、というわけで彼らの新たな任務はXFJ計画の協力だ。先に言ってしまったが、追って彼らにも香月女史から命令が届くはずだ」

「現在も協力はしてもらっておりますが。プライドの高いメインテストパイロット主席開発衛士のユウヤ・ブリッジス少尉ですが、自分を負かした白銀少尉の言葉は素直に聞かため、助かっております」

「……………いや、次の任務はその程度の協力じゃあない。今ここので俺が言うわけにはいかないがな。とにかく引き続き計画の進行と、

白銀・山城両少尉のことをたのむ」

◇ ◇ ◇

テスト機動終了後の夕暮れ時。

演習場の片隅にて、私は山城さんにおじ様から聞かされた話をした。

「……………そうなのです。当分、わたくし達は日本へは帰れない、ということなのです」

「私としてはいてくれた方が助かります。白銀少尉にはユウヤのことでよく助けられていますし」

「白銀が？」

「じつはユウヤは、父親の日本人が母を捨てていつてしまったらしいのです。そのせいで日本人をひどく嫌っておりまして。私もひどく嫌われていたのですが、白銀少尉はそれを一喝して正してくれました」

「そ、そうですの」

「その他、アルゴスの皆にうちとけようとしないうちを、間にはいつて取り持ったりもしてくれました。今ではユウヤは、白銀少尉と操縦技術なんかの話をしている姿をよく見かけます」

「それ……………フラグやイベントやらがみんな白銀に取られているのでは？」

「ふら……………ぐ？ それは何ですか山城さん」

「相手と親密な関係になるような出来事ですわ。このままでは“篁唯依恋人エンド”にはならず“白銀武友情エンド”一直線になりますわね」

「え、えええええっ！ そんな……………たしかにユウヤと私とは、微妙に心の壁があるような気がしていましたわが！」

「あるんでしょうね。ユウヤにとって篁さんは『小娘上官A』ではないんですわ」

「そんな……………どうしたら！」

「ご自分で考えなさい。わたくしは篁さんのお母さんではありませんわ」

母さまも「ご自分で考えなさい」とか言いそうな気がする！

しかし私とユウヤとでは上官・部下という壁があることに加え、私には白銀少尉のように力で彼との関係に踏み込んでいくこともできない。

ああああ、なんと臆病なことだろうか！

そして山城さんは、そんな私の内など知らず優雅に夕暮れのアラスカの景色を嗜んでいる。

「ここは平和ですわね。BETAの争乱の音がまったくくない。まるでかつての京の都のようですわ」

「帝都ですか。たしかにあの日までは、私も京の都が消滅するなんて思いもしませんでしたね。あの頃は……和泉も安芸も志摩子もみんながいました」

「ふっ別に懐かしんでいたわけではないんですけどね。篁さんといると、妙にかの日の光景が浮かんでしまいますわ。自分のものでもないのに」

山城さんはとおい目をしている。

そんな彼女を見ると、また突然どこかへ行ってしまうそうで不安になる。

「……………山城さん。帰りたいたいのですか？ 日本に」

「……………篁さん？」

「私は少しさみしいです。山城さんが帰ってしまうとついで心の眩きがでてしまった。

山城さんは困ったような顔をした。

「わたくしも、いつまでも篁さんといっしょにいたい気もしますけどね。でも、ガンダムはいつまでも後方に置いて良いものではありませんわ。今このときも、前線ではBETAとの熾烈な戦いがありますもの」

「ハッそうでした！ 申し訳ありません！ なんと無様な！ 栄えある帝国斯衛軍衛士であり、篁の姓を名乗る者でありながら、些事に

心を乱す未熟！『さみしい』などと己の弱さを口で露呈するが如き
懦弱！ 土道不覚悟おとおお！」

「落ち着きなさい篁さん。ここは後方です。良いのですよ、たまには女の子のような弱音を言っても。言ってはならない時でなければ
ね」

「はい……………山城さん、変わりましたね。優しくなりました。山
百合にいた頃は、いつも常在戦場のような、合理的に物事を進めるよ
うな、そんな人でした」

「そうでしたかしらね。その頃のこととはよく思い出せなくて。あ
あ、そうだ。今夜、また皆でリルフォート歓楽街に飲みにいけますの。篁さんもい
らっしゃい」

「いいえみんなの憩いの場に、上官である私が行くのは！ 皆がく
つろげなくなります！」

「私服で行けばよろしいのですわ。軍隊の匂いがなくなれば、篁さ
んも年相応の女子ですもの。わたくしもつき合いますわ」

山城さんは立ち上がる。

「や、山城さん！」

「少しでもユウヤ・ブリッジスと仲良くさせてあげますわ」

山城さんは意味ありげに微笑みながら立ち去った。

恋の橋渡しとかする人だったのだろうか？

やっぱり山城さん、変わった気がする。

48話 彼女が軍服を脱いだら

ふいーっ！ まったく焦ったぜ、篁さんの『山城さん変わりましたね』には。

変わったのは当然だよ。中身、別人だもん。

おまけについ『京の都』なんてワード出して、昔話なんかが始まりそうな展開になったのは、本気ヤベエ。

山百合訓練校時代のことなんか、ぼんやりイメージが見えるだけで昔話できるレベルじゃないっての。

本当は篁さんとは距離置かなきゃバーンだけど。

でも篁さんてば、他の人間には凜々しく接しているのに、この山城上総の前では可愛い女の子の顔になるから、こつちもついほだされて世話をやきたくなっちゃうんだよなあ。

ま、可愛い友達の恋のためにがんばる親友ポジってのも悪くない。もつとも成功して目の前でイチヤコラされたら、それはそれでムカつきそうだけど。

それは考えないようにするか。

約束通りワンピースのカーデイガンをはおったお嬢さま風ファッションの私服で待っていると、やがて彼女は来た。

「山城さん、どうだろうか。持っている私服で一番マシなのを着てきたが」

そう言っただけで待ち合わせ場所にあられた篁さん。

それを一目見た瞬間のオレの感想は

——— 絶・可愛い!!!
だ。

タートルネックのブラウスにふわりとしたカーデイガンをはおり、下は、これまたふわりとしたロングスカート。足は裸足に踵の高いパンプス。

平均的なお嬢さま風ファッションだが、篁さんが着ると破壊力ヤベエ!!

前のビキニ以上に衝撃的なのは本当にヤベエな。

「いいんじゃないかしら。それじゃ、みんなの所に行きましようか」
内心の本音を上手に隠しクールに会話をする。

この山城上総の元々の性格なのか、内心の動揺がまったく表面に出ないでクールキャラ演じられるのは本当にありがたいね。

二人で歓楽街リルフォートの入り口に来てみると、VG、ステラさん、タリサ、白銀が待っていた。

オレ達が四人の前に姿をあらわすと、歓声があがった。

「す、すまないな、私も参加してしまって。貴様たちの楽しみを邪魔するような真似はしないで、気にせず楽しんでほしい」

「いやいや。そんなことは気にせず、いつでも参加してください」

「毎回ファッションで楽しませていただけたら、なお良い！ いやじつに素晴らしい！」

白銀、VGは篁さんの方へ行った。

篁さんは基地の整備兵とかの間ですごい人気だと聞いたことはあるが、たしかに男を引きつける引力が凄えな。

タリサとステラさんは、オレの方へきた。

タリサは意味ありげに笑う。

「お姫さま復活だな。東南アジアじゃ、そんな恰好で演説とかしてたな」

「ぜんぜん違うだろが！」

タリサおサルの目は、軍服以外の女の服はみんな同じに見えるのか!?

ステラさんも同じように笑ってささやく。

「中尉とつてもお似合いよ。あなた達が女同士カップルって、ちよつともつたいないわね」

「……………あ。そういや、オレと篁さんは女同士カップルだという怪奇な噂があったな。」

「まずいな。このことは篁さんに知られないようにしないと。」

と、篁さんがオレの背に隠れるように抱きついてきた。

「な、なあ山城さん。みんなの見る目がおかしいんだが。やっぱり変じゃないか？ この恰好」

「軍服を着ていなければ、女性が見られる目はこんなものでしょう。」

それより、わたくしにすが縋らないで堂々となさい。一人で歩けない子供に恋をする資格などありませんわ」

あんまりくつついていると、本当にカップルに見えちゃうだろうが！

ちよつと気持ちいいけど。

「そ、そうだな。山城さん、すまなかつた。私は栄えある斯衛衛士だ！」

斯衛衛士は関係ないと思う。ま、それが篁さんの気合いの入れ方だからいいか。

「ところでブリッジス少尉は？ いつしよに来てはいないのか？」
そうなのだ。何故かこの場に、一番肝心のユウヤが来ていない。

「ユウヤはヴィンセントと少し遅れて来るそうです。出がけにデータの記載ミスがあつたとかで」

待っているか先に店に行こうかで迷っていると、向こうの方からB DUを着た金髪の兄ちゃんが走ってきた。

それはユウヤの専属整備士ヴィンセント・ローウエル軍曹だつた。
「よかつた。みんな、まだいてくれたんですね」

息を切らせているヴィンセントに篁さんは聞いた。

「ローウエル軍曹、何かあつたのか。ユウヤは……ブリッジス少尉はどうした？」

「うおつタカムラ中尉!! 私服? 衝撃的!!」
「……………いいから、早く言ってくれ」

「ええ。データの方は手間取らずに修正できたんで、俺達は急いでこつちへ向かつたんですよ。そしたら途中に、スカーレット・ツイン紅の姉妹の小さい方がガキみたいにフラフラしているのを見たんです」

「なに、たしか……シエスチナ少尉が?」

スカーレット・ツイン【紅の姉妹】だと? その名前が出ただけで、一気に不穏な空気になつたな。

「で、ユウヤは……………あー、れつきとしたソ連衛士にこんな表現をして良いのかわかりかねますが、あやすようなことをしましてね」

いや、相手があなのロリツ娘イーニアなら納得できる。

正規の衛士なら年も相応だろうに、どうしてああ見かけも精神も幼いのか。

「で、相手もなついて……あーいえ、友好的な様子になっていたのですが、そこに片割れの大きい方がきましてね。で、なぜか彼女と激しい言い争いになってしまったんですよ」

たしかクリスカ・ビャーチエノワ少尉といったか。

つまり、そのソ連衛士との言い争いでユウヤが足止めされているということがあるか。

とにかく、みんなでその現場へと急行した。

そこでは、いまだにユウヤとクリスカは言い争っていた。

だがオレの意識は、その脇にいる小さな人影のイーニアにいった。まだ姿が見える前から彼女の存在が明確に感じられたのだ。

彼女もまた、ここへ到着する前から、ずっとオレの方を見ていた。みんなは言い争っている二人を止めにはいったが、オレは二人のことは無視してイーニアの前に立った。オレと彼女はまっすぐ見つめ合う。

「あなた、なんなの？　クリスカいがい………わたしのなかに、はいつてくるかんじ」

こうして近くにいると、この子からニュータイプの共振をはっきり感じる。

おそらく、この子はニュータイプ。その入り口にいる子だろう。どうして地球環境下で生まれたのかはわからないけど。

「おい貴様！　イーニアから離れろ！」

おっと、お姉ちゃんクリスカがこちらにきた。

まあ彼女がニュータイプだからどうする、といえは何もないしな。おとなしく離れよう。

「おい待てテメー！　無視すんな！　はなせコラあ！　おまえら止めんなー！」

「タリサ、おまえは引っ込んでろ。いいかげんソ連相手に意趣返しとかやめろって」

「そうよ。とくにその二人は【特殊実験開発部隊】の人間。機密は最高レベルの所よ。関わらない方がいいわ」

ステラさんとV Gに両脇を固められながらバタバタともがくタリサ。

ソ連士官相手に乱闘しようとしたのかよ。恐えな。場をおさめるべく、篁さんが代表で彼女の前に出た。

「ビャーチエノワ少尉。部下が失礼をした。この場は私があずかる」

クリスカは篁さんの可愛い恰好をジロジロ見た。

「タカムラ中尉……………か？　ずいぶん浮かれた恰好だな。西側ではプロジェクトの主任ですら“それ”なのか？」

「ううっ！」

いや、これは今夜だけだ！　好きになった男に『可愛い』とおもわれなくて……………

口を出さない方が良さそうだ。

「貴様達がいくら享楽に浸ろうとも一向にかまわない。だが、それでいいのか？　あたえられた任務の責務は東であろうが西であろうが変わらぬはずだぞ。それを、そのように浮かれた……………」

「いや待て。俺達は今夜、リルフォート歓楽街で飲みに行くからって、任務をいいかげんにやっているわけじゃないぜ。休んだり遊んだりは、より良い結果をだすためなんだ」

あつ、ユウヤにかばってもらえた！　篁さん、ちよつと嬉しそう。

「そうだな。それに戦場で死んだ仲間はもう飲んだり楽しんだりはできない。彼らに代わって、オフの時間には思いつきり楽しむのも衛士の流儀だと思う」

いいこと言うなあ白銀。

でも、おまえ、この世界にきて半年だろう。死んだ仲間とかいないんじゃない？

「……………なるほど、道理だ」

はい？　なんて言ったの？　まさか同意したの？

「では私も共に行き、学ばせてもらおう。タカムラ中尉、すこし話し

たいことがある。おつきあい願おう」
は、はああああ!!!?
「篁さん、紅スカーレットツインの姉妹にナンパされちゃったあ!?

49話 ソビエト衛士クリスカの煩悶

クリスカはイーニアを一人で帰らせ、オレ達と共になじみの店「ポーラ・スター」へついてきた。そして皆から離れ、カウンターの片隅でご指名のあった篁さんと座る。

——— いったい自分はどうして、こんな可愛い服を着てこの女といるのだろうか。

篁さんはそんな顔をして呆然としていたので、オレも心配になつてついててやることにした。

彼女の右隣にはオレ。そして左隣はソビエト衛士のクリスカ・ビヤーチェノワ少尉がいる状態だ。

皆には気をつかつて離れたのだろうか、飲みながらもこちらを注目している。やはり皆も楽しむどころではなくなつたようだ。

「タカムラ中尉、ヤマシロ少尉。ずいぶんと奇妙な恰好だな。私はそんな恰好の士官と話すのは初めてのことだ。少し調子が狂う」

「わたくし達の恰好には触れないでください、ビヤーチェノワ少尉」
篁さん渾身の『女の子のがんばり』が水の泡になつたばかりだから。

「そうだ、この恰好のことはいい！ 今夜はたまたま気分を変えてみたかっただけだ！」

たしかに気分は変わったろう。最悪な方向へ。

「ゴホン！ それでビヤーチェノワ少尉、私に何の用だ。まさか『この恰好の私に興味をもつた』というわけでもなからう」

「それは………いや、それも少しはあるか。今夜のタカムラ中尉は普段より話しやすそうに見えたのでな。私の個人的興味について聞きたいと思つたのだ」

「あら。思わぬ相手を引きよせましたわね、篁さん」

「こ、光荣だ。貴様にそう思わせたのなら、こんな恰好を試してみた甲斐もあつたものだ」

まったく甲斐はないよね、篁さん。

スカーレット・ツイン

紅の姉妹とデートするために渾身のオシヤレをすることになつてしまったし。

私服なんかすすめたオレはちよつと罪悪感。ごめんね。

「いいだろう、話してみろ。貴様の個人的興味が向いているものは何だ」

「それは、わたくしも気になりますわね。あなたが個人的興味で西側の士官である篁さんに接点を持つとうとした理由。わたくしも聞いて良いものか分かりかねますが、興味はあります」

「……………ああ、それは」

クリスカが小さくとまどつたような後の質問。それは意外なものだった。

「ユウヤ・ブリッジスについて聞かせてもらいたい」

「……………ええっ!？」

「……………はい？」

「彼は優秀な衛士だという評判はきいている。が、私はそうは思わない。戦術機技術が多少であろうと、演習で貴重なテスト機を壊すなど二流以下だ。状況判断の弱さは、そのまま現場の問題につながる」

あーうん。たしかにそういう所は実戦での不安要素になるよね。君に関係あるとは思えないけど。

「彼には何か特殊な才能があるのか？ 一人で私達を凌いだそこのヤマシロ少尉より。彼に何があるというのだ？」

オレも同じ質問を彼女にしたくなつた。

篁さんも同様らしい。

「ブリッジス少尉については、演習で見せたアレがすべてだ。あれから多少は腕をあげたが、ビャーチエノワ少尉が気にするようなことがあるとは思えんな。貴様こそ、ブリッジス少尉の何をそんなに興味をもつ？」

「……………彼に興味を持っているのは私ではない。イーニアだ」

「シエスチナ少尉が彼に？ どうしてだ？」

「わからない。こんなことは初めてなんだ！ どうしてイーニアは、アイツにそんなに!？」

ああ、なるほどね。

ソビエト衛士の彼女が何事かと思いきや、本当に個人的な悩みだつ

た。

要するに過保護なお姉ちゃん、妹の思春期の成長にとまどつてい
るというわけか。

ついでに、その答えまでもわかってしまった。

オレはニュータイプの共振で、イーニアのユウヤへの感情を感じた
ことがあるから丸わかりなのだ。

イーニアはユウヤに恋をしている。

どうしてそうなったのかはわからないが、とにかくそうなのだ。

「ユウヤ・ブリッツス！ いったい奴に……奴に何かあるという
のだ！ イーニアが気にせずにはおれない何が……っ！」

ハムレットの如き苦悩だな。たしかにオレはイーニアの感情を感
じたからわかってしまったが、彼女の様子で才能だ何だのの話になる
か？ 単純に女の子のときめきに結びつかんのか？

「何もありませんわビャーチエノワ少尉。思考があさつての方向に
遠回りしすぎですわ」

こんな余計なことを言うんじゃないやなかつた。

クリスカはギラリと目の色を変えてオレを睨む。

「な、なにヤマシロ少尉！ 貴様はわかるというのか!? イーニア
の心惑う理由を!!」

「ええ、わかりますわ。シエスチナ少尉はですね。ユウヤに
………あつ」

いや、これはオレが告げて良いものだろうか？

こんなことを自分の知らない所で知られるのは嫌なものだし、知ら
れる相手は溺愛が過ぎるクリスカ。『そんな西側の退廃した感情をも
つなど!』とかでいじめられるかも？

おまけに、そのユウヤを好きな篁さんまでいるし。

「どういう意味だヤマシロ!? おまえはイーニアの何を知っている
!？」

「いえ、やはりこれは、わたくしの口から言うべきものではありません
んわ。とにかく、そんな思い詰めるようなことではありませんので、
気にしないでけっこうですわ」

だがクリスカはオレに詰めより、胸ぐらまでつかみやがった!?!
正気か!?! ソ連士官が西側の士官にこんなマネをしたら、ただじゃ
すまないんだぞ!

「言えヤマシロ! いったい何を知っている!?! あの子は最近、様
子がおかしい! なぜかあのブリッジス少尉にひどく興味を持って
いる! 何故だ!?! 彼に何かがあるというのだ!?!」

「やめろビャーチエノワ少尉! 山城少尉を離せ!」
篁さんが叫ぶと、後ろで成り行きを見ていたアルゴスのみんながき
た。

「おいおい、おだやかじゃねえなあ。いくら何でも、それはいきすぎ
だぞソ連さんよお」

「このイワン女! こうなりや、ここであの時のケリをつけてやる
!」

「いや、それはやめろって! 本当にユーコン基地に紛争がおこる
ぞ」

「とにかく落ち着いてくれ。みんな自分の立場を理解してくれ」
ステラさんはオレに急接近し声をひそめる。

「カズサ、本当にあなたソ連の軍事機密を知ってしまったの? だ
としたら、ここは危ないわ。すぐ日本へ帰る用意をしておきなさい」
ぐつ軍事機密!!? どこからそんな話が出てきたのだ!?!
ただ『女の子が恋をしている』ってだけの話だぞ!

——結論を言えば、オレは大事になる前に言うべきだつ
た。

クリスカの背景は、【特殊実験開発部隊】というそれはそれはソ連の
重大な軍事機密をあつかう場所だったのだから。

その士官が血相を変えてオレに『言え!』とか、『何を知っている!?!』
とか言っていたらどうなる?!

はい、ソ連軍事機密の漏洩疑惑がモリモリ。国際問題一直線です。
このあと、オレと篁さんは仲良くMPに連れられて宿舎に帰り、
ドール中尉に長時間のお小言くらいました。可愛い服のままです!

さらに【サンダーク中尉】というクリスカの上官のソ連士官までやってきて、軍事機密漏洩に関する尋問まではじまった。可愛い服のままです!!

せめて着替えさせてくれ!

見せ甲斐のない冷酷おっさん軍人の目が痛くてたまらない!!

結局、笹さんの恋のがんばりは、新たなライバルの存在を知っただけで終わってしまったのだった。

第4章 赤のトータルイクリップス 50話 閑話・第五計画推進派

◆◇♣♥♠◆♣♥

第5計画推進派 Side

東京湾洋上

米軍極東方面第7艦隊 旗艦空母ロバート・Fケネディ司令官私室
国連派遣部隊総司令官ジャミトフ・ハイマン中将は、寝返った各国の要人のリストを見て、あらためて渋い顔をした。

「憂慮すべき事態だな、バスクよ」

ジャミトフ付き参謀長バスク・オム大佐は相変わらず直立不動のままジャミトフの言葉を受けた。

「はっ。引き込んだはずの各国の政治派閥が、次々に向こうへ流れていっているそうです。これでは女狐を弾劾するための連携など不可能です。もはやこの計画は捨てるべきでしょう」

「電磁投射砲^{レールガン}や戦術機技術を惜しみなくバラまき、前線国家の支持を大きくとりつけておる。加えてプロミネンス計画の方も活気付いておる。前線国家、亡命国家共はこぞって第5計画を非難しておるよ。自分らの手で祖国を守り取り戻すと」

『「戦術機の新たな可能性」、ですか。愚かな。戦術機がいかに進歩しようとして、BETAの物量に抗しきれものではないというのに」

「うむ。だがその愚か者どもが女狐を支持しているのが問題だ。このままでは本当に第五計画が潰されてしまう」

「中将閣下。もはや時期を待っては状況は悪くなるばかりです。日本の“鼠”を動かすべきです。現状でも十分日本を荒らしてくれるでしょう。“猫”たる我らが出動せざるを得ないほどに」

「……………よかろう。やれ。日本帝国を掌握せよ！」

彼らの計画は日本の若手将校達に日本政府へクーデターを起こさせることだ。

日本を無政府状態にした後に米軍艦隊がそれを鎮圧し、日本を掌握

することまでが彼らのシナリオ。

そして日本で進められているオルタナティブ4計画を潰す。

「はっ。日本帝国に眠る全スリーパーを起こします。計画にのっとり、帝都の主要な施設は24時間以内にすべて反体制派が制圧するでしょう。日本の機能は完全に停止し、我々の介入はじつに容易く行えることになります」

「うむ……………であれば良いのだがな」

長く練り込んだ大規模計画の発動だというのに、ジャミトフは妙に不安げだ。

自分の手際に疑いを持たれているのかと、バスクも不安になる。

「計画の手はずは完璧です。安心して吉報をお待ちください」

「いや、貴様の手腕に不安をもってはおらんよバスク。だがな……………やはり女狐にはどうしても不安要素があるのだ。奴が我らのシナリオ通りに計画を明け渡すとも思えぬ。やはり無力化する何らかの手が欲しい」

「フツやはりあの女狐は苦手ですか。中将閣下」

「我ながら臆病なことだとは思うがな。ここ最近の女狐の動きは神がかっている。これほど大規模な計画に気づかれていないことが不思議なくらいにな」

長い時間をかけて切り崩してきた各国の要人を短い期間に逆に寝返らせ、彼女に仕掛けた政治攻勢のほとんどが潰されてしまった。

さらに彼女の勢いは止まらず、今や逆に第5計画はひん死の状態へと追いやられてしまった。

「計画を早めたことでクーデター側の戦力も十分とは言えん。女狐の今の手腕なら、早期に沈静化させられる可能性はどうしてもある。バスクよ、お前はと思う」

このジャミトフ中将の問いに、バスク大佐はニヤリと嗤って答えた。

「そこは抜かりありません。お忘れですか。例の“マスター”が女狐の抹殺を請け負ったことを」

「……………む？ 仕掛けるのか。いつだ？」

「予定日の前日にやらせることにします。爆薬満載のH S S T（宇宙再突入型駆逐艦）を、奴のいる横浜近郊に落として確実に仕留めま
す。さらにその混乱は、戦力不十分なクーデター勢力を大いに助けて
くれるでしょう」

「ほう。それは貴様のアドリブか？ さすが参謀だな。連中の戦力
の不安に、キリスト教奴恭順派の計画を使うとはな」

バスクはそれには答えず、だが自信ありげに微笑んだ。

「フッフッフ。まさかたった一人の暗殺に、横浜地域一帯を消滅さ
せるとは。人類の敵らしい狂った手段をとる」

「たしかに。では、やめさせますか」

バスク大佐は今度は悪戯っ子のようにわらった。

ジャミトフ中将もまた笑い返す。

「フハハ」まさかだ。あの狂犬すら使いこなせねば、人類の未来
など望めんよ。我らはその日をもって主流となる。バスクよ、万事抜
かりなく計画を進めよ！」

「了解です！ 人類に栄光あれ！」

ここに香月夕呼抹殺計画。

それに続く日本掌握計画は発動した。

51話 カムチャツカへ来たる

ソ連カムチャツカ州 アベチャ湾

強襲戦術機揚陸艦ミトロファン・モスカレンコ甲板

接岸間近のアナウンスが流れ、オレは白銀、ハロと甲板へ上がった。季節はもう真夏の八月。天候も晴れだというのに、ここには蒼天はない。

青みがかったライトグレーに鉛色のまじった、息苦しい空だ。

さらにソ連第一級の軍港であるはずのこの場所だが、そのさびれた景観が気分を滅入らせる。

あちこちの港湾設備はどれも古くサビとタールまみれ。

さらに栈橋に係留されたままの軍用艦は朽ちるままに放っておかれている。

「いわゆる『しみつたれた場所』ですわね。ユーコン基地の最新鋭で整備の行き届いた設備と比べると、その格差が凄いですわ」

「おそらく整備の人員も設備も前線にまわさざるを得ないんだろうね。もっとも、前世にあったソ連時代でも場末の施設はこんなものだったらしいけど。戦争もしていないのに」

現在、アルゴス小隊のメンバーは上陸前のブリーフィング中。

せまい船の中、部外者のオレ達は身の置き所がない。

なのでオレと白銀とハロは自然と甲板へ上がって来たのだ。

「伝説の社会主義大国・ソビエト連邦に来訪と思うと、感慨深いものがありますわね。わざわざ来て見たい景観ではありませんが」

オレ達の前世のソビエト連邦は、オレ達が生まれた頃に滅んでいく。

こっちのソ連は領土がほとんどBETAにとられたとういうのに、いまだ存在している。

社会主義の統制経済というのは戦乱に強いシステムらしい。

「それにしても演習のための客員であるはずのわたくし達が、いったい何故このなにゆえような場所に来なければならぬんでしょね白銀。

わたくし、あまりの超展開に目まいがしそうですわ」

「俺に聞くな！ 本当にいつたい何なんだ、今回の夕呼先生は！
どの世界でも何をしでかすか分からない人だったが、ここまで訳の分からんことは、かつて無かったぞー！」

「自分の正体を大声で海に叫ぶのはおやめなさい、タイムリーパー。
わたくし達は未知の戦術機ガンダム操縦者としてそれなりに注目されているのですよ」

演習のあとオレとハロは、白銀が何度もこの世界のこの時代をやり直しているタイムリーパーだという話を聞いた。

しかもこの世界の戦術機で戦闘をくりかえし、死亡すら何度も経験しているとのことだ。

どうりでこの世界への馴染み方が普通じゃないと思ったよ。

それにしてもソ連への出向が決まってから白銀はずっと不機嫌だ。

なんでも日本の方で対BETA戦線の趨勢を決める重要な計画があるらしいのだが、いつまでもそれに参加できないのでイライラしているらしい。

「くそっ！ 俺はいま日本にいなきゃなんないのに、どうしてこうも外国巡りをやらされる？ 冥夜達も総戦技演習試験で苦労しているだろうし、そろそろアレがはじまるってのに……！」

「まあまあ白銀。ここペドロパブロフスク・カムチャツキー基地は北東ソビエトの最南端。日本の北海道はオホーツク海をはさんでくそこだ。アラスカよりずっと日本の近くに来たじゃない」

「だから何だ、ハロ！ それが慰めになるとでも思っているのか!? 海外でまったく関係のない戦術機開発の任務をやらされて貴重な時間を潰しているのは変わらんだろう！」

そうなのだ。

アラスカ・ユーコン基地でのガンダム演習の後に香月博士から命じられた次の任務は、篁さんが主任となっている『XFJ計画』の手伝いだ。

それもソ連まで出向いて、『不知火式型』という改修戦術機の実戦演習のサポートをせよとのことだ。

あまりに意味不明。

何故、オルタナティブ4計画という大規模な対BETA計画に携わっているはずのオレ達が、まったく関係のない戦術機開発の手伝いなどをさせられるのだろうか？

二機のガンダムという、この世界ではオーバースペックな戦力を計画から遠ざけている意味は何なのだろうか？

野球でいえばペナントレースの真つ最中に主力選手を二軍キャンプ送りにしているようなもの。

前世で野球やサッカーを見てると、たまに迷采配とでもいうべき謎の選手交代劇とかあったが、まさにあれを見ている気分だ。

選手に無駄な労力を強いる香月監督を怒鳴ってくれるオーナーでもどこかにいないものか。

「いつそ日本に帰ります？ カムチャッカ半島からなら、巡航形態のウェイブライダーで日本に行くことは可能ですわよ。リガンダムを乗っけながらでも」

「……………任務を放棄して帰ってどうなる。ただ脱走兵として処罰されるだけだ。とくに上総。お前は二度目ともなれば許されない。バカな真似はやめておけ」

まあ、そうだな。

『また大東亜連合にでも行くのか』とかチラリ考えたが、これ以上の脱走は本当に日本を敵にまわしてしまう。

おとなしく国連軍日本支部の衛士を続けて任務に従事しよう。

「やっぱり上総と白銀の日本への受け入れが難航しているらしいよ。根回ししている間は二人が日本にいられるとまずいから、こういうった任務で時間を潰させているんじゃないかな」

「まあ。軍の脱走というのは思った以上に重大事でしたのね。ならば香月博士も努力なさっているのですから、文句は言わないのが大人というものですわね。白銀、そういうことですから……………」

「……………違うな。おそらくそれは嘘だ」

「はい？」

「今回のアラスカ任務のことを思い返してみろ。二機のガンダムの

演習によって戦術機技術を売り、各国の戦術機技術の向上、及び各国の支持をとりつけることだ。そしてそれは大きく成功した」

「え？ ええ、そうでしたわね。その結果まではよく知りませんが……………ハロ？」

「あーうん。ちよつと各国の評判を調べたことはあつたけど、すごかつたよ。戦術機技術の革命だとか何だとか。まだまだ拙つたないとはいへ、宇宙世紀のモビルスーツ技術だから当然だね」

「そうだ。夕呼先生はいま国際政治的にずいぶん有利な位置にいます。俺の見どころ、すでにオルタネイティブ5すら圧倒している。これだけの追い風で、この件のみが難航するなんてありえない」

「すごい！」

オレより年下の高校生ぐらいの年齢なのに、すごい推理力！

まるで噂の高校生探偵みたいだ!!

あっさり香月博士の言葉を信じちやつたオレ達っていったい……………

「はっハロ！ あなたは前に『ゼータの情報収集システムなら世界の裏側を見放題。宇宙世紀のハッキング技術の前にはこの世界のファイアウォールなんて赤子同然』なんて言っていましたよね！ なのに、まんまと騙されるって……………！」

「……………ピポピポ……………」

ハロは恥ずかしそうに「コロン」と転がった。

宇宙世紀の人工知能になったとはいえ中身はオタクの晴郎だからな。

自分の興味のあることしか調べてこなかったんだろう。

「でしたら何故？ この関係のない【XFJ計画】の手伝いに、いったい何の意味があるのでしよう？」

「おそらく俺達に日本に帰ってほしくない何かがある。となると、それは……………」

白銀は何かを言おうとしたが、オレ達を見るとハツとしたように我に返った。

「上総とハロに聞かせるようなことじゃなかったな。どうかしていた。忘れてくれ。とにかく任務にはげむとしよう。今はそれしかないからな。そろそろブリーフィングも終わつたろう。俺達も戻って上陸の準備をしよう」

そう言つて白銀は甲板から降りていった。

オレは鈍色の空を仰いで問題の香月博士に思いを馳^はせる。

「香月博士というのは、かなりクセ者の方らしいですわね。このソ連でも何をさせられるやら」

「うん。ボクもこれからは世界情勢とか真剣に調べるようになるよ」

さびれた港の景観から背を向け、オレ達も下へと降りていった。

52話 ソ連早期脱出計画

白銀武Side

X F J 計画部隊用 野外第三特設格納庫^{ハンガー}

『試製99型電磁投射砲』か。ビームライフルを知らなきゃ、『スゲー』とか言っていたんだろうな。もつとも、夕呼先生がこの時期にこんなものまで造っていたことは驚きだが」

オレはこの格納庫^{ハンガー}の主役のその圧倒的体積の火器を見上げた。

今回の実戦試験には不知火・式型と並んでこの電磁投射砲の実戦運用も行う。

すでにこれは各国への販売が決定してはいるが、実際の運用はまだなので、その実戦データが必要だというのだ。

俺達がソ連くんたりまで来させられた理由が、これのお守りのためである。

無論、建て前であろうが。

さて、俺がこの格納庫^{ハンガー}に出向いたのは、これを見るためではない。事前のソ連との取り決めで、各国の兵器を置く格納庫^{ハンガー}には、その国独自に防諜対策をすることが許されている。

つまりここはソ連内において数少ない盗聴の心配の無い場所であり、内密の話をするにはうってつけなのだ。

俺は電磁投射砲の前にただ一人立つ人物に敬礼をする。

「アーガマ小隊01白銀武少尉、参りました。ご用は何でしょうか、篁中尉」

俺を呼び出したのは、この遠征中の直属の上官・篁唯依中尉だ。

この同世代の可愛いすぎる上官とのつき合いも、それなりに長くなったものだが、俺だけが呼び出されたことは初めてのような気がする。

「来たか。悪かったな休憩中に。私の時間が今しか取れなかったのだ」

「それはかまいませんよ。でも、めずらしいですね。山城少尉抜き

に自分だけと呼ばれるのは」

篁中尉は「ついつ」と恥ずかしそうに目をそらした。

そんな顔も妙に可愛い。

不幸なことだ。軍人が可愛いすぎて良いことなんて一つも無いというのに。

「う、うむ。知つての通り、私と山城少尉は同期でな。それ故の気安さというか、『馴れ合い』がどうしても出てしまう。この話は完全に私情を挟まずにしたいのだ」

つてことは、上総がいると私情があふれてしまうというわけか。

まさか彼女と上総の関係のウワサ、本当なのか？

「……………まあ、こういったことは人それぞれ。踏み込むのはやめよう。」

「わかりました。聞きましよう。どういったお話でしょうか」

「白銀少尉、貴様はこのソ連遠征による実戦テストについて、どう思う？」

「『どう』と聞かれるなら、やはり性急すぎる気がしますね。日本国内で可能な実戦テストをわざわざソ連に出向いて行うことも不可解ですし」

そうなのだ。

BETAとの戦闘は日本国内にもいくつもある。

佐渡島に赴いても良いし、関西でも北九州でも選びほうだいだ。

「そうだ。私もドーウル中尉とよく話し合ったが、じつに不可解なことが多い。この決定がいきなり決まったことも、我々試験チームの意見を聞かずに決められたことも、早すぎる実戦テストへの移行について。ソ連が何かしら謀略をたてている可能性も多分にある」

……………だよな。

夕呼先生がこんな見え透いた謀略に乗せられる、というのが分からないが。

でも今回のループ。あの人も何か俺に隠しているようだし。

「また、これは内密にして欲しいが、ソ連側の士官から『日本はアメリカより我々と手を結ぶことを考えてほしい』といった内容をほのめ

かされた。しかしこれは無理な話だ。彼らが掲げる【社会主義思想】はソ連の力が低下した今でもなお脅威だ。我が国には皇帝陛下、政威大將軍殿下ならびに武家といった、古くから続く権威が数多くあるのだからな」

ああ、そりや社会主義にとつては美味しそうな肅清対象が数多くあるわ。

下手に手を組んでその思想を日本国内に広められたら、最悪国を割る。

……………そういや、この時期の日本にはクーデターの脅威があつたな。

そのことも夕呼先生には伝えたが、上手くやっているだろうか？

「故にこの場所に長く留まると何が起こるか分からん。諸君やアルゴス小隊の安全のためにも、速やかなアラスカへの帰還を果たしたい」

「もつともなご意見です。自分らはアラスカではなく、ここから日本への直行を望みますが」

篁中尉は俺の本音まじりの冗談には答えず苦笑いをした。

まあこの件に彼女にできるのは夕呼先生へ尋ねることぐらいだからな。

言うんじやなかった。

「だが我々は軍人だ。命令とあらばどのような任務にも従事し、結果を出さなければならぬ。故にできるだけ早く結果を獲得し、速やかに帰還するのが理想と思われる」

「完全に同意です。自分も速やかな任務達成をのぞみます」

「そのために必要なものは不知火式型およびこの電磁投射砲の実戦による規定数のBETA撃破の戦闘データ。これが理想値に達すれば、たった一回BETAの侵攻を迎えるだけで帰国が叶うかもしれない。かなり極端だが、ドーウル中尉はこれを目指すべきだとの意見だ」

「おおっ！」

「だが、それを為すには、扱う衛士に無理をしてもらわねばならな

い。不知火・式型に搭乗するブリッジス少尉は初陣だというのに」

「……………死の八分ですか」

BETAとの戦闘による初陣の出撃で死亡する衛士の平均生存時間が八分だという。

BETAとの戦闘の過酷さをよく表す言葉だ。

故に初陣の衛士は無理をさせず、生き延びさせることが指揮官の役目である。

つまりユウヤに真逆のことをさせてしまうのだ。

「じつに危険極まりないが、ドール中尉の意見では、貴様らアーガマ小隊がブリッジス少尉の直援につけば十分可能であるという。どうだ？」

それが今回の呼び出しの用件か。

しかしガンダム二機を随伴のお供に出撃とは。

王侯貴族のごとくじつに豪華な初出撃だな、不知火・式型。

「白銀少尉。貴様が優れた衛士だということは、この短いつき合いでもよく分かる。それを見込んで聞きたい。貴様が考えてこの案についてどう思う。やはり『たった一回ですべてを完了させる』というのは無理が過ぎるか？ 正直な意見を遠慮無く述べてほしい」

いちおうユウヤのために真剣に考えてみた。

だが、やはり答えは決まりきっている。そもそも初陣とはいえ、BETAとの戦闘に直援なんて豪華なものがつくことはない。

それに衛士は本来、無理をくぐり抜けるのが本分。

ユウヤ、お前は優れた衛士だ。

見ていてやるから、やってせろ！

「やりましょう。要するに自分らはブリッジス少尉がBETAを倒している間、その直援につけば良いのでしよう？ まかせてください。あいつも不知火式型も無事帰還させてみせますよ。その上で、あいつに初出撃世界最高のスコアを出させましょう！」

「いや、世界最高は山城少尉の六万超えだ。さすがにそこまでは求められん。だが、よかろう。もしブリッジス少尉も了承したなら、そ

の方針でいく。……………そう言えば遅いな」

「何がです?」

「いや、じつは意思確認のために、当人であるブリッジス少尉もこの場に呼んだのだ。だが、いまだに来ていない」

「それは変ですね。近くを見てきます」

俺は踵を返して行こうとしたが、ふと目の前の電磁投射砲が目に入って、もう一つの疑問を思い出した。

「ところで電磁投射砲の操者は誰に? 自分が直援任務なら、別の者が扱わねばなりません」

「私だ。私が指揮所を離れ、武御雷で扱う」

「篁中尉自身が?」

「電磁投射砲の試験運用は、アラスカへ来る前の私の任務だ。その長所も短所も知り尽くしている。私が扱うことが最も結果を出せるだろう」

「了解いたしました。篁中尉もブリッジス少尉も必ず守ってみせます」

「いや、私の方はアルゴス小隊がつく予定だ。アーガマ小隊はブリッジス少尉の直援に専念してくれ」

「了解しました。それは今からです」

俺は今度こそユウヤを探しに格納庫ハンガーを出ていった。

53話 ジャールの狼達

ピキーン

それは、とある午後の休憩時間のことだ。
いきなりニュータイプの共振を感じた。

「これを出すのはイーニアしかありませんわね。でもこの悲鳴のような、切羽詰まった叫びのような共振は？」

こんな危機のようなものを感じてしまつては、放っておくわけにも
いかない。

オレは一直線にその場へ向かった。

◇ ◇ ◇

「やはりイーニアでしたか。しかし、これはいったいどういう状況
ですの、ユウヤ？」

「カズサ、か。まあ見ての通り、こいつらに襲撃されている真つ最中
だ」

野外格納庫^{ハンガー}が立ち並ぶ一画の狭い通用路の片隅。

そこには前世で見た不良マンガみたいな光景^{シーン}があった。

十代の少年少女七人が鉄パイプやナイフを手にして、ユウヤとその
後ろに庇うクリスカ、イーニアを取り囲んでいるのだ。

「オーイオーイ、まーた、どつかのお節介が来たのかよオ。ゲラゲ
ラゲラ」

「外国のキレイなお姉ちゃんよ。アタシら、このエリートロシア女
共にアタマきてっからよ。どーしてもボコらなきゃすまねーんだわ。
コイツみてーに邪魔しねーで、おとなしく『回れ後ろ』してくんない
？ そうすりゃ無事でいられっからよオ。アヒヤヒヤヒヤ」

「それとも一緒に剥かれる？ 裸にすりゃ、けっこうな見世物にな
るぜエ。ヒヒヒヒッ」

「殺人上等！ 面倒臭エ抵抗すりゃ、命の保証はねエ！ ヒヤハハ
ハ」

鉄パイプで周りをガンガン叩いたり、ナイフをペロペロしたりして

言うこのセリフ！

なんでソ連の軍事基地内にこんなロツクなヤツラがいるの!?

ハッ！ まさかオレはいつの間にか死んじやって、ロツクな「梅澤春人ワールド」へと転生しちやったとでもいうのか!?

落ち着けオレ。コイツらは軍のフライトジャケットを着ているし、階級章もつけている。

軍に属している人間には間違いない。

「ユウヤ、いったい何がどうして、こんなことになっていきますの?」

「俺にもよく分からん。呼び出しを受けたんで行く途中、イーニアの悲鳴が聞こえてきてな。来て見るとクリスカとイーニアがコイツらに襲われていたんだ」

コイツら、十代特有のあどけなさの顔で、見ればみるほど不良^{ヤンキー}そのものだ。

「本当に、なんで軍の基地内にこんなヤンキーみたいな連中がいるんですの!？」

つい前世日本の不良をあらわすスラングの“ヤンキー”なんて言葉を使った。

だが瞬間、空気が変わった。

連中はギリリと凶悪にオレを睨みつけ、殺気をみなぎらせた。

「……………お前、いま何だった?」

「は?」

「俺達がアメリカ野郎^{ヤンキー}みたいだと!! ああつ!？」

「ふざけんじやないよ! こんな地獄の底で毎日BETA退治をやらされているあたし達のどこが、後方で偉そうに最新設備でふんぞり返ってるアメリカ兵^{ヤンキー}に似ているってんだい!？」

しまった。

“ヤンキー”という言葉は意外と歴史があつて、アメリカの南北戦争時、北軍兵士をあらわす言葉がはじまりだとか。

そんな言葉がどうして、オレの前世日本では不良をあらわす言葉になったのか不思議だが。

有名な格言に『ヤンキー、ゴーホーム!』とかある。

「許せねえ……………！ もう外からの客人だか知らねエがかまわねエ！ やつちまおうぜ！」

「そうね！ こいつらが来るたび、こっちは余計な苦勞をさせられて死人が出るんだもの。ここで思いしらせてやるわ！」

それはもう冷笑まじりの遊びのような目じやない。

本当の本気に殺気をはらんだ人殺しの目だった。

なんてこった。外国の軍人相手に本当にやる気か。

後でタダじやすまないだろうに。

沸点がドライアイス並に低い連中だ。

「ヤマシロ、貴様は状況を悪化させに来たのか？ 彼らはあれでも

祖国ソビエトの前線を守り続けてきた同胞。それをよりにもよって、

一般兵士すらB E T Aとの戦闘を経験していない天国連中の

アメリカ兵呼ばわりとは何事だ！」

なんだよクリスカ。なんで助けにきたオレが君に責められなきや

ならない？

「俺は真正銘そのアメリカ兵なのだがな。とにかくカズサが悪

い。連中、本気になったぞ」

ユウヤまで!?

だがしかし、たしかに連中はナイフや鉄パイプを水平にこちらに向

けてきた。

陣形までも前衛後衛を組んで、容易にこちらから攻められないよう

にしている。

マズイ！ あれは避けられない！

絶体絶命!!!

——「貴様たち、何をやっている！」

(……………え?)

突然に通用路に、凜とした女性の声が響いた。

すると殺気をはらんで戦闘態勢をとっていた少年少女は、弾かれたように直立不動の姿勢をとった。

規則正しい軍靴の音を響かせ、背の高いサングラスをかけた女性士官が現れた。

その後ろには篁さんと白銀が続く。

「貴様ら、それぞれの機体の整備補給の時間であろう！ この命令違反は高くつく。今すぐそれぞれの持ち場に戻れ。駆け足ッ！」

「了解……」

さつきまで狼の群れのようなだった奴らが、訓練された犬のように整然と駆けていってしまっただけだ。

最前線の兵士は『狼のように獰猛で犬のように従順でなければ生き残れない』というわけか。

「山城少尉、ブリッジス少尉、無事か!？」

篁さんが青い顔をしてオレ達の元へ駆けてきた。

「ええ。危ない所でしたが、おかげで助かりましたわ。あの士官に感謝しますわ」

篁さんは、そこらに散らばった鉄パイプやナイフを見て眉を寄せた。

そして立ち去ろうとする女性士官を引き留めた。

「お待ちください！ ラトロワ中佐。あなたの部下が、私の部下に度を越した危害を加えようとしたようです」

中佐？ そんな大物の部下のわりには、ガキばかりだったな。

いや、それ以前に不良集団みたいな奴らだったぞ。

「そのようすな。どうも申し訳ない、タカムラ中尉」

「中佐。彼らには処罰をしていただけるのでしようね、そちらの方から。二度とこのようなことがないように」

もしかして篁さん、怒っている？

「約束しよう。今回だけは許していただけるとありがたい」

「……ええ、今回だけ。ですが次回があった場合には、問題とさせてもらいます」

「感謝する。では、私はこれで」

女性士官は踵を返し、そのまま立ち去った。

なんとも、貫禄のある人だ。

篁さんはかなり怒っているらしく、彼女らの去った方向をいつまでも睨んでいた。

「上総、ユウヤ。災難だったな。何があったんだ？」

白銀が話しかけてきた。

ユウヤはイーニアとそれを慰めているクリスカを顎で「クイツ」と指して言った。

「ああ。どうにもソ連内のいざこぎで、この二人が襲われててな。見過ごせなくてそれに参加しちまったというわけだ。カズサも何故か来てくれたんだが、事態を悪化させてヤバかったぜ」

なんだよ、ちよつと『ヤンキー』って言っただけじゃんかよ。

このヤンキーめ！

「白銀、ところでさっきの女性士官は誰です？ あの悪童どもの上官のようですが」

「向こうのジャール戦術機大隊指揮官のフィカートツィア・ラトロワ中佐だ。呼び出したユウヤがなかなか来ないってんで探しに出たんだがな。そこで途中で出会って同行してくれた。『もしかすると自分の部下が悪さをしているかもしれない』ってんでな」

「ということはあの悪童たち、やはり衛士だったのですね。ウイングマークをつけていましたが、ちよつと信じられませんでした」

「そして奴らジャール大隊が、外国から来訪の試験小隊の随伴を担当しているらしい。つまり実戦テストの間、俺達を安全に守っていただけというわけだ」

「はあ!? 守っていたかどうか、襲われたんですけど!!」

「……………こりゃ、頼もしい部隊に随伴していただけるもんだぜ」不安だらけのこのソ連遠征に、さらに不安要素が加わった。

そして数日後。

いよいよBETAの大群が基地に襲来した。

54話 魔の陰謀オルタネイティヴ5

横浜ハイヴは白銀の報告によって早期に調査を終える事ができ、その跡地に横浜基地建設を着手することができた。

そして基地建設は突貫工事で進められ、現在は地下部分が完成。

オルタネイティヴ4の核心である「00ユニット」の製作もすでに始まっていた。

◆◇♣♥♥◆◆♣♥

香月夕呼Side

横浜基地 地下19階

副司令官私室

部屋に据え付けられた大スクリーンには、衛星映像による現在の横浜近海の東京湾が映されていた。

そこには日本へ派遣されているアメリカ軍艦隊が次々と集結している様子が映しだされている。

「本当に正直すぎる連中ねえ。この分じや第五計画推進派、明日にも来るわね」

クーデター発生と同時に、この大艦隊で横浜基地にプレッシャーをかけ、指揮権の譲渡をせまる、と。

思わず笑ってしまうくらい分かりやすい。

『これから日本を侵略しにお邪魔いたします』と言っているようなものじゃない。

でも、報告のためにたまたまここに居る鎧依は、わずかにとまどつた声を出した。(あたしじやなきや見逃しちゃうけどね)

「ふむ。たしかに、この招かざる客は明日にも訪問してきそうな勢いですな。ですが内通者の話では、決行日はあさつてになるそうです」

「はあ?」

あたしは思わず、スクリーンの大艦隊をマジマジと見てしまう。

日本に異変が起ころなければ、コイツらは何もできないはず。

「あさつて?」なのに、もう艦隊をこんなに集中させているわけ?

「こいつら明日は何するつもりなのよ？」

『演習』という名目ですから、本当に洋上演習でもするしかないでしょうな。いやはや他国の庭で迷惑なことですよ」

「……………変ね。いくら何でも本当に演習なんて、無駄が多すぎるわ。明日の空白の一日。第五計画推進派、いったい何をするつもりかしら？」

「指揮官の性格によっては慎重が過ぎて一日くらいの誤差はよくあることです。臆病な私の私見ですが」

「部隊ならともかく、艦隊は石油をたらふく喰うわよ。無駄がないよう綿密なスケジュールを組んで運用するはずよ」

「どうにも、この艦隊の動きは明日を想定しているようにしか見えな

い。
「さて。神ならぬ身に、この世の神にもなろうというかの国の思惑などわかりかねますな。まあ明日動くことも想定はしておいてください」

「……………気にはなるけど、今の時点でできることはないわね。予定通り、青年将校達が動くのを待ちましようか」

「ざっとモニターで各地の仕掛けの様子を見て、見落としがないかを確認していく。」

「それと博士。あなたの暗殺計画が進行中だという噂もチラホラ。来るとしたら、この事件中です。念のためここから動かないことを願います」

「大丈夫よ。ここは地下19階シエルター構造の内。ここから地上に指示を出して、あたしはクーデター進行中は外に出ないわ。優秀な部下がちゃんと対処してくれるから安心よ」

「うらやましいことですよ。私はこれから身を粉にして駆けずり回らねばなりません。叶うなら終息するまでここでノンビリしていたいものですな」

「それはあたしが御免被るわ。あたしだって遊んでいるわけじゃないのよ。ここで状況をコントロールしなきゃなんないんだから」

「フツ分かっていきますよ。では、私もそろそろ行かねばなりません。」

互いにご武運を」

鎧依が行った後も、あたしはこの艦隊が明日何をするかが気になった。

それは妙にチリチリする感覚だった。

◆◇♣♣♥♥◆◇♣♣

第五計画推進派 Side

東京湾 横浜港近海

米軍第7艦隊 旗艦空母 ロバート・F・ケネディ 司令官私室

その部屋の主であるジャミトフ・ハイマン中将は、高級酒を手酌で飲んでいた。

そこに司令官付参謀のバスク・オム大佐は報告のために入室してきた。

「閣下。飲んでいらつしやるのですか？」

「うむ。いわば“前祝い”というやつだ。まずは明日の女狐の件がつつがなく完遂できるようにな。バスクよ。おまえも一杯だけどうだ」

「いえ、遠慮いたします。私の古巣の部隊では、作戦前の“前祝い”は不吉とされています。作戦前こそ気を引き締め備えよ、と学んでおります」

ジャミトフはバツの悪い顔をしてグラスを机に置いた。

「これはしたり。ではワシは愚将か」

「ご安心ください。作戦に監視の目を緩めぬことこそ、参謀たる私の役目です。閣下が安心して酔えるように」

「いや、ワシももう飲むのはやめにしよう。明日からはじまる一連の作戦の完遂までは気を緩めるべきではないな。まずは明日のHSS T（再突入型航宙駆逐艦）の方はどうだ」

「順調です。民間の貨物船に偽装したHSS Tは大気圏外を移動。目標地点へ到達後、横浜基地に向かい自由落下をはじめます」

「その時点で女狐は対抗措置をとろうとするだろうな。だが、抜か

りはないのだろうか?」

「もちろんです。通常の航空駆逐艦は電離層を抜ければ減速するようプログラムされています。が、これは逆にフルブーストがかかりません。地表到達まで140秒ですので、どのような対抗措置も間に合いません」

「それでは地表到達時には音速の数倍もの加速になるぞ。大気摩擦の耐熱は大丈夫なのか?」

「名目は民間に払い下げた駆逐艦ですが、無人ですので通常より嚴重な耐弾耐熱処理を施せております。地表に到達したH S S Tは正に巨大な徹甲弾。落下の衝撃だけでも地中を20メートルは抉りますが、とどめに……………」

ジャミトフは妙にもつたいぶるバスクに嫌な予感を覚えた。

そしてその予感は当たった。

「その瞬間、内部に搭載されている爆薬が炸裂。半径10キロが消滅いたします」

!!!?

「10キロだ?! バカな、あまりに過剰すぎるぞ!! なぜ止めなかった!?!」

ジャミトフは思わず立ち上がった。

「横浜基地はいまだ建設中ではありますが、地下部分はすでに完成しているようなのです。地下は20階もの深さでシェルター構造。その防壁の奥にいる女狐を確実に仕留めるには、これぐらいしなければおぼつきません。かの指導者^{マスター}の説明です」

「ドスン」と力なく椅子に座りなおす。

「……………先日のG弾投下といい、我々は横浜にとって正に災厄だな。だが、このような作戦を実行するキリスト^{チャ}恭順派^ラはやはり危険だ。バスクよ、奴らの首領【指導者^{マスター}】の始末は、事が終わり次第すぐかかれ」

だが、バスクはジャミトフの命令に歯切れ悪く答えた。

「それが…………私の子飼いの専門家によると、指導者^{マスター}の暗殺はあまりに困難だということです」

「なんだと!? 貴様の特殊部隊がか!? たかがテロリストの首領を!?」

「はい。どうやら奴は特殊部隊の手口に深く精通しているらしく、潜り込むことが困難だそうです。加えて居場所の情報を極力出さないようにし、影武者をいくつも使い居場所の特定ができません。仕留めたとしても、それが本物である確定は難しいでしょう。どうやらすでに我々の意図を察知しているようです」

「ジャミトフは頭を強く掴み苦悩する。」

「……………なんとということだ。ワシは怪物を大きくしすぎたかもしれん。だが、だからこそ指導者の抹殺は必ず為さねばならん! 女狐、プロミネンスの始末がすんだなら、キリスト恭順派は我々の最大の脅威となる。バスクよ、方法を考えよ。どれほど困難であろうとも!」

「もちろんです。私はすでに、霧の奥にいる指導者の居場所を特定できる瞬間と、それを撃ち抜く方法を見いだしております」

「おお、さすがだバスク! それは何時だ?」

「狙いは奴らの次の作戦にあります。奴らはH S S Tを落下させた後、すぐにユーコン基地を制圧するそうです。時期は明確に告げておりませんが、一月以内だと」

「なんだと!?! 一月以内では我々が日本に関わっている時期。手が出せないではないか!」

「それが狙いでしよう。先ほど述べた通りキリスト恭順派も我々を警戒しております。ですが、奴らのユーコン基地制圧作戦中こそが指導者抹殺の最大のチャンスでもあります」

「ふむ? どういうことだ」

「我が国の対B E T A最前線基地ユーコンの攻略ともなれば、どれだけ完璧に作戦を練ろうとも、指揮を他人任せでは足りません。指導者自ら行うはずですよ。つまりこの作戦中には、確実に指導者はユーコン基地にいるのです」

「なるほど。ではユーコン基地奪還に際し、そこに我々の意図を伝えた特殊部隊を送り込み、指導者を始末する、というわけだな?」

バスクは軽く首をふった。

「残念ながらそれで指導者^{マスター}は討てないでしょう。先ほども述べたように指導者^{マスター}は特殊部隊に深く精通しております。作戦中に気づかれ、逃げられる可能性が多分にあります。加えて我々が現場にいないのでは、とても仕留めきれません」

「ではどうする。貴様の言う“チャンス”をどう生かすというのだ？」

「ユーコン基地にもっとも近いフェアバンクス基地にB-2爆撃機を待機させます。かの基地の被害が最高潮に達した頃、それを発進させます」

「なんだと！ まさかそれでユーコン基地を……………！」

「そして使用するブツは中性子爆弾」

——「バカなア!!!」

バスクのあまりに常識はずれの策に、ジャミトフは先ほどよりさらに激しく飛び上がった。

「自国の基地に中性子だど!? あそこの司令官のジョージ・プレストン准将は我々の同志だぞ！ それに南アメリカ条約機構軍、カナダ軍、オーストラリア軍など支持国の代表もおる！」

「先ほど中将閣下がおっしゃったでしょう。『指導者^{マスター}の抹殺は必ず為さねばならん』と。やむを得ない犠牲ですが、これが確実であり最善です」

「ウ……………ウウム……………」

「それに新たな戦術機技術の革新によって、欧州連合をはじめとする反オルタネイティブ5の抵抗は抗しきれないほどになりました。ですが、その戦術機開発の中心であるユーコン基地が消滅したなら、一気に我々は盛り返すことが可能です！」

「……………よかろう。だがプレ斯顿准将は……………」

「彼には『ハルトウィック大佐は准将を亡き者にして、基地の掌握を企んでいる可能性がある』と伝えておきましょう。疑心暗鬼にかられ、基地の防衛体制はガタガタになります。ククク……………」

「こ奴、指導者^{マスター}と同類だったわ！」

有能であろうと、こんなやりすぎる男を参謀長にして良いのだろうか？

ジャミトフは大きな不安に駆られた。

——翌2001年8月19日。

日本とソ連は、奇しくも同じ日ほぼ同時に、巨大な衝撃を迎えた。それは両国のみにとどまらず

世界すべてを震撼させる最大にして最悪、また最高の衝撃であった。

55話 その前夜

2001年8月18日

ミーティングでエヴァンスク・ハイヴ近辺のBETAの増大が衛星情報で認められたことを告げられた。それら数万のBETA群が警戒区域であるミリコヴォ地区に侵攻中だという。

試験部隊はBETAの侵攻阻止を任務とするソ連軍部隊に随行して、いよいよ実戦試験が始まる。

というわけで、今日はその前線基地へと移動。

BETA到達予測は明日早朝らしいので夜間出撃は免れたが、今夜は自分の機体のある格納庫で即応待機である。

「さて。アルゴスのみなさんは待機部屋で就寝するだけですが、わたくしと白銀は機体の整備をしなきゃなんないんですよ。フリーですが」

オレらのガンダムはそれぞれの衛士がやっている、という設定になっている。

というわけで寝る前の今だが、機体を実戦状態にするために格納庫だ。

もつともオレのゼータはハロが自動でやってくれるから時間を潰すだけだが。

白銀のルガンダムの方もさほど特別な整備はいらさないが、いちおうは点検しておく（ハロが）。

すると頭をかいて白銀もやって来た。

「いや、まいったぜ。考えてみりゃ俺もこの世界では初陣だったんだよな。初陣のユウヤに、アルゴスの皆がBETA戦のコツなんかを教えていたんだがな。その話の流れで、俺のBETA戦の経験とか聞かれちゃった。答えられねえ」

「タイムリーパーあるあるですわね。ベテランなのに初陣とはこれいかに」

じつは白銀のルガンダムに疑問があったので、聞いてみることにし

た。

「ところで白銀、あれはどういうことですか？ フィンファンネルは使えないから外すんじゃないかな？」

出撃前のレガンダムはフィンファンネル版をつけた完全体の姿になつていたのだ。

「ああ、あれか。ハロから聞いてないのか？」

「整備モードになると完全なメカみたいになっちゃって、質問とかできないんですわ」

「じゃ、俺から説明するか。ハロの話だと、あれはG元素をより多く集める機能があるらしい。つまりあれをつけてりやビームライフルのエネルギーがよりたまって、フルオートも長距離モードも使い放題だ」

白銀がビームライフルのモード切り替えのことを話したんで説明しよう。

レガンダムのビームライフルはゼータのものより一回り大きく、モードを切り替えることにより通常射撃、マシンガンのようなフルオート、ハイパー・メガ・ランチャーのような長距離砲と、3形態に切り替えることができるのだ。

さすが第二次ジオン抗争時のビームライフル。

同じビームライフルでも、グリップス戦役時のこつちとは性能が段違いだ。

ちよつとあれは羨ましい。

「ま、今回俺らはほとんど戦闘をしない予定だがな。ハロがどのくらいG元素を取り込めるかのデータが欲しいってんで、つけて出撃することにしたんだ」

ハイパー・メガ・ランチャーを撃てるG元素を集めるのも苦勞するから、これも羨ましいな。

と、そこへ不知火・式型の整備を終えたユウヤの専任整備士のヴァインセント・ローウェル軍曹が通りかかった。

「あれ、本当にパイロット衛士が整備やつてるんすか。でも明日は早くから出撃ですよ。手間取るようなら、手伝いますよ」

「大丈夫ですわ。ガンダムは、さほど調整はいらないよう出来ていきますから」

「そうですか、羨ましいことです。不知火・式型の方は速すぎる実戦調整のせいで大変なんですよ。ユウヤは初陣だったのに、こんなモンに乗せるなんて。お偉いさんのやることはー!」

「ヴァインセント、年下の俺らに敬語じゃ話しにくいだろ。タメ口でいい。しかしユウヤが心配か? たしかに明日はアイツに頑張ってもらわなきゃいけないが、それをフォローするのが俺らの任務だ。安心してくれていいぜ」

「そうか。んじゃ、お言葉に甘えて。我ながら過保護だとは思うんだがね。ドゥームマ小隊の話とか聞くと、どうもね」

オレ達のソ連派遣は第二次。その前の第一次派遣とかあったのだが、そのアフリカ連合のドゥームマ小隊全員がシエルシヨックをおこし、パニック状態になったらしい。

シエルシヨックにかかる奴は大東亜連合にいたときにも時々いたが、一人でも大変なのに、一つの戦術機小隊まるごとだなんて想像を絶する事態だ。全滅してもおかしくない。

その事件の結果は、なんとか戦線は守られたものの、その随伴任務をしていたジャーナル大隊には死人が出たという。

その話を聞くと、あのジャーナル大隊のガキ共がオレら派遣試験部隊に憎しみを抱くのは無理ないと思ってしまう。

「気持ちわかるがな。テストパイロットとはいえ、衛士ならいつBETAの戦いに出されるかわからん。バックアップが整っているうちに初陣はすませた方が良ぜ。そのドゥームマ小隊だって、それだけの“やらかし”をしながら、生きて帰ったろう?」

「そうですね。わたくしの初陣なんてBETAが帝都を蹂躪するその日に、教育課程をとばして任官させられて戦場に立たされましたもの。後方警備が任務だったのに、前線がみんなBETAにやられて、いきなり実戦ですわ」

「あ、いやアンタはその戦いで六万のBETAを撃破した、なんて話を聞いたんだが?」

……………あ、オレTUEEE超人のイキリになってしまった。

「まあとにかく、ユウヤは、もうやるしかねえんだよな。だったら明日はユウヤをたのむ！ お二人さん」

「まかせろー！」

「ちゃんとユウヤに華々しい初陣を飾らせ、帰還させてごらんにいられますわ」

と、そこへ篁さんが格納庫ハンガーへはいつてきた。

「なんだ、見回り監督とかしているのか？」

オレらは敬礼をして迎える。

「お前達。今夜の就寝時間は普段より早めになる。明朝6・00に作戦区域で部隊展開だからな。作業を早めに終わらせ、さっさと待機室へ行くように」

「「はっー」」

即応待機は深夜でも緊急出撃ができるよう就寝も機体の近くになる。

なので今夜の寝床はこの格納庫内にある待機室でぎこ寝だ。

「ちなみに女性陣は中華統一戦線のバオフエン小隊と一緒に寝るところになる。あそこの衛士は女性だけだからな。だから、その……………」

「ありゃ？　なんか告白前の女の子みたいになった？」

「山城少尉。今夜、貴様は私と一緒に寝るように！　早めに待機室へ来い。以上だ！」

そう言つてクルリ踵を返すと、足早に行つてしまった。
ちよつと顔が赤かったような？

「ああ。篁中尉も今回は戦術機で出撃だから、ここで寝なきやなんねえのか。しつかし、わざわざカズサを呼びに来るつてこたあ、よつぽどそのバオフエンつてのは面倒な奴らなのかねえ」

「そういや、バオフエンの女どもは荒つぽそうな奴らばかりだったな。上総、早く行つてやれよ。ぎこ寝なら隣にいてやった方が良かったら」

?!!!

な、なんだってえー!

アイドル上官・篁唯依姫のおとなりで就寝!?

可愛い寝顔とか見放題!?

可愛い寝息とか聞いて、肌のぬくもりなんかも感じちゃう!?

山城上総になって良かったあー!!!

ブンブンブンブン

「ど、どうした上総!? いきなりそんなに首をふって!」

「い、いえ、突然わたくしのものでない邪悪な思念が……」

「そ、そうか。あとは俺が（ハロを見ておくのを）やっておくから、お前はもう寝ろ。篁中尉が待っている」

ブンブンブンブンブンブンブン

「どうしたんだカズサは! ハッ! もうシエルシヨックを起こしちゃったのか!」

「ど、どうして就寝にはいるだけで、こんなに昂ぶるのでしょうか?」

久々のBETAのいる戦場を前に、おののき怯んでいるとは思いたくないのですが」

とまあ、本当に篁さんにしがみつかれて「ドキドキ♡」な一夜を過ごした翌朝。

防衛ラインまでZガンダムに乗って出動。

支援砲撃の爆音と噴き上がる爆炎によって一日は始まった。

56話 ソビエト大戦線の序曲（プレリユード）

篁唯依 Side

海上艦隊と支援砲撃の面制圧。

それを抜けたBETAに機甲部隊と戦闘ヘリによる二次面制圧。

その無数の砲弾と炸裂弾の連続する爆発によって海岸線一帯は灼熱の地獄と化した。

だが……………

『砲撃が……………薄い？』

『もしかして戦車の数が足りてないのか？』

マナンドル少尉とジアコーザ少尉の漏らした通り、あの面制圧は薄い。

あれでは相当数を撃ちもらし、予定より早くこの第一次防衛線^{ライン}に抜けてくるだろう。

「アルゴス4、どう思う」

私は、今回私の僚機であり情報支援機でもあるブレーメル少尉に尋ねた。

『戦車の数が要求に達していない、という様子ですね。おそらく損耗から回復していないでしょう』

「第一次派遣の時はそんな問題はなかったと聞く。となると損耗したタイミングはこの二次の直前か。聞いてないぞイワン共め！ ブリーフィングでは調子良いことをほざきながら。この分では他に何を隠されているやら」

と、護衛のソ連部隊側から画像が立ち上がり、指揮官ラトロワ中佐が通信に出た。

『不穏な発言は控えて欲しいねタカムラ中尉。そちらの発言はこちらも聞いているんだ』

基本的にオープン回線は開きっぱなしにしておかなければならないので、隠したいことの多いこの国の話はうっかり出来ない。

「ああ、ラトロワ中佐は我々の監視役でしたね。そちらの仕事を減らすために、この問題は柵にでも上げておきましょう」

『監視じゃなくて護衛……まあ、どうでもいいか。部隊間会議だ。戦車部隊が予定より早めに撤退をはじめている。予定より相当数のBETAがこの第一次防衛線に到達しそうだ。こういった場合、BETAを適正数まで絞るのもこちらの仕事なんだが、こちらの長距離砲テストのため部隊は下げている。で、どうする?』

「どう、とは? どのような意味でしょう」

『BETAの数を絞ってほしいなら、早めに言ってくれってことさ。今からは一分が十人の命にも等しい。部隊展開が遅れりや、それだけ犠牲が増える』

舐めてくれる。

試験部隊はお守りの必要な赤子か。

「無用ですラトロワ中佐。予定数まで99式電磁投射砲で絞ってみせましょう」

『そうかい。じゃ、その大層なイチモツに命運を預けるとするかね。全機、即応待機! BETAにビビって動くんじゃないよ』

いつせいにジャール大隊から不満の声が通信越しに投げられる。まあ気持ちは分かる。

BETAが接近したなら、できるだけ早く迎撃体勢を整えねば被害は拡大するからな。

しかし黙って見ている。

この試製99型電磁投射砲の威力は中々のものだ。この程度の劣勢はくつがえせる程に。

『ホワイトファング1より12時マイナス2。突出したBETA群がカウント約120より射爆有効範囲に到着。カウント読み上げます。124, 123, 122……………』

ブレーメル少尉が冷静な声で戦域情報を読み上げる。

武御雷背面の大型弾倉がローディングを開始。

砲身に電力が駆け巡り、甲高い充電音が鳴り響く。

照星に異世界起元種の大群が映る。

『3……………2……………1……………ゼロッ!』

「砲身に火がはいった! トリガーセーフティ解除。いくぞ!」

トリガーを渾身の力で押し込む。

轟音が響き渡り、武御雷の持つ巨大砲から眩い光条が放たれた。

それは真つ直ぐBETAに突き刺さり、間断のない衝撃波と恐ろしい轟音が鳴り響き、BETAを極小の肉片に変えていく。

そして99式を全弾撃ち終わった頃。

戦場はBETAがまばらに点在するだけのものとなった。

『……………大したモンだね、そのイチモツも貴官の腕も。侮って悪かった。こりや今回の任務、少しは楽かもね』

ラトロワ中佐の正直な感想に少しばかり溜飲が下がる。

「砲身加熱により機能停止。冷却開始。打ち止めだ。コマンドポスト C P、残ったBETAで試験を開始してくれ」

『C P了解。全試験小隊に告ぐ。兵装自由。各自試験を開始せよ』
C Pの号令と共に、一斉に各国の部隊は残ったBETAに襲いかかる。

『おお、いつくぜえー！』

『たまった鬱憤、テメエらで晴らしてやるぜ！』

『クソ野郎ども、逢いたかったぜえ!!』

アルゴス小隊の皆も、私の随伴機のブレームル機以外は元気よくBETAに突撃する。

元気なものだ。

『撃破数4300オーバー。目標値を軽く越えました。タカムラ中尉、お見事でした』

「ありがとうブレームル少尉。あとは……………」

あとはユウヤの不知火・式型が結果を出すだけだ。

しっかりとやれユウヤ・ブリッジス。

◆◆◆♥♥♥◆◆◆

山城上総Side

「こんなビームライフルを撃たない出撃なんて初めてですわ。まあ客分が目立ちすぎるのも問題ですし、こういった任務もたまには良いですけど」

今回の任務はオレがユウヤの駆る不知火・式型の随伴機^{チエイサー}。

白銀がオレ・ユウヤのエレメントの後衛^{バックアップ}。

随伴機^{チエイサー}の仕事はメインのテスト機の護衛とデータ取り。

想定外にBETAの接近を許しでもない限り戦闘はない。

戦闘中の不知火・式型及び搭乗者のユウヤの様子を細かくチェックしていく。

バイタル正常。格闘機動に歪みなし。

まったく初陣のお手本になるくらい問題のない奴だ。

おサル^{イタリアン}、V・Gのコンビも元気にBETAを狩っているおかげで、

ユウヤは気負いなく戦い、BETA撃破数も順調に上がっている。

「不知火・式型の性能も予定通り發揮してますし、試験は問題なく終わりそうですわね。あとはコイツらさえ、いなければねえ……」

楽なこの任務にも問題はある。

それはソ連軍ジャール大隊から分けて派遣されているオレ達の護衛部隊だ。

『よーよー、そのオモチャみてえな戦術機、へんな突撃砲、それでホントに戦えんのかよ。ちよいと、そこで死に損なってるBETAで格闘やってみせてくんね?』

『さつきから一匹も倒せてねーじゃねーか。ちつとは撃墜数稼がねえと切り捨てられんぜ、お嬢ちゃんよ』

『そりゃないって。偉いトコのおジョーサマっしょ。こうやって後ろからお行儀良くついて行くだけでも戦果になるわけよ。で、お国で【英雄お姫様】なんて祭り上げられるってね。ヒヤハハ』

『ぎやははは、そのための派手で使いモンにならなさそうな戦術機か! でっかい幟^{のぼり}つけたあっちの兄ちゃんの戦術機といい、お国で飾りモンにするならBETAの体液なんてつけらんねーなあ!』

なに勝手にオレ主役でお嬢さまストーリー創作してんだ!

テスト機^{チエイサー}の随伴機^{チエイサー}なんだから、積極戦闘とかしないのはあたり前だろ!

とにかく問題は、このジャール大隊分隊のガキ共だ。

万が一の場合に撤退支援をするのが任務であるはずだが、護衛対象

であるはずのオレにやたら煽ってヤジを飛ばしてくるのだ！

「キーンッ！ ああっもう！ イヴァノワ大尉、あなたの部下は何とかなりませんか!？」

この護衛部隊の隊長はラトロワ中佐副官のイヴァノワ大尉。

【大尉】なんて連隊隊長クラスの階級なのに、なんと10代半ばのあどけない少女だ。

年齢は低くとも、一応は隊長。

一緒になってヤジを飛ばしたりはしないが、それをたしなめたりもしない。

『ヤマシロ少尉、貴様はこいつらの恨みを買っている。故にこの程度は我慢しろ。適度にガス抜きをさせなければ、見境なく狙ってくるかもしれないからな』

「前に『ヤンキー』と呼んだことですよ!?! あの程度で!」

『それだけではない。あの件で奴らはラトロワ中佐にキツイ懲罰をくらった。逆恨みだが恨みは恨み。悪いが貴様の安全のためにも、私は介入するつもりはない』

なんでラトロワ中佐にくらった罰の恨みが、こっちに來るんだ!

何よりゼータとルガンダムへの冒瀆、雑言は許しがたい!!

いっそビームライフルで「キャン!」と言わせるか……………

と、白銀の画像が立ち上がった。

『アーガマ02、キレるなよ。この任務も結果上首尾でもうすぐ終わり。あと少しの辛抱だ』

「……………ええ、わかってますわ」

オレはビームライフルのトリガーからそつと指をはなした。

なんて絶妙なタイミングで通信を送ってくる。

これも常人よりはるかに経験をつんだタイムリーパーのなせる業か?!

ピキーン

!?

思わず機体を止めた。

たった今、ニュータイプの感応が反応した。

これは……………この反応は……………BETA!?

目の前の戦闘以外にBETAがいる？

『02。いったいどうした、機体を止めて。何かトラブルか?』

白銀の声に応えず、感応の感度を上げる。

場所は……………地下か!

『大かた、急にビビっちゃったんじゃねえの? シエルショックだ

けはカンベンしてくれよオ』

『いくら楽しいBETA狩りがお預けだからって、アンタのお守りはゴメンだからね。怖いんなら自分の足で帰んなよ』

『見かけにビビんなよオ。コイツら、要はでっかい虫と同じだぜ。慣れりゃバカでも退治できるぜ。お嬢さまにや無理な話か! ギャハハハ』

もう、奴らの煽りも気にならない。

迫る危機を知ったなら、ガキ共もこんな邪気まみれに笑っていられなくなる。

特に最後の奴。バカはお前、退治されるのもお前だ。

BETAの知能はお前ごときがバカにできるものじゃない。

「お前たち。そんなにBETAを狩りたいなら叶いますわよ。今すぐ基地へ引き返しなさい」

『ハア?』

「今、この真下の大深度地下ではBETAの大群が絶賛進行中ですわ。狙いは後ろの前線基地」

57話 ガンダムよ戦線に立て

イブラヒム・ドーウルSide

戦闘指揮所では管制官達の悲鳴にも似た報告が連なり、サイレンがやかましく鳴った。

はじめは前線からの奇妙な報告。

当初はその指摘するような徴候は見られず、衛士のシエルショックも疑った。

だが、一人の観測班スタッフが“それ”を聞き、やがて疑いもないものとなった。

「異常震源複数探知！ 震源が接近！ この04前線基地周辺を指しています！」

「波形照合、BETAです！ コード991発令！ 震源がさらに浅くなり接近！」

「ぐつ軍団規模のBETA、当基地の13キロメートル北西一帯に！」

「バカ者オ！ 何故ここまで接近を許した？ 戦術機ですら気がついたのだぞ！」

事ここにいたっては、前線の戦術機部隊が呼び戻されるのは時間の問題だ。

そうなれば試験部隊が丸裸になる。

私の今為すべきは、アルゴス試験小隊と全試験部隊の安全を可能な限り確保することか。

そう考えたときだ。

試験小隊付きソ連軍アドバイザーのサンダーク中尉が話しかけてきた。

「どう思いますドーウル中尉。BETAが地面を掘削してきたなら、その振動を観測班が聞き逃すはずがありません。掘削する音はかなり響きますからな」

「では掘つてないのでしよう。前回の襲撃……いえ、それ以前から戦闘音に紛れて基地真下まで掘削。大深度地下道を構築し、今回大

規模BETAを送り込んできた、といった所でしよう」

「ふむ、さすが歴戦の衛士ですな。参考になりました。ではもう一つ。そちらの衛士が、観測班に先んじてこれに気がついたことについては何か？」

「さて、それについては後で件くだんの衛士に聞いてみるしかありません。ですが、それより試験部隊への指示をどうするかお聞きしたいのですが」

「失礼しました。退避地点の選出は終わっております。衛士の安全にはこちらの微力を尽くしましょう。またBETAの迎撃にしても、間もなく航空爆撃隊が引き返してきます。これで……」

その時、管制官が悲鳴のような声をあげた。

「べ、BETA群の中に光線級アリ！ 航空爆撃は使えません！」

——最悪だ。

♠♦♣♥♠♦♣♥

山城上総Side

前線基地BETA襲撃により全試験部隊は試験任務を中止。

現在、試験開始地点まで後退。コマンドポストC Pの指示待ちだ。

不安な待機時間のなか、いち早くBETAの基地襲撃に気がついたオレは時間潰しの肴さかなだ。

『な、なあ。本当にそのZガンダムの震度計、地下のBETAが分かるのかよ？』

とか、タリサもちよつとおののいた感じだ。

「ええ、わかります。地下を進むBETAの群れがはつきりとするとハロが『思わず』といった感じでこつそり語りかけてきた。

「いや、宇宙寄り汎用モビルスーツのZガンダムポッに地中震度計なんてついてないけど？ 上総のニュータイプ能力でいらなから、自作もしてないし」

「察しなさい！ ニュータイプ能力の説明なんてできないでしょう？ そういうことにおきますわ」

その場限りのごまかしの嘘だったが、しかし思いのほか食いつきが

よかった。

『そりや凄え！　ウチの国じや何度も糞ツタレ共の地中進行にやられてよ。でもそいつが借りや借りが返せるつてもんだぜ！』

『なあなあ、そいつも販売しねーのかよ。地中進行は光線級と並んでBETAの最大厄介の一つだし、それだけで英雄になれるぜ！』
『できねーよ！　無いんだもん！』

しかし中華統一戦線バオフェン小隊の連中。衛士とはいえ、もう少し女らしくできないものかね。

『な、なあアーガマ02。俺はその震度計のことなんて知らないが、あー』

白銀、おまえは察してくれ！

『そ、そんなことより今はBETAです！　地下BETAの進行は今現在も、なお続いていましてよ！』

『なっ!?　まだ増えるのかよ。こりや、帰り道なんて無くなるぞー！』
『帰る場所そのものが無くなるかもしれないわね。BETAが前線基地を奪い、そのエネルギーを得たなら、その後ろのペドロパブロフスク・カムチャツキー基地も危ないわ』

ステラの最悪な未来予想に、全員が色めき立った。

『くッ、バオフェンより各機！　我が小隊はこれより基地に帰投する！』

『おい、落ち着け！　推進剤も弾薬も試験で消耗したまんまだろ。ガス欠でBETAの渦に立たされたらどうすんだよ！』

『そうだ落ち着け。サンダーク中尉も説明していただろう。ここは地形的に航空爆撃が使える。被害は大きいかもしれないが、基地陥落、などという事態までには至らないはずだ』

そんなこんなで、わちやわちややっている、やがて基地との連絡会議で離れていたジャール大隊の一団が戻ってきた。

『全試験部隊、傾注！　ヘッドクォーター H　Qから指示が来た。ラトロワ中佐、お願いします』

少女大尉イヴァノワの幼くも凜とした声が響いた。

改めて思うが、本当にこの部隊は損耗が激しいんだな。

こんな女の子が大尉で副官だし、隊員は全員中学生くらいだし。ジャール大隊ただ一人の大人、ラトロワ中佐が貫禄ある声で続いた。

『全試験部隊の諸君、ヘッドクォーター H Qからの指示を伝える。これより大隊は、諸君らお客さん方を退避地点まで誘導する。我々はそこで補給をうけた後、戦線を構築するために離れるが、諸君はそこで別途指示があるまで待機してもらいたい』

待機か……………。

できるなら、そんな指示なんか無視してZガンダムで基地一直線。群がるBETA共を手当たり次第になぎ倒して一掃したいのだからな。

しかし他国の軍属がそんな勝手をするわけにはいかない。

やったら軍法会議で死刑になるほどの、上官の篁さんや香月博士に類が及ぶほどの重罪だ。

基地にいるイブラヒム中尉やヴィンセントは心配だが動けない。くそつ。

『なお、ほとんど戦闘をしていないアーガマ小隊には協力を要請したい。分隊と共に目標地点へと出向き、我々が補給を受け向かう間、時間稼ぎを願う』

!!?

『この要請は断ってもらっても構わない。拒否によるペナルティーは何も無い。ヘッドクォーター H Qからの要請だが、白銀少尉。どうだ?』

もちろん拒否なんてするわけない!

受けるよな、白銀エ!

『ラトロワ中佐。爆撃をするなら戦術機部隊の出動はありませんよね? それに時間稼ぎを自分らへ求めるほどの余裕のなさ。もしや……………』

『勘の良い坊やだね。そうだ。光線級まで出ちゃった。『時間稼ぎ』は基地の人間が退避するための時間を作るものさ』

ザワリ……………

『やはりそうですか』

なんて冷静に状況を分析できる奴なんだ！

白銀が『受けます』と言った瞬間、出力全開、全力疾走で誰も彼も引き剥がして、現場に飛び込もうとしたオレとはえらい違いだ！

そして光線級の名が出た途端、この場の誰もが戦慄している。

『で、それを理解したうえで聞きたい。この要請を受けるか否か』
『受けます』

ドピユウン！

………とか、本当にやらないって。

『本当に良いのかい？ 他国のために危険な橋を渡るよ』

『この前線基地が抜かれれば後ろのペドロパブロフスク・カムチヤツキー基地が脅威にさらされます。そこは日本の真上にある対BETA最前線基地。ここまでBETAに迫られては、日本の極北方面へ多大な負担をかけることになります。他国のこととて、ほうつてはおけませんよ』

『だったら、しょうがないねえ。ジャール2、自分の小隊を率いて付いていっておやり』

あ、なんか嫌そう。

ラトロワ中佐、本当はこの要請を断つて欲しかったんだな。

『そしてこの防衛戦には我が国試験小隊のイーダル小隊も同行する。補給も優先して受けさせるように、とのことだ。イーダル。試験のあとの連戦になるが、やれるかい？』

『当然です。祖国の防衛任務に否はありません。そして他国の者に遅れは決してとりません』

クリスカの奴。なんか、まだオレを敵視している気がする。

ラトロワ中佐は最後に自分の大隊に向けて締めた。

『大隊傾注！ この戦闘は時間稼ぎ。基地の人間が全員退避するまでの遅滞戦闘だ。ただし、現場には光線級が確認された。これを放置しておくことは被害の拡大を意味し、全力で撃破しなければならぬ。よって現地到着後、すぐさま光線級^{レーザーヤークト}呐喊を行う！』

◇ ◇ ◇

というわけで、オレのZガンダムと白銀のVガンダムは四機の分隊に連れられ基地へ。

まあ、その分隊もやはり悪ガキ共で、さんざん罵倒され煽られながらの移動。

でも、もう慣れたよ。

そしてその隊長は中佐の副官。少女大尉のイヴァノワだ。

『言っておくが、自分から行く以上シエルシヨックを起こしても面倒は見ない。BETAに恐怖しないよう、せいぜい心を強く持て』

BETAに恐怖するってどんな感覚だっけ？

転生してしばらくは感じてた気がするけど、今は思い出せない。

『我々には余裕がない。光線級呐喊レーザーヤークトを行う作戦は必ず誰か損耗が出る。だから………私が中佐を守るために参加したかったのに

………無念だ』

そう言ったその子の顔は、家族を心配する年相応の少女のようにも見えた。

だから思わず言っただけだ。

「大丈夫。今度の光線級呐喊レーザーヤークトでは誰も死にませんわ」

58話 ビームライフルの青春、背中合わせのガンダム

分隊と共に前線基地へと帰投したオレ達。

基地を一望できる丘陵のそこで見たものは……………

『な、なんだよコレ！ 基地が一面、BETAだらけじゃないかよ！』

『き、基地の敷地が埋め尽くされている……………チクショウ、糞共め！』
「まあ。じつに香ばしい光景ですわね」

前線基地敷地の中も外もすでにBETAで蹂躪され、あらゆる設備が刻々と破壊されてゆく。

分隊の子達にとってこの基地は家同然らしく、通信の声は無念に満ちていた。

『怯むな！ 命令通り遅滞戦闘を行う。まずは遮蔽物の多い場所に射撃地点を構築する。後、BETAの足を潰して浸透を遅らせる。基地の人員が無事に安全地帯へたどり着く時間を死ぬ気で稼げ！』

イヴァノワちゃん勇ましいなあ。

さて。オレにとつては先ほどの試験部隊のシッポとは違って、本当に久しぶりのBETA戦。

現場の基地は素敵にBETAに埋め尽くされて、じつにヤバイ。

これぞ本当のBETA戦だな、うん。

「それでは、みなさん。当機体から大きく離れてください」

『どういうことだ!! まさか逃げる気か!?!』

『逃がさん！ こうなつては一機でも弾幕を張れる奴は必要だ。ここへ来ると言った以上、責任はとつてもらおう』

分隊全員が一齐に突撃砲をこちらに向けての交渉^{ネゴシエーション}

斉射体勢は一瞬だし、息もすっかり合っている。さすがの練度だ。

「離れていた方が良いと思えますけどねえ。ま、説明なんて時間の無駄ですし。はじめますわ」

主機をひきあげ、半分以上眠らせているゼータのメインシステムを全開にする。

BETAにはより高性能の電子機器に反応し、優先的に襲うという性質がある。

つまり宇宙世紀製の、今時最新こんじを超えたシステムなどを起ちあげたらどうなるかというところ……

『ジ、ジャール2！ 西のBETA梯団が一斉にここに！』

『正面もだ！ 最大規模の梯団がこちらへ接近ッ！ 当地点はヤバい!!』

『うわあああ東までも！ 完全に囲まれた！ 退避経路なんてどこにもない!』

『なんだとツどういうことだ!? なぜ戦域すべてのBETAがこちらに向かつてくるっ!? 概数はいくらだ!』

『よ、四千つ……いや五千ッ！ わ、わからねえ！ とにかくマーカーが赤一色だ!!』

——と、なるのだ。

フフフフ、ガキ共よ。我が青春【ガンダム】を口汚くちぎたなく愚弄した罰だ。せいぜい恐怖に溺れるがよい。

そして見よ！ 華麗なるゼータの勇姿を目に焼き付け、己の愚かさを知るがよいわ。

フハハハハーッ！

「それでは行って参ります。白銀アーガマ01、分隊のみなさんをお願いしますわ」

『光線級レーザーヤークト呐喊か？ 話には聞いていたが、本当に重金属雲もなしのたった一機で出来るのか?』

「ふふっ、それがニュータイプですわ。機体性能だけでは為し得ない奇跡をご覧あそばせ」

それまでの鬱憤を晴らすように五百キロで疾駆。

まず目指すは光線級！

前方を要撃級が阻むようにふさぐが、軽くビームサーベルなますで膺なますにしていく。

「やがてレーザー警戒区域にまで近づくと、それまでワラワラ寄ってきたBETAは割れるように道を開ける。」

そして前方からレーザー集中砲火の歓迎。

「この真夏の陽光のような眩い道も懐かしく感じられますわね。でもコイツら、レーザーが遅いんじゃないやありませんこと？　もしかして不良品かしら」

「そんなわけないじゃん。上総のニュータイプ能力が上がったんだよ。バイオセンサーが主機を上げまくって、調整が大変だ」

「ふふっ。いつそレーザーを掻い潜ってどのくらい近づけるか、ためてみます？」

「冷却が間に合わなくなるからやめて。オーバーヒートで振りまわされるのって、メカには酷い拷問なんだよ（泣）」

レーザーを掻い潜りながらハロと会話ができる程に、光線級呐喊《レーザーヤークト》が余裕になってしまった。

「では、愛機のために簡単に終わらせませすわ。お休みなさい、目玉のみなさん」

ビームライフルの有効射程にはいった瞬間、ビームライフルを乱射。

あつという間に光線級の一団は肉塊に変わった。

「またまた光線級^{レーザーヤークト}呐喊の記録を更新してしまいましたかしら？　ハロ、二位との差は？」

「そんな意味ない記録なんか調べないって。誰も上総とゼータ^{ポク}に張り合えないんだから」

光線級を全滅させると、再びBETAが一齐にせまってきた。

「遊びが過ぎましたかしら？　退避が遅れましたわ」

ハロと無駄話をしたせいで、さっきまでの道が完全にBETAに埋め尽くされた。

まあいい。だったらBETAの死山血河を築いて強引に押し通るまでだ。

——と、思った瞬間だ。いきなりニュータイプの直感が閃いた。

「ヤバッ！ 上!？」

反射的に機体を強引に進ませる。

瞬間、巨大な衝角付き鞭ウイップ 数本が頭上から降り落ちてきて、躲した元の位置に突き刺さる。

迂闊にも周囲の要撃級、戦車級ばかりに気をとられ、かなり先にいる要塞級の一団には注意が薄かった。

「少し油断が過ぎましたわね。上にも注意となると、ここは位置が悪いですわ」

「スペックを過信して戦場の基本を忘れたね。慢心慢心」

移動しようにも、見回すと雲霞のごとく一面にBETAの群れ。

さらにレーダーにはBETAのマークが真つ赤になるほど集ってきている。

「まったく。この気持ち悪い光景はいつまでも慣れませんわね。鬱陶しいし、キリがない」

ビームライフルを乱射しまくるが、接近をわずかに止めるだけでいつまでも減らない。

さらに鞭も散発的に襲ってくるので、体勢を立て直す暇ウイップすらない。

「光線級を倒したからハイパー・メガ・ランチャーを使えるよ。使う?」

「使いたいですわ、ちよつとコイツらを引き離さないと。構える暇いとまさえもいただけませんわ。あら?」

ビシユビシユビシユ

ビームライフルの音………白銀? でも間隔がやけに狭い?

ハッあれがフルオート機能の音!

と突然、先ほどから鬱陶しく鞭ウイップを投げてきている要塞級の巨体が

「ズズウーーン」と地響きをたてて倒れた。

さらにビームライフルの音は続き、一体また一体と落ちていき、やがて全滅した。

「ええっ早すぎる! タフな要塞級はビームライフルでも連続でなんて倒せないよ!」

「これがビームライフルフルオートの威力ですわ! 着弾を集中さ

せれば、要塞級の巨体すら撃ち抜くことが可能ですわ！」

程なくしてその方角から無数のビームライフルの光条が流れてきて、目の前のBETAの群れ十数体が肉塊となった。

すごいビームライフルの密度だ。

やがてBETAの死骸でできた汚い絨毯を渡って、ビームライフルを乱射しながらレガンダムが来た。

『アーガマ02、雑に戦いすぎだ。目標を達成したら速やかにこちらと合流しろ』

「ごめんなさい、反省いたします。あ、そういえば分隊のみなさんはどうしました？」

『BETAの圧力が弱まった頃に別れた。優先的に狙われるのはこつちだし、別れた方が向こうは安全だからな』

イヴァノワ大尉達は無事か。

ホツとした自分に少し驚く。案外、あの生意気で凶暴な子達を気にかけていたんだな。

「とにかく来ていただいて助かりましたわ。これで必殺のハイパー・メガ・ランチャーでこいつらを……………」

『よし、連携してここを抜けるぞ。まずは背中を守り合う。目の前の敵だけを倒せ』

レガンダムはゼータの背面に背中を合わせてつく。

そして猛烈な勢いでビームライフルをフルオート乱射する。

次々に前面のBETAを肉塊に変えていく。

「あ、いえ、ハイパー・メガ・ランチャーは余剰熱を背面に排出するんで、これでは撃てない……………ああ、もういいですわ！」

オレはハイパー・メガ・ランチャーを背中に戻し、再びビームライフルを撃ちまくる。

ハイパー・メガ・ランチャーよ。お前はつくづく出番に恵まれない武装だな。

アニメでもいつ使ったか分からないし、もしかして設定だけ？

「喰らいなさいハイパー・メガ・ランチャーの哀しみを！ 哀武装！！」

ハイパー・メガ・ランチャーの想いをビームライフルにのせ、撃ちまくる。

背中からは絶え間ないフルオートの声。

前後後背ものすごい勢いでBETAの死骸は量産されていく。

『よし、このまま微速で移動だ。基地から引き離して爆撃可能な位置まで誘引するぞ』

——まるで青春映画だ。

不器用な二人は互いの顔を見れない。

背中を合わせたままでしか寄り添えない。言葉もかわせない。

だから彼氏彼女は言葉の代わりにビームライフルを撃ちまくる。

そんな三文シナリオのヒロインになった気分。

「ふ……………ふふふ。あはははははは！」

『上総?』

眩いビームライフルのスポットライトに包まれた、背中合わせ二機のガンダム。

観客のいない華やかなステージの自分がおかしくて、笑いが止まらなくなった。

59話 45分の人生

ファイカーツィア・ラトロワ中佐 Side

西部海岸 西地区臨時退避地点

試験部隊を無事に退避地点へ誘導した後、整備班への指揮と各所の連絡を終えると、後は補給の推進剤注入の完了待ち。

移動補給車両の跳躍ジャンプユニットへの推進剤注入装置は、あまりスペースは高くない。なので完了まで時間がかかってしまうが、全機満タンにすることを怠るわけにはいかない。

光線級レーザーヤークト砲喊ともなれば、光線級を始末した後空中へ逃れるのに絶対必要だからだ。

残量表示カウンターのぼんやり眺めながら、ここへ来る前のH^ヘQ^{ツドクオーター}との不可解な連絡を思い返していた。

◇ ◇ ◇

『私は中央戦略開発軍団のロゴフスキー中佐だ。危急存亡の時ゆえ、私が直接基地の決定を貴官に知らせよう』

(中央戦略開発軍団だと？ 何故こいつらが防衛戦の指示にしゃりり出てくる?)

【中央戦略開発軍団】それはソ連軍特殊実験開発部隊を擁するエリート部隊で、主にいけすかないロシア人特権階級で固められた高等秘密組織ってやつだ。

今回の遠征に参加している日く付きの組織連中の親玉だが、こんな状況に出しゃばるような奴ではないはずだ。

そんな自分の疑問に反し、あたえられた命令は至極まっとうなものだった。

ただ一つを除いて。

『……………以上だ。この任務には基地内にいる同胞すべての命がかかっている。貴官の忠誠に期待する』

「質問がある。我が国試験部隊のイーダルに協力させるといふのは、まあ良いさね。負担を考えればやらせるべきじゃないと思う

が、そつちの手駒のことだしね。だが他国の【アーガマ小隊】にまで協力を要請するってのはどういうことだい？」

『アーガマ小隊は試験において射撃、戦闘機動共にしていない。推進剤も弾薬も十分なはずだ。貴隊が基地に到着するまでの間、被害をおさえるには適任だと思うが？』

「どうしてその小隊の試験の状況を……いやしかし、この難しい戦域に、実力未知数の他国の者を使うのはどうかと思うね。先に派遣されたドゥーマ小隊のようなことになったら、取り返しのつかないことになるよ」

『ハハハその心配が杞憂なのは貴官もその目で見ただろう。今回派遣された試験部隊は、試験において皆高い撃破数を誇っている。未戦闘のアーガマ小隊もきつと活躍を期待できるだろう』

そいつらがピンポイントでポンコツだったらどうすんだ！

実力未知数の者を修羅場に置くんざゴメンだ！

………と言いたかったが、さすがに他国の衛士の罵倒は控えた。

「全世界社会主義国の盟主の面子は^{メンツ}どうしたんだい。他国に祖国の危機を救ってもらうんざ、大国の沽券に関わるんじやございませんかね」

『基地の直近に光線級が出たのだ。国家の体面を気にしている場合ではないよ。今は他国に借りを作ってもこの危機を凌ぐことが重要。基地司令部はそう判断した』

今更らしくないことを。

今までその大事な大事な体面のために、どれだけ現場の人命をすり減らしてきたと思っている。

「なるほど、賢明なご判断ですこと。ですがその苦渋の決断が、たった二機の戦術機の戦力を借りるだけってのはいかかなもんだ。いくら何でも、国家の面子の^{メンツ}天秤に釣り合わないんじやございません？」

「ラトロワ中佐。この協力要請は中央の承認を得た正式なものだ。疑念は挟まず、国連軍日本支部アーガマ小隊白銀少尉へ要請したまえ」

「………了解。だけど、この戦いに機体が無事でいられる確率

はないよ。相手にしてみれば貴重な実験機を他国の防衛戦でオシヤカにしてしまうんだ。受けるとは思えないけどね」

『無論これは要請だ。相手の承認がないならば無理強いは出来ないよ。白銀少尉が断るなら、この話はここまでだ』

.....?

「光線級出現の話はしてもいいんだね？ まさか『それは秘匿したまま要請しろ』なんて言うんじゃないだろううね」

『当然だ。そのような信義に悖る^{もと}行いを中央が承認すると思うかね？』

思う。

というか信義など踏みにじって、何もかもブン獲って、後で屁理屈で押し通して済ますつてのが昔からの上のやり方だったろう。

何故、この件に関してだけは誠実国家みたいなことを言う。気持ち悪い。

しかし言質はとった。

BETAとすすんで戦いたがる変態はたまにいるが、光線級のいる戦場に出たがる奴はまずいない。

ましてや年齢的にみて新兵も同然のたった二人の小隊。

多分、戦場を体感させるためだけに送ってきた、という所か。

だったら光線級の話でもすれば体よく断るか。

「わかった。言うだけ言うよ。じゃ、重金属雲はケチらずにまきな。悪巧みばかり巡らせて、後方支援の役割を怠るんじゃないよ」

『アーガマ小隊へつける分隊は貴官のもつとも信任のおける有能な者をつけたまえ。そしてその小隊のヤマシロ機の戦闘機動を映像にあますことなく記録するように』

なるほど。目的はあの実験機のデータか。

たしかに従来の戦術機の構造とはまるで違った作りをしていた。

だったら、尚更そんな機密の塊のような戦術機を実戦に使う要請なんて断るだろう——

『受けます』

予想に反してたった一言で了承した。

アーガマ小隊の二人とも若さに似合わず、その顔に怯えも恐怖もなかった。

「あれはもしや、歴戦か？」

と、そこまで考えたとき、ヘッドクォーター H Qと連絡を取り合っていた部下が急を告げた。

「ラトロワ中佐、現場の状況が急変！ それに伴い命令内容の変更があるそうです。通信お願いします！」

ちっ、やはり外国のお客さんは厄介を運んでくれる。

ターシャ、お前は私の副官だ。

こんなつまらないことで死ぬんじゃないよ。

部下から奪うようにマイクを取り、スピーカーの向こうのコマンドポストオフィサー CP 将校にがなりたてる。

「ラトロワだ！ 何がどう変わった。先行している分隊は無事か！？」

『ツエー04補給基地戦域において、先遣のアーガマ小隊により光線級群はすでに撃破。BETA群、ツエー04補給基地より前面二千メートル地点へ移動。同小隊により急速に数を減らしている』

「は、はあああああ!!？」

『ツエー04基地司令部発。ジャール大隊は直ちに補給作業を中断し戦域に向かえ。アーガマ小隊がBETA群を全滅させる前に引き上げさせるように。以上です』

糞っ！ いったい何がどうなっている!？」

本当に外国からお客さんが来る時は緑なことがない！

◆◇♣♥♠◆♣♥

第5計画推進派Side

日本帝国 東京湾横浜港近海。

ここに米軍国連派遣第七艦隊は集い、大規模な演習を行っていた。

戦術機空母二隻から戦術機は発進、着陸を行い、それを守る駆逐艦は艦隊隊列を整え、戦艦は巨大な砲塔から轟音を響かせる。

これは日本帝国及び国連日本支部への示威行為であり威嚇。裏を知らず見た者は皆そう思うだろう。だが、裏の謀略は確実に進行していく。

旗艦空母ロバート・F・ケネディ客室

この日、ジャミトフ・ハイマン中将は一人の大物政治家を迎えていた。

ジョージ・ニコルソン上院議員。

初老でありながら精力みなぎる彼は、米国の進めるオルタネイティブ5の政界での中心人物。

本来なら本国で政治工作を担っていないければならず、この時期にこんな場所にて良い人物ではなかった。

「困りますなニコルソン上院議員。予定にない演習視察など。無骨な空母では何も用意できず、この狭い客室を飾り付けるのが精一杯というところですよ」

「なに、私も従軍経験はあるよハイマン中将。この狭苦しい扱いくらいは耐えてみせるさ。無論、私は遊びにきたわけではない。知つての通り合衆国が進めている対BETA計画は、麗しの女狐殿にだいぶ押されていてね。それに乗った亡命国家出身議員も元気よくはしゃいで、我々の陣営はだいぶ不利だ」

「そこまで……………ですがご安心ください。間もなくその状況は一変いたします。この日本での工作が我々の勝利につながります」

「うむ。だが私も大きな実績を得て発言する声を大きくしなければならぬのだよ。この件はその絶好の機会というわけだ」

「ふむ、日本帝国の立て直しに辣腕を振るい、合衆国の盟友へと政局を変えるのに一役買おうというわけですか。しかし『上院議員がたままここにいた』という偶然は出来すぎではありませんかな」

「その程度の『たまたま』はよくあることだとも。それに我らが美しき宿敵を見届けるのも私の役目かと思つてね」

ジャミトフは痛い所を突かれたように顔をしかめた。

世界的テロリストであるキリスト教恭順派との繋がりは、この同志

である上院議員にも秘密のはず。だが彼はいつの間にか知っていたのだ。

「まったくかないませんなあ。クリーンな上院議員ともあろうお方が、いったいどこでそれを嗅ぎつけたのやら」

「君の辣腕が真つ当だけでなし得たことではないことは、昔から承知だとも。我らは同志。この件は決して表に出ないことは安心してくれ。だが、今度が最後だ。後片付けは責任をもってやりたまえ」なるほど。キリスト教恭順派と手を組んでいることに釘を刺してきたか。

たしかに私が連中と繋がっていることは政界としてもマイナス。潮時だと警告しにきたわけか。

「ご安心を。世界を騒がせている悪辣なテロリストの命運は一月以内に終わるでしょう」

「遅いねえ。明日できないのかね？」

「残念ですが、奴らはこちらにも隙をみせません。それだけの準備が必要です」

「ふむ………まあ専門家たる君にまかせよう。これからこの日本で忙しくなることだしね」

その時、伝令が参謀長であるバスク大佐の来室を告げた。

ジャミトフは促して入室を許可する。

「失礼いたします、ニコルソン上院議員、ハイマン中将閣下。たったいま例のHSSSTが離陸前点検を抜け、エドワード空港を無事発進したと報告がありました」

「おおっ」と二人は同時に感嘆の声をもらす。

「通常予定の那覇空港到着は一時間後。すなわち………」

「女狐の人生はあと45分、といったところか」

「休憩は終わりだハイマン中将。艦橋へ行くでしょう。せめて彼女のために祈ろうじゃないか」

60話 サイコミュは目覚める

二機のガンダムは、BETAの渦の中心で周りをなぎ倒しながら移動。基地より大きく引き離すことに成功した。

だがレーダーのBETAを表す赤いマーカーも、先ほどまでの一面真紅から所々空白が目立つようになってきた。つまり底が見えてきたのだ。

原因は、後ろの白銀の駆るルガンダムの殲滅力が桁違いなのだ。なにしろ毎分百体以上を撃破。いかにBETAが多かろうと、これでは何時までも数を保ってなどいられない。

フルオートビームライフルの威力もだが、それを扱う白銀の腕が尋常ではないのだ。

オレもそれなりに戦場を巡って腕の良い衛士と会ってきたし、その戦術機射撃も見てきた。

だが、白銀ほど滑らかにフルオートを扱う奴は見たことがない。

正に神業、戦場の鬼神！

あんな小僧面こぞうツラして、どんな歴戦よりスゴ腕なんてどれだけだよ。

これが幾度も戦場に出ては死に戻りを繰り返したタイムリーパーの実力か！

「白銀アーガモー、もはやジャール大隊を待つ必要はありませんわ。わたくし達だけで全滅させてしましましょう」

「残り概数二千。不可能な数字じゃないね。つてか、もうとつくに七割倒しちゃってるし」

一面全て死骸となり果てたBETAを見せて、スカレット・ツイン紅の姉妹にも、ジャールの女指揮官にも、その下のガキ共にも、口を大きくアングリさせてやろう。

そして唾然呆然した奴らに、オレは婉然と微笑んで言うのだ。

「あら、遅いんじゃないやございません？ いったい何しにいらしたのかしら？ 『お呼びでない奴』なんてレベルじゃありませんわね。本当にお疲れ様でした。おーっほほほお♪」

フフフ。奴らまとめて、悪役令嬢にハブられた泣き虫ヒロインの如

くシヨンボリさせてやるぜ。

帰って、丘の上の王子様にでも慰めてもらうんだな！　ハハハハハ
!!

『お、俺達だけで全滅？……………不味い！　アーガマ02、いくら何でもそれは不味いぞ！　祖国防衛に地元ソ連軍が何もできなくなったとあらば、激しく面子が潰れる！　とりあえずBETAを減らすのを抑えろ！』

「みすぼらしいソ連軍が、みじめだったらしく面子を潰したらどうだっというのかしら？　高貴なワタクシに怖いものなんてなくつてよ♪　文句があるなら、お城の舞踏会で、ワタクシより素敵なドレスを披露してごらんなさい♪」

『ぶ、舞踏会!?　上総、いったい何の悪酔いしてやがる!?　とにかく、そのビームライフル乱射はやめろ！　うわああ!!　ハイパー・メガ・ランチャーはもっとやめろ!!!』

せっかく気持ち良くBETAを全滅させようとしていたのに、白銀に止められてしまった。

今はどちらも得物をビームサーベルへと変え、専守防衛。

「何を気にしているんですの白銀。アーガマ01我らは不埒な異星起源種に突きつけた剣の切っ先、人類の護り手【衛士】。BETA全滅をためらう理由がどこにあるのです。政治に関与せず、ただ使命のままBETAを討てばよろしいんじゃないやありませんこと?」

『トリガーハッピーでラリっていたくせに【正しい衛士】みたいなことを……………』

オレはいつだって【正しい衛士】だ。

白銀は『ゴホンッ』と咳払いして愚痴めいた言葉を言い直す。

『俺もそう単純に生きてみたいがな。人は政治から逃れられない。『大国ソ連が祖国の危機に何もできなかつた』なんて結果になってみる。ソ連の面目は丸つぶれ。被支配民族を多く抱え込んだこの国の支配層にとって、面目を失うことは死活問題だ。となると俺達を逆恨みするかもしれん』

ああ。そういや大東亜連合時代、ブルックスに言われて、よく八割

方終わった戦場を正規軍に譲ってやったっけ。

そういった配慮も生きるのに必要。残りのBETAくらいソ連軍に譲ってやるか。

しかし白銀の奴。こんな政治的配慮ができるとか、『人は政治から逃れられない』なんて深いことを言うとか、いったい中身幾つなんだ？

もう完全に、見た目通り高校生の年頃に思えねーよ。白銀先生だよ！

『よし、離脱する。バーニアは大丈夫か？』

「いけますとも。ゼータの華麗なる俊足をお見せいたしますわ」

『空からだー！ BETAをなぎ倒しながらだと、さらに数を減らさなきゃならんだろうが！』

BETAの命を慮おもんばかって殺さないよう配慮しなければならないとは。

本当に政治の世界は常識の逆が起こる世界だな。

◇ ◇ ◇

BETAの渦からバーニアで空中へ逃れると、丁度そこにジャール大隊が到着した。

指揮官ラトロワ中佐に連絡をとると、彼女のCPとのやり取り後、程なくしてソ連軍航空爆撃隊が飛来。残存BETA群に爆撃を喰らわせ後始末をしていく。

多数のSu-37M2チェルミナートル、Su-27SMジュラーブリクに囲まれ、ラトロワ中佐の指揮官機チェルミナートルの前にオレ達二機は立つ。

いつもはうるさく煽ってくるジャールのガキ共が、今は一連の間まったく静かだった。

あと、スカーレット・ツイン紅の姉妹のチェルミナートルもいたが、やはり同様に静かだった。スカーレット・ツイン紅の姉妹の奴ら、どういった思いでオレ達を見ているのやら。

白銀はこちらの隊長として、向こうの指揮官ラトロワ中佐に挨拶を

する。

『ラトロワ中佐、ご苦勞様です。ジャーナル大隊に戦域を引き継ぎます』

『することは何も残っちゃいないけどね。「ソ連軍は何もできなかった無能」と記録に残さないために、BETAを残してくれて助かったよ。こちらの面目が危なかったね』

『あー、いえ、その……微力を尽くしたままで……ゴニョゴニョ』

少しは政治っぽい受け応えしろよラトロワ中佐！

正直にぶっちゃけ過ぎだと応えに詰まるだろうが!!

『しかし、そちらじゃ大した戦術機が開発されたもんだね。それならハイヴの攻略も叶うんじゃないかい？　ただ、こつちの上の方は面白く思わないかもしれないから気をつけなよ』

この人、本当にソ連軍の佐官かね。あまりに明け透けで応えが返しにくい。

ソ連なんてお国柄でこの性格じゃ、忠誠が疑われて肅正とかされないだろうか？

『き、恐縮ですラトロワ中佐。それより、これから……うぐっ!』

——プツッ

『……………白銀少尉?』

突然、白銀の通信画像が消え、通信が途絶した。

『……………おい、どうした。マシントラブルか？　応答しろ白銀少尉』

ラトロワ中佐が呼びかけるも、Zガンダムから返答が返ることはなかった。

後ろに位置しているオレのZガンダムからも、異変らしき物は見うけられなかったのに。

それに機体が目の前にあるこの状況なら、通信機能が完全にオシヤカになっても、ヘッドセットのみで通信できるはず。なのに完全無反

応とは？

だが、それは本当の異変の始まりであつた。

……キイイイイン……

ℓガンダムは診断をしているモニターから、今現在、起動しているシステムが表示される。

「ええっ、このシステムは!? あり得ませんわ!」

「間違いないよ上総。これは起動しないはずの、あのシステムだ。眠りから覚めている!」

さらに異変は続く。

ℓガンダムの周囲が発光する物質に包まれていく!

まさか、あれは……あれは!? そんなバカな!!

「アーガマ01! 白銀、応答してください! いったいℓガンダムに何が起こってますの!?!」

必死に呼びかけるも、やはり白銀のℓガンダムからは応答がない。

「ハロ、ℓガンダムのコクピット内を映して!」

「ダメだ! 強力なサイコフィールドが発生して、アプローチがみんな拒否される!」

「サイコフィールドですって!!? では、やはりあれは……ツ!」

サイコフールド特有の発光。

それを見てもなお信じられなかったが、もう決まりだ。

「そうだよ! ℓガンダムのサイココミュが起動している!」

「で、でも白銀はニュータイプではありませんわ! ℓガンダムに搭載されているサイココミュを、一度たりとも起動できたことなんてありません!」

「……………そうだね。でも今、目の前で起動している。つまり今この瞬間、いきなり白銀はニュータイプになったと思えない。いったいあのコクピット内で何が起こっているんだ?」

「白銀は無事ですよ!? 白銀、応答してください!!」

ラトロワ中佐は、必死に呼びかけるオレを見て、ただならぬ事態を

察した。

『おい、いったい白銀少尉の機体はどうしたんだ？ 何かヤバイのか？』

「え、ええラトロワ中佐。とにかく念のため、そちらの部隊はみんな下がらせてください」

『わかった、そちらに任せよう。全機、アーガマ小隊から距離をとれ！』

「ジャール大隊は全機下がるも、スカレット・ツイン紅の姉妹のチエルミナートルだけは動かない。

『おいイーダル、そちらもだ！ 命令系統をとにかく言うなら、今現在はお前らの指揮権は私にある。さつさと……イーダル？ おい、どうした!?!』

はじめてクリスカの通信画像が出た。

その顔は、どうしていいか分からない、といったように酷く焦燥に駆られている。

『申し訳ありませんラトロワ中佐。イーニアが……イーニアがおかしいのです！ 何かに怯えているようで、錯乱が止まりません！』
イーニアが？ まさかそれはニュータイプの予感……

——
ゾクリッ

遅ればせながらオレにもイーニアの感じている悪寒を、その恐怖を感じた。

これはニュータイプの共振ではなく、未来予知から来る恐怖。つまり、もうすぐこの場所に何かが起こる!?

「ハロ、周囲を索敵してください。何かしらの異変、ミサイルやG弾の飛来、新たなBETAの襲来などはありませんか？」

「………何も無いよ。周囲直上の空域、宇宙も含めて、20キロ圏に脅威となるようなものは見えない。地下は？」

「………BETAの反応はありません。再びの出現はないでしょう。となると原因は」

あの不気味に佇むレガンダムしかない、か。

いったい何が起こる？

オレ達二人のニュータイプに、これほどの悪寒を、戦慄を起こさせる何が!?

超然と白く輝くレガンダムは、ただ静かにサイコミュを起動し続けるだけだった――

61話 BET A超決戦兵器

白銀武Side

「うぐっ!?!.....ここはどこだ?」

さつきまで俺はレガンダムのコクピットにいて、ラトロワ中佐と通信で話していたはず。

だが今見ている光景は、辺りが虹色に輝いており、空間が果てしなくどこまでも続いている。

「体が軽い.....この軽さは経験がある。精神体になったときのそれ。ってことは、俺は今どこかに精神のみが閉じ込められているってわけか!」

——「よくわかった。いきなり招待したが、とつさにそこまでたどり着くとはさすがだ」

いつの間にかこの空間に俺以外の人間がいた。

「誰だ?.....うっ?! まさかアンタは!」

ノーマルスーツを着ているゆるいパーマのかかった柔和な青年。

だが、それは昔みた劇場版に出てきたあの青年だった。

「アムロ・レイ.....なのか?」

「その魂の残滓、といったところかな。本来ならこの機体の中で漂っているだけの存在だが、とある高次元の存在に力をもらってね。このように君を精神体の世界へ招待することもできる」

「神様モドキのじいさんか! そうか、このレガンダムはあなたが最後の戦いで使っていたものだったな」

アムロ・レイの魂の残滓付きレガンダムか。

プレミアが凄すぎて泣けてくる。

「力をもらった理由だが、どうやら君をニュータイプにしなきゃならないらしい。さて、説明はこのくらいで良いだろう。時間もないとだし、さっそく始めよう」

「な、なにをです?」

「ニュータイプの授業だよ。時間がないから手荒いぞ」

「くっ、ぐあああああっ」

「もつとだ。もつと、おれの思念に同調しろタケル。そして見ている世界を一段上の階梯から見ろんだ」

糞っ！　なんだこの頭を絞られるような激痛は！

『思念に同調しろ』と言うが、アンタのはあまりに超感覚。耐えるので精一杯だよ！

『タケル。君がニュータイプに目覚めなければ、この空間から出ることはできんぞ。今すぐニュータイプになれなければ、待っているのは死だ』

「ニュータイプにならずんば死だと？　なんでだ!?　こんな急にニュータイプにならなきゃならない理由がどこにあるんだ!?　答えろアムロ・レイ!!」

『【戦士よ問うなかれ】だ。それとも君はこういった場合、理由探しにさまようだけか？　君の培ってきたものはそんな薄っぺらいものだったのか?』

「くっ、くそおおお！　うおおおおお!!」

「……………残念ながら時間だ。タケル、君の戦いはここで終点だ。長い死に戻りの旅路は無駄だったな」

意識を失いかけている俺を置いて消えようとするアムロ・レイの思念。

だが、俺もこのままじゃ終われない。

俺が越えてきた戦いや経験は、誰であろうと舐められるわけにはいかない!!

「待てよ……………ツ。勝手に終わりにするな。ようやく…………分

かかってきたぜ、ニュータイプ。こうだろお!!」

—————キイイイイン……………

「……………ほお。確かにおれに〃共振〃した。君は〃死にかけ〃が本番のようだな」

「うぐっ！ ハアハア……………」

糞っ！ もう意識が……………

「もう終わりか。拙いが良しとしよう。とりあえずサイコミュ武装は使えるだろう。あとは君の相方の彼女にでも鍛えてもらえ。ほら、出口だ」

急速にこの空間が遠くなっていく。

精神が現実世界へと引き寄せられていくのだろう。

「待ってくれアムロ・レイ！ どうして、こんなやり方で俺をニュータイプにした？ こんなニュータイプを戦いの道具にするようなことは、アンタが一番嫌っていたんじゃないか!?」

『『ニュータイプは戦争の道具じゃない!』か。そんなことを言う資格がおれにあったのかな。口ではそんなことを叫んでも、やっていることはモビルスーツに乗って戦うだけだった。少しでもニュータイプになった人の道筋をつける努力をしていれば、あの男とも……………」

「アムロ・レイ?」

「いや、悪かった。この愚痴はどうでもいい。君が今すぐニュータイプにならなければならぬ理由だったな。今、【アクシズ・シヨック】に匹敵する災厄がこの地に迫っている。高次元存在は君をそれに対抗させるためにおれの存在を甦らせ、君に強引なニュータイプへの覚醒を促した」

「なにっ!?!」

あの神モドキじいさん、今も俺達を見ているのか。

「レガンダム。いい機体だ。おれの棺桶にはもつたないくらいいな。アイツもせつかく甦ったんだ。上手く使ってやってくれ」

ますますこの世界が遠くなっていく。

俺の意識が元の世界へと引き戻されていくのを感じる。

遠ざかるアムロ・レイに、必死に声をかける。

「待て！ 何なんだ、その災厄ってのは!? アムロ・レイ！ いったい俺に何と対抗させるつもりなんだ！」

「タケル、君はおれのようになるな。ここに迫るもの。それは――

――

◆◇♣♥♠◆♣♥

山城上総Side

『上総！ サイコフィールドを張れ!!!』

「し、白銀!?!」

いきなり通信から白銀の声が響いた。

さつきまでの通信途絶は何だったんだ？

『それを説明しろ!』と言おうとしたのだが……………

『飛べフィンファンネル! エフィールド展開!!』

「なっ!?! フィンファンネルが!!」

レガンダムの背部からフィンファンネルが四方に飛んだ。

そしてそれは、エフィールドを広範囲に張った。

「し、白銀? 今まで何を? それにどうしてファンネルを

……………」

『問うな! 今はただ、俺の指示に従え!!』

何も分からないままバイオセンサーを起ち上げる。

するとハロが叫ぶように警告する。

「上総! 三時上方から高熱源反応が来る! 索敵範囲よりさらに外からの攻撃だ!!」

「なっ!?! さ、サイコフィールド!」

カアアアアツ

———で、デカイ!!

なんだ、この膨大な高熱線は!?

ドオオオン　ズウウウン……………

『ト、トーニャー！ キール!』

後ろのジャール大隊の幾つかの戦術機が爆散した。

通信から散った仲間を呼ぶ声が哀しく聞こえる。

隊をオレ達より大きく離れさせたのが禍わざわいした。全ての盾にはなれなかったのだ。

『ラトロワ中佐、ここは俺達にまかせて撤退を！　急いで!』

『わ、わかった!　こんな訳も分からないままやられるのはごめん

だ。全機回避！　光線級のセオリー通り、高度はとるな!』

蜘蛛の子を散らすように撤退するジャール大隊と紅スカーレット・ツインの姉妹。

いや、『俺達にまかせて』って、どうまかされりや良いのよ?

いきなり復活してから、この超展開。

何がどうしてこうなったか、シナリオでも読ませてくれ白銀先生!

「白銀！　なんですよの今のは？　わたくし達は何に狙われたのです!」

「ボクの分析によると光線級のレーザーだ。でも何で上から照射が？　それにあの膨大な熱量は……………ああつ、爆撃機が!」

ハロの声に上を見ると、今度は上空に巨大レーザーの閃光が走った。

すると残余のBETAの始末をしていた航空爆撃隊が、全て爆散した。

たった一発で!!

だが、客観的に見られたことで確信した。

ハロの言う通り、これは光線種のレーザーだと!

「くうつ、ここの地形はあの巨大なアヴァチャ山に守られて、光線級のレーザーは来ないんじゃないの!」

ペドロパブロフスク・カムチャツキー基地に来たとき説明されたが、この一帯は2000メートル級の成層火山アヴァチャ山に守ら

れ、光線級のレーザーは空も含めて攻撃されないはずなのだ。

「白銀、新種の巨大光線級だね？ もし山を越えた大きさの光線級なら山の防壁も無意味だ！ もうここはレーザーの安全地帯じゃない」

2000メートル級の山を越えるBETA!?

それって、もう怪獣じゃないか!!

『ああ、ハロの言う通りだ。ヤバイのはここらだけじゃない。ヴラングリ島からカムチャツカ半島まで、北東ソ連全域が照射範囲だ!!』
「な、なんですってえ！ そんな広範囲にレーザー照射だなんて！」

—————
ピキーン

くっ、また来る！ あの巨大レーザーが!!

『アーガマ02、奴の狙いはオレ達だ。ジャールと逆方向に行く。アヴァチャ山を目指せ!』

言われるまま白銀のツガンダムについて行く。
カアアアアツ

再びこちらに巨大レーザーがきたが、照射の位置とタイミングはわかるので、大きく避けてかわす。

照射の当たった地面は、ドロドロに溶けてクレーターになった。

くそっ。あんなの、サイコフィールドで防いでも何度も持たない!

「本当に遙か上から照射してきますわね！ でも本当に巨大光線級BETAなんてモノがいるんですの？ 山の上から照射しているとかじゃなくて？」

「……………いや、照射元はアヴァチャ山のさらに遠くからだ。とうとうBETAがボク達を本気で狙いにきたというわけ？ 白銀」

『ああ、そうだ。BETAは戦った相手を学習し、それに対応した戦術を行う知能がある。だが、ガンダムは強すぎた。【どのような戦術を駆使しても倒せない相手】 BETAの大元はそう見たんだろう』

「概在のBETAでは倒せない……………なら、新種のBETAを生むしかない。その答えがアレ、か。いわば【BETA超決戦兵器】。

まったく大物に見てくれたね」

「高所遠方から極大出力のレーザーを照射するBETA!? なんてものを! くうっ、また!」

カアアアアアアッ

ドオオオン……………

こんな大出力なのに、おそろしく間隙が短い。

どうにか躲したが、このままではジリ貧だ。

地形を利用できないなら、いつそ光線級のセオリーの逆で空中を行くか。

躲さなきゃいけないなら、よりスピードの出るウェイブライダーの方が良い。

「ウェイブライダーで空を行きます。照射範囲は広くとも、20キロ以上先から照射してくるなら余裕でかわせます。アーガマ01、別れましょう。わたくし達が囨になりますから、その間に逃げてください」

『いいや、俺も連れていけ。俺達は逃げるんじゃない。奴を倒すんだ!』

「ええっ! 20キロ以上離れた敵をどうやって……………ああ、もう! とにかく行きますわ。タイミングを合わせてください!」

ゼータを巡航形態のウェイブライダーへ変形。

そこにルガンダムは飛び乗り、アタツチメントで足を固定する。

そこまでしたとき、再びの照射の気配が襲ってきた。

「行きます! とにかく、できるだけ近づいてみましょう。奴の姿を見ながら倒す方法を考えますわ!」

ウェイブライダーはルガンダムを乗せながら上昇。

オレは巨大レーザーをかわしながら、その元凶へと舵を向けた。

62話 オルタネイティヴ5・ジ・エンド

アヴァチャ山を越えて見たもの。

最初、オレはそれを小山の上のでっかい灯台が建っているように思えた。

だが、それは全てが巨大BETAであったのだ!!!

「なっ、なんて巨大でおぞましい！ 本当に何でものを作りあげるんですのBETAは!!」

全長は2000メートル程、体長は90メートルほどではあるが、ただ一点。主砲にあたる、キリンの首のように伸びたレーザー照射口は地面から1500メートルもあり、地上のあらゆる場所に極大レーザーを撃ち下ろせるようになっている。

さらに副砲にあたる照射口が二門、天空に向かって伸びており、それも間断なくこちらにレーザーを撃ち続けている。

胴体は腫瘍で水膨れしたような複合装甲、ちょうど照射口の真下にある胸部中心は、ハイヴの反応炉のように青白く輝いている。

足は要塞級のモノをさらに巨大にした装甲脚。それがムカデの足のように連なり、この巨大な建造物のような体を時速40キロほどで進ませている。

「くうっ！ ウエイブライダーはマツハ10で飛行しているのですよ。なのに何でこんなに正確に合わせてこられるのですか!？」

驚いたのはそのレーザー照射照準の正確性。

ヴガンダムを乗せているとはいえ、ウエイブライダーの高速飛行に寸分外さず当ててくるのだ。

中央の広範囲極大レーザーすら苦勞しているのに、副砲二門にまで狙われてはたまらない。

ヴガンダムのフィールドも使つてどうにか無事なもの、ジリ貧なのは変わらない。

「こんなことなら、地上を行つた方が良かったですかしら？ 集中するのはキリンの首だけですし」

『どっちにしろ近づけないだろう。上総でも距離が近くなれば躲す

のは不可能になる』

「近づいたとしても、あの巨体を支える複合装甲。ビームライフルはもちろん、おそらくハイパー・メガ・ランチャーでさえ、かすり傷しか負わせられないと思うよ」

分析を担当しているハロはさらに驚くべきことを言った。

「胸の青白く光っている部分を見てくれ。あの光は資料にあったハイヴ深奥の反応炉のものだ。つまりあの巨大BETAは、ひとつのハイヴそのものを使って構成されているのかもしれない」

『な、なんだと!?!』『なんですってえ!?!』

つまり、本来何百万というBETAを生み出すエネルギーを、あのおぞましい体に変えて、ハイヴそのものが攻めて来たということか? となると、あの規格外の大きさの体も、レーザーの威力も納得できてしまう。

ますます、どうやって倒せば良いかわからない。

『糞っ、俺達が引いたらアイツは北東ソ連をみんな焼き払っちゃおう。そしたら誰も彼も全滅だ! 倒せなくとも無力化して時間を稼ぎたいが、どうすれば良いのか』

こうやって飛び回って注意をこちらに向けているのがせめてもの時間稼ぎ。

攻めるなど、たった二人の歩兵が歩兵銃を使って要塞攻略に挑むようなものだ。

「それと上総。ここは位置が悪い。躲したレーザーが日本上空の航空機や航空艦を落としているみたいなんだ。さすがに威力は減衰して爆発はしないみたいだけど、落下した機体が街とかに落ちてパニックになっている」

「な、なんですってえ!! これって日本まで届いてしまうのですか!?! こうなったら宇宙ですわ! 宇宙に登って活路を見つけます!」
オレはウェイブライダーの機首をさらに上げ、宇宙を目指して飛んでいった。

第五計画推進派 Side

東京湾横浜港近海 米軍第七艦隊旗艦ロバート・F・ケネディ司令官席

その頃、米軍第七艦隊司令官ジャミトフ・ハイマン中将は艦隊演習の指揮を行いつつ、ニコルソン上院議員と共に横浜基地へのHSST落下の瞬間を待っていた。

時間にしてあと10分ほど。

しかし奇妙なことに、あちこちから航空機落下のニュースが流れてきたのだ。

「どうしたというのだ？　いくら何でも航空機や航空艦の事故が多すぎるぞ」

「まさかあのテロリストと同じことを計画する者が何人もいるはずもないだろうしね。何かしら異常気象でもおこっているのかね？」

近くに控えていたバスク大佐は各所に連絡をとり、その原因を聞き出した。

「閣下。どうやら原因はソ連北東部に現れた新型の光線級BETAの放つレーザーのようです。流れてきたそれに機器を破壊され、墜落しているそうです」

「北東ソ連からだ?!　バカな！　ここから千キロ以上離れているのだぞ！」

「事実です。それは全長二千メートルにも及ぶ巨大なBETAで、超大型のレーザーを放つ怪物だそうです。威力は重光線級すらも遙かに凌ぎ、そこから流れてくるものでさえ、この日本上空にある飛翔物を落とす威力だそうです」

この報告を聞き、二人は啞然とした。

「ううむ恐るべきことだ。これは一刻もはやくオルタネイティブ5を国連の主導にしなければ。いや、それでも遅いかもしれん。いつそアメリカの独力だけで為すよう大統領に働きかけるか」

「ニコルソン上院議員、落ち着いてください」

「アラスカの隣にとんでもないバケモノが現れたのだぞ！　そいつが北東ソ連を焦土に変えたなら、次は海を渡り北米大陸に来る！　合

衆国に、もはや時間はないのかもしれん！」

「ですが、こちらの作戦はすではじまつております。こちらを進めつつ、事態の推移を見守るしかありません。また実際にあれに対処する時がきても、日本を掌握していれば、どんな作戦もより容易く通すことができます」

「……………分かった、中将の手腕に期待しよう。だが私もこうしてはいられないな。祖国に帰り、できるだけの手を打とう」

「残念ですな。上院議員の手腕を日本でふるっていただきたかったものです」

ジャミトフに手を振ると、ニコルソン上院議員は何かしらの準備のためか、艦橋から出て行った。

しばらくすると、艦内に警報がうるさいくらいに鳴り響いた。

ジャミトフの手元の通信機からもコールが鳴った。

「どうした。敵襲でもあったのか？」

『いえ、先ほどのレーザーに被弾したHSS Tが墜落し、この近海に落ちてきそうなのです。通信を試みておりますが応答いたしません。どうやら艦内の人間は全滅したようです』

「例の北東ソ連の新種からのレーザーか。おそろべき威力だな」

『はい。観測によると機体に目立った損傷は無いのですが、艦内の人間は誰も無事ではいられなかったようで、もうどうにもできません。落下予測地点を見て対処をお願いします』

ジャミトフはオペレーターに落下予測地点を示させ、艦長に意見を聞く。

「つまり、それは艦隊の上には来ないのだな？」

「それはご安心下さい。ですが、ひどく近くに来るため衝撃及び高波がきます。落水時に動いている船は衝突の危険があるため、艦隊は現地点で留まり対衝撃陣形をとって迎えるのが最善でしょう。指揮をお願いします」

「あいわかった。そのようにいたそう」

マイクをとり艦隊に指示を出そうとした時だ。

「閣下!!」

突然に近くに控えていたバスクが大声をあげた。

「どうしたバスク。指揮通信中だぞ」

「そ、それどころではありません！ この時間に日本上空宙域にいるHSSSTとはまさかアレでは……………」

それで察したジャミトフは、青ざめてオペレーターに叫んだ。

「おい！ そのHSSSTの所属は?! どこから来たものだ?!」

「発進はわが国のエドワーズ空港からですね。軍が使っている民間貨物業者で、那覇基地に物資を届ける途中だったようです」

それは正にアレの偽装!!!

「う、撃ち落とせ！ アレをここに落下させてはならん!!」

「は、はあ？ 無理です。落下する機体を撃ち落とす艦砲射撃はありません。よしんば出来たとしても、破片が艦隊に降ってきてより危険です」

「で、では離脱だ！ 全艦、落下予想地点より急速離脱せよ！」

これに先ほどの艦長が声をあげた。

「閣下、いけません！ 下手に動くと衝撃と高波の被害をモロに受けて転覆のおそれがあります。どうか落ち着いて下さい。HSSSTは落下速度そのままに落ちてくるわけではありません。無人であろうと、どのHSSSTも電離層を抜けたなら自動で減速するようプログラムされているのです。ですから……………」

その時だ。

通信を担当しているオペレーターの一人が叫びをあげた。

「大変です!! 電離層を抜けたHSSSTは、減速するどころか何故か急加速したそうです！ このままでは落水した瞬間は音速の数倍となり、被害予測はとんでもないものとなります!!」

「ヒッ！ な、なんだと!? 中将閣下！ 対衝撃陣形の指揮を！ 早くお願いします!!」

まったく予想通りの反応をしてくれるものだ。

誤算だったのは、この反応をしているのが女狐ではなく我が艦の艦長だということだが。

それでも艦長の想定する最悪の被害は、駆逐艦数隻の転覆程度だろ

うが、さにあらん。

内臓されている爆薬によつて半径10キロが消滅する。

つまりここに集結している船も人間も全てお終いだ！ 冗談ではない!!

「……………無念です、閣下。我々の始まりの日は、まさか終わりの日に変わるとは」

バスク大佐は無念そうに制帽をとり、それを握りしめた。

「バカナ！ ここには我々だけではない、第7艦隊のほとんどが集まっているのだぞ！ 第五計画の中枢を担うニコルソン上院議員までも！ それが一斉に失われれば、もはやオルタネイティブ5は……………！」

「HSS Tの落水まで約140秒。やれることはありません。人類の命運は女狐に委ねるしかないようです」

「バカナ……………そんなバカナ！ 敵に倒されるでもない、BETAに敗れるでもない。ただの事故で我々が全滅とは……………！」

いや、自滅か。

横浜で多くの罪のない人間をG弾投下で葬った我々。

また同じことを繰り返さんとしたことへの神の裁きなのか。

せめて祈りを捧げようとしたジャミトフは極大の衝撃を感じた。

ドツツゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

!!!!!!!

———米軍第七艦隊消失。

この日アメリカは、はじめてBETA大戦における最大の被害を受けた。

それはオルタネイティブ第五計画の頓挫と同義でもあった。

63話 ジャール大隊壊滅？

篁唯依Side

西部海岸 西地区緊急避難所

長い機体内待機の後、ドール中尉から緊急通信が来た。

そしてその決定が伝えられ、私がアルゴス小隊への通達を任せられた。

私は通信でいろいろ話している小隊員を一喝。部隊内通信に変えるよう指示をする。

「全アルゴス小隊傾注！ 全試験小隊は即時ソ連からの撤退が決まった。全機ペドロパブロフスク・カムチャツキー基地へ向かい港湾へ集合。後、接岸している戦術機母艦に機体を収納する」

突然の帰還命令。

やはりこれに声をあげたのは、予想通りマナンダル少尉とジアコーザ少尉だった。

『ちよ、ちよつと待つて……待つてください！ 浸透してきたBETAは航空爆撃で全滅させたんじゃないですか？』

『それに基地に帰還したら、いきなり撤退つてのも解せませんね。ソ連政府と何かトラブルつたんですか？』

「いいや、これは人間同士の政治の話ではない。これから話す事は衝撃的だ。故に厳重な箝口令を敷かせてもらう。もしこれを勝手に誰かに話すようなことがあれば処罰もする。諸君にその覚悟はあるか？」

これにユウヤは模範的衛士の回答で答えた。

『話してください。自分らは機密を多く預かるテストパイロットです。言われずとも「話すな」と言われれば、守秘義務に基づき決して口外しないことを誓います』

「よかろう。では、これを見てくれ。ソ連から提供された衛星写真だ」

私はアルゴス小隊の皆の機体に、確認された巨大BETAの映像を送った。

予想通り皆一様に驚愕。

『なっ!? なんだよコレ!? こんなBETA見たことねえぞ!』

『BETAの新種ですか。周りに比較するものがないんで正確には分からないですが、相当デカいんじゃないですか?』

「ああ、デカイ。だが多分ジアルコーザ少尉の想像を越えているだろう。全長は約2000メートル。胴体前部にある首長のような部分は1500メートルだ」

一瞬、みな静まりかえるほどに衝撃的だった。

だが、まだこれの脅威の半分も話していないのだ。

『なんてバカデカさだよ! こりゃ削るのにとんでもねえ苦労するぞ!!』

『イワン共の手に負えんのかあ? こりゃソ連もいよいよ……:かもな』

「私の説明はまだ途中だ。これは【宮殿級】^{パレス}。そう名付けられたが光線種に属する。レーザー照射口は首長の頭頂部、および背中二つの突起の計三門だ」

『こ、これが光線種!? ウソだろ!! このサイズでレーザーとか、威力はどんだけだよ!!』

『ホワイトファング1。この個体、これほどの高さからレーザーを照射するとなれば光線級^{レーザー・ヤークト}呐喊を仕掛けるなど不可能ではありませんか?』

「目の付けどころが良いなブレイメル少尉^{アルゴス}。そうだ。今までの光線種は地上の標的を撃つことがあろうとも、主な目標は対空物だった。だが、これは初めて地上の標的を狙った光線種。高所から地上をうち下ろすレーザーは、今までの光線級^{レーザー・ヤークト}呐喊のセオリーが通用しない」

『あ、あの……威力の方はいかほどで?』

「ソ連航空爆撃隊は一射で全滅。日本方面へ流れたレーザーは、飛行している航空機、航空艦を落としたそうだ。このことから【宮殿級】^{パレス}は北東ソ連の端にでも出れば、そこからアラスカを攻撃することも可能と予想される」

『アラスカへ帰ってもヤベエ!? どうすんだよ!!!』

予想通りの大きな動揺。それでも、これを知らせることを決めたのは私だ。

彼らを率いて帰還することが私の役目だ。

「以上のように、その威力と射程の長さで北東ソ連のどこにも安全な場所はない。故に、この即時の撤退だ。質問が無ければ移動を開始する」

『ありますよタカムラ中尉。それでそいつは今どうしてるんです？その説明だと、新種はもうとつくにここらを焼き払って、俺達も生きちゃいないと思うんですがね』

『それにカズサとタケルはどうしたんだよ！ まさか、もうそいつにやられたんじゃない!?』

「マナルゴス²少尉、質問に質問を重ねるな。前の質問の答えが終わるまで待て。だが今回に限り、両方の質問に答えることができる。この動画を見てくれ」

そこに映ったものはさらに衝撃的だった。

飛行形態になったZガンダムがレガンダムを乗せながらレーザーが飛び交う中を滑空していたのだ。

「分かりやすくコマ送りにしてあるが、これは新種の周囲を音速の10倍で飛行している。何度もレーザーに捕らえられているが、何故か健在だ」

山城さんと白銀が死線をくぐり抜けて新種を引きつけている姿は何度見ても胸が痛む。

それでも、私は部隊長としての言葉を言わなければならない。

二人の献身が無駄にならないように。

「このように二人は新種を引きつけ時間を稼いでくれている。我々はこの貴重な時間を無駄にせず速やかに撤退せねばならない。以上、撤収準備にかかれ！」

後ろ髪を引かれる気持ちを断ち切るようにそう締めくくり、部隊内通信を終えた途端だ。

通信の“暴風^{バオフエン}”が吹き荒れた。

『なんなのよなんなのよ、いきなり帰還だなんて！ いったい何が

起こっているわけわけ?』

まるで待ち構えていたようにバオフエン小隊の隊長機が怒鳴り声で割り込んできたのだ。

『バオフエンの隊長さんか。そっちは何も知らされず、ただ帰還命令が出されただけか?』

『なに? アルゴスの方は隊員にまで何が起こっているのか知らされているの!? こっちは隊長の私ですら何も知らされていないの!!』

中華統一戦線のバオフエン小隊はどうにも苦手だ。

野性的というか粗野な育ちの見える彼女らは、武家の厳格な家柄で育った自分とあまりに違いすぎて気後れがしてしまうのだ。

ちよūdまナンドル少尉への苦手意識と同じだ。

『そりやお気の毒。よっぽど“信用”つてのがないんだろな、アンタらは』

『なっ! なんですってえ!?!』

『こらタリサ! バオフエンさんよ。こっちは知らされているとはいえ厳重な箝口令が敷かれている。同じ試験部隊のアンタにも言うわけにはいかない。悪いな』

『な、何よ! ちよつとくらい教えなさいよ。いくら何でも意味不明すぎるわ!! いったいこのソ連で何が起こっているわけ!?!』

このままではいつまでも部隊の皆は彼女と口論を続けそうだ。

私はため息をついてバオフエン小隊隊長の崔亦菲中尉に話しかけた。

「崔中尉、自分は現在アルゴス小隊を預かっている篁唯依中尉です。理由をお話することは出来ませんが、直ちに撤収しなければならぬのは事実です。今はそちらもこちらに構わず、ご自分の部隊をまとめ下さい」

『日帝に言われなくてもわかっていているわよ!ズルいわねえ。とにかく話せるようになったら教えなさいよ!』

彼女はそう捨て台詞を残して乱暴に通信を切った。本当に暴風のような者だ。

こちらが話せる頃には、もうとつくにあの絶望的なBETAの情報
は知っているだろうがな。

◇ ◇ ◇

ペドロパブロフスク・カムチャツキー基地港湾

戦術機母艦 甲板

ペドロパブロフスク・カムチャツキー基地へ帰還し、戦術機母艦に
乗り込んでとりあえずの手が空くと、今まで抑えていた感情がわき上
がってきた。

傾きかけた日に照らされた戦術機母艦の甲板上。

ふと気がつくとき、以前のように前線基地の方を見上げてしまってい
る。

いつかのように、また彼女が空から戻ってくることを期待してい
る。

そんな私の背中に声をかける者がひとり。

「タカムラ中尉、大丈夫ですか？」

「ユウヤ……………か」

「ユウヤ？」

「あつ！ いやブリッジス少尉！ すまん、呆けていた！」

「……………いや、ユウヤでいいですよ。二人のことが心配ですか。特
にカズサが」

「……………ああ。ドーウル中尉に『私は残って彼らを待つ』と言ったの
だがな。私のメインの任務は【XFJ計画】の開発主任。このことに
命を賭けるのは本分ではないと、説得された」

「で、代わりにドーウル中尉はペドロパブロフスク・カムチャツキー
基地に残って二人の帰還を待っているというわけですか。かつこう
つけすぎだな、隊長は」

私達はしばらく無言で陸を見ていた。

出航までに二人が帰ってくることを期待するかのよう。

——「黄昏てんな中尉もユウヤも。こんなしみつたれた幕引きじゃ、アタシもそんな気分だがな」

と、そこにマナンドル少尉とジアコーザ少尉がやって来た。

この二人がいると、途端にこの場も賑やかになる。

「VG、タリサ。わざわざ自由時間に俺達につき合わなくたっていいんだぞ」

「カズサとタケルが未帰還じゃ、遊ぶ気にもなれねえつての。まったく早く帰ってきやがれつてんだ」

「マナンドル少尉……………二人が帰れると思っっているのか？ 二人が対峙しているのは、BETA大戦を通してもかかってない脅威。あれを詳しく分析するほど、ソ連参謀本部は恐慌状態になるほどだろう。それを……………」

「だからってアタシらがそれにつき合う道理はねえだろ。二人が乗っているガンダムだって、ただの戦術機じゃねえんだ。ひよつとしたら、その新型バカデカBETAを仕留めて帰ってくるかもしれないねえ」

「動機は不純ですが、俺も帰ってきて欲しいと願っています。あのガンダムがありや、故郷イタリアを取り戻せる希望がちっとは見えてくる気がするんですよ」

「そうだな……………」

二人の言葉に、少しだけ気分が上向いたのだが。

——「残念ですが、それは難しいかもしれません」

これに異を唱えたのは、新たにこの場へ来たブレーメル少尉だった。

「先ほど連絡がありました。二人と共にBETA戦へと向かったジャーナル大隊。その壊滅が確認されたそうです。帰還機はありません」



ソ連Side

コリヤーク自治区 某所

ロゴフスキー中佐は爆雷の敷設作業、研究の移送状況の報告を聞きながら暗鬱たる気持ちになっていた。

参謀本部の分析では、あの怪物BETAに対抗する方法は皆無。

戦力と物資を温存し、アラスカへ撤退するしかないとのことだ。

「とうとう全領土が蹂躪され奪われるか。まったくBETAめ。あんな怪物まで用意しているとはな」

その側に控えていたサンダーク中尉は、いつものように冷静に応えた。

「ええ。これは我が国だけでなく人類全体の危機。他の地域でも同様の個体が現れたなら、その脅威度は計り知れません。ですがこの最大の危機は最大のチャンスとも言えます」

「……………なに？」

「もし、これを我々が進めている【π3計画】が打ち破ったとしたら？」

まるで倒す方法など見いだせない最大脅威のBETA。

もし、これを打ち倒すことが出来たら、π3計画の有用性を全世界に喧伝することが出来る。

我がソビエト連邦に恭順する国も多く出てくるだろう。

「それは明るい未来だ。だが、できるのかね？」

「ベリヤーエフ博士に完成を急がせましょう。奴のデータは、ガンダム二機が捨て石になってくれることで、衛星で詳細に得ることが出来ます。三カ月以内には結果を出せるでしょう」

いつの間にかロゴフスキー中佐の顔は笑みが浮かんでいた。

存外、この危機も悪くはない。

「よし、この新型の映像は規制せず流そう。とくに周辺諸国には注意喚起が必要だ。これの脅威を伝えることは人類への貢献。遠慮せずに行わせよう」

「結構。脅威が広まれば、それだけ研究の喧伝に繋がりますからな」
この問題に一応の方針が決まったところで、サンダーク中尉は次の

問題を提起した。

「アラスカ撤退にあたり、残った問題があります。ジャール大隊です。彼らは他国の“ガンダム”の力を見過ぎました」

「フム……ラトロワ中佐は大丈夫だろうが、その部下は未成熟な子供だ。完全な口止めは不可能であろうな」

ソビエトが手足として使っている被支配民族は、ソビエトは最高の技術を持ち万能の機構システムである、という神話を信じ込ませていることで支配下においている。

他国においてBETAを打ち破る最強の戦術機が開発されたと広まれば、ソビエトの支配を脱しようとする者も数多く現れるだろう。

「切れ味鋭くとも使い辛い逸品より、多少なまくらでも使い勝手に勝るものこそ良いナイフ」と申します。万一に生き残った者達への後始末はお任せください。最後にπ3計画のデータ取りに貢献してもらいましょう」

「ぬ？ ジャール大隊をやるのかね。ラトロワ中佐はじめ彼らは、今まで祖国を守り通してきた英雄だが」

「ええ。ですから彼らには“本物の英雄”となっていただけでしょう。新種の巨大光線属種の登場と脅威。それに続くアラスカへの撤退。この非常事態である今こそ、ソビエトには真の英雄が必要なのです」

64話 ファインファンネル舞う

νガンダムを乗せたウェイブライダーは、大気圏を抜け一面星空の宇宙へと出た。

黒檀の宙のなか、足元の地球は青く光っている。

驚いたことにレーザーはここまで飛んでくるものの、もはや余裕で躲せる。

やはりモビルスーツは宇宙の方が調子が良い。

『よくレーザーを躲しながら宇宙まで上がったものだな。ただでさえ上昇は大きくスピードが落ちるのに、大気圏離脱までするなんて』『慣れ』ですわ。レーザーを躲すのも長いですからね。いつの間にかレーザーの射線が目に見えるようにまりましたわ。距離さえあればスピードは足りなくとも、このくらいは出来ます』

もつとも逆に言えば、あのバケモノに接近は不可能。光線級^{レーザー・ヤークト}呐喊を仕掛けることなど出来ないということだが。

『大したものだ。俺もニュータイプになったとはいえ、上総の真似はできそうもないな。で、宇宙に上がったのは何か理由があるのか？』

「ガノタなりの勘ですかしらね。モビルスーツは元々宇宙作業用メカ・モビルワーカーを兵器へ転用して発展していったものです。宇宙からなら、何かしら突破口が見つかるのではないかと思っただんですわ」

その時「ピーーツ」と音がした。

何かしらの計算で自閉モードだったハ口が、再び起動したのだ。

「その勘は当たりだ。宇宙に出て余裕が出来たんで、詳細に分析ができた。それで、いちおうの大雑把な作戦はできたよ。あの極大レーザーは突破できる」

『おおっ！』

「さらに超硬度の複合装甲に守られた巨大質量の体を、一発で破壊する方法も思いついた」

「て、天才ですわ!!!」

ハロの示した作戦は次の通り。

1. ヲガンダムが囷になり、主砲、副砲のレーザーに撃たれる。ウエイブライダーはその隙に巨大BETAに接近。

2. 主砲近くまで接近できたらZガンダムに変形。今度はゼータ自身が囷になり、再びレーザーを撃たせる。

3. レーザーが発射される瞬間、照射膜を破壊しロングビームサーベルを照射口に突き立てる。ビームサーベルのフィールドで乱反射したレーザーは、そのまま巨体を破壊する。

「……………つまり、白銀に“死ぬ”とおっしゃってますの？」

「だから大雑把な作戦の骨組みだって。帰って軍にも協力してもらって、囷は何とかしよう」

「そうですね。〔Zガンダム爆散シーン〕なんてプレミア画像欲しくありません。あと白銀が死ぬのも悲しいですわ」

『俺はZガンダムの次か。いやそれより上総、ハロ。問題は1だけか？ 2、3は大丈夫か？』

「え？ あーうん。レーザーの照射時間は1分25秒。そこから次までの照射インターバルは3分10秒。ゼータの大气圏降下能力なら十分接近できるよ」

「わたくしも大丈夫ですわ。レーザーの発射タイミングは正確にわかりますし、バイオセンサー全開でロングビームサーベルを作れば、1000メートルくらいいいけます」

『なら問題ないな。今やろう。たかがレーザーの一つ。Zガンダムではじき返してやる』

「三つですわ！ ここであの名セリフをもじった言葉を使うなんて！」

『今、デカブツを何とかしなきゃアルゴスのみんなが危険だという話だったろう。それに協力を要請するとして、相手はソ連。交渉にどれくらいかかるかわからない。その間にあのデカブツはどれだけ被害を出すか』

「……………そうだね。奴が北米大陸を攻撃したら、アメリカは勝手にオルタ5を発動する可能性が高いよ」

『だろ？ だから今なのさ。大丈夫、いけるさ』

「コロニーレーザーを受け止めるようなものだけどなあ。それに問題がもう一つ。ルガンダムには一応大気圏を降下できる強度とバーニアはある。けど実際にやるとなると、身動き取れずただ降下してくだけという状態だ。つまりレーザーで鴨撃ち状態」

「少なくともデカブツのレーザーは無力化しないと、白銀は降りれないということですね。白銀、ルガンダムの酸素はどのくらい？」
『あと30分という所かな。緊急用の酸素なんで、そう長くは持たない』

30分以内にデカブツを倒さないといけないのか。

下手をしたら共倒れ。

やはり一度帰って、囷と回収用の航宙艦を軍に用意してもらった方が……………。

『ちつとも問題ないな。上総とハロは最強最高の光線^{レーザー！ヤークト}呐喊の名人だ。ちつとデカいだけの光線級なんて簡単に倒せるだろう』

え、えええええつ!! そこまで信頼してくれても困るんですけど!!
光線級^{レーザー！ヤークト}呐喊は何度もやったけど、ここまでデカいのは経験ないし!!

◇ ◇ ◇

『軍事の作戦は確実性こそ最上』という格言はどこへやら。

結局、白銀に押し切られる形でバクチみたいな作戦は開始された。ウェイブライダーとルガンダムは分離して離れ、共に全機能を止めてBETAの探知から免れている状態。

まずはルガンダムがシステムを起動して囷となるのが作戦第一段階。

システムを落とした薄暗いコクピット内でルガンダムを見ながら待機だ。

「いいの？ ボクの計算じゃ、フィールドでもあの極大レーザーは受け止められないよ」

「白銀が“やる”と言っているのです。ならば信じて任せましよう」

「“やる気”と“がんばり”で不可能を可能にできるのは学校のテストくらいだよ。特に兵器の運用は冷たい計算の通りにしかならない」

「わかってますわ。けど白銀が本気になると、どうにも逆らえないんですわ。なんか女には危険なオーラみたいなのが出て」

白銀は性別に関係なくダチになれる性格だ。

普通は友達でも相手が異性だと、ある程度は意識してしまうものだが、白銀にはそういったことはまるで無いのだ。

TS転生のオレとしては、白銀のそういう所には助かっているのだが。

しかし、白銀のたまに見せる翳りみたいな所には「ドキリ」とさせられてしまう。

自分が女だと意識させられてしまう瞬間があつて、その時には逆らえなくなってしまうのだ。

「と、ともかく！ ヲガンダムも白銀もこんな所で無くなつてもらつては困りますわ。やらせてみて、もし無理そうでしたら作戦を中止してサイコフィールドでフォローします」

「……………あんまり信じてないじゃん」

♠◇♣♥♠◇♣♥

白銀 武Side

「さて、やるか」

全システムを落とし、息苦しい暗闇となったコクピット。

非常灯の薄暗い灯りが妙に心細くさせる。

サイコミュを使えるようになったとはいえ、ヲガンダム初の実戦の日こんな規格外とかち合うとは。

されどやるしかない。

「俺もニュータイプのはずだ。BETAが俺を狙う意識をとらえ、

合わせてIフィールドを張る。

「……………純夏、導いてくれ」

覚悟を決めメインシステムのレバーを引く。

レガンダム、システム解放。サイコミュ起動。

——ティキーン

「来る！ レーザーだ。行け、フィンファンネル！ Iフィールド展開!!」

フィンファンネルが四方に動き、レガンダム前面に大きくIフィールドを展開する。

そこに極大レーザーが襲来！

予定通り、最大の力場の発生する場所でレーザーを受け止めた。

Iフィールドとレーザーはぶつかり合い、白いエネルギーの奔流を散らせながら拮抗する。

だが……………

「くっ、ダメだ。Iフィールドが持たない！」

やはりあの極大レーザーは圧倒的。

少しずつIフィールドが削られ、消えていくのがわかる。

だが照射は1分25秒間だ。何としても持たせてみせる！

……………と決心したのだが、ハロの緊急通信が絶望にたたきこむ。

『白銀、まずい！ 副砲二門が来る！』

「なっ!? これはまだ主砲のみのレーザーなのか?!」

『やはり無茶ですわ！ 白銀、今行きます!』

「ま、待て！ くそっ、糞オオオツ!!!」

——やれやれ、まるでなっっちゃいないな。

Iフィールドとはいえ、まともに正面からレーザーを受ける奴があるか。

「?!?! アンタは！ まだいたのか?!」

どこからともなく聞こえてきた声。

それはニュータイプの“共振”による声だった。

——フィンファンネルの使い方を教えてやる。こうだ。

その瞬間、フィンファンネルの動きが俺のコントロールを外れ、劇的に変わった。

さっきまでその場に固定してIフィールドを張っていただけだったのが、活発に宇宙を泳ぐように舞いはじめたのだ。

「あの動きは……そうか。レーザーを受け止めるんじゃなく、流し逸らすのか！」

Iフィールドはレーザーを斜めに受けながら曲げて別方向へと流し始めた。

三本のレーザーは完全に制御され、レガンダム直前で歪められ、あさつての方向へ流れていく。

『す、すごいですわ！ あのフィンファンネルの動き、前世で劇場で見たのとおんなじ！ まるで本物みたいですわ!!』

はしやいだガンオタみたいな声をあげる上総に、思わず苦笑する。無邪気なものだ。

「……はは、本物だよ。ニュータイプ一年生にできる芸当じゃないさ」

『え?』

「……いや、何でもない。さあ、もう俺は心配ないだろう。いけ!」
【大物殺し】だ。最大の光線級呐喊を決めてこい!!」

『ええ、行きますわ! 奴をソ連のゴミの山に変えてやるですわ!!』
ウェイブライダーは地球を目指して突入し、大気圏降下体勢で落ちていく。

それは青い星へ吸い込まれるように小さくなっていき、やがて消えた。

俺はあいつらを敬礼で見送った。

65話 ああウエイブライダー特攻機

「くううううっ、ヒッ…ヒッ…」

現在オレはL1呼吸法という耐Gのための呼吸法をしながら大気圏降下のGに耐えている。

お腹に力を入れて三秒に一回強い呼吸をする、強いGがかかった空間での呼吸法だ。

スタート発進が遅れたせいで、厳しめの強行突破で地球へ降下しなければいけなくなった。

サイコフィールドを使えるならこんな真似は必要ないのだが、じつはサイコフィールドを発生させると足が遅くなってしまふのだ。こういった急ぎの場合には使えない。

これは決死の光線級呐喊。レーザー・ヤークト

レーザーが発射される前に目標に到達できねば死だ！

「うぐうううっ！ ヒッ…ヒッ…ヒッ…ヒッ…ヒッ…ヒッ…フウ？」

——と、いきなり息が楽になった。

「上総、ご苦労さま。ようやく遅れを取り戻して、コクピット内を1Gへ戻せたよ。ここからはいつもの光線級呐喊だ」

いつものかあ？

考えてみれば正気の沙汰じゃない。

数万度にもなるう照射口前で、レーザー発射直前に暴れまわられて、どんな作戦だよ！

『わが棺は空のゆりかご』

最後の勝利を信じつつ鈍色の空に散華せり』

とかにならないか？

まあ今さら死ぬのを恐れるわけでもないが、生還の芽はあるのかは知っておきたい。

「ハロ。今さらですけどこの作戦、生きて帰れますの？」

「少なくとも照射膜の破壊さえできれば生存可能だ。レーザーは光だからね」

「はい？」

「光の運動は通常全方向に拡散する。一方向へ進ませるには、レンズのように光の方向を定めるものが必要だ」

「レンズの役目をしているのが照射膜……ああ、なるほど。わたしにも分かりましたわ」

つまり照射膜が無くなれば、レーザーのエネルギーは全方向に拡散してゼータの装甲でも耐えられるほどに弱まる。

さらにそこにビームサーベルのイーフィールドで方向を定めれば、レーザーを逆流させることも可能というわけだ。よし、頑張っちゃうぞ！

と、やる気闘志を燃やしたのだが……………

————テイキーーン

レーザー照射の気配？ もうレーザーが発射される!?

早すぎる！ まだ50秒くらいは余裕があるはず……………

ハッ！ そうか、そういうことか!!

「ハロ、あんの野郎、充填率を下げて発射しようとしてますわ！ なんてこと！ BETAのクセにこんなアドリブを決めやがるなんて」

ヤバイ！ 今でもギリギリなのに、回避機動なんて取れやしない！

「えええつ、そんな!! この体勢、距離じゃ避けることなんて……………いや出来る!! 上総、大きく右手30度に舵を切って！

誘導点に合わせて正確に!!」

「わっ、わかりましたわ！ BETA攪乱マニューバ！」

どんな策かもわからないままエンジンシステムを全カット。

電子機器の作動反応によってこちらの位置を知るBETAの感知能力をくませる。

そして補助翼の操作と下から突き上げる風で機首を目標の方向へと合わせる。

機体が目標地点に向かい水平になった瞬間、システム復活ブースター全開。

一気にハロの示した誘導点へと突っ込んでいく！

(うつく加速しすぎた！ 意識が……………)

急加速の代償がきた。

目の前が真っ暗だ。いわゆるブラックアウトという現象。

レーザーの気配が痛いほど刺さる中。

サイコフィールドを張る間もなくグロック(失神)した――

「……………? どうしたことですの。あの野郎、照射する気配が消えましたわ」

数十秒間の気絶。戦闘機動では致命的な空白。

されどオレは、ウェイブライダーは平穩無事に飛行している。

それどころか後ろの巨大BETAからは、レーザー照射口すら向けられていない。

「強すぎるレーザーが仇になったんだよ。この方向にはアレがある」

「え?……………ああっアレは!!」

BETAに均され何も無い大地が果てしなく続く中。

遙か真正面先にただ一つそびえ立つ巨大な建造物があった。

それは「モニュメント」と呼ばれるハイヴの地表構造物。

BETAは決してハイヴにレーザー攻撃しない。いや、おそらく出ないのだろう。

「フツ……フフフ。本当に笑えるジ・エンドですわね。こんな弱点をさらした以上、もはや勝負は見えましたわ。では、なぶり殺しといきましょうか!!」

オレはウェイブライダーをUターン。

正確に地表構造物を真後ろの背にしたまま、巨大BETAに突入。

「桜花ウェイブライダー特攻隊山城機、敵戦艦見ゆ。目標敵甲板。

今、玉と砕け御国の恩に報いますわ!」

「特攻隊ネタ? 不謹慎だなあ。本当に砕けないですよ」

「ついやってしまいましたわ。ちょうど状況がピッタリだったもので。わたくしは砕けずとも、コイツは徹底的に砕いてやりますが！」
巨大BETAに近づくと、その足元には百数十体ほどのBETAがたむろっているのが見えた。

おそらくあのデカブツの直援だろう。

しかしその中に光線種は見えない。

「あれは無視してかまいませんわね。これは光線級^{レーザー・ヤークト}の呐喊。雑魚は相手にせず、光線種のみがただ唯一の標的」

オレはウェイブライダーをZガンダムへ変形させる。

「ハロ、パーティーを始めますわよ。メインデイツシユは胸に光る反応炉のG元素ですわ！」

「そりゃご馳走だ。反応炉のG元素なんて、まだ味わったことにはなかったからね」

気分はすっかり狩猟前のバーバリアン。

一人と一機の野蛮人コンビは、ビームライフルを構え巨大な敵の懐へと突入していった。

66話 終わりの文字のガンダム

———テイキーーン

巨大BETAに接近すると、またしてもニュータイプの危機予測が反応した。

一旦静止して様子を見る。

すると下から無数の衝角付き鞭ウイップが襲ってきた。

「ちいっ、レーザーだけじゃありませんのね！」

どうやら巨大BETAの下腹部に収納されたいる近接用の武装らしい。

腰部スカートアーマーのホルダーからビームサーベルを取り、避けきれない衝角だけを切り落として上空へ退避する。

「これは要塞級の武装でしたわね。アレは一体につき一本だけなのに、こんな無数にもついているとは贅沢ですこと。でも相手にするつもりはありませんわ！」

空中で鞭ウイップの届かない場所へ逃れると、奴はそこに副砲を向けてきた。

されどこつちはすでにビームライフルを構えている。

「遅い、遅すぎですわ！ そんな大型砲が間に合うわけじゃないでしょう!!」

ビームライフル乱射で照射膜を徹底的に破壊。

照射口は体液を吹き散らせグルグル不規則に動く。さらに届かない鞭ウイップを、必死に幾つもこちらに投げってくる。うん良い悪あがきだ。

「では、そろそろアレをやりましょうか。ハロ、ゼータ内にある全サイコフレームを作戦開始から30秒限定解除。最高にハイパーでロングなビームサーベルでトドメといきましょう」

ゼータの中にはバイオセンサーやコクピットまわりなどに無数のサイコフレームが埋め込んである。前に横浜ハイヴ戦の時にハロが自作したのだ。

「……………全開か。うーん」

「どうしました？ 全開にすると機体が耐えきれないとか？」

「いや、機体は大丈夫だけどね。実際に扱ってみてわかったんだけど、【サイコフレーム】ってけっこう怖いシロモノなんだよ。本来それはモビルスーツにサイコミュ機能を備えさせ、機動性を上げたりサイコミュ兵装を扱えるようにしたりするもの。そうだね？」

「ですわね。ガノタなわたくしに解説させれば、一晩でも語ってさしあげますが」

「今が戦闘中ってことを忘れないで。もはや死に体とはいってもボスクラスの強敵なんだから。で、そのサイコフレームの機能なんだけどね。それが人間の脳の未知の能力まで引き出して、不可思議な現象を起こしちゃうみたいなんだよ。何で宇宙世紀の人達は、こんなヤバイものを強力にして武器にしちゃったんだろうね」

ああ、その話は聞いたことがある。

そもそも本来、思考で機体制御するためのサイコミュ簡易版のバイオセンサーですら。

それが何でビームサーベルを出力ハイパーなロングビームサーベルに出来るのか？

【サイコフィールド】というバリアーを発生させるのか？

宇宙世紀の科学者でも、この原理すら分かっていないのだ。

サイコフレームが巨大質量アクシズの落下を押し上げた現象。これが起こった理由も当然不明。

「ですが白銀のタイムリミットが迫っています。原理なんてどうでもいいですから、戦争に早く勝つことこそ重要でしょう！」

「宇宙世紀の指導者達もそんな考えだったんだろうなあ……」

長いキリンの首のような主砲を伝いながら飛行して頂上へ。

その真上に来て、無数の目玉みたいな照射膜で出来た照射口を見下ろす。

するとそれは再びレーザーを充填しはじめた。

こちらサイコフレーム全起動。かつてないほど出力を跳ね上げる。

静かに進むロングビームサーベルの切っ先を天へ掲げ上段へ「火の構え」。

「フツ。それでもレーザーを放ちますか。ここまで接近を許した以上、敗けは確定だというのに。この機体の名を教えてさしあげますわ。これなるは終つひの文字を持つガンダム——」

照射膜が高熱を湛えた白色へ輝く。

充填率が極大へ達し、照射される一瞬前に動く。

「機動戦士Zガンダム」!! お前に終わりを告げるガンダム! ですわ!!」

烈火一闪。ロングビームサーベルを照射膜へ叩きつけ、全ての照射膜を粉々に粉碎。

それをそのまま直下へ向ける。

「温まってください」

サイコフレーム全開にロングビームサーベルに念を込める。

ロングビームサーベルは、BETAのキリンの首の中身突き破りながらで果てしなく伸びてゆく。

中からは巨大な「ボシユウウツ」と、煮えたぎった油に水を注いだような音が響く。

中でレーザーの超高熱エネルギーが乱反射しても表面の複合装甲は健在。

されど中身の方はやはり柔らかかった。

複合装甲の隙間から蒸気が激しく漏れて噴き出す。

この蒸気は中身が蒸発したものだ。

「…………おっと、限界ですか」

それを予感したオレは、素早くゼータを上空へ退避させる。

——ボキンツ

急速に中身の無くなった長い首は途中からへし折れ「ズズーーン……」と地響きを立てて地面に崩れ落ちた。

続いてその巨体の足も力無くへし折れ、地響きをたてて崩れ落ちる。

グシャアアア……………

巨大BETAは中身を大きく減らし、ほぼ外殻のみの骸となっていた。

さすがは日本まで届く極大レーザー。こんなデカブツの体まで瞬間に蒸発させてしまった。

オレは白銀に戦勝報告の通信を入れる。

「白銀、終わりましたわ。でっかい虫ケラの死骸を見にいらっしやい」

『倒せたのか上総、ハロ。さすがに少しは不安だったが、見事やってくれたな』

通信を切ると、勝利の実感がわいてくる。

【超光線種巨大BETA陥落】

「……………終わりましたわね」

「サイコフレイム。ちよっと不安だったけど、何もなかったか……………ああっ!? 上総、下を見て!」

ハロのあわてた声に下を見るが、とくに何も無い。

雑魚BETAがやけに集ってきているが、光線種はいないのでこちらに攻撃はできないはずだ。

「何なのですか？ ただ雑魚BETAが集まっているだけではないですか」

「デカブツの胸の部分を見てよ！ まだ青白く光っている。反応炉の部分はまだ生きているんだ！ 奴らそれを運びだそうとしているんだよ!」

「それって不味いんですの?」

「エネルギー源であるアレをハイヴに運ばれたら、デカブツをもう一度再生させることが可能なんだよ！ ゼロからコイツをもう一度生み出せるかは不明だ。だけどアレを運ばれたら、確実に短期間で復活してくれる！ 何としてもトドメを!!」

「冗談じゃありません！ 二度とゴメンですわ。けど……………」

すでにBETAの集団は無数に反応炉にとりつき、移動を開始している。

これは一瞬でまわりのBETAも殲滅しないと間に合わない。

「となると、今こそ不遇なコレの出番ですわね」

オレは背中からハイパー・メガ・ランチャーを出して構える。

「ハロ、もう一度サイコフレームを全開！ リスクを考えて出し惜しみしてる場合じゃありませんわよ！」

「わ、わかった！ 一発で決めちゃって！」

サイコフレーム全開のバイオセンサーは、狂ったように主機を強化していく。

ハイパー・メガ・ランチャーの充填率も果てしなく上がっていく。

サイコフレームの白い輝きがゼータの全身を覆う。

砲口から迸るエネルギーの光もやけに禍々しい。

「コレを撃つたら本当にどうなるか分かりませんわね……………ハロの不安がフラグにならなければ良いのですが」

青白く輝く反応炉目掛けてトリガースイッチを押した。

天をも灼くであろう白色の熱線は真っ直ぐ反応炉に突き刺さった。

67話 グリップスの夢

ハイパー・メガ・ランチャーの白い光爆が反応炉に直撃した途端、周囲にウジャウジャ群がっていたBETAは一瞬にして蒸発した。

さらに反応炉より離れた場所にいたBETAも、波及する熱波に溶けていった。

されど反応炉はこれをもってしても健在。変わらず青白い光をたたえたままだった。

「なんて奴！ この至近距離からのハイパー・メガ・ランチャーに耐えていますわ！」

大地は数千度の焦熱地獄でドロドロ溶けているのに。

こりやあ反応炉の外殻を剥くのはかなり苦勞する。

この場所を立ち去る前に反応炉を二度と使えないようにしておかねばならないし、なんとかこれでトドメといきたいが。

「たいしたものだね。でも崩壊している巨大BETAの体からG元素がタダ漏れだ。ボクはそれを吸収してハイパー・メガ・ランチャーのエネルギーにしている」

「つまり、奴が生きている限り撃ち続けられることですわね！ フフ。せいぜい無駄な抵抗を続ければよろしいですわ。あら？」

やがて反応炉に異変がおきた。

「バシユウウツ」と熱で油がはじけたような音が聞こえ、外殻が崩れるように崩壊していったのだ。

「やりましたわハロ！ 今度こそ本当の本当に奴の最期ですわ！」
オレはハイパー・メガ・ランチャーを止めた。

大地がドロドロ溶けて地形が変わりはじめていたので、いかげん止めたかった。

「うわあああつ!!!」

と、ハロが苦しそうな声をあげた。

「ど、どうしたんですの？」

「G元素が大量にきた！ 【G元素吸収モード】にしていたせいで過吸収だよ！ このままじゃデブってダブルゼータになっちゃう!!」

なんと！ ダブルゼータはゼータがエネルギーを大量に食べてデブって出来たのか!?

はじめて知った以外な事実！

いや新発見に驚いている場合じゃない。

コクピットの中がやけに眩しい光につつまれている。

いや、コクピット内だけじゃない、ゼータの全身がだ！

ゼータの中の全てのサイコフレームが過剰に反応して止まらないのだ。

どうにかエネルギーを放出しないと！

と思ったが遅かった。

眩いサイコフレームの光に包まれ、オレの意識は光の中に溶けていった――

「――え？」

気がついて辺りを見ると、そこは宇宙空間だった。

なんでまた宇宙に？

それに宇宙ではあっても、静寂の暗黒宙域ではない。

あちこちに宇宙艦やら人型機動兵器やらが戦っていて、爆発やらビームやらが飛び交っているのだ。

どこだ、ここは？

体を動かそうとしたが、指一本動かせない。

――「わかるまい。戦争を遊びにしているシロツコには俺の体を通して出るこの力が！」

……………はい？ どこかで聞いたようなセリフが聞こえる？
いや、これは自分の口から？

それにオレ以外にも何人もの人間の気配を感じる？

女の人？……………それも、どこかで見たような……………

あれはまさか!?

フオウ……………エマ……………ロザミア……………さんなのか!?

この体に、彼女らの意識が宿っている!?

そして自分の宿っている肉体の目を通して目前を見ると。

そこは宇宙で、猛スピードである機体に突進していく光景が映し出された。

あれは……………【ジ・O】!?

うわああああっ！ ぶつかる!?

——「ここから、いなくなれえっ!!!」

まさかコレは【機動戦士Zガンダム】最終回のあのシーン？

せまるジ・Oの巨体を見ながら、オレは再び気が遠くなっていた

再び目を覚ますと、そこは見知ったゼータのコクピット内。

全天周囲モニターのスクリーンを切った、いつものそこだった。

「あ、上総。起きた？ どうにかサイコフレームを静めることに成功したよ。いま原子炉とエネルギーカップを調整してエネルギー過剰に対応できるようにしている」

いつも通りのハロの声。

やはりここは宇宙世紀時代のゼータのコクピットじゃないな。当たり前だが。

「なんか変な夢を見ましたわ。宇宙世紀でグリプス最終決戦時のZガンダムに乗って……………いえ、あれは違いますわね。【機動戦士

「Zガンダム」主人公のカミーユの体に宿ったのですわね。エマさんやフオウさんと一緒に思念体になって、カミーユの体に宿ってジ・Oオーに突撃する夢を見ましたわ」

しかしリアルな夢だった。

まわりにいる思念体のみなさんに『あれ誰?』みたいに見られていた所までリアルだった。

フオウさんの冷たい眼差しは、ちよつとクセになりそう。

「そりや多分夢じゃないよ。上総は本当に思念体になってそこへ行つたんだ。ほら、お土産も持ってきている」

コクピットの全天周囲モニターがオンになり、周囲の映像を映した。

一面の焦土と巨大BETAの残骸。そして崩れた反応炉といったものの中にポツンとひとつの異物がそこにあつた。

「え?.....ああ! あれは!」

そこには巨大な人型の機体が横たわっていたのだ。

通常の戦術機よりはるかに巨大で鈍重そうなフォルム、そして胸部に穿たれ開いた大穴。

それはまるで神話の巨人が討ち取られたようにも見える。

だが全身にとりつけてある無数のスラストターと、側にある巨大なビームライフル。

そして宇宙戦に特化したような洗練されたフォルム。

それによって明らかにこの世界の戦術機とは一線を画したはるか未来の機体だとわかる。

「.....【ジ・Oオー】ですわね。なぜ【機動戦士Zガンダム】のラスト機体がここに?」

「サイコフレームの奇跡だね。さて、あれをどうする?」

68話 宇宙世紀から来た男

——Zガンダム^グの中のサイコフレームの力が最大に高まった状態は、上総のニュータイプ波動を極大に高めて発信。

それは宇宙世紀のカミーユが最大限にニュータイプ能力を高めた瞬間のゼータと共振。

世界線の異なる二つのゼータは互いの世界を繋いだ。

さらに反応炉の膨大なエネルギーは、一瞬だけ二つの世界の通廊をつくった。

互いのZガンダム同士が門となり、衝突したジ・O^{オー}をこちらの世界に引き込んだ——

「こんなところかな。それらしい仮説は」

「なるほど。つまりトラックに轢かれて異世界転生してしまうのと同じですわね。ウェイブライダーに轢かれても同じことがおきるとは驚きでした」

「ぜんぜん違う。まあ異世界小説みたいなものだと思ってくれても良いか。原因よりどうするかの方が重要だし」

というわけで、ハロとZガンダムを降りてジ・Oの元へと行ってみる。

ジ・Oを近くで見ると、やはりその材質や機構は戦術機とはぜんぜん違う。何より戦術機にはこんな大量のスラスタなどない。

腕部をよじ登り、大穴の開いたジ・Oのコクピットの中をのぞき込む。

果たして本当にそこには彼はいるのか否か。

やはりそこには、力なく倒れ伏している男がいた。

肩まで伸ばした青い髪をヘアバンドでまとめた、端正な顔立ちの青年。

しかし本当にノーマルスーツを着ないで宇宙戦闘をやっていたのか。

「……………パプティマス・シロツコですわね。どうです？ 生きていますか」

いちおうハロに彼の容態を看させる。

ウェイブライダーに激突され、生身で宇宙にさらされたのだ。

とても生きているはずもないが……………

「うん、助かりそうだ。内臓の損傷もほぼないし、息もちゃんとある。肋骨の骨折は厄介だけど、それだけだ。どうやら最後にジ・Oの強力なサイコミュがシロツコを守っていたみたいだね」

やはりか。

ウェイブライダーに追突された状態でも話せたし、カミーユに精神波攻撃をしかけられたし。

最新の「ムンクの叫び」みたいな顔は異世界に引つ張られた状態のものだったのか。

「で、どうする？ カミーユに『お前は这个世界に存在しちやいけな存在なんだ！』とか言われていた人だけど。それでも助ける？」

それを言ったカミーユ自身、自分の名前を『女みたいな名前だな』と呟いた軍人に、一般の学生だったのに殴りかかったクール野郎だぞ。

さらにそれで取り押さえられて殴られた腹いせに、軍の兵器であるモビルスーツを強奪して、その軍人連中を踏みつぶそうと追いかけて回して『ハハハハ怖いだろう』と笑ったサイコパスだぞ。

こんな奴の評価がアテになるわけもない。助けよう。

「確かにヤバい気もしますが、『宇宙世紀の有名人を助けたい！』とガノタの魂が叫ぶんです。それに助けられる人を見捨てるのも気がひけますわ。ハロ、お願いします」

「……………だね。ボクも同じ気持ちだ。じゃ、彼をゼータに移して」
ジ・Oのコクピットからシロツコを引つ張り上げ、ゼータの中へ。
そしてその中で、ハロが医療システムで治療を行う。

本当にドラえもん並に便利な万能メカだ。

オレはそれを外で待ちながら、ぼんやり宇宙世紀のグリプスへ行つたときのことを考えている。

そう言えば最後の突撃でカミーユが言ったセリフは『死ぬエエー！』とかじゃなくて『この世界からいなくなれえ！』だったな。

その思念をバイオセンサーが読みとり、こちらのゼータの力を利用

してシロツコをこの世界へ送ることで、文字通りシロツコを宇宙世紀の世界から消したのかもしれない。

その時、宇宙にいる白銀から通信がはいった。

『上総。スペック的にはレガンダムも大気圏降下できるとはいえ、やはり人型の機体では降下は大変だ。スラスターの調整もひどくシビアだし。手が空いているなら迎えに来てくれないか?』

「いまハロの手が離せないんですの。重傷患者の治療でゼータは動かさせませんわ」

『はあ? そんな所に誰がいるっていうんだ?』

「宇宙世紀からの来訪者ですわ。詳しいことは白銀がここへ来たときに話しますわ。降下はご自分で苦労して何とかなさい」

『わかったよ。くつ、これが大気圏の風か!』

その後、ぼんやり空を見ていると、やがてレガンダムが降下体制で降りて来るのが見えた。

盾を前にかざし全身を縮めるような体勢で全スラスターを地面に蒸かし、ゆっくり大地めがけて降りてくる。

ヤバイな。感動してしまう。

大気圏に散ったアムロも、『あんな風に地球に戻ってきてくれたら』
と思ってしまう。



大地に降りた白銀に生身での再会を果たすと、これまでの経緯を話した。

「【パプティマス・シロツコ】ねえ……信じられないが、アレがある以上信じるしかないな」

白銀は焦土に横たわるジ・Oを見ながら感慨深げに見ながら言った。

「で、そのジ・Oの状態なのですがコクピットはグチャグチャ。動力も損傷が激しく、動かすことはとてもできそうにありません。でも何とか持っていくことはできないでしょうか?」

「無茶言うな。こっちのモビルスーツよりでかい機体をどう持っていくって言うんだ。後で取りに来ようにも、先にBETAが持っているだろうしな。残念だがアレは破棄処分しかないな………と、BETAと言え。危うくジ・Oのせいで忘れる所だったぜ」

白銀は反応炉の残骸に目を向けると、衛士装備の防御ヘルメットを被った。

「BETAの中枢が目の前に来てくれることなんて早々無いからな。衛士の本分として調査はしておかないとな」

白銀が反応炉の調査に向かったので、オレも同じように防御ヘルメットを被り反応炉の内部調査に協力する。

白銀は反応炉の内面を見て感心したように言った。

「ハイパー・メガ・ランチャーの直撃を受けながら中身がほぼ焼けてないとか、反応炉の堅牢さはどんだけだよ。ま、今回はそのお陰で夕呼先生へのみやげは期待できそうだな」

「おみやげならジ・Oの方が………」

「それはない。いいかげん諦めろ。宇宙世紀方面はシロツコさんで十分だろ。と、これは？」

それは反応炉のより嚴重な部分に大切に秘されるようにあった。

人の背丈の半分ほどの大きさ。灰色で花のおしべのような形をしており、構成されている物質は金属とタンパクの中間のような、何とも不思議な物質だった。だが何となく直感でそれが生物だと感じた。

「これが【頭脳級】だろうな。オリジナルハイヴからの指令を受け、下級BETAに指示を出すBETA中枢のひとつ。マツハ10で飛行するウェイブライダーを正確無比に照準できたのも、コイツの演算能力のたまものだろう」

「【頭脳級】ですか。座学では『指令を出す存在で直接戦闘することはない』と教わりましたが、戦闘形態になって出陣してきたらとんでもない強敵でしたわね」

膨大なエネルギーによる強力すぎるレーザーに加え、高度な演算能力によって高速物体へも正確に当ててくる照準。

これまでのBETAへの評価を覆すほどにチートな奴だった。

「よし、コイツを持っていこう。これを夕呼先生に調べてもらえば、BETA大戦に大きな進展があるはずだ」

【頭脳級】を採取用トランクにつめたり、反応炉まわりの映像を撮ったり調べたりしていると、ハ口から連絡が来た。

『上総、シロツコさんが目を覚ましたよ。この世界の説明をお願い』

69話 パプティマス・シロツコ

パプティマス・シロツコ。

【機動戦士Zガンダム】のラスボスで、とにかく長い宇宙世紀でも比類する者がいない程の多彩な天才だ。

戦闘面では最終局面でカミーユのゼータ、ハマーンのキュベレイ、シヤアの百式と戦いながら、最後にカミーユに機体のコントロールを奪われるまで一度も被弾しなかった程の腕前。

これはパイロットの腕前だけでなく強力なニュータイプ能力もあつてのもので、キュベレイのファンネルの動きすら完璧に予測。完全回避した。

シヤアのこと『ニュータイプが出来損ない』なんて見下していたっけ。

指揮能力も優秀で、ティターンズに入隊してから数々の功績をあげ、半年でナンバー3の地位にまで昇りつめるほど。

さらに優秀なモビルスーツを独自に設計、開発する知識も持つっており、このジ・Oの他にメツサーラ、パラス・アテネ、ポリノーク・サマーン等は彼の手によって作られたものだ。

なんだから異世界転生モノのチート主人公を説明している気分になつてきた。

これらの能力を、オレみたいに神様からもらったとかじゃなく、すべて自前でもっているのだから本当に凄い。

もし敵になつてしまったら、オレもゼータに乗っているとはいえ勝てる気がしない。

なんとか上手く説得して味方になつてもらわないと。

コクピットに入ると、彼がリクライニングしたゼータのシートにもたれている姿があつた。

折れた肋骨の治療はちゃんとしており、ギプスで固定している。

「は、はじめましてパプティマス・シロツコさん」

「♠◆#%<*♪&\$&φ◇π♣ゝ^%#*?.@`?。」

あれ？ 言葉が分からない。

ああ、そうか。考えてみれば、彼は異なる地球の、宇宙移民するほど遠く未来の人間だったんだ。

だから言語もそうとう変化している。

たとえば同じ日本語でも、平安時代のものは現代の言葉と相当違ったものだし。

弱ったな。言葉が通じないんじゃない、説得も何もあつたものじゃない。

と、ハロが「コロシ」だとオレの方に転がってきた。

「とまあ、彼は宇宙世紀の惑星公用語を話しているんだけどね。でも大丈夫。ボクが介して互いの言葉を通訳するから、それで会話をしな

てね」

「えええっ!? ハロ、彼の言葉がわかるのですか!」

「ゼータのインデックスはじめ機体説明、プログラム等みんな惑星公用語で書かれているんだよ。必要な知識として神様から貰っているよ」

「ハロえもーん! あなたがいてくれて助かりましたわ、心の友よ!! お礼は”上総リサイタル”できつと返しますわ!」

「歌わなくていいから。それよりシロツコさんと話さなきゃ」

そうだったそうだった。

しかし”惑星公用語”なんてしゃべるハイカラさんたあ、さすがマジモンの宇宙世紀人!

ベラベラ日本語を流しようにしゃべるエセ宇宙世紀人たあひと味違うねえ。

「ペットロボといつまでも遊んでないで、わたしの質問に答えてくれないかね。カミーユ・ビダンはどこだ?」

シロツコさんは変わらず意味不明の言語を話しているが、ハロそれをがちゃんとこつちの言葉に翻訳している。さすがは万能ロボ。

「彼はいませんわ。『いまこの場にはいない』という意味ではなく、この世界のどこにも」

「どういうことだ? この機体はZガンダムではないのか? なの

に奴がないとは、どういうことだ?」

「まずシロツコさんに最初に知ってもらいたいのは、この世界はあなたのいた宇宙世紀の世界ではないということです。そして………」

オレはこの世界の説明をはじめた。ハロに手伝ってもらって、モニターにこの世界の光景を映してもらいながら。

ここは西暦二千年初期の世界であること。

BETAと呼ばれる侵略宇宙人と戦っていること。

向こうとこちらのゼータのシンクロによつてシロツコさんはこちらの世界に来てしまったこと。

「話はわかった。だが、その話を信じるとして、君がこっちの世界のゼータを持っているのは何故だ? それにわたしのことを知っている理由は?」

「それは話せませんわ。まさか、こちらの秘匿情報まですべて話してもらえるとは思っていないでしょうね?」

と言つておこう。軍人たる者、説明しにくいことはすべてコレでスルーだ。

「なるほど、そっち方面は秘密か。それでわたしはどうなるのかな?」

「そうですね。わたくしの上官に使ってもらおうというのは? この世界の人型機動兵器は、そちらの世界のモビルスーツよりかなり遅れています。なので重宝されると思いますわ」

「西暦の時代に人型の機動兵器だ?! あれは宇宙の開拓作業をするモビルワーカーがはじまりの、近年生まれた兵器だ。たいした宇宙開発など始まっていないこの時代には存在していないはずだ!」

近年?

ああ、そっぴやモビルスーツは一年戦争時のザクがはじまりだっけ。

つまり彼が生まれてからの時代に出来た近代機動兵器。

それがこの時代にあつたなら、そりゃ驚くわ。

アレ? もしかしてオレの方が、モビルスーツを見てきた時間は長

い？

「ごちらの世界線にはあるんですわ。さつきも説明した通り、BE TAという侵略宇宙人と戦う必要性から発明されました」

オレはさつきのように戦術機の説明をはじめた。

日本の撃震とイーグルの図解をモニターに映して、知っている限りの戦術機の説明をした。

さすがに彼は技術屋らしく、さつきよりかなり集中して聞いていた。

しかし説明が進むにつれ、難しい顔になっていった。

「脆いな。こんな脆い素材で、ここまで人型機動兵器を作れたのは大したものだと言いたいだが、兵器としてはモビルスーツにはるかに及ばない。やはり素材は地球産のものだけか？」

「はい。宇宙開拓はBE TAに阻まれ、月からさえ後退していますわ」

「やはりな。となると、わたしの知識が役立つかはわからんな。強度が圧倒的にたりない。これに小型原子炉を搭載するなど不可能だ。宇宙からの鉱物資源がないなら、作ることもできない」

ああ、やはり彼もこの問題にぶつかっただか。

じつはアラスカへ来る前、香月博士部下の技術屋達が二体のガンダムを調べた。

だがガンダムの複製はもちろん、そのバージョンダウンした機体さえ作れないという結果になった。

理由は、その驚異的なスペックを支える機体の素材が作れないからだと言うのだ。

たしかにガンダリウム合金は、千年未来の地球連邦軍技術部のテム・レイ博士が生み出した驚異的な硬度をもった合金。ザクのマシンガンすらはじき返す。この時代の人間に作れるはずもない。

「宇宙開拓時代からの素材は生産不可能か……この時代の脆い鉄や合金だけでできることといえば……」

シロツコさんが何やら考えているのを見ていると、外の白銀から連絡がはいった。

『上総、そっちの方はまだ終わらないか？ もうすぐ日が暮れるし、そろそろこの場を撤収して帰投したいんだが』

ああ。そういや説明にだいぶ時間がかかって、もうそんな時間か。今日はキツイ戦闘もやったし、オレも帰って休みたい。

「わかりましたわ。シロッコさんに伝えます。ただちに撤収準備にはいりましょう」

『あとジ・Oの破棄処分だが、いちおうシロッコさんに許可をとってくれ。いま持って帰れない以上、どうしてもやらなければならぬことを説明して』

オレ的にはじつに鬱な話だ。

せつかく現れた本物のモビルスーツを破壊しなきゃなんないなんて、ダンチョーの思いだ。

「了解しましたわ。今から説明いたします」

というわけで、シロッコさんの思索を中断させ、これからジ・Oを破壊して帰投する旨を伝えた。

「そうか、それはやむを得んな。だが、その前にデータだけでも回収させてくれ。サイコミュの稼働データだけはどうしても……あ、いや」

シロッコさんはつい口をすべらせた、というように口ごもった。

すると通訳していたハロが、オレにこつそり言った。

「上総、上総。これからサイコミュのデータをくれるよう頼んでみるから、口パクお願い。代わりにサイコフレームを提供するからって」

ふーん。ハロ的には欲しいモノなのか？

しかしサイコフレームって、シロッコさんの生きていた頃より、さらに後の時代の技術だよな。

この天才にそんなものを渡したらどうなっちゃうんだろうな？

70話 宇宙世紀の天才、最大の失敗

「これが【サイコフレーム】？　たいそうな名前だが、本当にコレがサイコミュになるのかね？」

シロッコさんはオレの見せた粉のような物質を興味深そうに見ながら言った。

「正確には、これを鋼材に埋め込んだものをそう呼ぶのですわ。これはサイコミュの基礎機能を備えたチップ。その鋼材でモビルスーツをつくれば、ジ・Oやサイコガンダムのような大型にならずとも、サイコミュ搭載機となるのです。こちらがそのデータとなります」

モニターにデータを映した。

ハロがまとめたものだが、惑星公用語で書かれているのでオレにはわからない。

いや普通に日本語で書かれてても分からないか、こんなデータの羅列なんて。

しかしシロッコさんは食い入るようにそのデータを読んでいる。

「ふうむ、たしかにサイコミュだ。たしかに取引としては申し分ない。しかし何故だ？　なぜ君が、こちらの世界の軍の極秘技術サイコミュを知っている？　こちらの世界より発展までさせて。それに地球の物質ではこのチップを作ることは不可能なはずだ」

「最初の質問には答えられませんわ。もう一つの方に関してはお答えしましょう。人類が宇宙に行かずとも、宇宙から物質をもってきてくれる奴らがいるでしょう」

「BETAだったか？　そいつらから奪ったもので作ったのか？」

「ええ、【G元素】と呼ばれております。この物質は大国が取り合いになるほどの貴重物質ですが、わたくしはBETAとの戦闘を多くし、このゼータにはG元素を吸収する機能があるので、それなりに手に入れることができますの」

「ふむ。それでコレを作った機関はどこだ？　よほどサイコミュ技術に精通しなければできないはずだが。それにニュータイプのこと
も」

またまた答えにくい質問を。

作ったのはこのゼータ自身ことハロだが、説明するのはしばらく待とう。

「こちらのことは信用できるまでしばらく言わないでおく。」

「秘密です」

「まあ当然か。しかしコレをわたしに渡すのは良いのかね？ 機密

情報ではないのか？」

「ええ。これはわたくしの所属する国連軍とは関係ありません。こちらが独自に作り運用しているものですから。それより、これ以上の話は後のこととして、早急に撤収作業にはいりたいのですが」

「……………そうだな。我が愛機ジ・〇に別れを告げに行くとしよう」

さて、そんなわけでジ・〇の機体の中へ来た。

しかしデータを抜き取るとはいっても、「何にデータを入れるか？」という問題があった。

ディスクに写すにしても、こちらの世界のPCで再生できるとは限らないし（言語の違いでエラーが出る可能性が高い）。

ハロを通してゼータのシステムに入れるのが簡単だが、それはシロツコさんが嫌がった。

結局、コクピットを解体してハードを取り出す物理的な方法となった。

そこでまたまたハロが大活躍し、端末内部に備え付けてあるワークキットでコクピットを軽く解体し、たちまちハードを取りだした。

「サイコミュも持って行きたいが、さすがに大きすぎるか。まあ良い。サイコフレイムというのが本当にサイコミュの力を発揮できるのなら、あれはもう時代遅れということになる」

「まだ始まってもない時代ですけどね。その技術を使えるのはここにいる三人だけ」

サイコミュの力を発揮できるニュータイプなんて、ここにいない人間しかないからね。

いや、ソ連にも一人いたかな？

「たしか、あちらのガンダムタイプに使われている技術だったな」
シロツコさんはジ・Oの側にいるレガンダムを興味深そうに見た。

「わたしの知らないガンダムタイプだ。だが良い機体だ。変形機構もないし、内臓火器も頭部のバルカンのみ。つまり整備性はおそろしく高い。拡張性も高そうだし量産のモデルとなりうる機体だ」

さすがパプティマス・シロツコ。一目でレガンダムの潜在力を見抜いた。

あれは同時代の英雄アムロ・レイが設計したものだが、後の時代のモビルスーツの基本モデルとなったのだ。

実際、香月博士の元にいた戦術機技術スタッフも、ゼータよりレガンダムの機構の方をよりよく調べていたし。

「しかし、なぜ君はわたしにここまで良くしてくれるのかね？ 弱いわたしの立場なら、取引などせずとも好きな要求を押しつけられるだろうに」

「あなたはここの世界でも出世しそうですからね。今のうちに恩を売っておいた方が良いと思っただのですわ」

この男が優秀なのは間違いないからな。この時代に慣れたらガンガン頭角をあらわしていくだろう。

「では、わたしが出世したらわたしの部下にならないかね。君にはよくしてもらったし、君はなかなか優秀のようだ。わたしの右腕として大いに活躍してもらいたいが」

奴はオレの目を見据えて言った。

「テイキーーン」と強力なニュータイプの波動を感じる。
やっぱり来ちやつたよ。

この男。なぜかサラとかレコアとか女を側近にしたがる傾向があるんで来ると思ったよ、ヘッドハンティング。

「あ、それは断わりますわ」
しかしそこに一線は引いておく。

この男。比類ない天才ではあるが、それだけに危うさもある。

側近だったサラにはフォン・ブラウンの爆破をやらせていたし、レコアにはバスクの処分といった汚れ役をやらせている。

そんな風に使われるのはごめんだ。

出世したい奴には夢を見させてくれる男だが、オレとしては奴に乗れない。

あのデータとかサイコフレームとか作ったのはハロで、優秀なのはオレじゃないし。

「……………即答か。わたしは君の上司としては足りないかね？」

「グリップス戦役でのティターンズ壊滅。あれの原因を考えますとね」

「なにっ!?! なぜそれを!!」

グリップス戦役はエウーゴ、アクシズ、そしてこのシロツコの属するティターンズの三勢力が争った戦いだ。

それはただ戦うだけでなく、どちらかの勢力と手を組んで共にもう一つの勢力を攻めようという謀略なども行われていた。

だがエウーゴのトップであるシャアは、先の会談の席でアクシズ実質トップのハマーンにケンカを売ってエウーゴ、アクシズ両者は険悪な状況になってしまっていた。

いったい何やってんだろうね、シャアは。ジオン総帥になったあとにも前線に立ち上がったって討ち取られたし。やっぱり部隊隊長がお似合いだね。

さて。三勢力の戦力は拮抗しているとはいえ、エウーゴとアクシズは完全反目。

シロツコの属しているティターンズは、アクシズと手を組んでエウーゴを圧迫しながら、エウーゴにアクシズをけしかけたりして。いわばキャスティングボードを握った一番有利な立場。

そんな中、休戦のために三勢力の代表が集って会談が行われた。

ティターンズ代表のジャミトフの側にはシロツコもおり、順当にいけばこの天才の手腕で二勢力から有利な条件を引き出し、ティターンズはやがて時代の覇者となっただろう。

だがグリップス戦役は、ティターンズの壊滅によって終了した。

他ならぬこの天才、ただ一人のせいだ。

あろうことか、この天才さま、自分のトップであるジャミトフをド

サクサに紛れて暗殺してしまったのだ。

元々ティターンズを掌握しようとは色々暗躍していたが、好機であったとはいえ、ここで自分の陣営トップの暗殺はあまりに悪手であった。

結果、ナンバー2であるバスク大佐と内乱をおこしてしまい、それには勝ったものの、コロニーレーザーであるグリプス2を奪われ、それを撃たれティターンズ艦隊は全滅。

有利な状況から一転、ティターンズひとり負けの壊滅。

パプティマス・シロツコ最大の失敗だ。

「……………君はどこまで知っている？」

「さて、どこまででしょうね。ともかく話は後にして、早く撤収しましょう。あ、あのビームライフルも持っていきましよう。スパロボでは理不尽な破壊力でユニット次々沈められた苦い記憶がありますわ」

「スパロボ？　なんだそれは」

オレはそれには答えずさっさとゼータに戻った。

さて、最後にジ・Oの破壊処分したら帰投だ。

ちよつと悲しいけど。

71話 神様の失敗、白銀の失敗

???
Side

感知不可能・認識不能の不思議領域

——いかん！ これは不味い！！

——実にいかん。今すぐ何か手を打たねば！

……………干渉不可能!? これはすでに

確定事項だというのか!!

おのれ……………だが、そうか。そういうことだったのか！

あまた数多の平行世界の中で、何故かこの世界のみが持つ特殊な引力。

たとえば、この世界がBETAに滅ぼされたならば、程なく他の世界に因果が果てしなく波及し、どの世界でも人類がBETAに滅ぼされる未来が起ることになってしまう。

何故この世界のみが、このような強力な因果の力を持つのか。

このワシをもってしても長く不明であったのだが。

が、今この瞬間、その理由が判明した！

まさかその原因が、ワシが最初に送り込んだ、あの小物どものせいだったとは!!!

思えば、パイロットを担当する奴のために用意してやった最高の戦士の肉体を、送った直後から速攻オシヤカにしてくれた時には軽く絶望したものだが。

まさかその後、想定以上によく戦い続け、このような事態を引き起こすまでに進化するとは！

ともかく【奈辺の傍観者】たるワシに出来ることは少ない。

すでにこの世界の行く末はワシの手を離れ、現場で戦う者達に委ねられておる。

蒔いた種の進化が勝つか、BETAの進化が勝つか。ただ祈りながら見守ろう。ただの人のように。

——それでも。

“アレ”を取り込んだBETAは未知の領域じゃぞ。

このワシですら予測できんほどにな

♠♦♣♥♠♦♣♥

山城上総Side

ドツゴオーン ズツガーオン ズオオオオオオン

撤収の最後のシメとして、ハイパー・メガ・ランチャーで数度ジ・Oを撃ち続ける。

やがて小型原子炉に誘爆し、ひときわ大きな爆発が起こった。

これで気の進まない後始末は終了だ。

大きな穴の開いた地面からなびく煙を見て、微かな感傷を感じる。

「もったいないですね。あれを修復できていれば、かなりの戦力になったでしょうに」

自分のシート隣に設置したサブシートに座るシロツコさんに言った。

「核燃料のヘリウム3は手に入るのかね？ あちらの世界でも木星でしか手にはいらなないが」

「入りませんわ」

「では惜しむこともなからう。それにジ・Oはモビルスーツとの宇宙戦闘を想定し、それに特化した機体。地球上でこちらのBETAという怪物の戦いに使えるかは疑問だ。なに、このデータとそれなりの施設さえあれば、また作ることも可能だ」

「モビルスーツを作れるような、それなりの施設なんてこの世界にはありませんわ。こちらの世界の施設は、戦術機という地球産のみの資材で作る機体のものだけです」

「では、その戦術機にわたしの技術を使おう。なに、地球産のみの資

材であろうと人型機動兵器。わたしができることはあるさ」

さすがに頼もしい言葉だ。

実はちよつと期待している。シロツコさんがいれば、この時代にもモビルスーツの開発ができるんじゃないかと。

そしたら世界初のモビルスーツテストパイロットはオレだ！

そんな夢を見つつ、帰投するためにゼータはウェイブライダーに変形。

白銀のッガンダムはジ・Oの巨大ビームライフルを背負い、タイミングを合わせて飛行するウェイブライダーに乗ると、オレは一路前線基地へと進路をとった。

『アーガマ02、貴重な鹵獲物が満載だから気をつけて行けよ』

シロツコさんに、ジ・Oの中央演算コンピューターにビームライフル。

BETA関連のものは、頭脳級の本体に、G元素に、巨大BETAと反応炉のデータ。

本当に世界を一変しうるお土産で一杯だ。

「了解ですわアーガマ01。せいぜい安全運転で帰投いたしましたよ。」「基地に帰るまでが出撃」ですからね」

そういや、この出撃は日米共同開発新型機の実戦テストだったな。

『この出撃ではオレ達はほとんど戦闘をしない』という昨日の想定は何だったのやら。

『基地に帰ってからもひと波乱ある。シロツコさんとこのビームライフルのこと。ソ連の連中にどう説明するんだ？』

「あー、どうしましょ。」「現地の身元不明者」じゃ、ソ連が身柄を引き取ってしまうかもしれないわね。いつそ基地には帰投しないで、オホーツクを越えて日本に行きませんか？」

『……………ともかく前線基地には向かってくれ。基地職員は避難して誰も残っていないだろうが、そこから通信でこちらの状況を知らせる。その時にシロツコさんのことを上手く説明するさ』

『上手く説明する』って、どう説明するんだ。

ともかく小隊長の指示だ。

「アーガマ02了解」とかえし、そのまま前線基地に向けウェイブライダーを飛ばした。

——だが、上総らはこのとき最大の不覚をとった。

ジ・Oのサイコミュが搭載されていた区画は特別に頑丈な装甲が施されていたのだ。

それはハイパー・メガ・ランチャーの爆撃、小型原子炉の誘爆にも一部は耐えて残り、後にBETAによって鹵獲されてしまった。

サイコミュによって進化したBETAが、この世界のみならず、あらゆる平行世界の脅威となるのは、また後の話である——

◇ ◇ ◇

アバチャ山を越え小一時間。

どうにか日が落ちる前に前線基地が見える場所まで飛んできた。

「さて、基地に到着しましたわ。アーガマ01、いちおう通信を送ってください。誰か残っているかもしれませんわ」

『……………』

あれ？ 白銀のやつ、どうしたんだ。返信が来ないぞ。

と、隣のシロツコさんが言った。

「気をつけたまえ。あの基地からは争いの気配がある。迂闊に接近するのは考えものだな」

ええっ、まさかBETA!? またしても襲撃してきたのか!?

……………は、ないな。

アラートも鳴らないし、オレ自身BETAの気配を感じられない。

どうもオレのニュータイプ能力はBETA以外のことには鈍い気がするが、そう言われてみれば、たしかに基地の方から争っているような気配がする。

と、しばらく沈黙していた白銀から通信が来た。

『アーガマ02、前線基地で戦闘が発生している。いったんここで止まれ』

「BETAは見えませんが、いったい何と何が戦っているのです?」
『観測したところ、どうやら戦術機どうしが戦っている。つまり人間同士の戦いだ』

人間同士? ついさつきまでBETAの最大脅威がせまっていたはずだぞ。

なのに何故、そんな時に人間同士で争いなんかしているんだ?

「ハッもしかしてクーデター? 巨大BETAでパニックになって、日頃の圧政の鬱憤で誰かがやってしまったとか?」

『……………それ、ソ連の人の前では絶対言うなよ。ともかく介入して戦闘をやめさせよう』

「ええ、急ぎますわ。……………あつー!」

と、思い出した。ここには重傷のシロッコさんがいる。

それに反応炉からの鹵獲物は、ほとんどこちらに積んでいるのだ。

これらに負荷をあたえず、戦闘機動なんてとれやしない!

『アーガマ02は戦闘地域には入らずここで待っていてくれ。こういった場合、俺のみで対処するよう、そちらに荷物のほとんどを積んでおいたんだ』

白銀のリガンダムはウェイブライダーから飛び降り、背負っていた巨大ビームライフルを地面に置くと、自前のビームライフルを構えて一直線に前線基地へと飛んでいった。

その光景を見ていたシロッコさんはオレに聞いてきた。

「あのビームライフルは本物か?」

「ええ。シロッコさんの知っている通りの宇宙世紀製そのものですわ」

「なぜ君達だけ宇宙世紀の武装を持っているのかは、今のところ問わない。どうせ機密だろう。しかしこの時代の兵器を相手に、撃破を目的にしない場合に使うのはどうかと思うがね」

「なぜです?」

「威力が過剰なのだよ。直撃はもちろん擦りでもすれば、戦術機という脆い機体では、熱で誘爆を起こす危険性がある」

……………そういや、初代ガンダムのビームライフルでも、コロ

二の天井に穴を開けるほどの威力があったっけ。

ヤバイ！ 白銀の奴、アレを突撃砲のつもりで牽制にでも使ったなら、相手は一発でオシヤカだ！

いや、白銀は何度もタイムリープして最強の腕を持つにいたった歴戦の衛士。

そんなミスなどするわけがない……………よね？

ま、いちおう注意ぐらいはしておくか。と通信を送ろうとした時だ。

————ズウウウン……………

基地の方角から何かが爆発した音が聞こえた。

……………白銀、やっちゃた？

72話 夜間飛行

白銀武Side

ツェー前線基地戦術機発着場

「……………やっちゃまった。戦術機ってな、こんなに脆かったんだな。忘れていたぜ」

ビームライフルで爆散させた機体を見て、そんな言葉が出た。

撃つたのは相手の突撃砲。

だがその爆発は想定以上に大きく、管制ユニットまでも押しつぶすほど。

中の衛士は絶望的だろう。

「いったい何だったんだコイツは。これほどの腕。『特殊訓練を受けた衛士』ってだけじゃ説明つかないぞ。同じ機体同士で戦ったら、俺でも危ういかもしれん」

この前線基地に来てみると、二つの勢力が戦術機で激しく戦っていた。

いや、一見戦術機同士の戦いの体をとっていたが、それは戦闘というより蹂躪だった。

一方の勢力は大隊規模の部隊であったのに対し、もう一方はたったの一機。

されど相手を圧倒し蹂躪していたのはそのたった一機の方であったのだ。

その一機はこの部隊をさんざん蹂躪し破壊。

その残余が全滅するのも時間の問題であった。

俺が介入し、戦闘中止を呼びかけたのはそんなときだった。

だがこの機は俺にまで発砲をしかけてきた。

やむを得ず応戦したが、さつき述べた通り相当できる奴で、さんざん振り回された。

牽制では埒があかず武器破壊で戦闘をやめさせようとしたのだが、ごらんのありさま、と言うわけだ。

やっちまったことに呆然していると、上総から通信がきた。

『アーガマ01、さつきそちらの方で爆発音が聞こえました。あれってもしかして……………』

「ああ。ビームライフルの威力が強すぎて、相手戦術機を一機破壊。搭乗者も殺つちまった」

俺はここで起こった一連のことを軽く上総に説明した。

『レガンダムを相手に戦術機で直角以上の戦闘をしたのですか！それはすごいですわ』

「いつの間にか慣れちまって考えなかったが、ビームライフルってなんこんなに威力があるんだよな。そりゃ、たった二機で万余のBET Aも全滅できるはずだよ」

『で、その件はしかたないとして、そいつと戦っていた方はどうなのですか？ 戦闘はしてないようですが』

「いちおう撃つてはこないがな。呼びかけても応答してこない。警戒しているんだろう」

『だったら連中は無視してこの基地を離れる……………つてわけにもいきませんわね。ひとり殺つてしまいましたし。その衛士がどこの誰で、どんな状況の戦闘だったのか聞かないといけませんわ』

「とにかく、もうしばらく待機してくれ。通信は開きっぱなしにして、こちらの状況は伝えておく」

いちおう軍法的には『正当なる応戦』が成り立つ状況だ。しかし証言が当事者である俺のものだけでは弱すぎる。

襲われていた連中が証言してくれば一発なんだが、してくれるか？ 対話すら難しいみたいだし。

その時だ。連中の代表格の者から通信が送られてきた。

『こちらはジャール大隊指揮官フィーツイカ・ラトロワ中佐だ。アーガマ小隊白銀少尉。そちらとの対話を希望したい』

ラトロワ中佐!?

ってことは、ここでやられている部隊はジャール大隊なのか！

俺達と別れたあと、どうしてこんなことに？

ジャーナル大隊指揮官ラトロワ中佐のチエルミナートルは俺の対面へと出てきて会談。

その間、生き残ったジャーナル大隊の部下は出てきて、戦術機の残骸から仲間の救助をこころみている。

俺とにらみ合ったままじゃ、救助もままならないから出てきたって所か。

「で、いったい何があったんです？ 向こうが仕掛けてきたのでやむを得ず応戦してしまい、このようなことになってしまったわけですが。この衛士とは、どのような経緯でそちらと戦闘になったのです？」

『経緯なんてないさ。我らジャーナル大隊は撤退する連中の殿しんがりとしてこの基地に残された。ここからでもでつかいレーザーがあちこち飛んでいくのは見えたが、それが止んで貴様達が帰ってきたってことは勝ったのかい？』

「ええ、仕留めました。とりあえず迫っていた巨大BETAの脅威は、もうありません」

『大したもんだね。このとんでもない刺客を倒したってのも納得だよ』

「刺客……ですか？ ハッ、まさかこれって！」

『ああ、いわゆる“粛清”ってやつだね。上層部への不敬なんかは今更だし。思い当たるのはアンタらの試作機の戦闘を見たってことかね。そのくらいしか部隊まるごと消されるような覚えなんてないね』

粛清。

共産圏の国では共産党に都合の悪い国民は、密かに抹殺したり適当な理由で逮捕したりするという話は聞いたことがある。

しかし、まさかその現場を目の当たりにするとは。

「それで……これからどうするので？ 粛清されかけた身ともなれば、軍に復帰は難しいでしょう」

『帰ってもまた消されるだけだろうしね。ともかく助けてもらったし、アンタに迷惑をかける気はないよ。このまま私らに逢わなかった

ことにして、行ってくれるとありがたい』

たしかにこの件で、俺がラトロワ中佐とジャール大隊のために動くのは難しい。

外国の衛士である俺が彼女らを助けたならば、国連や日本とソ連との関係に良くない亀裂ができるかもしれないし。

何より上総まで巻き込んじゃう。

心残りではあるが、ラトロワ中佐の言う通り何もなかったことにして行くか、と思ったときだ。

『待つてくださいラトロワ中佐』

いつの間にかゼータが飛んできて、この場に降り立った。

忘れていたが、この会話は上総も聞いていたんだった！

『話は聞かせてもらいました。ラトロワ中佐、よろしければ生き残ったジャール大隊の身の振り方は、わたくしに任せていただだけませんか？』

巻き込む心配なんていらなかったよ、コイツ!!

◆◇♣♥◆♠◆♣♥

山城上総Side

『話は聞かせてもらいました』なんてセリフ、言う日が来るとは思わなかったね。

前世で見ていた刑事、探偵ドラマじゃ定番だけどさ。

ま、ドラマヒーローのセリフなんて言ったんだ。活躍するとしますか。

「アーガマ01、いえ白銀。あなたはどうします？ わたくしはどうしてもジャール大隊の皆さんを助けるつもりですが。たとえばあなたが止めても」

『……………いいだろう。彼らの境遇には、同じ衛士として思う所が多すぎる。俺も乗った。だが、どうするつもりだ？』

「前に言ったことを実行しましょう。ここからペドロパブロフスク・カムチャツキー基地は目指さず、彼らを連れて日本へ行きます」
『そうか日本か！ 肅清に暗殺なんて手段をとった手前、たしかに

国外に出れば手は出せなくなるな。ラトロワ中佐、それでよろしいですか?』

『ああ、本当に私らを連れていってくれるなら頼みたい。しかし何故だい山城少尉? 私らを助けても危険しかないよ。こんな危険をおつてまで、どうして私らを助けてくれるんだい?』

「許せないんですわ。命をかけて戦っている戦士の背中に、味方顔をして撃ってくるような奴らが」

あの明星作戦の日の記憶がよぎる。

命をかけて戦っていた衛士や兵士のいる横浜に、アメリカは予告もなしにG弾を落とした。

結果、オレのいた傭兵部隊エウーゴの主催者ブレックスはじめ多くの仲間が死んだ。

さらに、それを知らせに来てオレの命を救った鳴海と平も死んだ。

あの日のことは、抜きがたい怒りとなってオレの心に突き刺さっている。

理性的でないのはわかっている。

だが命をかけてBETAと戦ってきた連中を、自分らの都合が悪いからと抹殺するような奴らは、どうしても許せない。危険くらい買つてやるさ。

『……………アンタにも色々あつたみたいだね。ともかく助けてくれるのはありがたい。しかし、どうすんだい? こちらは生き残ったのは総勢十五人。生存としちや多くはないが、それでも安全な場所へ行くには多すぎる人数だ。こちらで動かせる機体は私のものだけだし、推進剤も残つちやいない』

そう、ここには彼らを運ぶ足がない。

車両もすべて撤退に使われて、一両も残ってはいないとのことだ。だが、それも考えてある。

「その機体は捨てて、全員を巡航形態になったこちらの機体の上に乗せます。そしてオホーツク海を渡り、日本の北海道へ渡ります。とりあえずそこで身の振り方は考えましょう」

『はあ? 日本? いくら地図上は近いからって、戦術機でここか

ら千キロ近くの距離を渡るって言うのかい？ 正気かい！」

「可能ですわ。このゼータも、巨大BETAとの戦闘で良質なG元素を食べたので……………いやともかく、こうなっては時間はかけられません。刺客がやられたことでソ連が調べに来る前に急いで国を出ましよう」

話は切り上げ、さっそく作業にかかった。

破損した戦術機から管制ユニットを取りだし、中の機材を取りだして防風殻とする。

それ二つを作り、中にジャール大隊生き残りを入れたら準備完了だ。

基地の滑走路にゼータとリガンダムは立って発進準備にはいる。

シート隣のシロツコさんは黙ってオレの作業を見ていたが、発進前にようやく聞いてきた。

「そちらの言語がわからないので、何がおこっているのか説明が欲しいのだがね。君は軍から脱走でもするのかね？」

「いいえ。脱走はわたくしではなく現地の部隊の人達です。というより粛清されかけたので国から逃げなければ殺される、という状況ですが」

「なるほど。そういったことをする連中は、どこの時代と世界にもいるな。しかし彼らを助けることは、君も危険ではないのかね？」

「まあ、大丈夫でしょう。交渉に使えそうなお宝はいっぱい積んでいますし。ウチの上司はこういったことには強いそうですので期待してます」

不安はあるが、ラトロワ中佐はじめジャール大隊の子供衛士達を救う決心に揺らぎはない。

こんなことをする連中であろうと、人類の守り手・衛士としては銃を向けるわけにはいかないのだ。

それでもせめてもの意趣返しとして、ジャール大隊の生き残りは必ず救ってみせる！

「では行きます。アーガマ01、ウェイブライダーが安定飛行したら乗ってください。くれぐれも振動はあたえず気をつけて」

「アーガマ01了解。できる限り低速飛行でたのむ」

白銀のレガンダムは背中にはジ・Oの大型ビームライフル。両脇左右にはジャール大隊の入っている防風殻二つ。見るからに重そうだがんばれハロ!

ゼータは基地の滑走路から発進し、空中でウェイブライダーに変形。

そこにバーニアで空中にとどまっていたレガンダムは、タイミングを合わせ騎乗。

——ドスンッ

「ううつく! こ、根性おおお!」

「うん? ペットロボから勝手に声が出たが、どうしたのかね」

「いつ、いえ翻訳機能がさっきの振動を音声と誤認識して、勝手に翻訳してしまったのですわ! お気になさらずに」

やれやれ。ハロの奴、シロッコさんがいるのに声が出てしまうくらいキツイのか。

頼むから海には落ちないでくれよ。

「では行きます。日本へ!」

大きな不安を抱えつつも。

暗くなりはじめた空を飛び、進路を南南東へ向け日本へ。今夜は夜間飛行だ。

この日八月十九日。

それはオレ達にとっても世界にとっても、大きな転換点となった日であった。

第5章 青のトータルイクリス

73話 香月夕呼の憂鬱ふたたび

香月夕呼 Side

「まったく。大仕掛けしといてとんだ空振りよね。クーデターなんて言えないほど小規模な小競り合いで終わって、A-01を動かすまでも無かったわよ」

アタシは前日、8月19日の情報をまとめて持ってしてきた鎧衣にグチった。

その情報量は膨大なもので、とても一日に起こった出来事だけをまとめたものとはとても思えなかった。

それほどに昨日のあの一日には大量の出来事が起こったのだ。

帝国若手将校の決起とそれに付随する米国スリーパーの顛末。

横浜沖合の米第7艦隊の消滅。

北東ソ連に現れた大陸を超えてレーザーを照射する新型大型光線級BETA。

それをたつた二機で降したガンダムの活躍。

それに反応して動いた各国政府や組織の動き。

『泰山鳴動して鼠一匹』とはこのことですね。骨折り損は長年準備してきたこちらですよ。クーデター前に頭が潰れたせいで、手足たるスパイ、スリーパーは眠ったままでした。また何か新しい手を考えねばなりませんなあ。沙霧直哉には悪いことをしました」

彼、予定通り律儀に決起はしたんだけど、連動して動くはずの各所がまったく動かなくて、早々に帝国軍に鎮圧されちゃったのよね。

それで自分の部隊ごと東南アジアへ逃げたって話だけど、これはもう終わった話。

北米やらソ連やらに出向させたガンダム乗り二人が思わぬ活躍をしてしまったせいで、政治的状况どころか世界が大きく変わってしまったせいで、急激に忙しくなってしまったわ。

「それで？ 帝国情報省としてはどうするつもりなの。スリーパー
じやなく第5計画大元の方がまるごと潰れちゃった場合は」

「さて。そんな異常事態をカバーする予備作戦など存在しません
なあ。ただ、米国の方は第5計画の復活に十年はかかるでしょう。事
実上、消滅したも同然です。おめでとうございます」

「そうね……人間方面の最大の敵が消えちゃったのよね。実感なく
て感謝もできないけど」

米艦隊を消滅させる元となったHSS Tの大爆発。

あれは本来、ここ横浜基地を狙ったものだったそうだ。

危ない所だったけど、それが一転、自分を射殺す矢に変わった故に
起こった出来事だそうだ。

「戦場の幻、ロマン戦術機が自ら麾下きかに加わったことといい、最近の
博士はツキまくっていますな。この調子でいけば第4計画も期待で
きるものとなりますかな？」

「そんな簡単じゃあないわ。たしかに第5推進派は消え、北東ソ連
に現れた最大級のレーザー級も倒された。当面最大の敵が消えたこ
とで平和になったわ。でもそうになると、他の勢力も元気になるのよ
ねえ」

「ええ。今はかつて無いほど米国の力は弱まっています。各地で米
国に頭を押さえられていた勢力は、この機に乗じようと元気なもので
す。巖谷中佐も反米派が勢いづいて大変そうですよ。『この機にアメ
リカとの関係性を見直してソ連と手を組もう』などと主張して」

「世界各地でも難民テロが活発化。こうなると、かつての『傲慢国家
アメリカ』のありがたさが分かるわね。といっても軍の一部が削れた
だけで、アメリカの持つ政治力、生産性、軍事力が無くなったわけで
もないし。いずれは復活するでしょうけどね」

「博士の目下の問題は『プロミネンス』ですか？ 驚異的戦術機
の所有の責任者として」

「もう嗅ぎつけたの。さっき話が来たばかりだったのに」

「なに、脅威的BETAを降したガンダムの活躍を見れば、戦術機派
が活発になることは当然。つまりはその中心であるプロミネンスが

活性化するということです。で、どのような内容ですか？」

「ハルトウィック大佐からよ。要するに『オルタネイティブはやめてプロミネンスに加われ』ですって」

「はっはっは。それは大胆ですな、博士にそのような申し出を送るとは。まあ、あのガンダムの活躍を見れば、博士にうさんくさい研究を続けられるより戦術機開発の方に力を出してもらいたいでしょうな」

「うっさいわよ。だいたいあのガンダムはアタシが作ったんじゃないし。それより、ただ蹴っておしまい、とはいかないのよねえ。どうやら国連上層部の意向もあるようなの」

「それは……どうなさるおつもりで？」

「とりあえずハルトウィック大佐に一度会って話しあうことは避けられそうもないわ。手は打っておくけどね」

「それで原因となったガンダムと搭乗員たちはどうなさいました？彼らも関わることになるでしょうが」

「新型を討ったあと行方不明らしいわ。まさかやられたとは思わないけど、どうしたのかしらね」

「そうですね。ハルトウィック大佐と会談するまでに見つからなければ面倒になりますな」

そのときピアティフから内線がはいった。

彼女にしては珍しい焦ったような声で、衝撃的なことを告げた。

『博士、ただいま白銀少尉から連絡が参りました。博士とお話したいそうです。お繋ぎいたしましょうか』

「なんですって！ いえ、ちよつと待ちなさい」

「鎧衣、今日はもう帰りなさい」

「なにやらまた事態が動きだしそうですね。では、私はこの辺で鎧衣が完全に退出するのを確認すると、すぐさま白銀に繋がせた。

「白銀！ アンタ無事だったの?! ソ連にあらわれた新型BETAはどうなったのよー」

『まあ苦戦しましたが、新型は上総が倒しました。ちよつと事情があつて部隊には帰らず、日本の北海道に來ちやっただんですが』

巨大光線級の撃破は情報が入っていたが、山城がやったのか。それと北海道にいますということは、戦術機でオホーツクを越えたのか？

相変わらず驚異的なスペックの戦術機ね。

「とにかく迎えを出すわ。山城も無事でそっちにいるんでしょう？」

『いいえ、上総は事情があつて帰投が遅れます。別方面に行つているので』

「はあ？ そんな大事のあとだつてのに、どこにいるつてのよ」

『インドネシアです』

74話 ブレックスの遺産

インドネシア共和国ジャカルタ

「この街もなつかしく思えますね。よく、ここでブレックスの政治活動につき合わされたものです」

「でも、あの時よりお店が少なくなっているね。売っている物も品質は悪いのに値段は高いし。やっぱり戦況が悪化して農耕地が削れてる影響だろうね」

オレ達は北海道で白銀と別れ、ここインドネシアに渡った。

理由はソ連亡命者のラトロワ中佐と元ジャール大隊の問題だ。

最初、彼女らを香月博士にまかせようとした。

しかし現在ソ連は対日外交に力を入れており、それに乗っかる派閥も力をもっている。

つまり日本に連れていくと外交取引の道具にされる可能性が高いので、連れていけないのだ。

そこで考えたのが、古巣である大東亜連合だ。

ここは昔組んでいたブレックスが頻繁に政治活動をしていた地で、その恩恵でオレにも、それなりの人脈というものがある。いわば“ブレックスの遺産”だ。

元ソ連軍人で肅正されながらも生き残った佐官なんて、どこであろうと手に余る。

しかし雑多な人間の集まる大東亜連合なら身を隠す場所もあるだろうと、ラトロワ中佐達の身柄を預かってもらう地にここを選んだのだ。

そしてとある裏通りの片隅で、とある男と会った。

「遅いですわよ、カイ・シデンさん」

「とつくに来ちゃいたがな。アンタの様子を見ていたのさ。その妙なメカで誰かと話してたようだが、誰なんだ？」

そしてその一歩。

それがこのジャーナリストのカイ・シデンさんに会うことなのだ。

彼は“ジャーナリスト”という肩書きながら、民間の企業が広報に使ったり情報収集を頼んだりしている。いわば民間の諜報員。

ちなみに「Zガンダム」のあの人と名前は同じだけど別人。念のため。

あと『妙なメカ』とはハロのことだ。

「いちおうバックアップをしてくれる人がいるのです。安全にはそれなりに気を使っていますので」

「そうかい。ま、そいつのことは聞かねえでおこう。再開を祝して一杯やりてえとこだが、こんな場所じゃな」

「もう正規の衛士ですから飲めませんわよ。体を常に最高の状態にしておくことが衛士の務めですから」

「正規じゃなくても昔つからアンタはそうだったろう。ま、いいよ。ソ連に現れた怪物BETAと戦って生きててくれて、その直後に逢えただけで幸運だ。いいネタもらえそうじゃねえか」

「知ってましたの？ ソ連に現れた超大型BETAのことも、それとわたくしが戦ったことも」

「まあな。いちおうアンタの動きは絶えず追っている。大東亜連合から離れた後もな」

おそらくそれは、ブレックスとつき合いのあった大東亜連合の大立者からの依頼だろう。

つまり彼はオレの望む人に繋がっている。思った通りだ。

「で、その怪物はどうした。続報が来ないんだが、どうなったか知らないか？」

「わたくしの頼みを聞いていただけたら教えますわ。【ウォン・リーさん】に会わせていただきたいのです」

「おいおい大東亜連合財界の巨魁じゃねえか。大東亜連合に戻るつもりかい？」

「いいえ、別の用件です」

「だったら、その情報だけじゃ不足だな。アンタ、怪物と戦ったってんなら、そいつの写真なんかも取ってんだろ。出しな」

「二応、ウォン・リーさんへの交渉材料なんですけどねえ。詳細な分

析なんかは出せませんわよ」

「ああ、その辺の線引きはだいたい分かっているさ。ちよいとハデな記事作るネタをくれりや、それでいい。アンタがいなくなって大変なのはエウーゴだけじゃない。こちとらジャーナリスト稼業も同様だよ。読者が喜ぶハデな戦勝記事なんて、遠い昔のことになっちまったしなあ」

エウーゴか。オレとブレックスがいなくなった後どうなったか気になるが、聞いたら追加の情報料とか取られるかもしれない。スポンサーをやっているウォン・リーさんに聞けば良いか。

「わかりましたわ。動画をプリントアウトしてきますので、待っていてください。迫力ある絵を選んで差し上げますわ」

そう言って立ち去ろうとした。

「おっと待て。怪物がどうなったか教えろ。それも条件だろ」

「苦労しましたが倒しましたわ。武勇伝を語れないのがじつに残念です」

「マジかよ……………アンタが大東亜連合に戻ってこないのが本当に残念だぜ。面白え記事にや事欠かねえだろうによ」

数時間後、ウォン・リーさんと会う段取りをつけてもらうことに成功すると、ラトロワ中佐を待たせてあるホテルへと戻った。

「というわけで、明日、大東亜連合の大物ウォン・リーさんと会うことになりましたわ。ラトロワ中佐、あなた達を大東亜連合に預けます。よろしいですね？」

「ああ、私らに出来ることといえば戦うことだけだ。ここの傭兵にしてくれるなら、それでいい。ヤマシロ少尉、感謝するよ」

つづいてラトロワ中佐にいつもくっついていっているイワノヴァ大尉も言った。

「わたしからも感謝を述べる。ヤマシロ少尉、本土での皆の無礼はどうか許してほしい」

「そんなこともありましたわね。それでシロツコさん」

オレは予定外にここにいる問題のその男に声をかけた。

本来ならこの【パプテマス・シロッコ】は、白銀といっしょに香月博士の元へ行く予定だったのだ。

それが何故か本人の強い希望でこっちについてきてしまったのだ。

「明日、本当にあなたもついてくるつもりですか？ わたくしとしては、早く香月博士と会ってもらいたかったのですが」

「なに、この世界のことをよく知るためには時間をかけても回り道をすべきだと思ったのでね。この世界の有力者というのにも興味があるのだよ」

彼はアニメでよく見たうさぐさい顔で笑った。

『本当に彼の言う通りに行動させて良かったのだろうか』と少しだけ不安になった。

75話 傭兵団エウーゴの未来

その翌日。

オレはラトロワ中佐とシロッコを連れて大東亜連合の巨魁ウォン・リーさんの邸宅を訪ねた。

彼は名前の通り華僑系。東南アジア財界の大物で、戦術機はじめ軍需物資の生産供給を担う財団企業の前会長であり、傭兵団「エウーゴ」のスポンサーでもある。

「Zガンダム」の同姓同名のあの人は財団幹部だが、この人は財団そのもの。年もかなりいつている老人だ。

応接室に通され数年ぶりに会うこの人は、やはりかつてのようなスルドイ目つきの老人だ。

「よく生きて帰ったものだな。いや、それどころか新種の巨大BE TAを倒したともいう。いったいどのようなようにして広範囲レーザーをくぐり抜けた？ それに攻撃できるほど接近できたとしても、相手は20kmもの巨大生物。ミサイルでも通常弾頭では100発すら足りんだろうに、いかにして仕留めた？」

「ウォンさん、ずいぶん詳細に知っていますわね。アレが出たのは2日前のソ連北東部アヴァチャ山付近。いくら何でも情報が早すぎませんかしら？」

「ソ連がめずらしく親切に情報を流してくれたのよ。アレの進行方向によっては、ここ東南アジアにもレーザーが飛んでくるとな」

「……ソ連がですか。アレを仕留めた経緯については、データとしてまとめております。それを提供する代わりに、わたくしの友人たちを頼まれていただきたいのです。ソ連からの亡命衛士達なのですが、こちらのラトロワ中佐が代表となります」

「ふうむソ連からの亡命者とな。ちと厄介だが良からう。送る先はやはり戦線となるが、使い捨てるような扱いにならぬよう手はうってやろう」

良かった。話は案外簡単にまとまった。

あとはもう一つの気にかかる事。傭兵団エウーゴのその後だけだ。

「ありがとうございますウォンさん。ではもう一つ聞きたいのですけれど。わたくし達がいなくなった後のエウーゴはどうになりました？」

途端にウォンさんは嫌そうな顔をした。

「エウーゴか。あれは今月中に潰す。戦闘後のBETA焼却処理すらまともにやれんクズの集団だ。穀潰しのスポンサーなどいつまでもやっておれんよ」

まあそうだろうな。元々ゼータの戦闘力と、ブレックスの政治力及び人脈でできていた組織だ。

しかし……………

「あの、そこで働いていた人達は……………戦災孤児とかもかなりいたはずですが？」

「知らんな。そこまで責任はもてんよ。外間もあるので、子供達に関しては孤児院の世話くらいはしてやる。いずれは銃をとって戦線に行くことになるだろうがの」

そうだろうな。わかっただけだが、やはり現実を聞かされるのは辛い。

けど、オレにはやる必要がある。あの子供達を救うためにエウーゴに戻るわけにはいかない。

だけど……………だけ……………！

「お待ち下さいご老公」

ふいに横合いから電子音の声がかかった。

翻訳機越しに話すシロッコだ。

「私達の身の振り方についてですが。私とラトロワ中佐。およびその部下の者達をそのエウーゴの指導者として送っていただけだと思います」

私達って何？ ウォンさんに預ける亡命者の中に、あなたは入っていないだけ？

「聞いていなかったのかね？ アレは潰す。こちらも利の出ない組織など、いつまでも抱えてはおれんのだよ」

「聞いた上で言っております。その組織の墮落は優れた指導者の不

在によるものです。故に私とラトロワ中佐らで立て直しましょう。ウオン・リーさんにとつても、その組織が再び利を生むようになるなら、それが最善でしょう」

「フム………いいのかね？ あれは今やならず者の集団だぞ。自信があるというなら、まだ少しマシな場所の地位を用意してやることもできるが？」

「いいえ是非そのエウーゴを。でなければ意味はありません。これはこのカズサへの恩返しなのですから」

話の展開についていけずマヌケ面をさらしていたオレは、『恩返し』という謎ワードでさらに分からなくなった。

シロツコはいかにもな好青年のような顔をして弁舌を奮う。

「どうやらカズサはその組織にかなりの思い入れがある様子。であるなら、彼女に命の救われた私のできる恩の返し方は、その組織の立て直しでしょう」

い、いや、アンタにそんな気を使っていたかなくても。

……ハッ！ しまった、これがこの男の狙い？

この男、最初からおとなしく香月博士の元へ行く気など無かったのだ。

そしてこっちの世界の自分の拠点となるような場所を探すためにオレについて来て、まんまとそれに当たる場所を見つけた。

それがエウーゴ！

「ラトロワ中佐、君はいいのかね？ 彼に勝手に決められているが」

「まあ、それについては少し引つかかる所はありますがね。しかし『山城少尉への恩返し』というなら、やらないわけにはいかないでしょう」

「え？ あ、いや別にわたくしは恩なんて着せるつもりはありませんが」

その男のキレイ事には真っ黒な裏があるんだって！

ジャミトフさんとかまんまと乗せられてヒドイ目にあってるんだよ!!

「ま、私らはどこへ行くにしても苦労はするでしょうからね。であ

るなら大きな借りのある彼女のためにする苦労の方がまだ良さそう
だ。私ら元ジャール大隊もそこへお願いいたします」

「『恩』……か。それもまた人脈。そういった人の繋がりは嫌いでは
ない。良かろう。エウーゴには今しばらく猶予をやろう」

あ、ああつ！

結局、シロツコさんとラトロワ中佐と元部下の行き先はオレの古巣
エウーゴに決まった。決まってしまった。

何てことだ。野心深き男を野に解き放ってしまった！

それにしても「パプティマス・シロツコ」がエウーゴの指導者にな
るとか、何の冗談だ。

最後にウオン・リーさんはシロツコさんに聞いた。

「ところで君は何語で話しているのかね？ 私は主要国家はじめ地
方国家の言語等もそれなりに精通しているが、君が使っている言語は
はじめて聞く。系統もわからん」

「フツ。どこにも存在しない世界の言語ですよ。それを明かすのは
しばらくお待ちください」

76話 刀を振る少女

日本 横浜基地格納庫

オレはゼータで新設された横浜基地へ到着。

本当に白銀の言う通り、一年もたたずハイヴ跡地に立派な基地が建設されたよ。

明星作戦の時期がズレたせいで竣工時期も伴ってズレこんだらしいが、この基地が対BETA作戦の中心になるそうだ。

「大したものですね。基地に感動する余裕がないのが残念です」

シロッコにまんまと出し抜かれ、彼を連れて来ることが出来なかった。

彼にしてみればここは言葉も通じない、何一つ身分もない異世界。大したことは出来ないだろうとタカをくくっていたのがマズかった。

やはり彼は宇宙世紀最大の天才。甘く見るべきではなかった。

「よオ上総、ようやく到着したか」

格納庫にはしばらくぶりの相棒が待っていた。

「あら白銀、出迎えてくれましたの。じつはシロッコさんを連れてくる事が出来なくなりました……って、どうしたんですの!?!」

白銀を見て驚いた。

彼はすっかり憔悴してヒドい様子だった。多分今のオレ以上にヒドい。

「何かあったんですの白銀？ まるで取り返しのつかない失敗をしたような顔ですわ。この表現が適切かは分かりませんが」

「いいや、まさにその通りだ。アメリカ行きに加えソ連にまで足を運んだせいで、どうしようもなかったとはいえ。何でこの可能性を考えなかったんだ!」

「とにかく話してみなさい。何があったんですの?」

「二〇七B分隊が……評価演習に落ちた。糞、俺がいなきやダメだったのか?」

評価演習っていうのは、総合戦技評価演習のことだな。

訓練兵が衛士にふさわしい知力技術体力を身に着けたかをはかる、

いわば試験だ。

でも二〇七B分隊って？　それが落第したからって、どうして白銀がここまで？

「……ああ、思い出しました。たしか白銀が前のループ世界で所属していた訓練部隊でしたわね。それが評価演習に落ちたって……その訓練兵の方々、衛士になれませんでしたの？」

「そうだ！　ああ糞、俺は委員長と彩峰の仲をどうにかしなきゃいけないかったのに！　無理にでも一時帰国の許可を取り付けるべきだった!!」

こんな取り乱した白銀見るのは初めてだ。

年齢的には上総より年下なのに、いつも歴戦のような顔をしていた奴なのに。

「その方たち、実力が足りてなかったんですの？」

「いや、個人の力量は、みんな訓練兵の枠を超えて抜きんでている。だが、その分隊長と部隊員の一人がひどく仲が悪くてな。演習中に部隊が分裂して失敗したらしい。前までの時間軸では、俺が苦労して解消したんだが……今回は俺がいらないせいで、どうにもならなかった！」

「まあ、そう気を落とさないでください。香月博士の帰還の報告はわたくし一人で行きます。白銀は気分を落ち着かせてからいらっしやい」

オレには白銀をしばらく休ませることぐらいしか出来ない。

その訓練部隊、白銀にとっては大切なものらしいが、オレもシロツコの事があって、白銀の悩みを考えてやる余裕がない。

「ああ糞、とにかく俺はしつかりしないと。今から重要で……大事なアレが始まるんだし」

「では、また後で」

香月博士のいる場所を聞き、白銀と別れて基地舎へと向かった。

訓練場なんてのも出来ていて、そのグラウンドを通りかかった時だ。

その片隅で、模擬刀で一心不乱に素振りしている少女を見た。長い髪を後ろでポニーテイルにまとめ、凜としたまなざしは清らか。

「綺麗ですね……」

オレはその少女に目を奪われた。

顔と姿形が凛々しい彼女だが、何より目を奪われたのはその剣筋の美しさだ。

体幹は微動だにせず、振り下ろす刀はまったく同じ剣筋を綺麗になぞる。

オレもそれなりに剣術は使えるが、こんなに綺麗に刀を振れるかは自信がない。

しかし、ひたむきに刀を振る彼女だが、哀愁の陰りが顔に差している。

「どうもこんにちは。とても綺麗な剣筋ですね」

つい声をかけて話しかけると、少女はこれまた綺麗な一礼をする。「恐縮です。ですが自分の剣など、とても褒められたものではありません。最近己が未熟を痛感する出来事があり、その迷いを振り切るためにやっているだけの事ですから」

「では、わたくしがその迷いを消すお手伝いをいたしましょう。一手お相手いたしますわ」

どうにも素の山城上総というのは、けっこうなチャンバラ好きらしい。

体の底から出る衝動そのままに、そんな事を言った。

「は？ ですが模擬刀はこれ一本きりですが」

「では心の剣でお相手いたしましょう。いかが？」

オレは空の手を刀を持つような形にし、切っ先を彼女に向けるように構える。

それなりの剣の使い手は、刀の本体を持たずともイメージの刀を作ることができるのだ。

「これは……見事な心剣でありますな。これほどのものを見せられては、自分もやる気を出さざるを得ません。一手ご指南いただきま

しよう」

彼女もやはりかなりの使い手。

オレの闘志を感じ、イメージの刀が見えている。楽しくなってきた。

「交える前に名を聞いておきましょう。自分は御剣冥夜。ここの訓練兵でありましたが、先日の評価演習で不適格を言い渡された恥ずべき未熟者です」

ああ、この娘が白銀の言っていた分隊の訓練兵の一人か。

奇妙な縁が出来たかもしれない。でも、この娘となら友達になつてみたいな。

「よろしく御剣さん。わたくしの名は……」

——「待てい!!」

名乗っている最中、突然横合いから制止の声がかかった。

見ると、帝国斯衛の制服を着た四人の女性がオレを険しい表情で見ながらそこに居た。

「月詠……中尉。何の真似です」

「お退がりください冥夜様。この者、素性が知れません」

何だろうね、素性が知れないって。

そりゃアンタとは初対面なんだから、こっちだってアンタなんか知らないよ。

しかしこの訓練兵のお嬢さん。「様」付けとは、どこぞのお偉いさんの娘か何かかね。

「おい、貴様」

リーダー格の赤い斯衛服を着て髪を後ろでまとめている女性が、オレに乱暴に話しかけた。

「何でしょう。何かわたくしに咎められることでも？ いえ、それよりどうして国連軍の基地に斯衛軍の方がおられるのです？」

「我々とはある事情で出向している。詳細は語ることは出来ん。それより貴様は何者だ？ 基地で貴様を見かけたのは初めてだが」

「はあ？ これだけの基地ですもの。見ない顔の人間くらい居るで

しよう。それともあなた方は、基地の人間すべてを把握してるとでも？」

「把握している。その上で聞こう。貴様はたしかにこの基地に居たことはなかった。姓名と所属を答えろ」

マジか？ 何で帝国斯衛が基地の人間全員を把握してるんだよ。つまりオレは不審者と思われて誰何すいかされてるワケね。

「失礼いたしました。自分はA-01連隊所属の少尉、山城上総と申します。アメリカおよびソ連での任務から本日帰って参りましたので、今日初めてお目にかかります」

「なにッ!!？」

「この者が……あの噂の？」

「貴様が秘匿戦術機Zの……搭乗者か！」

日本じゃけっこうな噂になってると聞いたが、彼女らも知っていたか。

ちよつと厄介な連中に知られてしまったかもしれない。

「……なるほど、ソ連帰りか。あちらでは大活躍だったそうだな。大変なBETAと遭遇したそうだが」

「任務を話題にはできません。当然あちらで遭遇したものについても、ここでお話しはできませんわ」

「そうだな、それが軍人というもの。理解はする。だがここで会った縁を生かし、多少なりとも貴官を知っておきたい。先ほどの勝負、私が代わりをつとめよう。巴、模擬刀を持って」

斯衛の一人が命令を受けると同時、風のように駆けてゆき疾風の如く二本の模擬刀を携え戻ってきた。

そして赤服斯衛の元に跪いて模造刀を両手で捧げ渡す。まるで忍者だね。いや、本物か？

さらに私にももう一本の模擬刀を握らせる。

赤服の彼女はそれを見ると、オレに切っ先を向け青眼に構えた。

「わが名は帝国斯衛中尉【月詠真那】。噂に聞くZ搭乗者の山城上総少尉。一手受けていただく。いざ、参る！」

ああ、もう！

まったく友達になりたくない奴らとまで、奇妙な縁が出来ちまった
ぜ！

77話 落ちこぼれ分隊

ビョオオオツ ビュンツ シュバツ

ああ、まったく。

こんな勝負。負けても良いはずなのに、いつの間にか本気になってこの月詠さんに斬りかかっている。

この月詠さん、かなりの殺気を放つので、長年のBETAとの戦いで培われた防衛本能でこうなってしまうているのだ。

BETAとの戦いは手数勝負。囲まれたら終わり。だからこそ必死に前に出る。

ビュンツ ビュビュンツ シュバツ ズオオオオツ

「すごい……何て攻めだ」

「あの真那さまが、まったく防戦一方だ！」

「まさに修羅。これが世界最強の戦術機を駆る者の戦いか！」

この月詠さん。技術がオレよりはるかに高いから、受けにまわったら勝ち目がないんだよ。

だからこうやって怒涛に攻めて、相手を封じて戦うしかない。

ビュンツ ビョオオツ ギュンツ シュババアツ

「くっ、すさまじい。だがこの月詠真那、このまま終われん！」

「うっくー！」

バキヤアアアツ

月詠さんは渾身の一刀を放つ。それを踏みとどまり、自分も渾身の一刀で受ける。

結果、双方の模擬刀は折れて砕け、勝負は終わりとなった。

「すまなかつたな山城少尉。だが存分に楽しませてもらった。では、我々はこれで」

月詠さんはそういうと、部下三人を引き連れ去っていった。

何なんだまったく。あー疲れた。

パチパチパチパチパチ

拍手の音が聞こえたので振り向くと、いつの間にかそこにあどけない顔の二人の訓練兵の娘いた。

一人はショートカットで男の子かと思っただくらい胸がない。

もう一人も胸はあまりないが、長い髪をツインテールにしててかなり女の子らしい娘だ。どちらも、かなり背が低い。

「すごいすごい！　こんなすごい剣術試合、はじめて見ました！」

「あれを見ただけで、山城少尉がどんなすごい戦いをしてきたかが分かるよ。さすが英雄さん！」

見かけ通りかなり子供っぽい娘たちだ。御剣さんがたしなめている所から、どうやら例のB分隊の仲間のようなのだ。

「紹介します。私と同じ二〇七B分隊に所属する仲間で、鎧衣美琴訓練生と珠瀬任姫訓練生です」

紹介された二人は共に敬礼で挨拶をする。

見た感じ、二〇七B分隊の隊員は素直で良い娘たちばかりだ。

こんな娘たちの部隊が、何があつて分裂なんてことになったんだろう？

無酸素運動で試合をしたせいで動けなくなってしまった。なので、しばらく休憩だ。

鎧衣さんが水を持ってきてくれたのでありがたく頂く。

「ふうっ。BETA相手の剣を生身でやるとキツイですわね。元の型なんて跡形もありませんし。こんな荒んだ剣しか出来なくなつた自分には、御剣さんの剣がまぶしく見えますわ」

「私には山城少尉の方がまぶしく見えます。その剣は御国を護り戦ってきた証。国に何一つ献身できず、ただ剣を振るしか能のない自分が恥ずかしく思えます」

「そうだね……ボクたち、もう衛士にはなれないんだよね」

「お父さんに何て言おう。任姫、ぜったい衛士になつてくるって言つたのに」

うつむいた彼女らの中で、オレは御剣さんの目に注目した。

そして慰めるより、思ったことを口にした。

「御剣さん。あなたは言うほど迷ってはいませんか？」

「は？　いえ迷いだらけです。己のなす事も生きる先も何も見え

ず、ただ感ってばかりの日々を送っております」

「ふふっ。そんな人間は、そんな目をしてませんよ」

「目……ですか？」

「あなたの目。迷いも不安もない、まっすぐな綺麗な目です。何も見えずとも、未来を見据えている者の目です」

「そのような……過分な……」

「きつと今は刀を振る時期なのでしょう。たかが若い頃の一時のつまづき。その目があれば、またやり直せますよ」

「ありがとうございます。そなたに感謝を」

「ところで皆さんの帰省はいつに？ 訓練生の決まりとして、すぐに基地を出なければならぬのでしょうか？」

「いえ。それが二〇七B分隊にはいまだ解隊の命令が出ていないのです。それ故、皆も帰ることも出来ず基地にとどまっております」

「は？ 衛士訓練生が衛士に失格したなら、上はすぐさま帰らすのが普通のはずだろ？」

山城上総の訓練生時代の記憶にも、不適格で帰らされた訓練生の光景が色濃く残っている。

「うん、そう。訓練もないし、ボクは任姫さんと基地の見学ばかりしてるよ」

「榊さんは、あれから自室に閉じこもってばかりで心配です。彩峰さんは……多分屋上かな？」

この措置はちよつと気になるな。

けどこれを利用して、この娘らをひどく気にしている白銀のために、希望でも入れてみるか。

「もしかしたら、あなた方の部隊は、まだ何か役割を与えられるのかもしれないですね。その時に備え、心身はきたえておくべきでしょう」

「む……そう思われますか。鎧衣、珠瀬。自らを責め気落ちするのはもう十分であろう。二〇七B分隊は、これより有事に備え自主訓練というふう」

「はい！ 任姫もそう思います」

「榊さんと彩峰さんも呼んでこようよ。また、みんなでやり直そう

！」

よしよし、元気になったな。

元気に訓練にはげむこの娘らを見て、白銀も元気になればいいな。

「がんばってください。それじゃ、わたくしはもう行きますね。香月博士への報告がだいぶ遅れてしまいました」

「山城少尉も任務ががんばってください！ 衛士になれなくても、ご活躍を応援してます！」

本当にあどけない良い娘たちだな。

白銀は前の時間軸で、この娘たちと共に訓練や任務をしてきたのか。ちよっとうらやましい。

少しだけ白銀の気持ちがあつたような気がした。

78話 ブルーフラッグへの招待

オレが香月博士の執務室に来たときには、すでに白銀が到着していた。

そして正面の執務机の向こうで座っている香月博士の傍らには、見知らぬ女性士官がいた。

ふわふわの長いくせつ毛をしていて、大人の女性なのに『可愛い』という表現が似合う人だ。

(彼女は神宮寺まりも軍曹。夕呼先生の親友で訓練生の教官だ)
ふーん、まりもちゃんね。

しかしオレ達の新任務の通達に、彼女を同席させている訳は？
とか聞こうと思ったのだが――

「遅かったわね。勝手に帰還を遅らせた上に、ここに着いてからもこ
うも遅れるなんてね。アンタ、たるんでるんじゃない？」
遅刻を怒られた。悪いのはみんなあの月詠真那なんだよ。

「すみません。じつは……」

「衛士が言い訳しない！ たしかにアンタが為した巨大光線級の撃
破も、頭脳級サンプルの鹵獲も、人類史上に残る業績よ。でもそれが
衛士がたるんで良い理由にはならないわ。たるんだ衛士は自分を殺
し、作戦をも殺すわ」

「も、申し訳ありませんでした！ 山城上総、たるんでおりましたわ
！」

なんか久しぶりの香月博士、キャラが違ってないか？

オレ達がアメリカ、ソ連に行っている間に真面目人間に目覚めたと
か？

「ねえ、まりも。こういった場合、アンタの訓練兵どもにはどういつ
た教育をするの？」

「はっ。ランニング十五キロ、腕立て腹筋五百回が妥当かと」
がはあッ！ このまりもちゃん、見かけによらず鬼教官だ!!

「それが衛士の妥当だそうよ。山城、話が終わったらやって来なさい」

「は、はい。慎んでランニング十五キロ、腕立て腹筋五百回をやらせていただきます」

くううつ。今、訓練にはげんでいる二〇七B分隊の娘達と走ろうかな。

ちよつとは楽しいだろうし。

「さて。じゃ、はじめのわよ。最初に軽く世界情勢の説明からするわ。まずアンタが巨大光線級を撃破した日、もう一つ大きな事件が起こったわ。オルタネイティブ5が消えてなくなったの」

????

「……は？ いま何とおっしゃいました？」

『消えてなくなった』と言ったのよ。米軍第七艦隊は横浜沖合での演習中にHSS Tの落下事故があったわ。それには爆薬が満載してあつて大惨事。艦船に乗っていた第5計画推進派の主要メンバーは、まとめてお亡くなりになった。結果、第五計画は頓挫したわ」

「そんな偶然があり得るんでしょうか。博士。まさか、おやりになりました？」

「やんないわよ。あつちの諜報機関も優秀だし、こんな計画立てても上手くいきっこないわ。本当に偶然……というか、あつちの謀略が裏目になった結果ね」

復讐相手が知らない間にいきなり全滅とか、いったいどういう状況？

まさかこんな結果になるとは思いもしなかった。

「第五計画はお終い。で、この結果で元気になったのが、プロミネンス計画のハルトウィック大佐よ。あちらともライバル関係ではあつたけど、第五に対抗するために手を組んでいたわ。アンタ達の出向もその一環」

「技術なんかも気前よく提供しておられましたわね。でも対抗相手が消えてしまったのなら、ライバル関係に戻ってしまわれるのですか？」

「笹さんが主任を務めるXFJ計画も、そのプロミネンス計画の一つだ。」

プロミネンスが敵になったら、篁さんはじめアルゴスの皆とも対立関係になってしまう。

それは嫌だな。

「それが、向こうから打診があったわ。同盟関係の継続と協力の維持を申し出てきたの。どうにも悩ましいことだわ」

「だったら、仲良くすればよろしいではありませんか。プロミネンスとは、第五みたいに不倶戴天の敵同士というわけじゃありませんし」

「嫌よ。国連主要計画の予算も仲良く分けることになっちゃうじゃない」

この博士、予算を分けるのが嫌で仲良くしたくないのか？ あきれてモノも言えないぜ。

まさか、さつきからのピリピリしてる理由。これが原因じゃないだろうな。

「突っぱねたいけど、それも難しいわ。プロミネンスは今、勢いがスゴいのよ。下手に対立することになったら、こちらの方が不利。第五を相手にした時みたいな強行路線はとてとれないわ」

「そこまで？ いったいプロミネンスに何があったのでしょうか？」

ハルトウィック大佐の提唱するプロミネンス計画。

それは戦術機技術の向上によって世界各国の戦線を押し上げ、さらにはハイヴ攻略を目指すというものだ。

それなりに賛同者はいるものの、BETA大戦の決定打としては弱いと見なされ、オルタネイティヴ計画が国連の主要計画に採用されたという経緯がある。

だというのに、それが香月博士が恐れるほどの勢いを得たというのは、何があつたのだろうか？

「決まっているじゃない。たった一機でソ連北東部にあらわれた新型巨大光線級BETAを撃破した戦術機が出たことよ。あれを知った世界各国はお祭り騒ぎ。『Z技術でハイヴ攻略は可能』ってね。ホントに良いパフォーマンスだったわねえ」

「あ……」

なんてことだ。まさかアレが巡り巡ってプロミネンスの立場を強くしてしまうとは。

「それで、どうなさるのでしよう。対策は考えられたのですか？」

「ズバリ、『時間稼ぎ』よー」

「はあ？　もしかして博士、じつはアホだったのですか？　答えを出さずに先延ばしだけするなんて、悪手の最たるものではないですか」

「山城、ランニング五キロ追加ね」

ランニング二十キロ!!

オレは今日二度目の死を迎えるかもしれないな。

「もちろん、ただ無意味に時間を稼ぐワケじゃないわ。こちらの計画【オルタネイティヴ4】はすでに完成しているのよ」

「ええっ？」

それを早く言ってくれ。ランニング五キロなんか追加する前に。

「全世界より集められた世界最高の科学者技術者たちの叡知の結集。BETA大戦を終結に導く人類の切り札。その名は【00ユニット】。それが完成した以上、他と手を組む必要なんてないのよ」

「はあ、00ユニットですか」

どんな装置か知らないけど、そんなもの一つで、本当に神すら恐れさせるBETAを倒せるのか？

この博士、サギ師っぽい所があるから騙されている気分になる。

「ええっと……ではそれを発表すれば、長きにわたる主導権争いにも決着がつくというわけですね？」

「まだよ。まだ発表できる段階じゃないわ。使えるようになるには調整が必要だし、実施試験で成果を見せなきゃならないもの。そのための時間を稼ぐのが、アンタの次の任務。いわば陽動任務ね」

「了解いたしましたわ。何をすればよろしいのでしょうか」

「今、プロミネンスはじめ世界各国は、恐るべき巨大光線級を倒したZ技術に注目が集まっているわ。つまりアンタがZガンダムに乗って然るべき所に立てば、自然と注目はそちらに集まるというワケ」

「なるほど。では、どこかのBETA漸滅作戦にでも参加するのですか？」

「いいえ、行き先はふたたびユーコン基地よ。問題のハルトウィツク大佐の懐に行つて、注目されてきてちょうだい」

「なんだ、通常陽動任務というのは生還が望めないくらい過酷なものハズなのに。」

「今回の命が保証される世界一ヌルい陽動だ。」

「しかしユーコンか。」

「篁さんやアルゴスのみんなとお別れも出来なかつたし、ちようど良いな。」

「じつは彼から招待状が来ているの。なんでもユーコンに世界各国の戦術機を集めて相互評価プログラム、通称「ブルーフラッグ」つてのをやるそうよ。もちろんアタシは行けないから、賓客の代理ヨロシクね」

「オレが博士の代理で賓客!!」

「前言撤回、世界一キツイ陽動だ!!」

79話 霧の開発機関

オ、オレが賓客代理!? そんな厄介なこと、いつもは白銀の役目だつてのに……

つて、あれ? あれれ? おかしいぞ?

いったいなんだ、この妙な違和感。

これは犯人の残した手がかり……は関係ないか。

「博士、質問ですわ。わたくし達アーガマ小隊のエレメントリーダーは白銀。彼が代理となるのが筋であり道理です。であるのに、まるでわたくしが代理のように話を進めているのは何故でしょうか?」
「今回のユーコン行き、白銀は行かないわ。だからアンタが代理なの」

「なんですつて?」

「そういう事だ。俺はこつちの方で大事な任務がある。向こうでアルゴスのみんなによりしく言つといてくれ」

なんだろう、白銀の顔に妙な哀愁がある。

まるでどこか大切な誰かを想う男の顔だ。

そんなシブいカゲリ顔に、不覚にも「ドキッ」と心ときめいて……いや、メスの本能なんてうずかせる場合じゃない。

「それはどうしても白銀でなければいけないのでしょうか。さすがに香月博士の代理がわたくし一人では、向こうも納得しないでしょう。ガンダム二機と搭乗衛士二人がそろって、どうにかという所ではありませんの?」

「ダメよ。00ユニットの調整には白銀が不可欠なんだから」

香月博士の爆弾発言どつかあ〜くん。

「夕呼先生!?!」

「な、ななななんですつてえ夕呼!! それじゃ、この白銀少尉を00ユニットに近づけているっていうの?! 危険すぎるわ! ガンダムを製作した機関の正体もまだ判明してないのよ!!」

永遠に判明することはないんだよ、まりもちゃん。

「しょうがないでしょう。白銀しか00ユニットを仕上げる事が

出来ないんだから」

「せ、世界最高の科学者と技術者の皆さんはどうなされたのです！自身を含めその最高頭脳の方々を差し置いても『白銀にしか任せられない』と、香月博士はそうおっしゃいますの!?!」

「そうよ」

な、なんだとおおおおツ!!

ハツ！ まさか白銀のヤツ、技術知識チートとかまでもらっていたのか!?!

神のやつ、オレと晴郎には『奇跡は一つだけ』とか言っておきながら、白銀にはチートガン積みしやがったなあツ!!

パンパンツ

香月博士は手を鳴らして仕切り直す。

「話を進めるわ。出発前に白銀と山城は戦術機中尉へ昇級される。これは巨大光線級の撃破と貴重な研究サンプルをもたらした功績をかんがみて……ってのは建前で、それくらいはないとアタシの代理として軽すぎるためね」

焼石に水です。オレ自身、政治の話なんて出来ないくらい頭が軽いし。

「山城の補佐にこの神宮寺まりも軍曹をつけるわ。まりもにも『副司令補佐官』って肩書きをつけといたから、偉そうな奴らとの話はまかせて結構よ。アンタは広告塔の英雄然としてなさい」

ああ、そういう役割ね。

それなら経験豊富。大東亜連合時代にはいつもやってたからな。

「それともう一つ。今回のユーコン基地訪問には二〇七B分隊も視察見学生として同行させる。まりも、落ちこぼれどもの世話もヨロシクね。せいぜい見識を高めさせるといいわ」

「え？ あの娘達をですの?」

「夕呼?! それはいったい?」

「いまちよつと、アイツらに居られるとマズい時期なのよね。かと言って、帰らせるワケにもいかないし」

博士はチラリ白銀を見る。

まさか、落第した彼女らを見る白銀の心をおもんばかって？

……うわあ似合わねえ。そんな過保護ママみたいな香月博士。想像して気持ち悪くなったぜ。

「あとは……何も無いわね。じゃ、山城。さっさと罰をやって来なさい。今日中よ。白銀、必ずやらせるのよ」

くはあああつ。やっぱりランニング二十キロと腕立て腹筋を五百回もやるのかあああつ！

足と腕と腹を破壊する完璧なメニューだぜ。

◆◇♣♥◆◇♣♥

香月夕呼Side

白銀と山城の出て行った執務室。

何か言いたそうなまりもと二人で、ちよつとした総評会議。

「やっぱり不振な所はなかったわね。ま、アタシは疑ってないけど、どうしてもって情報部のヤツらがね。あまりにガンダム関連が分からなすぎてノイローゼ気味なのよね」

「それで、いろいろ機密にふれるような事を言ったのね。でも白銀少尉に00ユニットを任せるって本気？ とても技術部のスタッフが了承するとは思えないわ」

「技術部の最高頭脳さん達は“霧”の向こうを知りたがっているわ。『白銀を観察してりや見えてくるかも』って言ったら、不承不承ね」

「霧……霧の開発機関アナハイム・エレクトロニクス？」

「そ、戦術機開発の伝説。国籍も資本も販売先も何もかもが存在しない。ただ米国製すら超える高性能戦術機ガンダムのみを残して、霧の彼方へ消えていった謎の機関。山城がガンダムの製造元にその名を言ったことが由来らしいけどね。で、その高度技術の元を探ろうと技術部の連中は白銀を受け入れたワケ」

「そこまでして、あの白銀少尉を？ いったい彼の何が00ユニットに必要なの？」

「機密に踏み込んでいるわよ。とにかくこっちの事には首をつつ込

まないで、アンタはアタシの補佐官役をしつかりやって来なさい」

「まりもは「ハッ」として居住まいを正した。」

「私が口を出せることじゃなかったわね。それについては分かったわ。でも、二〇七B分隊の全員までユーコンに同行させる事については?。」

「もちろん裏はあるけど、アンタがそれを知ることが許されない。ま、司令部の恩情とでも思っておきなさい」

「そう……ね。わかったわ。それが司令部の決定なら、私は全力でこの視察見学を支援するだけだわ」

「あの娘たち、地力は高いんだし親のコネもあるから、衛士にはなれなくても、それなりにはなるでしょう。相互評価プログラム開催中のユーコンは世界の縮図そのもの。せいぜい見識を高めさせて、日本のための人材にでもなってもらおうわ」

「軍事訓練じゃない教師役ね。ふっ昔の将来の夢が、今になって一瞬かなうなんてね」

「そーいや教師が夢だったわね。だったら山城のことも、少しは気にかけてあげてくれない?。」

「山城上総少尉? 世界最強の衛士とまで言われるあの娘を?。」

「戦闘力は世界最強でも、中身はまだ子供よ。英雄なんて名声を得て、変な所に取り込まれないよう注意してやって。あの娘もまだまだ役に立つてもらわないといけないんだから」

「わかったわ。あの娘も私の生徒ね」

クスリと笑うまりもは、いつになく優しい顔をしていた。

80話 白銀武は語りた

ヒイヒイ。そんなわけで帰国早々に懲罰の基礎訓練。

こうして走っていると懐かしい感じがするのは、山城上総の体に染み付いた訓練生時代の記憶の残滓か。

しかし問題は、こんなクソツタレなことをやっているのがオレ一人ではない事だ。

「ハアハア、なん……で、白銀まで……ゼイゼイ走って……いるのです?」

隣で涼しい顔で並走している白銀に問うた。

「俺とお前はエレメントだ。つまり連帯責任。懲罰全部につき合ってやるよ」

「ペースが……上がって……ゼイゼイより厳しく……なったのですが」

「しつかりしろ上総。後輩に負けているぞ」

そう。問題なのは白銀より、むしろ周囲で嬉々としていつしよに走っている二〇七B分隊の五人の娘達の方だ。

さつきまで自主訓練してたはずなのに、よくついてこられる。

こんなにしつかり鍛えてある娘達が、何で総戦技演習に通らなかったのか本当に不思議だ。

「なん……で、みんなして……わたくし達と走って……いるのです?」

「月詠のせいで山城少尉がこの懲罰を受けたと聞きます。であるなら私の責も同様。せめて同じ試練をうけねば、とても顔向けできません」

いや、君に責任なんて求めないって。

同じ試練受けてくれても、ちっともオレは楽にならないし。

「そうよ。世界のかつてない危機を救った英雄殿に、こんな迷惑をかけたんだもの。これは二〇七B分隊全員の問題よ」

榊首相の娘さん、君がそんな大袈裟にしないで。

マジ国連軍の在り方についての問題にまで発展しそうでコワイよ。

「ま、暇だから。もっとペース上げてもいいよ、英雄さん」
暇でこんなキツイ運動するのか、彩峰とやら！

涼しい顔で地獄のあおりを入れるんじゃない！

「ボクたち、話題の英雄さんと訓練してるんだね。感激だなあ」
この鎧衣つて娘も体力のオバケだな。オレと同じペースなのに、流して走っているよ。

こんな小さい体のどこに、こんな体力があるのやら。
それにしても『鎧衣』つて、どこかで聞いたような？

「ハアヒイ任姫も……がんばります。ぜったいみんなと……」
この珠瀬つて娘を見ると安心するな。下を見て安心するなんてクズい趣味だけど。

◇ ◇ ◇

「終わりましたわー！ー」

みんなでランニング二十キロ腕立て腹筋五百回を見事やり遂げた。
夕暮れの中、少女達が地面に伏しながら楽しそうに語り合っている
姿もまさに青春。

まるで軍隊青春のページみたいシーンだ。

しかし今のオレに、それに感動する余裕はない。もう今夜は宿舎に入って寝ちやおう。

と、思ったのだが……

——「全員集合！ 白銀、山城両少尉もこちらにお立ちください」
見るといつの間にか神宮寺軍曹がいて、地獄のような追加の試練。
ああ、そーいや衛士訓練校つてこういう所だったっけ。

オレは受けていないけど、記憶だけはこの体にしっかり残ってる。
オレと白銀が神宮寺軍曹の両脇に立ち、二〇七B分隊の娘達が姿勢
正しく目前に整列すると話ははじまった。

「たった今、貴様ら第二〇七訓練兵B分隊に通達があった。心して
聞くように」

いよいよ解隊かと、彼女らの顔に緊張が走る。

「貴様らは五日後、北米アラスカ州のユーコン基地へ視察見学に行

くことが決まった」

ザワツ……

意外な通達に、整列中であるにも関わらず驚きの息がもれる。

「静粛に！ これは、香月副司令の賓客代理として赴かれるこの山城少尉に付随して行くこととなる。すでに知っている者も多いと思うが、この山城少尉はソ連北東部に出現した最大脅威のBETAを討ち取った英雄。その山城少尉の名を辱めぬよう、おのおの気を引き締めて事にあたれ」

「「「「ハイッ」」」」

「視察先のユーコン基地は戦術機開発の最先端。そして当時期、ここで「相互評価プログラム」通称「ブルーフラッグ」が開催される。これは全世界の代表的な戦術機がそこに集まり、その性能を競いデータを蓄積し合い戦術機技術を高めあう一大イベントだ。衛士に落ちこぼれた貴様らが、将来の糧となるようにと、このイベントへの訪問を企画していただいた司令部の恩情に感謝するように！」

「「「「ハイッ」」」」

「では山城少尉。一言何かお願いいたします」

あーやっぱり。英雄だなんてさんざん持ち上げられたけど、そんな大したモンじゃないんだよ。

「あ、あなた方とともにユーコン基地へ向かう山城上総少尉ですわ。向こうにいる開発衛士は、腕は良くてもクセのある人間が多いので注意してください。とくに背のちっこい山ザルみたいなのか、いつも女同士でベツタリくっついていてソ連のツンドラ衛士とかはたいへん危険ですので、好んで近づかないように」

しどろもどろになりながら思いつくままにしゃべり、そして終わる。

すると白銀が挙手。

「神宮寺軍曹。自分にも彼女らに言わせてください」

「これは白銀少尉殿、どうぞよろしく。香月副司令に期待されている衛士として、こいつらに喝を入れてください」

あれ？ なんだらう、白銀のあの表情^{かお}。

「諸君、始めましてだ。自分は白銀武少尉——」

◆◇♣♥♠◆♣♥

白銀武Side

「——以上だ。諸君らの視察訪問が、実りあるものになる事を心から願う」

うん、終わったな。これで俺がみんなにしてやれる、たった一つが終わっちゃった。

「白銀、山城両少尉に感謝をこめ、敬礼！」

お前らが俺に敬礼する姿がづらい。

できるなら、この世界でもお前らと並びたかったよ。

万感をこめ、俺は敬礼を返す。

「明日よりユーコン基地についての座学を行う。それと並行して、おのおの準備にかかれ。では解散！」

俺がこの横浜基地に来たとき、すでに総戦技演習は終わっていて、二〇七B分隊がそれに落ちたことを聞いた。

それを聞いたときの俺の落ち込み様はかなりヒドかったらしい。

そして00ユニットである純夏もすでに完成していて、例の如く精神異常をおこしてBETA絶対殺すロボになっていた。

それを調律する役をおったのも例の如くだが、俺の精神状態を心配された。

そこでまたユーコンへ行く上総に付随する形で彼女らにも行ってもらい、俺から離れてもらうことになったのだ。

「お待ちください白銀少尉！ いえ、巨大光線級を山城少尉とともに討ち取った功により、中尉になられると聞きました。早くともあえて白銀中尉とお呼びさせていただきます」

ふいに冥夜に呼び止められた。

「……ああ。何か用かな、御剣訓練兵」

「白銀中尉の激励、身が引き締まる思いです。格別のお言葉にこた

え、この視察見学を必ずや実のあるものとしてみせます！」

もう「タケル」とは呼んでくれないんだな。

「白銀中尉？ どうなされました」

「いや、中尉呼びに少し慣れなくてな。御剣訓練兵、しっかりやれ」
「はッ」

ふと見ると、他のみんなもチラチラ俺を見ている。

「ふふん、御剣みたいにもっと近くで白銀少尉を見たいのに、男が恐くて近寄れないチキン。これだからお嬢様育ちは」

「うるさいわね、アンタもでしょ！ わ、私は分隊長としてお礼の言葉を述べようとしてるだけで、別に他意は……！」

「あははっ、ボクは行ってくるね」

「ああっ、み、任姫も！」

ああ、それでも変わらないな。俺がいなくても。

忘れないよ、たった一度だけでもお前らと走れたことを。

冥夜、委員長、美琴、彩峰、たま。

この世界じゃ、どこまでも縁の無かった俺達だけど。

それでも、俺の心はお前らと繋がっている。

お前らといっしょに戦っているんだ。

強く生きろ。己を養え。

そして成長したお前らを見せてくれ。

いつかまた、この横浜基地で会おう。

じゃあな。

81話 煌武院悠陽の決断

煌武院悠陽Side

第二帝都東京

帝都城 將軍御座所

帝都城の主【煌武院悠陽】は、煌武院家のお庭番【月詠真耶】（横浜基地に居る同姓の彼女とは別人）から、先のソ連北東部事変の詳細な情報を入手したことを伝えられた。

「殿下、お納めください。巖谷より献上された先の巨大光線級とZの戦闘記録です。奴も生き残りに必死と見えます」

「拝見いたしました。……これは、なんとおぞましい。BETAは数だけでなく、このような小山の如き怪異までいるのですか」

ガンダムより戦闘時に撮られた映像からの写真はまさに衝撃的。

悠陽はその写真に目が釘付けになり、しばし言葉を失った。

「巨体だけではありません。かの怪異の発するレーザー。ソ連北東部から海峡を越え、この日本にまで到達したそうです。もしこれが未だ討伐されずにいたなら、わが国の穀倉である北海道、東北は大いなる危機にさらされていたでしょう」

「噂に聞くZとはいえ、よく、これだけのものを討伐が叶ったものです。ですが陣容はどのようになりますか？ ソ連にはいかほどの協力をあおいだのでしょうか」

「いえ……それが、これの討伐に参加したのはZ兵器である二機のガンダムのみ。ソ連の手助けは一切無しとのこと」

「まさか！ いったいどのようなことか？」

「詳細は記録をご覧ください。ざっと申し上げましょう。二機のガンダムはレーザーより逃れるために上昇し、大気圏外へ離脱。そこから一機が囷となり、もう一機が目標近辺へ急降下。さらにエバンスクハイブを背にしてレーザー口に接近し、かの怪異のレーザーを体内で乱反射させ討つたとのこと」

「いったい何の説明を受けているのだろう。それは戦術機の為せる技なのか。」

「月詠。まず『戦術機が宇宙へ飛んでいった』というのが意味不明なのですが。推進剤は保ったのですか？」

「残念ですが乙の能力に関しては、世界中の戦術機開発の権威すら頭を悩ませているものです。殿下におかれましては、事実のみを受け止め、帝国の進むべき道を探ることこそが肝要かと。とくに、その搭乗者の片方は斯衛の末席にあつた者」

「左様ですか。月詠の言いたいこと、それは山城上総少尉殿のことですね」

「はっ。かの者は元々斯衛の任官を受けた者。それが初陣である京都防衛戦で脱走し、どこからか乙なる戦術機を獲得し、数々の奔放なる振舞いをして今にいたります。今こそ斯衛に呼び戻し、京都防衛戦以来の数々の疑惑を詳らかに問いただす時だと愚考いたします」

この進言には、悠陽は軽々にうなずけない。

彼女を帝国が抱えるともなれば、斯衛、帝国軍、内閣と、大きな激震が走るだろう。

そして斑鳩公なども……

「……もし、これほどの戦術機を帝国が所有したとなれば、反米派はますます勢いづくことになりましようね」

「先の第七艦隊壊滅を受け、米国内は混乱が続いているようです。反米派は今が好機と考えておるでしょう。日本国内の国連、親米派を追い出し、他国より干渉されない国体を今こそ……」

「月詠」

「はっ。少々言葉が過ぎたようです。ご容赦を」

「月詠。もし、そなたの言った通りに事が運べば、米企業と戦術機共同開発を進めている巖谷は窮地に立たされることになりますね。それに米国との協調路線をとっている榊首相も」

「お言葉ながら殿下。恐れ多くも政威大將軍殿下を利用するということは、いつ何時でも切り捨てられることを覚悟するということです。いかに功ある忠臣であろうと、大義に沿わぬとあらば切らねばならぬことも、将軍位の責務の一つとお考えください」

「大義……ですか」

『大義』その言葉に悠陽は意を決して言った。

「では、わたくしの決断を述べましょう。大義に基づき、山城上総少尉殿はこのまま国連に預けます」

月詠真耶は頭を垂れ控えながらも、その体をピクリと動かす。

「今、帝国の内に大きすぎる力を入れては、反米派は暴走するでしょう。そして世界は米国と反米派とに二分することとなります。そうなれば、BETA大戦は最悪の事態となるは必至。他国への不信から、BETA禍の拡大を招いた中華の轍を踏んではなりません」

「……はっ。ご決断、承りました」

「いくつもの話を聞きそのZとやら、おぼろげながら見えてきました。あれは人類がまだ見ぬ兵器。そのような過ぎた物を扱える器の機関、残念ながら帝国の中にはありません。このまま香月博士に任せたいですが吉でしょう」

そして悠陽は、渡り廊下に出る襖に向かって行った。

「聞いておりましたね鎧衣。お友達にお伝えなさい。『わたくし達の密約はいまだ生きています。この厳しい逆境にも折れず踏みとどまることを期待しています』と」

すると襖はガラリと開き、情報省特務課長の鎧衣が正座してそこに居た。

鎧衣はどうやってか正座したままチョコチョコと歩み、悠陽の前に控えた。

「はっはっは、さすがは殿下。ご英断、感服いたしました。彼もさぞ喜びましょう。だいぶ厳しい状況となっているようですからな」

アメリカの衰退は、巖谷のようにアメリカとの協調路線をとつている者には逆風。

そして反米派は過激な国粋主義者が多く、彼らの台頭は国の指針を見失うことになりかねない。

それゆえ悠陽は、あえて山城上総を巖谷と繋がっている香月夕呼に預けたままにしたのだ。間接的にでも彼の力になってくれれば、と。

「ときに鎧衣。件のユーコン基地では楽しそうな催しを行っているようですね。ブルーフラッグとやら」

「左様で。なんでも戦術機を使った競技会のようなものだとか。いやあ、さすがはアメリカ。なんとも豪勢なことです」

「であるなら各国の戦術機データは取り放題。各国の思惑も透けて見えるでしょうね。著しく威信の失墜したアメリカも、そこで巻き返しをはかるやも」

「はっはっは。殿下は私めに旅行をお勧めになられていますかな」

「各国戦術機データの集うユーコンの基地。そこに世界の姿があるうことは確かでしょう。政威大將軍として、そこに何があるのかは知っておきたいのです」

「ご立派です。香月博士もそこに、さきほど話題にあった山城少尉を自分の代理として派遣するそうです」

「まあ。ですが、それは……」

山城少尉とZガンダムと呼ばれる戦術機の価値は、以前とはくらべものにならないほど世界的に高まっている。

そしてブルーフラッグという祭典には、各国の思惑が渦巻いているだろう。

そこで巻き返しをはかりたいアメリカ。かねてから日本と手を組みたがっているソ連。この機にアメリカの一極支配を崩そうとする反米派。

そんな場所に山城少尉を送って無事でいられるのだろうか、と悠陽は心配になった。

「さらに。どうでもよろしい事ですが、二〇七B分隊全員も視察見学生としてご同行とのこと」

「——!!?」

なんてことを。二〇七B分隊の娘達の親は、皆帝国に大きく影響する者達ではないか。山城少尉をめぐる思惑に巻き込まれでもしたら、どうなるか。

そして冥夜は——

「香月博士は麗しく聡明ではありますが、迂闊な所がありますな。さて、たまには娘の顔を見ってくるのも良いですな。少しばかり足を伸ばしてくるといたしましょう」

82話 天才と怪人の邂逅

鎧衣左近Side

さて、いきなりのユーコン基地訪問。

問題となるは、それにいかなる偽装身分で赴くのか。

イベント開催中なだけに記者の受け入れもしてあるが、記者では立ち入れる場所が極端に狭くなってしまう。

といってVIP関連の付き人警護などは、割り込むための時間が無い。

ならば戦術機関連はいかがか。

潜入のためにあらゆるスキルを身につけているが、戦術機整備もそのひとつ。現在、私がつとれる手段でもつとも現実的なのが、整備士あたりであろう。

そうしてブルーフラッグ出場戦術機に絞り、整備士の募集をかけている場所を調べてまわる。

しかして、やがて絶好の場所が見つかった。

大東亜連合の出場者が、緊急に整備士の募集をかけているというのだ。

要求される技術はかなり高いとのことだが、まあ何とかなるであろう。

スパイたるもの、高殿を越えて忍び込むが仕事であるのだ。

スマトラ島に渡り、ベラワン港にほど近い大東亜連合の拠点の一つ。

その格納庫整備室にて、私はブルーフラッグ出場責任者のその男と会った。

「どうぞよろしく。河崎重工の整備士をしていました田中一郎です」

偽装身分自己紹介をし、手を握った彼は妙に不思議な目をした男だった。

大東亜連合という場所からアジア人と予想していたのだが、そうで

はなく西洋風の容貌。

いったいいかなる理由で、明らかな非アジア人のこの男が、大東亜連合出場者の代表となったのか。

「私の名はパプティマス・シロツコ。大東亜連合の出場パイロットであるが、責任者でもある。急遽そう決まったので手が足りなくて困っている。よろしく頼むよ」

「おや、ガルードスのトップが、あなたのような異国出身者に？
いったいガルードスに何があったので？」

「ガルードスではない。私の母体は傭兵団エウーゴ。ガルードスには出場をかけた勝負によって、今回見送っていただいた」

「なるほど、良い腕をお持ちのようだ。ちなみに、他の出場衛士の方々は？」

「私一人だ。エウーゴは今、実績作りと組織再編に忙しくてな。このような催しに人材など出せんのだよ」

「は？ いやしかし、あなた一人で出場してどうするのです。いったい何をお考えで……」

「ガルードスとの勝負も私一人で戦い、全機撃破して勝ち取った。ブルーフラッグでも、私一人で十分な成果が出せると確信している」

これは……大変な人物かもしれない。

格納庫内に通され見た機体は、F-15をベースにしているが原型がやっと分かるほどに改修されたもの。データを見せてもらおうと、とんでもなくピーキーな設定であった。

「して、仕様はどのように？」

「対戦術機特化だ。対BETA戦など想定しなくていい」

「ブルーフラッグの趣旨とはかけ離れていますな。勝敗などに意味はなく、対BETA戦術機のデータを集めることが目的のはずですが」

「だが、あえて私は全勝を狙う。それだけに要求は厳しくなるが、かまわんな？」

「はっはっは。なんともまあ壮大な目標ですな。何があなたを、そ

んな無茶に駆り立てるので？」

「目的は金なのだよ。今のエウーゴは出来ることがあまりにも少ない。ゆえに、このブルーフラッグという舞台で注目を集め、多くの出資者を募る。私は本気だ」

「しかし噂ではアメリカなども出場するそうですが？」

アメリカの戦術機はBETA戦後を見据えた対戦術機特化だという。それも潤沢な資金とハイレベルな人材を惜しみなく使い、ステルス機能なども搭載した驚愕のシロモノ。

とても町工場レベルの戦術機に勝てるようなものではあるまい。

「殊勝なことだ。それを撃破すれば、よりエウーゴの価値は高まる。この世界の覇権国が、わざわざ私に撃破されに来てくれるとは感謝にたえんよ」

ううむ、この人物の評価はどうしたものか。

「しかし君は整備士にしては中々良い体をしているな。兵士訓練でも受けたのかね」

「まあ徴兵されましたね。その後、前線から逃れるために整備スキルを覚えたという次第で」

「出場は私の一機のみで行う予定だが、頭数が問題になった場合整備士にも出てもらうつもりだ。その際、君にも頼もうかな」

「はっはっは御冗談を。私は整備専門。操縦など多少動かせる程度しかできません。それに機体はどうするのです？」

「なに、そこらの運搬用作業機にでも乗って戦域の隅に居てもらおうさ。判定が出るまでおとなしくしていてくれたまえ」

本当に大変な人物だ。

しかしたった一機一人で、世界中の歴戦衛士の駆る戦術機すべてを撃破すると豪語する彼。

彼の戦いがどんなものであるのかは、記録に値するかもしれない。案外、乙技術関連の他にも面白い対象に巡り合えたかもしれないな。

やがて、その予想は当たった。

このパプティマス・シロツコという男。のちに世界でもっとも注目

される男となり、早期に出会い行動を共にした私は諜報界に大きなアドバンテージを得ることになるのだが、それは未来の話。

♠♦♣♥♠♦♣♥

篁唯依 Side

「い、いったいこれは?! おじ様、どうして……! 失礼、取り乱しました」

「気にしないよ。僕も最初見たときは同じ反応だったからね。イワヤに送ったデータで、このような事になるはずはないのだからねえ」
X F J 計画技術顧問フランク・ハイネマン氏が私に見せたメールの
通達。

それは背中に冷や水をかけられるような驚くべきものであった。
そしてその送り主は、巖谷のおじ様だったのだ。

『X F J 計画に対し調査団派遣が決定された。進行中の相互評価プログラムにおいて、現計画機が他国機に対する優位性を認むるに十分な成果を得ずと判断された場合、即時、X F J 計画の継続を再議する。計画の縮小、最悪の場合凍結もありえる』

「進捗は順調なのに! 不知火・式型もさらにもう一機製作されて、これからだというのに! どうして計画に疑念の目が向けられなければいけないのです?!」

「思うに、これは進捗の問題ではなく政治の問題だろうね。日本の押さえだった第七艦隊の壊滅。それによって、アメリカの干渉から抜け出したい勢力が台頭してきたということだろうねえ」

「し、しかしそれと戦術機開発計画とは、何の関係もないのでは?」
「ふう。あなたが僕より政治に疎いのは問題だね。アメリカの干渉から抜けるには、帝国だけでは力不足だ。どこかと手を組むべきだろう。そしてその方法が、パートナー国の戦術機の導入だ。その国の戦術機を導入すれば、軍事的に強く結びつくことになるからね」

ふと、思い出した。

ソ連のサンダーク中尉が、やけに自国と帝国との戦術機共同開発を勧めていたことを。

まさか……これはソ連の工作？

「どうしましたタカムラ中尉。まさか、その通達一本で心が折れてしまったのではないでしょうね」

「……………ッ！」

「こうなればブルーフラッグで対戦する機体のことごとくを墮として、不知火・式型の性能を見せつけるしかないでしょう」

「ハイネマン氏……まさかあなたが、そのような不屈の闘志をお持ちとは……」

「わがボーニング社は負けるのが嫌いな社風でね。そして一アメリカ人としても、このような陰謀が進行中なのは見過ごせません。タカムラ中尉。当初からあなたがX F J計画にかける意気込みは相当なものでした。あなたにも負けられない理由があるのではないですか？」

そうだ。京都防衛戦で生き残った私は、和泉、安芸、志摩子の無念を背負って生きると決めたんだ。

それに私を鍛えてくれた真田教官、斎藤助教。崇司家の恭子様。みんなB E T Aとの絶望的な戦いに赴き、倒れたと聞いた。

生きている私が死んでなんかいられない！

「わが日本帝国も負けるのは嫌いです。この程度で打ちのめされてなど、いられません」

「良い目だ。では評価の場のブルーフラッグで勝つためのプランニングをしましょう。開発テストパイロット衛士達には無理をさせてしまいますが、上手く承知させてください」

「はいっ！」

そう言えば山城さん。

あの人は何度も死んだと思われながら、いつも何事もなく現れて帰ってきたな。

私もここからX F J計画を生き返らせ、あの人みたいに笑ってみせよう。

83話 ソ連さんとアメリカさん

ソ連 side

ユーコン基地ソビエト機密エリア

Π3 研究棟地下会議室^{ツェー}

その日、ソ連軍中央開発軍団の長ブドミール・ロコボフスキー中佐は、部下のサンダーク中尉を前にご満悦であった。

「フハハハ、フハーツハハハハハハどうかね、サンダース中尉。党は私の献策を高く評価してくれた。研究にしか興味のない君には分かんたろうが、大事なものは物事を大局的に俯瞰するこの目なのだよ」

「はあ……お見事です」

『やれやれ、またか』とサンダークは陰鬱な気持ちになった。

たしかにそれなりに評価できる策だ。

それをこの小物がよく思いついたものだが、こうも何度も自慢されてはたまらない。

「たしかにZの力は驚異的だ。だが奴はBETAでもなければ、アメリカに属しているわけでもない。ならば張り合うより、その力を利用させてもらった方がよい」

「はい。そのために日帝との同盟締結を目指すという方針ですね」

「そうだ。我が国の戦術機その他を格安で日本に配備する見返りに、わが国のハイヴ攻略を優先してもらおう。わが領土を蹂躪する憎きハイヴの占領が叶えば、そこにあるG元素はわが国のもの。それを手にした時、偉大なるソビエトの復活ははじまる！」

「忌々しい敵の巣窟も、攻略が成れば財宝の山。そしてそれを最も多く抱えるのは、わが祖国。G元素の占有率を鑑みれば、日帝への投資などいかにほどのものではありませんな」

「そうだ、ソビエトがアメリカに代わる覇権国となるのだ！ フハーツ同志サンダーク中尉。歌おうではないか、わが勇壮なるソビエト連邦国歌を！」

『嫌です。馬鹿は一人でさらしてください。私は退席しますので、ご存分に』

——という言葉在必死にサンダークは飲み込んだ。

ソビエト軍人にとって上官命令は絶対。このような愚物そのものの命令も拒否はできない。

どうか冗談であつてくれ……

「♪たたえてあれ、じゆうなわれらのそこよく♪」

本当に歌い出しやがった。このままでは、私まで歌わないわけにはいかなくなる。

『ええい、この浮かれポンチな上官め！』と震える拳を懸命におさえながら、冷静にサンダークは懸念材料を提示する。

「ですが問題はアメリカです。失墜したといつても、それはせいぜい一、二年のこと。態勢を立て直されれば、わが国と日帝の関係を脅威とみなし、横やりを入れないはずがありません」

「わかつておる。進行は急がせておるわ。日本から来る調査団は、対日工作によつて為したわが同志。どのような結果であろうとソ連製の戦術機導入を勧める手筈となっている。だが日帝の議会を通すには、優秀な戦績が必要なことを忘れるな」

「おまかせを。Ⅱ3計画の成果をもつてすれば、ブルーフラッグのごとき競技会。勝利することなど雑作ありません」

「大した自信だな。だが問題の日のラトロワ中佐の件。あれはどう説明するのかね？ ターゲットの遺体は確認できず、素体も失くしたそうじゃないか」

「……ログを精査した結果、マーティカは調整不十分でした。不手際はお詫びいたしますが、研究に問題はありません」

「だが党本部はそう思つてないようだ。よつて万一の場合。とくに対アルゴス戦にて落としそうな場合には、“切り札”の使用を認めるそうだ」

「“ブルーファカ”を……競技会にですか？」

「ブルーフラッグはもはや競技会ではない。わが国の命運を決定づける重要な位置づけにある。それは君の大切な研究も同様ではあるな」

「……………了解……………いたしました」

♠♦♣♥♠♦♣♥

篁唯依 side

ハイネマン氏とこの先の簡単な予定を話し合った私は、すぐさま皆がいるであろうリルフォート歓楽街へ向かった。

この先のスケジュールはかなりシビアなもの。ならば今夜のうちから覚悟だけでも持つてもらいたいと、明日のブリーフィングにはまわさず今夜知ってもらおうことにしたのだ。

いきつけのバーのテーブル席にアルゴスの皆はいた。

私は本題の前に、ハルトウィック大佐から聞かされた山城さんのことから切り出した。

「山城さんが、また来るそうだ。今回は開発衛士としてではなく、ハルトウィック大佐の賓客としてだが」

「おおっ」とみんなが一樣に歓声をあげる。

「巨大BETAをブツ倒したお姫様が凱旋かよ。どうやって倒したのか聞けねえかな」

「さすがに機密扱いでしょう。でもタケルと一緒に船に帰還しなかったから、絶対死んだと思ってたわね」

「まさか逆に倒しちゃったあ、ガンダムってなどこまで凄えんだよ。こりゃ、案外祖国を取り戻すのを見るのも近いかもしんねえな」

と、皆が山城さんのことで談笑を始めようとするのを、あえて止めた。

「山城さんのことは一旦忘れてくれ。皆にブルーフラッグ演習に際する、わがXFJ計画の共通認識を持つてもらいたい。それは『データ収集より勝利』を最優先目標としてほしいことだ」

ザワリ……

テーブル席に緊張が走ったのが感じられる。

「まさかタカムラの口からそんな言葉が出るたあ。そりゃアタシは勝つのが好きだから、そのつもりだけだよ。でも『本分のデータ収集より優先』って、そこまで言い切っちゃえていいわけ？」

「タリサ、察しろ。あの唯依姫が『上総姫を忘れろ』とか、よっぼど

だろ」

「タカムラ中尉、計画に何か問題がおきましたか？」

「ヴェンセントが呼び戻された理由も関係あるんだな？ 緊急の仕事ってのはそのためか」

「ローウェル軍曹は、ハイネマン氏の指導のもと不知火・式型の改修を行っている。仕上がりはかなりシビアになっていると思うが、搭乗衛士のブリッジス少尉マンダル少尉は乗りこなしてくれ」

「おおよっ！ 何かしんねーけど、面白くなってきたじゃんか！」

「それはソ連の紅の姉妹。スカレット・ツインあと参戦すると噂のアメリカに勝つため……だな？」

ユウヤの目はすっかり変わっている。

困難な機体に向かう開発衛士のそれだ。

「そうだ。おそらく今のままでは、それらに勝つのは難しいからな。スケジュールを前倒しでいく」

「何か負けれない理由ができたってことか。わざわざバーに来て、そんな話をするくらいだからな。そういう話、開発機体にはよくあるぜ」

「まあな。話はこれだけだ。私は帰るので、あとは……」
だが、そのまま帰れはしなかった。

カウンターの席で座っていた男女二人がこちらに来たのだ。彼らは共にアメリカ陸軍のBDUを着ていた。

「そういう話は、こんな場所ではしない方が良いでしょう」

「まったくだ。とんだ場面に出くわしちゃったぜ」

ガタリッ

ユウヤは反射するように立ち上がった。

「シャロン……！ それにレオン？！」

ユウヤの知り合い。やはりアメリカの開発衛士だろう。

二人は私に敬礼して自己紹介をした。

「はじめまして。アメリカ陸軍第65戦闘教導隊のレオン・クゼ少尉です。」

「同じくシャロン・エイム少尉です」

私も席を立ち敬礼を返す。

「私は日本帝国斯衛軍の篁唯依中尉だ。何か御用かクゼ少尉、エイム少尉」

「さっきの話が聞こえてしまったので口をはさみますが、我々米軍教導隊もブルーフラッグに参加します。ついでに『すべての開発衛士テストパイロットを十分以内に開始線位置に戻せ』とお達しです」

「無論、あなた達アルゴス小隊にもです。そちらにも負けられない理由があるようですが、容赦は出来ません」

「何イ、やってみろってんだ!」

「よせ、マナンダル少尉。クゼ少尉エイム少尉、こちらに遠慮することはない。その通達の理由も予想はつくしな。ところでクゼ少尉」

「なんでしようタカムラ中尉」

『クゼ』という名に聞き覚えがある。もしやお父君は米国海軍太平洋艦隊所属のクゼ提督ではないか?」

「父をご存知でしたか。ですが殉職いたしました。第七艦隊に所属していたもので」

「そう、か。お悔やみ申し上げます。クゼ提督には本州防衛の際、避難民の移送にご尽力いただいた。お父君に深い感謝と哀悼の意を捧げます」

「ありがとうございます。帝国斯衛の中尉にそう言っていただけなら、父も報われるでしょう」

だが、この暖かい雰囲気はブチ壊す不機嫌な声が響く。

アルゴスに来たばかりの頃のような顔をしたユウヤだ。

「まったく、お坊ちゃんの家^族自慢は聞いてられねえな。せいぜいご自慢のお父様の墓でも綺麗にみがいしているんだな」

「なにイ、ユウヤ、テメエ!」

「そつちもブルーフラッグに出るといふなら丁度いい。叩きのめしてやるよ下手糞。あとシャロン、ご自慢の射撃が俺に当たると思うなよ」

私とアルゴスのみんなは一触即発の二人を必死にとめる。

マナンダル少尉だけは「やれつ、やつちまえユウヤ!」とか言つて

手伝おうともしなかったが。

「ラプターを相手にするつてのに自信満々ねユウヤ。でもこれを聞いても、その自信のまままでいられるかしら？ あたし達の隊長は

【ジェリド・メサ中尉】よ」

ピタリ

クゼ少尉に掴みかからんとするユウヤの動きがいきなり止まった。やけに顔が青い。

「……ユウヤ？ エイム少尉、そのメサ中尉というのは？」

「教導隊のトップパイロット衛士です。いわばトップ・オブ・トップ。教導隊

で唯一F-15Eストライク・イーグルでラプターに損傷判定を与えたことで伝説になりました」

「その時ラプターに乗っていたのが、そのユウヤです。ユウヤ。ラプターに乗ったメサ中尉にもそのセリフ、言えるか？」

「……………クッ！」

負けられないブルーフラッグ。だが、早くも暗雲がたちこめてきた気がする。

84話 山城さんふたたび

篁唯依 side

アラスカ州ユーコン陸軍基地

X F J 計画専用野外格納庫^ハ_ン^ガ_ー

ズシン……ズシン……

整備兵の誘導にあわせ、Zガンダムが野外ハンガーに向かい歩行移動をしていく。

私とアルゴス小隊の皆、そして周囲に集まった手の空いているユーコン基地中の人間はそれを遠巻きに見守っている。

「あれが巨大光線級を倒したのね……」

「いったいどこのメーカーが、あんなモノを作りやがったんだろうな。名乗り出てプロミネンスに参加してもらいてえな」

そうだな。山城さんも、そろそろあの機体を作った機関のことを教えてくれればいいのに。

「故郷が解放される日が近い気がするよ。BETAの切り札相手に完勝する戦術機なんて出来たんだからな」

めずらしくマナンドル少尉もしおらしい。

「タリサ。もうカズサは中尉殿だ。まちがってもケンカなんかするんじゃないぞ」

やがてZガンダムはハンガーの所定位置に直立状態で格納。

ハッチが開き、長い髪と端正な顔立ちの彼女が降りてきた。

山城さんだ。間違いなく生きている。

それにしても、足元にいつも離れずに付いてくる丸いメカはどういう仕組みなのだろうか？

パシヤツパシヤツ

カメラ音が一齐に響き渡る。ここには記者は立ち入れないはずだが、整備兵がまるで記者のごとく高価なカメラ機材をそろえているのだ。

ブルーフラッグを写すものだと信じたかった。

「篁さん、お久しぶりです。帰還の報告もできずに、申し訳ありません

んでしたわ。それと中尉があまり可愛いすぎる顔はしないことよ」
ほがらかに綺麗な敬礼をする山城さん。

生きていると知らされてはいても、やはり目の前で元気にしている彼女を見ると熱いものがこみ上げる。

「顔なんてどうしようもありません。あと初陣の京都防衛の時よりはマシです。あの時の山城さんは本当にヒドかった」

ああ。こうして山城さんと間近で見つめ合っていると、あの時のことを思い出してしまう。

こうして見つめ合ったあと、いきなり山城さんは顔を近づけてきて、そして……

まったく女同士で何してくれたんだ！

「だから、そんな可愛いすぎる顔はやめなさいと言っているでしょう。さつきから撮られまくっていますわ。ほら、顔を隠しなさい」

なにっ!! 私まで撮られているのか？

こんな緩んだ顔なんか撮るんじゃない！

「整備兵たち、篋中尉を撮るのはおやめなさい。上官侮辱罪ですよ！」

山城さんは私の顔を自身の胸にうずめて注意喚起を促すが、ますますシャッター音は激しくなっていく。

整備兵達から『上官侮辱罪を覚悟しても撮り続ける』という覚悟すら感じる。

ユウヤから聞いた話では、私は山城さんという時は“良い顔”とやらををしていて、絶好のシャッターチャンスだと整備兵達が話していたそうだ。

そして私と山城さんが並んでいる写真は高額で取引をされているとか、ふざけた話も聞いた。

こんな風に抱き合っている写真はどうなるんだ。

パシャツパシャツ

「くっ、山城さん。こんな所では落ち着いて話も出来ない。私の執務室に行こう」

「そうですね。でもハルトウィック大佐に到着の挨拶をしなければ

ばいけませんから、ほんの僅かな時間ですよ」

「お前たち、あとで懲罰だからな！ それと写真も全部提出しろ！」
くそつ。斯衛衛士たる私が、まるで尻尾を巻いて逃げてるみたいだ！

◇ ◇ ◇

X F J 計画専用棟 主任執務室

山城さんにお茶を出し、私も飲んでやつと落ち着いた。

ふう。主任たる私が、まるで小娘のような振る舞いをしてしまったものだ。

「……というわけで今回は、国連に預けられている元訓練兵で偉い方の娘さん達も視察見学生として同行しています。彼女たちの基地および演習見学の世話をお願いしますわ」

「了解しました。C P オフィサーのカナレス伍長あたりをつけましょう」

巨大B E T Aを倒したあとどうやって日本に帰ったのかを聞いたら、驚くことに巡行形態になってZガンダムの自力で帰ったというのだ。

「……？
いったいあの戦術機の内燃機関や推進はどうなっているのだろうか？」

「それにしても不知火・弐型。ソ連時とはずいぶん変わりましたね」

「ああ、あれがX F J 計画の集大成であり完成形です。あの新型モジュールを装着することによって、不知火・弐型は飛躍的に性能が向上しました」

「あの形態でブルーフラッグに出していらっしやるの？ 時間的に慣熟もまだ不十分でしょうに」

「ええ。事情があつて、開発衛士にも整備兵にも相当無理をさせてしまいました。ですが皆、私の無茶によく応えてくれました。おかげで初戦のアフリカ連合ドゥーマ小隊との演習は、全四機撃墜の快勝をかざる事が出来ました」

「……………順調ですわね。文句などつけようもないくらい順調その

もの」

「山城さん？ 不知火・式型がどうかしましたか？」

「わたくしが今回ユーコン行きに使った航空機は、前回の輸送機ではなくVIP用のチャーター機でした」

「はあ。それが？」

「そこには補佐の神宮寺軍曹や視察見学生のお嬢さん達の他に、別の一団も同乗していました。何でも「XFJ計画調査委員会」の方達だとか」

「——!!」

そうか、ついに彼らが来たのか。

「妙な話ですわね。調査委員会とは、成果のあがないプロジェクトを精査し、中止すべきかを吟味するためのもの。なのに、ここまで順調なXFJ計画に調査委員会などが作られたのですから」

「山城さん。その調査委員会の人と何か話をしたのなら、教えてくれないか！」

「……ええ。篁さんにとっては耳に痛い話になりますが、話さないわけにはいきませんね。代表によれば、いま製作されている不知火・式型は欠陥試作機だということです」

グラリ目の前が眩むほどの衝撃を受けた。

皆が心血注いで作り上げた、あれほどの機体が欠陥機だと!!

「篁さん、耐えなさい。あなたは開発主任。いずれ彼らと対面することになります」

対面か。それは対峙と同義かもな。

「私は……大丈夫です。冷静とはいきませんが、彼らの情報を正しく聞くだけの理性は持ち合わせています。続きを話してください」

「ええ。私の隣に居た方は帝国技術廠の相伴中佐という方でした。そして……」

調査団の長は相伴中佐か。

彼は巖谷のおじ様と同じ技術廠の者ではあるが、おじ様の日米共同開発に最後まで反対していたという。

そしておじ様の話ぶりから、どうもおじ様とライバル関係にあるら

しい。

山城さんが話してくれた、彼との会話はこうだ。

——「カムチャツカの英雄殿と御同席とは光栄だね。よろしく頼むよ」

「恐縮ですわ。ところで中佐殿はユーコンへはどのような御用で？」

「ブルーフラッグにおけるXFJ計画の不知火・式型の性能試験調査だよ。かの機体、わが国の導入には問題がある可能性があるのですね」

「問題ですって？ 不知火・式型は、ソビエトにてわたくしが試験記録を行いました、優秀な機体でしたわ。BETAの撃破数は他の機体より圧倒的。ソ連機チエルミナートルに次ぐ記録でしたが？」

「つまりは莫大な予算を投下したにも関わらず、ソ連機より劣る機体しか叶わなかったのだね。ならばソ連製の試験機導入を検討した方が、より理にかなった戦力拡充をはかれるとは思わんかね」

「い、いえそれはチエルミナートルが凄いのではなく、乗っていたのが紅スカーレット・ツインの姉妹だからですわ。あれは一種の強化人間。あれの戦績をソ連機の実力とか思って購入したら、思いつきり爆死いたしますわ！」

「爆……死？ なんだ、私はテロでも仕掛けられるのかね」

「い、いえこれは一種の比喻表現で……つまり目も当てられない勘違いをするということですよ！」

「それに問題は性能面ではないのだよ。かの機体は不知火・壱型柄の問題点を改善するために、アメリカでしか作れないパーツを多々組み込んでしまった。つまり日本独力では作れず、軍事面でアメリカに重要な部分を握られることになるのだよ」

「構わないでしょう。アメリカと戦争するわけでなし、BETAに勝つことが第一なのですから。また予算面でも、あそこまで仕上がった不知火・式型を今になって捨てるなどあまりに愚策。税金をドブに捨てるようなマネは、国民に対してあまりに不誠実ですわ！」

「ではXFJ計画を破棄することで、より国民の負担を減らせる妙

策があるのならどうかね？ その道筋があるのならば、それを選択する事をこそ、より国民のためとなるのではないかね？」

「なん……ですって？ 大伴中佐殿、どこかと手を組みました？」

「しゃべり過ぎたようだ。まあ不知火・式型の評価は公正にさせてもらうよ。日本帝国の将来を担う大事な次期主力機候補だからな。中尉はアレに思い入れがあるようだが、結果がどのようなものであれ受け止めてほしい」

「難癖つけて落とす気満々なように聞こえるのは、わたくしの耳が腐っているのかしら」

「山城中尉。もし武家に戻り日本帝国のために働きたいと考えるなら、私に相談するといい。貴官の居場所と大いに働ける任務を私が用意しようじゃないか。ハッハッハ」——

——「といった感じですよ。あまり楽しい空の旅路ではありませんでしたが、篁さんにとってはもっと楽しくなりますわ」

「来たのが大伴中佐なら、たしかに楽しくはないですね。おじ様にとって因縁の相手ですから」

「しかし今までの戦術機ではBETAとの戦闘に不十分だから、X FJ計画がはじまったのでしょうか？ 防衛計画が急務の中、『アメリカが嫌いだから中止』など出来るわけじゃないでしょう」

「ですが彼の言う通り、不知火・式型は日本独力で作れない機体でもあります。稼働時間を稼ぐためのパーツはボーニング社でしか生産できませんし、跳躍ユニットは大出力のジネラルエレクトロニクス製 FE140に換装しています」

「でもあの方、本当に妙策とやらがあるのかしら？ ここまで完成した計画を潰して『代案はこれから考える』ではすまないでしょう」「ええ、あるのでしょうかね。今の話でだいぶ予想がつかまりました。ですが山城さん。これは日本帝国の政治の話だ。あなたはこれ以上踏み込むべきではありません」

奇しくも、昔おじ様が私に言った事と同じ忠告をした。

「……そうですわね。わたくしは戦術機中尉。政治なんかを考えた

ら、BETAの群れに飛びこむことは出来ません。さて、そろそろハルトウィック大佐にご挨拶に行きませんか。お茶をご馳走さま」

山城さんは立ち上がり綺麗に踵を返すと、部屋から出ていった。

ああ、これが無ければもっと楽しい話もできたのに。

85話 ジェリドの奇跡

ユーコン陸軍基地 総合司令部十二階
プロミネンス計画本部

さて、陽動外交任務の本番だ。

司令部に神宮寺軍曹ことまりもちゃんと到着の報告に出向いた。

対面したハルトウィック大佐は相変わらずの貫禄あるオツサンだった。

「国連軍日本支部、副司令代理として山城上総中尉および副司令補佐官・神宮寺まりも軍曹ただ今参りました」

「うむ……やはり香月博士は来られなかったのだね。今後について話したいこともあったのだが」

「はっ。香月副司令は事態の急変に伴う問題に追われ、基地を離れられない状況にあります。なにしろ基地が建設された途端、近場で第七艦隊の壊滅という悲劇が起きてしまわれたもので」

いや、横浜基地って言い訳には事欠かない場所だね。

まりもちゃんも平然とこんな嘘をスラスラ言えるあたり、さすがあの香月博士の友達やれるだけあるね。

「そうか。そちらがそのような悲劇に見舞われる中、こちらはこのような大規模演習などを催して申し訳ない限りだ。して、香月博士から何か言伝でも預かってはいないかね」

「はい。それは……」

しかしまりもちゃんの言葉は遮られた。

ハルトウィック大佐の秘書官リンツ少尉というメガネ娘が、慌てた様子で大佐に報告をしたのだ。

「大佐、ただいま米軍派遣部隊指揮官の【ジェリド・メサ中尉】が本館前にいらっしやっただとの事です。すぐに大佐に会わせると」

なっ！ 【ジェリド・メサ】だとオ!!?

「いま日本支部の方と面会中だ。『待っている』と言っておきたまえ」

「それが、『着任の報告などすぐにすむ。米軍の貴重な時間を食わせるな』とのことです」

うおおおおおッ、その傲岸な物言い！

『米軍』を『ティターンズ』に変えたら〃ジエリド〃そのものだあッ!!

「米国人の傲岸不遜は仕方のないものか。山城中尉、神宮寺軍曹。申し訳ないが……」

「わたくし達にかまわず、すぐ呼んでください！ ジエリド・メサ中尉をッ!!」

「う、うむ？ どうしたのかね、妙にはしゃいでいるようだが。米軍の派遣部隊指揮官はそんなに有名であったのかね？」

ジロリと恐い目でにらむ神宮寺軍曹も何のその。

思わぬゼータキャラの登場で、オレの心ははしゃいでいた。

いや、また名前だけが偶然一致しているだけの別人ってのは分かっているんだけどね。

それでもこういつた偶然に出会ってしまうと、心ときめくのがガノタの心臓。

震えるぞハート！

だがズカズカ入って来たその男を見ると、燃え尽きるほどヒートした!!

「お会いできて光栄です、プロミネンス計画総責任者どの。自分は米陸軍派遣指揮官のジエリド・メサ中尉です」

なんと、ビジュアルまでもゼータのジエリドそのもの！

逆立った金髪リーゼントに人を見下したかのような切れ長の目。

声までも魅惑の井上和彦ボイスっぽい気がする！

奇跡だ！ 宇宙世紀のかませ犬が、この世界にも生まれていたなんて!!

「さて、こちらから言っておきたい事は一つだ。おれ達米軍派遣部隊は国連の干渉をいっさい拒否する。こちらは最新鋭の戦術機データを提供するんだ。文句はあるまい」

ジエリドの不遜な物言いに秘書子ちゃんがキレた。

「ジェリド・メサ中尉！ ハルトウィック大佐に対しあまりに失礼です！」

「殴ります！ 女みたいな名前でも何が悪い！ オレは男だよオオオ！！」

秘書子ちゃんは青い顔をしてオレに抱きついて止めた

「ヤマシロ中尉！ 本部での暴力行為は軍法会議行きですよ！」

クツ、そうなのか。お嬢さま言葉の呪縛に抗ってまで、あのシーンの再現に挑戦したのに！

「あと中尉は男だったんですか？（モミモミ）……いえ、間違いなく女性の胸ですね」

あつ、やめて。愛が生まれちゃう。

秘書子ちゃん、じつは隠れ才能のテクニシャン？

「フツ、元気の良い姉ちゃんだ。演習で当たったならちゃんと男扱いしてやるよ。所属はどこだ？ 東洋系で威勢がいい所から、中華のバオフェンズあたりか？」

「メサ中尉、この方は代表開発衛士ではないよ。賓客として招いた乙ガンダムの搭乗衛士カズサ・ヤマシロ中尉だ」

ハルトウィック大佐の言葉に、ジェリドは目をむいてオレを見た。

「なにイイイ！？ この女同士でじゃれ合っている小娘があっ！」

くうううっ見ないで！ なんか男に見せたらヤバイ表情かおしてる気がする。

女同士で人前で妙なことになっているオレ達を見かねたのか、まりもちゃんが助け船を出してくれた。

「リンツ少尉。ご無礼はお詫び申し上げますが、そろそろ……」

「あ、申し訳ありません。つい素敵な感触だったもので」

リンツ少尉はやつとオレの胸から手を離れた。

ふう。まりもちゃんのお陰で、ようやく秘書子ちゃんの魔性テクから解放された。

「信じられん……こんな小娘が、おれ達米軍テストパイロットが心血注いだラプターをオシヤカにしたのか？」

ラプターと模擬戦したのは白銀だし、オシヤカにしたのはユウヤな

んですけど。

しかしこの勘違いは都合が良いから、そのままにしておこう。

お楽しみのために！

「コホン。ジェリド・メサ中尉、それではご自身の腕でためしてみたいいかが？」

「なんだ、模擬戦でもやろうってのか？ そいつは願ったりだが、アంతのバックの許可やらないのか？」

「軍曹。日本支部副司令から、このブルーフラッグへ華を添えるご提案を携えていますわね？」

「まりもちゃんは『このタイミングで』という顔をしながらも、素直に述べる。」

「はい。『このブルーフラッグにて最も勝ち星を取った組織代表に、好きな形でZガンダムとの模擬戦を許可する』と副司令から承っております」

「ほう！ そいつは願ったりだ。ユウヤ坊やが貶めたラプターの価値を、おれが取り戻してやるぜ！」

「おつ、カミーユ出撃の報を聞いた時と同じ顔。」

「だったら、カミーユにボコボコにやられて帰ってきた時の顔もリアルで見たい。」

「燃えてきたぞおおおつ！」

「いや篁さんの義理からも、アルゴスを応援しなきゃなんないんだけどさ。」

「でもリアルジェリドと戦って、ゼータの原作再現をしたいんだよオ！」

「ごめん。ガノタの呪われた性分から、アメリカを応援しちゃうよ！」

「——そんな儂い夢を見た幸せな時もあったね。」

「しかしそれは、無情な一本の電話によって断ち切られた。」

「RRRRRR……」

「内線電話が鳴り、秘書子ちゃんがそれを取り一言二言対応。」

「そしてハルトウィック大佐に内容を伝える。」

「大佐、遅れていた大東亜連合代表チームが今到着したようです。」

代表のパプティマス・シロツコ氏には何時お会いになられますか？」

「パプティマス・シロツコ!!」

「ど、どうしたのかねヤマシロ中尉。いきなり大声をあげて」

「ま、まさか、大東亜連合はあのパプティマス・シロツコが出ますの
!!」

「あ、ああ。どのシロツコ氏か知らんが、大東亜連合の出場チームは、その名の御仁が代表を務めるエウーゴに替わったと聞いた。知り合いかねヤマシロ中尉。彼の情報はまるでなくて困っていた所だが」
ガクリ。

力が抜け、膝をついてへたりこんだ。

「中尉!! どうなされました!!」

シヨックでまりもちゃんの声も届かない。

「お、おい。さっきまでのバカっぽい浮かれぶりから何があった?」

「ああ……どうやらわたくし達は戦う運命にはなかつたようです。

ジエリド如きかませ犬キャラが、シロツコに勝てるはずがない」

「なんだとおっ!!」

86話 シロツコ、ジェリドと出会う

『シロツコ対ジェリド』

こんな対決カード、結果が見えすぎて草も生えない……と、つい思ってしまったけど。

しかし考えてみれば、使用する戦術機には天地の差があるはずだ。

片や世界唯一の超覇権大国が莫大な開発費を費やし世界最高の技術者を揃えて作った機体。

片や貧乏傭兵団の型落ち機体に町工場レベルの改修を施しただけの機体。

いや、たしかにシロツコはモビルスーツ開発の天才でもあるよ？

でも、シロツコがエウーゴの代表になってまだ二週間程度。

そこから大東亜連合の開発衛士チームを出し抜いて代表になった手腕は大したものだけどさ。

けど、こんな短期間な上に貧乏傭兵団のエウーゴじゃ、米軍機に対抗できる機体なんて作れるはずはないよね。将来的にはどうなるかわらんけど。

ま、それはともかくオレのリアクションがあまりに面白かったせいか、ジェリドもハルトウィック大佐もシロツコに興味を持った。

そして奴はオレ達が未だ居る中、本部へ通されたのだった。

「君は……まさか、生きていたのか!？」

シロツコはアメリカのジェリドを見ると、目を？いて驚いた。

「あん？ 何の話だ、シロツコさんよ。誰かと間違えてんのか?」

「……失礼、亡くなった友人にあまりに似ていたものでね。このカズサと、こんなにも早く再開した以上に驚いたよ」

そりゃ驚くだろうね。前の世界で『いっしょにクーデター起こそう』とかそそのかして、利用した男なんだから。

「フン。もしかしてカズサも、その誰かさんと同一視して、おれを“かませ犬”だのクソなことを抜かしたのか? いいか、二人ともよく聞け。おれの名は米陸軍教導隊のジェリド・メサ中尉! 戦術機に

かけては負け知らずの男。お前らの知っているマヌケなかませ犬野

郎とは別人だ！」

「……ジェリド……メサ？　それが君の名なのか？　そして私の知っている彼とは別人だと？」

「そういうことだ。わかったかシロッコさんよ」

わっかんねーよ！

余計に混乱してきたわ!!

ほら、シロッコもレアなビックリ顔でかたまっている。

「……なるほど、よく覚えておこうジェリド・メサ中尉。たしかによく見れば、その彼とは別人。彼は君ほどの器量は持ち合わせていなかったよ」

「フフン、そうだろう。おれは“かませ犬”なんて言葉にはまるで縁のない男。それを、このブルーフラッグで教えてやるぜ！」

いかん。奴がしゃべればしゃべるほど、あの男にしか見えなくなってきた。

なのにシロッコはもう適応してるみたいなのはさすがだな。

それによく見たら、もう翻訳機を使わずに普通にこの世界の人と会話してるし。

やっぱり天才なんだな、この男。

「さて、ハルトウィック大佐殿を前に他の人物と長話とは失礼いたしました。改めて名乗りましょう。自分はパプティマス・シロッコ。エウーゴ傭兵団の長を務めておりますが、此度ガルードスに代わり大東亜連合の出場代表となりました」

と、ようやく本題。本来の相手に着任の報告をはじめめる。

「よろしくシロッコ氏。まずは君に関してはおわからない事が多すぎるので、いくつか質問させていただこう。どうして傭兵団が正規兵に変わり代表になったのかね？」

「こちらの実力を示した上のことです。またエウーゴ前責任者のこのカズサから正式に引き継いだというのも大きかった。彼女の存在は、あちらではかなりのものですからな」

「なるほど、それで山城中尉は君のことを知っていたのだね。彼女は君の実力を高く買っているようだ。あとで彼女にも君のことを聞

かせてもらおうとして……」

聞かないでくれえ！ 別の世界線の未来人とか、どう説明すりゃいいの？

その世界の戦争が何故か、そのまた別の世界でアニメになっついて、それを見ていたとか。

うわああああっ、説明難易度H i m M A X !!!

「傭兵団であれ大東亜連合が正式に認めならば、こちらはそれを問わない。だが、そちらの要求には大きな問題点があるな。演習配備機体は四機が規定だが、大東亜連合は君の一機のみで出場だと？ 正気かね」

「無論、正気であり本気ですとも。もし規定の問題があるなら、整備士を作業機械にでも乗せて頭数はそろえますが」

無茶苦茶言ってるな、この男。

「あまりにここユーコン基地の開発衛士たちを舐めてやしないかね。彼らは各々現地で腕前を認められて開発衛士となっているのだよ。君がいかほどの腕前でどのような戦術機を擁しているか知らないが、まともな演習になるとは思えんがね」

「では、演習にて私が一度でも撃墜判定をもらったならば、残りの対戦はすべて棄権いたしましょう。それでいかが？」

「しかしだ。このブルーフラッグの目的は勝敗などではない。さまざまな機体を競わせ、そのデータを蓄積し共有し合うことにより戦術機開発の進歩向上をはかる。それが趣旨だ。各代表の四機が君の一機のみと戦ったところで、有用なデータが得られるとは思えないのだがね」

「そうですね？ 少なくともそのカズサはそのデータを欲しがると思いますか？」

はあ？ いきなりオレを話題に入れてくるとか何？

「何故わたくしがその戦闘データを欲しがりますの？ いえ、たしかにシロツコさんの戦闘は見てみたいと思います。でもあなたの反応速度についてこれる機体なんて、今のエウーゴにあるとは思えませんか？」

「私の使う戦術機には、君からもらったアレを組み込んでいる。感謝するよ。それがなければ、さすがにこんな無茶はできなかつた」

「アレ？ アレってなに……あ！ まさかサイコフレーム!! もう戦術機に使用してるんですの?! まさか!」

「たしかに戦術機とのマッチングにはだいぶ苦労させられたがね。さほどの事はないよ。して話を戻すが。どうだね、その機体の戦闘データを欲しいとは思わんかね?」

「そ、それは欲しいですわ! バイオセンサーがサイコフレームで強化しすぎですから、発動したら出力が上がりすぎて制御が大変で……ムググツ!!」

「まリモちゃんが後ろからオレの口をふさいだ。」

(中尉、あまり技術関連の話は迂闊に口にしないよう)

ああ。そういや、こういう話は出さないのが開発衛士の守秘義務つてやつだっけ。

その様子を黙って見ていたジェリド。面白そうにニヤリと嗤った。「フツ、ハルトウィック大佐殿。どうやら、そいつの機体にはZ技術の一端があるようですな。とりあえず出場をさせてみては?」

「ウム……このような特例は各国の利害調整機関としては好ましくないが、Z技術の一端を知る機会とあらば、やむを得ないだろう。シロッコ氏、君の一機の出場を認めよう。ただし先ほどの言葉通り、君の機体が撃墜判定をとられた場合、その時点で残りすべてを棄権するという条件でだが」

「ありがとうございます。この演習、微力を尽くしましょう」
「なんかオレ、上手く使われちゃったみたい？」

まあいいか。元々シロッコに研究させるために、サイコフレームを渡したんだし。

「では、その最初で最後の相手はわが米軍教導隊インフィニティズが務めよう。Z技術の片鱗くらいは見せてくれよ、シロッコさんよ」
「フツ、君が相手とは光栄だ。まるで古い友人のように思えるのでね」

ライバル同士つぽく二人は不敵に嗤いあう。

でも、どうしてもジェリドがシロツコに勝つイメージがわかないんだよね。常識的に考えればアメリカの方が圧倒的に有利なのにさ。

ジェリドのこの自信満々な顔も、威勢よく出撃するもコテンパンにやられて帰って来て『ちつくしよおおお』と遠吠えするフラグにしか見えないんだよなあ。

87話 鎧衣ちゃん、鎧衣さんと出会う

ギョオオオオオン

演習区域のビル街を模した演習区域。

それを疾走し銃撃戦を繰り広げる戦術機たち。

その中であって、二機の機体は驚くべき機動で相手側を翻弄している。

日本帝国の次期主力戦術機【不知火・弐型】だ。

連携はあまり上手いとは言えない。

されど圧倒的な性能差とそれを引き出す衛士の技量で、相手の連携をズタズタに引き裂いていく。

さすがユウヤとお猿さんタリサだね。変態機動がさらに磨きがかかっている。

その様を大型モニターで見ている観客ギャラリたちの中の一部、第二〇七訓練B分隊は大はしやぎだ。

「あれが帝国の次期主力戦術機！　すごい性能だね!!」

「相手の戦術機がまるで相手にならないですね！　本当にすごいです」

「あれが帝国に配備された暁には、必ずや国土奪還は成るだろう。

頼もしいことだ」

「乗ってみたいな。あれ、すごく気持ちよさそう」

しかしそんな彼女らの中にあつて、沈んでいる娘が一人居る。

榊首相の娘の榊千鶴さんだ。真面目な性格でメガネツ娘の二〇七B分隊の分隊長。

昔の漫画のメガネ委員長みたいな子だ。

「……みんなごめんね。私の指揮が至らなかったせいで、もうあの戦術機には乗れなくなっちゃって」

「そんな！　衛士になれなかったのは榊さんだけのせいじゃないよ！　ボクらみんなが至らなかったせいだよ！」

「そうだと榊。皆もお前も精一杯やった結果だ。もつとも彩峰と衝突しすぎな所は改善してほしかったが」

けれど、ますます落ち込む榊さん。

「そうよ……あんなの分隊長失格よ。あんなの……あんな失態なんて……」

うーん。真面目すぎる性格か、鬱になりやすい子だな。

中尉なんて現場指揮官の階級にもなったことだし、何かカツコイこと言っておさめたいけど、榊さんのことも総戦技評価演習のこともよく知らないしなあ。

しかしその役目はオレではなく教官のまりもちゃんの役目だった。

「榊、そして二〇七B分隊の貴様たち。貴様たちは衛士になれる実力がありながら、なれなかった。それは仕方がない。そういう事はある」

シブイ！　そうか、こんな風に言えばいいのか。メモメモ。

「だが榊よ、今貴様が考えねばならぬのは『あの時どうすれば良かった』などではない。今の自分の立ち方だ」

「教官……私は自分がどう立てば良いのかわかりません」

「だろうな。私も昔、取り返しのつかない失敗をした時はそうだった。だからつねに己に問い続ける。それしかないのだ」

うわあああつ、まりもちゃんカツコイイ！

オレもこんなこと言えるシブイ大人になってみたい！

「し……失礼します！」

榊さんは顔を伏せて駆けだす。

「あつ、榊さん！」「榊さーん!!」と皆が呼んで追いかけてようとするも、まりもちゃんは止める。

「よせつ。一同、榊を追ってはならん。一人にしてやれ」

「でつ、でも教官！」

「言うべきことは言った。あとは榊がどう受け取るかだ」

くうううつシブさ天元突破！　お嫁さんにして、まりもちゃん!!

……と、教育者のシブいカツコよさに血迷っている場合じゃない。

二〇七B分隊のみんなと青春群像なんかをやっているのも楽しいんだけどさ。賓客の役目もちゃんとやらないとね。

「神宮司軍曹。わたくしは午後の観戦はご一緒出来ません。午後の

【米軍インフィニティーズ対大東亜連合エウーゴ】の演習だけはハルトウィック大佐と見る約束となっております」

「そうですか。ですが何故その演習だけ？ 何かしら政治的な話でもなさるのでしょうか？」

「いえ、そういった事はありません。ただ、大東亜連合方の出場者がわたくしの知り合いなのです。その方の事を少しばかり話すことになっております」

「中尉だけを大佐の元へ送るのは心配……しかし分隊長の榊がこうなった以上、私がここを離れるわけにはいかないし……誰かつけるか」

ああ、リアルジェリドを見た衝撃でトチ狂ったもんね。

しかし、まりもちゃん。熟考した時、考えが口に出るのは軍人として問題だよ。

「一番頼りになる榊はいないし、御剣……は、お偉方にあまり顔を覚えられたくないな。珠瀬はいざ暴走という時、止められないだろうし。彩峰……は止め方にすごく問題がありそうだ。消去法だが、鎧衣が一番か」

結論を出したまりもちゃん、ショートカットで胸のふくらみの薄い男の子のような彼女に声をかけた。

「よし、鎧衣」

「はい、教官」

「貴様に任務を与える。私のかわりに山城中尉の副官としてついていけ。向こうで政治的な話になりそうな場合、私の到着を待てと言え。それと中尉が妙なことをしそうな場合、体を張って止めるように」

やれやれ、信用ないな。

「了解しました。中尉、それではよろしくお願いします」
朗らかに笑って敬礼する鎧衣ちゃん。

くうううっ、可愛い!! なんか男としてではなく、メスとしてそう感じる。

「ええ。じゃ、鎧衣さん。行きましようか」

「了解です」

ヤベエ。悶え死ぬ。

煩惱まみれのオレ様。鎧衣ちゃんと観客席を離れ、本部へと向かった。

◇ ◇ ◇

途中、野外格納庫^{ハカ}のたくさんある区画を通りかかった時だ。やけに整備兵達が盛り上がり上がっている場所に来た。

「うおおおおおつ、ちつきしよう！ やられたあつ!!」

「糞、バオフエンズの姉ちゃんどもをあしらうなんざ、新型を甘くみてたぜ!!」

なんなんだろうね、すごくヤロー臭い連中だけど。

そんな中に見知った顔がいるのを見つけた。

いつもユウヤと一緒にいる金髪の専任整備士だ。

「ヴァインセントじゃありませんか。何をしてるんですの?」

「ああ、カズサ姫……じゃなくて山城中尉」

「任務外は好きに呼んでくれてかまいませんわ。それよりこれは何の集まりですか？ やけに盛況のようですが」

「バクチですよ。ブルーフラッグの勝敗を賭けてね。じつはさっきのアルゴス対バオフエンズで大きく稼ぎました!」

「……ああ、整備兵の間では人気でしたわね。アルゴスの方が不利とみられてましたの」

「おおつ、バオフエンズ絶対有利を覆してアルゴス勝利! いやあ、丹精込めて整備した甲斐があるってもんですよ」

たしかに不知火・式型の完成度を知らないんじゃないや、新型なんて不安でしかないからな。

ヴァインセントは上手くやったな。

……うん? だったら、午後の米軍対大東亜連合の勝負。

シロッコのことを誰も知らない今なら、大勝ちできるんじゃないや?

「では次の米軍教導隊^{インフイニティズ}VS大東亜連合^{エウーゴ}の勝負も賭けになりますの

？」

「ああ、あまりオイシクはないですが、一応五分つてのに賭けてます」

「五分？ なんですよ、それ」

「次回の対戦は米軍に駆けるのは禁止なんですよ。代わりに何分で決着がつくかかってのが賭けの内容なんです。で、俺が賭けたのは一番人氣の五分未満。二番は五分以上十分未満ツスね」

「……ふうん、大東亜連合に勝ちはないと」

「いや、カズサ姫の古巣にケチつける気はありませんがね。傭兵のチームでただ一機でだけですよ？ しかも相手は世界一の金満国アメリカ。勝負なんて初めから見えてるじゃありませんか」

「わかりました。では、わたくしが大東亜連合勝利に千ドル賭けましょう。手続きをお願いします」

整備兵たちからザワザワツツとした声が聞こえた。

「は、はあ!! いくら何でも金をドブに捨てるようなものですよ。千ドルも!」

「いいのです。古巣への義理ですから」

「ま、姫の考えがそれなら仕方ありませんがね。あ、一応聞きますけど、スコアプランもやります?」

「何ですよ、それ?」

「掛け金に一割プラスして最終スコアの予想もするんです。当たった場合、配当は二倍になります」

「ではもう百ドル。スコアは米軍方四機撃墜の全滅をお願いします」

途端、ドツと整備兵達から笑い声がおこった。

「うおおおおおつ、大東亜連合のそいつ、どんな超人だよ!!」

「さすが英雄姫、浮世離れしていらつしやる!」

ヤンヤヤンヤとはやし立てられながら、その場を後にした。



「しかし……義理で千ドルは出しすぎじゃないですか。あ、追加プランとかもやっちゃったから千百ドルか」

ポツリと鎧衣ちゃんは言う。

「わたくしは本気で大東亜連合が勝つと思っっていますよ。スコアは……まあシロツコなら、それくらいは、やるんじゃないかと」

「ええっ?! アメリカつてもものすごい戦術機があるって聞いてますよ。それを一機で全部撃墜って……いったいどんな人なんです? そのシロツコさんて」

女つたらしの天才。そう言うしかない奴なんだよなあ。

道の途中、その大東亜連合が使用していると聞いたハンガーの見える場所へ来た。

「たしか大東亜連合のハンガーはアレでしたわね。今は忙しい身だろうから控えますが、演習が終わったら会いに行ってみますか。聞きたいことも多いですし」

「山城中尉がそこまで言う人かあ。ちよつと興味があるな。ボクも会ってみようかな」

しばしハンガーを眺めてから、また先を行こうとした時だ。

ドンツ

偶然そこを通りかかった体の大きな整備兵に、鎧衣ちゃんがぶつかった。

「あ痛たた……ごめんなさい、よそ見をしてて」

「いや、こちらこそ失礼しました。午後には出場なので、やる事が多くてね。つい不注意になってしまいましたよ」

あれ? このおじさんのこの声、どこかで聞いたことがあるような?

それにあの体格にも見覚えが?

………!!

「あつ、あああ! あ、あなた鎧衣さん?!」

「え? 鎧衣ですけど、どうしたんです中尉」

「いえ鎧衣さんではなく、鎧衣さんの方で……ああ、ややこしい!! そちらの整備兵の方! あなた“鎧衣さん”ですわよね?!」

そうだ、スパイの鎧衣さん！

“鎧衣” って姓に聞き覚えがある気がしてたけど、彼のことだった！

ユーコン基地に出発して以来会ってないんで、すっかり忘れてた。

「え？ この人も……あれ、もしかして父さん？」

鎧衣ちゃんがおじさんの顔を見ようと覗き込むも、おじさんは顔を伏せ背をむけた。

そして脱兎のごとく素早く駆けだして、たちまち見えなくなった。

「父さん？ まさか……」

「百パーセント凶星の反応でしたでしょう、アレは。それにしてもあなた、あの鎧衣さんの娘でしたの？」

「う、うん。父さんの仕事は貿易商のはずなんだけど、ここで何してるんだろう。山城中尉は父さんのこと、知ってるんですか？」

「ええ、前にお世話になった方ですが。それにしても“貿易商”ですか。いわゆる偽装身分^{カバ}というやつですわね」

鎧衣親子の再会か。

しかしスパイなんて職業の彼が、任務中に偶然娘と会ったら気まずいなんてもんじゃないね。

88話 シロッコ対ジエリド

鎧衣さんが大東亜連合の整備兵なんてやっている事は気になるけど、それはともかく。

オレと鎧衣ちゃんも本部のモニタールームにてハルトウィック大佐、秘書子ちゃんことリンツ少尉と「米軍インフィニティーズ対大東亜連合エウーゴ」の演習を大型モニターで観戦だ。

両者の機体がモニターに映し出されたのだが、シロッコの使っている機体を見て目が点になった。

「あれがシロッコさんの機体？ あれは、いくら何でも……」

「背中に銃がいっぱいですねえ。あんな戦術機もあるんですか」

「あるわけないでしょう。鎧衣さん、アレはヘンな戦術機です。間違った知識を持たないよう」

秘書子ちゃんもあきれ顔。

「シロッコさんは何を考えてあのような真似をしたのだから。あれでは機動戦が売りのF-15ストライクのスピードを殺すだけです」

シロッコの機体は事前に聞かされていた通りの改造F-15ストライクだったが、なんとそれには、背中に4丁もの予備銃器が取付けてあったのだ。

さらに手に持つ重火器はMK-57中隊支援砲。長距離狙撃用のやたらバレルの長いシロモノで、当然ただの突撃砲より相当重い。

要するにドン亀状態のあれでは、まともに戦えるわけではないのだ。

「シロッコ氏はガルーダス相手にF-15の機動で相手を翻弄し、見事四機を撃墜するという離れ業をしたそうだ。しかし、あの改造はその機動を殺している。いったい何を考えているのだろうか」

ハルトウィック大佐も困惑したように言う。

「持っている得物から、おそらく相手を長距離で仕留めるつもりでしょう。ですがステルス機であるラプターは、その位置を特定することがあまりに困難です。加えてインフィニティーズは米軍最強のパイロット。誰であれ位置を掴む事など出来ようはずがありません」

出来ちゃうんだよ。シロッコは最強ニュータイプだし。

しかし問題は、位置を掴むだけじゃラプター相手には勝てないことだ。

「しかしたとえあのような改造がなされなくても、機動戦でラプターに勝つことは不可能でしょう。シロツコ氏の機体はF-15・EイーグレルでさえないノーマルのF-15ストライク。ラプターとはその機動性は雲泥の差です」

そうなんだよな。秘書子ちゃんの言う通り。

シロツコなら時間さえあればラプターを超えるエンジンとか開発しただけで、期間的に動力にまで手を加えられたとは思えないし。……いや待て。それならシロツコなら、機動を捨てた方法で勝とうとするんじゃないか？

あの背中の4丁の予備銃器は、そのための改造と考えるべきか。モビルスーツとかで、あんなのはなかったか……

「ああー、そういうことですか。なるほど、あの経験を生かしているんですね」

オレがあの機体に思い当たったと同時に、モニターから演習開始のサイレンが鳴り響いた。

◆◆♣♣♥♥◆◆♣♣

ジェリド・メサSide

ウウウウウーッ

ダミービルが並ぶ廃墟のような演習区域に、演習開始のサイレンが鳴り響く。

「では状況開始だ。インフィニティ3並びに4、行って来い。3はすぐには終わらせずに多少は付き合ってやれ。4は状況を克明に記録。万一インフィニティ3が手間取るようなら狙撃にて目標を排除。インフィニティ2はオレと予定位置で待機だ」

『了解です。今回は自分一人で決めてみせます』

『大東亜連合のテストパイロットたちを一人一機で征圧したって腕を見てきますね』

今回の大東亜連合は一機のみが相手。インファイニティズ総出で迎えるには過剰戦力すぎなので、こちらも主攻一機と万一の場合の支援一機の二機のみで相手をすることにした。

主攻は堅実な戦闘を得意とするインファイニティ3のガイロス。支援は支援砲撃の専門で名スナイパーのインファイニティ4のシャロンだ。

『インファイニティ4、予定の観測位置に到着。狙撃体勢にて状況報告をはじめます。インファイニティ3の滑走を確認。相手機は……確認とれました。F-15改修機、現在高所に場所をとっています。得物は超長距離砲を携帯。ですが狙撃も可能なほど無防備です』

ちっ、素人か？

どうやら狙撃でこちらを沈める考えのようだが、ステルス機のラプターをそう簡単にとらえられるものか。

ガイロスならば、そんなマヌケに接近して仕留めるなど造作もない。

さすがにこれ以上手は抜けないし、どうやら見込み違いだったか。

『ターゲット、超長距離砲をかまえました。ですが銃口はインファイニティ3とはまったく見当違いの方向です。……え、まさか?! 駆動すらしてないステルス機の位置を捉えられるはずが……』

「インファイニティ4?」

——ピーツ

『なっ?! 通信が?! シャロン!!』

シャロンとの通信が途絶した。

『おいインファイニティ4! どうした応答しろ!』

「落ち着けインファイニティ2。ブルーフラッグにおいては、撃墜判定をとられた機体との通信はできないようになってる。つまりは、そういう事だ」

『シャロンが……狙撃で喰われた? どうやって位置を……』

「しかも観測射撃すらしないで一発。とんだバケモノだな。ともか

くステルスは過信できないようだ。俺達も出るぞインファイニティ2。それとインファイニティ3をいったん呼び戻す。仕切り直しだ」

だが……

『い……インファイニティ1、こちらインファイニティ3。現在、敵の集中砲火を浴びせられています！ 何の索敵もなしにどうやってステルス機を……うわっ』

——ピーッ

「ガイロスとも通信途絶。」

「……遅かったか。喰われやがった。やはり奴もZ技術の関係者、甘くはないってことか」

くそっ、莫大な開発費をかけたステルスを、こっも簡単に破りやがって！

開発陣連中も、この真相究明で今夜は眠れないだろうよ。

“サイコフレーム”とやらは敵位置の捕捉技術のことか？

『インファイニティ1、敵はどうやってステルスを破っているのでしょうか』

「ここで考えてもわからん。今は『なぜ』『どうして』は禁止だ。そして隠密機動戦は捨てる。ストライクの時代に戻って猟犬ドッグファイトとしゃれこもう」

ダウンッ ダウンッ

「また来るぞ、スネーク!!」

推進を蛇の蛇行のごとくくねらせると、そのすぐ脇に着弾マーカーが記される。

ダミービルを縫ってダミー砲撃音はほぼ正確に機体をかすめてくる。

ラプターの高速機動をフルに使ってなければ、確実に喰われていただろう。

くそっ。長距離砲撃戦でこっもラプターが遅れをとるなんざ、開発陣にとっては悪夢そのものだろうぜ。

通常は、相手がステルス機であるこちらにいかに肉薄するかを模索

する方だつてのに。

「……………?」

だがやがて、狙撃警報がまったくなくなつた。

奴は俺たちを見失つたのか？ まさか？

『インファイニティー、奴は移動をはじめました。行き先はおそらくダミービル密集地』

「障害物エリアか？ つまりは近接格闘戦を誘つてやがるのか」

『勝負を捨てたのでしょうか？ こちらの近接格闘戦データ獲得のために』

インファイニティーズは米軍教導部隊を教導する、いわばトップオブトップだ。

米国内を巡つて近接格闘込みの模擬戦では一度も負けてないし、一機もキルされていない。

しかも相手機との機動力は隔絶した差がある。

だのに何だ、この嫌な予感は何？

『目標、間もなく射程に入ります。ワンキルできめます』

レオンの言う通り、相手マーカーへの接近が近づいてきた。

相手機体はF-15。相手がどう動こうと、勝負は一呼吸する間に終わるだろう。

しかしこちらが二機も喰われた以上、油断はしない。

「先走るなよ。撃つタイミングを合わせる。よしッ、今……」

瞬間、背中に冷たいモノを感じた。

「いやっ、よけろっ！ フルスロットルッ!!」

【F-15がラプターより速く撃てるはずがない】

そんな常識にとらわれず回避を選択できたことは、自分を褒めてやりたい。

機体の軌跡を追うように殺到する36mm砲弾。軽い衝撃。

統合仮想システムの判定は至近着弾による右下大腿部装甲の塗装剥離。

くそつ、今のは確実にこちらより速かったぞ。

ラプターがF-15に早撃ちで負けるなんざ、どうなっているんだ？

米国最高の技術で火器管制システムを組んだ開発陣は涙モノだな。

今夜は開発陣の先生方と相手技術の洗い出しで眠れないだろうが、それは後の話。

「レオン……インフィニティ2、相手をF-15と思うな。最強の相手と見て速度差と連携で圧倒しろ！」

『了解！』

89話 ギミック満載戦術機

ジェリド・メサSide

バラバラバラ

「うおおおおっ!! 何だアレは!!」

どのような腕であれ、たった一機では限界がある。

であるからこそ、奴の誘いにのり高速機動戦をしかけた。

だが待ち受けていたのは、まるで小隊の一斉射撃のような弾幕であつた。

だがレーダーに映るマーカーは、やはり奴のたった一機。

しかして、その弾幕の正体を見て驚愕した。

奴の機体の背中から四本の隠し腕が伸びており、それらが四丁の予備銃器を操って弾幕を張っていたのだ。

しかも本来の両腕に持つ長距離砲を撃ちながら!

『なんだアレは?! いったいどうやって?!』

「仕組みなんか考えるなインフィニティ2! 回避に専念しろ!」

◆◇♣♥◆◇♣♥

山城上総Side

「今のはよく避けましたね。衛士バイロットをほめるべきでしょう」

アレが動いたなら、勝負は決まるかと思っていた。

だが、初見にも関わらずよくかわした。

あれはニュータイプでもなければ難しい回避にだろうに。

実際、僚機の方は撃墜判定は免れたものの、けっこうなダメージ判定をもらって動きが鈍い。(ブルーフラッグにおいては、機体のダメージ判定によって、負傷した部分は動きが制限される)

アメリカのジェリドもやるな。

「い、いやそれより、アレは何なのです?! いったいどういう仕組みで!」

「まさか、背中の中の四つの銃器は、同時に撃つためのものであつたと

は。しかし……」

二人はさっきのラプターの回避より、現在のシロツコ機に驚いている。オレも予想はしていたが、やはり実際見ると衝撃的だ。

シロツコのF-15は背部から四本の隠し腕が伸びてそれぞれに銃を持ち、接近する二機のラプター目がけて射撃を開始したのだ。

「【隠し腕】という奴ですよ。シロツコは、ああいうギミックを作るのが得意なんです」

隠し腕はジ・Oにもついていたしね。

メツサーラの変形機構なんかも変形時間一秒というスゴいものだし。

「しかし……信じられん。四本すべてがそれぞれ自在に動き、あまつさえ全てがラプターより速く射撃し、ラプター二機を追い詰めている」

シロツコなら自在に動く隠し腕なんて簡単に作れちゃうだろう。

そしてそれをサイコフレームで動かしているのなら、ラプターであろうと撃ち遅れて当然。

トリガーすら引く必要のないサイココントロールシステムで動かしているのだから。

そう、これはまさに【ファンネル】だ！

ハマーンとの戦いで、シロツコはファンネルを見た。

そして機動力で劣る機体で格上の機体と戦うにはこれしかない。踏んで、現代の技術で可能な範囲で再現したのだろう。

「ラプターはほぼ死に体。だが、よく耐えているな」

至近から銃撃にさらされあちこち損傷判定をくらいながらも、ラプターは機動力を生かして重要部分に被弾させない。

「なぜ逃げないのでしょう？　こんな状態なら一時離脱し、態勢を立てなおすのがセオリーでは？」

「それをしたら、また長距離砲の狙撃がきます。そしてラプターとはいえ、あそこまで損傷したら逃げきえることは不可能です。ですが、あのファンネル……いえギミックには弱点があります。ジエリド中尉はそれを狙っているのでしょうか」

ジェリド、かませ犬なんて言ってゴメン。
たしかに君はゼータの彼とは別人だ。
シロッコを確実に追い詰めているよ。

◆◇♣♥♠◆◇♣♥

ジェリド・メサSide

「くそっ、先読みがヤバすぎる！ ラプター二機を相手に、どうしてここまで先手をとれる!？」

噴射地表面滑走全開で砲弾をかい潜り移動する。

それを追うように爆発と轟音はあたりを破壊し、黒煙を大量に発生させる。

あの複数の銃器を扱うシステムは、自動追尾の発展だろうとは思
う。

だが、それにしてもこちらの行動の先読みがすぎるのだ。

まるでこちらの行動を呼んでいるかのように的確に弾幕を張りこ
ちらの行動を抑え、さらには追い詰めていく。

しかもサブアームのそれぞれがまるで意思を持っているかのよう
に別々に動くのだ！

「だが、まさか弾まで無限というわけではあるまい。おれの読みで
は、あと少し……」

奴には弾倉交換が出来ないという弱点がある。

あれだけの数の交換にはひどく手間がかかるうえ、弾倉を入れ替え
ている間に直援をしてくれる僚機もない。

だからこそ、この鬼ごっこから逃げずに付き合っているという訳
だ。

『イ、インフィニティー！ ダ、ダメですッ……』

その通信を最期にレオン機の動きが止まった。

とうとう損傷が致命的と判定されたか。

だが、ギリギリ間に合った。

奴の36mm砲弾は止まった。弾切れだ！

おれはすぐさま機体を反転。

彼我の差は約千二百メートル。

「その鈍重な機体じゃコレは避けられねえぜ。ダイエツトでもするんだな」

AMWS—21チェーガンを奴に向けロックオン。

サークルのド真ん中に映る奴のザマは、なす術なく立ち尽くしているようにしか見えなかった。

“勝った”と思つた。

そんなクズな慢心が、本来0, 3秒で弾くトリガーを一秒まで延ばしちまった。

そのただ“一秒”の間だった。

奴が全ての銃器、背中のサブアーム、全身の装甲を着脱パージしたのは。

「な、なにイッ!? くっそおおお!!」

本当にダイエツトする奴があるか!

戦術機にクセに、しかも一秒で!!

バララララッ バラララララッ

あまりの着脱の早業に、またしてもトリガーを弾くのに一秒。

その一秒の間に奴は予測位置をはるかに超えた場所に水平噴射跳躍。ホライズナルブースト

フルオートが何もない空間に空しく鳴り響く。

奴は弾道を大きく迂回し、こちらに迫る!

くそオ! 銃口の修正より、旋回しながら迫る奴の方が早い?

もつと早く動いてくれ!!

バララララララララララッ……

フルオートのライフル音が虚しく響きわたった、その後……

「くそ……」

コクピット内の照明が赤く染まり、主機駆動音が遠ざかる。

薄暗い中、網膜投影に映し出されているのは、おれのライフルバレルのすぐ横にアーミーナイフを突きつけている奴の姿だった。

コクピットへの致命損傷判定を受け、すべての機能は強制停止。

「これが負けか……十何年ぶりかな」

脱力して背中中のバックレストにもたれかかった。

演習終了のアナウンスが終わったあと、奴から通信が入った。

『米陸軍教導隊インフィニティーズ指揮官ジエリド・メサ中尉。貴官の戦いぶりに敬意を表す。たしかに君は、私の知る彼より優秀だった』

この優男のクセにやけに尊大な男の顔も違って見える。

いったいどんな魔法使いなんだ、機体も奴自信も。

おれは力なく敬礼をして返した。

「パプティマス・シロツコ。アンタの名前は覚えておくよ。多分一生な」

90話 嵐の前の小さな波

篁唯依Side

ユーコン基地統合司令部予備通信室

「あなたは……?」

岩谷のおじ様と通信するために赴いたそこ。だがそこに見知らぬ紳士がいた。

基地内で軍服を着ていない人間ということは、政治家あたりだろうか。

「やあ、どうも。久しぶりですな唯依ちゃん。いや、この呼び方はもう失礼ですな」

「……どこかでお会いしましたか?」

「ええ。あなたから見れば、任官後最初の任務・京都防衛戦直後の頃になりますな。巖谷中佐と話をするために赴いた先にあなたがいました」

「ああっ、貿易商さん?! ……ではありませんね、ここに居るということは。何者です?」

「本当の身分を明かしましょう。帝国情報省外務二課所属、特務課長をつとめる鎧衣左近と申します」

「情報省の方ですか。XFJ計画のことを調べにいらしたのですか?」

「いえいえ。私の任務内容はくわしくお教えできません。が、巖谷中佐のお手伝いであると言っておきましょう」

「おじ様の?!、……いえ中佐の? いったいどういったお手伝いを?」

「その話ですが、彼本人から語っていただきましょう。巖谷中佐、それでは始めてください」

彼の合図とともに、正面の大型スクリーンが映し出された。

そこに映るのは、やはり少し沈んだ顔のおじ様だった。

「……唯依ちゃん。できれば君を政治闘争に巻き込むようなことはしたくなかった。だが、それも言ってもらえない状況になった。君もそ

のことは調査団派遣の件から感じているだろう。X F J計画主任として知っておくべき事、そしてやらねばならん事をこれから話す」

「お気になさらずに。自分はどのような状況であれ最善をつくす覚悟はできております。ですが、この情報省の方の前でよろしいのですか？」

「ああ、鎧衣は大丈夫だ。おれと同じ線につながっている。では、さっそく本題だ。貴様も知つての通り、X F J計画に対し調査団が覇権された。だがこれは、おれの政敵がX F J計画を潰すための一手だ」

「やはり……」

「そしてこれは、日本をアメリカから引き離し、ソ連とつながりアメリカに対抗しようと考えてる一派の策謀だ」

「なっ!! なんと危険なことを!!」

「そうだ。アメリカの介入を防ぐ、といった線なら俺も問題にはしない。だがソ連と組みアメリカと対立する路線をとることは、日本を危険な道へ進ませることとなる。何としても目論見を潰さねばならない」

「わかりました。自分も同意です。それで、自分はどのように行動すればよいのでしょうか」

「問題の一派の中心人物が、調査団の長をつとめている大伴中佐だ。貴様に接触するだろうが、出来る限り情報を渡さないようにしてほしい。決して隙を見せるな」

「了解しました」

「そしてその鎧衣だが、頼まれごとがあつたなら便宜をはかつてほしい。貴様が防衛ディフェンスなら、鎧衣は攻撃オフENS。大伴中佐と調査団の身边を徹底的に洗う」

「つまり、私が調査団を引きつけている間、この鎧衣さんが仕事をするといいわけですね。了解しました。やり遂げてみせます」

話が終わろうかという時、私は大東亜連合のあの男の件を話そうかと考えた。

だが、それは鎧衣さんがかわりにやってくれた。

「もし、巖谷中佐。ついですが、私の雇い主、および香月博士に伝えてほしい事があります。また技術屋であるあなたにも興味ある件でしょうか」

「なんだ、言ってみろ鎧衣」

「私の表の雇い主の大東亜連合エウーゴが、ブルーフラッグにて米軍インフィニティーズを破りました。それもたった一機で四機すべてを撃墜。信じられない戦果です」

「……なんだと？ 詳しく話してくれ」

「ええ。私が彼の元にいるのは、偽装カバにちょうど良い場所だったからなのですが、信じられない技術をお持ちでしてね。それは……」

「——ステルス機の位置をあつさり看破。サブアームによる三人分のマルチタスクか。鎧衣はそこに整備兵として潜り込んでいるそうだな。カラクリはわかるか？」

「サブアームの構造や動力機関などは、実際に整備しているのではありません。ですが、この奇跡的な戦果を出しているのは、どうやらユニット内に使われている未知の技術のようです。名を【サイコフレーム】というらしいですが」

「ふうむ。そっちの方も気になるが調査団の方が優先だ。その大東亜連合の雇い主にはつなぎだけとって、調査団の方に集中してくれ」
「残念ですな、調べ甲斐のある案件でしたのに。しかしこれだけの實力を見せたのだから、シロツコ氏は各方面から引く手あまたとなりましょうな。大東亜連合の協力の線上でスカウトした方が手取り早いかもかもしれません。技術廠の方で獲得したいならお早目に」

「検討しておこう」

「では、さっそくお仕事といきますかな。篁中尉、大伴中佐はじめ調査団の予定をお教えますか」

「ええ。彼らはこの後、ハイネマン氏に会う予定となっております。そして明日以降はハンガーにも入って、整備兵たちに話を……」

私は知っている限りの調査団の予定を鎧衣氏に話した。

「ご協力ありがとうございました。あとはこちらにおまかせください」

「調査団と話す際の注意点などはありますか」

「そうですね。話す内容はソ連に流れるものとお考えください。核心的な技術などはお話しにならないよう。踏み込んだきた場合『アメリカとの機密保持契約にふれる』で突っぱねてください」

「でしょうね。わかりました、注意します。では、お願いします」

「ええ。お互い、当初予定より仕事が増えて大変ですが、なんとか乗り切りましょう」

「ええ、まったくです。これ以上面倒が増えることだけは避けたいですね」

彼の言葉に思わず笑った。

——だが、私たちの願いは完全なかたちで裏切られた。

この後、調査団の件もシロツコ氏の謎もかすませるほどの巨大な面倒……いや、災いがこのユーコン基地に降りかかったのだ。

第6章 黒のトータルイクリプス 91話 キリスト教恭順派の蠢動

アメリカ合衆国・アラスカ州某所

世界各国の開発衛士がブルーフラッグにて競い合い、大いに盛り上がるユーコン基地。テストパイロット

だがその裏では、おそるべき陰謀を画策する一団が闇にうごめいていた。

ユーコン基地の哨戒待機ハンガー内の警備室では、保全要員を装った作業員の襲撃によってMPは全滅。警備兵 その装備と制服はすべて奪われた。

基地の通信施設はすでに彼らに押さえられており、コード一つで簡単に休眠モードとなってしまうのだ。

彼らは「キリスト教恭順派」。

おごそかな宗教団体の名とは裏腹に、世界各国で深刻なテロ行為を行う一団である。

以前手を組んでいたオルタネイティヴ5の助力もあって、兵器すら擁する装備。

元軍人からなる経験豊富な戦闘部隊。

そしてその首謀者である主導者マスターと呼ばれる赤毛の男の知略と手腕。

これらによって、世界の首脳陣に脅威を抱かせるおそるべきテロ集団であるのだ。

そしてその仮の指揮所であるユーコン基地近郊の某所。

その薄暗くさして広くない部屋には、雑然と積み上げられた電子機器と共に複数人の男女が集っていた。プロジェクトの前に立つ、顔に大きな傷のある精悍な壮年の男はおもむろに言った。

「今朝方、準備が整ったと報告があった。計画を次の段階へ進行させる。難民戦線も動いてもらうぞ、ヴァレンタイン」

ヴァレンタインと呼ばれる褐色肌の彼女は、恭順派ではない。

恭順派と合同作戦を行う難民解放戦線のリーダーである。

彼女は嫌そうにその実働部隊隊長クリストファー少佐に応えた。

「……大東亜エウーゴから流れてきたメンバーが動揺してるわ、クリストファー。古巣の思わぬ活躍だね」

「たった一人一機で、世界各国の並み居るテストパイロットをことごとく撃破か。いったい何者だ？ その新たに代表となったパプテマス・シロッコという者は」

「残念ながら、エウーゴ組でも誰も知らないそうよ。どうやら、つい最近エウーゴに入り代表になったようだけど」

「フ……まさか『そいつの正体が判明するまで決行を遅らせる』などと言わんだろうな？」

「それもアリね。計画に些細な見逃しもあるべきじゃない」

「ハハハ慎重なことだ。決行が十年先にまで延びなければよいなあ？」

「そもそもだけど、今回の計画にはイレギュラーが多すぎるわ。いきなり始まった例の大演習。それによって基地の警戒レベルも上がった。そして世界最強の戦術機Ζガンダムと、そのパイロットまでいるのよ。なのに決行なんて、私みたいな凡人には理解できないわね」

「完全な計画がないように完璧な状況もありえない。事をおこすには必ずリスクが伴うものだ。おまえはただ安全策という消極に逃げたがっているだけではないか？」

「それで言葉を封じたつもり？ 計画の立案当初には無いほど、状況は変わってるって言いたい。やはり演習が終わって、帰る連中が帰ったあとに動くべきじゃないの？ ウチの実働部隊は、残念ながらアンタのところほどの練度はないわ。イレギュラーにはあまり強いのかい」

「フン、泣き言か？ おまえの妹は、早く動きたいとせっついているぞ」

「……クリストファー。あんた、妹に妙なマネをしたら……」

組織の中核を担うふたりの応酬は淡々としたものであり、荒々しさ

はない。

だがその溝の深さは際立ち、周囲にいる者達には緊張を強いられる。

暗澹たる雰囲気の中、その声は響いた。

「——私は今こそ好機だと思う」

場の緊張は嘘のように霧散した。

その声は上座に座る赤毛の男——彼らを導く^{マスター}主導者のものであった。

彼の声は染み入るような優しさと、人を安心させる響きがあった。

「ヴァレンティン、君の懸念は正しい。計画や作戦は何度でも練り直すことができる。されど、失われる命はただ一回だけ」

「——はい」

「されど我々が直面する状況を打開するため、全身全霊で作戦を立案してくれたクリストファーもまた正しい。状況こそ変わったが、あの程度の修正で対応可能だ。そして当初より、より大きな果実を手にすることが出来る」

「それは、いかなるものでしょう。^{マスター}主導者」

「Zガンダム——あれはかつて、エウーゴの持たざる者たちの希望となった機体だ。あれを手に入れば、我々の大義はよりいっそう多くの人々に響くだろう」

——ザワリ……

演習中の機体の奪取は、計画の内にはいつている。

しかし、その中に伝説の機体を入れることには、やはり大きな波紋をよんだ。

「ほう……面白くなってきたな。たしかにアレには乗ってみたいものだ」

「本気ですか？ あれの操縦法はかなり特殊だと思われます。動かせるかは不明でしょう」

「パイロットも共に奪取すればいい。難民戦線にはエウーゴから流れてきた者がいるな。彼らにパイロットのカズサの説得をまかせよ

う」

「……了解。主の御心のままに」

「それに日本の要人の娘たちもいる。そいつらの命を上手に使えば、言うことを聞かざるを得んだろうな。Zガンダム奪取には俺の腕利きを向かわせよう。エウーゴ組のヤツラはビビらんよう、よく教育をしておけ」

クリストファーには鋭い視線だけで応じる。

マスターは、二人の対立で暗く澱んだ空気を洗い流すかのように清流のような弁をふるう。

「今朝がた届いた潜入成功の報。これこそは主の導きであり、行動すべき時を示す啓示。私にはそう思えてならない」

その言葉を聞く者達全員が、熱のこもった眼差しでマスターに感じ入る。

「我ら主の子等がどれほど努力を重ねようとも、零れ落ちる悲しみは尽きることはない。だが恐れてはならない。われらは世をあるべき姿に戻し、主の計画を実現するために自らを捧げると誓ったのだ」彼の言葉は信者らの信仰心に響き、高揚と多幸福感の奔流となって迸る。

「行動しよう——救われるべき子等のために」

92話 ソ連対大東亜連合戦の始まり

本日は、このブルーフラッグ最大の見せ場とでも言うべき『ソ連対大東亜連合』のカード。

なにしろ両代表とも、これまでの戦績はともに無敗。世界最強と思われていた米軍開発チームすらも寄せ付けられない強さを見せつけたのだ。

圧倒的な強さを見せるシロツコと紅ツイン・スカーレットの姉妹の対決に、ユーコン基地すべての人間は注目して大盛り上がりだ。

そんな日の早朝、オレはゼータのкокピット内でハロが分析したシロツコの戦闘データを鑑賞中だ。

「さすが強いですね。やはりニュータイプとサイコフレームの組合せは凶悪ですね。それでハロ。シロツコの戦闘データでサイコフレームの研究は進みましたか？」

「うーん、やはりオールドタイプが相手だと、どうしても限界がね。その意味で、今日のソ連戦には期待している。紅ツイン・スカーレットの姉妹ならシロツコさんの機動にもついていけるだろうし」

「ずいぶんサイコフレームのデータに執心しますね。そんなに欲しいんですの？」

「まあね。これはガノタとか関係なく、機体コントロールに関わる大事なことからね」

サイコフレームとは、サイココミュの基礎機能を持ったチップを埋め込んだ鋼材だ。

そしてサイココミュとは、もともとは宇宙世紀一年戦争時代に課題となった機体制御問題を解消するための技術の一つである。

宇宙空間内をモビルスーツで戦争なんかやっていると、いつの間にか機体が流されてしまい、宇宙の彼方へ消えていくという事故が多発したらしい。

そのためより高度な機体制御技術が求められたわけだが、サイココミュもその一つ。

脳波で機体を制御する脳波コントロールシステムだ。

だがこのサイコミュ、次第に副次的な効果が出るようになってきて、それが注目されるようになってきたのだ。

【ニュータイプ】と呼ばれる特殊な脳波を発する人間がそれを扱うと、機体性能が大きく上がったたり、ビームが爆発的に強力になったり、ビームサーベルが巨大になったりだ。

ついには【ニュータイプ】と【サイコミュ】は宇宙世紀最大の研究課題となって、大きな研究施設まで作られるようになったのだとか。

「以前はバイオセンサー発動で機体能力20%増しくらいだったのが、巨大BETAとの戦いを経てから常時50%を超えるようになってしまったんだ。シロツコさんからもらったサイコミュデータのおかげで、どうにか安定させられてるけど」

「た、たいへんな数字ですわ！　そもそも、どうしてサイコミュがそんな不思議現象を起こすんですの？」

「わからない。サイコフレームが機動するとき、謎の青い光が発光される。それはまったく熱エネルギーが出ていないのに異常に機体能力を上げてしまうんだ」

「謎の青い光……ですか」

「どうもカズサのニュータイプ能力が、どこからか未知の力を引き寄せている感じなんだ。心当たりはない？」

「……バイオセンサー発動中は、どこか別の世界と繋がっている気はします。でもそれは感覚的なもので、それがどこで何なのかはまったく分かりません」

「となると、やっぱりシロツコさんに期待するしかないか。あの人にサイコフレームを渡したからには、徹底的に調べずにはいられないだろうからね」

「でも危険じゃありません？　あの人なら世界を支配するマシンなんて製造しそうですが」

「そのマシンも、元となる機体が戦術機なら大したことはできないよ。地球産の素材じゃ、小型原子炉さえ搭載できないだろうし」

大丈夫かなあ。こういう油断って、危険な奴を強大なラスボスに育てるフラグなんだけど。

「そろそろ、わたくしはもう出ますわ。神宮司軍曹やB分隊のみなさんと観戦することになってますの」

「うん、それじゃ後で。データ分析の結果を楽しみにね」

◇ ◇ ◇

一般観戦モニタールームへ行く前、篁さんやアルゴスのみんなに挨拶でもしていこうと、アルゴス小隊の待機所へ立ち寄ることにした。

だがそこには篁さんはおらず、アルゴスのみんなはなぜか強化装備を身に纏っていた。

「どうしたんですの、みなさん。これから大一番のソ連対大東亜連合の演習だというのに。こんな日にこれから訓練でもいたしますの？」

「ああ？ 寝ぼけんなよ、お姫さま。その大一番のあとには、アタシらアルゴスと米軍インフィニティーズの演習だろうが！」

「あ……」

すっかり忘れてた。午前ソ連・大東亜のあとには、午後それがあつたんだつた。

両チームともシロツコとソ連以外の負けはない強チーム同士の対決なのに、影が薄いんだよね。

「やれやれ。ま、俺らの注目度なんてこんなモンだよな。米軍開発衛士チームすら三番手にしちまう連中の対決の前じゃな」

VGは苦笑しながらヤレヤレのゼスチャー。

「クツソー！ ラプターとの対戦前だったのにまったく集中できねえ。なんなんだ、あのパプテマス・シロツコって奴！ なんで四機がかりでまったく当てられねエんだ！」

グリップス戦役最強ニュータイプだからだよ。

カミーユ、シヤア、ハマーンがそろって一発も被弾させられなかったほどの相手だからね。

「それにツンドラ姉妹もだ！ なんなんだ、あいつらまで！ 前にドッグファイトやった時より遙かに反応がヤバくなつてやがる。あれは本当に人間か？」

そう。ソ連のイーダル小队……いや、ツイン・スカレット紅の姉妹も異様な強さを見せている。これまでの戦闘では、ほぼ彼女たちのチェルミナートル一機で対戦相手をことごとく撃破しているのだ。

まったく、どれだけ強化したんだか。

「インフィニティーズも全勝を期待されての出場だったろうに、まさかの二敗とはな。第七艦隊の壊滅から、アメリカの世界の盟主の立場もいよいよヤバくなってきたかもな」

自国の失墜をどう思っているのか、ユウヤはニヒルに笑う。

「ユウヤ。お国のために『今日の演習で負けてやろう』なんて考えてんじゃないだろうな？」

「それはない。そもそも俺なんか心配する前に、上の方じゃ今回の件の対策を考えているだろうよ。さすがにソ連の機密扱いのクリスカ・イーニアには手が出せないだろうが、大東亜連合代表のシロツコは完全なフリー。とつくに交渉でもしてるだろう」

「それに私たちにとっては不本意なブルーフラッグだったけど、大局的に見れば良いことだと思うわ。BETAに対抗できる新しい力が生まれつつあるんだもの。私もハイネマンさんに頼まれてシロツコさんの戦闘データを分析してるんだけど、なかなか面白いデータがとれたわ」

ユウヤもステラも達観してるな。たしかにこのブルーフラッグは勝敗じゃなく貴重なデータを取ることが目的だし、それで良いんだけど。

「唯依姫の期待に応えられなかったのは痛いかな。で、どう思うユウヤ。連中とやり合って生き残った奇跡を成し遂げたお前に聞いたい。シロツコと紅のスカレット・ツイン姉妹、どちらが上だ？」

そう。アルゴス小队も両チームに負けはしたが、ユウヤの不知火セカンド二型は撃墜されず時間まで生き残った。操縦センスと熱心なシミュレーター訓練のたまものだろう。

「シロツコだな。スカレット・ツイン紅の姉妹の方は圧倒的な反応速度でブン殴られた感じだったが、シロツコの方は反応速度に加え、より洗練された動き。さらには行動まで読まれている感じがした」

「まあそうだろうな。それくらいでなきや、型落ちF-15の改修機なんかで世界各国のテストパイロットどもを圧倒なんて出来ないだろうしな」

と、オレがここに来た理由を思い出した。しかし肝心の彼女は見当たらないな。

「ところで篁さんは？　ここには居ないようですが」

「ウチの観戦もしないであちこち飛び回っていますよ。ソ連に負けたんで、いろいろ政治に忙しいんでしょう」

そうか……ソ連に負けたんで、ソ連派の調査団相手に難しい立場になっちゃったんだな。

「米軍も似たようなモンらしいな。レオンが『技術スタッフはもう俺らのことなんかそっちのけで、ソ連と大東亜連合のモニターに大忙しだ』とかぼやいていたぜ。ま、米軍としちや、お国の技術を上回る存在の出現は見過ごせないだろうからな。さて、俺はそろそろ仕上げに行ってくる」

「あら？　これからシミュレーター訓練？　ソ連と大東亜連合の演習は見ませんか？」

「不本意な結果とレオンとの因縁は別の話だ。俺は奴には負けねえ。それにジェリド・メサ中尉を超えるチャンスでもある。不知火・式型はそれを為すだけの力があると信じているからな」

「さすがユウヤ！　折れちゃいねーな。ヨシッ、アタシもつき合うぜ。せめてラプターの一機ぐらい沈めなきややってられねーからな」
ユウヤとタリサ。この二人はどこまでもタフだね。

お前たちの戦いもしっかり見とくからな。そして勝利を祈っている。

——だが、結果としてアルゴス対インフィニティズの演習は行われず潰れた。

大いなる脅威がこのユーコン基地を襲ったのだから。

93話 頂上決戦二つの陣営

鎧衣左近 side

大東亜連合専用野外格納庫^ハ_ン^ガ₁

本来は、ブルーフラッグ中のユーコン基地の敷地内にもぐり込むための、シロツコ氏の整備兵という立場。

だがそのシロツコ氏が思わぬ奇跡的な戦果を上げ続け、彼の情報価値は世界的な特記事項にまで跳ね上がった。ゆえに私は悠陽様の懸念を差し置いて、彼の周辺調査に専従せねばならなくなってしまった。

その結果、情報省から整備の人員や補修物資などが気前よく送られてくるので、毎回の激戦にも関わらずF-15改は完璧に仕上げるこ
とが出来たのだ。

「またどうにか演習に出られるよう仕上げましたよ。まったく毎回四機相手の大立ち回りとは、整備泣かせのお方ですな、あなたは」

システムチェックを終えたシロツコ氏は、満足そうに氷のような冷たい目に笑みを浮かべた。

「君には感謝してるよ。どこからか、ここには無い補修部品を調達してきてくれることまで含めてね」

ふむ、シロツコ氏は私の正体を薄々感づいているのか？

「ですが機体を騙すのもそろそろ限界。無茶な取り回しのツケが蓄積しています。スクラップは近いと心得てください」

「うむ。コイツもよくがんばった。私を次のステージへ押し上げてくれるのに十分な働きをしてくれた。あとは今日のソ連戦を征すれば完璧だ。あちらも米軍を破ったことで、最強が二つになってしまったからな」

「しかし……毎回思うのですが、演習後の機体はいつも酷い状態なのに、それに乗っているシロツコさんはまるで平気ですな。普通ならとつくに重症患者でなければおかしいのですが」

「別に私が超人の肉体を持っているわけではないよ。無論、そのシステムも機密だがな」

私がシロツコ氏を調べていることを知りながら、意味深なことを。妙に遊ばれている感じた。

「しかし目に見えないダメージは蓄積しているかもしれない。どうでしょう。ブルーフラッグが終わったら、私のツテのある病院で検査しては？ 衛士専門の病院で、大がかりな検査器具も多々ある所なのですが」

「フフフ、そんなに私の体の状態が気になるかね。鎧衣くん」

!!!?

「驚くことはない。私が君を承知ということは、とづくに分かっていただろう。それとなく伝えていたからな」

「……いや、まさか私の本名までご承知とは思いませんでしたよ。

誰かに調べさせたのですかな」

「残念だが、私に諜報員の素性まで調べ上げる情報網などないよ。君の名を知ったのは、ほんの偶然さ。出てきたまえ」

その言葉で隣の工具置き場から出てきた少女を見て少なからず驚いた。

青い髪に、まったく女性らしく成長してない少年のような体の女の子。

「父さん……」

わが娘の鎧衣美琴だ。

「……美琴か。しょうのない奴だ。いったいどういう経緯でお前がここに？」

「前に整備兵の恰好した父さんとこの辺りで会ったよね？ だから、この辺りのハンガーで整備兵をしてるかと思っ探してみただ。そしたらシロツコさんと出会って、もしかしてウチの整備兵かもしれないって言われて、ここに来たんだよ」

ああ、まったく。こんなマヌケなスパイはいるものではない。もう笑うしかない。

「はっはっは。いやしかし、やはり身内のいる場所に仕事で来るものではありませんな。この場合、どうしたら良いのでしょうか？」

「なに、君が諜報員だとしても私は一向にかまわん。というより、整

傭兵応募の段階で諜報員らしき者を選んでいたのだよ。スポンサー候補になってくれそうな国のな」

ああ、まったく。こんな知略の怪物みたいな人間に探りなど入れるものではないな。

素直に手を組むのが最善か。

「かないませんなあ、どこまでも聡いお方だ。ではスポンサー候補として言います。あなたの目的はおおよそ達成したことだし、今日の演習、負けませんか？」

「ふむ？ ソ連に賭けてでもいるのかね」

「パートナーの体を心配しての言葉です。たしかに演習はレーザーポイントで被弾判定を競う安全な戦闘ではありません。それでもあのツイン・スカーレットの姉妹に張り合うとすれば、急加速と制動でタダではすみません。最悪死ぬかもしれませんよ？」

「フッフすまんが、その忠告は無視させていただこう。目的とは別に、私は見てみたいのだよ。この世界でのニュータイプに手を伸ばす愚か者の成果をな」

ニュータイプ？

何を指した言葉なのか知らないが、彼にとってひどく重要な言葉のように感じる。

「時間だ。そろそろ出るとしよう。……むむ？」

いつも薄い笑みを浮かべているシロツコ氏の表情がいきなり険しいものになった。

彼の視線の先をしてみるが、ただの工具置き場だ。

「どうなさいました？ なにもないようですが」

「……いや、なにやら悪意のようなものをな。数日前から感じていたのだが、今日になって一段と黒い感情がユーコン基地全体を覆っている。鎧衣くん、すまないが警備部隊待機室あたりを見回ってきてくれないか。どうにもそのあたりに悪いものがあるような気がする。武装をしてな」



サンダーク side

ソビエト連邦軍機密エリア

Π3 計画専用棟 地下三階会議室

薄暗い室内で、私とベリヤーエフ博士は、計画の総責任者である口ゴフスキー中佐にビャーチェノワ少尉、シエスチナ少尉の状態を説明していた。

彼女らはほぼ単騎で米軍のラプターおよびX F J 計画の不知火・式型を降したが、その代償はすさまじく、修復のために浄化槽につきりきったままだ。

「——以上。両素体のダメージはあまりに大きく、これ以上の演習は止めるべきでしょう。当初の目的の米軍派遣部隊とX F J 計画開発チームを降し目的は完璧に達成されました。どうか中止のご決断を」

だが輝かしい戦績にも関わらず、ロコボフスキー中佐は不機嫌そのものの顔。言葉もうめくようだ。

「『完璧』だと？ 本気で言っているのかね。君達も知らんわけではあるまい。このブルーフラッグにおいて、わがイーダル小队と同じく無敗のまま突き進んでいるチームを。それもただ一機でだ！」

ああ、やはりそれが問題になったか。本来なら完璧に進めたブルーフラッグに、とんだイレギュラーが紛れ込んだものだ

必死に無表情をつくらっているが、心中に激しい落胆を感じた。

「大東亜連合のPapティマス・シロツコ。奴の存在は我々の計画の評価を著しく下げている。世界へ『我々への恭順こそが人類への救済』と知らしめることを難しくしている。ベリヤーエフ博士、彼をどう見る」

「あれは……やはり強化はしているのでしよう。ですが、ろくなバックアップもなしに、どうやって体を保っているのかまるでわかりません」

ああ、その一点だけでも奴がΠ3計画われわれより優れていることの証明だろう。

だが、それを口にするわけにはいかない。

決断しよう。やはり、あのパプティマス・シロツコを破るしか道はないようだ。

「その謎の解明は今後の課題でしょう。ですが今は、間もなくはじまる奴との直接対決にいかにか勝つかです。勝利さえすれば、党への弁明は立ち時間が稼げます。ベリヤーエフ博士、大丈夫なのでしょう？」

「戦術シミュレーションでの対戦結果は99.8パーセントの高確率の勝利と出ている。しかし……」

「しかし？ なにか不明な点でも？」

「奴が素体と同様の能力を有しているとしても、F-15ではこれまでの対戦相手にも勝てるはずがないのだ。それほどの致命的なハングを負っているのに、奴は勝ち続けている！」

「なるほど。シミュレーションの確率はあてにならないというわけですか」

暗澹たる気持ちになる。またしてもわからない事だらけだ。

「ええい、細かいことはいい！ とにかく奴との勝負は絶対に勝て！ いざとなればプラーフカを最大にしてもかまわん」

「それは……いくら何でも無茶では？ 計画の全貌が世界中に知られてしまうことになりまますよ」

「そ、そうです！ X F J計画と米軍との演習でも無理をさせ、素体も限界です。崩壊してしまいますよ！」

「黙れ！ 党本部は我々に疑いの目を向けているのだ。計画を漏洩させたのではないかと」

ああ、それか。この無能がこうも焦っている理由は。

「な！ そ、そんな……機密保持は完璧です！」

「ともかく勝利だ！ 奴との演習に勝利し、世界にわが国の有用性を示し、日本帝国を抱き込むことが出来たなら、アターエフ閣下が我々の身を安じていただけれることを確約してくれた。わかるな？ 我々にはあとがないのだ！」

「わ、わかった！ 万一の準備はしておこう！」

『もはや止められない』と目を閉じた。

クリスカとイーニア……この演習で死ぬかもしれないな。
あのパプティマス・シロツコという男、どこまでも崇る。
奴さえいなければ、全ては完璧なシナリオに乗せられたものを。

94話 激突

パプティマス・シロツコSide

ユーコン陸軍基地 テストサイト18

第2演習区画 E-102演習場

コクピット内にてスタート前のダミービルをながめ、この先の相手に思いをはせる。

「噂にきく紅スカレット・ツインの姉妹とやら。XFJ計画開発チームほどは楽しませてくれると良いが。今回はうち漏らしたりせんがな」

模擬戦開始の号令が発せられ、モニターにテスト・スタートの表示が映る。

その直後、はるか先に超加速で接近するプレッシャーを感じた。

リーダーには、その感覚の通りに高速で接近する一機の敵性光点フリックが示される。他の三機は開始線から動かないまま。ソ連のこれまで通りの始まりだ。

「フツ、自機座標をさらしての突撃。カミーユを思わせる勢いだな。だが私は、その勢いと反応だけで倒せるほどあまくはない」

自機F-15改をダミービル屋上に置き、XWS-116支援突撃砲を構える。

長砲身タイプで集弾精度と初速、射程を重視した重狙撃モデルだ。

「これで終わりなど、つまらん結果にはするなよ。ニュータイプもどきー！」

トリガースイッチを押し込み、プレッシャーに向け発射。二発三発と連続して全弾を叩きこむ。

チエルミナートルの直進してきた場所に仮想の轟々たる爆炎が視界いっぱい広がる。さて、私の挨拶に応えてくれるか？

「私の狙撃を感じる程度には出来る、か。そうでなくてはな」

彼女らを示す赤い敵性光点フリックは健在。やがて実体も爆炎の中から現れる。

これまでの演習でもあのチエルミナートルは幾度も狙撃を受けたが、すべて反応しかわしてきてはいた。彼女らと対戦した相手は『弾

が当たらない』と驚愕し畏怖していたが、ニュータイプにとっては弾やビームをかわすことなど普通のことだ。

ただ今回違ったのは、これまでではそのまま直進し敵陣へ突っ込んできたのに対し、今回は遮蔽物の影に隠れるよう迂回してきたということだ。

「プレッシャーを感じたようだな。ニュータイプとの戦闘を幾度も経験した私には、君達の回避先など発射する前から承知なのだよ」

撃墜のプレッシャーを与え、その迂回を選択させたことで、第一段階は終了だ。

「さて、スカレット・ツインの姉妹のお嬢さん方。君たちと遊ぶ前にゲームの難易度を上げさせてもらおう。引き分け狙いなどされては興ざめだ。まずはそれを封じる」

空になった超長距離砲を捨て、迂回に動しむ彼女らを置いて、そのままソ連側サイドの開始線へと突撃に向かった。

「フツ、同じ機体に乗ってはいても、君達はただの的だ」

ソ連側開始線に近づくと、三機が銃口をそろえ飽和射撃スナイプ・シュート。

まあまあ訓練されているが、退屈なほどに弾が遅い。いや、レーザーポイントが遅い。

「スルリ」弾道を抜けて近づけき、隊長格のコクピットに一発。モタモタこちらに銃口を合わせている他二機も同様に一発ずつ当てると、三機は撃墜判定で機能を停止した。

実際の戦闘では一発でコクピットを撃ち抜けるかは疑問だが、演習上ではそこに被弾すれば撃墜判定となって終了なのだ。

「君達はそこで私と彼女達の演習をゆっくり観戦したまえ。特等席をしつらえたが、気に入ってくれたなら幸いだ」

早くもレーダーには紅ツイン・スカレットの姉妹の光点が高速でこちらに接近してきている。ゆえに戦闘はこの近辺で行われることになるだろう。

「私の本気の戦いをこんな真近でモニターできるとは、君達はじつにツイている。ああ、礼なら私の健闘を祈ってくれるだけでけっこうだ。ではな」

置物になったチエルミナートルを背に、私は好敵手に向かい発進した。

さて。ターキーシユートとはいえ、三機を撃墜したことでスコアは圧倒的に私に傾いた。ソ連が勝利するには、私に撃墜判定を食らわせるしかないぞツイン・スカーレット紅の姉妹。

ダダダダダッ　ダダダダダッ

「チイツ、先手をとられた？」

真つ向勝負をすれば、私が遅れるほど速い。

彼女らの掃射を避け、弾幕で牽制。

されど押し込まれる形でジリジリ削られていく。

「大したものだ、サイコミユを凌駕するとは。君達との勝負がブルーフラッグの頂点と見たが、間違っていないなかったようだ」

機体性能差で、あちらは上下左右に自在に好ポイントを取りながらこちらを消耗させていく。

こちらの弾幕など全くものともせず肉薄してくる。

「フツ、だが近寄りすぎだ。これはかわせるか！」

切り札の背部四丁の隠し腕で動く軽サブマシンガンを展開させた。

ハマーンのファンネルから発想を得て、こちらの技術でなんとか近づけた『ファンネルもどき』だ。

これを使うのは米軍、X F J 計画開発チームに続いて三度目だ。

こちらが追い込まれる形が使いどころのため、相応の実力のある相手にしか使えないのだ。

ダダダダダッ　ガガガガガッ　ズガガガガッ

さすがの奴もこれは躲し切ることが出来ず、攻守は逆転した。

肉薄が仇となって、大きく逃げ切ることも出来ない。

致命的な大破はさけているものの、チエルミナートルは被弾が重なり機能を低下させていく。

「わが愛機もこれまでの連戦がたたり、これ以上は危険でな。ゆえに楽しく遊ぶ余裕はない。ここで決めさせてもらおう！」

ニュータイプの域に達するには、判断力が甘かったようだな。

超高速機動の中でも戦術思考ができぬようでは、ニュータイプと呼べんよ。

◇ ◇ ◇

サンダーク side

ソビエト連邦側コマンドポスト

「ヒイイイツ奴はバケモノか！ わが国の精鋭三機を瞬殺のうえ、プラーフカを使用したイーダルまで圧倒している!!」

ベリヤーエフが発狂した。相変わらず気の小さい男だが、まあしかたがない。

奴にしてみれば、自分のこれまでの研究より出来の良いモデルを見せつけられているようなものだから。

私は通信で、ビヤーチェノワ少尉にかかりすぎないように指示を送る。

「ビヤーチェノワ少尉。あのギミックは弾倉交換の出来ない、急場をしのぐためだけの切り札だ。距離をとってそいつをやりすごせ」

『ダメです……信じられません。私はあれを引き離せません。まるで私の思考を読んでいるかのように先回りされてしまいます』

「なん……だと？ まさかあの男は、プラーフカを使用中の貴官をして追い詰めているというのか？」

そこに総責任者のロコボフスキー中佐が爆発したように叫んだ。「プラーフカを最大深度にしろ！ 四機撃墜の全滅。そんな結果になつたら我々は終わりだ！ もはや後のことは考えるな!!」

『絶対殲滅モード』ですと？ 狂っている。相手を殺す気ですか!!」

「我々は党の疑念を受けているのだ！ 敗北した瞬間に秘密警察が我々の身柄を拘束に来るわ!!」

そこまで……そこまで我々は追い詰められていたのか。パプティマス・シロツコ。

何者かも知れぬのに、なぜかΠ3計画の上をいくあの男ただ一人の存在に！

『やってくださいいマスター。プラーフカを最大深度に』

「ビャーチエノワ少尉、わかつているのか？ 貴官らはすでに危険水域に肩までつかっている。これ以上の深度に潜れば、貴官らは……」

『かまいません。相手がBETAでないとはいえ、祖国の名誉と未来がかかっているこの一戦。このまま無様な結果をさらすくらいならば、喜んでこの身を捧げましょう。イーニアとともに』

「そうか……では祖国の名に於いて命ずる。わが祖国の衛士と戦術機こそが最強と知らしめよ。わが党に、米国に、日本帝国に、パプティマス・シロツコに！」

暗澹たる気持ちで暗号キーを入力する。

なぜ……なぜこんなことになってしまったのだろうか。クリスカ、イーニア。

こんなところでお前達を失うことになろうとは……

『お別れです。お父さん』

95話 決着。演習場に勝者は無く

パプティマス・シロツコside
ギユオオオオオオオツ バキイツ

「くつ、なんだこのスピードは。なにかのリミッターを解除したのか？」

ひん死のチエルミナートルが、いきなり信じられないスピードで私の追い込み漁を噛み破った。

その前にふくれあがったプレッシャーを感じたので、間一髪、奴のモーターブレイドをかわす事が出来た。だが恐るべきスピードだ。

「耐G機能の未熟なこの世界の機体で、あの機動は危険だろう。私でもサイコフレームのサイコフィールドがなければ、今どうなっているか知れたものではないというに」

いまだ位置の有利がある私は、牽制射撃で距離をとる。

対しチエルミナートルは大きく射線から外れて消えた。

おそらくは大きくまわりこんでの突入を目論んでいる。

距離を詰められては、先読みしようとも性能差で押し切られてしまう。

——テキイイン

プレッシャーの来る方向は三時か。速い。

サイコフレームがあるとはいえ、機体がF-15では限界がある。

「だが、こちらはもう一つ切り札がある。装甲をパージすれば、そのスピードにも対応は……」

—— 『今日の演習、負けませんか？ あの紅のスカーレット・ツイン姉妹に張り合うとすれば、タダではすみません。最悪死ぬかもしれないよ』

—— ハッ!?

ふいに演習前の鎧衣くんの言葉がよみがえった。その言葉で私は冷静に返った。

「……そうだな、ここは命を賭して張り合うステージではない。君の忠告に従い、黒い好奇心に吞まれるのはやめるとしよう」

命を預けるに信頼できる機体でもないし、目的のスポンサー探しも

目処がたった。

そしてニュータイプもどきを生み落とした者どもの成果も見た。
ここらが潮時というものだろう。

「せいぜい誇るがいい、ソビエトの狂人どもよ。貴様らの執念勝ちだ」

苦い感情をおさえつつ、フルプログラムの演習プログラム運営コントローラタワーへ緊急非常通信を繋ぐ。

「エウーゴ01より運営コントローラタワーに通達する。わが機体の損傷は限界に達し、これ以上のプログラム実行は困難である。よつて遺憾ではあるが、大東亜連合エウーゴはプログラムの棄権を申し伝える」

『コントローラタワー了解。運営はエウーゴの棄権を認める。全エウーゴの機体搭乗者は現地点にて主機をおとし待機されたし』

『全エウーゴ』といっても、私のただ一機だけだな。

この妙な指示は通達マニュアルというものだろう。

コントローラタワーの指示通り主機をおとし、薄暗い非常灯の中、私を退かせた紅のスカレット・ツイン姉妹の機動とプレッシャーを思い返した。

しかし「サイコフレーム」という私より未来の技術を使ったサイコミュが、宇宙開拓さえ成しえていないこの世界の技術に凌駕されるとは思わなかった。

ニュータイプにはほど遠いが、こと戦闘方面に強化された人工ニュータイプとしては、オーガスタ研究所の上をいつているのではないか？

この秘密。いつか暴いてみたいものだが、国家自体が秘密主義のソ連から抜くのは、今の私には難しすぎるか……

………プレッシャーが？

ドツガガガアーン

いきなり強烈な衝撃が来た!? 衝撃は絶え間なく二度三度と襲ってくる!

JIVES (仮想情報演習システム)は、主機をおとしたことで、す

でに切れている。

仮想被弾による衝撃は起こらないはずだ。

「グウツ、ならばこれは本当の衝撃？ いったい何が起こった!?」
急いでサブモニターを立ち上げ外を見る。

そこにはチエルミナートルがモーターブレイドを振り上げ、わが機体を攻撃している！

主機を一度おとせば、再び立ち上げるのに三分はかかる。回避行動などとれるはずもない。

出来ることといえば、コントローラタワーを怒鳴りつけることだけだ。

「コントローラタワーどういうことだ！ 棄権を受理したのではないのか？ それにこの攻撃は演習ではない、明らかな戦闘行為だぞ！」

『イ、イーダル小隊機、こちらの指示に従いません！ 現在ソビエト側CPは機体停止を試みております！ 十数秒お待ちください』

ガツシヤアアアツ

「……十数秒など待てるはずがなからう。一秒後には私はただの肉塊だ」

コクピットブロックの天井は大きく裂かれ、映像ではないキレイな青空が見えた。

そして高々とモーターブレイドを振り上げるチエルミナートルの姿も。

◆◆♣♥◆◆♣♥

サンダーク side

コントロールタワーから大東亜連合エウーゴの棄権が告げらると、CP内は歓声につつまれた。

正直私も安堵した。最大深度を解放したとはいえ、その時間はわずか52秒。

今すぐ培養処置をすれば二人は助かるはずだ。

コマンドポスト

「CPよりビヤーチエノワ少尉ならびにシエスチナ少尉。貴官ら

では、ニュータイプの高みに届くはずもない。消えろオ！」

ティキイイイイン

サイコプレッシャー。

つながった彼女らの意識に、全力最大の私の脳波を衝撃に変え送つてやる。

そう言えば、ジ・^オの腹を突き破ったゼータのコクピットにもこれを喰らわせたが、カミーユはどうなったろう。

『イヤアアアアアアアアアアアアアアアッ！』

『うわあああああああアッ!!』

同一だった彼女らの意識は分かれ、その脆弱な精神は私の脳波でズタズタに引き裂かれる。

「ここで止めねば君達は死ぬだろう。だが私は容赦する気はない。君達は自分の意思とは関係なく、死ぬまで戦闘をやめることが出来ぬだろうだからな」

自分の意思までも他人に操作される人形となった者の悲劇。

それ故サイコプレッシャーを止めたとたん、モーターブレードは私の頭上に落ちてくるだろう。

憐れであろうと、君達の息の根が止まるまでやめるわけにはいかない。

やがてチエルミナートルは、ゆっくり天をおおぎ倒れていき……

「ズウウウン」と大きな音を響かせ仰向けに倒れた。

二足歩行の戦術機、起動後の直立は搭乗者の脳が無意識で行っているバランス制御を使う。

立っていることが出来なくなったということは、つまりはそういう事だ。

96話 牙をむく潜みし者

ユウヤ・ブリッジス side

ユーコン陸軍基地シミュレーションルーム

「おいおい、どうしちまったんだよスカーレット・ツイン紅の姉妹。ヤバイ薬《ヤク》キメちまった奴と音字ニオイがするぜ。あの厳格なイワン衛士様が、まさか話だが」

さつきからヴィンセントの計測が止まっちゃまっている。

流し見ということで、ソ連対大東亜連合の演習を携帯モニターに映しながら計測をしていたのだが、いつの間にやらガツツリとモニターに見入っちゃまってる。

しかたなく俺とタリサチヨビはシミュレーターから出るも、ヴィンセントはモニターを見たままだ。

「どうしたヴィンセント。こっちの計測に集中してほしいんだが……注目の演習でなにかあったのか?」

「まさか事故ったのか? どっちも高速機動がウリだからな。調子ノリすぎてやっちゃまったとか?」

「いや、演習自体は大東亜連合エウゴが棄権して終わった。問題はそれとだ。ソ連の悪質行為が問題になって、午後の俺らの演習にまでひびくかもしれない」

「ハア? イワンどもが勝っちゃまって、演習終わった後に何の問題があつたつてんだよ。……ははあ、演習中に相手を殺しかけたつてんだろ? ツンドラ姉妹ならそれくらいやつても驚かねえよ。前にアタシも殺されかけたしな」

「たしかに半分当たりだが、たぶん驚くと思うぞ。殺しかけたのは、演習中じゃなく相手が棄権を宣言したあとだ。演習了後コントロールタワーの指示を聞かずに、モニターブレイドで待機中の相手機体をメッタ打ちにしたんだよ。ブツ飛んでんな」

「なんだそりゃ。ヤバイ薬でもやってたつて反応じゃね?」

それでは『演習中の過剰行為』にすらならないぞ。

『明確な殺意ある戦闘行為』。多国籍の軍が集まるユーコン基地で

あつてはならない、基地追放レベルのやらかしだ。

二人はユーコン基地にいられなくなるかもしれない……クリスカ、イーニア。

「クリスカとイーニアはどうなった。警備部隊に逮捕されたか？」

「いや。意識不明の重体とかで、ソ連軍がもっていつちまった」

「おいおい、直前まで元気に戦術機で走りまわってたろうが。それを警備兵が許したってのか？ 基地にもメンツってモンがあんだろ。んじや、かわりにサンダークとかいう陰気なオッサンでも連れてったのかよ」

「いや……妙だな、警備兵が来ない。おかげでソ連の関係者は全員帰っちまった」

「ハア？ 仕事しろよ警備兵！ 基地内でこんな事件起こしたうえ、実行犯やら関係者なんかをそのまま帰したとあっちゃや、ハルトウィック大佐もあとで突き上げられんぞ」

たしかに妙だ。これだけの事件が起こったのに、基地警備部隊も上層部も動きが遅い。

「少し早いがハンガーの詰所に行こうぜ。ドール中尉か篁中尉が情報をもってくるはずだ」

◆◇♣♥◆♣◆♣♥

篁唯依 side

上機嫌な大伴中佐ら調査団と演習を観戦していたのだが、終わりに彼らは真っ青になっていた。演習後のソ連のあまりに悪質な行為は、おそらく大きな問題になる。

今、その国とわが日本帝国が提携することはほぼ不可能だ。ソ連が受けるであろう非難をわが国も受けることになる。

ほぼ敗北寸前だったX F J計画は、思わぬ逆転を果たしたことになるってしまった。

相手の不幸や災難が自分の利益になる。なるほど、これが政治の世界か。

こんな世界に居ては心が歪んでしまう。おじ様が私を遠ざけよう

としていたわけだ。

それはともかく、当然あるはずのソ連軍関係者の拘束やら、基地上層部の声明やらが妙にない。午後の米軍との演習がどうなるかの話すら来ない。

ドーウル中尉と話しあつた結果、彼が情報確認に向かい、私はハンガーで待機ということになった。

「あ、篁中尉。何かわかりましたか。状況はどうなっています」ハンガーに来てみると、やはり皆は不安そうな面持ちだ。

「すまんが私は何も知らん。ドーウル中尉と話しあつた結果、情報確認はドーウル中尉。現場で、来るであろう通達に対応するのが私ということになった。中尉から連絡があるまで待て」

ほどなくして私の携帯通信機にコールがきた。しかし妙にノイズがひどい。

「ドーウル中尉、何かわかりましたか。やはり午後米軍との演習は中止でしょうか」

『ザザ……タカ……ムラ中尉。……緊急事態だ。基地内に……テロが、発生……した。チームを……機体に、搭乗させろ……。基地の外から……応援を呼ぶ……んだ』

「な、なんですって？ いえ、ドーウル中尉。負傷されているのですか？」

『私は……もう、助からん……』

!!

ドーウル中尉が死にひんするほどの事態？ そんな事がここユーコン基地で……

「いいか……浸透は……危機レベルだ。上層部も……警備部隊も……消されている。外部の誰も……信用するな。以降のアルゴスの指揮は……貴官がとれ……ザザザー」

「ド、ドーウル中尉、応答を！ 今助けに……」

……落ち着け。これはジャミング、もはや通信はできない。通信施設もやられている。

ギリギリこの情報が間に合ったのは、奇跡というべきか。

そして、これほどの浸透では救助は不可能だ。

しかし危機レベルのテロか。そこまでの事態が気づかれなまま進行していたとは。

そうか。どうにもソ連の問題事件に対する基地の対応が鈍すぎると思ったが、そういう事だったのか。

「アルゴス試験小隊、および整備兵全員集合！」

とにかく、やるべき事をやる。ドーウル中尉の命がけの情報を無駄にはしない。

今、この指揮官は私一人。そして事態を打開できるのはここに居る隊員だけだ。

「たった今、ドーウル中尉から緊急連絡が来た。彼によると、このユーコン基地内にてテロが発生したとのことだ」

「ザワツ」つと一瞬どよめいたが、さすがそれ以上の動揺はない。整備兵含め皆訓練は行き届いているが、果たしてこれ以上を聞いてもこのままか。

「ではその対処のために、ソ連への対応が遅れているわけですね。どの程度の規模のテロが発生したのでしょうか。応援要請のくる可能性はありますか？」

「いや、もはやそのレベルではない。危機レベルにまで浸透を許し、警備部隊も上層部も消されている。ユーコン基地内のみで対処することは絶望的だ」

ザワザワツと大きな動揺が走る。されど、ここを引き締める。

「動揺するな！　いいか、今この危機に対するカウンターをうてるのは我々だけだ。人類守護の本分にたちかえり、以後の作戦行動に従事せよ。この不埒な賊に切っ先を突きつけよ！」

「了解！」

こうしてテロに対抗すべく準備にはいったものの、やはり相手はこちらに手をうってくる。

「保安警備部隊が施設内点検を求めています。なんでもウチが重大な違反行為を行っている疑いがあると」

「その警備部隊は偽者だ！ 決して入れるな。不知火・式型およびF-15ACTと私の武御雷はどうなっている。出撃は可能か？」

「演習出場機はいつでも行けます。ですが斯衛ハンガーの武御雷はもうしばらく」

「四機は先行して出撃。目標はもつとも近くにあるフェアバンクス基地だ。一刻も早く応援要請をするぞ」

ユウヤたちの四機が出撃したすぐあと、私の武御雷も出撃可能となった。しかし……

「こちらに接近するF-16Cの所属不明部隊があります。戦域ネットをハックして小隊の動きを隠しながらの接近。これはやはり……」

「クツ、テロリストどもめ。牙を隠さなくなつたか。それはテロリストが奪った敵性戦術機だ。アルゴス全機、相手にせずフェアバンクス基地を目ざして行け！」

こちらの武装はみな演習用のダミー兵器。接敵されドッグファイトなどすれば一方的にやられるだけだ。

『ファンングワン、敵はすでに近寄りすぎている。俺たちに任せて出るな』

氣遣つてくれるユウヤの言葉が少しうれしい。

されど、その言葉には甘えられない。

「いや、あの部隊にお前たちを追わせるわけにはいかない。殿しんがりは必要だろう」

『バカナ！ こつちがに武装がないことは承知しているはずだ。一方的にやられるだけだ！』

「篋せき示現流をなめるな。弾などさけて、チェスト一喝で皆なますにしてやるさ」

『バカだ！ 一機ぐらいならあんたの腕なら出来るかもしれないが、四機じゃ！』

「命令だ。行け！」

有無を言わさず行かせたあとに、武御雷も出撃。

ちょうどその時には、四機のF-16Cも視界に見えるほどに接近

していた。

長刀ただ一振りの特攻か。武御雷、お前にふさわしいな。光線級すらものともしない山城さんに近づけると良いが。

「奸賊ども、巖いわおとなった武御雷を抜けると思うな。チエストオオ！」

気合一閃、武御雷の長刀をふりかざし。

銃弾を乱射する敵機の待つ大空へ飛翔した。

97話 危機せまる第207訓練B分隊

鎧衣左近 side

ユーコン陸軍基地

警備部隊哨戒待機ハンガー詰所近郊

「いやはや、これはこれは。なかば信じてしまいましたが、まさか実際にこのような事が起こっていたとは。やはりあのシロツコ氏、本当に超能力者だという線が濃厚になりましたなあ」

シロツコ氏の言葉通りに警備部隊の詰所辺りを見回つてみると、目立たない片隅にいくつもの袋が置かれているのを見つけた。まさかと思いい中をあらためてみると、やはりそれは額を撃ち抜かれたホトケさま。

警備部隊が職務で殺傷したなら、遺体をこのように処置するとは思えない。

やはりこれは密かなテロが進行中なのだろう。

「なるほど。注目の演習に基地中の人間が目を奪われた隙を突かれ、一気に浸透されましたか。さて、こうなると娘とご学友たちをこのユーコン基地に置いてはおけなくなりましたなあ」

榊首相や珠瀬国連事務次官のお嬢さんもいるし、当然人質を考えるだろう。

さらに、あの方が気にかけている御剣冥夜さんも。

どうにか彼女らを基地から連れ出し、安全を確保しなければならぬが。

「とはいえ、面識のないアヤしい男の忠告など、聞いてはもらえんでしょうなあ。神宮寺軍曹殿も恐い顔をするでしょうし。ブルブル……情けないパパですが、娘の力を借りるとしますか」

幸いというか、美琴は大東亜連合のハンガーに居る。

あとは山城上総中尉に現状を知らせ協力していただく、といった所か。

方針を決めた私は、脱兎のごとく元のハンガーへと引き返したのだった。

♠♦♣♥♠♦♣♥

山城上総side

ユーコン陸軍基地

第二演習区画 一般観戦モニタールーム

ソ連対大東亜連合の演習。それはまさに一対一の超人対決という様相で、第207訓練部隊B分隊の娘らを大いに熱狂させた。

しかし大東亜連合棄権後の紅スカーレット・ツインの姉妹の暴行までもがモニターにバッチリ映っており、それを見た彼女らは演習よりもその話題で盛り上がった。

「あれはおそらく薬物処置だな。攻撃性を高めすぎて戻らなくなっ
てしまったのだろう」

「でもこれって、勝敗の関係しないデータ取りのための演習ですよ
ね? どうしてそこまで?」

「自国の戦術機が世界最高に優秀ってことにしたいんですよ。ソ
連って国は国をあげてミエを張る国だからね」

「だがソ連の大なる戦果は戦術機の性能ではなく、あの衛士の卓越
した技量だろう。もっとも薬物で反応や攻撃性を高めていたようだ
が」

「私はソ連の衛士がそこまでしなきゃ勝てなかった大東亜連合の衛
士に興味がある。今までもたった一機で無双してきたし」

「うむ。全世界の開発衛士をもものともしない、あの神業のような技
量。私も大いに感銘を受けた。あれは山城中尉殿のお知り合いだそ
うですね」

「え、ええ。まあ……………」

嗚呼。できるならシロツコの事は彼女達に話したくないんだが。

あんな『女を利用するのが大好き最強ニュータイプ』に、能力が高
くて、親が日本帝国のお偉いさんで、純朴な彼女たちが興味をもつた
らどうなるか。

……………ヒイイイイツ、シロツコが彼女たちでハーレム作って日本
を征服する幻が見えた!

「山城中尉殿、無理を承知でお願いいたします。パプティマス・シロツコ氏に一度あわせてもらえないだろうか。あの最強たる衛士の心中というものを知ってみたいと思います」

「うん。たしかに興味ある。会わせて英雄さん」

「私もあつてみたいです！」

知らんほうがいい。アイツの女と権力にまみれた真つ黒な腹の内など。

「コホン。残念ですが、彼は大東亜連合でたいへんな重責を担っている方です。ゆえに滅多な人間はお会いさせません。わたくしも彼にエウーゴ後任という重責を伏して頼んだ手前、無理を通すことはできないのです」

「お前たち、山城中尉に無理なことを頼んではいかん。ここの衛士は存在そのものが機密扱いの者もいる。うかつに会見など申し込むものではない」

さすががまりもちゃん。オレの適当なお断りに、それっぽい理屈をつけてくれた。

「迂闊なことを口にしました。不躰な願いなど申して、申し訳ありません。それはそうと、演習は終わったのに鎧衣はまだ戻りません」

ああ。鎧衣ちゃんは、お父さんの鎧衣さんに会いに行っちゃったんだよな。

「心配ですね。彼女の行先はわたくしの知っている人の所なので、連れてきましょう」

「お願いします中尉」

——「いえ、待つてください。みなさんに緊急の要件があります」
そう呼び止めたのは、警備兵の制服を着た男。観戦している人々をかき分けて現れ、そう言った。

「あなたは？」

「はい、伝令を頼まれた警備部隊所属のリージウツト軍曹と申します。日本帝国からみなさまに緊急の使者がいらつしやいました。至急統合司令部ビルまでお越しください」

オレたちに使者つて、香月博士からとしか考えられないけど。オレたち全員に要件つてのが、何なのか想像がつかないな。

ともかくリージウツト軍曹に連れられて統合司令部ビルに来た。

彼はオレの足元からピョンピョン跳ねてついて来るハロを怪訝そうな顔で見たが、いつもの通りゼータの外部コンソールだと説明すると、納得した。

それにしてもその統合司令部ビルは、あちこちにシャッターが下ろされてて妙な感じだ。まるで内乱の警戒態勢だ。

そして連れてこられたのは三階の会議室前。ここに使者が待つていと説明された。

——ザワザワツ

……………なんだ？ 妙にざわめいた悪寒がする。

「失礼します。山城上総中尉、神宮寺まりも軍曹ならびに第207訓練B分隊。ただいま参上いたしました」

まりもちゃんがノックして告げると、「入れ」と中からくぐもった声がただ一言だけ。

「ガチャツ」とまりもちゃんがドアノブを回した瞬間だ。悪寒は最高潮に達した。

「軍曹！ 入ってはいけません!!」

「えっ？ ……あうっ!？」

まりもちゃんを突き飛ばしてドアから引き離す。

そしてドアを蹴破って身を低くする。

「やはり……これはどう見ても、使者の方々ではありませんね」

その中には小銃拳銃などを構え、ボディアーマーを装備した剣呑な兵士たちが待ち構えていたのだ。

「チイツさすが乙の衛士パイロット、勘のイイ奴。ならばこのままひつとらえろ！」

中の兵士はオレたちを制圧すべく、ドツと攻め寄せる。

「ハロ、やりなさいー!」

「ハロハロー!」

ハロは「ブウウン」と高速推進で飛び上がり、ボールが飛ぶように

テロリストどもにぶつかっていく。そしてあちこち飛び回り跳ね回ってヤツラをなぎ倒していく。

「ぐわあああっ」「ぎゃあっ」「げふうっ」

大半の武装集団どもが倒れ伏していく。

このまま全滅させられるかと思いきや、「ガーオンツ」と銃声が響いた。

するとハロは空中で「ブルン」と回転し地面に落ちた。ハロが撃たれた！

「糞つゼータガンダム の操作機器と聞いていたが、こんな事まで出来たのか。いったいどういう技術だ」

それは武装集団の中でも一際貫禄ある男だった。

空中を高速で跳ね回るハロを一発で撃ち落したことといい、かなりの手練れ。おそらくはリーダーだろう。

「ピタリ」ハロを撃った小銃の銃口をオレに向ける。

「やはりキサマは危険だ。手に余るようなら殺して良いと言われてる」

男はゆっくり引き金を引き絞る。

くっ、ゼータに乗った時のように避けられるか？

相手は手練れ。、距離も近すぎる。

完全にかわすことは無理でも、急所は外そう。

問題は二発目。それを撃たせないようどうすべきか……

ガーオンツ

ドサリ……

「え……っ？」

撃たれて倒れたのはオレじゃない。相手の方だった。

眼を撃ち抜いてしとめた見事な腕。

そいつを撃った彼女は、茫然としたまま拳銃を構えて震えていた。

「あ……私、人を撃って……殺した？」

なんとそれは榊さん。彼女の持つ拳銃は倒れたテロリストのものを拾ったのか。

そうか。武器が落ちているんだから、拾えば良かったんだ。

状況が目まぐるしく変わる中でいち早くそれを行動し、さらにオレの危機に、ためらいながらも相手を撃った彼女。

この榊さん、かなり指揮官適性があるんじゃないか？

「もう良い。銃をおろせ榊」

まりもちゃんはそっと手を彼女の手に添えて銃を下に向ける。

「は……はい。教官、私、山城中尉が危ないと思って、それで……」

「ああ、よくやった。貴様のおかげで山城中尉は無事だ」

「ありがとうございます、榊さん。おかげで助かりましたわ」

榊さんを落ち着かせると、ともかくそこらに落ちている小銃や拳銃でみな武装した。みんな軍事訓練を受けているし、まりもちゃんという指揮官経験者もいる。ちよっとした部隊の完成だ。

「しかし山城中尉、この有り様はやはりテロでしょうか。まさか米軍基地の統合司令部ビルの中で？」

「にわかには信じがたいですが、このような者達がどうどうと一室に居ました。このビルは不明の賊に占拠されていると考えるしかありませんわ。ともかくビルから逃げて離れるべきでしょう」

PPPPPPPP……

と、オレがかかえてるハロが、いきなりアラームを鳴らした。

オレは機器の調子を見ると言ってみんなから離れる。

「ピ。ピッ……上総、ちよっと話が」

「ハロ、何ですの。みなさんが居るといふのに」

「緊急事態なんだ。ボクの本体があるXFJ計画専用ハンガーなんだけどね。何者かの武装集団が攻めてきたんだ。今、扉が爆破されて破られた。多分コイツらの仲間だよ」

「ええっ！ アルゴスのみなさんや篁さんは？」

「みんな戦術機で逃れた。あと整備兵の人達は、耐爆シエルターに避難したよ」

「とりあえず、ハンガー内のみなさんに被害は出ませんでしたのね。よかった」

「でもそいつら、ボクの本体をいじり回しはじめてる。どうやら奪

うつもりのようだよ」
糞っ！ 奴ら、ゼータまで奪う気か！！

98話 敵中孤立

キリスト教恭順派 side

統合司令部ビル地下五階 中央作戦指令室

耐爆隔壁に囲まれた中央作戦指令室が存在するフロアには、高度なセキュリティパスが設定されている。そこに至るエレベーターや通路でさえ、多重のセキュリティチェックポイントを通過しなければならず、極少数の要人以外、近づくことすら出来ない——そのはずだった。

現在そこはキリスト教恭順派が征圧しており、その基地司令席には彼らの赤毛の盟主・マスターが鷹揚に座っている。

基地中心部この場所までこれたのなら、彼らの目的成就もあと少し。

「現状の報告を」

彼は悠然とした様子で、精悍な印象の金髪女兵士に促す。ふわりとした金髪のくせ毛をヘアバンドでややアップさせている。

彼女は仲間から受け取ったファイルを読み上げる。

「全細胞は13時丁度に作戦を開始。通信センターの占拠。警備部隊への浸透。三軍の駐留部隊の襲撃。指揮官定例会議に集まった各指揮官の排除。各演習場にて試験中の開発部隊の制圧。これらに成功をおさめ、そして今、中央作戦指令室の占拠にも成功いたしました」
「けっこうだね。作戦は概ね成功といえるだろう」

「ですが小さな綻びもあります。Z搭乗者の山城上総中尉と日本帝国要人のご令嬢達の訓練部隊捕獲に失敗し、指揮官ルーデウスは死亡。訓練部隊は武器を手にし、ここ統合司令部ビル内を逃走しています」

「ふう。まさかルーデウスが、このような小さなミッションでヘタをうつとはね。浸透征圧をいくつも成功させてきた有能な男だったのに」

「そしてXFJ計画専用ハンガーですが、ハンガーの征圧には成功したものの、チームは戦術機で逃走されたもようです。他にも米軍イ

ンファイニティーズ、中華バオフエンからも数機」

「そちらのことは想定済みだ。征圧箇所が多岐にわたるため、いくつかの征圧漏れは起こすだろうとは考えていた」

「では、何か手を？」

「逃げ出した戦術機部隊は、もつとも近くのフェアバンクス基地を目ざすだろう。そこに網を張っている」

「さすがです。しかし非武装とはいえ、生半可な者では名だたるテストパイロット達を網に捕らえることはできないでしょう。腕はたしかな者でしょうか？」

「ああ。第五計画派が健在な頃だ。そこから『神の愛に目覚めた』という衛士を引き取った。【ヤザン・ゲール】という男でね。相当な腕の持ち主だよ」

「それは……大丈夫なのでしょうか？ いえ、マスターのお目を疑うわけではありませんが、出自から見てスパイともとれます」

「その心配ももつともだ。が、その場合の手も打ってある。もつとも彼は任務を楽しんでいるようだからね。明確な裏切りでない限り好きにやらせるさ」

神算権謀の隙のない計画をたてるマスターが言うならば、そのヤザンという男のことは心配ない。となれば目下の小さな問題は、マスターの計画を外した山城中尉と訓練部隊の少女たち。

「さてと。勇ましいお嬢さん方の件だが、この階上であまりお転婆をされるのはよろしくない。この件はどう処理するのかな？」

「定石通り^{セオリ}といったところですよ。練度の低い部隊で追い込み、征圧部隊の所へ誘導する。間もなく捕獲の連絡がくるでしょう」

◆◇♣♥♠◆◇♣♥

山城上総 side

統合司令部ビル八階通廊

「敵兵^{ボギ}あと五十で遭遇。先制しなさい」

オレが先の敵部隊を感知しそれをまりもちゃんに伝える。

「榊、まかせる。貴様が指揮をとれ」

「は、はいっ。各人兵装自由。合図とともに攻撃開始」

まりもちゃんは何故か自分はハ口を抱えて戦闘の出来ないオレの援護につき、榊さんに指揮をまかせる。もうみんな落第したつてのに、まだ教育しているのかね。

「敵兵遭遇。撃てー！」

「え、えいいいっ」

タタタタタタツ

珠瀬任姫さんの射撃はおそろしく速く正確。

相手に一切の動きを許さず、たちまち敵集団の手足が撃ち抜く。

「はあああっ」「ぐるんっ」

ひるんだ敵中に、勇ましく御剣さんと彩峰が飛び出し瞬時に征圧。

戦闘時に見るとこの二人の身体能力は凄すぎだ。十数人もの男達を近接戦闘で征圧って、どんな運動能力してんだ。

「ふうっ。中尉の言う通り、数は多くても練度は低い部隊でしたね。しかし……わかるのですか？ どこに危険な部隊がいるのか」

「ええ、殺気の強い場所に居るのが戦つてはいけない敵。わたくしには、そういうものを感じとる能力があるので」

オレのニュータイプ能力はBETA以外だとイマイチ鈍いが、頑張ればそのくらいは分かる。

しかし危険な敵を避け弱い敵を撃破しながら来たが、結果上へ上へと昇ってきてしまった。

「出口の一階は遠ざかるばかりですね。危険な敵が階下から追ってきますし」

「二階へ降りても脱出は絶望的でしょう。当然入ってきた通用門は封鎖されているでしょうし、あちこちシャッターも降りていて出られそうな場所はありませんでした。こうなると逃げ出すのは困難であります」

さて、どうするか。

今のところは戦えているが、敵もこのまま損害が増えれば本気になつてくるだろう。

現に殺気の低い、つまり練度の低い部隊は後退しつつある。

かわりに来るは殺氣の高い部隊。おそらくは手練れ。それがギリギリ迫ってきている。連中に捕捉される時期は近い。自由に動ける時間はあまりないぞ。

◆◇♣♥◆◇♣♥

キリスト教恭順派 side

「お嬢さん方はどうした。やけに時間がかかるが」

「申し訳ありませんマスター。連中、こちらに誘導しようとした方には行かず、追いついてる練度の低い部隊にばかり切り込んで、まるで罅が明きません」

「ふむ、損害は？」

「ルーデウス以来死者は出ていませんが、負傷し配置につけなくなった者が多数。このままでは支配時間に重大な齟齬が生じてしまいます」

「マンパワーの低下はまずいね。ただでさえ、この規模の基地を支配するには人手が足りないというのに。いくらあっても足りるものではないが……日本帝国の要人の娘さんが来ているということ、色気を出したのはまずかったか。強欲の罪はかくも重いね」

「申し訳ありません。すべては私のいたらなさの責任。ですが……」

「わかっている。一時的に精兵の配置を解こう。そしてお嬢さん方を捕らえることに注力させてくれ。時間をかけず迅速に」

「はっ、ありがとうございますマスター。ついては、元エウーゴの者を連れて私も出ます。うまくいけば説得して投降させることもできるでしょう」

その女兵士の名は「ヴァレンタイン」。難民解放戦線のリーダーである。

「ふむ。良いがイブラヒム・ドールウル大尉の時のような不手際は気をつけたまえ。もし、あくまで抵抗するようなら……」

彼の名にヴァレンタインは苦い思いを抱く。

彼はかつて難民キャンプで自分と妹を救ってくれた精悍な英雄だった。

仲間になつてもらいたく説得しようとしたが、結局逃げられ、外に連絡をしている所を射殺した。

大勢には影響がなかったものの、一步まちがえば作戦の根幹が揺るがす大事になる所だった。

「はい、もはや情けは捨てます。もし説得に応じないようであれば即座に射殺します」

◆◇♣♥◆◇♣♥

山城上総 side

統合司令部ビル十二階通廊

「まずいですわ……」

「まずいですか。逃走の目処もたたないまま、とうとう……」
テロリストどもが本気になった。

オレらを探して追ってくる連中が、みな手練れになったのだ。

それに上へ上へと昇ってきてしまったせいで、容易に封鎖される場所に追い込まれつつある。結局のところ、最初にテロリストどもにハメられた時点で詰んでいた。

「総戦技演習を思い出すな。この時間切れがせまり追い詰められていく感覚」

「演習では答えが用意されているけど、ここでそんなものはない。やっぱリイチバチで突破？」

「ええっ？ 彩峰さん、それはいくら何でも」

「ダメよ。明確な脱出方法が見えない間は戦闘は回避しないと。いえ、山城中尉の判断には従いますが」

「軍事教本ではこのような場合、味方との合流を考慮することが推奨されております。もっとも、ここでそれは望めぬでしょうが」

嗚呼、中尉の肩書が重い。オレが最上位階級だから判断を下さなきゃなんないんだけど。

こんなどうしようもない中、どんな決断をしろってんだ。

と、ハロが「ピピーツ、ピピーツ」と『話があるコール』をする。内部モニターのメッセージを見ると、向こうもヤバい状態だ。

『ヤツラ、ボクの本体をハッキングしてコクピットを開けようとしている。システムをメチャクチャにされてるし、もう逃げ出したい』それはマズイ。『ハロが自立思考をしているメカと知られるのは危険すぎる』とタイプしておく。

さすがにこの秘密だけは、この世界のどんな人間にも知られるわけにはいかない。宇宙人に攻められ追い詰められている人間が、非人類の高度な知能を持つ存在にどんな拒否反応を示すかわからないからだ。唯一秘密を知っている白銀にも『このことは絶対知られるな』と言われている。

ああ、もうどうしたら良いんだ。ゼータも助けなきやなんないし、みんなも無事にこのビルから脱出させないといけない。けど、正攻法ではどうしようもない。

……………決断するか？

いろんなタブーを取っ払って、ゼータで暴れてテロリストどもを壊滅させて、ハロと逃亡。

基地がテロリストに征圧された直後なだけに、後の追及はキビしいだろう。が、それもこの状況を切り抜け生き延びられたらの話だし。……………やるか。

禁断の最終手段を決行だ。みんなを守るためには苦い決断もしなきゃならない。

決断をハロにタイプで知らせようとした時だ。

「あーあ。この空から、味方の空挺部隊でも飛んできてくれればいいのに」

訓練部隊の娘たちの雑談から、彩峰のそんな呟きが聞こえた。その言葉だけがやけに印象的に。

ピコーン

ひらめいた！

彩峰、君は訓練部隊の中でイマイチ苦手な娘だったけど、今ので大

好きになったよ。

君のおかげで思いついた。

ハロの正体を知られずに救い、皆をこの包囲網から解放し、ついでにこの基地を占拠しているテロリストどもを壊滅させる方法を！

オレは素早くハロに作戦をタイプ。

『ハッチを開ける。その後……』

「中尉、そろそろ次の行動を決めねばなりません。いかがいたしましたしょう」

ちやうどハロに作戦指示のタイプが終わったところで、まりもちやんが声をかけてきた。

さてと。それじゃあ初めて小隊長らしいことをしようか。

「二〇七訓練部隊諸君！ これよりわたたくし達は最上階展望室にて防衛戦を決行いたします。武器弾薬をありつたけ集めバリケードを築き敵を迎え撃つのです！」

「「えええつ」「と、全員が驚きの声。

「無茶です！ それは救助が来ることが前提の作戦です。そのようなことをしても最終的には捕まるか戦死するだけです！」

「軍曹、訓練部隊諸君。反対意見を禁じます。そして上位命令としてこの命令には従ってもらいます。ただし約束しましょう。この作戦の先に、必ず全員を生きて包囲から解放すると」

さーて。こんな無茶無謀な命令でも聞くだけの練度はあるかな、落ちこぼれ諸君。

「……っ、了解しました。ただいまより二〇七訓練B分隊は籠城戦にそなえます」

「ふふん、面白くなってきた。英雄様のそれらしい所が見れるかも」

「迷いなし。ただ己を一本の刃となし振るうのみ」

「ふえええつ。見学に来ただけなのに、どうしてこんな事に」

よく言った（珠瀬ちゃん以外）。

もう君たちは落ちこぼれじゃない、立派な兵士だ（一人微妙だけど、射撃が神業だから良しとしよう）。

99話 別れのハンカチ

キリスト教恭順派・Zガンダム奪取部隊 side

X F J 計画専用野外格納庫^ハ

ハンガー内はキリスト教恭順派の実働部隊により征圧されていた。

部隊を指揮している男「ベン・ウツダー」大尉は、キリスト教恭順派実働部隊の中でキリストファー少佐に次ぐナンバー2であり、もつとも敬虔なる信徒であった。

比較的部隊数の多い彼の率いる部隊がX F J 計画ハンガーを攻めたのは、Zガンダム奪取が目的である。そして今、ハンガー内を制圧した後にゼータのシステムに侵入し、ハッチを開けんとする最中であつた。

「ええい、まだ開かんのか！ われわれは不信心者のキリストファーに負けるわけにはいかんだぞ。我らこそがマスターの信頼をもつとも受け、神の愛をあまねく世界へ伝えるべく使命を負った神兵。その伝道師となるこのZガンダムを一刻も早く手にせねばならんのだ！」

「わかっております大尉。ですが、このシステムはじつに難解で……あら？」

ウイイイン

いきなりゼータのコクピットハッチが開かれた。

ゼータのシステム解析を担当していたエンジニアは、妙なタイミンで開かれた気がして呆気にとられる。が、そんな疑問は些細なこと。

「ハッチ解放。やりました！」

部隊全員が歓声をあげ、口々に神を讃える言葉が飛び交い、ハンガー内は歓喜につつまれる。

「ハーレルウウウヤツ!! これ以上時間をかけては、爆破も考慮せねばならんところだった。ああ主よ、敬虔なるワガハイらの願いを聞き届け、あなたに恭順するワガハイらにZガンダムを授けていただいたこと、誠に感謝いたします！」

ウツダー大尉は嬉々としてゼータのコクピット座席に座る。

「大尉、いかがでしょう。通常の戦術機とはまるで設計思想が違いますが、起動はできますか?」

「戦術機は愛で動かすものなのだよ、君イ。いいかね、神の心を説き神の国に人々を導く愛をもって語りかければ、いかなる戦術機も心を開き天界より響く福音にうたれるが如く……」

「大尉、時間がないので手早く。起動を始めてください」

「む、しかたがない。のちの教義伝授までがまんするか。ではいどうぞ」

グイグイグイ

「え?」

ハッチは簡単に締まり、主機すらもすぐに立ち上がった。

「フハハ今度は一発だ。やはり戦術機は愛をもって動かすものなのだ。吾輩の愛をもってすれば、いかなる戦術機にも胸襟を開かせることは雑作もない。フハハハーツ」

エンジニアはゼータから離れ、上機嫌な上官をたしなめるが如く通信で次の行動を促す。

「こちらで起動状況をモニターします。では歩行を開始してください。くれぐれもブーストはかけないでくださいよ。ゼータの出力から考えて、われわれ全員が丸焼きになりかねません」

「安心したまえ。ここまですれば、もはや手荒な真似は無用だ。さあゼータくん。君とワガハイが共に歩む第一歩だ。ゆっくり感慨をこめて……」

大尉はゆっくりフットペダルを踏む。

ドツゴオオオオオオン

瞬間、ゼータはフルブーストがかかり、ハンガールの天井を突き破って飛び出した。

当然、ハンガー内で作業をしていた信徒はみな一瞬で丸焼きとなった。

「ぐわあああああつ! なんだこの戦術機はあ!? 初期起動すらないのか? ぐぶふうつ……Gが……キツイ。止ま……これ」

加速のGに押し潰されそうになりながら、大尉は反対側のフットペダルを踏む。

ガシャンガシャン ブオオオオオオオオンッ

ゼータはウェイブライダーに変形。さらに加速を増して飛んでいく。

「両方アクセル!? だったらブレーキはどこなんだああああっ!!
ぐげええええッGがあつ。ワガハイをこの空飛ぶ棺桶から降ろしてくれえええっ!!!」

ウェイブライダーはユーコン基地の空を猛禽の如く飛んでいった。

♠♦♣♥♠♦♣♥

山城上総side

統合司令部ビル十五階 展望会議室

ガキューーン ガキューーン

ガガガガッ ガガガガガッ

籠城防衛戦開始。

雄大なるユーコンの素晴らしい自然を一望できる展望会議室。お偉いさんはここで優雅な会議をするらしく、調度品も金がかかっていそうなものだ。

だがそれらはバリケードの材料になり果てた。

激しい銃撃戦がそこに展開される。

足を止めての銃撃戦となったので、オレもハ口を置いて戦闘に参加できるようになった。

そして射撃戦こそニュータイプの本領発揮。

敵を目視などせずとも位置がわかるので主導権は簡単に握れる。

さらには的確に敵の弱い所を指示し、そこに弾を集中させることで敵の接近を防いでいるのだ。

「意外と何とかなるもんだね。やっぱり英雄さんってすごいんだ」

「アンタ失礼よ! 歴戦の中尉に対して!」

「彩峰ではないが私も感服した。こうも敵の動きを察知することに長けているとは」

「ふえええーん。でもいっぱい殺しちゃったよお」

情けない声をあげているが、珠瀬ちゃんの結果が一番すごい。わずかにさらした敵兵を的確に狙撃し、屍の山を築いているのだ。やっぱりこの娘の射撃、神だわ。

ガキューンツガキューンツ

「しかし……戦ってみると、敵の練度が高いのを実感いたします。『キリスト教恭順派』。名高いテロ組織として噂には聞いていましたが、このような兵士を育てあげる組織とは何者なのでしょう」

「首領のマスターという者への忠誠も高いですね。どうやら地下の作戦指令室に居るようです。ここを抜けたら捕まえて正体を吐かせましょう」

ガガーンガガガガッ

『『ここを抜けたら』……ですか。そこまでいく以前に、こちらの弾切れが近いです。本当にその先の策はあるのですか?』

「軍曹、われわれは後どのくらい戦えますかしら?」

ズキューンツズキューン

「弾の消費量がこのままだと、あと十五分といったところでしょうか」

「十五分ですね。では十分後といきましょう」

恭順派のテロリストどもは、オレたちの前面入り口に集結していて、実によい頃合いだ。

ハロに「ポン」と手をのせると、「ピピッピピッ」と了解の電子音。

「さて、あと十分がんばりましょう……あら?」

いきなり敵からの銃弾の雨がピタリとやんだ。

「む? どうしたのだ、敵は」

「お休みタイム? そろそろ夕食時間なものね」

「油断しないで。何かしかけてくるわよ」

だろうね。銃弾のやんだ静寂の中に「——ヤマシロカズサ中尉に告ぐ」と女の声が響く。

さて、どんなしかけか。

——「私は難民解放戦線の代表ヴァレンティンだ。おとなしく投

降することを要請する」

これがしかけ？　するわけないじゃん。

——「我々は虐げられ差別されて生きる難民のために決起した。それは、かつてのあなたの仲間達も同様の思いを味わったことだ。彼らの言葉を聞くがいい」

ヘアバンドをした代表の女とともに出てきた、幼い顔立ちの少年少女の兵たち。それらの顔には見覚えがあった。

「あれは……エウーゴの子たち？」

オレがエウーゴ傭兵団に居たころに、オレの給仕をしたり、ゼータに憧れ戦術機に乗りたいたいと言っていた子供たちだ。

だが、彼らは皆この警備部隊の制服を着ていた。

それが何を意味するのか——考えると胸が痛む。

「カズサさま、どうか我々と一緒に戦ってください！　あなたも見て知っているはずですよ。ユーラシアの難民がどのような目にあっているか！」

「世界も国連も助ける命を選んでるんです！　弱者は切り捨てられてるんです！」

「弱気者達のために誰かが戦わねばならない。ユーラシアの同胞達を解放し、富を独占する者達を粛清するんです」

「Zガンダムはそのための力でしょうか？　虐げられ差別される人々の希望のほずだ！」

……みんな、やっぱりオレとブレックスがいなくなった後、酷い目にあってきたんだな。

みんなの事を思うより、復讐の道を選んだオレは悪い奴だったよ。それでも、この道を選んだことに後悔なんてできない。

オレは本当の意味でBETA倒すこの道を進む。お前達の嘆きを越えてもな。

「そろそろ時間ですね」

オレは立ち上がりバリケードから出ていこうとする。

「中尉!?　いけません！」

「心配いりません。相手に“撃ち気”はありません。少しばかり、

つきあつてさしあげます」

とはいえ、無用な危険をおかすバカな行動には変わりない。どうして、こんなバカしちゃうのかね。

やっぱりエウーゴを見捨てて国連軍日本支部に行ったこと、自分で思つてる以上にさうとう堪^{こた}えているみたいなんだよな。

「ピピツ？」とハロが疑問形の電子音

『策は予定通りに』のサインを残し、バリケードから出て姿をさらした。

「「カズサさま！」と歓喜の声が飛ぶ。

ああ、変わらないな。オレを見る憧れのまなざしは。

お前たちを裏切つたのにな。

「お願いです、我々と一緒に闘つてください！ 俺たちは……」

「言いたいことは聞きました。みんな、わたくしが去つてから相当苦勞したようですね」

「ハイ！ 上のやつらが配給された食料をみんな持つていつちまうんです。親が飢え死にしたんで、逃げてマスターの元でやっと生きてきました！」

悲しいな。そんな悲惨な状況を聞いても、オレはお前たちを否定しなきゃならない。

「お前たちは——愚か者です」

ざわつ、と困惑する彼らたち。

「どんな痛みも悲しみも正論も、虐殺に手を染めた人間の言葉は、誰の耳にも届きません。この基地で殺された者の家族や友人達は皆あなた方の否定にまわり、世界は彼らに同調するでしょう」

「ヤマシロ……カズサー！」

ヴァレンタインは激昂して叫ぶ。

「貴様はそれでも難民救済の英雄ブレックス・フォーラの盟友か！

彼の理想を継ぐことこそ貴様の使命とは考えぬのか！」

「あなたがブレックスの名を口にしないで。たしかにブレックスは難民を救うことを使命に活動してきました。だけどそのためにテロを起こそうなんて考えませんでした。ましてや救うべき難民の子ら

にテロの片棒をかつがせ、人殺しをさせるようなことは絶対しない！」

今ならわかる。ブレックス、お前は本当に難民の救世主だったんだな。

マスターなんて偽者とは違つてな。

「エウーゴの子らをテロリストにした男、マスターをわたくしは許せません」

それでも、お前たちの命の恩人なんだろうな。そのマスターという男。

だからこの決意は、お前たちの否定と決別になるだろう。

「わたくしは……マスターを討ちます」

ジャキイイツ ガチャツ ガチャツ

「ヤマシロ……カズサア!!」

「あなたはあ!!」「お前なんて女神じゃない!」「この……裏切者があ!!」

彼らが憎しみの目と銃をオレに向ける。

オレは微動だにせず言葉を続ける。それでも――

「誰の耳に届かずとも、世界中の誰からも否定されようとも、わたくしだけは憶えておきます。あなた達の嘆きも叫びも悲しみも……その最期も」

「なに？ ヤマシロカズサ、貴様いったい何を仕掛け……」

ドガアアアアン

突如、ウェイブライダーが展望室の壁を突き破って突っ込んできた。

それはちょうどオレの真正面。つまり集結しているテロリストどもをまとめて巻き込み、全員が原型をとどめぬ肉塊となった。

もちろん元エウーゴのみんなも。

「……安らかに」

彼らの軀へ「フワリ」とハンカチを投げかけ、せめてもの手向けとした。

100話 天才と鎧衣親子の冒険 その1

鎧衣左近side

第二演習区画 一般観戦モニタールーム

大東亜連合専用ハンガーに戻ると、すぐさまスタッフに避難を指示。

その後美琴に、訓練部隊のお嬢さんらに避難の説明をするよう頼んだのだが、その際シロツコ氏もついてきた。エウーゴ前任者の山城中尉が心配とのことだ。

だが、モニタールームへ来てみると、すでに山城中尉と訓練部隊のお嬢さん方はいなくなっていた。観客に話を聞くと、日本帝国からの使者が来て統合司令部ビルへ行ったそうなのだ。

シロツコ氏は自分のインカムで連絡をつけようとしているが。

「司令部に通信が繋がらん。いや、どことも繋がらなくなっている。彼女らはテロリストの手におちたと考えるしかなさそうだ」

「まいりましたなあ。奴ら、お嬢さん方にまで目をつけていましたか。あのお嬢さん方を手元におけば、日本帝国を利用することも可能となります。それを防ぐのが私の役目だったわけですが……いや、ひどい失態だ」

こんなことなら、美琴を呼びに行かず真つすぐに彼女たちの元へ行くべきだったか？

「どうしよう、みんながテロリストに捕まっちゃったの？ 助けに行かないと」

「あやしい者達がそこらに武器をもって基地内をうろついている。それに先程は、一般客の真上を戦術機が低空で飛んでいた。どうやら基地は完全に制圧されたらしいな。しかしどんな組織がこれだけの工作をおこなった？ 組織名に見当はつくかね、鎧衣くん」

「これだけのことが可能なテロ組織は『キリスト教恭順派』しかないでしょう。先日など、爆薬を満載したHSSTを横浜沖に停留中の第七艦隊に落として消滅させてもいますな」

「ええっ！ アレってテロのせいだったの？もしかして横浜基地

も危なかつたんじゃ？」

というより、その横浜基地を狙ったのだろう。

第七艦隊は、横浜基地が壊滅した後に救助の名目で第四計画の成果を奪うことが本来の目的。

BETAが役にたった稀有な例ではあるな。

「ふむ……よし、山城上総も助けねばならんし、美琴くんのご学友を救うことに私も協力しよう。しかし場所がこの基地の中心『統合司令部ビル』ともなれば、真つ向からの潜入は難しい。策をもってあたらねばいかん」

「ですな。私も潜入スキルはそれなりに有りますが、さすがにあそこはキビしい。陽動でもあれば良いのですが」

「その陽動は私が引き受けよう。まずは実弾装備の戦術機を調達。それで司令部ビルを警護している戦術機を落とせば、潜入できるだけの隙は生まれるだろう」

「なるほど、たしかにあなたの腕であれば可能ですな。しかし実弾装備の戦術機を貸与してくれる場所などありませんか。この基地で実弾装備機体を所有するのは、まず警備部隊。しかしこれはテロに乗っ取られているので論外。あとは基地の所有国米軍、アラスカを租借しているソ連軍」

「ソ連から借り受けよう。先の演習での重大な違反行為を問題にしない事を条件に交渉する」

「良いですな。では、交渉は私が行いましょう」

◆◇♣♥◆♣♥

サンダークサイド

Π3 研究棟機密区画 培養層処置室

何故か『姉妹』の重大違反行為に、その場では何ののがめも受けなかったことを幸いに、二人をここに運びこみ修復に尽力した。

結果、イーニア・シエスチナ少尉はどうやら助かりそうであり、培養層にて修復中だ。

だが、クリスカ・ビャーチェノワ少尉の方は……

「マス……ター。申し……わけありません……でした……」

培養層の隣の寝台に寝かされた彼女は弱弱しく私に謝罪した。

もはや彼女の体は手の施しようがなく、間もなく訪れる死を待つだけの状態だ。今、意識のあることだけでも相当の奇跡だ。

「いいや、よく戦ったビャーチェノワ少尉。貴官は私の誇りだ」

「あり……がとう……ござ……。どう……にかイーニア……だけは守り……ました。あとは……」

そうか。何故かイーニア・シエスチナ少尉のダメージは、ビャーチェノワ少尉に比べて軽微だった。それは彼女が何かからか守ったためらしい。

「ああ。シエスチナ少尉は見ての通り助かった。見えるか、おだやかな眠りだろう」

「ええ……もう……私はそばに居てあげられませんね……」

培養層に眠る妹を見せながら、静かに終わりを迎えさせる。私に出来ることは、そのくらいだ。

やがてクリスカ・ビャーチェノワ少尉の瞼が静かに落ちる。なれば、別れだ。

「貴官の祖国の献身、まことに見事だった。シエスチナ少尉と共にいつかまた貴官に逢うその日まで、待機任務を命じる」

「了解……しました……た。お待ちして……」

こうしてクリスカ・ビャーチェノワ少尉は眠りについた。もう目を覚ますことはない。

やるせない気持ちで、私は二人に背を向ける。

『祖国の献身』、か。実際はただ上層部のプライドを満たすためだけに使い潰されただけだな。ロコボフスキーの小物め。それにパプティマス・シロツコ。貴様を恨むのは筋違いだろうが、貴様さえいなければすべて上手くいっていた。日本帝国の懐柔もクリスカを失うことも……」

ピ。ピーツ。ピ。ピーツ

耳に響くコール音が鳴り、思索から覚まされた。

そしてコール音とともに灯った赤ランプを見て少し驚いた。それは緊急非常警告。

なにか起こったか？

内線通信の受話器をとると、『サンダーダーク中尉、一大事だ！』と、あわてた様子のベリヤーエフ博士がでた。

「どうしました。緊急非常警告とはおだやかではありませんね。基地上層部が先の演習の違反行為に何か強硬手段をこうじてきましたか？」

「そ、そうではない！ 所属不明の武装集団が、いつの間にか機密エリアの敷地内に侵入してきているのだ！」

「なんですと？ ソビエト軍相手にそのような無法を行う輩がいるというのですか。しかも機密エリアまで……セキュリティはどうしたのです。警報ひとつ鳴っていませんが」

「考えたくはないが、内部から手引きした者がいる！ でなければ、ここまで気取られずに来れるはずがないツ糞！」

さもあらん。我が国の被支配民族に対する抑圧や差別は根深いものがある。このような行為に加担する者が出てもおかしくないと考えるのが悲しい所だ。

「落ち着いて。すぐさま特殊警備部に連絡を。基地司令部にも報告を入れてください」

「とつくにやっている！ だが外部に通信が出来なくなっているのだ。どの通信機器も、まるでガラクタだ！ ……うぐツ」

突然「プシュツ」という音の後に連絡が途絶えた。
聞き覚えのあるその音は、サイレンサー減音器を通した銃声に他ならない。

早い。すでにベリヤーエフのいる機密エリア研究室にまで達したか。

なるほど、『見事』としいようなない鮮やかな手腕だ。

おそらくユーコン基地は、何者かが水面下で緻密に練り上げられた征圧計画によってすでに陥落している。

このソ連軍機密エリアに堂々と侵入する部隊が居り、通信がとれな

くなつたこの状況はそうとしか考えられない。

「おのれ……」

汚泥をすすり、屈辱に耐えながら練り上げ、積み上げてきた私の計画と野望。

パプティマス・シロツコという謎の男によつてぐらつかせられ、そして今謎の襲撃によつて霧散しようとしている。

「……よかろう。誰だか知らないが、ここを踏み荒らす罪に相應の報いをくれてやろう」

どす黒く煮えたぎる憎悪がこみ上げる。

かつての“部隊”にて幾人もの人間の頸椎を砕いた感覚がよみがえってくる。

「クリスカ、イーニア。お前達の眠りを妨げる者に容赦はしない。そこで待っているがいい」

培養層と寝台にねむる二人を一目だけ見ると、『黒木手の番人』となつた私は獲物を求めて部屋から出て行く。

。

101話 天才と鎧衣親子の冒険 その2

鎧衣美琴 side

ボクの名前は鎧衣美琴。衛士に落ちこぼれた訓練兵。

二〇七訓練B分隊のみんなとユーコン基地に視察見学に来たんだけど、そこでテロ事件が発生して、さあ大変。ボク以外のみんながテロリストに捕まっちゃった！

じつは職業スパイだった父さん、そして天才スゴ腕衛士シロッコさんと、みんなを助けるためにがんばります。

まずはソ連軍から戦術機を借りるために、ソ連軍管区へ行こう！

ユーコン基地 ソ連軍管区近傍

ソ連軍管区へ来ました！ でも……

「なんとということだ。まさか、ここもやられていようとは。このテロ組織は脅威となるものは事前に徹底的に排除する隙のない計画を立てているようだ」

シロッコさんは戦術機に乗る気まんまんで強化装備で来たけど残念。軍管区内に八機の戦術機ファルコンが付近を威圧するようライフルを構えてに立っています。建物やら金網やらは乱暴に破壊されていて、テロリストに侵入されているのは一目瞭然。

「ですな。さて、ソ連がダメとなるとどうしますか。いえ、その前にここから離れるべきですな。いまだ実行部隊は近くに居るでしょう」

「そうだね、父さんの言うとおり。でも、どうやってみんなを助けよう……あれ、シロッコさん？」

シロッコさんは動こうとせず、制圧している戦術機や付近をジッと凝視。

そしておもむろに言いました。

「……………フム。よし、あの戦術機をいただくでしょう」

「本気ですか？ テロリスト相手に生身でやりあう事になります

が」

「ヤツラの隙のなさから見て、このままあちこち探しまわろうと、完全に戦力を調達できる場所はないだろう。ならば、ヤツラが仕事をしている鼻先をかすめ取る。それ以外に道はないと思うがね。それともご息女を危険にさらすのは反対かな、鎧衣くん」

「いえ……」

父さんは否定せず、シロツコさん同様征圧されているソ連軍管区を注意深く観察、そして結論を言った。

「たしかにあの戦術機部隊は、留守番は残してあるものの、部隊の大半は機体を降りて施設内で仕事をしているようすな。となればその留守番兵を倒せば、望みの実弾装備した戦術機は手に入ります。しかし問題は……」

「問題は、空になった戦術機を守る留守番、かね？」

「左様です。その留守番兵がユニット内にて監視中です。ユニット内では、ふいを突いて倒すことは出来ません。また、ここらをセンサー観測しているなら、コソコソ動く私らを見落とすことは、まずあり得ないでしょう。ユニット内の衛士を排除する方法などないように思われますが？」

「心配はいらん。方法はある」

「ええっ!?!」

「だが、さすがに丸腰では無理だ。まずはライフルあたりの調達からはじめよう」

「どこから……ああ、いや、あなたの見ている方向から見当がついてしまいましたか、まさか？」

「そうだ。今ヤツラが仕事をしている現場。あそこは機密エリアの研究棟だな。あそこへ行き、ライフルもヤツラからいただく」

「二度目の本気ですか？ 相手は手練れの陸戦兵と思われます。それに対抗できる戦闘スキルがあるか？」

「私は生身ではさほどの戦闘力はないがね。私が身に着けているこの強化装備は少々特殊だね。これがあれば、熟練の陸戦兵であろうと問題はないのだよ」

シロツコさんの強化装備は、たしかに普通のよく見る強化装備とはかなり違っているけど、どう特殊なんだろう？

「フム。あなたが言うのなら、それは信じるとしましょう。しかし私たちだけで、プロ陸戦兵並みのテロ集団の仕事現場に訪問ですか……」

父さんは、しばらく考えた後、ボクに言います。

「美琴、どうする。お前が手伝ってもらえるなら勝算はある。もちろん引いてもいいが？」

「ボク、やるよ！一刻も早くみんなを助けなきゃ」

「……………そうか。ならば斥候をたのむ。訓練兵の成果を見せてくれ」

そう。この中で斥候が務まりそうなのは、ボクだけなのです。

父さんもスキルはあるけど、体が大きいし、体が小さくて先日まで訓練を受けてたボクが適任なんだよね。

「ただ、研究棟入り口付近も監視対象になっているでしょう。見つければ36mmの餌食ですな」

総合評価戦技演習を思い出すなあ。

今度の失敗は落第じゃなくて本物の死^{デス}だけだ。

そんなわけでボク達は、建物の合間を縫って機密エリア内に侵入。こういったミッションは総合評価戦技演習で経験済みのボクが、先行してルートを選び、研究棟の入り口を目ざして進みます。

だけど、あと少しで研究棟入り口にたどり着こうかという時、ふいにシロツコさんが叫びました。

「見つかった！ 走れ！」

「え？どうして、そんなことがわかる……………うわっ」

父さんはボクの腕をすごい力で引っ張り、入り口の中へ転がりました。

ガガガガガガッ ガガガガガッ

遅れて耳をつんざくような機銃の掃射音。

この銃弾の中じゃ、生身の人間なんて生きられっこない！

「父さん、シロツコさんが…………」

「動揺をするな。こういった潜入では、仲間の死も当然のことと受け止め、先に進まねばならん。しかしな……」

「しかし……なに？」

「彼と長くつき合ったせいだろうな。どうにも私にはシロツコ氏がここで死ぬとは思えんのだ。そう思わせるだけの奇跡を何度も見てきたからな」

父さんの言葉通り、やがて後れて無事なシロツコさんが入り口から入ってきました。

どうして生きているの!? ありえないんですけど！

「ふうっ。さすがに36mmの雨の中を走り回ってはかなわんな。さて、しばらくは君の諜報員としてのスキルに頼ってもらっていいかな？」

「ええ。こういったうす暗い施設内こそ私のスキルの生きる場。ですが早めに武器を調達せねば危ういでしょう。先ほどの監視機体から、中の仕事連中へ私たちが侵入したことは連絡が入ったはずですがさすがに“これ”だけでは、連中の武装に対抗しようがありません」
父さんはP88拳銃を手元でヒラヒラさせた。

さすが本職スパイ。そんなものを持ち込んでいたんだね。

「——貸したまえ。君達はさがって」

と、シロツコさんは父さんから拳銃をとりました。

そして研究棟内部に続く扉の前に立ち、構えます。

「襲撃の警戒？ でも扉の横で待つのがセオリーじゃ？」

「……いや、彼の流儀でやらせてみよう。美琴、こちらに来なさい」
やがて……

「バアアンツ」と荒々しく扉が開け放たれ、中から三人のライフルを構えた武装兵が飛び出してきた！

パーン パーン パーン

「え？」

あまりのことに呆気にとられちゃいました。

シロツコさんは扉が開いた瞬間、構えた拳銃を三発だけ放って突撃テロリストを倒したのです。

見ると、テロリストの額にはヘルメットをさけて眉間に一発ずつ。「うそ……何でこんな事が？　こんな『襲撃される』って予知でもしなきゃ不可能なのに」

「ならば、したんだろう。彼の異能にいちいち驚いてはいられんよ」ボクの驚きをよそに、シロッコさんは倒れたテロリストの腕からライフルを拾います。

「さてと。奥に進むまでもなく、めでたく無傷のライフルが手にはいったな。これで外のファルコンを奪いに行けるな……む？」

ふいにシロッコさんは、扉の向こうの奥へ続く廊下の先を遠い目で見ます。

「どうしました？　また襲撃者が来ますか」

「……何者だ？　それに共振だと？　まさか、この先に真のニュータイプが居るといふのか？」

突然シロッコさんはわけのわからない事をつぶやきます。

「どうしたんです、シロッコさん……あれ？」

何となく。何となくだけど、シロッコさんが感じてるものをボクも感じたような気になった。

この感覚は、まるで宇宙？

「どうした、美琴。何かあったのか？」

「うん……この先に不思議な人がいる気がするんだ。その……うまく言えないけど、意識だけ飛ばして話しかけてくるような。あと、まるで宇宙の中に意識だけで居るような気分なんだ」

ボクの言葉にシロッコさんはニヤリ。

「ほう。君はなかなか良い資質をもっているな。ニュータイプを感じたか。そうか、ここはソ連機密の研究棟。あの紅の姉妹スカーレット・ツインが生まれた場所か。ならば納得だ」

「また【ニュータイプ】ですか。あまり踏み込む気はなかったのですが、そろそろ、それが何なのかご教授していただきたいところですね」

「フツ知りたいなら、この先にいる『彼女』に会うといい。言葉で説明するよりずっとよく理解できるはずだ。少しだけ寄り道しましょう」

彼女？ どうして女性だとわかるんだろう。

「三たび本気ですか？ この先はソ連の機密を扱うエリア。踏み込めばソ連に狙われることになりますよ」

「だが、今はすべてキリスト教恭順派どもの仕業に出来る。この不幸中に降ってわいた千載一遇のソ連の機密を知る好機。スパイとしての君はどう思うのかね？」

「い、いやお嬢さん方の救助はどうするのです。それに、この先は武装グループの本隊も居ますが」

「なに、連中が彼女達を人質にするなら、しばらくは命の心配はあるまい。それに戦術機を奪う最中に、本隊が出て来たら挟み撃ちになってしまう。本隊は排除しておいた方が安全というものだ」

そう言つてシロツコさんはライフルを構えて扉をぬけ、奥へと進んでいきます。

「ふう。かつてない機密を知る機会に恵まれたことを喜ぶべきか、それとも彼女達の危機の中でそれが来たことを悲しむべきか。ともかく策はシロツコ氏の異能頼りだ。彼が行くというならば、つき合うしかない。美琴、悪いな」

「うん。でもこれが終わったら、ちゃんとみんなを助けに行こう」
ボクたちもライフルを拾いあげ、シロツコさんに続くのだった。

102話 天才と鎧衣親子の冒険 その3

キリスト教恭順派・ソビエト機密エリア襲撃部隊 side

このソビエト機密エリア襲撃部隊の指揮をとるのは、キリスト教恭順派・実行部隊ナンバーワンのクリストファー少佐。

この機密エリアは彼らの最大の目標。ゆえに基地制圧がほぼ完全になったので、クリストファーは戦術機部隊の指揮をヤザンという新人にまかせ、この場所の襲撃指揮をとっているのだった。

事前に被支配民族の下級職員を内通者にしていたので、たやすく警備部隊を全滅させ通信を遮断し、この機密エリアを陸の孤島と化することに成功した。

あとは中の研究資料を漁ってお宝を持ち帰るだけ。

そのはずだったのだが……

ソ連軍管区機密エリア研究棟 第一実験室

「チツ、珍客をむかえに行った連中が出やがらねえ。ってことは、やられちまったようだな」

クリストファー少佐は忌々し気にインカムをはずした。彼とその部隊は、現在、第一実験室にて研究資料を漁っている最中だった。

その途中、外の監視員から侵入者を入れてしまった報告を受け、すぐさま排除要員を送った。

だが、その連絡が途絶えた。思わぬ厄介な邪魔者の登場に、クリストファーは歯噛みする。

「クリストファー少佐。では今度は我々が」

「いいや、相手は手練れだ。俺みずから行く。二人ほどついて来い。あとはこのまま資料を漁っておけ」

「はいっ、お気をつけて」

愛用のライフルを握り、謎の侵入者を迎撃におもむかんとしたが、突然部下の一人が大声をあげた。

「少佐！ お待ちください。ここ！ この壁は二重壁になっていま

す。向こう側に隠し部屋があります！」

「なにイ？ …チツ、となると、ここにあった資料はみんなダミーか！ ソ連の秘密主義者め、よけいな手間をかけさせやがって」

壁の一部が開いて入り口になり、その奥には培養層のようなものはいくつか並んでいる。

そしてその横の寝台には女性が横たわっている。生気のなさから死体だろう。

「培養層か。中身は何だ？」

「中は…人間？ 人間が中に居ます！」

「人間だと!? まさか、第三計画の遺品か？ クソツ、さっきの博士らしい奴を生かしてれば、うたわせてやったつてのに！」

「やむを得ません。どこかへ連絡をとっていたのですから。ですが本国の研究者に見せれば大喜びでしょう」

「ともかく、ここにある重要そうなのはすべて持っていけ。培養層の中身はもちろん死体もだ。おそらくは貴重な検体だ」

「人間の体を持つていくのは困難ですね。ここまで大荷物となると撤収するのも一苦労です」

「ウツダーの手下どもでも手伝いに呼ぶか。Zガンダムに第三計画の人形。あとはパプティマス・シロッコつて野郎をさらえば、回収は完了だ」

「パプティマス・シロッコ？ 大東亜連合の？ それは当初の予定になかったはずですが」

「計画当初には存在すら知らなかったからな。だがアイツは人形をも上回るスペック持ちでZ関係者だ。奴をうたわせれば、噂のZ技術とやらも少しは霧が晴れるだろうよ」

「了解いたしました。まずは、この引越しからですな」

「ああ。手早く頼むぜ。まったくヤザンの野郎が戦術機部隊を率いてくれたんで楽になったかと思いきや、仕事は増える一方だな。そいじゃ、俺はお邪魔虫退治といくか」

クリストファーは再びライフルをかまえ、部下二人と珍客の迎撃に向かわんと実験室を出て廊下を歩む。

だが先ほど出てきたばかりの部屋から「ゴキリ」とかすかな音が聞こえ、足を止めた。

それは聞き覚えのある、人間の頸椎をへし折る音。まさか、さっきの隠し部屋には生きた人間もいたのか？

——「クリスト……ガッ！」

!!?

「少佐！」

「ああ、はつきり聞こえた。チツ、中に番人がいやがったか！」

研究室のドア横にもどり、身を低くしてドアを一気に開けて中に飛び込む。

見ると、ソ連の将校らしき男が部下の首を異様な方向へねじっている最中だった。

あちこちにも部下が倒れている姿が見える。

この短時間で全滅？ おそろしい奴だ。

「テメエ！ よくも俺の部下どもをー！」

ガガガガガガツ ガガガガガガツ

部下二人とともに、部下の死体に穴が開くのもかまわず、広域に乱射。

将校はすばやく秘密部屋の向こうへと逃げていく。

「出てきやがれ！ よくも俺の部下どもを殺ってくれたな！」

——「人の部屋に勝手にあがりこむ輩にお仕置きをただけだ。それより、この部屋でさっきのような乱射はご勘弁願いたい。ここには大事な資料と、何より彼女達が眠っているのだな」

このかくし部屋の研究物や資料は貴重だ。

できるならここで銃撃戦はひかえたいと、クリストファー達は踏みとどまる。

「出てこい！ でなきやこの部屋ごと爆破してやるぜ」

「出来るかな？ 君達のお宝も爆破されることになるが」

「チツ……」

クリストファーは考える。

この野郎は、俺の部下どもを全滅させるとんでもねえスゴ腕だ。

かくし部屋の資料を惜しんで損切り出来なきや、こちらも危ねえ。
「よしっ、テメエら。資料に構うな。まずは野郎を排除……なにっ
!？」

ガガガガガガッ ガガガガガガッ

突如、背後の入り口からフルオートの乱射が来た！

(糞っ、向こうの侵入者を忘れてた！)

部下二人はまともに喰らって倒れたが、クリストファーはどうか
頑丈な机の裏に逃げる事が出来た。そして一瞬、襲撃者どもの顔を
確認することも出来た。それはターゲットのひとつの……

「テメエは……パプティマス・シロツコ!？」

部屋の入口にて他二人とライフルを乱射し構えている男は、まさに
それだった。

「おや、私を知っているのかね。だが、あまり光栄ではないな」

次にねらうお宝が向こうからやって来た。が、部下が全滅したこの
状況では嬉しさも半減。

さらう暇も手段もありはしない。ならば万一に賭けて懐柔か。

「どうだ、俺と来ねえか？ テメエを高く買ってくれる有力者に紹
介してやるぜ」

「バカかね、君は。この状況でテロリストにつくほど、私が愚かだと
でもっ。」

「だよな。だったら仕方ねえ。どこまでも、お宝がだい無しになる
日だぜ……うっ」

ギリリッ

首の圧迫とともに、背後に猛獣のような気配をクリストファーは感
じた。

——「命もだい無しだな。いけないな。私を相手に私から目を離す
なんて。『主敵から目を逸らすな』と学ばなかったか?」

警戒を怠ったつもりはなかった。

それでも奴に背後をとられ、あまつさえ致命的にまで接近された。

(糞っ、なんで研究所なんかに、ここまでデキる奴がいるんだよ!!)

——「その野獣のような目。嫌いではないが、この部屋を見られた

からは生かしておけない」

ゴキリッ

◆◇♣♥♥◆◇♣♥

鎧衣美琴 side

テロリストたちはみんな倒れたので、ボクたちは三人そろってソ連の将校さんに挨拶。

でも機密エリアの研究所なんかに入っちゃったこと、どう説明しよう。

この将校さん、そこらに倒れているテロリストをみんなやつつけちゃった人みたいだし、怖いよ。

「ご協力感謝します。私はイジー・サンダーク。ここに所属するソビエト軍中尉です。ですが、あなた方は？ どうしてこの機密エリアの研究棟に？」

「我々は大東亜連合エウーゴの者です。先の演習の行為について説明をもとめに来たのですが、途中テロリストに襲われましてな。あちこち逃げ回りライフルを奪ったりしている間に、ここに来てしまったという訳です」

さすが父さん。機密エリアなんかに入っちゃった理由を無理なく説明してる。

偽装身分カバの貿易商バっぽい事も、ちゃんと上手くやれるんだね。

「そうですね。それは大変でしたね。ですが、あなた方が来ていただいたお陰で、大切な資料や研究を守ることが出来ました。ふかく感謝いたします」

あれ？ だけどサンダークさん、何で倒したテロリストからライフル拾っているの？

「ガチャリ」流れるような動作で発砲状態にして？

「ふたりとも下がれ！ ……いや、私の後ろに！」

シロッコさんは叫ぶ。

父さんはスゴい勢いで、ボクに覆いかぶさるように抱きかかえる!?

ガガガガガッ ガガガガガッ

サンダークさんが掃射した!?

しかも速い! この人、歴戦か!!

シロツコさんは強化装備が守っていない頭もしつかり撃たれてる!

「恩人だろうと、この部屋を見られたからには生かしておけない。パプティマス・シロツコ。君の能力は惜しいが、容赦はない。みなキリスト教恭順派の憐れな犠牲者となりたまえ」
ガガガガガガガガガガガガガガガガッ……

103話 天才と鎧衣親子の冒険 その4

パプティマス・シロツコside

ガガガガガガガ………

ライフルのフルオートが途切れた。

だのに平然と無傷で立っている私を、サンダークは『信じられない』
とでも言うように凝視している。

私の後ろの壁も実験室の備品もメチャクチャに破壊されている。
その様を見れば、その中で生きている人間なぞ不思議でしようがない
だろう。

「鎧衣君、美琴君。終わったぞ。生きているか？」

「ええ。多少弾はかすりしましたが、致命傷はないですよ。しか
し、いったいどうして我々は生きているのでしょうか？」

「父さん、苦しい。どうなったの？」

私の言葉通り、私の後ろについて身を小さくしてたようだな。

しかしまさか無傷ですむとは。この男も相当に運が強い。

「バカな……いかに強化装備であろうと、フルオートを至近で掃射
されて無事なはずがない！ いったいどうなっている？ それにそ
の青い発光は何だ？」

「フフフ……【サイコフレーム】。その名だけ教えよう」

カズサからもらったサイコフレームを組み込んだのは、じつは機体
のF-15改ではない。

この衛士強化装備の方だったのだ。

それによってサイコフィールドを発生させ、銃弾をすべてはじき返
した。

この世界の人型二足歩行機技術は、宇宙世紀時代のモノよりはるかに
遅れている。もつとも地球産素材だけでここまで発展させたとい
うのは、ある意味すごいのだが。

だが、この時代の技術でも注目すべき発想というものはある。その

最大がこの【衛士強化装備】というパイロットスーツだ。

パイロットスーツに機体の機能の一部を備えさせ、搭乗者の意識や性格や身体機能を機体に反映させアップグレードしていく。

こんな発想は宇宙世紀にはなかった。

私ですらこの発想には思い至らなかったが、作ってみると、かなり利便性の高いものだった。

とくに、もたらされたサイコフレームをこれに組み込めたことは大きい。どのような機体であろうと、脳波コントロール装置さえ積みめば、簡易サイコミュ搭載機体にする事が出来るのだから。

「先ほどはファルコンの36mm銃弾すらもはじき返した。その程度のライフルでは問題にならないな」

もつとも理論上耐えることは可能とはいえ、セーフティネットもなしに、いきなりそこまで高レベルな耐久性能試験などはしたくなかったがな。

「Z技術か！ 装甲はおそるべきだが、関節はどうかかな？」
蛇の捕食のようにすばやく彼の腕が私の首に伸びる。

されど先ほど同様、青いサイコフィールドにはばまれ、指は私の首をつかむことが出来ない。

「ぐくっ……この青い発光体はなにかのフィールドか？」

「関節もダメだな。君の戦闘技術は物理的な装甲ならねじり上げることも可能のようだが、残念だったな」

「くっ！ おのれ、ならば！」

サンダークは標的を後ろの鎧衣親子へと変えた。彼らに飛び掛かると私をすり抜け走る。

人質にでもするつもりか？

手段を選ばぬ所といい、人を殺す技術に長けている所といい、この男の過去は処刑専門の特殊部隊あたりだろうか。しかしその行動は悪手。

パーン パーン パーン パーン

その背中をP88拳銃で撃ち抜いた。

サンダークは雷にうたれたように止まり「ドウツ」と倒れる。

「背中を見せねば、君にこうも容易く当てることは出来なかった。『主敵から目を逸らすな』ではなかったかね？ セオリーは知っていても急場で実践は難しいということかな」

「クソツ……お……おのれ……」

サンダークはうつ伏せに倒れながら、悔しそうに殺気めいた目で私を睨む。

「その獣のような目。嫌いではないが生かしておけない……おつと、これも君のセリフだったな」

彼を見下ろし、あらためて頭へと銃口を向ける。

「ソビエト軍士官の……私を……殺す気か。ソビエト軍そのものが……貴様たちを……狙う……ぞ」

「キリスト教恭順派の憐れな犠牲者となりたまえ。……これもさつき君が言ったな」

こうも要所要所のセリフがカブるとは。

案外、私とこのサンダークという男は似た者同士なのかもしれない。

「私を殺せば……このテロを終息させることは不可能になる。テロを鎮圧できる特殊部隊を……動かせるのは……私だけだ」

まだ足掻くか。しかし先ほども思ったが、この男の危険すぎる剣呑さは嫌いではない。

少しだけつき合ってやるか。

「ほほう、君にそのような権限があるのか。たしかにこのテロは終息させねばならんな」

「そうだろう……我が国では……このような非常時のため……対テロ鎮圧用の特殊部隊を……基地に常駐させている。それを動かしたくば……」

「だが、その特殊部隊に最初に命じるのはテロ勢力の排除ではない。我々の処刑だ。『この部屋を見られたからには生かしておけない』君はそう言って問答無用で我々を殺そうとしたではないか」

「クッ！」

「ゆえに我々があの部屋を見たからには、君は生かしておけない。

私はともかく、友人の鎧衣親子を守るため、あえて苦渋の手段をこじよう。墓守の番人よ」

この機会を利用して鎧衣くんの好感度をアップだ。

しばらくは日本帝国情報部の彼の伝手を頼りにせねばならんし、ジャミトフには効果的だった追従でも言つてやろう。

「嘘を……ついているな。貴様の目は……墓泥棒そのものだ。おおかた、ここへ来た目的も……」

パーン パーン

サンダークの頭を撃ち抜き完全に絶命させる。

さすがにこれ以上は危険だし、余計なこともしゃべろうとした。

「ああ、鎧衣君。君にコレを返すのを忘れていたね。全弾打ち尽くしたが返そう」

拳銃を鎧衣君に渡すも鎧衣君は微妙な顔。

「はあ。ですがこれでソ連軍士官を殺しましたね？ もし線条痕とか調べられたら、私が殺したことになるんですけど」

「おっと、気がつかなくてすまない。では、こうしよう」

ガガガガガガガガガガ……

ライフルのフルオートでサンダークの遺体をメチャクチャに破壊する。

キリスト教恭順派の憐れな犠牲者だ。

サンダークがやろうとしていた工作を、犠牲者役をサンダークに変えてそのまま実行だ。

「こんなものでいいだろう。『勇敢なるソビエト軍士官サンダーク中尉は、ただ一人にて多数のテロリスト相手に奮闘。数多あまたの敵を倒したが多勢に無勢。ついには敵の銃弾にとらえられ、あえなく最期をとげた』 そのように演出してみた」

「あまり娘に見せたくないものですな。行為もホトケさんの惨状も」

「ボ、ボクは平気だよ。シロツコさんはボクと父さんのためにやってくれた事だし」

「まあ、たしかにこうしなければ済まない状況でしたな。我々は始

未されていたでしょうし。と、そう言えば、ここへ来た目的の「ニユータイプ」とやらは見せていただけそうですねか？」

「それは、この隠し部屋の中に居そうだな。さて、墓守が無差別殺戮をしてまで隠したがったものを拝見しようではないか。墓泥棒のようにな」

壁の一部が開いた隠し部屋の入口。

中に入ると、そこにはいくつかの培養層と貴重そうな研究資料。寝台には女性の遺体。

サンダークは我々を殺そうとフルオート乱射していた時でさえ、意識はこの部屋に向いていた。

はたして彼がそこまでして守ろうとしたものは何なのか。

国家への忠誠？ いや、個人的な愛情のようなものを感じた。

それが向けられているのは、おそらくこの研究棟に踏み入れた時に精神感応で私に呼びかけた存在。

「……君、か。私を呼んだのは」

私は大きな培養層のひとつの前で立ち止まった。

104話 天才と鎧衣親子の冒険 その5

鎧衣左近 side

「シロツコ氏はどうしてしまったのだ？ あの培養層の前で固まってしまったが」

幾つかある培養層の中で、とくに大きくて大掛かりな機器が接続されている培養層の前でシロツコ氏は固まってしまった。

中には年若い女性が裸で水の中に居る。まるで人間の検体だ。

「会話をしているんだと思うよ。中の人と」

「美琴？ バカな、あの中にいる人間は、どう見ても意識があるようには見えんぞ。それどころか生きているのかさえ疑問だ」

「ううん、たしかに生きているよ。あんな状態だけどシロツコさん
と意識だけで会話している。内容までは分からないけど」

たしか人間の死体の保存にしては装置が大がかりすぎている。

美琴の言う通り生きてはいるのだろう。ただし、何らかの検体として。

彼女の正体のヒントとなるであろう寝台の方へ視線を向ける。

「ふうむ。寝台の遺体とあちらの培養層の中の彼女は紅の姉妹スカーレット・ツインだ
な。なるほど、これがソ連の誇る最強衛士の秘密というわけか」

サンダーク中尉があれほどまでにこの部屋を隠そうとした執念めいた行動。

姉妹二人がここで処置を受けているような様子。

この部屋最大の培養層の中の彼女が、どことなく二人に似ていること。

これらを考えれば、おのずと答えは導かれる。

紅の姉妹とは、あの培養層の彼女を基に作り出されたクローン。スカーレット・ツイン

そして培養層の彼女は、オルタネイティヴ第三計画で生み出された超能力者である可能性が高い。

「いや待て。『意識だけで会話』だと？ たしかに彼女が第三計画のそれなら、意識を送ることも可能だが……」

第三計画の目的は、BETAにこちらの意思を送る能力【プロジェ

クシヨン」に長けた能力者を生み出すこと。

だが会話となると、シロツコ氏自身も能力者でなければ成立しない。

なるほど。ニュータイプとは、第三計画の完成……いや、その超越と見るべきか。

しかし、ソ連の機密研究をも超えた存在のシロツコ氏。

いったい彼はどのようなにして生み出されたのだろうか？

「父さん、どうしたの？ 第三計画とかのことを考えているの？」

——
!!!

「……口に出していたか？ 他に何を私はしゃべっていた？」

「え？ それ以外は特に何も言っていないけど」

「そ、そうか。それはぜったい誰にも漏らしてはいかんぞ」

ともかく、はからずもソビエトの機密がそこらに転がっている場所に来てしまった。

シロツコ氏やニュータイプのことは置いといて、やるべき事をやるとしよう。

「美琴、父さんは父さんの仕事をしなければならぬ。お前は見張りに立っていてくれ。実験室に近づく者がいたら知らせるんだ」

「うん、わかったよ。警戒任務だね」

美琴が見張りに出ていったあとにぎっとその場の機器を見渡す。

「さあて。この機密全部は、私の携帯データの容量ではとても足りませんな。重要そうなものから抜いていきますか」

ともかく私でも扱えそうなPCを起動し、暗号解読ツールでパスワード解錠をこころみる。

意外と難度は低い。やはり秘密部屋なだけに、ここまでこられる事は想定してなかったのだろう。

そんなこんなで、ソ連研究の機密を漁ってしばらくたった頃。

——「ふむ、こうか」

ふいにシロツコ氏のつぶやきと共に「ガシヤン」という音が聞こえた。

見ると、彼が見ていた最大の培養層は解放され、中の液体が流れて

いく。

あれでは、中の彼女は死んでしまう！

「シロッコさん!? 何をしているんです!」

「彼女自身の頼みだ。『この状態で生かされ続けるのは苦しい。ハッチの開け方を教えるから解放して欲しい』だそうだ」

まさか……本当に彼女と会話していたというのか？

「彼女はサンダーク中尉の妹だそうだ。彼は彼女を生かし続けるために実験を続けて、ソビエトから資金と施設を提供させていたようだがな。皮肉だな。彼女の思いとは真逆のことをしていたわけだ」

「それを思念での会話で彼女から聞いたと？ となると、あなたも一種の超能力者ということになります。いえ、あなたの言葉では『ニュータイプ』と呼ぶのでしたな」

「フツ、だが私の素の能力^{ちから}だけでは彼女にここまで近づくことはできなかった。これもサイコフレームの力か。これはこれまでのサイコミュとは一線を画すシロモノだな」

サイコフレーム？ 何なのだ、それは。

シロッコ氏の言葉から、Z技術の中でもそうとうレベルの高いシロモノではあるようだが。

これの情報を得ることは今後の課題だな。

「こんなものをもたらす山城上総とは何者なのだろうな。ますます彼女が欲しくなったよ」

なにっ!? それは山城上総がもたらしたモノだと？

彼女のことはさんざん調べたが、幼少期から現在までZ技術に関わるような話はまったくなかった。

いったい彼女はどこからZガンダムはじめそのようなものを手に入れているのだ？

バン バン バン

シロッコ氏は、露わになった彼女の体をライフルで撃ち抜いてコナゴナにした。

「すまん、こんな弔いで。だがこれで君は無価値な存在になった。もう誰にも利用されることはない」

そうだな。彼女の映像をおさめて資料のひとつにでもしようと思っていたが、私もそれは出来なくなった。

「さてと。もうここに私は用はないが、君の方はどうだね。ソ連の機密研究を調べることはできたかね」

「ええまあ、そこそこですな。ともかく世話になった方々にお土産を送るくらいはできそうです。しかし、あなたの方はそれで良いのですか？ 危険に見合わず成果は薄いように思えますが」

「なに、本当にただ見てみたかっただけさ。ニュータイプの鼻先にまで届いたソ連の研究をな。それに醜悪な人体実験に使われていた彼女を解放してやった。サイコフレームにも新たな側面が見えたと、成果は上々さ」

「そうですか。では、ここらで本来の目的に戻るとしましょうか」

「そうだ、行くとしよう。当初の予定通り戦術機を奪い、山城上総とその他を助ける」

私たちは踵を返し培養層室を出ようとすると、途中寝台の遺体と培養層の中の彼女が目に入った。

「紅スカーレット・ツインの姉妹か。彼女らもこの研究で生まれ実験体として生きてきたのだな。哀れな存在だ。培養層内の片方は生きているようだが、番人も研究者どもも亡くなつては、長くはあるまい」

「哀れではありませんが、さすがに彼女を助ける余裕はありません。急ぎませんと」

「わかっている。ではな。勝負で私に土をつけた事は忘れない……うっ!?!」

いきなりシロツコ氏は何かに引つ張られるように止まった。

そして強化装備の何らかの機能が勝手に可動し、青い光がシロツコ氏をつつむ。

「どうしました、シロツコさん!?!」

「クツ、お前は? ……なっ! 紅スカーレット・ツインの姉妹の片割れだ?!」

青い光の中で彼は誰かと会話している?

「……そうか、これもサイコフレームの力か。なんということだ。自身の念だけでなく死人の念までも受け入れ力にしてしまうとは」

やがて青い光は薄まっていき、そして消えた。

シロッコ氏も落ち着いたようだ。

「シロッコさん、大丈夫ですか？」

「ああ。だが厄介な頼み事を引き受けてしまった。彼女を思う念の強さから、蔑ろにしてはどうなるか分からん。しかたない」

シロッコ氏はふたたびコンソールの前に立ち操作をする。

すると今度は紅スカレット・ツインの姉妹の片割れの入った培養層が開き、先ほどと同じように中の液体が流れる。中の液体が流れて無くなったあとは、幼い彼女の体が倒れ伏して残った。

そんな彼女の前にシロッコ氏は立つ。

「紅スカレット・ツインの姉妹の片割れ……名はイーニアというのか。受け取れ、君を思う姉の思いだ」

シロッコ氏は彼女に手をかざすと青い光がふたたび彼の強化装備から生まれ彼女をつつむ。

それは正に幻想的な光景に見える。

「シロッコさん、何が起こっているのか私にはさっぱり分からないのですが。いったいサイクロブレードとは何なのですか？」

「人の思念を力に変えるマイクロチップを埋め込まれた鋼材だ。だがそれは自分の思念だけでなく死人の思念をも拾ってしまうらしい。おかげでこの仕事だ」

バカな。ではこの寝台に眠る彼女から頼まれたというのか？

そんなオカルトめいたことはとても信じられない……

——「クリスカ……？」

培養層で眠っていた彼女は青い光に導かれるように目をさました。さて、この魔法のようなシロモノ。どのように評価すべきか。

105話 逆襲に転ズ

壁を突き破り突入してきたウェイブライダーの下には無数のキリスト恭順派の骸。結果的に見れば、奴らのテロをくじく大勝利。それでも――

「ポロリ」と涙が頬をつたった。

ひどく心が寒い。瓦礫に埋まるあの子たちの肉片と血に怖気を感じる。

ああ、心が戦闘モードから離れて感情が戻ってきたんだ。

「中尉、大丈夫ですか。お加減がだいぶ悪いようですが」

まりもちゃんが心配そうにオレを見ている。ああダメだ、弱いところは見せられない。

自分のやった事にめまいを覚えても、オレはこの小隊の隊長。やせ我慢であろうと、しっかりしなきゃな。

「大丈夫です。ともかくこれで障害の排除と逃走のための足を確保できました。これからゼータで諸君らを安全圏まで運びます」

「……………それにしても、これはいったい？ これは『予定通り』なのですか？ これが中尉の策だったのですか？」

飛びこんだウェイブライダーとオレを交互に見ながらまりもちゃんは聞いてくるが、答えようがないんだよね。

「この件についての質問は、Z技術関連の機密事項にふれるため答えられません。そして命令として、ただちにこの場を離れ二〇七訓練小隊の安全をはかることを命じます。この部隊員の身柄は帝国の進退に関わる者も多いでしょう？」

「了解いたしました。では、ただちに…………」

キュピーン

一瞬、背中に走った怖気にその場を跳んで離れた。

ガーンツ

オレの離れたそこに一発の銃弾がかすめた。

「中尉、ご無事ですか!？」

「ええ、当たっていません。それにしても、あなたはよく生きていられましたね。たしか代表の『ヴァレンタイン』でしたか」

瓦礫の中で、フラフラになりながらも五体満足に立つ彼女ヴァレンタイン。

どうやら偶然にもウェイブライダーの直撃は避け、吹き飛ばされただけですんだようだ。

「クッ、よくも……貴様はかつて冷酷にこの子らを見捨て、障害になつたら切り捨てるのみか。貴様などを同志にと考えた私が愚かだった」

彼女の怒りの瞳をあえて真つすぐに受け止め見つめる。

「たしかに、この子たちを見捨てて日本に戻ったことは事実。あの時は、エウーゴがそこまでひどい状態になると思い至らなかつたといえ、なじられても仕方がありません。ですがこんな何人も人間を殺す悪辣なテロ行為に加担などできるはずがないでしょう」

「黙れ！　ここに居るいわゆる『上の人間』はわれらの同志を何百何千と見捨てて殺してきた！　搾取にあえぐわれらの怒りは束ねられ剣と化して肥え太る者達を裁く。指導者^{マスター}によって！」

違う。そんなのは難民救済じゃない！

その指導者^{マスター}という奴のやっている事はおかしいよ!!

「あなた達の崇める指導者^{マスター}。そいつの事をおかしいと思いませんの？　わたくしもブレックスの難民救済活動を見てきたので言いますが、基地の制圧は難民の救済とは何の関係もありません」

「なにを……」

「ブレックスは政府や国連の高官に働きかけ、難民保護の法案を通してと尽力してきました。また難民の方々には様々なボランティア活動をさせ、上の方々の心象を良くするよう指導していました。本気で難民のことを考えるのなら憎しみを助長させるより、ブレックスのように救済の意思を広めるべきとは思いませんか？」

「……………」

フラツとバレンタインはオレたちに背を向けた。

そしてよろめきながらもたしかな意思で歩んでいく。

「ヴァレンタイン……」

「指導者マスターの元へ行く。邪魔するなよ、ヤマシロ」

いまだ銃を構えて狙う訓練分隊のみんなに、彼女を行かせるよう告げる。

ここに果てた者たちの思いを背負って、指導者マスターに問いただしてこい。ヴァレンタイン。

♠♦♣♥♠♦♣♥♠♦♣♥♠♦♣♥♠♦♣♥♠♦♣♥

篁唯衣 side

せまり来る四機のF-16C。私の武御雷は長刀ただ一振りです銃器もなし。

『チエストオオ』と長刀一閃、なで切りを願っていたが——」

奸賊四機のサブマシンガンはこちらにピタリ銃口を向けている。

「さしもの篁示現流も、距離の暴力にはかなうはずもなしだ。ならば——」

跳躍ユニットのエンジンカット。

とたん自由落下で墜落をはじめめる武御雷の上を、サブマシンガンの掃射音が鳴り響く。

「——遅いな。この賊ども、さほどの腕はないと見た」

サブマシンガンのタイミングが想定よりワンテンポ遅れていた。

衛士くずれではなく、一般人が即席で戦術機訓練を受けただけの相手かもしれない。

それでも剣対銃のハンデ戦。ゆえに、このような小細工もいた仕方なしだが。

「ほうら、釣れた。明らかに当たってないというのに、未熟者が撃墜気どりか」

こちらを仕留めたと、四機のF-16Cは背中を向けふたたびユウヤ達を追わんとする。

「ならばその隙、私が喰ってやろうー！」

跳躍ユニットを再びふかし、手足の動きで姿勢制御を一瞬で整える。

そして致命的にさらした賊どもの背中へ向け全力噴射。

「これぞ篁示現流【もがり野伏^{のぶせ}】！ 示現流の真骨頂はただの突撃にあらず。突撃前の崩しより示現流は始まっているのだ！」

賊の背後につけた武御雷は、血を嗅ぎつけた肉食獣がごとく長刀を叩きつける。

ザシユツ バシユツ ドシユツ ザンツ

落下する四機のF-16C。背中から跳躍ユニットを破壊したので墜落になすべ無し。

地面に叩きつけられる無残な音を聞き、私もそこへ降り立つ。急いでアルゴスの皆を追いたいところだが、まずは銃器を拾わねば戦力にはなれないだろう。

幸い無事なサブマシンガンが2丁。これ以上は持っていけないので丁度いい。

と、撃墜した敵機のひとつから通信が送られてきた。つき合う義理もないが、何とはなしに聞いてみた。

『やって……くれたな、体制の……犬め』

それは意外に年若く少女の声であった。やはり一般人か。

「あの高度から落下して無事だったのか。だが加減はよろしくなさそうだな。救助が来るまでおとなしくしてろ」

『フン……どうせ私は……ここで死ぬ。でも、お前の仲間を……フェアバンクス方面に追い込むことだけは……成功した』

「——なんだと？ フェアバンクス基地の方角がどうしたというのだ！」

『あそこには……網が張ってあるんだ……逃れた戦術機を……漏らさないために』

「クツ、やってくれたな！」

これが私をその網に誘導する罠だという事はわかっている。

だが、それでもユウヤらアルゴスを助けに行かねばならない！

機体をフェアバンクス方面に向け、フルブーストをかけた。

彼女の最期の言葉が音声記録に残っていたが、それに感傷する暇は

なかった。

——『マスター、少佐……姉さん。ジゼルは……帰れません』

106話 フェアバンクス方面の罠

ユウヤside

俺とタリサ、VG、ステラは自機を駆ってフェアバンクス基地に応援を呼びに向かった。だがユーコン基地端の第四区画演習場にて思わぬ強敵が待ち受けていた。

それは12機のMiG29OVT（ファルクラム）。東欧連合の最新機であり、採用されている機体ではラプターに準ずる性能を有している。くそつ、こいつはキビしい！

『ファルクラムですって!? まさか東欧連合もやられているの？

マズイわ。第11施設警備部のMiG29ならどうにか振り切れるかもしれないけど、丸腰でファルクラムを相手だなんて!』

『ちいつ、おまけに機動も連携も並みじゃねえ。おいユウヤ、もしかしてハメられたか? あいつら、とても丸腰で戦^{やれ}えるような相手じゃねえぜ』

『つたく、どうしてテロリストに、こうも戦術機の達者な人材がいるんだよ。正規兵になってBETAと戦えよ!』

とにかく回避に告ぐ回避。離脱も不可能な状況で逃げ回っていたが、やがてステラが限界に達した。ついに被弾したのだ。

ドガンツ

「アルゴス4! ステラ! 無事か?」

『ア……アルゴス4、跳躍ユニット大破。作戦継続不可能。戦域より離脱します』

—— 『逃がすかよ! 命は置いていけ!』

オープンチャンネル? これは敵機からの声?

「いったい何のつもりだ……まずい! ステラ!」

フラフラと危うい飛行で退^きがるうとするステラ機を、敵の一機が猛烈な勢いでサブマシンガンを乱射しながら追撃する。

ガガガガガガッ

『ステラ! やらせるかあ!!』

そこに盾となり割って入ったのはVGのACTV（アクティブ）。

ステラに向けられたマシンガンの掃射を一身に受け止めた。

『くううああああっ！』

「VG！　なんてことを！」

『ア……アルゴス3……大破。ちつと……カッコつけすぎたな……』

ステラとVGの二機はからみ合いながら墜落していく。どうか無事でいてくれ。

『クツソオオオ友釣りか！　アイツ、これをやるためにオープンチャンネルで声を流しやがったなあ！』

「タリサ、今は怒りをおさえておけ。綱渡りの機動をしくじったら最後だ」

どうする？　連中の機動は完全にエース級のそれ。
さらに人数的にもキビしくなった今、とても抜けやしない。

「アルゴス02、限界だ。いったん退^さがるぞ」

『冗談じゃねえ！　ステラとVGがやられて引き下がれるかよ！
うわっ！』

「タリサッ！　くそっ、遅かったか？」

俺やタリサがステラとVGの撃墜に心かき乱されてる間にもアイツらは包囲をせばめてきた。

タリサはかなり接近された。ヤバイな。

「くっ、俺にも来たか」

ヤツはおそらく隊長機でエース級の腕を持っている。

『フハハ、そいつがXFJ計画の試作か！　機動だけで俺達の海へ
ビ包囲をしのぐなんざ大したモノを作ったな。俺が沈めてやる！』
クツ、またオープンチャンネルか。やけに粗野な男の声だが、戦い
方も苛烈。

ヤツはこの俺をただ一機で追い詰めつつあり、残りの全機がタリサを包囲しているのでタリサも陥落寸前。

くそっ、銃が欲しい。一瞬でも牽制出来れば抜け出せるのに……

ガガガガガガッ　ガガガガガガッ

「え？」

『なにっ！』

突如、地上のあさつての方向から掃射が飛んできた。

それは相手機を狙ったものであり、それによつて俺はヤツを引き離せた。

見るとそれはタリサも同様で、包囲から脱出して距離をとりつつある。

あの援護は、いったい誰が……？

——『ユウヤ、コイツは貸しだ。あとは自分で何とかしな！』

その声はレオン！

下を見ると四機のラプターが地上を疾走していき、はるかフェアバックス基地をめざして行く。

『くそっ、レーダーに映らなかったぞ。いったい何故……そうか、ステルスか！ やられたアメリカめ！』

ヤツラは俺達の包囲をとき、ラプターを目がけて追跡する。だがラプターは加速も他の戦術機を凌駕している。相手が出るのはガンダムくらいだ。

「それにしても、追跡されるのを覚悟で牽制してくれたのかよ。カッコつけやがって」

いかにスピードで負けるはずはないとしても、気づかれぬまま通つた方が良かったらうに。

これは本当に借りになったなレオン、ジェリド中尉。

『ユウヤ、アメリカに完全にやられたな。アタシたちを囿にしやがって』

「そう言うな。誰がフェアバックス基地に応援を呼びに行つてもいいじゃねえか。ともかく時間も出来たことだし、VGとステラの救助に向かおう」

『そうだな。撃墜のあとは追撃をうけなかったし、無事だとは思うが……おっ、味方のコールサイン？ ファングーってことはタカムラ中尉？』

味方機の接近を感知した先には、唯依の乗っている黄色の武御雷が飛行してきていた。

唯依も、あの四機をしのいで無事だったか。どうやら形勢はこちらに傾きつつあるようだ。

『こちらホワイトフアング1。アルゴス1、アルゴス2。状況を報告せよ。アルゴス3と4はどうした?』

「テロリストに奪取された戦術機に撃墜され、落下しました。なお敵テロリストは、通過に成功したアメリカのラプターを追っていきました」

『そうか。どうやらフェアバンクス基地への応援要請は成りそうだな。よし、ならばこちらは、ここで態勢を立て直そう。敵からサブマシガン^{サブマシンガン}を二丁奪取した。私が救護している間、両者はこれで警戒してくれ』

『敵から武器を奪取?! まさか撃墜したのか?! 丸腰で四機を!』

『マナンドル少尉、上官の口のきき方には気をつけろ。ただの未熟者撃ちだ。スコアには入らん。それよりさっさと救護にかかるぞ』

降下しステラとVGをユニットから出してみると、思ったより軽傷ではあった。ただし、やはり重傷の範囲であって、これ以上の活動は不可能なレベル。

移送はステラは唯依が、VGはタリサが機体のサブシートで運ぶこととなった。

『よし、これより移動を開始しセーフティポイントを目指す。マナンドル少尉、接敵してもジアコーザ少尉を抱えているうちは交戦を避け、ブリッジス少尉にまかせろ』

『了解。とにかくあとは時間を稼ぐだけだな』

と、その時だ。いきなり全員の通信から緊急アラートが鳴り出した。

『なんだ? 緊急アラート? このコードは……コード9991?』
ザワツと背筋が冷える。

コード9991。それはBETA警報。この警報が出された時には

すべての活動を中止し、対BETA警戒へと移行しなければならぬ。

『ハッ、どうせヤツラの欺瞞だろ。だいいち今は通信施設が封鎖されて管制さえ受けられねえじゃねえか』

「いや、コード991のアラートは通常のは違う。どのような状況下でも優先して近隣機体に通されるよう設計されているんだ。しかしアラスカの真ん中でBETAとはどういう事だ？」

『今たしかめるすべはない。相変わらずの広域電波障害だ。ともかくジアコーザ少尉とブレイメ少尉をセーフティポイントに送ったら行動開始だ』

後に分かったことだが、このコード991は本物だった。

そして、このアラスカの危機の引き金にもなったのだった。

107話 恭順派の敗北と新たな危機

キリスト教恭順派 side

統合司令部ビル地下五階 中央作戦指令室

キリスト教恭順派の指導者・指導者^{マスター}は大いに憂いていた。

真なる信徒・キリスト教恭順派と、虐げられし人々の叫び・難民解放戦線のこの一大作戦は、いまや崩壊寸前となった。

主戦力であるキリストファイア少佐とウツダー大尉両部隊の壊滅。そしてここ中央指令室ビルにて大半の防衛戦力も失った。

そして今また、フェアバンクス方面を防衛しているヤザン・ゲープル中尉から新たな悪い連絡が来た。

「ヤザン・ゲープル中尉、どうした。そちらでなにかトラブルか？」
『悪い知らせだ。アメリカに抜かれた。XFJ計画チームが陽動になって俺らをひきつけてる間に、ステルスでやられた。もうあまり時間はねえぜ』

となればフェアバンクス基地にユーコンの現状が報告されるのは時間の問題。だがもはや、その問題すら些細なこととなっていた。

「そうか。では作戦ナンバー428を発令。ユーコン基地すべての作戦の終了を宣言する。ヤザン中尉はただちに撤退支援に移れ」

『ああつ？ 抜かれたとはいえ、ヤケに思い切りがいいじゃねえか。ゼータやらソ連の機密やらは手にしたのか？ いや、声明もまだ出してないってのに早々と撤収たあどういうことだよ』

「残念ながらすべての作戦は失敗し、もはや何を置いても逃げ出さねばならないところまで事態は悪化した。司令部制圧部隊は大半が失われ、キリストファイア少佐、ウツダー大尉の部隊も壊滅した。もはや目標を達成することは不可能であり、米ソの特殊部隊が動き出したなら、防ぐことは出来ないだろう。ゆえに速やかな撤収作業に移行する」

『はっ、あれだけ周到な準備をしたってのに、お粗末な結果だな。アంతも神に見捨てられたんじゃないかねえのか？』

「手厳しいね。作戦の失敗の責はすべて私にある。責めは後に存分

に受けよう。だが今は一人でも多くの同志を逃すため従ってくれ、ヤザン」

『ああ、わかった。だが組織にとっては、アンタの身柄が一番大事だ。他の者の撤退も随時支援するが、まずはアンタひとりを安全な場所へ送る。後のことはそれからだ。いいな?』

「……ああ、感謝するよヤザン・ゲール中尉。君はじつに頼りになる信徒だ。では、そのようにしよう。皆に指示を与えたなら、すぐさま私は脱出経路に向かおう。では後で」

指導者はヤザンとの通信を終えると、ため息まじりに彼の副官の執事バトラーに言った。

「ヤザンはユダとなった。いや、おそらくはこちらが目標の奪取を達成したなら、彼の背後が奪いにくる。そして私もとらえる。そういう筋書きで彼は組織に入ったのだろう」

「指導者の身柄はどのような結果であれ、この作戦の終わりに引き渡す、ということですか。では脱出プランはどのように変更いたしましたしょう」

指導者は小型端末を取り出し、地図を表示した。

「心配はいらない。当初に教えた脱出経路はもともとフェイクだ。真のルートはここ。この場所に皆を誘導してほしい」

「さすがですな。では早速残った者を集めましょう。マスターは先にお向かいください」

「いや、私はここでやる事がある。我らの痛みと苦しみを世界へ訴える役目。それだけは誰かがここに残り果たさなければならぬ」

「マスター? まさか……」

と、にわかに入入り口付近が騒がしくなった。そして伝令が報告に来た。

「ヴァレンタインが帰還しました。彼女だけは助かったようです」

「そうか、それは良かった。ヴァレンタインには役目を頼みたい。彼女をここに」

全身に打撲を負い苦渋にやつれたヴァレンタインは、彼女が感じた疑念を指導者に投げかけた。それを黙って聞いていた指導者は、彼女

の言葉が終わると静かに語った。

「そうか。つまり君はヤマシロの言葉で信念が揺らいでしまったのだね」

「い、いえ、そのようなわけでは―」

「いいんだ。ヤマシロの言うことはもつともだ。だが難民救済の英雄ブレックスが、そのような活動を可能たらしめたのは、彼がアメリカの名門生まれによるところが大きい。その彼の言葉だからこそ、アメリカ政財界を動かせた。ただの道端の草にすぎない私達の言葉が、快楽の園に住まう者達にとどくと思うかね？」

「いえ……」

「私達の訴えを届かせるためには、この血の粛清でなければならなかったのだ。流された血にはちゃんと意味はある。だが今は対話より撤収だ。ヴァレンタイン、君に頼みがある。脱出後の指揮を君にとってほしい。後事はすべて君が担ってくれ」

「どういう事です指導者？」

「私はここに残る。そして予定していた声明を発表する。そうすれば皆の脱出はより容易になるだろう」

「ザワザワツ」と信徒らに動揺が広がる。

だが、後事を託されたヴァレンタインはそつと首をふった。

「残念ですが私は衝撃とガレキの落下でひん死です。もはや走ることにすらまなりません。ここに残り、声明を発信する役は私が引受けましょう」

「痛ましいなヴァレンタイン。だが君ひとりくらいなら、だれかに担がせれば……」

「あなたは―」

叫ぶヴァレンタインが指導者の言葉をささげぎる。

「あなたはここで死んではいけない人だ。あなたを失えば再び難民達を集結させる事は困難となります。我々の言葉をより世界に訴え続けるためにも生きていてください」

彼女の言葉に誰もが静まりかえる。指導者すらも。

「……執事。私はまだ罰を受ける日にあらずと思うか？」

「はい。神が彼女の口を通して諭しておられるのでしよう」

「よし、わかった。必ずや皆を安全に脱出させよう。撤収準備だ。例のBETA研究所にも指示を出せ。そうだ、ゲスト賓客にもお帰り願うとしようか」

マスター指導者は指令室のすみにまとめて拘束してあるソ連の高官達の元へ行った。

彼らは現在のこの指令室本来の指揮官とその側近。指揮官はブレ斯顿准将、ハルトウィック大佐に続く第三位指揮権を持つソ連軍バジレイ・アターエフ大佐である。

「やられましたよアターエフ閣下。そしてソ連軍高官の方々。我ら信徒は基地の勇者たちに散々にやられ、望みは届かず、むなしく去るのみです。あなた方はここで解放します」

その言葉に高官達の間には安堵の空気が流れる。

と、高官の中のひとりが激しく高笑いをした。P3計画責任者の口ゴフスキー中佐である。

「フハハハハざまあみろテロリストどもめ！　だが逃げようと貴様らは誰一人逃がさん。わが国の特殊部隊がどこまでも追いつめ皆殺しにしてくれる！　貴様らに協力した反逆者どもも同様だ。尋問で反逆者を一人残らず見つけ出し、あらゆる拷問で処刑してくれるわ！」

「なるほど。では、われらが兄弟同胞を救うために、私はあえて罪をひとつ重ねるとしましょう。アーメン」

パーン

マスター指導者は自らの拳銃で高官のひとり撃ち殺した。

「な……なにをする！　我々を解放するのではなかったのか!?!」

「ええ、先ほどまではそのつもりでした。ですが解放されたあなた方が、われらの友人を弑するというなら、生かしておくわけにはまいりません。よって解放する先は煉獄です」

生還から処刑へと急転させられた高官らは恐怖におののき、ロゴフスキー中佐に憎悪の視線を送る。

「なにが『そのつもり』だ！　はじめから、こうするつもりだったの

だろう！」

「ロゴフスキー！ きさま、連中の茶番にまんまと利用されおつて！」

パーン パーン パーン

指導者の合図で配下の信徒達は次々高官を撃ち殺してゆく。

最後のシメとして残っていたアターエフを指導者が別れの言葉とともに送ろうとした時だ。伝令が報告に来た

「指導者、BETA研究所から連絡が来ました。たった今、全BETAを解き放つたそうです」

「そうか。こちらもこのアターエフ閣下で最後だ。撤収作業を急げ」

と、いきなりアターエフが部下の高官達を殺された以上に動揺し声をあげた。

「待て！ BETA研究所だと？ どうして貴様らがそれを知っている!？」

「まあ知人の伝手でね。一研究所とは思えないほど大量のBETAを所有してるようですね。BETAを人類側の戦力に転用できないか、とでも考えましたか？ 我々もこれは使えると思ひましてね。撤収に使うために征圧しておきました」

「クツ……だが全BETAを解放だと？ バカなことを。このユーコンは……いやアラスカは終わりだ！ 貴様らのバカな行動のおかげでな！」

（なんだ？ 妙に不穏なことを言っている。時間はないが、この言葉の意味は聞いておかなければいけない気がする）

「指導者、お急ぎください。信徒が不安がって統制が難しくなっております」

「もう少し待て。神は真の信徒を見捨てない。必ずや道を示していただける。そう伝えておきなさい」

そんなやり取りをアターエフは鼻で笑う。

まるで何かが「キレた」というような狂笑じみた表情だ。

「フン、何が神の真の信徒だ。きさまらは最悪の虐殺者だ。だが、ど

うせ貴様らはひとりとして逃げられん。貴様らがしでかした研究所B E T Aの一斉開放。それによってアラスカは終わりだ。地獄でさばかれる、この狂信者どもめ」

「先ほどもそのような事をおっしゃっていましたが。ですが研究所のB E T Aは予想より多いといっても、広大なアラスカを蹂躪するには至りません。それが何故、アラスカが終わりとなるのです?」

「敗残の身で逃げ出す貴様らに教えて何になる。だが【レッドシフト】……この名だけ教えてやる。これ以上は身をもって知るがいい。私は貴様の銃弾などでは死なぬ!」

言い終わると、アターエフ大佐の体が「ビクンツ」とふるえた。

そして見る見るうちに顔を土気色に変えて息絶えた。

「自決用のカプセルを仕込んでいたようだ。彼の言葉は気になるが、急ぐとしよう」

【レッドシフト】

それはアラスカがB E T Aに呑まれた際に発動する緊急非常システム。

ベーリング海峡を越えてアラスカに上陸したB E T Aがユーコン基地に到達した場合、地中深くにしかけられた数千の水爆が一斉に起爆するのだ。

上陸したB E T Aを殲滅すると同時に新たなる海峡を築き、防衛戦の再構築を図るというシステムである。

108話 BETAも恭順派も核でフツ飛ばせ!

アメリカ航空爆撃機編隊 Side

カナダ ノースウエスト準州上空

フェアバンクス基地にもたらされたテロリストによるユーコン基地征圧。その報を受けた途端、すぐさま1B編隊による航空爆撃機部隊は発進した。まるで予定でもしてあったかのように。

「GF107より全1B。作戦通りわれわれはユーコン陸軍基地に向け低空飛行を試みる。ルートはBETA研究所より発生したBETA群を大きく迂回。光線級の射程範囲を避け南南東より侵入せよ」
「目的地まで距離20万。高度下げ。地形哨戒レーダー使用開始」
「……700。予定高度へ到達。現在の時速800キロ。これより操縦を自立制御モードに切り替えます。自立操縦モードへの移行を確認」

「戦闘システム操作員は爆撃準備。防御システム操作員は警戒態勢を維持。油断するな」

1B爆撃機編隊の指揮をとるのは中央作戦本部のジャマイカン・ダニンガン中佐。

元はジャミトフ中将の腹心であったが、ジャミトフの死亡、第5計画の頓挫などで現在は宙に浮いた状態。

恭順派のユーコン基地テロ計画も知っていたが、まさかBETA研究所の所在を知られて全BETAの解放などされるのは完全な予想外であった。

(その行為がどんな破滅的な結果をもたらすかを知らぬ愚か者め。おかげでわがアメリカは広大なアラスカという土地を失うハメになった)

「今ならベルリンへ原爆を落とした連中の気持ちわかりますよダニンガン中佐。最強の爆撃機部隊のわれわれが、その力を人間に、それもわが国の基地に向けなければならぬなんて」

この爆撃編隊の作戦目的はユーコン基地への中性子爆弾投下。

一発でBETAもキリスト恭順派もレッドシフトの発動も機密も

吹き飛ばす作戦である。

無論、核の持ち込みと使用責任は恭順派になすりつける算段だ。

「国家の忠節試される時来たれり」だ。基地と資源は失われても土地は残る。レッドシフト発動はなんとしても阻止せねばならんだ」

（恭順派に潜入させたヤザンも無駄になったか。恭順派とプロミネンス派を消しても第4には手が出せん。第5復活の目はいまだ遠いか。せめてZだけは回収できれば良いが……）

航空爆撃編隊は、やがてユーコン基地をのぞむ位置にまで到達した。作戦目標地点だ。

「ユーコン陸軍基地圏到達。BETA群も三十先に確認。あと少しで照射範囲です」

「よし、全機退避機動準備。投下後に離脱開始。……3、2、1、リトルブラザー投下！ テロリストとBETAを焼き尽くせ!!」

「リトルブラザー投下！」

ジャマイカン中佐の命令とともに落とされる中性子爆弾。それは豊かな自然と栄えた街のここユーコン一帯を死の荒野へと変える悪魔の爆弾であった。

ヒュオオオオ……カアツ

「なにッ!？」

ジャマイカン・ダニンガン中佐はじめ爆撃機部隊員の全員は驚愕した。

中性子爆弾は投下した瞬間、一筋の光条によって消滅したのだ。

「リ、リトルブラザー消滅！ 投下した瞬間、地上からの光状の熱線によって蒸発したと思われます！」

「なっ!?! レーザー属種か？ だがまだ照射範囲には余裕があるはず……」

（それにBETAが投下された爆弾のみを精密射撃などするわけがない。これは……まさか噂の?）

その予感を示すかのように響く外部からの通信音声。

そして当機体真下に一機の戦術機を確認。航空機に並走できるほどのスピードと高度をとれる信じられない性能だ。

——『まったく。過去のトラウマで、米軍航空機が来たら警戒モードと設定してました。役に立ってしまっうなんて悲しいです。友軍殺しをためらわない性質は相変わらずですね、米軍さん』

資料写真で見た青と白と赤のカラーリングの機体。それこそまさにZガンダム！

「き、きさまはZ!? 今のレーザー攻撃は貴様か？ なぜ我々の作戦を邪魔する。これは米軍への重大な敵対行為だぞ！」

『その作戦というのは、わたくし達諸外国の軍部隊も歓楽街リルフォートの民間人も、もろとも中性子爆弾で消滅させようというものです？ たかがテロリストに正規の軍隊がそこまでやってよろしいのでしょうかねえ？』

「ちっ、中性子爆弾などではない！ あれは威嚇用の炸裂弾だ。いか、これ以上当編隊の作戦行動を邪魔するようなら、貴官を軍事裁判にかけ……」

すると、とある映像写真が送られてきた。

『先ほどの投下された瞬間の映像写真です。これは公開されている中性子爆弾のモデルに酷似してますねえ。それに爆弾の中央にはプラトニウムを示すニユークリアマークが。これをその軍事裁判にも提出いたしますか』

「ぐっ……ぐっ……」

追い詰められるジャマイカン。されど別方面からも追い詰められていた。

「ダニガン中佐、BETAがユーコン基地に迫りつつあります。このままでは約一時間ほどでレッドシフトは発動してしまいます！」
「くうっ、もはや小娘と議論してる場合ではない！ 戦闘操作員、全機全弾爆撃を開始！ 防御操作員もかく乱の射撃を開始しろ！ 予備の本命ブレイザーは必ず成功させるのだ！」

一発の中性子爆弾では予定の効果に及ばなかった場合に備え、1B

編隊はもう一発を予備搭載していた。

(もはやこれに賭けるしかない。戦術機ただ一機に、それも大局を知らぬ小娘などに、崇高なる国家の使命を邪魔されてなるものか!)
1B編隊は搭載されているあらゆる爆弾弾薬をゼータに向け放った。

されどゼータは巡行形態ウェイブライダーに変形。

ピュオオオオオオ……ピシユンツピシユンツピシユンツ

銃弾爆弾の雨を掻い潜り、すべての爆弾をビームガンで撃ち落す。地上には一発の爆弾も落ちることはなかった。

「す、すべての投下爆弾を撃ち落としただと……? バケモノかあ!」

そして戦闘には参加せず奥に守られているような位置の、とある一機の爆撃機の投下口。

そこにもビームガンを一発。

それはジャマイカン最後の希望を撃ち抜く一発であった。

「ああっ! 発射口の予備弾ブレイレイザーも……潰されました。もはや作戦継続は不可能です。レッドシフトは……止められません」

「うっ……うおおおおあああっ!!!」

『オーホツホツホ! ブザマな悪あがきとは小悪党らしいですこと。思わず悪役令嬢になってしまいましたわ。さっさとお帰りなさい。わたくしはこれから、BETAから基地と^{リルフォート}歓楽街のみなさんを守らねばならないのですから』

いや、まだ希望はある! ヤツのこの性能なら、あるいは……

「ま、待て! ^{リルフォート}歓楽街などはいい! ユーコン基地を守れ! あそこ^{リルフォート}にBETAを通過させてはならない!」

『^{リルフォート}歓楽街の民間人が優先です。基地の方には手はまわりませんから、基地内の方達は解放した後に退避していただくしかないでしょう』

「それではイカン! 誰も助からない! もしBETAがユーコン基地を通過したなら、アラスカは破滅なのだ!」

『……なにを言ってるんです。"アラスカが破滅"とは、どういう

事です?。』

「私は米軍作戦参謀本部のジャマイカン・ダニンガン中佐だ。これから貴官に重大な機密を明かす。このことを踏まえ、このアラスカを救ってほしい」

『ジャマイカン……ダニンガン? まさかこの人の同名まで。あまり嬉しくはないですね』

ジャマイカンは「レッドシフト」という緊急非常システムを説明する。

それはBETAがユーコン基地を通過した場合、地下にある数千の水爆が一斉に起動するという恐るべきものだった。

『ユーコン基地の地下には数千発の水爆!? なにを考えていますのアメリカは! しかもその近辺に大量のBETAを飼っている研究所を作るなんて! 石油精製工場に一万トンのダイナマイトと火炎放射器と一緒に保管するくらいの愚かさです! くっ、こんな上手いことを言ってる間も惜しいですわ!』

ウェイブライダーは方向転換し高速でユーコン基地に向け離脱していった。

だが、ジャマイカンと航空編隊には無念に歯噛みする間さえ残されていなかった。

ドカンッ

近くで激しい爆散が起こった。そして一機の僚機が炎をあげ墜落してゆく。

「三番機撃墜! レ、光線級です! Zに気をとられ照射範囲にはいつてしまいました!」

「全機急速反転! 方向は正面以外のどこでもいい。当空域より急いで離脱せよ!」

ドツカン ドツカン ドツカン

されど方向転換をする間に次々と僚機は落とされてゆく。完全に逃げるタイミングを失った。

ドガンッ

「くあああつ!」

そして死の光はついにジャマイカンの指揮官機をもとらえた。

機体は炎に包まれ減速すら出来ずに墜落してゆく。

「頼んだぞZ……われわれにも手にあまるその力、見せてみろ！」

もはやまぬがれぬ死を悟ったジャマイカンは、コクピットより飛び降りた。

109話　せまるレッドシフト

『——以上が、自らの保身のために行ったことの結果です。彼らはこれこそが政治と言うが、それは本当に正しいのか？ 私にはそうは思えない』

司令ビルを占拠したテロリストは全世界に向け声明を発表。その首謀者として声明を読み上げているのは、あのヴァレンティンだ。

そうか、それが君の選択かヴァレンティン。

君がテロの首謀者としての道を歩もうとも、もうオレとは敵としてすら交わることはない。

やがて米ソどちらかの特殊部隊が終わらせるだけだ。

そしてオレにはやるべき事が出来た。

『ユーコン基地の地下に……数千発の水爆?!　BETAが基地を通過すれば、それが一斉に起動だ?!』

反攻作戦の初手として征圧した第11警備部隊ハンガー周辺。

そこに集うは、篁さんの武御雷。ユウヤの不知火・弍型。タリサのACTイーグル。神宮寺軍曹と訓練小隊のみんな。それになぜかチエルミナートルに乗っているシロッコさんだ。

「ええ。残念ながら、BETA防衛とともに行う恭順派への反抗作戦は中止です。もはやヤツラを追う時間などありません。私たちは全力でBETAを迎え撃たなければなりません」

『リルフォート歓楽街の民間人を第一に守るといふ戦略をとるわけにもいかなくなつたな。……くっ!』

これに応えたのはシロッコさん。

『たしかに、もはやリルフォート歓楽街を防衛する戦力をさく事は出来なくなつた。では、せめて避難誘導を行おう。私と訓練小隊の彼女らで出来るかぎりのことはする』

「お願いしますシロッコさん。それに神宮寺軍曹も。わたくしはすぐに圧力のもつとも強い地点に向かって、極力BETAの数を減らします」

『(武運を、山城中尉)』

「ありがとう神宮寺軍曹。では篁中尉、漏れたBETAを水際で食い止めてください。BETAの帯は百キロ近くにもおよんでいます。どうしても水漏れは出てしまいます」

「ごちらはおまかせください。山城中尉、私からもご武運を祈らせていただきます」

衛士としての会話なので篁さんとも堅い形式の会話。でも最後の敬礼し合う間のほほ笑み。

それだけで彼女の感情のすべては伝わった。

ともかくもユーコン基地を飛び立ち、BETA殲滅に向かった。

最前線の現場に来てみると、すでに視界一面のBETA大行進。

あわててそいつらの殲滅に動かないのは熟練の知恵。

まずは光線級^{レーザーヤクト}砲で光線級の排除。そうすればフェアバンクス基地から爆撃機が飛び立てるし、上空からの絨毯爆撃で……

あ。さつき爆撃機編隊が光線級の照射で全滅してたような？

つてことは、フェアバンクス基地からの爆撃機支援はナシ？

あの立派な航空爆撃機の一群は、いらんことをしただけでオシマイ？

どこまでも無能な米軍め！

ガトーさん、あの腐敗した覇権国家にアトミックバズーカお願いします！

怒りをビームライフルに変え、光線級砲で光線級群を秒で殲滅。あとはひたすらBETAをツブしてゆく長い長いお仕事。

しかし見るからに一面BETAの群れ。その研究所、どうやってこれだけの量のBETAを眠らせていたんだ。

おまけにここは平地でBETAはどこまでも散開してゆくので、うち漏らしが多くなって困る。

誰か手伝ってもらえないかなどとあり得ない願望を抱いていると、どこからか近接通信がきた。

『よオ、あんた噂のゼータだろう。助かった。光線級^{レーザーヤクト}砲を命じら

れていたんだが、遮蔽物のない場所でどうにもならない所だった。礼を言わせてくれ』

やった！ 思わぬ所に手伝いがいたよ。

「無茶な命令にも果敢に出撃し任務を全うする貴官に敬意を表します。それでアナタは？ 所属はどこなのですか？」

『おおっと、名乗るのが遅れたな。こちら米軍特殊作戦任務中のヤザン・ゲートル中尉および部下の特務中隊だ。秘匿作戦の最中なんで部隊には所属していない』

ヤザン……ゲートル？ こんな所である有名な同名を聞くとは。その中隊をモニターで確認すると「あれ？」と思った。

その中隊の機体は米軍のストライクやラプターではなく、東欧連合のファルクラムだったのだ。米軍所属の戦術機部隊が米軍機以外を使うなんて、めずらしい事もあったもんだ……

——ハッ！

ユウヤとタリサの話を思い出した。フェアバンクス基地へと向かう道中を阻んだスゴ腕戦術機部隊の話を。その使用された機体は……

「ああっ！ なにが米軍ですか。ステラさんとVGさんを撃墜したキリスト恭順派のスゴ腕衛士って、あなたでしよう！」

『ち、ちがうんだ！ あれは世界最悪のテロ組織の首領をつかまえるための潜入工作だったんだ！ 下手に手加減して疑われるわけはいかず、ああした事もしなければならなかったんだ！』

くうっ。それが嘘であろうとも、こんな状況で友軍を潰すわけにもいかない。

それでもその話が本当かは見極めないと。

「……それで？ 恭順派の首領はとらえる事には成功したのですか？ こうやってBETA退治をしてるってことは」

『ぐっ……ぐぐぐう……うおおおおっ!!』

「ヤザンさん？」

なんだ、いきなり慟哭したぞ。

部隊の攻撃がやけに激しく雑になっている。

『あの野郎、脱出予定地点にあらわれやがらねえ！ 組織連絡もつながらなくなっちゃった！ 完全に出し抜かれたんだよオオ！ しかも作戦責任者がさつきおツ死んだんだと！ おかげで俺らは生還不可能な光線級呐喊命を命じられたんだ！ 要は死んでこいとよ！』

「それは……」愁傷様です」

なんだか疑う気持ちがどこかへ行っちゃったなあ。この人たち、この先は生きていられるのか。

「ともかく、この場はまかせます。それと、あまり雑な戦い方をしては早死にしますよ」

でも、どうにか生き残りそうな気もするな。敵味方問わずメインキャラサブキャラがバタバタ死んでいったZガンダムで、敵キャラでありながら最後まで生き残った彼の名を持つ人だもんね。

オレは別方面のBETAを迎え撃つべく、その場を離れるのであった。

◆◇♣♥◆◇♣♥

ヴァレンタインSide

司令部ビル地下五階中央指令室

「我々は最後のひとりが討ち滅ぼされるまで戦い続ける。心ある方は我々とともに戦ってほしい。それが我々の願いです」

私はそう締めくくり、全世界へ流した放送の接続を閉じた。

「……ふう。これで言いたい事はみんな言った。あとは……」

——「満足か？ 難民の代弁者」

この指令室のすみに縛っている男が声をかけてきた。

簡素なベッドを作って寝かせているが、この重傷で意識をさますとは大したものだ。

「あら、起きていたの。あなたこそ気分はどう？ かつての英雄イ

ヴラヒム・ドール大尉」

「私は中尉だよ。どうして私は生きています？」

浅黒い肌の屈強な中東系の士官イヴラヒム・ドール大尉。いや、

難民を助け部隊に損害を与えた行動によって降格された中尉だ。

「トドメを刺す寸前、人質にすることを提案したわ。ま、そこから少しモメたけど、どうにか皆を納得させたわ」

「フツ、私に人質としての価値などないよ。いつでも切り捨てられる便利な駒あつかいだからな」

「わかってるわ。あなたもあれから色々あったんでしょ？ でもやっと、あるとき助けてもらった恩を返せた。昔の私と妹を喜ばせることが出来たわ」

「……君は？ 私を知っているのか」

「かつてラシテイのキャンプで妹とともにあなたに命を救われたメリム・ザーナーです。私はここで終わり。ですが、あなたはせいぜい生きなさい」

「そう、か。ほかの仲間はどうした？ 見たところ君ひとりのようだが」

「あと数人いるけど、あちこち散っているわ。ここがカラツポと知られないために小細工の最中よ」

「……撤収か。どうやら予定より早く引き払わねばならなくなったようだな」

「ええ、製作不明機体Z。あれに手を出したのが間違いだったわ。おかげで貴重な戦闘経験者の大半が失われたんだもの」

「そう、か。カズサ・ヤマシロ……彼女もかつては難民救済者だったと聞くが。やはり君達に賛同はしなかったようだね」

「ええ。私たちの、そして指導者^{マスター}のやっている事は難民救済じゃないと言われたわ。結局、最後まで指導者^{マスター}を信じると決めただけ。でも、いまだ迷っている。もしかしたら別のやり方もあったんじゃないかってね」

「……私と同じだな。私もいつも同じことで迷っているよ」

「迷子どうしね、私たち」

憧れ、失望、そして共感。この人とは巡り巡って奇妙な友達になったような気がする。

どうか、この先も迷いながらも生きていて。

そしてこの短い安らぎの中の会話を、たまに思い出してください。

「指導者マスターも……もしかしたら迷っているのかもね」

「なに？」

「最後に言葉をかわしたとき感じたの。もしかして、この人は何かに迷っているんじゃないかってね」

「……そうか」

「どうなるのかしらね……指導者マスターも……難民みんなも……」

「残念だが、人の道を踏み外した者に未来はない。いずれ報いを受けるだろう」

「……そうなるのかしらね。それでも——」

それでも、せめて最期は安らかであらんことを——

110話 マスターをさがせ

篁唯依Side

ユーコン陸軍基地メインゲート前

「……了解しました。はっ、警戒解除までこのままメインゲート前
防衛を続けます」

ここメインゲート前で、われわれはBETA絶対防衛の陣を敷いて
二時間。

少し前まではかなりの数のBETAが流れてきていたが、いきなり
その流れが途絶えた。そして今、通信センターの回復とともに情報を
受け取ることが出来たのだ。

ゲート前警戒をしているアルゴス小隊、中華統一戦線のバオフェン
小隊などにその朗報を伝えるべく、通信をオープンにする。

「全員傾注！ たった今、米軍から対BETAの戦況報告がきた。
ゼータが戦域を保ってくれたお陰で、戦力を集結させることが出来
た。現在フェアバンクス基地から戦術機部隊が発進し、BETAを包
囲し殲滅しつつあるようだ」

『おおっ！ ってことは、レッドシフトとかの発動は阻止出来たん
だな！』

『だったら、あとは基地に巢食うテロどもの掃除だな。たつぷり礼
をしてやるぜ！』

「いや。すでに基地司令部、発電施設、通信施設などテロ組織におさ
えられていた場所には、米軍特殊部隊が入り、すべて解放したそうだ。
よって残るはBETAの掃討のみ。我々はその終了まで、引き続き
メインゲートの防衛だ」

『もう……解放ですか？ いくら何でも早過ぎじゃありませんか。
司令部なんかはテロの代表が声明をやっていた場所だし、もつと手こ
ずるかと思っただけです』

「特殊部隊が入ったときには、すでに基地もその他主要施設ももぬ
けの空。中央指令室にさえ、難民解放戦線のトップ・ヴァレンタイン
と数名しかいなかったそうさ。つまり放送があつた時点でテロ本隊

はずでに撤退をしていたようだ」

『そうですか。どうやらキリスト恭順派の方は完全に逃がしたましたね。追跡調査で居場所がわかればいいですが』

「恭順派の件は完全に我々の手をはなれた。あとはアメリカの情報機関にでも任せるしかあるまい」

『ですね。ヤツラのせいで帰らぬ人も多く、カ리를返したいところでしたが』

さて、あとと言わねばならない報告が二つ。悪いものと良いもの。朗報のあとにユウヤを落胆させるのも気が引けるので、悪いほうから先に言うことにした。

「今回の襲撃でもっとも被害を被ったのはソ連だ。ユーコン陸軍基地第三位のアターエフ大佐はじめ幹部連中はのきなみ処刑された。さらに機密研究棟も襲われ、責任者のサンダーク中尉はじめ研究職員もみな死亡。そして……その開発衛士であるクリスカ・ビヤーチエノワ少尉もな」

『——!!? イーニアは……紅スカーレット・ツインの姉妹のもう一人はどうなったんですか!』

「イーニア・シエスチナ少尉は行方不明だそうだ。おそらくはソ連研究のサンプルとして連れ去られたのであろう」

『……クツ! なにが『虐げられし難民のための決起』だ。目的は機密ドロだろうが!』

気の重い報告はすんだ。……クリスカ・ビヤーチエノワ少尉、安らかであれ。そしてイーニア・シエスチナ少尉、どうか無事であらんとを。

「それと今度は朗報だ。テロ襲撃の初期に殉職されていたと思われるいたイブラヒム・ドール中尉だが、生きていた」

『おおっ! 本当ですか、タカムラ中尉!』
マナンドル少尉がはじけるような声で叫ぶ。

「本当だ。どうやら人質として生かされていたようだが、撤退時にも殺されることなく指令室に残されていた。現在は中央病院に搬送された」

『やったぜ！ テロどもはいろいろやらかしてくれたが、これだけは感謝してやる』

「たしかに、この事件のシメとしては朗報ですね。しかし……【レットシフト】の件はどうするのでしょうか？ 基地の地下に数千発もの水爆が置いてあるなんて状況はかなりマズイのでは？ その件を処理するために核兵器を使おうともしていませんし』

頭の痛いことを思い出させてくれる。この件、米国の政界がまるごと入れ替わりかねんほどの、あまりに巨大すぎるスキャンダルだ。これを私にどうしろと？

「さすがに私には処理しかねる。上に報告をあげて判断を待つよりほかあるまい。さ、状況説明は終わりだ。BETA完全処理の報が来るまで気を抜くな。全機警戒態勢堅持！」

『『了解！』』

♠♦♣♥♠♦♣♥♠♦♣♥♠♦♣♥

パプテマス・シロッコSide

リルフォート

歓楽街メインストリート

たわむれに、テロ組織がユーコンのどこに、あれだけの部隊を潜ませていたのかを考えてみた。いや、人員だけではない。銃器、火薬、その他備品。相当量の物資も集積しておかなければならないはずだ。それも官憲に知られず内密に。

それが可能なのはユーコン広しといえどもただ一つ。ここリルフォート歓楽街以外にあり得ない。

私がこの避難誘導を買って出たのも、半分はテロ首謀者マスター指導者の逃げ先を追うためだと言っている。

では、リルフォート歓楽街のどこか？ 民間業者を装い大量の物資を搬入出来る場所。それもユーコン基地近辺が望ましいはず。

さらに時間帯。物資の搬入搬出は見られないことが望ましいだろう。となれば深夜から早朝に大型トラックが停まっても怪しまれない場所。

それら条件を合わせてテロ組織が拠点にしそうな場所を地図上で

照合してみると、とある大きな酒場が浮かび上がった。

「なるほど、『ポーラ・スター』か。そういえばパイロットたちの夜の遊び場でもあったな。ここなら情報収集にも最適だ」

件のテロ首謀者【指導者】^{マスター}とやらはここに居るのだろうか。

そこに鎧衣親子を向かわせ、調査を頼んだ。ほどなくして鎧衣くんから連絡が入った。

『ポーラ・スターはすでにアメリカの情報部らしき者に押さえられておりました。ですがテロ首謀者【指導者】^{マスター}は現れなかったようです』
「フム、甘くはなかったな」

侵入口と脱出経路を別にする。用心深い者は必ずこうするが、やはり指導者^{マスター}とやらは相当デキる者のようだ。

情報部が嗅ぎつけたということはポーラ・スターは囹。となれば本命はどこだ？

アラスカ港？ いや、その倉庫も利用しただろうが、逃亡者が向かう先に港は定番。つまり早くに捜査の手は伸びる。ならば、ポーラ・スターと港の裏を見るべきだろう。

「ねえシロッコ」

ふいに私の前の座席でチェルミナートルの操縦をしているイーニアが話しかけてきた。

とある事情で、この世界の強化人間である彼女を連れてきてしまい、逃亡することになってしまった。ゆえにこの機体は私が操縦してよう他の人間には見せかけている。

「テロの首謀者を探してるの？ どうして？」

「さてな。自分でもわからん。君を連れて逃げねばならんので、その事に全力を傾けねばならんはずだが……どうしてだろうな。少し時間を置けばそれに答えられるかもしれない」

ふたたび周辺地図を見て、指導者^{マスター}の逃げ先を考える。

ポーラ・スターはハズレとはいえ、そこに至る外洋からのルートまでは大きく変更出来ないはずだ。海という魔物は、安全の確認がとれている航路から外れてしまえば何が起きるか分からない。いざ危機になっても救難信号を出せないテロ組織ならなおさらだ。

さらに深読みすれば、脱出ギリギリまでアラスカ港とポーラ・スターの状況を見極めたいのは組織の長としての本能。他のメンバーの脱出指示にも関わってくるからだ。となれば港とポーラ・スターの地点から三角測量で等角度あたりの海岸がクサイな。

「イーニア、移動するぞ。海岸のこの場所。時間から考えて手遅れかもしれないが、用心深いヤツのこと。用心を重ねて通常より遅れての到着かもしれない。行ってみる価値はある」

「了解、シロッコ」

もしアタリだった場合、人手も必要になるために鎧衣くんにも連絡をいれる。

「鎧衣くん、次の場所へ移動だ。ここらがクサイ。念のため、美琴くんもまだ訓練部隊には戻さず連れてきてくれ」

『ほほう、海岸ですか。あり得るとはいえ、ここに現れる確率は極小のようにも思えますが……まあ、つきあいましょう』

イーニアにチエルミナートルを発進させて飛行する。向かうはアラスカ港より外れた海岸線だ。

「シロッコ、そろそろ答えは出た？ どうしてテロ首謀者なんて追うの？ 手柄がほしい？」

「君を連れてきている身では手柄など邪魔だから違うな。あえて形にして言うならこうだ。天才に生まれた性さがなのだよ。頭脳自慢に挑んでしまうのはな」

これで答えになっただろうか。ともかくイーニアはそれ以上何も聞かずにいたので、どうやら納得してくれたようだ。

◇ ◇ ◇

飛行し向かった先はさびれた海岸。港からは大きく外れ、何も無いはずのこの場所に、なぜか剣呑マスタそうな人間がまばらに居た。おそらくそいつらは指導者の護衛。どうやらアタリだ。しかし……

「シロッコ。当たったみたいだけど……少し遅かったね」

その剣呑マスタそうなヤツらは、このチエルミナートルを見ると、あつさ

りバラバラと逃げてしまった。おそらくマスターは撤退済み。役目を終えた彼らはそれぞれに逃げていく最中ということか。

望遠カメラでぐるり海洋を見回してみるも、ここから発った船らしき影は見えない。

「フム、高速船らしきは見えないか。と、いうことは……潜航艇か」
たしかにユーコン基地の近いこの場所は哨戒機も多く飛んでいる。高速船ではなく潜航艇を使う方が理にかなっているだろう。

「残念だったね。帰る？」

「フツ、たしかに水中ソナーなど装備してるはずもない戦術機では、まったくお手上げの状況だな。“オールド”のみのこの世界ではな。だが……」

キユピイイイイン

水中ソナーはなくともニュータイプ脳波があるのだよ。

【指導者^{マスター}】よ。コソコソ逃げる君の潜航艇は、まる見えだ。

「イーニア、操縦権と火器管制をこちらに。突撃砲を使う」

「範囲集中砲撃？ 弾がぜんぜん足りないけど」

「フツ、ニュータイプは無駄弾など使わない。感じろ、私のニュータイプ脳波を。君にもこれくらい出来るようになってもらう」

チエルミナートルを操縦し、潜航艇の居場所を感じて真上に位置して照準を合わせる。

「無事の脱出に祝杯をあげているであろう君達に、水を差させてもらう。受け取れ、テロリストの王よ！」

バシユウウツ……ドツボオオオオン

放った弾丸は巨大な水しぶきを上げる。

「………当たった？ シロツコ。どうしてか、当たったのがわかるよー」

「私の脳波との同調に成功したか。やはり君は良いニュータイプの資質を持っている。さて私の挑戦欲も満たされたことだし。あとは鎧衣くんにもまかせて君の亡命計画でも練るとしようか」

鎧衣くんに『マスターはしとめた。海の中の残骸から彼を見つけたなら、手柄にしたまえ』と通信を送り、その場をあとにした。

111話 キリスト教恭順派落日

鎧衣左近Side

アラスカ港郊外海岸

シロツコ氏が、郊外の海岸近海にて脱出するキリスト教恭順派の潜水艇を撃墜したという連絡を聞き、美琴とともにその場所へ来てみた。

その話が本当だとしても、その潜水艇は海の藻屑。夕暮れの海岸は波のざわめき以外なにもない。寒々しいアラスカの海は、ただ静かに波の音だけが聞こえている。

「さあて。キリスト教恭順派指導者の死亡の可能性。多少手間で、その真偽は調べなければなりません。潜水服の一式でも陳情しておきますか」

「ああっ！ 父さん、あれ！」

美琴が叫んで指す海の一点を眺めると、そこには人が波間に漂っていた。意識はないようで、ぐったりしながら波間に揺られながら漂っている。

「おっと、これは僥倖か。手がかりらしきが、この広大な海から見つかるとは」

すぐさますべての服を脱ぎ捨て海に飛び込んだ。

後れて後ろから「ドボン」と音がする。見ると、美琴も同じように服を脱ぎ捨て海に飛び込んでいた。

「美琴、おまえは岸で待つてなさい」

「海難救助はひとりじゃ無理だよ。父さんなら出来るかもだけど、ボクもいるのに海で無理はさせられないよ」

泣かせることを。しかし娘の服の一切を身につけてない姿に「モヤツ」とする感情もまた有る。しかたない、ともかく救助を早くに終わらせよう。

どうにか美琴と協力してその海難事故者を岸にあげた。蘇生措置をしながら彼の姿をよく観察してみると、「まさか？」という思いが心によぎった。

やがて蘇生の甲斐あって、その救難者は目をさました。だが、助かったことに喜ぶ様子はまるでなかった。

「……助けられたのか、私は。まったく最後まで上手くいかないものだ。このアラスカが私の運が尽きる地ということか」

「その赤髪とその他特徴。キリスト恭順派の指導者マスターですな」

「……そうだ。認めよう。私こそが人に主の福音とご意思を説く伝道師。指導者マスターは同胞らが勝手にそう呼んでいるだけだがね」

「あなたの調査は長年してきましたが、まさかご尊顔を拝する日が来るとは思いませんでした。これでキリスト教恭順派を終わらせられます」

「最後に信徒たちを裏切ってしまったな。私はあのまま海の底に沈み、生死不明となるのが役目であつたらう。あの人と同じ終焉の空を見たいと願ってしまい、あがいてしまった」

「あなたには色々聞きたいことがあります。その身柄、丁重に運ばせてもらいますよ」

「残念だが、それはかなわん。私はすでに毒を飲んでいる。遅効性で効果に今しばらく時間がかかるがね。このまま空でも見て終わるとしよう」

「それはまた…残念ですな。どうかしようにも、とれる手はありません」

やはりこの男は最後まで周到だな。本来ならまた行方を掴めぬまま消えていたであろうこの指導者マスターを、しとめたシロツコ氏はやはり非凡ということか。

「……マスターさん。どうして……あなたが救ってあげた人達にテロなんてやらせたんです?」

ふいに美琴が彼に話しかけた。どこかしら彼に思う事があるのだろうか。

「恭順派と戦ったみんなから聞きました。難民の子供たちはあなたに救ってくれたことを本当に感謝してたって。その恩返しに、あなたと共に戦う決意をしたんだって」

「……………」

「どうして、そのまま正しく優しく生きる道を示してあげなかったんです？ えらい人達を殺して脅して何かを得ても……そんなの間違っています。何にもならない」

彼は美琴の瞳を眩しいもののように見つめた。

やがて何かを思い出すかのように話しはじめた。

「私はね、壊れているのだよ。かつて私は妹を殺した。妹は社会主義国家の権力者に洗脳され、スパイに仕立て上げられ、私のかつての仲間を窮地に陥らせた。その後捕まえた妹を、私は身の証を立てるために自ら殺した。そしてその日から、私は世界と権力者に拭い去れない憎悪を抱くようになってしまった」

彼は社会主義国出身か。彼の世界への憎悪はあそこの権力闘争の余波によつてはぐくまれたものだったのか。

「だが一方、世界に希望も持っていた。私のかつての隊長が、いかな逆境にあらうとも決して世界に希望を見出していた人だったんだ。彼女の燈した希望の灯は、いまも私の心にある」

「憎悪と希望……それがあなたのテロと難民救済の理由なんですね」

「ああ。だが……結局は私も汚い権力者になっただけかもしれないな。計画のために基地の機密をエサに裏の世界から戦力を募った。救った難民もテロの兵にした」

「そう……ですよね。あなたが救った人達も、もつと別の生き方を示してあげたら……きつと……」

美琴はポロポロ涙を流しはじめた。

私の娘とは思えない感受性だな。私にはこの話に流せる涙など一滴もないというのに。

「どうして泣く？ 君には関係のない話だろう」

「わかりません。でも……悲しいんです。あなたも……あなたが救った人達も……」

「そう……か。最後に君のような純粋な娘に出会えたのも僥倖かもしれないな。君は私のような汚い大人にはなるな。私の友人達のように悲しい人間にもなるな。あの人の信じた希望は必ずある」

やがて彼にも落日が訪れる。この海岸より少しだけ早い落日だ。

「アイリスディーナ……これがあなたの見た最後の空か。綺麗なものだな。……リイズ、殺してゴメン。今度こそ……ずっと守るから……」

世界を相手におそるべきテロを幾度も成功させてきたキリスト教恭順派の指導者^{マスター}。その実態は意外なほどに普通の男であった。

遠い昔に失ったであろう女性に思いをさせ、悲しみを憎悪に、ただ世界にぶつけていただけの男だった。

ともかく、彼の物語は終わった。

その死を知らしめ負の連鎖を終わらせるのが私の役目であろう。

アラスカの海岸に日が沈むころ、一台の軍用車がとまった。そして中から出てきた女性将下士官。彼女こそ私が呼び出した人物だ。

「お呼びたてして申し訳ありません神宮寺軍曹。本来なら私はあなたとは会うことはないはずなのですが」

「鎧衣さんですね。鎧衣美琴訓練兵のお父様の。それで私にいったい何のご用でしょうか」

私は足元の毛布をはがして中の遺体を彼女に見せた。

「まずはこの遺体をご覧ください。私と美琴が海に飛び込んで助けたのですがね。毒をおおって自死いたしました」

「自死？ ということはテロ組織の関係者でしょうか」

「さすが話が早くて助かります。キリスト恭順派の中心人物、【指導者《マスター》】と呼ばれる首領です」

「なっ!?! ……たしかなのですか?」

「私は本物と見えています。潜航艇で逃げようとした所、何らかの事故によって海に投げ出されたどり着いたと思われます。ここの海底を調べれば、よりはつきりするでしょう」

「であるならば大きな話となります。この遺体、ユーコン基地に預け徹底的に調査するべきですね」

「さて、そこで問題なのですが。私は少々表に出るのは、はばかれる身でしてね。そこで神宮寺軍曹、あなたにお願いしたい」

「つまり私にこのことを報告してほしいと？ かまいませんが、彼をどのような経緯で発見したのでしょうか？」

「まあ経緯は、彼が海を漂っていたところを私と美琴が飛びこみ拾い上げた、といったところなのですが。どうにか私が関わった部分を消して報告していただきたい」

「……なるほど。鎧衣訓練兵のお父君は貿易商と聞かされていますが、実は情報関係あたりということですか。しかし、そのような大きな虚言をアメリカ軍部に弄すというのは」

「なに、これをあなたと美琴の手柄にしておけば、香月博士が上手く活用していただけです。またキリスト恭順派首領の死を大きく公表することで、テロの鎮静化もはかれます。どうか博士のため社会のため、この役目、引き受けてください」

「……わかりました。波間に彼が漂っていた所を、私と鎧衣訓練兵が引き上げたことにいたしましたでしょう。生徒に嘘をつかせるのは気が引けますが、大義のためしかたありません」

「ありがとうございます。では、私はこれで」

世界を震撼させたおそるべきテロ組織『キリスト教恭順派』の首領マスター指導者。

彼は死をもって世界の舞台から降りた。

だが、代わって新たな天才が世界に立った。

【パプテマス・シロッコ】

並みいる世界の衛士を凌駕する腕を持ち、最悪のテロリスト指導者マスターすら仕留めたおそるべき男。

山城上総と旧知な所から、謎のアナハイム・エレクトロニクス社の関係者と思われるが、さて。

彼はこのBETA大戦の時代に、いかな波紋を投げかけ何をもたらすのか。

「未来の英雄を調べるとしますか。どうやら私に大きなツキがめぐってきたようです」